



都典宗  
卷六十第

BL                    Tripitaka. Japanese. 1929  
1411                 Showa shinshu kokuyaku  
T8J3                 Daizokyo  
1929  
v.40

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE  
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

---

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

---







昭和  
新纂

國  
譯大藏經





BL  
1411  
T8J3  
1929  
V. 40

昭和  
新纂  
國譯大藏經  
宗興部  
第十六卷

華嚴經探玄記第三 目次

卷第	第十四	.....	一
卷第	第十五	.....	六
卷第	第十六	.....	一七三
卷第	第十七	.....	二七
卷第	第十八	.....	三六
卷第	第十九	.....	四三
卷第	第二十	.....	四九





華嚴經探玄記 第三

宗典部
第十六卷



華嚴經探玄記

卷第十四

下は第十地を盡す

魏國西寺沙門法藏述す

【一】第八微慧地初に釋名なり

【二】に…來れり【二】に當品の來意を明す

(一) 第八地。七門は前に同じ。初に釋名とは、不動の名に亦三義有り。一には一義に約す。『攝論』に云はく、「一切の相と有功用行とは、動ずること能はざるに由るが故に不動地と名く」と。無性、世親は並に此釋に同じ。無性の釋の意、第七地の中には行は動じ、相は動ぜず。此中には行と相と俱に動ぜず。二には二義に約す。『金光明』に云はく、「無相に正思惟し修得自在にして、諸の煩惱動せしむること能はざるが故に不動と名く」と。三は三義に約す。『成唯識』に云はく、「無分別智任運に相續して、相用の煩惱動ずること能はざるが故に」と。『梁論』の三義も亦此說に同じ。『解深密經』には、「無相に於て無功用を得るに由りて、諸行の中に於て、現前の煩惱の爲に動ぜられざるが故に不動と名く」と。『十住論』に云はく、「天、魔、梵、沙門、婆羅門も、能く其願を動ずること無きが故に不動地と名く」と。『仁王經』には等觀地と名く。二に來意とは亦三義有り。一には前の三地は世間に寄同し、後の四地は三乘の法に寄せ、第八以去は一乘に寄顯す。『莊嚴論』に第七地を釋して、近一乘と云ふが故に。『梁論』にも亦八地已上を以て、一乘と爲すと説く。解して云はく、前の三乘差別の位従り進んで一乘に入る、是故に來れり。二には前位に純無相觀を得



【三】…知るべし  
【四】…地論  
【五】…唯識  
【六】…卷九の三  
【七】…十五

【八】…してははくはく  
【九】…法宗に依るに  
【一〇】…法宗に依るに

【一一】…光明云云  
【一二】…以  
【一三】…性宗の實意を彰

と雖も、要す加行の作意を待ちて方に證す。今此は純熟して加行を待たずして任運に現前す、故に次に明せり。三には前は分段に通じ、此は唯變易なり、是故に未れり。三に所顯障とは「地論」に依るに、無相有行の障を顯ると。「唯識」に云はく、「無相の中に加行を修すの障なり。謂はく、所知障の中の俱生の一分は、無相觀をして任運に起らざらむ。前の五地は、有相觀は多く無相觀は少し、第六地に於て有相觀は少く、無相觀は多し、第七地の中は純無相觀なり。恒に相續すと雖も而も加行有り。無相の中に加行有るに由るが故に、未だ任運に相及び上を現すること能はず。是の如きの加行は、八地の中の無功用的道を得ふるが故に。若し第八地に入ることを得る時は、便ち能く永に斷ず。彼永に斷ずるが故に二の自在を得。斯に由りて八地に、二愚及び彼重を斷ずと説く。一には無相に於て功用を修すの愚、二には相に於て自在なるの愚なり。今相の中に於て、自在ならざるが故に。此も亦上を攝するの相の一分なるが故に。八地以上には純無漏の道任運に起るが故に、三界の煩惱は永に現前せず。第七識の中に、細の所知障は猶現起すべし、生空智果は彼に違せざるが故に」と。解して云はく、法宗に依るに、無相の中に於て加行智有り、體は是れ障に非ず、善の性を以ての故に。所顯の障は加行を作さしむるに由るか故に、説いて加行障と名く、此に由りて第七に加行有るが故に、金等の諸相及び土を現すと雖も、任運に現するに非ざるが故に、以て障と爲す。生空智果とは、謂はく、生空智所引の後得智、及び滅定なり。「金光明」に云はく、「一には無相法に多く功力有る無明、二には相を

【四に…具す】四に所證を明す。

【五に…尋ねよ】五に所成の行を明す。初に十度、次に三學門、後に徳門を約せり。六に…知んぬべし】六に所得の果を明す。

執ること自在にして度し得べきこと難き無明なり」と。解して云はく、此は所迷の現相も亦土を攝す、寛を以て狹を收むるが故に。『梁論』等並に准じて知るべし。四に所證の法界とは、謂はく、證法界不増減の義なり。世親釋して云はく、「謂はく、此中に於て雜染減ずる時而も減有ること無く、清淨増する時而も増有ること無し」と。無性釋して云はく、「法の外に用無し、所以に増せず、諸法は壞せず所以に減せず」と。無性の後の釋は世親に同じ。『中邊』に云はく、「此に通達するに由りて、無生法忍を圓滿し證得し、諸の清淨雜染法の中に於て、一法として増有り減有るを見ず」と。解して云はく、此は『地論』に同じ。『唯識』に云はく、「謂はく、此眞如は増減の執を離る、染淨に隨つて増減有らざるが故に、即ち此も亦相土自在所依の眞如と名く。謂はく、若し此眞如を證得し已らば、相を現じ土を現すること俱に自在なるを得」と。世親釋して云はく、「諸相の中に於て自在を得るを、相自在と名く、所欲の相に隨ひて即ち現前するが故に。所現の土に於て自在を得るを、土自在と名く。土をして金等の寶と成らしめんと欲するに、意に隨ひて成するが如きが故に」と。解して云はく、相は現身等の相に約し、土は唯器世界等なり。此地の下の文は、三世間十自在等を具す。五に所成の行とは亦三種あり。十の中の大願行と、當地に無生法忍を成就する行と、相土自在の行となり。『莊嚴論』第十八住に「佛土を淨むと雖も而も起作すること無し、無功用の故に」と。下文を尋ねよ。六に所得の果とは『梁論』に「無増減法界定自在等に通達して法身の果を得」と。『金光明』に「八地に心を發して現

【二】以下第七に正しく本文を釋す初に證請分。

【三】次に第二に本國の正證分の釋【十】十地證證を十の初。

【初分の中六】一に地じて方便作集地分の文を釋す

證三昧を得」と、當地の行果、位果は知んぬべし。

第七に文を釋する中に亦三あり。初に證請分の中に十五頌あり三に分つ。初の二頌は天王と大業、法を慶し供を興す。二に十二有り、天女讚樂し、徳を讚じ、供養することを頌す。中に於て初の三は樂を作し、總じて佛徳を歡じ、次の三は別して三種世間自在の徳を歡じ、次の三は別して三輪の攝化を歡じ、次の二は佛の神力の攝持を歡じ、後の一は歡じ已りて默をもて結す。三に末後の一頌は上首に説かんことを請す。

第二に、正證分の中、「【二】に分ちて七と爲す、初の二は是れ懸地の方便なり。一には總じて方便作集地分を明す」とは、是れ遠方便なり、總じて前の七地に此地の集成方便を作起す。二に淨忍分とは是れ近方便なり。謂はく、前地の所得の無生忍の光、此に至りて修熟し深淨ならしむ。三に得勝行分とは是れ初住地の行なり。謂はく、前の淨忍に依りて修修を發起す。四に淨國土分とは、是れ正住の始なり、前の勝行に依りて、更に淨住國土の行を起す。五に得自在分とは正住地滿なり、淨土の行に由りて、徳を成ずること無礙なり。六に大勝分とは是れ地滿の行なり、此地は前に望むれば、通じて皆是れ勝る、今復地滿は是れ勝中の勝の故に大勝と云ふ。七に勝名分とは不動の名、徳を辨じ號を彰す、此は始終に通ず、釋は地滿に在り。初分の中に説いて、總じて前の七を攝して、以て二相と爲す。諸地の通行を名けて同相と爲し、諸地の異修を名けて別相と爲す。同の中に三句あり。修行慧とは是は其證道なり、謂はく、「二無我上上證の故に」とは、初地從り來



【下は別相云云】  
論意を以て經を釋す。

【三地：等】  
經の「自の善根にて力を得」の文を釋する論文なり。

【前には】  
第四地の正説を指す。【此を】  
當段を指す。

【何が故に云云】  
以下妨難を通す。

りて二無我を證し、轉勝して此に至るが故に上上と云ふ。二に方便道淨とは不住の道清淨なり。謂はく、悲智俱遊し偏に住著すること無し。三に善集助道法とは、彼方便智と行との所攝なる助菩提分法を満足す。謂はく、行は是れ前の證方便、智は是れ前の不任なり、彼二は所攝助道の法なり。下は別相を明すに七有り。一に初地には十大願は能く心をして住せしむ。三地の中には十善等の行を行す、是れ佛爲に護す。三地の中には能く不退禪定等」とは、神通の無量等を等取して、自善根力と名く、通達することを得るが故に得力と名くるなり。四地の中には所説の十種の法智をもて、衆生を教化す、前をば「論」の中に「智障淨勝と名く。佛法に通達することを念す」とは、此を釋して彼に同す。謂はく、彼十法智を此には佛法と名く。五地の中には十種の深淨心平等なるを、直深心と名け、六地の中には、前の大悲を首と爲し、及び大悲増上あるなり。「因縁集を觀す」とは是れ大悲満足なり、亦是を擧げて觀法を成ず。成就福智とは此を釋して彼に同す。七地の中に二句あり。初は是れ前の空の方便智と、有の中の殊勝行なり。不捨衆生と言ふは、彼を釋して此に同す、謂はく、大悲等なり。二に「無量の衆生界を以ての故に無量の智道に入る」とは、是れ前の十種の無量なり。何が故に前の六は各各唯一句、此第七地には二句有るや。釋すらく、「是れ近方便なるを以ての故に。」又問ふ、「何が故に此第八地の初に於て、總じて前地を集むるや。」答ふ、「諸の聖教の中に此例四有り。一には十住の初に總じて十信を集む。『木業經』に説くが如し、此は退と不退とに約して、以て其際を分つが故に是結

【四】次に淨忍分の釋。經の諸法の本來；第八地に入るの文の下。

【佛性論】第二の五右に佛の説法に了義不了義を分つ文あり、今は了義の説を引く。

【初の本無生云云】十地論には四種無生を説く、曰く無事、自性、數差別、作業差別無生なり今は初なり。

會を作す。二には初地の加行に總じて地前を攝す、前の廻向品に説くが如し、此は比證の分際（分際）に約す。三には第八地の初に、總じて前の七を集む、此文に説くが如し、此は功用無功用（功用）に就いて際を分つが故なり。四には第十地の初に、總じて前の九を集む、下の文に説くが如し。此は因位の成滿に約して、總じて前の因を攝す。又釋すらく、此四處の初は十千劫の滿に約し、二は初僧祇の滿に約し、三は二僧祇の滿に約し、四は三祇の滿に約す、故に是説を作す。

【佛性論】第二の五右に佛の説法に了義不了義を分つ文あり、今は了義の説を引く。初の十句は正に無生忍を明し、次の四句は無生忍淨を明し、後の一句は忍を結し位に入る。『論』の中には但前の二を釋し、攝して四種と爲す。一は相を破し、二は性を破し、三は因泯じ、四は果離す。又前の二は、相を破して如に入り、後の二は實を證して相を捨す。又寄位に約すれば、初の一は加行に在り、次の一は正體に在り、後の一は後得に在り、其數差別の一種は始終に通ず。『佛性論』に依るに、三性品に云はく、經の中に説くが如し、若し人已に無生法忍を得ば則ち退墮せず」と。此れ云何が成立する。三性に由るが故に、則ち成立することを得。如來は分別性に約するが爲の故に、本來無生忍を説き、依他性に約するが故に、自性無生忍を説き、眞實性に約するが故に、垢苦の本性無生忍を説く」と。

初の事無生の中に就いて、『論』に攝して七と爲す。初の四は不増を明し、後の三は不減を明す、即ち是れ無増減法界なり。『論』の中に、先に七實を立て、此實を對治して以て無

【又此四云云】 三  
佛性に約す。

【六には云云】 大  
正藏本には六と七  
と前後す。

【第二に自性無生】  
此は本經には缺略  
せり。論意二段あり、  
初に理の不無  
を明す。

【下は理不二】 論  
文の「所有の觀法  
無我にして二相無  
きが故に」を指す

生を顯す。「二には淨分の法の中に本より實有り」とは、自性住性を計して事物有りとなす、此を對治するが故に入諸法本來無生と云ふ。「二には新新生實」とは、習所成の性を計して實となす、此を對治するが故に無起と云ふ。「三には相實」とは、前の二性の所生の行相を計す、此を對治するが故に無相と云ふ。「四には後際實」とは、佛果の後際に出纏を計す、此を對治するが故に無成と云ふ。又此四の中に、初の二は自性住佛性、次の二は引出佛性、後の一は至得果佛性なり。又初の二は道前の凡位、次の一は三賢の位に在り、次の一は地上に在り、後の一は道後に在り、通は即ち知んぬべし。又此四展轉して疑を釋すること、知んぬべし。五には先際實とは、佛果の後際に對して説く、凡樂を先と爲し、此を對治するが故に無壞と云ふ、煩惱即空にして壞すべきこと無きを向す。良に以みれば、衆生の心中に其二分有り。一は知來藏を名けて淨分と爲すが故に、前に淨分の無生を説くが如し。二は煩惱藏を名けて染分と爲す、此所説の染分の無生の如し。六には雜染實淨分の中とは、謂はく、修行の位の中において染に背き淨に向ひて來る。此を對治するが故に無來と云ふ。「七に盡實諸衆生」とは、衆生の涅槃に向ひて來る、此を對治するが故に無去と云ふ、論經には無盡と名く。第二に自性無生とは、此經には略して無し。論に云はく、「自性無生とは、是法無我、彼法無我の自體無性の故に。經の非有有性の如し、故に彼觀は事の故に一等とは理の不無を明す、謂はく、彼前の諸地の所觀の事の故に。亦是れ此地の所忍の法の故に、無と言ふことを得ず。下は理の不二を明す、謂はく、理は事の外に非ざるが故



【三に云云】三に  
 數差別無生を明す  
 に今は但染淨の配  
 して、不増減の義  
 を示す。大藏に先  
 際染増淨減に非ず  
 後際淨増染減に非  
 ず、中亦淨増淨減  
 に非ず、三際皆空  
 にして自性無き故  
 に」と。

【中際を染】恐く  
 は染の下、淨の字  
 脱するか。

【四に入如云云】  
 四に作業差別無生  
 の文。經の一如來  
 智に入りて」等の  
 下。

【一切心意識等】  
 經文を出して釋す

【二に遍一切法相  
 論の文以下、第三  
 以下、第三  
 五】に得勝行分を明す  
 中二あり、初に深  
 行勝を明す。經の  
 「不動地に入る」等  
 の下。

に不二と名く、上の文に不二不盡有るに同じ。三に無初無中の下は數の差別無生を明すと  
 は、三時の中に於て染淨の法は増減せざるが故に。謂はく、先際を染と爲し、後際を淨と  
 爲し、中際を染とするに、三際無生の故に増減無し。四に入如來の下は作業無生を明すと  
 は、眞如の中に於て、無分別の佛智を淨むるが故に。如是の下は釋し已りて總じて結する  
 なり。次に示現の下は無生忍淨を釋す。一切心意識等と言ふは、一切に二有り。初の一は  
 報心の憶想分別を離るるが故に、行遠離等と云ふ。二に方便心の憶想分別を離るるが故に、  
 攝受分別性想故と云ふなり。想とは障法の想を遠離す、「治法の想無きに非ず」とは言の濫  
 を簡ぶなり。彼治の想は下地の中に於て三種の勝事有り。一は無功用にして自然行の故  
 に、無所貪著と云ふ。謂はく、上伽果に於ては、貪求を起すを待たずして、任運に行を起  
 す。二に遍一切法相とは能治の廣きことを顯す、故に一切法如空と云ふ。三に入眞如不動  
 自然行故とは治深を顯すなり。如空の言は二句に通じて用ふ、知んぬべし。  
 第三に入不動の下は得勝行分を明す。中に於て二有り。初は深行の勝を明す。謂はく、  
 前に對して出を彰し、二に發起勝は後に對して入を顯す。前の中に二あり、先に總じて深  
 行を明す。謂はく、此位に入らば行玄奥の故に。下は別して七有り、相從して三と爲す。  
 初の三の一分は、此地の中の境分の殊絶を明し、次の二の一分は此地の中の正行の廣大  
 なるを明し、後の二の一分は此地の中の離障寂滅を明す。喻の中に三有り、後従り前に向  
 ふの喻なり。此三分七の中に、一は難入深の故に深行菩薩と名け、二は同行深は諸の淨

【護一切：想】  
地論の文。

十

地の菩薩同の故に。謂はく、純無漏の位を名けて淨地と爲す、此位の人と同じきが故に、世不能測と云ふ。不能測とは麥の麥聚に在りて、其差別を測らざるが如きが故に、論經に無能分別と名く。三に境界深、能取所取現前せざるが故に、離一切相等と云ふ。護一切障想と言ふは、謂はく、一切障法の想を防護す、治法の想を簡ばんが爲の故に離貪著と名く。四に修行深、自利利他の行廣大なるが故に。此經には略して無し。五に不退深、謂はく、彼二乗は形奪して、其勝を壞すること能はざるが故に、一切聲聞等と云ふ。六は離障深、謂はく、功用障を離るるが故に深大遠離と云ふ。七は對治現前深、謂はく、能治の行常に現在の故に而現前と云ふ。論經に名けて寂靜現前と爲すは、即ち眞如の寂靜は事靜に非ざるなり。下は三喻を釋して前の所說に喩ふ。滅盡定の喩は彼行寂滅なるを示すが故に」とは喩の意を釋し顯す。喩を釋する中に「彼依止無きが故に」と言ふは、滅盡定の中には心王行ぜず、想等の心數所依無きが故に、亦行ぜざることを明すなり。以得無功用自然行とは勸方便を釋す、三業の行息滅するなり。論經に報行成に二釋有り。一は教道に約するが故に得彼相違法と云ひ、二は證道に約するが故に、善く阿梨耶識眞如法の中に住すと云ふは、但本識に二分有り。凡の時唯妄染分に住し、此をして眞淨分に住せしむ。若し佛地に至りては單に眞如に住するをもて、梨耶の眞如と云はず、今此は變易の報苦有りと爲す、是故に雙へ擧ぐるなり。經に住大遠離と言ふは、是れ「論」の中の報行成に住するなり。第二の夢寤の喩を釋する中に「此行の中に彼過想を護り、正智想有

【第二の云云】二  
に夢寤の喩。經の  
「人夢中」等の下。



【第三の云云】以下第三喻、生梵天等を釋す。經の一書へば梵天等の下。

ることを示す」とは、夢の寤に從ふに夢想無しと雖も、寤想有るが如し、所況是の如し、前地修過の想を捨すと雖も、此地の正智の想無きには非ず。此行寂滅と言ふは、此正智は用に即して常に寂なるが故に、前の願に同じからざることを顯す、此れ深行の故なり。是中の下は重ねて分別す、「清淨に依りて、世間涅槃の二心行ぜず」とは、此經の中の不寤し已んなば、此彼俱に亡するを依清淨と名くるが故に、不行二心と云ふなり。一境界受用の念想行ぜざるに依る」と言ふは、諸の憶想する所、復現前せざることを釋す。謂はく、夢中に於て受用する船楫等の境の想復現せざるなり。第三の生梵天の喻を釋する中に、如生色界の下は不行を結し、此地知是の下は地心一向に行ぜず、下に望めて出を彰す。得報地とは此に對して得を彰す。此は離勝を説いて喻を明す意を結す。下は重分の中、順行は是れ世間の心、不順行は是れ出世間の心の故に二分と名く。心等とは心を擧げて、意と識と及び憶想等を等取す、即ち是れ順行なり。佛等とは佛を擧げて菩提涅槃等を等取す、即ち是れ不順行なり。下は不順行分の中に就いて、更に三門を聞く、經の中には但し大乘に就き、論主は大小を對辨す。一に差別と言ふは、是れ大小不同を名けて差別と爲すに非ず、但是れ大小乗の中の生法の兩の異を差別と名く。二に「大小乗の中の衆生法の差別」と言ふは、生法の異を名けて差別と爲すに非ず、此は大小乗の中に生自ら異なり、法法自ら別なることを明す。三に無學學差別と言ふは、小乗の中に就いて人の差別を辨す。

【小乘羅漢差別云】六種とは退法羅漢、思法羅漢、護法羅漢、安住法羅漢、堪達法羅漢、不動羅漢（俱舍論第二十五）。

【成實に九】退相守相、死相、住相、可進相、不壞相、不退相、轉解脫、俱解脫。

【二に佛子云云】上に深行勝を明せしを以て、以下次に發起勝行を明す。初に願住佛勸を明す。

是れ學と無學と同じからざるを名けて差別を爲すに非ず、但し學學の同あらざるが如く、無學も亦爾ることを明す。上は開門竟んぬ。佛等涅槃差別説とは經を擧げて對顯す。謂はく、佛は是れ第一の句の佛心にして、中間の二句を等取す、涅槃は是れ第四句なり、應に知るべし。何が故に世間行の中にも異を開かず、出世行の中に此差別を開くや。一、出世は是れ大人の所求なるを以て、衆取有ることを恐るるが故に、委釋して離せしむ。下は釋し顯すが中に、先に順行を釋すること知んぬべし。後に不順行を釋する中に、大小差別と言ふは、是れ總じて擧ぐるなり。下は別の中に大乘の内、佛菩薩は是れ人、涅槃は是れ法なり、小乗の中の涅槃は是れ法、羅漢等は是れ人なり。二に人法各各差別することを釋す、論釋は知んぬべし。小乘羅漢差別とは毘曇の中の六種不同の如し。謂はく、退と思と護と住と勝進と不動となり。成實に九有り、並に廣くは彼に説くが如し、餘の文は知んぬべし。

二に佛子の下は發起勝行を明す、中に於て二あり。初は本願力住の諸佛勸發を明し、二は若不與の下は勸の利益を明す。前の中に亦二あり、初に本願住、二に又諸佛の下は勸發を明す。前の中に隨順是地とは是れ論經の中の住の義なり。以本願とは住の所由を釋す。謂はく、前地從り來同じく此地の無生忍門を求むるを、名けて本願と爲し、得已りて以て息むが故に名けて住と爲す。然も住の義、釋するに二門有り、一は義を顯し二は意を説く。初の中に諸の菩薩の住と不住とを明す。汎く釋するに四有り、一は觀入分別なり。

【二に住の意云云】  
初二は今家の加ふる所、即ち一は廻心不定性の人に廻し、次は定性の二乗廻心に約す。

【下は勸發云云】  
二に勸發文を明す

謂はく、始の時（はじめのとき）は住せざれども、終（はつりたまは）は則ち住（すま）を樂（たの）み、前地（ぜんち）従（したが）り來（こ）無生（むじやう）を求（もと）め越（こ）す、未（いま）た得（え）ざるを以（もつ）ての故（ゆゑ）に。是（こゝ）を以（もつ）て住（すま）せずして、今（いま）此（こゝ）に之（これ）を得（え）て、故（こゝ）に住（すま）することを樂（たの）む。二は起（き）用（ゆう）分別（ぶんべつ）なり、始の時（はじめのとき）は樂（たの）ひて住（すま）すれども、終（つひ）には則ち住（すま）せず。今（いま）此地（このち）の中に、始（はじめ）は無（む）生（じやう）を得（え）て寂（じやく）を樂（たの）むが故（ゆゑ）に住（すま）し、後（のち）には佛（ぶつ）の勸（くわん）發（はつ）を以（もつ）て勝（しょう）行（ぎやう）を起（おこ）す、所以（ゆゑ）に住（すま）せず。三は寂（じやく）に就（つ）いて分別（ぶんべつ）するに、始（はじめ）終（つひ）常（じやう）住（ぢゆう）は、謂（い）はく、佛（ぶつ）菩薩（ぼさつ）の證（しやう）入（にふ）する所に隨（したが）ひて、暫（せんじ）時（じ）も捨（す）つること無（な）し。四は用（ゆう）に就（つ）いて分別（ぶんべつ）す。謂（い）はく、佛（ぶつ）菩薩（ぼさつ）は一切（いっせ）に住（すま）せずして、常（つね）に世（せ）間に隨（したが）ひて衆（しゆ）生（じやう）を利（り）益（いやく）す。今（いま）此文（このもん）の中には前（ま）の二（に）に約（やく）して説（と）く。二（に）に住（すま）の意（い）を説（と）くに亦（また）四（し）義（ぎ）有（あ）り。一は漸（ぜん）悟（ぶ）の菩薩（ぼさつ）は寂（じやく）を樂（たの）むの習（しゆ）有（あ）るが爲（ため）の故（ゆゑ）に、本（ほん）願（がん）力（りき）住（ぢゆう）と云（い）ふ。二は定（ぢやう）性（じやう）の二（に）乘（じやう）を引（ひ）かんが爲（ため）に、菩薩（ぼさつ）、此地（このち）の大（だい）寂（じやく）滅（めつ）の處（ち）に、猶（なほ）勸（くわん）むること有（あ）りて起（おこ）つことを明（あ）す、況（いは）んや彼（か）所得（しやくとく）豈（た）究（きゆう）竟（けい）と爲（せ）んや。三は此地（このち）の甚（じん）深（しん）玄（げん）奥（おう）にして捨（す）し難（がた）きが故（ゆゑ）に、住（すま）することをば顯（けん）さんとす。四は但（ただ）此（こゝ）深（しん）奥（おう）法（ぽう）流（りゆう）の處（ち）に有（あ）らば、必（かなら）ず諸（しよ）佛（ぶつ）の七（しち）勸（くわん）の橋（きやう）を作（つく）ること有（あ）り。是（こゝ）故（ゆゑ）に一人の墜（つ）墮（だ）すること有（あ）ること無（な）し。下（しも）は勸（くわん）發（はつ）を明（あ）す中に三（さん）あり、先（ま）に總（そう）勸（くわん）、二（に）に諸（しよ）佛（ぶつ）の下（しも）は別（べつ）勸（くわん）、三（さん）に是（こゝ）菩薩（ぼさつ）の下（しも）は勸（くわん）を結（むす）す。初（はじめ）の中に流水（るすい）とは、無（む）生（じやう）忍（にん）に在（あ）りて功（く）用（ゆう）を起（おこ）さずして任（じん）運（いん）に行（ぎやう）を起（おこ）し、佛（ぶつ）果（くわ）に趣（おもむ）くこと、大（だい）河（が）の水（みづ）の人力（にんりき）を待（まち）たずして、大（だい）海（かい）に流（なが）趣（おもむ）するが如（ごと）し、『何（なに）んが前（ぜん）地に智（ち）を與（あた）へざる。』法（ぽう）を得（え）て未（いま）だ深（ふか）からざるを以（もつ）ての故（ゆゑ）に。『何（なに）んが後（ご）地に與（あた）へざる。』此（こゝ）勸（くわん）發（はつ）に依（よ）りて不（ふ）住（ぢゆう）を修（しゆ）するを以（もつ）ての故（ゆゑ）に。『何（なに）んが故（ゆゑ）に智（ち）を與（あた）ふるや。』理（り）實（じつ）には餘（あま）行（ぎやう）に通（と）ず、智（ち）は是（こゝ）れ行（ぎやう）の主（しゆ）なるを以（もつ）ての故（ゆゑ）に。『何（なに）んが故（ゆゑ）に此（こゝ）位（ゐ）に在（あ）りて與（あた）ふる。』



【三に亦莫捨等】  
經の「亦此忍門を捨つること莫れ」の句。  
【依彼・作】 論の文。

「此忍門は攝徳の本なるを以ての故に。下の文に云はく、「亦此忍門を捨つること莫れ、此力に依りて能く大行を成ずるが故に」と。何が故に如来智を興ふる。二果に就いて説くを以ての故に。」作因縁とは、「論」に云はく、「此は如来智慧力を興へて、彼深行樂足の心を轉ずるが故に」と。下は別勸の中に、先に其所得を數するに、第一は是れ上法なり。後に我有の下は其未得を彰し、之を勸めて作留せしむ。中に於て七勸あり、攝して以て一に爲す。前の六は多の未作を擧げて、其住心を轉せしめ、後の一は其少作も能く成ずるを明して其去心を増す、凡そ勸の法是の如し。前の六の中、攝して三對と爲すに、自利利他の初對の中に、一は自徳の未成を明し、後の一は所化未だ出でず。第二對の中に一は化闍未だ滿ぜず、後の一は自徳未だ勝れず。第三對の中に、一は化業未だ廣からざることを明し、後の一は自得の法未だ寧らざることを明す。初の中、句別くるに三行り、初は力を擧げて其未得を彰し、二には爲得の下は正しく修習を勸む。二に云はく、「得ざれば修を教授するが故に」と。解して云はく、不得は上の句を釋し、修教は此句を釋す。三に亦莫捨等は起行の所依を明す。二に云はく、「若し此等を捨てざれば」とは反釋することを明すこと知んぬべし。依彼有力能作とは顯釋するなり、第二の勸の中に、汝所得其等とは自所得を明し、一曰凡夫の下は他の未出を明す。中に於て亦三あり、初は凡夫に就いて總じて勸むるを、依彼衆生無利益事と名く、二は其過失を顯すに、更起煩惱とは不善なり。後是とは寂滅を離るることを釋す、在家は煩惱なり、出家は覺觀なり。三に汝當の下は其惑念を

【此利益下】論

身、口、

【三輪】

【一に入は】断なり論の文に無量の入、無量の作、無量の轉とあるを指す。

勸むること、知んぬべし。第三の勸は本弘願する所を憶念する下は、別くるに二句あり、一に欲利益衆生とは是れ廣心をもて下衆生を化せんことを願す。二に欲得不思智とは是れ大心をもて上佛智を求めんことを願す。【二】の中の依願化衆生は上の句を釋し、智行廣は後の句を釋す。能轉とは前の二義に依り、勸轉を依と名けて轉と名くるが故に。第四の勸の中に三句あり、初の一切法性等は所得を擧ぐ、法性自爾にして著を生ぜしめず。二に一切如來の下は、上未だ佛に同ぜざることを明す。謂はく、佛は大用を具す、但一寂のみに非ず。三に聲聞等は下二乘に齊うすることを明す。謂はく、定性の二乘も亦寂に住し化を捨す、此は是れ抑挫の辭なり。【論】の中に不共義とは第二の句を釋し、功行疲倦とは第三の句を釋す、此二過有るを名けて彼垢と爲し、此勸に依りて轉ずるを依轉と名く。第五の勸の中に二あり、初に汝觀我等とは佛の六種の化業を擧ぐ。二に汝今の下は勸を結し修を起さしむ。【二】の中に先に化業を釋するに、無量身等と言ふは經文を擧す。彼佛法成就有力とは、彼身等の佛法修成の時、此能化の衆生力有ることを明す。示現依利益衆生と言ふは、其行を攝定す。謂はく、此六は皆利他に依りて説く。次に此利益衆生事の下は廣く六種は皆衆生を化せんが爲なることを釋す。中に於て攝伏とは、善者をば光を以て之を攝し、惡者をば輪を以て之を伏す、謂はく三輪なり。二に如來作無量の下は結勸起修の文を釋す。第六の勸の中に亦二あり。初に汝今適得等は、所得の未だ廣からざるを明し、二に我等の下は未だ得ざる所を擧げて之を勸めて起らしむ。【論】の中に一に入は是れ所入の法



【第二に云云】以下二に勸の利益を明す。

門、二に作は是れ法門の業用、三に轉は是れ業用不斷なり。餘の文は見つべし。第七の勸の中に少作在とは其去心を増することを明す。中に於て先に三種の無量を擧げ、汝應の下は盡通達を勸む。「論」の中に少作とは轉業に望めて、遙かならざるが故に少と云ふ、在所見等とは三無量を轉するなり。少觀即成とは如實通達を轉す。此を以て其去心を増するが故に轉と云ふなり。三に是菩薩の下は結勸なり、知んぬべし。第二に諸佛子の下は、勸に因りて益を成ずることを明す。中に於て二あり、先に上の本願件に對して不勸の損を彰す。論の釋に「即ち涅槃に入るとは、智慧を興へて示現す」とは、此は經の意を釋す。謂はく、此滅を擧げて佛の智を興ふることを顯さんが爲の故に。二に以諸佛の下は、上の佛勸に對して勸の益を彰す。中に於て法と喻と合と有り。法の中に亦三あり、初は佛智門を興ふることを明すとは、「論」に釋して、「彼行の中に功德因縁を攝す」とは智を興ふる所依を明す。謂はく、彼發起行の中に、無生法忍は功德の因を攝すること最も殊勝と爲すが故に、佛智を興ふるなり。同作教授證とは、正しく眞智を解す。諸佛と共に勸むるを同教授と名く。二に於一念の下は、勸に由るが故に行を起すこと、速疾なることを明す、論の釋は知んぬべし。三に所以者何の下は問答して釋す。謂はく、向前の二大倍數に於て所、一念所起の行に比するに、及ばざることは何ん。下に釋する中に、先に一身等を以て、前の今に及ばざることを明し、此無量とは此れ前より過ぐることを攝す。問ふ、「前の初地は百身、二地は千等なり、何が故に一と言ふや。」答ふ、「實報は唯一なれども變化は百等な

【此十句云云】以下別して論の諸句を釋す。

り、故に實に非ざるなり。中なかに於て十一句有り。初に無量身とは一論いちろんに釋しやくすらく、一切菩薩身信解すること自身ごんじんの如きが故に」とは、勝解力の故に、自身を以て一切菩薩の身に同ぜしむるが故に、是故に一切の所修は是れ自修なり。此は是れ同體の智力の故なり。此は文の意に非ず。又釋またやくすらく、勝解力を以て自身をして無量ならしむること、一切の菩薩の如くにして數量齊等なり。此れ豈是れ變化身に非ずや。釋しやくすらく、此菩薩既に觀かんを出いでず、即ち法界ほふがいに稱なぞうて身雲みんうんを起おこすを以て、實德じつとくにして化けに非ず、此は是れ文の意なり、菩薩の起おこる等は身に類るして應おとに知しんぬべし。此十句を言はんいに、一に教化衆生に依るとは、是れ十句の中の初の六は利他なり。二に助道に依るとは、其次の二句は自利の行なり。三に障淨しやうじやうに依るとは、彼の二句は徳用淨を明あす。應おとに知るべし、十句じゆくに此三義さんぎ有り。下は別して之を顯あす。隨身住ごんじんぢゆうとは是れ無量の身なり。謂いはく、所住しよぢゆうの法ほふに隨まひて、當あたに彼身かみんを現あすべし、觀音くわんおんの、大悲身だいひしんに住ぢゆうする等の如ごとし。二に隨説ごんぢやくとは是れ無量の聲こゑなり。謂いはく、所聲しよこゑの法ほふに隨まひて、菩薩ぼさつも亦また無量むりやうなり。三に隨依智ごんぢぢとは無量智むりやうぢなり、所知しよぢに隨まひて、四に隨所取生ごんぢぢうとは、無量の生處しやうぢよ形かたち類る同どうじからず、即ち種類しゆゐ俱生くゐしやう、無行作意むぎやうしやくいの生身しやうしんなり。五に隨何圖土ごんぢどとは無量の淨國じやうこくなり。六に得教化衆生とくけわしゆじやうとは無量の化衆生けわしゆじやうなり。次に二句を釋しやくす、自行ぢやくの中に、一は佛ぶつを供くして徳とくを集あむ、一は佛ぶつに願ねんして智ぢを集あむ。下したの二句は徳用淨とくぢやうじやうを明あす、一は神通しんつう障淨しやうじやう、二は無量むりやうの大會たいゑは正覺しやうかく障淨しやうじやうを明あす。大會たいゑに於て根こんを知しり、法ほふを説とくく等を以ての故に。此一切處隨順無量身口意業等しよぢやくしやくいごふぢやうと言いふは、此こゝは結文けつもんを釋しやくし、無間不斷むかんふたんとは

不動の義を釋す。二に喻を釋する中に、船は行の疾に喻ふ、意に知るべし因勝とは、行の疾き所因を顯す、無生忍は是れ行の勢因なるを以て、行をして疾からしむ。三に善集の下は合文を釋す。善集等は是れ前の七地の中の所修の諸行、此を助發するが故に資糧と曰ふ、餘の文は知んぬべし。

【六】に淨佛國土分の中に三自在有り。一には器世間自在行、二には業生世間自在行、三には智正覺世間自在行なり。初は是れ化す處、次は是れ所化、後は是れ能化なり。後の二淨を具するを方に淨土と名け、此三法に於て化を起すこと無礙なるが故に自在と名く。初の器世間自在行の中に就いて二あり、初は總じて以て標舉す。謂はく、先に前を釋し後に思惟す、佛智力とは正に其相を辨す。謂はく、能く諸の世界の相を了知するが故に智力と名く。下は別して之を顯す。文を別くるに五有り、一に隨心所欲とは、此世界に於て、己心の知らんと欲するに隨ひて即ち知る、又亦他の衆生の心に隨ひて知らんと欲すれば即ち知るなり、此は是れ智の自在なり。彼能現不現とは是れ通の自在なり、能現は是れ成なり、不現は是れ壞なり、不現は之に反す。二に知以何業の下は隨何欲彼能現を顯す、謂はく、何の業に隨ひてか成じ、何の業に隨ひてか壞するを、知らんと欲すれば即ち知り、能く現すること前に同じ。業集の故に、成業盡の故に、壞智盡く盡を知るが故に業集盡智と云ふ。三に隨幾時欲とは、略して此句無し。四に是菩薩知地の下一廣狹欲に隨ひて彼能く現す」とは中に於て二あり。先に四大の差別を明すに、非定地等とは欲界の所知を明す、

【二に云云】 論の文なり。

【二に於一世界云云】經の「一世界の中に於ける」等の下。

【次に六道の身云云】經に地獄身、畜生身等といへる文の下。【覺慧…顯す】小乘の拆空觀に簡異す。

狭の故に小と名く。二に定地等の上界の所知は、廣の故に大と名く。三に佛知無限の故に無量と云ふ、上の三は俱に所知の分齊に約して、同く境界と名け、此を知るの智なるが故に境智と名く。次に相智を顯すに、四大の體狀を名けて自相と爲し、上に於て空無我等有るを名けて同相と爲し、此二の不同なるを名けて差別と爲す。下は微塵蠱細等を知るは、前に准じて知んぬべし。二に於一世界の下の微塵聚散の多少を知ることを明す。初に於て總じて知る、二に此一世界の下の別なり。別の中に四句あり。一には外の四大塵の多少を知り、二には衆生の身塵の多少を知り、三は前世界の物塵の多少を知り、四は前の衆生三界六道の差別身塵の多少を知る。此中の大身小身とは、論經に蠱兵細身と名く、此は是れ三界の差別なり。【論】に身蠱細と云ふは色蠱なり、無色は細なり、色の中に欲界は蠱なり色界は細なり、故に如是次第と云ふ。此を以て當に知るべし、大乘宗の無色界の中に亦微塵有り、即ち定自在所生の色なり。次に六道の身微塵をもて成するを知るとは、覺慧を以て分析し、此微塵は實有の性に非ざることを顯す。五に是菩薩入如是の下は隨幾許欲を明す、中に於て三あり。初は三界の成壞を知り、二に大小等の相を知り、三に衆生之に隨ひて化を現することを知る。【論】には後の二を釋す。【論】に「欲界等の境界相智」と云ふは亦二門を開き、欲を擧げて色無色界を等取す。此三界に於て事の分齊を知るを、境界智の知法の分齊と名け、名けて相智と爲す。下に廣く境智を釋するに、欲界の中には人は小にして天は大なり。色界の中には覺觀有るは是れ初禪、覺無きは是れ二禪已上なり、無色



【上來は但云云】  
論の無量相を釋す  
る文を述す。

【三に是云云】  
經に「是を菩薩の」等  
といふを釋す。

【二に隨云云】  
次に衆生世間自在を  
明す文の釋。經の  
「善く衆生の身」等  
の下。先づ論文に  
依て廣く述す。

【必ず】  
一本に心  
に作るは佳し。

界の中に、彼外道の、妄取して以て涅槃と爲すを簡却せんが爲の故に、佛法の凡夫、菩薩、聲聞は是れ理智識き、此上は各所知の廣狹と爲して以て大小を分つ。上來は但大小を釋して未だ無量の相を釋せず。今此は同じく一切三界を釋し、如來の所知、皆廣にして無邊の故に無量相と云ふなり。三に是名菩薩の下は衆生を知り、之に隨ひて化を現することとを明す、中に於て三有り。初は衆生を知り、二は知るに隨ひて化を現じ、三は化を起すこと自在なり。【二に】に初を釋する中に、先に文を牒して善知身不同といふは總じて所知の衆生を釋し、方便等とは化を現じて巧に彼生に同することを釋す。異生同生差別、應知とは、是れ所現の同類身なり。諸佛國の下、彼處處に去りて身相示現すとは、化を起すの自在を釋す、身は三千界等に通すればなり、法と喻と合とは知んぬべし。

二に隨衆生身の下は衆生世間自在行を明す、中に於て三あり。先に總じて自在を明し、二に若於沙門の下は別して自在を顯し、三に不可説の下は總じて自在を結す。論の釋の中に、彼調伏衆生自在とは是れ總じて其相を釋す。此菩薩、衆生を調伏する中に自在を得るを以ての故に、能く種種に現す。彼行化衆生と言ふは、此れ經の中の衆生の信に隨ひて、大會に於て現することを釋し、皆往いて示現するを行化生と名く。身々自同事と言ふは、別して顯す文の内の化、物身に同すること、謂はく、菩薩の自身は衆生の心に隨ひて、自己の身を以て形事に同するが故に、身々自同事と言ふなり。身心等八示現と言ふは、此は中の化物心に應ずるを釋す、菩薩の身々生に隨ひて、必ず草宜くして現するを等分示



【三に而實云云】三に智正覺世間を明す文の釋。如に第一義智を明す。經に「而も實には身相」等の下。

【二に云云】次に世諦智を明す。

【後二】大正藏經に彼二に作る。

と名く。謂はく、應に聲聞の身等を以てす、餘の文は知んぬべし。

三に而實遠離の十は智正覺世間自在行を明す。中に於て二諦智有り、先に第一義智を明す、是れ本なるを以ての故に。遠離身相差別と言ふは、『論』に釋すらく、「一切の身相分別を離るるなり」と。常住平等と言ふは、己身と他身とを分別せず。謂はく、己身を白と爲し、十身を他と爲すも、同一理性の故に分別せず。何が故に此を説くや。謂はく、法身相の作の所由を顯さんと欲するが故なり。二に是菩薩の下は世諦智を明す中に三有り。初に所知の十身を列ね、二に諸身相作を明し、三に十身の義を釋す。初の中十身の内に、初の三は是れ業分、次の六は是れ淨分、後の一は是れ不二分なり。各分と言ふことは、此は是れ同じく一大緣起の法義をもて分出するが故なり。『攝論』の中に依他起の上に於て、業分を離して遍計と名け、清淨分を圓成と名け、不二分を依他と爲すが如し。是故に若し一分を見れば餘分の性は異ならず、皆融通して全く此中に攝す。不二分は相表に約して、言を爲すが故に、虚空身を以て表すなり。『論』の中に重ねて分別する内に、衆生世間器世間といふは、初の二身を擧げ、後二生因業煩惱とは、是れ第三の業散身なり、前の二種の生起の時、煩惱の業に因るが故に名けて報と爲すことを明す。是染分と言ふは上の三を結するなり。次に淨分を明す、三乘淨と言ふは聲聞辟支菩薩如來の圓身是なり。此三乘隨何智とは智身を擧げ、隨何法とは法身を擧ぐ、是れ彼能知及び所知の法なり、彼淨顯示とは上の六種は、是れ淨分なることを結す。虚空は是れ前の二相に非ざるが故に、不二分

【自身に通じ云云】以下、菩薩の世智所了の如來の十身を他とし、自己の身を自とし、自他通じて十一とす。

【遠】一本に遠に作るは佳し。

【三に是云云】三に十身の義を釋するに七段あり、初に衆生身を釋す。

【四身】業報、聲聞、辟支佛、菩薩身。

と名く。二に是菩薩の下は諸身相作を明す中に、自身に通じて十在り、一身に亦十あれば、一度相作して一百一十身を成じ、皆無礙自在に顯現す。文の中に且く三重を釋す。一は衆生の身を以て首と爲して己身等の十と作し、二に國土身を以て首と爲して十と作し、三に是の如く乃至第十に、己身を以て首と爲して彼十身と作すこと、應に知るべし。云何が諸身是の如きの相作を得るや。釋するに多因有れども、略して三種を論ぜん。一は法性融通門に約す、是故に此文に、先づ自他身平等不分別等を説く。二に緣起相由門に約す、下の頌に説くが如し、菩薩、因緣和合の中に於て自在にして、乃至能く意に隨ひて佛身を示現するが故に。三に菩薩の自在智力に約す。此位の中には前の二門の無礙の道理に遠きを以て、是故に能く作す。論釋に「衆生の身を以て自身と作すとは、彼自在の中の所作は攝取の行にして、種種に示現す」とは、智正覺自在の中に攝他の行を作す、諸身相作を、種種示現と名く、皆物心に隨ひて現する所なり。三に菩薩の下は廣く十身を顯す。初に衆生身を釋する中に五句有り。一は業、二は生是れ報なり、三は煩惱妄相業の差別、四は色、五は無色界の差別なり、後の二は報に就いて聞くなり。二に國土身を釋するに十相有り、「論」の中に千等とは、初の三相を釋す。謂はく、一千は小なり、二千は中なり、三千は無量なり、千を擧げて後の二を等取す、故に應知と云ふ。淨不淨差別とは垢相と淨相とを釋す。廣等は餘の相を釋して初地に指同す。次に四身の假名差別とは、『論』に釋すらく、「自相同相の差別假名分別は我人に無きが故に」と。謂はく、諸身各異なるを名け

て自相と爲し、假名の義齊きを稱して同相と曰ふ。若し人に就いて假を説かば、佛身の處に何んが説かざるや。佛の勝德は餘人に超ゆるを以ての故に。七に如來の身を稱する中に、自ら十身有り。一に菩提身とは、成正覺を示すが故に。二に願身とは、願じて兜率に生ずるが故に。三に化身とは所有の佛の應化の故に。四に住持身とは、自身の舍利持するが故に。五に相好嚴身とは、所有の實報身の故に、福業の所生なるを以てなり。六に勢力身とは所有の光明をして、衆生を攝伏するが故に。七に如意身とは、所有の同不同、世間出世間の心を、自在に解脫するを得るが故に」とは、意に隨ひて生を現じて、世間に示同するを同と名け、實は則ち出世の故に不同と名く。下は所以を釋す、出世間に於て自在に解脫するを以ての故に、能現同なり。世間に於て自在に解脫するを以て、能示同じからず。八に福德身とは、所有の不能く廣大利益の因と作るが故に。福は凡小に超ゆるを、名けて不共の因と爲すことを明す。此大福廣く無量の身財等の相を現じ、廣く衆生を攝す。九に智身とは、所有の無障無智の故に、是故に此智は能く一切の事を作し、彼事の差別を皆悉く能く知るなり。謂はく、能く一切を作すとは、無障礙の義を釋し、彼事の下は能知を結す。十に法身とは所有の如來の無漏界の故に。謂はく、諸佛の斷德を無漏界と名く、即ち十佛の中には涅槃體と名く。又是如來の内證の法身を無漏界と名く。八に智身を釋すとは、論釋の中に八釋有り。初の二句は三慧分別なり。一に思量とは聞思の慧、二に善如實觀相とは是れ修慧なり、三に果行攝とは因果分別にして、所得を果と名け、彼因を行と

名く。四に世出世とは位に就いて分別す、道前を世と名け、見道已去を名けて出世と爲す。  
 五に三乗とは大小分別なり。六に共不共とは麁細分別にして、麁は則ち同修し、細は唯大  
 に在り。七に乘不乘とは種姓分別なり、已習の三乗の種姓を乗と名け、未習は乘に非ず。  
 八に學無學とは修成分別なり、習求を學と名け、果極は無學なり。第九に法身を釋すとすは、  
 論經に五句あり。一に平等相とは、無量の法門をもて、等一法身を明すが故に。謂はく、  
 佛の無量の法明同一法身の故に平等と云ふ、此は是れ理法なり。二に不壞相とは聞の如く  
 取るが故に。此は是れ教法の中に、實教は理に稱うて説くが故に如聞と云ふなり。三に轉  
 時假名差別とは、所化の衆生の根性相應の時に隨ひて、説く差別の故に。謂はく、所化の  
 根性熟する時に隨ひて、根の差別に稱うて説くは、是れ權教の法なり。四に衆生非衆生  
 とは、衆生に六根等の依報有り、非情を名けて非根と曰ふは、此は是れ樂法なり。五に三  
 寶を知るとは第一相を知る。謂はく、三寶殊勝の故なり。第十に虚空身を釋する中の六句  
 は、一に無量とは廣窮無盡なり、二に周遍とは一切の色象なり、三に無形とは不可見の故  
 に。四に不異とは無障礙とは、色法の眼礙に同じからざるが故なり。五に無邊とは、無爲  
 の相、始起終盡の邊無きを以ての故に。六に色身の別異を顯すとすは、能く通じて色を容受  
 するの相なり、色に因りて彼分別して皆悉く能く色を知る、因は別異を解するなり。  
 第五に是菩薩善知起知是の下は自在分を明す、此十自在に略して四門を作る。一は相を  
 辨じ、二は障を治し、三は因を出し、四は位を得。初に相を辨せば、論經に具に顯すが如

【色象】 色處か。

【七】 五に菩薩の自在力を明す文の釋。經文の「是菩薩得」等の下。



【攝論】梁の論四十六の十五左、無性釋論九の七左、無世親の釋論三十九の十四右。

【攝論】梁の論四十六の十四右。  
【五相】一、法身轉依。二、清白法住。三、無二。四、常住。五、下可思議を相と爲す。  
【八】六に大勝分の文に、三、初に智の寂用測り難き別相を、論文を以て解釋す。

し。二に治障とは十障を對治す、『地論』に具に顯すが如し、『二論』は既に此と共に讀むが故に錄することを待たず。三に出囚とは『攝論』に依るに、第十の殊勝の中に、六度を以て囚と爲すに、初の三は施を囚と爲す、一切時の施は命自在を得、一切處の施は心自在を得、一切の物施は財自在を得るを以てなり。次の二は戒を以て囚と爲す、戒は身語を調するに由りて、以て勝業を成ず。復戒淨なるに由りて、欲するに隨ひて受生す。忍を信解自在の囚と爲す。忍を修する時、衆生の意に隨ふを以ての故に、一切は苦心に隨ひて轉ずることを得。謂はく、地を變じて金と爲す等、皆勝解に隨ひて轉ずるなり。精進を願の囚と爲す、策勤を以て所作し、懈廢無きが故に、所願に隨ひて意の如く成就せしむ。禪を如意の囚と爲し、彼を神力自在と名く、定に依りて通を發し、意に隨ひて成ずるを以ての故に。般若を後の二囚と爲す。謂はく、內照の所知を智自在と名け、根に應じて宣說するを法自在と名く。四に得位を明すとすは、『攝論』に果に約して佛地の所得を明す。謂はく、彼法身は五相の中に、白法の所成の内の攝なり。今此は囚に就き、八地の所得なり。此は始終教に約して説く、下の離世間品の十自在は、普賢の位に約し、諸位を貫通す。又上の賢首品に云はく、『十地の十種自在力等は、別教一乘に約して説く』と。

第六に是菩薩得十自在の下は、大勝分に三有り。初に智大、二に業大、三に彼二の所住功德大なり。初の智大の中に就いて、不思議とは、世間と涅槃に住せずして寂用測り難きを明す、此は是れ總句なり。下は別して三種を顯す。一に無量智者とは修行盡く至り證



理の深きなり。二に廣智者とは所知不思なり、照境の廣きなり。三に不壞智者とは除障不  
 思にして滅相の極なり。二に菩薩隨如是の下は業大を明す中に、初に前を牒す。『論』に云  
 はく、「是の如く至り已るとは前に説くが如し」とは、前の所説の得自在已を指すなり。是  
 の如く智の成ずることも亦前に説くが如し」とは、前の所説の不思議を指すなり。二に畢  
 竟の下の十二句は正しく業大を顯す。中に於て初の三句は三業の淨を明す、是れ業大の體  
 なり。下の九は修に約して業を辨するに、攝して四と爲す。一は起能起と同時に、謂は  
 く、前の三業は是れ智慧を起す。彼を起すを是を能起と名け、彼業起り竟りて、慧と共に  
 相隨ふを名けて同時と曰ふが故に、身業動智等と名く。二に智不染の作と利衆生の行を  
 攝す等とは、智悲一對を明すが故に、般若増上大悲等と云ふ。三に因自行他行の因を攝  
 す等とは、此れ能感所感を一對と爲す。謂はく、自ら大願を起すを名けて自行と爲す、此  
 自行は、他の佛行の能加の因と爲るが故に、他行因等と名く、故に善起願善爲佛業と  
 云ふ。四に作業所持とは、謂はく、三業の行放じて不壞なるを攝と名く。中に於て三句  
 あり。初の二は利他成ず、一は法を説いて、生を益するが故に、常不捨利益生と云ふ。二  
 は淨上神通化の故に悉知無邊等と云ふ。下の一は自行なり。謂はく、一切の佛法を成就す  
 るが故に、擧要言等と云ふ。三に是菩薩住此地の下は彼二佐の功徳大を明す。中に於て初  
 の十句は正しく釋し、後の三句は結總す。前の中に『論』に攝して七と爲す。初の四を一  
 と爲す、是れ徳體に住するが故に、善住道功徳と名く。後の六は各各一なり、是れ修に約

して徳を辨す。前の中の四句、初の二は自行なり、一は淨心をもて障を離れ、二は深心をもて善を攝す、道を離れざるが故に對治堅と名く。後の二は利他の悲慈をもて捨てずして救ふなり。下は修に約して徳を辨す。二に不忘の徳、是は意業總持の徳、三に成就日業辨説の徳、四に定心自在は是れ身業の徳なり、定に依りて通を發すが故に。五に願力に依りて行を起す。六に修行成就とは、行力集法を明し、七に智者の行成就ると與に、佛境界に證入するを佛與智と名く。三に是菩薩如是の下は結す。智力とは前の智大を牒す、憎愛無きことを得て、衆生の有惱無惱を分別せざるなり。「一切の所作を示す」とは、前の作業大を牒す。謂はく、平等の作業の故に過咎無し」とは、是れ彼二任功德大なり、前の七種の功德を得るを以ての故に。諸行事の中に過失無きが故に。

【九】以下第七に本地の名を釋する釋名分の釋。經の「諸の童子」等の下

【初の二】不動不轉。

【二に能く云云】經に威徳地と名け論に難得地といふ

【三に次の二句】經に童眞地、自在地と名け、論に王子地、生地といふ

第七に、諸佛菩薩此地の下は釋名分を明すに二有り。初に地の釋名とは法に約して位を顯す。二に智者の釋名は人に約して徳を辨す。前の中に十句有り、一論に攝して六と爲す、謂はく、第三第八は各各一と爲し、自餘の八句は兩を一と爲すが故に六有り。初の二は業對治、一は下地の功用行、小乘の願、諸の魔業を治するが故に不動と名け、二は煩惱習行を治するが故に不轉と名く、智能く治するを以てなり。二に能く難得の甚深無生を得るが故に、一切世不測等と名く。三に次の二句は發行淨と名く。一は發行淨とは、謂はく、發修の時、功用の過を離ること、王子の家に居して農務を憂へざるの過の如し、菩薩も亦爾り、此家に生存して、功用の失無きが故に無家過を云ふ。此中に童子の無欲の

【四に次の二句】  
經に成地、究竟地  
と名く。

【五に無作云云】  
論には畢樂地とい  
ひ、今變化地とい  
ふ故に會通す。

【六に次の云云】  
經に住持地、無功  
加地といふ。今論  
經を會するに論意  
を以てす。

【二に菩薩云云】  
以下、二に智者の  
名を釋するに、初  
に向不動を明す

如きは、純無漏の感染の過無きに譬ふ。二は行淨とは、謂はく、正行の時に不成の過を離れて生地に住し、所欲の事自在に成就するが故に、自在地と名く。四に次の二句を一と爲す、世間出世間の有作淨勝なり。謂はく、教道修起を有作と名け、有作を成と名け、福徳を世と名け、慧を出世と名け、出世の慧決定して知るが故に究竟と名く。五に無作淨勝なり。謂はく、證道の眞理は修の所作に非ず、梵語の涅槃は變化と相近し、故に二譯の不同を致す、願に由りて用を起し、滯寂せざるが故に變化と名く。六に次の二句を菩薩地勝と名く。謂はく、位分前に過ぎたり。一に住持とは、【論】に加地と名くるは即ち加持なり。此れ六地に勝るとは殊勝の行を發起すればあり、謂はく、此は前に過ぐることを顯す。他事念動とは前の劣を彰す、此は即ち六地に空を觀するに、有を以て他と爲し、其空觀を動す、今は則ち爾らざるが故に勝れり。二は先に善を修するを無功地と名くることは、七地に勝ることを明し、有功用とは前は此より劣れることを明す。此地善起等は、此は彼に勝ることを彰す、餘文は見つべし。

二に菩薩得如是の下は、智者の釋名を明す。謂はく、何の義を以ての故に、得不動菩薩と爲す。二義有り。一は一向不動なり、行修上に順するが故に。二は一體不動なり、謂はく、諸菩薩と行同體なるが故に。前の中に先に四句あり、一向の義を明せり。初に入佛境と言ふは論經に入佛性と名く、謂はく、佛果法身の理性に入るは、亦是れ佛智所證の境なるが故に。果満足勝と云ふは、謂はく、性を釋するなり。満足は佛を釋す、是れ果圓な

【次の十句云云】以下不動を釋する文の釋の「常に諸佛の神力」等の下の釋なり。

【二は云云】以下一體不動を明す文を釋す。

るを以ての故に。隨順因とは後の三句を標す、佛に隨順するの因なり。二に「佛德に照明せらる」と名くとは、是れ攝功德なり、善清淨の義の故に、觀解德を攝することを明す。三に「佛の威儀に隨ふ」とは、名けて正行と爲すが故に、解に依りて修を起す。四に「佛法に趣向す」とは、論經に佛境現前と名くるは、佛の境界に近きが故に、行に依りて果に近づくなり。次の十句は不動を釋す。初の九は是れ總なり。常に佛力の爲に護らる」とは、上果下に加するが故に。餘の九は是れ別して論ずるに攝して五と爲す。謂はく、前の四は各各一、後の五を一と爲す。初の中に常爲四天王等とは、是れ供養の功德、天の供養を感じることを明す。二に密迹等とは護の功德にして、已前は密護、今此より已去は形を現じて守護す。三に善能等とは依止の功德なり、定に依りて德を成ずるを以てなり。四に能作無量身とは國土清淨の功德なり。謂はく、前の淨土分の中には現身の差別なり。次の五は一の化衆生の功德と爲す。一に於諸身等とは、顯じて諸有の生を取るは、身業の化を明す。二に得大果とは根心使智力、意業の化を明すなり、能く衆生の根欲性等を知る。三に於無邊三昧等とは無量の法力をもて、法輪を轉ずるが故に。語業の化を明す。定に依りて法を証するを法力と名け、此法力を以て能く法輪を轉ずるを、名けて語業と爲す。四は多論の記を受くるに堪ふ、五は成徳を示現して、說法して人を度す。二は是れ菩薩人如是智等の下は、一體不動を明す。人如是智と言ふは、論經に入大乘衆と名く。謂はく、此位は諸の無功用的菩薩の大智に同じきが故に不壞と名く、此は是れ總句なり、餘の九は別と



【下の能於：結】  
釋名分の總結。  
【佛子の下云云】  
【佛の一佛子、菩薩不動地」等を釋す。

【二〇】上既に正説分の釋竟りて、次に第三に重頌を釋す。

爲す。一に善く法に通達すとは、是れ智を壞せずして、内證の法實なるを以ての故に。二に常放等とは説不壞なり、證に依りて説を起すを以ての故に。三に度無礙等とは解脫不壞なり、無礙法界の業用自在なるを以てなり。四に善知世界等とは佛國土清淨不壞なり、諸佛の土に於て自在無礙なるを以ての故に、善知と云ふ。五に能示一切等とは、大衆に入りて不壞の意業、法に入りて能く示現するなり。六に隨意自在とは神通不壞、是れ身業なり。七に善解先後等とは、能く解して義を得すること不壞なり、是れ語業なり。八に能入轉魔道智とは、坐道場不壞なり。謂はく、魔怨を降すなり。九に入如來等とは正覺不壞なり、能く佛の説法を現するを以てなり。下の能於無邊等は總結なり、行障無きを以て離結せざるが故に、名けて得不動地菩薩と爲す。佛子の下は地果を明す中に、三果は前に同じし。調柔法説の中に、從佛受世界差別等とは、衆生世間、智正覺を等取す。此三に依りて能く無量の淨土の作用を起すを以て、名けて淨土と爲す、故に所愛を説いて彼國相と爲す。論の中に人に依りて勝を顯す。謂はく、清淨地を得て身心勝るるが故に、即ち純淨無漏なり。善根光明示現とは、教智淨を行す、餘の文は知んぬべし。

【二〇】第三に重頌の中に四十四あり、九に分つ。初の三は前の方便集地分を顯す。二に三有り、淨忍分を顯す。三に十五有り、勝行分を顯す。中に於て初の五は勝行を顯し、後の十は發起を顯す、即ち七勸等なり。四に十二有り、淨佛國土分を顯す。中に於て初の四は器世間を顯し、次の五は衆生世間、後の三は智正覺世間なり。五に一有り、自在分を顯す。

【二】以下第九に善慧地を釋す。七門を以て釋する。七と前の如し。初に釋名。

す。六に二有り、大勝分を頌す。七に二有り、釋名分を頌す。八に五有り、地果分を頌す。九に末後の一は説の分齊を結す。不動地竟んぬ。

第九に善慧地。七門は前に同じ。初に釋名とは「攝大乘」に云はく、「最勝の無礙智を得るに由るが故に」と。世親釋して云はく、「無礙解智に由りて説いて名けて慧と爲す、此

慧は妙善の故に善慧と名く」と。無性釋して云はく、「謂はく、最勝の四無礙解を得るに、

無礙解智は諸智の中に於て最も殊勝と爲す、智は即ち是れ慧の故に善慧と名く。四無礙と

は法義詞辯なり、法無礙自在に由りて一切の名句を了知し、義無礙自在に由りて一切の義

理に通達し、詞無礙自在に由りて一切の言詞を分別し、辯無礙に由りて十方に遍し、其所

宜に隨ひて自在に辯説す。此地の中に於て、最初に先に未曾得の無礙解智を證得するが故

に善慧と名く」と。『莊嚴論』に云はく、「九地の中に於て、四無礙慧を最も殊勝と爲す。一

刹那に於て三千世界所有の天人の異類、異音、異義の此を問ふに、菩薩は能く一音を以て

普く衆間に答へ、遍く衆疑を斷ず、此説言に由りて名けて善慧と爲す」と。『金光明』に

云はく、「説法自在にして惠累無きが故に、智慧增長して自在無礙なり」と。『解深密經』に、

「一切種に於て説法自在にして、無礙廣大の智慧を獲得するが故に善慧と名く」と。『瑜伽

の住品に云はく、「此地の中に、一切有情の利益安樂の音樂清淨なるに由りて、菩薩の無

礙解の慧を逮得し、此に由りて善く正法を宣説す。是故に此地を善慧地と名く」と。『十住

論』に云はく、「其慧は轉明かにして、調柔増上するを善慧地と名く」と。『成唯識論』に、

【二】二に…知んぬべし】二に當地の來意を明す。今は寄位、實位、約位の三義の中、實位のみを擧げて達し他を略す。

【三】三に…知んぬべし】三に所證證を明す。

【唯證】卷九の三十箇右の文。

【解して…故に】眞法の宗意を略述し、性宗の實意を反顯す。

「微妙の四無礙解を成就し、能く十方に過く、善く法を説くが故に」と。「仁王經」の中に名けて慧光と爲し、「智度論」の中には善相地と名く。二に來意とは亦三義有り。一は前地において無相の中の無功用の行を得と雖も、而も未だ無礙解を以て機に隨ひて法を説くこと能はず、今此は進修して彼法を證らしむ、是故に來る。餘の二門は知んぬべし。三に所證證とは「地論」に依るに、不能善利益衆生障を離ると。「唯證」には、利他の中に行ずるを欲せざるの障と云ふ、謂はく、「所知障の中の俱生の一分なり、利樂有情の事の中に於て、勤行することを欲せずして、樂うて己が利を修せしむ。彼九地の四無礙解を障へ、九地に入る時便ち能く永へに斷ず。所に出りて九地に二愚及び彼儘重を斷ず」と説く。一は無量の所説の法、無量の名句字に於て、後後慧辯に陀羅尼自在なるに愚なり。無量の所起の法に於て陀羅尼自在とは謂はく、義無礙解は即ち所證に於て總持自在なり。一義の中に於て一切の義を現するが故に。於無量名句字陀羅尼自在とは、謂はく、法無礙解なり。即ち能證の總持自在に於て、一の名句字の中に於て一切の名句字を現するが故に。於後後持辯陀羅尼自在とは、謂はく、詞無礙解は即ち言音の展轉顯傳するに於て總持自在なり、一言音の中に於て一切の音聲を現するが故に。二は辯才自在に愚なり。辯才自在とは、謂はく、辯無礙解なり、善く便宜に達し、巧に爲に説くが故に。愚は能く此四種の自在を解す、皆是れ此中の第九の障の攝なり」と。解して云はく、此は能く四無礙解を障する、所知障の種を用て、以て體性と爲す、八地上の六觀の中の所知障は、現行無きを以ての故に。

【四に：在り】 四に所證を明す。

【五に：知るべし】 五に所行を明す。

【六に：知るぬべし】 六に所得の果を明す。

『金光明』に云はく、「一は說法無量、名味句無量、智慧分別無量を、持すること能はざる所の無明なり。二は四無礙辯未だ自在なるを得ざるの無明なり」と。梁の『攝論』に云はく、「一は無量の正說法、無量の名句味難答の巧言自在陀羅尼に無明なり。二は四無礙解に依りて疑を決し、解に生ずるに無明なり」と。解して云はく、後の中に四無礙と言ふは、即ち第四は『深密』等と同じ、餘は並に知るぬべし。四に所證とは此地の中に智自在依止法界を證得す。『唯識』の釋に云はく、「謂はく、若し此眞如を證得し已りて、無礙解に於て自在を得るが故に」と。無性釋して云はく、「謂はく、此地の中に無礙辯の所依止を得るが故に、分に智波羅蜜多を證得し、一切の法に於て其言に隨はず、善能く諸の意趣の義を了知し、實の如くに一切有情の受勝法樂を成就す」と。解して云はく、無礙辯等は依止の義を釋し、分證等は智の義を釋し、不隨言等は自在の義を釋す。『中邊論』に云はく、「四の自在有り。一は無分別自在在在なり。二は淨土自在、三は智自在、四は業自在なり。法界は此四種の所依と爲るを、四自在の依止の義と名く」と。第八地は唯能く初の二自在の所依止の義に通達し、後の二は次の如く後の二地に在り。五に所行とは亦三あり。一は十度の中に於て力度行に當る。二は善く法器に達し、自在に說法する行なり。『莊嚴論』に云はく、「四辯自在にして衆生を成就す」と。三は無邊總持廣受法行なり、並に下の文の如く應に知るべし。六に所得の果とは梁の『論』に依るに、智自在に通達し、法界に依止して應身を得るの果なりと。『金光明』に、「九地に心を發して智藏三昧を得」と。當地の位果は



【三】以下、正しく本文を釋す。初に證請分の釋。

【二】次に大門第二に正説分を釋す。經の「金剛藏菩薩の言はく」等の下。

【初に云云】別釋に四、初に法師方便成就の文を釋す。【一】…現十地論の文。

下の如く應に知んぬべし。

第七に文を釋すとは三分は前に同じ。初に證請分の中に十九頌有り、四に分つ、初の二は前地の經を説く、二に二頌有り、菩薩天王所説の供養を明す。三に十四有り、天女の讚請を説す。中に於て初の一頌半は音を出して解を敷じ、次の三頌半は菩薩の行供を敷じ、次の八頌半は佛菩薩の三輪攝化を敷す。初の二は身重の徳、次の五は兩軍の徳なり。而はく、難無くして三業、一業の差別の法を説く。良に以みれば此處は是れ法師の位、説法の相増なるが故に。次の二に意業の徳なり、幻現は知んぬべし。下の二は又互結歎なり、四に其後の一は上首説かんことを請す。

第二の正説分の中に四分有り。一に法師方便成就とは、此地に能く辯才之法を起すを、法師と名け、起地の行立するを方便成と名く。二に智成就とは法智成を知るが故に。三に入行、眞とは所化の器を知るが故に。四に說成就とは能に稱うて正しく説くが故に。第八に淨土、第九に辯才は、其行の別を分ちて一切の相等を成就し、雖も吾に過ぐることを厭す。謂はく、前の四分を具するを一切相と名く。

初の法師方便の中に就いて、初に前を釋し、後を起す。謂はく、無量智とは是れ前八地の深奥の智なり。欲求の下は正しく方便を顯すに、他利自利に依る。一一五三句示現とは、初の一句は利他、次の一句は自利の故に一一と云ふなり。次の五句は亦利他、後の三句は亦自利の故に、五三句示と云ふなり。初に欲求解脫、滅無脫と言ふは、無色に依り

【四】以下、第二に智成就の文を律す。經の一菩薩此地し等の下。

て解脱想を得て、化すべき衆生に利益を作すを以ての故に。謂はく、彼を化して眞の涅槃を得しむるが故に。二に欲轉等とは未だ究竟の佛智を得ずして、自の利益に依るが故に。下の五句は亦利他を明す。三に欲入等とは根熟の菩薩を化して、深密に入らしむ。四に欲觀等とは、邪念の修行の化すべき衆生を化し、正念の行を得しむ。五に欲觀諸陀羅尼等とは、未だ法を知らざる衆生を化するに、法輪を轉じて知ることを得しむ。謂はく、總持の定智は皆是れ説法の所依なるが故に。六に欲令等とは大神通を以て邪歸依の衆生を化し、正法に入らしむ。七に欲分別等とは、世界の差別の行に通達するを以ての故に、清淨の國土を示し、生天を信する衆生を轉じて佛法に入らしむるが故に。下の三句は自利の行を明す。八に欲修等とは、佛の内證の正覺の大智等を得んと欲するなり。九に欲願等とは、佛の外化攝生の法輪の大智を得んと欲す。十に欲不捨等とは、佛の無住涅槃、不捨悲願を得んと欲す。下は結なり、知んぬべし。

第二に菩薩住此地の下は智成就を明す。初に總じて三性の淨染不二を知り、後に善に就いて別に開いて、以て三重と作す。一は善に就く、中に漏無漏を聞く。謂はく、見道前の善を有漏と名け、見道已去の善を無漏と名く、即ち無漏に就いて後世と出世間とを聞く。謂はく、緣修の阿含を名けて世間と爲し、正證の眞行を出世間と名く。二に復彼善に就いて思不思議を開く、謂はく、地前は可思、地上は不思議なり。即ち可思に就いて定不定を聞く。謂はく、聲聞の忍位已去と、緣覺の世法已去と、菩薩の十廻向已去とを俱に定と名け、

【二五】以下第三に入行成就の文を釋す。經の「是の如き」等の下。

【依共…心離】論を以て本經に合す

【使心】新に隨眠といひ、論に使林

已下を不定と名く。此は初教に約す。若し終教に約せば、十住に入る已去を定と名け、十信は輕毛の如きが故に不定と云ふ。三に彼復善に就いて三乘を問出す、即ち三乘に就いて爲無爲を開く。謂はく、能證の修起を有爲と名け、所證の眞理を無爲と名く、三乘は皆理に依りて、成ずるを以て依順行と名く。經に云はく、「一切の賢聖は皆無爲の法を以て名を得」とは是れ此義なり。

【二五】以下第三に入行成就を明す。中に於て三有り。初に略して十一章門を標し、二に次第に廣く釋し、三に總じて安住を結す。初の中に論經に但心と云ひ、此中に菩提心といふは、此は出離の法器に約して言を爲す。此標章を釋するに、論の中に三有り。初に略して釋す。一に依共とは是心離、是れ善惡染淨の所依なるを以ての故に、名けて共と爲す。煩惱業は是れ次の二なり。生は是れ第九に相生の義親きを以ての故に、同處に辨す。復共と言ふは、是れ根欲性直心なり。此四相似して俱に是れ法器の故に。名けて共と爲す。染とは是れ使心なり。煩惱染淨等とは是れ習行、習は別體無きを以て、染淨の殘氣に依るが故に彼を擧げ、定不定等に依りて三聚の難を擧ぐ。二に別して相似の義を釋するに、根等次第と言ふは、依根起信等を明すが故に、次第と云ふなり。何が故に起に依る。相似を以ての故に。云何が相似するや。謂はく、宿習を根と爲し、根に依りて欲を起すに欲は必ず根に似たり。論經に信と名くるは、謂はく、深忍樂欲の意、此と同じ。欲を習うて性と成れば、性も亦欲に似たり、性に依りて現行の直心を起すに、心又性に似たり。但

【三に名義云云】

論第十一の文に、  
「一體とは衆多の義の故に、離知の義の故に」といふを指す。

【行者云云】 行の字を釋するなり。

【第二に云云】 以下、次第に廣釋するに十一あり。初に心識。

【四】 生住異滅の體。

【自性：等】 樂覺の文。

し前後不定の時に依るが故に。此の如く次第差別有り。三に名義を解釋す。衆多は林を釋し、離知は體を釋す。此二俱の句の故に體と云ふなり。行者不正信義とは、遠師の釋に云はく、「理に於て證信し、能く心想を滅す、心想滅するが故に一切行せす、證信無きに由りて、心等集起するが故に名けて行と爲す」と。

第二に知衆生諸心の下は、別して十一門を釋するに、即ち十一段と爲す。初に心體の中に三あり、先の一句は總、次の九句は別なり。【六】に釋して八と爲す。謂はく、前の七は各各一なり、後の二を一と爲す。遠の云はく、「八の中に初の四は妄心、後の四は真心なり。妄の中に、一は事に約し、二は相、三は體、四は用なり」と。初に莊飾世心と言ふは、心

八識心を以て能く世を莊るなり。【六】に「心意識六種の差別と名く」とは、心は謂はく頓耶、意は是れ末那、識は即ち六識なり。心意各一なるを以て、識の中に六を具するが故に六種なり。八識は同じからざるが故に差別と名く。差別の同處を亦雜相と名く。二に速轉

等とは是れ心上の行相、即ち四相遷流す。謂はく、速轉は是れ住異、不停を以ての故に、境不壞は是れ生滅なり。三に無影とは是れ心の體性なり、謂はく、彼心を觀じて、心相泯

するが故に名けて離心と爲す、下は釋なり、心身不可得なるを以ての故に離と名く。問ふ

「第一義は既に是れ心に非ず、何が故に此に説くや、各各、眞性は縁に隨ひて此心を起すを以ての故に。自性清淨心は不染にして染、染心を成就す一等と云ふが如し。四に無邊等とは、自相は行に順じて無量境界取の故に。謂はく、樂縁の用は是れ心の自相、境に隨



【在染不染】眞如  
染の煩惱中に在  
りて汚されざるを  
いふ。  
【八に云ふ】經  
の詔曲質直の心相  
を釋するに、論文  
を以てす。

【第二に云云】以  
下第二に煩惱行欄  
林を明す文を釋す

【初の中に心伴云】  
心伴とは初起  
の相、不相離とは  
起り已て相續する  
に約し共に能所縛  
を兼ね。

ひて一に非ざるが故に、無邊と云ふ。下は眞心を明す。五に清淨とは、自性不染の故に、此本性清淨なり。六に垢無垢とは煩惱に同じ、煩惱に同ぜず、在染不染を明す。七に縛解とは使に同ずれば縁縛なり、性離を解と名く。下の二に因相と名くるは、謂はく、願力業力、受報心を引く。八に諸の菩薩は願力を以て受生し、幻起は實ならずして、詔曲に似同す、然も實に益を成するが故に質直と云ふ。九に餘の衆生等は業に隨ひて受生するが故に、隨道と云ふなり。一論に重ねて分別する中に、自性清淨心を以ての故に、第六第七一等と言ふは、六七の二句の染淨の所由を釋す。謂はく、若し第五の性淨心無くんば、則ち六七の二句は唯垢唯縛にして、不垢不縛無し。又此二句の中の染縛煩惱に由るが故に、後の句の中に、道に隨ひて生を受くることを示す。

第二に菩薩知煩惱の下は、煩惱行欄林を明す、中に於て先に別して顯し、後に總じて結す。別の中の十句は一論に攝して三と爲す。謂はく、初の二は各各一なり、後の八を一と爲す故なり。初に深相とは逆入乃至有頂の故に。若し小乗の中には非非想を頂と爲し若し大乘の中には金剛定に至る。二に淺相とは論經に行無邊相と名く、謂はく、無量の善根修集するの時、煩惱の隨行知るべきこと難きが故に。三に染の中に八句有り、三と爲す。初の三は煩惱染を明し、次の二は生に約して煩惱を顯し、後の三は業に約して煩惱を明す。初の中に心の伴相と不相離の相と言ふは、是れ所隨に隨ふの義なり、迭共同事とは共生の義を釋す、心伴是れなり。謂はく、心王と惑とは互相に扶起するなり。迭共相依とは不相

【是れ所縛云云】以下十地論第十一に「是中隨所縛とは一等というて、共生不離の故にといふを釋す。」

【八萬四千】釋に異説あるも今は實劫經の一説を叙す

離の義を釋す。謂はく、起り已れば互に依りて相離せず、共生不離とは經を擧げて雙べ結す。二に使縛の差別と言ふは是なり、以何が縛、謂はく使なり。使有るを以ての故に、解脱するを得ず、故に使を説いて能縛の體と爲す。謂はく、十使は十縛の故に差別と云ふ。煩惱と使と一義と言ふは、經を擧げて會釋す。謂はく、此は煩惱を辨ず、「何が故に使と説くや。」是れ一義なるを以ての故に。『若し是れ一義ならば、何が故に下の文に別に使行を明すや。』但し此十使に繫縛の義有るは、此門に屬して收む。隨逐の義有るは後の門に屬して攝む。此經本の中に使縛を分出するも、俱に是れ能縛なり。三に是心相應等と言ふは、是れ所縛の事なり、謂はく、心とは所縛の體を出し、心相應等は經を擧げて對顯し、重ねて不相應を釋す。示可得解脱とは、在纏の心性位に本淨なるを以ての故に、此纏をして解脱すること有るべからしむ。次に隨道生等の二句は、生に約して煩惱を明す。『論』に身事生道界因と言ふは、此煩惱は六道三界の生身の事が與に所因と爲ることを明すが故に。生煩惱染示とは結するなり、此は生に就いて煩惱を明すが故に。後に愛癡の下の三句は染業に約して惱を明す。三分の中に業因解脱を障ふとは、愛癡及び見是を三分と爲す、愛は是れ欲求、癡は是れ有求、見は是れ有邪なり。見行俱に解脱を障ふるを、釋に太過と爲す。隨順世間身口意業不斷起因と言ふは、憍慢と愚癡とを以て重き罪業を造るに、煩惱は是れ三業の罪因なることを明す。不斷を以ての故に。乃至の下は總結なり。八萬四千とけ「實劫經」の説に準するに、佛の一代に三百五十度の功德の法門有り。謂はく、始光曜

【第三に云云】以下第三に業行欄林を明す文を釋す。經の「是菩薩は諸業の善」等の下。

【四に：次第と云ふ】以下、自然盡相、行道盡相、種種相を釋す。

無極度従り、終分布舍利度に至るまで、一一に各六度を以て因と爲す、便ち二千一百有り、此を以て四大六衰の十種の惱患を對治す、即ち二萬一千を成す。四大は是れ内報の身、六衰は是れ外の六塵なり、善法を衰耗するが故に名く。此二萬一千を以て各四種の衆生を化す。一は多食、二は多眠、三は多癡、四は等分なり。即ち八萬四千の諸度法門を成す。能障の結は即ち是れ八萬四千の煩惱なり、業も亦爾り、下は並に之に準ぜよ。

第三に、是菩薩知業の下は、業行欄林を明す中に、亦先に別、後に結なり。別の中に十句あり。初に善等とは、業能く六道の因と爲ることを明す。故に謂はく、善の上とは天の因、中とは人の因、下は是れ修羅なり。惡の中の三品は三惡道の因なり、無記は因に非ざれども、相對の故に説く。又亦名言に業の義有ることを得。二に分別等とは自性の差別にして、思を自性と爲す。然るに三種有るが故に差別と名く。謂はく、審慮思と決定思と、此二は意地に在りて、未だ身語に至らざるを籌量時と名く、未作の故に分別すべからず。發動思の正しく身語に在るを、作業時と名け、善惡の業の成するを可分別と名く。三に心伴等とは方便差別なり。謂はく、此業思は意識の主と共に在るを、名けて心伴と爲す。其善惡に隨ひて生じ已りて、即ち本識に薰じて種を成す、種は能薰に似るが故に別して果を生ぜずと云ふ、此は不離を釋するなり。四に自然等とは盡集果差別。謂はく、無始の時業は自然に念念に滅壞す。然るに果を集めて失はざるが故に。有爲作業と言ふは自然滅を釋す、是れ有爲は必ず無常なるを以ての故に。因盡集とは功能不亡を顯し、集果の次第

【行道滅引く】修行の道力一分之を滅するも、餘殘を則ち引果の業なるをいふ。  
【五に有報云】五に有報相 無報相。

【俱舍の第十七】現行の本は十六初右。

を釋す。此れ念念に滅して全く能く果を引くなり。行道滅も亦分に果を引く、重を轉じて輕と爲す等の如し、此の如く、非一の故に種種相次第と云ふなり。五に有報等とは已受の果と未受の果の差別なり。謂はく、過去の生報の業を、現在に已に受くるを、名けて有報と爲し、過去の後報の業、現在に未だ受けざるを、名けて無報と爲せども、全無と謂ふには非ず。六に黒黒等とは對の差別なり。謂はく、四業相對して其差別を顯す。謂はく、初の二句は善惡相對、後の二句は漏無漏の相對なり。故に、「俱舍」の第十七に云はく、「諸の不善の業を一向に黒と名く、染汚の性なるが故に。異熟も亦是黒なり、不可意なるが故に。色界の善業を一向に白と名く、惡を雜へざるが故に。異熟も亦白なり、是れ可意なるが故に」と。無色界には中有生有の二報を具せざるを以て、亦身等の三業無きが故に説かず。欲界の善業を黑白と名く、惡の雜はる所なるが故に。異熟も亦黑白なり。非愛の果雜はるが故に」と。諸の無漏業を非黑白と名くることは、廣くは彼に説くが如し。能盡業相と言ふは是れ無漏の業なり。業起とは起ること縁に頼るが故に。受業法とは能く果を納るるが故に、論經に名けて正受と爲す。七に無量等とは是れ因縁差別なり、謂はく、多の因縁に隨ひて皆能く業を起す。八に世間業とは未集已集の差別なり。謂はく、出世は未集、世業は已集なり。九に現報等とは三時の定不定を明すが故に、現在に現受するを名けて現報と爲し、次の來生受を名けて生報と爲し、第二の生已後に於て受くる者を名けて後報と爲す。此三の中に於て定不定有り。十は諸乘等に隨ふに、三種の乘の中に定不定有り。謂



【第四に云云】以下、第四に根行欄林を明す文を釋す經の「是菩薩は諸性の滿中上」等の下。

【俱舍】 第三の三左の文。  
【増上の用有り】 貪等をして曠野せしむる用あり。

はく、退不退なり。非乘の世間の中に、度し易く度し難きを定不定と爲す、故に論議に「乘非乘に於て各各定不定業有り」と、知んぬべし。下は結なり、八萬等は知んぬべし。

第四に「是菩薩知諸根の下は、根行欄林を明す中に、一に頼中上とは是れ諸器の故に、謂

はく、是れ説法所授の器なり。亦是れ鈍根、中根、利根と名く。謂はく、遠受を利と名く、

遠受は是れ鈍、中容は是れ中なり。又深を受くるを利と名け、淺を受くるを鈍と名く、中

容は知んぬべし。又廣受、小受、中受も亦同り、各各教理に通ずること、之に準て見つ

べし。二に先後熟等とは根力の差別なり、前後根とは先後際を解するなり。前根下増平故

とは別異不別異を言す、謂はく、前は是れ前生、後は是れ所生なり。廣生普し増せば、前

の根は則ち下なり、廣生若し下なれば、前根は則ち増す、由似して則ち平なり。三に上中

下とは性の差別なり、謂はく、三乗の性別なり。上とは大乘なり、中とは是れ中乘なり、

下とは是れ小乘なり。四に煩惱伴とは煩惱染の差別なり、謂はく、善惡等の五受根、煩惱

の習使に隨ひて生ずるが故に、煩惱伴不相離と云ふなり。一重舍の第三に云はく、其染の

中に於て、善惡の五受に増上の用有り。所以は何んとなれば、一重舍に「廣受に於て廣受

増し、善惡に於て廣受増し、不善不善受に於て無明隨智すと云くに由るが故に」と云

て云はく、増上の用は是れ根の義なり。五に隨諸業等とは定不定の差別なり。其三業中於

世間中とは、此は乘非乘を解するなり。定不定、熟不熟とは結して釋す。謂はく、大乘の

中に熟とは定、不熟とは不定なり。小乘の中の熟は不定なり、解して大いに向ふが故に、三

【順行】有爲に隨順して旋流する行の意。

【相轉】論に相縛に作る。

【二に生滅】壞の故に有爲法の當體、生住久しからずして内外の根を轉ぜしむ。

【深取相】六根の六塵の境を取るをいふ。

【第五に釋せず】以下、論に根に例して、略して信性心を明す、經も亦欲性直心を共に略す。【第八に云云】以下第八に使行欄林を明す文を釋す。

乘の中に於て各定とは、各定とは各自自乘の中に於て解脱するが故に一一乘等と云ふなり。報定者捨とは、世間の中に於て、定は化して道に入らしむべからず、故に置捨するなり、此は初教大乘に約す、五性の別を許すが故に是説を作す。六に隨根轉等とは、順行の差別に三種の順行有り。一に依身順行とは、根法、六入の身に依りて迭に共に相轉ず。六入展轉の故にとは、此は隨根轉を釋するなり。二に生滅順行、輕壞の故にとは、此は易壞を釋するなり。三に觀行取相とは深取相を釋す。七に増上等とは一聲聞淨の差別、行増上なる、障の滅すること、能成する義の故に」とは、凡に望めて行増と爲す、此は初の句を釋し、次に斷障の行成じて不可壞なるを釋す。八に轉不轉とは菩薩淨の差別なり、地前を轉と名け、地上は轉ぜず。又前七地を轉と名け、八地已上を名けて不轉と爲す。九に三世等とは一切の根攝差別を示すなり。初行を始と名く、正修は方便なり。終成を熟と名く、此は三時に約して根の差別を辨す。謂はく、根と行と俱なるを名けて共生と爲す、行に始終有るを以て、根も亦隨つて爾なり。下は和合なり、知んぬべし。第五に欲、六に性、七に直心に各各軟中上あり。【論】に如是性入と云ふは廣く説かざる所由を釋す。根等の四法は、性相順入するを以ての故に廣く釋せず。

第八に知諸使の下は、使行欄林を明す。使とは隨逐して縛するの義、喻に従つて使と名く。公使の、賊を逐うて、繫縛せしむることを得るが如し、煩惱も亦爾なり。衆生に隨逐して繫縛せしむることを得。十句の中に、初の四句は何處に隨逐し、後の六句は何を以て

【論釋】：故に】本  
文に達人相とある  
を指す。

【下は云云】十地  
論文の六種隨逐を  
引釋す。

隨逐するやを明す。前の中に四處に隨逐す。一は心に約して處を明す。謂はく、非假心と共に生じ、假心と共に生ぜず。二は界に約して處を明す。欲界は下、色は中、無色は上なり。當界に心を起すを心相應と名け、異界相應すれば即ち不相應なり。使は即ち爾らず、一切に相應するが故に不相應と云ふなり。論經に隨入すること有るが故にとは、彼に約して處を明す。乃至有頂とは前に此門を欠きたり。三に時に約して處を明す。無始來佛來生と言ふは、無邊の世界唯智悟異すること怨敵の如し、未だ曾て思惟の智有らざるを以て、是故に滅せずして、恆に衆生を憫す。四に行に約して處を明す。禪等相違とは、世間の禪等は心に隨順するの行を滅すること能はず、若し世の此禪等の諸徳に隨ふこと無ければ、即ち出世を成じ、夜出世の正徳と相應すれば出づることを得しめず。下は以何隨逐を明すに六種の隨逐有り。一に有不斷は是れ無なり。有斷せざるを以て常といふは譯なり。謂はく、使有るを以ての故に、無く三有をして俱相積せしむるが故に、三有變と云ふなり。此は前の處に約して以て隨逐を明す。二に遠時隨逐とは、無始より來使隨逐するに由るが故に、無量の善心をして現前することを得ざらむ、故に無量心等と云ふなり。三は一身の生に隨逐すとは是は標なり。謂はく、今の一身に就いて現體隨逐を明すに下は無なり、眼等の諸入門とは是れ六根なり。六根生取處とは是れ根に依りて生ずる所の六處なり。同生隨逐とは、使の、根識に於て俱生隨逐することを明す。此是現行及阿黎耶識とは、此は本識を兼じて種子隨逐し、種現相資けて、煩惱をして滋茂ならしむることを明すが故に、開

煩惱門と云ふなり。論經に聞諸入門とは六入等の起惑の處に約するなり。四に不實隨逐とは、實の對治を得ざるが故に、不知對治と云ふ。五に微細隨逐の下は微細の相を釋す。謂はく、三界九地の中に於て、六入處の煩惱の身に隨逐の故に。徒微細にして見るべからざるを以ての故に無所有と名く、塵中の油の現見すべからざるが如し。論經に隨隨とは是れ有を明すなり。不隨隨とは、共に是れ細にして此無所有に同ずることを明す。六に苦の隨逐を離するとは、出世間の行、餘行は離ること能はざるが故に、無樂道等と云ふ。

【第九に云云】以下第九に生行稠林を明す文を釋す。

第九に是菩薩の下は生行稠林を知る。中に於て八句あり、一に身種種とは形類不同を明す、故に生差別と云ふ。二に業異なるに由りて生別なり。經に此句無し。三に住處種種には、六道の不同を明すが故に、地獄等と云ふなり。四に色想上下種種とは、三界の不同を明すが故に、色無色界等と云ふ。問ふに既に是れ無色なり、何が故に色の上下と言ふや。答ふに大乘に依るに、無色界の中に微細の色有り、是れ色の中の上なり。想の中の上も亦爾なり、外道は無想に實に細想有りと行す。五に外色に同ずる因種種には、草木は地等に依りて生ずるに類同ずることを明すが故に業是山等と云ふ。六に自相種種とは、謂はく、名色は本識に共じて生ず、是れ依の自體の故に名色共等と云ふ。七に木として生に對する

【由】田の字正し

の因種種とは、若し正くは應に木に對する生の因と言ふべし。癡愛從り生じ、還りて彼に對するが故に、癡愛等と云ふ。八に苦諦を集むる種種の差別とは、現生に離く未來の苦を

【八に云云】初に徳目を述し、後に欲生の下は、支相を釋す。

集め、三求の業生、苦を集むること同じからざるを、種種別と名く。欲生と言ふは復有業



【第十に云云】以下、第十に習氣行稠林を明す文を釋す。

の衆生、自身他身を愛するの心相に著し、上下界に往來して取著するが故に。解して云はく、此は是れ有求の衆生の、自界を愛するは是れ自身なり、他界を愛するは是れ他身なり、著相に由るが故に、上下界に於て往來するの故なり。欲作欲愛とは、論經に欲愛者と名く、樂食の取に共じて、處處に求むるが故に。此は是れ欲求の衆生、食及び取を以て處處に追求するが故なり。不樂等とは是れ邪梵行求の衆生なり、小大無量とは三界を釋す。無想は是れ別して無想天を擧ぐ、外道彼を取りて涅槃と爲すを以ての故に。輪轉は相續を釋す、理實には輪轉するを妄に出想と爲すが故なり。

第十に菩薩の下は、習氣行稠林を知る。中に十有り。初の一は是れ因習氣なり。謂はく、過去の所作なる善惡等の業、彼習氣と今の現果と、或は同じく現起し、或は同じく起らざるが故に有起不起と云ふ。二は是れ果習氣なり、道とは謂はく六道なり、是れ彼習を薰ず、天従り來れば今猶鮮淨なる等の如し、廣く道習を説くことは「大威燈光仙人所問經」の内如く、應に知るべし、故に隨所生等と云ふ。三は是れ緣習氣なり、衆生に親近して薰す、善人に近けば即ち善ならしむる等の如し、故に隨衆生等と云ふ。四は是れ起作習氣なり、所起の煩惱に隨ひて數數貪等を起して、即ち串習を成するが如く、所作の業に隨ひて亦習氣有り、陶師の子の、數息等を修するに堪ふるが如し、故に隨業煩惱と云ふ。五は是れ業習氣なり、謂はく、所作の善等串習有るが故に善不善等と云ふ。六は欲等の使を厭離して、串習有れども、後に斷除し易きが故に、離欲等と云ふなり。七は中陰を現に望めて

以て習氣を説く、人の現在に樂んで梵行を修するが如きは、中陰の中に至りて亦欲染無きが故に、隨後身等と云ふ。謂はく、後の中陰身の處に在りて、前の本有の習有り。八は與果次第に薰す。謂はく、一の串習に隨ひて、諸趣の中に於て次第に身をうくるに、皆彼習有るが故に次第等と云ふ。九は世間禪因薰の下は釋成す。彼禪の中に煩惱を斷ぜず、煩惱に牽るるに由るが故に上界に生じ、猶彼習有るが故に久遠等と云ふなり。此經には後の二句を欠く。一は邪正相對なり、謂はく、同法は是れ二乗の解脫なり、諸の外道佛法に同せざるを以ての故に、名けて異と爲す。彼無想を取りて以て解脫と爲す。此邪正に於て各各習氣有るが故に、名けて薰と爲す、故に有實不實と云ふ。實は是れ小乗、不實は是れ外なり。二に大小乘相對なり。謂はく、三乗の人法に於て見聞し親近すること有るに隨ひて、皆習氣有るが故に云ふなり。

【第十一に云云】  
以下、第十一に三乘行欄林を明す文を釋す。

第十一に是菩薩の下は、三乘行欄林を知る。『論』の中に五と爲す。初の一は種姓に約して以て三乘を分つ。謂はく、無涅槃法とは是れ邪定なり、有涅槃法とは是れ正定なり。正定の中に三乘各別にして一向に自定す、此二を離るるは是れ不定種姓なり。『論』に略して此を釋せざれども、『論』は初教に就いて釋すること、應に知んぬべし。二に解惡に約して以て三乘を分つ。謂はく、正見は是れ善行の因なり、三善根の中の正見の一種の、定んで善業を起すを名けて正定と爲し、無貪無瞋は定んで善業を起さざるを、名けて不定と爲す。邪見は是れ惡行の因なり。諸の煩惱の中に、邪見の一種は定んで惡業を起すを

【正性離生】唯識には聖性に作る。これ無漏智を生じて煩惱を斷ずるを聖性といふ。二乗は見道位に入りし一分の無漏智を生じて分別起の煩惱を斷じ、菩薩は煩惱を斷じて一分の聖生を得、永く異生の生を離るるをいふ。

【慧定進】六度の中、精進、禪定、智慧。

【六】自下、第四に説成經を明す文を釋す。經の一菩薩是地に一等の下。

邪定と名け、餘を不定と名く。三は行業に約して以て三聚を分つ。謂はく、五逆の中の一の逆罪は、定んで惡道を招くを、名けて邪定と爲し、信等の五根は、定んで善道を招くを名けて正定と爲し、此二に同じからざるを名けて不定と爲す。四は邪正の位に約して以て三聚を分つ。謂はく、彼八正に翻するを名けて八邪と爲す。此に因りて以て聲聞の位を立つるを名けて邪定と爲し、正性離生を名けて正位と爲す。此に因りて以て聲聞の正位を立つるを、名けて正定と爲す。五は直に大乘の菩薩の得失に約して、以て三聚を分つ。深入邪聚難轉と言ふは、論經に妬憎惡行不轉邪定相と名く。謂はく、他の己に勝るを忌み、法施を捨つるを以て、機を化すべからざるが故に名けて妬と爲し、財を慳みて施さざるが故に憎過と名く。能生他苦惡行不轉と名くるは、謂はく殺盜等なり。波羅蜜相違とは、此中に六蔽は六度の行を障ふるが故に相違と名く。謂はく、妬は後の三慧定進を障ふ、憎は施行を障へ、惡行は戒忍の二行を障ふ。此障に由るが故に、諸の菩薩の正行をして成就せざらしむるを邪定と爲す。正定と不定とは準釋して知んぬべし。佛子の下は通じて前の三種成就を結すること知んぬべし。

【二六】第四に、菩薩住是地の下は説成就を明す、中に於て先は總、後は別はり、總の中に衆生の諸行を知るとは、入行して法器を知るを牒す。隨其解脫等とは、正しく根に稱ひ、法を説いて、解脫を得しむることを明す。是菩薩化の下は別して説成を明す、文に四段有り、義に三重有り。一は此初段を盡すまで、是れ智成就なり。二は爲大法師の下的一段は亦智



【初段の中云云】  
別釋するに四、今  
初に智成就を明す  
文を釋す。論に一所  
知に隨ひ、所依に  
隨ふ一等といふを  
引釋す。

【七】二に亦智成  
就亦口業成を明す  
文を釋す。

成亦口業成、三に用無量慧の下は唯口業成、四に得陀羅尼の下は是れ法師成就なり。初段の中にも有り、先に隨所知を明さば、是れ所説の法なり、二に隨所依とは是れ所返の器なり。前の中に化衆生法とは解脫の器、熟することを得ることを説くが故に。謂はく、化法を説き、諸の衆生をして、解脫の器を熟せしむ。度衆生法とは解脫の體は正度の故に。謂はく、正しく其をして解脫の果を得しむ。然るに此所得解脫の差別、三乗を出でざるが故に、如實知而爲説等と云ふ。二に如實隨衆生の下は隨所依を明す中に、先に總じて隨器の説法を明し、二に隨心の下は別して辨するなり。説法對器とは隨心を解す。隨應度者授對治法とは、論經の隨使を解す。謂はく、使に隨ひて對治するが故に。上の二句は是れ化法の器なり。所説法器成と言ふは度法の器を明し、隨根等を解す、器成じて法を説くを以ての故に。隨行處と言ふは心所行の境界の處に隨ふなり。即ち彼喩を以て其をして解を生ぜしむるを、名けて彼器と爲す。隨智慧處と言ふは、前の生解に依りて、爲に種種の異行を起さしむるを、名けて彼器と爲す。知一切行等と言ふ二句は、乃至法器を成就することを得、依行成徳の器を明す。隨趣等と言ふは辭辯の器に隨ふ。謂はく、生業と煩惱と久習は除き難きを、勝辯をもて教化して方に捨離せしむるが故に、生等を名けて辭辯の器と爲す。薰は習氣を解し、同行は轉を解す。此中に略して定等の三聚無し。隨乘等と言ふは、論經の信は是れ三乗の因なり、能く乘じて器を出すが故なり。

第二に是菩薩住此地の下は亦智成就亦口業成を明す。是故に『論』の中に、先に口業を



【二〇】第三に口業成就を明す文を釋す。

【廣く十門云云】

十門とは、自相、同相、行相、說相、智相、無我慢相、大小乘相、菩薩地相、如來地相、住持相なり。【智方便】智の字現行本に慧に作る

微問し、結して智成と云ふ。前に從へば智と爲す、說儀を知るが故に。後に從へば口業に二十種の法師の徳を具するが故に。『論』の中の說とは、是れ其口業に入深の義を明すなり。持とは是れ智成なり、守護の法を顯すなり。其二十種の法師の事は、『論』に具に説くが如し、應に知んぬべし。

第三に、用無量の下は正しく口業成就を明す。中に於て二有り。先に略して四無礙智は能く口言を起すことを明し、後に廣く十門を以て次第に分別す。前の中に、智方便を用ひ」とは、前を牒して後を起す。各各前の所説を智方便と爲し、彼を用て此無礙智を起す。下は四無礙智に依つて言辭を起して法を説き、所得無礙にして慳くも聞動すること無きを明すが故に、不壞と云ふ。四無礙の義廣くは別章の如し。但し無礙解の體は是れ後得智なり。所縁の境に就いて、分つて四種と爲す。一に法體とは法の自體を明す。二に法境界の體とは、法體の上に於て差別の義有り。三に正しく得て衆生に與ふとは、自の所得に依りて衆生に説與す。四に正しく求むるに無量の門を與ふとは、諸の衆生の正しく求むる差別に隨ひて、無量の門を與ふるなり。下は重ねて釋する中に、初は法無礙を釋する中に遠離二邊生法所攝とは、餘法を遮するが故に二邊を離ると名け、自體を表すが故に生法攝と名く。女色處相とは、例を擧げて顯示し、餘の一切を等す。二に義無礙を釋する中に、彼遠離等とは前の法を牒擧し、如實智の下は法に就いて境を辨す。菩薩、彼に住すとは、人に約して境を辨す。如色の下は亦類を擧げて虚妄分別を顯し、正しく差別の義を顯す。若し

【自下は廣く云云】次に廣く十門を釋す。

【下は云云】後に別して十門を釋す。初に自相。

小乘ならば色に苦無常等の義有ることを説く、今は大乘に約して、此色法は但し是れ妄情なり、理實には本より是色の義無きことを説く。三に辭を釋する中に、隨他所喜言説正知とは、謂はく、他の所樂を知るの言を解して正知するを釋するなり、隨他等は與を釋す。四に樂説を釋する中に、先に前の詞を牒舉し、無量の下は辯樂説に約す、無量種極善語とは是れ詞の中の差別なり、無量の門を釋するなり。隨知の下は與を釋す。新には辯無礙解と名く。謂はく、明辯をもて巧に説いて、他をして樂を生ぜしむるを、亦樂説と名く。自下は廣く釋する中に、理實に此四は一切の法に於て、説に隨ひて皆具す。今圓の數に依りて且く十門を列ぬ。中に於て、初の五は汎く理教を知り、後の五は三乘の淨徳を知る。前の中に初の四は、正しく所知に就いて無礙を明し、後の一は能知の智に約す。前の中に初の三は義を知り、後の一は教を知る。前の中に一は事法を知るに約す、事法の緣別にして各任して難へざるを名けて自相と爲す。二に理法を知る、理法遍く通ずるを名けて同相と爲す、此二は當相に法を明す。三は時に約して法を辨ず。謂はく、三世遷流するが故に行相と名く。四は機に對して教を宣ぶるを、名けて説相と爲す。五は能知の智に約して四無礙を分つ、是れ智を知るに非ざるが故に、名けて智相と爲す。後の五の中に、初の一は總じて三乘の離相淨證を知るを無我慢と名く。後の四は別の中に、一は通じて小大を知り、餘の三は別して大乘の菩薩地を知る。初の一は因を知り、後の二は果を知る。一は體、二は用なること知んぬべし。下は次第に釋する中、此十章を釋するに即ち十段と爲す。初

【第二に云云】二に同相を明す文を釋す。論に同相に四種を明す。即ち一切法同相、一切有爲法同相、一切假名同相、假名同相。

【前簡】 一字剩字ならん。

【前の假名の法】 一切有爲法。

【餘の假名】 言證の假名。

の自相の中に就いて、法義は是れ總別の一對なり。緣生の法に於て總じては自相を知り、別しては差別を知る。詞及び樂説は廣略の一對なり、少名をもて法を顯すを、之を名けて詞と爲し、衆多の異名をもて彼義を堅固にして、他をして愛樂せしむるを、名けて樂説と爲す。想堅と言ふは、想は是れ起言の所依なり。是故に餘の論の中に、或は想と云ひ或は聲と云ひ、或は名と云ひ、或は字と云ひ、或は施設と云ふは、皆是れ名の異號なり。名言を以て義を顯し、義をして堅固ならしむるが故に想堅と名け、想堅多種なるを想の差別と名く。重ねて釋する中に、不壞は辭を牒し隨所覺とは自解を明す。隨彼等とは機に應じて説を顯すなり。次第不斷とは不息と名く、是れ常に説くなり。無量衆多等は、一一の法に於て能く無量の異名を以て廣く説くなり。爲堅彼義とは、謂はく、異名を以て多く説き、意本義を成するが故に堅固ならしむ。第二に復次の下は同相を明す、中に於て法義は二諦に約して分ち、後の二は亦廣略に約して分つ。初に一切法とは同一無性なり、二に有爲法同とは無常相、三に假名同とは、法は同じく無名なるも、俱に假に説を以てなり。四に假名假名同とは、復假名を以て更に重ねて之を顯す。下は重ねて分別するに、無常入無我とは義を釋して法に順ず。謂はく、無常を觀じて即ち無我を解す、是故に第二の門に初門の智境に入るなり。次に詞の文を牒す、前簡の假名の法の上に於て、復餘の假名を以て根に隨應して説く。次に不壞無邊とは樂説の文を牒す、前の假名を壞せずして能く餘の異の假名を以て説く。謂はく、異名をもて説くと雖も前の詞に準かざるが故に不壞と云ふなり。



【第三云云】三に行相。論に四種を説く、生行相、已生未生行相、物假名行相、説事行相【下は重ねて云云】以下、初に通じて三世を論ず。【過去・知る】論に「過去未來世を見て現在世を知る」といふ。

【第四に云云】四に説相。論に四種を説く、修多羅説相、彼解釋説相、隨順説相、相似説相なり。

【第五に云云】五に智相。論に四種を説く、現見智、比智、欲得方便智得智なり。

【然るに此二智云云】以下、通じて大小を辨ず。俱舍二十三、成實十六參酌すべし。

第三に復次の下は行相を明す、中に於て一念縁生の現法を了知するを法無礙と名け、已未曾當を差別の義と名く。此二法に於て名字を假説するを詞無礙と名く、即ち此を以て諸衆生の爲に彼事を宣説すと名け、名けて樂説と爲す。下は重ねて釋す中に、一一世現在故とは、通論するに過去に各現在有るが故に彼彼世間攝と云ふ。是れ則ち一一の世の中に各多門の異説有り、「過去を見て現在を知る」と言ふは、義を釋して法に順ず、如是菩薩の下は、後を結して前を成す。謂はく、後の義を以て前の法無礙智の境を成するなり。下は樂説言事の行相を釋す。不出三世とは前の所説の事を釋す。經の中の「一世とは皆三世を出です。無邊法明と言ふは異法明なり、異法明は則ち是れ聞思慧をもて法を照す故なり。第四に復次の下は説相を明す中に、教本に就いて釋し、以て法義を分つに、所隨の心に約して詞と樂説とを分つ。謂はく、物の音に隨ひて説くが故に隨順説と云ふ。謂く、心に隨ひ異説するも意義殊ならざるが故に相似説相と云ふ、餘の文は知んぬべし。第五に復次の下は智相を明す、中に於て法義は現比に約して分ち、詞及び樂説は淺深に約して分つ。初の中に法無礙智を以て法智の所知の境を知る、是れ法智即法無礙に非ず、苦智は欲界の苦を知るを以て、名けて法智と爲すが如し、上界の苦を知るを名けて比智と爲す、今此も亦爾り、義無礙を以て比智の境を知る、新論に法智、類智と名く。然るに此二智は毘曇宗に時に約して通じ處は別なり、二智並に皆通じて三世を知り、別して欲界を知るを名けて法智と爲し、別して上界を知るを名けて比智と爲す。若し成實宗は、處は通じ時は別



【第六に云云】六に無我慢相。論に四種を説く、第一義諦無我慢相、世諦無我慢相、説妙無我慢相、説上無我慢相。

【下は重ねて：智境なり】初に正しく無礙を釋す。

【一衆の下云云】無我を釋顯するなり。論に四著我(衆

なり。二智俱に三界を知り、現を知るを法と名け、過未を比智と名く。若し大乘宗は時處俱に別なり。現在の欲界を知るを名けて法智と爲し、上界及び過未を知るは、俱に是れ比智なり。詞の中に欲得方便と言ふは、世諦を説いて、第一義を得るが與の方便と作す。樂説の中に得智と言ふは、第一義を説いて正しく證得せしむるが故に。下に重ねて釋する中、初に法智を釋する内に、知諦差別とは是れ二諦の不同なり。不異方便とは是不壞方便を釋す。謂はく、不異の法と見るを名けて不壞と爲す。法智等は經を擧げて對顯す。比智を釋する中に、此の如く如實等は此の義を釋顯す、現の所知を以て餘の知法に類す。樂説を釋する中に、非顛倒異説とは、理に稱うて説くが故に。第六に、復次の下は無我慢の相を明す。中に於て眞俗の二觀は、以て法義を分つ。謂はく、眞は一相無我不壞を觀じ、俗は蘊等の差別無我を觀す。説の中に勝妙に詞と樂説とを分つ、謂はく、情に懼ふを美と稱し、理に順するを妙と名け、攝して歸趣せしむるなり。言理殊勝にして益を成ずること、轉た多きを無上と名く。下は重ねて分別して初の無礙を釋する中に、先に順釋す。謂はく、無我不壞故の下は反釋す。謂はく、己が能解を取りて名けて我知と爲し、己が能得を取りて名けて我證と爲す、是の如き等の壞するときは、則ち不取と名け不壞と爲すことを明す。陰等方便の下は、義を釋して法に順す。謂はく、陰等を觀じて以て方便と爲して眞諦の無我的法と得入するが故に。是故の下は後を結して前を成ず、故に是れ菩薩の智境なり。一聚積の下は無我を釋し顯す。謂はく、陰に迷ふが故に聚積の我を計し、界に迷ふを以ての

積著我、異因著、  
欲著、作著、對  
治するに陰等の方  
便を以てする旨を  
示す。

【第七に云云】第

七に大小乗の相。  
論に四種あり、觀  
相、性相、解脫相念  
相。此一章は專ら  
法華を引きて釋し  
暗に天台に抗す。

【第八に云云】第

八に菩薩地相。論  
に四種あり、智相、  
說相、與方便相、  
入無量門相。

【下は重ねて云云】  
論に三段あり、初  
に法無礙、次に義  
無礙、後に詞無礙  
を釋す。

故に異因の我を計し、入に迷ふを以ての故に欲著の我を計し、四諦十二緣に迷ふを以ての故に作著我を計す、此陰等を説いて四我を對治し、以て無我を顯す。『雜集論』の第一の中に、廣く蘊等所治の我を顯す云。第七に、復次の下は大小乗の相を明す。中に於て、權實に約して以て法義を分つ。謂はく、實に約すれば、同じく觀するに唯是れ一乘、權に約すれば、異性なれば三乘有り」と説くを以て、詞及び樂説は總別に約して分ち、總して三乘を説いて解脫を得せしむるを詞無礙と名け、物の心念に隨ひて、一一の乘に於て無量種に説くを、名けて樂説と爲す。下は重ねて分別す、文顯なり知んぬべし。第八に、復次の下は菩薩地の相を明す、中に於て法義は地の體相に約して分ち、詞と樂説とは同體の義をもて分つ。謂はく、地を説いて詞と名け、詞の中の差別を名けて樂説と爲す、智相は是れ地の體、說相は是れ地の相なり。謂はく、相に隨ひて十を説くが故に、巧に十地を授くるを與方便と名く。物の心樂に隨ひて、一一の地に於て無量の門を以て入らしむるが故なり。下に重ねて分別して、菩薩の行を釋す中に、法行智行示とは、此二行を以て合して菩薩の行と爲す。謂はく、法を證して行を成ずるを、名けて法行と爲す、即ち智は行を成ずるを名けて智行と爲し、此智行は能く地に入るを以ての故に、隨智行と名く。觀智說故と言ふは所由を釋す。謂はく、「何が故に智行は是れ菩薩の行なるや。」答ふ、「觀智を説くは菩薩の行なるを以ての故に。」次に義無礙を釋する中に、十地の差別有り。謂はく、心とは地の體を出す。謂はく、地の別は心に由りて説くを口言と爲す。下は詞無礙を釋する中に、不顯

【第九に云云】第九に如來地相。論に四種あり、法身相、色身相、正覺相、說相なり。

【第十に云云】第十に作住持相。論に四種あり、覺相、差別相、說相、彼無量相。

倒は不壞の説を解し、教授は隨順地道を解す。第九に復次の下は、如來地の相を明す。中に於て法義は佛の體用に約して分ち、詞樂は略廣に約して分つ。初に一念に證得するを法身の相と名け、二に時處に應現するを色身の相と名け、三には謂はく、前の二身の中の智德差別を正覺相と名け、四に物の心樂に隨ひて廣く佛德を顯す無量差別を、名けて說相と爲す。下は重ねて分別して義を釋する内に、隨何等劫成何等佛とは化時を示すなり。釋迦佛の成ずることは、賢劫に在るが如し。事を釋する中に、隨以何國と言ふは是れ成道の處なり。隨何等佛とは是れ佛身を現す。相を釋する中に、隨名所記可得見聞と言ふは、謂はく、名所記の如し。身土聲色は見聞すべきが故に。詞無礙を釋する中に、隨正覺等とは、十佛の中に最初を名けて正覺佛と爲すを以ての故に、依說と云ふ。第十に、復次の下は作住持相を明す。中に於て法義は佛の説を知るに約し、總別をもて異を分つ、前の法義を説くを詞と名け、詞の中の差別を名けて樂說と爲す。初に覺相とは是れ佛說を起して住持するの德なり。二に差別相とは是れ佛機に隨ひて現する差別の德なり。三に說相とは前の差別に依りて衆生の爲に説く。四に彼無量相とは、物の心樂異に隨ひて異說するなり。下は重ねて分別する中に、佛語とは能說の故に。力は是れ神力なり、憍慢の衆生を破するが故に。無畏は邪を降し、不共は小に異にす、悲は能く常を説き、智は說の依爲り。轉法は則ち是れ隨順して正しく説く。此上は皆是れ一切の智の攝なり。義無礙を釋する中に、隨心性とは、是れ種性の差別、根欲は知んぬべし。諸佛智行等と言ふは、樂說を釋する中



【二九】以下、説成就の第四大段に、法師成就を明す文を釋す。

【初の中云云】別釋するに四ある中初に持成就を釋す。十地論には十種陀羅尼を明す。即ち義、聞、智、放光降伏他、供養如來布施攝、取貧窮衆生、於大乘中貧劣衆生示教利益、不斷辯才、無盡樂説種種義樂説陀羅尼是なり。

に、智行と法身と名け、此行利生じて壞せざるを圓滿と名く。隨彼信等は隨信説を釋するが故なり。

第四大段に菩薩摩訶薩の下は法師成就を明す。中に於て四有り。一に持成就なり、法を纏へて心に在く。二に説成就なり、依持して説を起す。三に問答成就なり、他の惑へる疑問を菩薩善答す。四に受持成就なり、能く更に勝法を受けて、他の爲に宣説す。初の中に就いて、先に前を牒して後を起す。二に得衆義等は正しく十時を顯し、並に所起の業用に約して異を分つ。謂はく、初の三は意業を起す。一は能く義を知り、二は能く教を知り、三に智は通化を起す。次の三は身を起し、四は身より光明を放ちて、善轉の衆生をば慈光をもて攝取す。五は剛強の衆生は威力をもて伏取す、遠を示し物を伏するは是れ善巧の慧なり。六は上諸佛を供し、下貧窮を攝するが故に衆財と云ふ。下の四は口業を起す。七は大乗の中、狭劣の衆生に於て示教利益すとは、大乘の中の名聞威徳を示し、其をして劣を捨てて、趣入すること難からざらしむるが故なり。八に不斷とは常説するなり。九に無盡とは深説するなり。十に種種とは廣説するなり。下は結なり知んぬべし、自下の經文を論主釋せず。第二に是菩薩於一佛の下は説成就を明す。中に於て三有り。初に能受の多法を明し、二に是菩薩得如是の下は能く廣く法を説く。三に是菩薩處法座以一言の下は、能く説を起すこと自在なり。第三に是菩薩三千界所有衆生の下は、問答成就を明す、中に於て二あり。初に一世界の中に難を答へ、二に一切世界を明す。第四に承佛神力の下は受持



【三〇】以下、重頌を釋す。

【三一】次に第十法雲地を釋す。七門を以てすること前の如し。初に釋名

【無性の釋】攝大乘論釋第七の十九丁。  
【釋するに三義】次の如く含水、覆空、注雨の義にして、空とは眞如、龜重、法身に譬へ雲とは三義共に智慧に喩ふ。

成就を明す。中に於て二有り。先に一塵の處に於てし、後に一切の塵に類す、憶念等は知んぬべし。下は地果を明すに三果は前に同じ、文處を見るべし。

第三大段に重頌の中に四十二頌半有り、六に分つ、初の四は法師方便を頌す。二に四有り、智成就を頌す。三に十二有り、入行成就を頌す。四に十四頌半有り、説成就なり。

中に於て初の一頌半は智成就、次の三頌半は口業成就、次の九頌半は法師成就なり。中に於て初の二は持成、次の二は説成、次の半は問答、次の五は受持成なり。五に七頌有り、地果三果は知んぬべし。六に最後の二頌は深を歎じて説を結す、善慧地竟んぬ。

第十に法雲地に亦七門有り、前に同じ。初に釋名とは、釋するに三義有り。『攝大乘』に云はく、「大法の智雲は衆徳の水を合むこと、譬へば大雲の如し」とは無性釋して云は

く、「總じて一切の法を緣するの智を得るに由りて、總じて一切の契經等の法を緣じて眞如を離れず、此一切法の共相の境智は、譬へば大雲の如し。陀羅尼門三摩地門は譬へば淨水の如し。智は能く彼を藏すること、雲の水を合むが如し、能く彼勝功能を生ずること有る

が故に。」二に蔽は空の如く、龜重は猶し大雲の如し」とは無性釋して云はく、「又大雲の、虚空を覆隠するが如し。是の如く總じて一切の法を緣する智を空の廣大無邊なる如き、惑

智二障を覆隠す」と。覆隠と言ふは隔の義、障の義なり。三に充滿法身は猶し大雲の如し」とは、無性釋して云はく、「又大雲の、清冷の水を注ぎて虚空に充滿するが如し。是の如

く總じて一切の法を緣する智、無量の殊勝功德を出して、所證所依の法身を充滿す」と。

【金光明：名く】  
攝論の第三義に同  
じ。  
【眞諦云云】 二釋  
ある中、初は理智  
に約す。

【又遍云云】 以下  
理智を攝して遍覆  
を述す。正しく明  
す中、滿を加へて  
三位を成ず。  
【雲は即ち雨】 遍  
覆一切の雲は必ず  
雨となる故なり。  
【又空は云云】 以  
下、二に二身に約

「唯識論」に云はく、「大法の智雲は衆徳の水を含みて、露は空の如く、麤重は法身に充滿するが故に法雲と名く」と、此中の三義は『攝論』に同じ。『金光明』に云はく、「法身は虚空の如く、智慧は大雲の週く一切を覆ふが如し、故に法雲と名く」と。眞諦、釋して云はく、「如虚空とは三如如に譬ふるなり。虚空中に三義有り。一は容受の義なり、自性法身は生死を處へざるに譬ふ。二は無邊の義なり、法身を顯了するに譬ふ。顯了なるを得と雖も猶未だ究竟せず、空の清淨の處有り、塵霧の處有るが如し、道内の法身は惑解通ずる中道の如し、三に清淨にして塵霧無きを聖果法身に譬ふ。智慧如雲とは如如の智に譬ふるに三有り。一は道前の性得、二は道内の修得、三は道後の至得なり。又遍と言ふは性得如如の智は如如の理に遍し。滿とは修得如如の智は如如の理を滿し、覆とは至得如如の智は如如の理を覆ひ、境智相稱す。雲は即ち是れ雨なり、雨に三義有り。一は能く塵を除く、道前の自性智は清淨無染の義なり。二は能く垢を洗ふ、道内に惡業を滅除す。三は能く萌芽を生ず、道後に能く如智の萌芽を生ず。又空は法身の如く、雲は應身の如し。『莊嚴論』に云はく、「第十地の中に於て、三昧門及び陀羅尼門に由りて一切の聞薰習の因を攝し、阿梨耶識の中に遍滿す、譬へば浮雲の虚空に遍滿するが如し。能く此聞薰の智雲を以て、一の剎那に於て、一一の相に於て、一一の好に於て、毛孔に於て無量無邊の法雨を雨らし、一切所化の衆生を充足すること、能く雲の如くにして、法雨を雨らすに由るが故に、故に法雲と名く」と。『仁王經』には名けて灌頂と爲し、『十住論』には、無俾の世界に能く法

【法身及び修生の法身】性得と修生の法身。  
 【二に：故に】二に當地の來意を明す。  
 【三義】寄位と實位と約報の三をいふ。實位の一義を示し他を略す。  
 【三に：見るべし】三に所障礙を明す。

雨を雨らすを法雲地と名くといふ。「解深密」に云はく、「塵重の身は廣きこと虚空の如く、法身圓滿すること譬へば大雲の如し。皆能く遍覆するが故に法雲と名く」と。解して云はく、我法執所薰の種子無堪任の故に、名けて塵重と爲し、遍く二空無我の理を障ふるが故に、是故に經には廣如虚空と云ふ。其第十地の十種の法界法身圓滿なること、喻へば大雲の如し。法界を證するの時、法身及び修生の法身を圓滿するに由りて、空の如く廣大の塵重を覆隠するが故に法雲と名く、餘の義は下の釋名分の中に説くが如し。二に來意とは亦三義有り。一に前に彼辯才說法を得と雖も、未だ法身を圓滿し、現前すること能はざるが故に、今進んで彼をして修證圓滿せしむ、是故に來れり、餘の二門は知んぬべし。又「地論」に云はく、「九地の中に於て已に淨佛國土及び化衆生を作し、第十地の中は、修行して智覺満足せしむ、此は是れ勝の故に」と。三に所障礙とは「地論」に依るに、「諸法の中の不得自在障を離る」と。「唯識論」に云はく、「諸法の中に於て未だ自在を得ざる障なり、謂はく、所知障の中の俱生の一分は、諸法に於て自在なることを得ざらしめ、彼十地の大法地雲、及び所含藏の所起の事業を障へ、十地に入るの時、便ち能く永斷す。斯に由りて十地に二愚及び彼塵重を斷すと説く。一は大神通愚、即ち是れ此中の所起の事業を障ふ。二は悟入するに、微細なるに、秘密なるに、愚是は此中の大法智雲、及び所含藏を障ふる者なり」と。解して云はく、能く通等を障ふる所知障の一分を以て體と爲す。「金光明」に云はく、「最大の神通未だ如意なるを得ざる無明なり、微妙秘密の藏、修行未だ足らざるの



【又此地云云】二に終心の所歸を明す。【成唯識】九の三十五右。

【金光明云云】取意の文。【四に：建立す】西に所證を明す。

【等至】定の別名梵に三摩鉢底といふ。【三摩鉢底】定に入らんとする時をいふ。

無明なり」と、梁の『論』大いに同じ、又此地の終心に亦二障を離れて便ち佛果に至る。『成唯識』に云はく、「此地は法に於て自在なることを得と雖も、而も餘障有れば未だ最極と名けず、謂はく、俱生の微の所知障有り、及び任運の煩惱障の種有り、金剛喻定現在前の時、彼は皆頓に斷じて如來地に入る。斯に由りて佛地に二愚及び彼麤重を斷ずと説く。一は一切の所知の境に於て、極微細に著する愚なり。即ち是れ此中の微の所知障なり。二は極微細に礙ふる愚なり。即ち是れ此中の一切の任運の煩惱、及び所知障の種なり。故に『集論』に説かく、「菩提を得るの時、頓に煩惱及び所知障を斷じて阿羅漢を成じ、及び如來を成じて大涅槃大菩提を證するが故に」と。解して云はく、此二の微細は前の障外に過ぐるが故に餘障と名く。『金光明』に云はく、「一は一切境界に微細智礙の無明、二は未來未生の處に起らざるを得ざる無明なり」と。梁の『論』に微細礙、微細著と名くるは此に同じ、見るべし。四に所證とは業自在等の所依止の法界を證得す。世親釋して云はく、「謂はく、此法界は是れ身等の業自在の所依、及び陀羅尼門三摩地門の自在の所依なり」と。無性釋して云はく、「業自在等の依止の義とは、謂はく、所欲に隨ひて身語意業の用自在の依なる五神通を得、自作の業に隨ひて皆成辦することを得。文義持諸陀羅尼自在力を得るが故に、能く一切の佛の宣説する所の文義を持して忘ること無く、三摩地自在力を得るが故に、諸の等至に於て能く持し能く斷じ、其所欲に隨ひて、虚空藏等の諸の三摩地三摩鉢底而も能く現前す」と。『中邊論』に云はく、「欲に隨ひて種種の利樂有情の事を作す



【解して云はく云云】以下諸文を集成して四自在となす。

【五に…故に】五に所成の行を明す

【六に…如し】六に所得の果を明す

【三】以下、正しく經文を釋す。初に讀請分の釋。【首陀會天】五淨居天の異名。

が故に」と。此れ但し總説し。『唯識』に釋して云はく、「謂はく、若し此眞如を證得し已らば、  
て別に開かず。『唯識』に釋して云はく、「謂はく、若し此眞如を證得し已らば、  
普く一切の神通作業の總持定門に於て皆自在なるが故に」と。解して云はく、上の諸説に  
準ずるに、此地の中に於て四種の自在を得べし。一は五通、二は三業、三は總持、四は諸  
定なり。此地の下の文を尋ぬるに、大盡分等に更に當に會釋すべし。『唯識』に云はく、「眞  
如の性は實に差別無しと雖も、而も勝徳に就いて十種を假立す。初地の中に已に一切に達  
すと雖も、而も能證の行は未だ圓滿ならず、圓滿せしめんが爲に後後に建立す」と。五に  
所成の行とは亦三種有り。一は受位等の行を成就す。二は智波羅蜜行に當る。三は「莊嚴  
論』に依るに、「第十住の三昧門陀羅尼門は極めて清淨の故に」と。六に所得の果とは梁の  
『論』に依るに、「業自在の依止たる法界に通達して化身の果を得」と。『金光明』の第三  
卷に云はく、「十地に發心して首楞三昧を得」と。當地の行果位果は、又梁の『論』の十果  
並に所成の佛地の大果に當る、餘は悉く現得す。又『金光明』に説かく、「十地を修行  
して十總持の果を得」と、彼經に説くが如し。

(三) 第七に文を釋する中に、初に讀請の内の二十五頌を五に分つ。初の二頌は首陀會天の、  
妙供を設くることを明す。二に一頌有り、菩薩燒香の供を明す。三に二頌有り、天王眷屬  
の寶衣の供を明す。四に十八頌有り、天女の樂讚の供を明す。由に於て初の二は、總じて  
作業を明し、次の二は佛の體相普賢の徳を敷じ、次の三は佛の業用成徳の徳を敷じ、次の  
四は佛の八相廣徳の徳を敷じ、次の二は幻の喻に約して佛の廣大の徳を敷じ、次の三は佛

【二】次に正差別の釋。經の「全剛藏」等の下。

の法身平等の徳を歎じ、次の二は結勸なり、修學の下の一は天女結黙。五に末後の二は樂首正しく請すること知んぬべし。

第二に正説分の中に八分有り、一に方便満足地分とは、前の九地の所修の諸行を攝して、總じて方便と爲して此地を満す。二に得三昧分とは初住地の修行徳無量なり。此地の受職は必ず三昧に依るが故に、偏に之を擧ぐ。三に得受位分とは正住地の行なり。謂はく、勝定に依りて能く佛智を攝するが故に名く。四に入大盡分とは是れ地滿の行なり。此地を前に望むるに、已に是れ窮盡す、盡の中の極なるが故に大盡と云ふ。五に釋名分とは、此地は學窮りて徳を辨じ稱を顯す。六に神通力、無上有上分とは、地満足の已りて妙用自在なり、故に神通と曰ふ。通の用前に過ぐるを、名けて無上と爲し、仰ぎて如來に劣るを名けて有上と爲す。已下の二分は十地に通ず、但し前を以て後を攝し、此地に於て收む。七に影像とは喻を以て法を顯すこと、像に因りて質を知るが如し。八に地の利益とは説の勝益を彰す、信の趣入を勸む。

【三】以下別釋する中、初に方便満足地分の分を釋す【善擇】論文を引釋す。

【善修行】論の七種相の第一なり。

方便満足地分の中に就いて先に總じて標擧す。謂はく、無量は是れ廣智、善修は是れ深智なり。前の諸地の中に、具に此二を起すを通じて善擇と名く。謂はく、妙智をもて決擇するが故なり。【實性論】の中に「地上の善薩は二の修行を起す。一は根本智に約して如實修行と名く」とは、此善修に當れり。二は後得智に約して遍修行と名く」とは此無量智に當れり。下は別して辨ずる中に九句あり、「論」に攝して七と爲すは初の三をば一と爲す。

【不住無云云】福徳を増すが故に無爲に住せず、智慧を増すが故に有爲に住せざる意。

【初の一句云云】初の一句に前七を第二に第八地の行後四に第九地の行を示すは、今總じて前九地を集めて入地の方便とす。

【三五】二に三昧分を釋す。

【三二】正の字の誤なるべし。

善修行と名くるは、謂はく、諸地に於て皆同じく善く修證し、不住を助くること、前の八地の中の同相に似たるが故なり。謂はく、白法は是れ證なり、助道は知んぬべし。大功德等は是れ不住なり、不住無なるが故に功德を捨てず、護は是れ不捨なり、不住有なるが故に、智慧を捨てず。此三句次第に相釋す、謂はく、何の因をもて證することを得る。助を起すに由るが故に。何の因をもて助を成ずる。不住に由るが故に。下の六句は別して顯す中に、初の一句は前の七地の二利の行相を攝す、第八地の初に以て七地の差別を釋するが故に。此は總じて攝して一句に之を顯す。廣行大悲と言ふは、普遍は廣を釋し、隨順白利は行を釋し、隨順利他は大悲を釋す。二に深知分別等と言ふは、別して第八地の、佛土をして淨ならしむる行を擧ぐ。下の四句は別して第九地の中の行を擧ぐ。中に於て何の句は是れ、九地の中の自分の行なり、衆生を教化するが故に深入と云ふ、即ち是れ入行欄林等なり。下の三句は躡進の行を明す。中に於て初は解、次は行、後は證なり。入者等と言ふは、佛の所行の眞如の境法を解す。趣向等と言ふは佛果の無厭足行を求む。得至等と言ふは地盡至入なり。謂はく、十地は位窮まるを名けて地盡と爲し、行に依りて證を得るを名けて至入と爲す、此地の中に、佛智の職を受くるを以ての故に一切智位と云ふ。

【二】菩薩摩訶薩行如是の下の三昧分を明す。中に於て初に前を釋し、二後を起す、則得の下の三所得を顯す。中に於て四あり、先に別して十門を顯し、二に通じて百萬を結し、三に是菩薩の下の能入能知を明し、四に最後の名を顯す。初の内に就いて一論の中に、



【上の二利】前六  
は自利、後一は利  
他。

【満足三昧云云】  
以下、退きて能入  
能知を釋す。經の  
「悉く三昧・知る」  
といふ下。  
【云】三に受位分  
を釋す。論に、何  
等の座に隨ふ乃至  
是の如き説に隨ふ  
の六事を擧げて釋  
す。

初を擧げて後を等するが故に離垢等と云ひ、後の百萬を擧ぐるが故に眷屬と云ふ。離煩惱  
垢とは其相を釋顯す、此位の中は是れ障の盡處なるを以ての故に。不加功とは成就相應の  
故に、餘の九は是れ別なり。六七の二定は共に一垢を離るるを以ての故に、八種の垢を離  
す。一に入法界差別とは是れ入密にして垢無し。謂はく、法界深奥なるを名けて密處と爲  
す。二は行佛果に近くを莊嚴道場と名く、三は身光業用、四は口辯總持、五に意業通を  
現す、六は廣、七に深、俱に淨土を顯し、無量は廣を釋し、正觀は觀を釋す。上來は自  
德なり。八に隨一切等とは、衆生を化して垢無きは利他の德、上の二利は自分の行なり。  
九に如實知等とは是れ勝進なり、上覺を正覺無垢と名く。謂はく、將に正覺を成ぜんとす  
るに、諸佛迹に共に現前して證知す、此れ下の文の受職の處に説くが如し、一切智智無分  
別と言ふは一切智を釋す。一切智智平等受位とは智を牒して受位を釋するなり。満足三昧  
事は悉人を釋し、其體知其業用は知んぬべし。  
【云】三に三昧現在前の下は受位分を明す。中に於て六有り。一に隨何等座とは、世の王  
子の受職の時、閻浮金白象の寶座に在るが如し。菩薩も亦爾り、佛職を受くるの時、大寶  
蓮華王座に在り。二に隨何等身とは、輪王の子の玉女寶生じ、王相を具足するを得る位  
の身と爲るが如し、菩薩も亦爾り、妹妙の形受職の身爲り。三に隨何等眷屬とは、輪王  
の子の受位するの時、文武百官共に相輔弼するが如く、菩薩も是の如し、佛の職を受くる  
時、諸の大菩薩共に相圍遶す。四に隨何等相とは、王子受位するの時、衛巷を掃治し緇



幡蓋を懸け、鐘鼓振響するが如く、菩薩も是の如し、佛職を受くるの時大地振動し、惡道休息し、光を放ちて普く世界を照して嚴淨す。此を以て相と爲す。五に隨何等出處とは、世の王子の受職の時、口から敎書を出して、恩天下に及び、獄囚脱することを得。庫より出して臣に賜ふが如く、菩薩も是の如し、十處より光を放ちて、惡道より出離し、菩薩は行を増せしむ。六に隨所得位とは、世の王子の受位するの時、父王手に金鐘を執り、四海の水を盛りて太子の頂に灌ぐを、即ち灌頂輪王と名くるが如く菩薩も是の如し。十方の諸佛の白毫より放つ所の一切智光、菩薩の頂に入るを受佛位と名く。此六段の經と前の三段の文とを、論家は一處に釋し、次の二も亦一處に釋し、後の一は別に釋す。初の座の中に就いて十相有り。一に華王は是れ主相、自在なるを以ての故に。二に周圍等は是れ量相、廣大なるを以ての故に。三に象寶等は是れ勝相、具德を以ての故に。四に過於等は是れ地相、是れ生處なるを以ての故に。五に出世等は是れ因相、彼從り生ずるを以ての故に。六に知一切等は是れ成相、空慧の所成なるを以ての故に、世の華華の種積をもて成ずる所の如し。七に光明等は是れ第一義の相なり。世の華華の、心をして取著せしむるが如し。菩薩の華座は善く法界を照す。一六に照理に約し、經は照事に約すること知んばべし。八に功德相は經に此句無し、地相と相似するを以ての故に辨ぜず。又此は所生の果を明すこと、前と異れり。九に琉璃等は是れ體相、華等は是れ體の狀なるを以ての故に。十に無量光等は是れ莊嚴相、德用備るを以ての故に。二に應時の下は隨何等身を明す、身體

【三と爲す】利益業、發覺業、攝伏業。

の殊妙なることは廣く華座に稱へり。三に即時の下は隨何眷を明す、謂はく、座に處して定を得ば心に敬して日に瞻る。四に是菩薩界の下は隨何等相を明すに五相有り。一は動地、二は息苦、三は光照、四は嚴界、五は是佛等なり。五に何以故の下は隨何出處を明す。何以故と言ふは、前を徴して後を起す。六論に出光明故と言ふは、總じて出處を釋するなり。文の中に三有り。初に十處に光を放つ。二に爾時の下は光の普く照すに由りて、諸佛菩薩は咸く皆覺知す。三に即時の下は覺知するに由るが故に、下位の菩薩は俱に來りて供養す。初の中に就いて、此十の光明を「論」に攝して三と爲す。前の九種は是れ利益業なり。謂はく、初の五は凡夫を益し、次の二は二乘を益し、後の二は菩薩を益す。又八九十の此三を名けて發覺業と爲す。謂はく、第八の發覺は、初發心從り乃し九地に至るの業なり。第九の發覺は十地の菩薩、第十の發覺は一切の諸佛なり。又八九の二光を攝伏業と名く。謂はく、第八は能く攝し、能く九地已還の菩薩をして、咸く來りて供養せしむ。第九に能く伏し、能く魔宮をして隱蔽せしむ。第十の頂光の中に就いて四有り。初に十方を照し、二に光臺を成じ、三に供養を設け、四に足下に入る。初の二は知んぬべし、供養の中に就いて三有り。先に供勝を顯し、二に正しく佛を供し、三に供の益を明す。必定無上道と言ふは、「論」に二の釋有り、於地中決定義故と言ふは、此は地上の證決定に約するなり。復有異義等と言ふは、下位に約す、正定に入らしむるの益なり。謂はく、定不放逸とは惡定を離るるなり。所作之事決定心とは善定を集むるなり。入佛足下と言ふ

は遠公に三釋あり。一に教相に就く、頂光の足に入るは深く徹するを顯すが故に。二に相に約して實を顯す、菩薩の智光は佛境に證入す、下従り趣入するを入足下と名く。故に『論』に名けて平等智攝と爲す。三に實に約して以て論ずれば、菩薩自己の囚行は、成果の時に趣き、下従り證入するを入佛足と名く。第二に爾時の下は、光普く照すに由りて、一切の諸佛菩薩をして咸く知らしむ。第三に即時の下は覺知に由るが故に、所作有らしむることを明す。中に於て二あり。先に下地の菩薩此に來りて供を興す。謂はく、先に供養、後に得益なり。二に同位の菩薩の徳光相助くるも亦先に光入、後に益を明すなり。良に以みれば、菩薩内に萬徳有るが故に、胸の前に於て萬字の相現すること有り。『論』の釋は知んぬべし。第六に、爾時諸佛の下は隨所得位を明す、中に於て四有り、謂はく、法喻合結なり。初の法説の中に就いて亦四有り。一は放光、二は入頂、三は益を明し、四は位を給するなり。初の中に光に十業有り、一は益智と名く、是れ利益の業なり。二は因果業、三は照示佛力、他をして恭敬せしむるを敬業と名く。四に勸進等は勸進業と名く。五に十方等は振動業と名く、六に滅除等は止業と名く、七は降伏業、八は示現業、九は安舒業、十は神通を示す等は是れ變化の業なり。二に入頂とは事光、頂に入る、即ち是れ法光心に入れば増位するが故なり。『論』には如來の光明と名く、彼菩薩遺身智平等攝受とは、謂はく、菩薩の頂光は佛足に入る、是れ上進の故なり。佛光の菩薩の頂に入るは、下攝の故なり。因果迭に合するが故に平等と云ひ身光即智の故に智と云ふなり。三に益を明

【三七】 四に大盡分を得ず。

【四七】 重ねて如是と言ふ。論に「如是如是轉行力」といふを指す。

すこと知んぬべし。四に位を結する中に、佛境に入れば所證同じく、十力を具すれば行徳同じく、佛の數に墮すれば成人同じく、佛徳を成ずるを以て、こゝに佛の數に墮在す。始めて出家して未だ戒を受けずと雖も、即ち僧の數に墮するが如し、喻合結位は並に知んぬべし。

【四七】 第四に住法雲地如實知の下は大盡分を明す、中に於て五有り。一に智大、正覺の實智の義に依るが故に。二に解脫大、心自在の義に依るが故に。三に三昧大、發心に依りて即ち一切の事を成就する義の故に。四に陀羅尼大、一切世間に依りて、衆生を利益するの義に隨ふが故に。五に神通大、能く度衆生に堪ふるの義に依るが故に。前の二は自利なり。一に内知、二に外用なり。後の三は利他なり。一に意業起用、二に依發語業、三に身業變化なり。初の智大の中に就いて七種の大有り。一に集智大とは法緣集を知り、智力をもて疑を斷ず。二に應化智大とは、謂はく、化智の業用は身に依りて起る。三に加持智大とは、謂はく、化業住持の化用は一に非ざれば重ねて如是と言ひ、常に化して絶えざるを轉行力と名く。四に入微細智とは、此は是れ微細相容安立門にして、常に成佛を示す。八相の中に、一は一切を現するが故に微細と稱し、依彼應化等は前の三智を牒して、名けて不二と爲す。微細を顯すに依りて、一は化、二は加、三は集なり。此三智を合し、此に依りて成佛するが故に名けて作と爲すは、正しく是れ微細なり。五に密處智とは、此は是れ秘密隱顯俱成門なり。謂はく、初心の根の未熟の者を將護して、麤を現はし細を隠して、彼をし



【六に入劫智】論に命行加持捨自在に依るが故にといへり。

【初に集智大云云】別して釋するに七今は初を釋す。【諸釋】恐くは論釋か。

て怖れざらしめ、彼に依りて此微細智を説くあり。六に入劫智とは善く諸劫の互相に涉入するを解くを、入劫智と名く。時劫相續するを説いて以て命と爲し、遷流を行と名く。一切を攝するを名けて加持と曰ひ、一切に入るを、之を名けて捨と爲す。己を廢して他に隨ふを以て、名けて捨と爲すが故に。劫は心に隨ひて轉ずるを自在意と名く。七に入道智とは、諸の世法は、出世の對治の用と爲すに堪ふることを知るが故に、入道と名く。

初に集智大とは諸釋に云はく、因緣集智は應に知るべし。彼復所有の分、染或は淨或は滅に隨ふとは、此は是れ總じて釋するなり。中に於て六重有り。一に或は唯染なり。謂はく、初の五句、及び邪見は煩惱集なり。二に或は淨に準ず。謂はく、涅槃集及び聲聞等の集なり。三に或は唯滅なり。謂はく、虛空集なり。四に染淨合、謂はく、染及び有爲世間の成壞なり。五に淨滅合、謂はく、無爲及び涅槃なり。六は染淨及び滅に通ず。謂はく、法性集なり。論經に法界と名く、即ち不善法界を染と名け、善法界を淨と名け、無爲法界を滅と名く。【入明】の別釋の中に隨所有三界處と言ふは、初の三句を釋すること、知んぬべし。隨所有衆生とは次の二句を釋すること知んぬべし。隨所有染淨等心とは識集を釋すること知んぬべし。隨所有有爲無爲法無知故とは有爲無爲集を釋す。即ち有爲は有心の故に名けて知と爲し、無爲は無心なるを名けて無知と曰ふ。隨所有處虛空等とは、虛空集を釋す、是世界等の所依處なるを以ての故に。隨所說正不正法とは法界集を釋す、即ち淨法

【第二に云云】二に應化智を釋す。三世間自在を以てするは是れ一乘不共の化なり、配文して知るべし。

【第三に云云】三に加持智の下、初に境界持、後八は行持。

を正と名け、染を不正と名けて滅を等取するなり。隨所證不證、謂於涅槃とは涅槃集を釋す、聖人の所證なるを以ての故に。下は不證を明す、即ち邪見等を釋す。謂はく、何に因りてか證せざる。邪見を以ての故に。是れ誰が邪見ぞ。謂はく、餘の外道等は彼證すること能はざるが故に。隨所有器世間成壞の釋は知んぬべし。隨所有三乘彼集差別とは聲聞等を釋すること應に知んぬべし、結文は見つべし。第二に、是菩薩以如是の下は應化智を釋す。中に於て、先に別して顯し、後に總じて結す。別の中に十句あり、初の四は衆生世間自在化を明す。謂はく、衆生及び所作業を化現し、貧等を化現し及び邪見を示す。是故に「論」に云はく、「應化は煩惱染見れて作を示すが故に」と。次の一句は是れ器世間自在の化、下の五句は是れ智正覺世間自在化なり。法界と言ふは所説の法行の故に、三乘の法を化現するは、皆覺の義有り。結の中に、有心を化作するを名けて分別と爲し、非情を化現するを無分別と名く。又釋すらく、作意現化を名けて分別と爲し、任運現化を無分別と名く。此文は初の義に就いて説く、是れ法雲無功用の位なるを以てなり。第三に、是菩薩の下は加持智を明す、中に於て十あり。一は初に佛法僧は是れ境界持なり、謂はく、常に化して絶えざるを、佛力持と名く、法僧も亦爾なり。經の中には僧持を缺く、餘の八句は是れ行持なり、初の二は是れ逆行持なり、下の方便命婆羅門の如き、五熱刀山を以て萬行を任持するは、是れ業持なり。如留煩惱資成、正行を煩惱持と名く。次の五句は是れ順行持なり。謂はく、多時に行を積むを名けて時持と曰ひ、願に由りて行を起すを名けて願持と爲し、

【第四に云云】四  
に入微細智を釋す

【第五に云云】五  
に密處智を釋す。

【第六に云云】六  
に入劫智を釋す。

【第七に云云】七  
に入道智を釋す。

宿善根に由りて行をして起ることを得しむるを先世持と名け、行に依りて行を起すを名けて行持と爲す。行は三祇を經るを名けて劫持と爲し、報命に由り依つて而も能く行を起すを壽持と名く。下の一句は果持なり、「論」に云はく、「是中の智持とは一切智智の故に、此智能く一切の事を作すが故に」と。上の句は智を釋し、下の句は持を釋すること知んぬべし。第四に、是菩薩住是の下は入微細智を明す。謂はく、佛の化用微細自在なるを知る。中に於て行とは是れ下なり。中は兜率天なり、上は所行の事業なり。經の中には奮迅を缺く、餘の文は準釋して知んぬべし。第五に、又諸佛の下は密處智を明す。謂はく、佛所現の祕密の義等を知るなり。中に於て初の三業は知んぬべし。次は衆生の變化すべきの時、及び非時を籌量す。次に或は久く已に成佛する有りて受記を示與し、或は白鶴に、當に佛たることを得べきの記を見ず、是の如き等の類を受記密と名く。羅喉を愛語して調達を呵罵するが如きは是れ攝伏衆生密なり。理實には一乘なるを權に三五と説くを、諸乘差別密と名く。下は所知に就く。謂はく、根の生熟を知り、業の前後を知り、逆順の行を知りて同じく菩提を得。第六に、是菩薩の下は入劫智を明す。「論」に云はく、「是中に入とは平等解脱一切の劫迭に相入するが故に」と。謂はく、不思議解脱の法は、平等齊均にして、諸の劫海に遍さが故に、諸劫をして迭互に相入せしむ。餘の文は上の發心品等に説くに同じ。第七に、是菩薩の下は入道智を明す。中に於て、經の内に初の入凡夫道智を缺く。「論」に「凡夫地に依る」と云ふは此句を釋す。「我慢行に依る」とは微塵智を釋す。謂は

【覺觀】 新に尋伺といふ、龜思を覺細思を觀といひ共に心を妨ぐ。

【化合離】 合は今の寫誤、一化して離れしむ」といふべし。

【第二に云云】 以上集智大の釋、竟りて、次に解脫大を釋す。

く、微塵を以て色を分別するが故に、我慢を離れしむ。依信生天と言ふは國土智を釋す。謂はく、智は淨土を現すること、彼所信に過ぐ。依覺觀と言ふは衆生身心等の智を釋す。謂はく、煩惱は心を亂すを、通じて覺觀と名く、下に六句有り、之を化して合離す。謂はく、所化を知りて處に至り佛道を行じ、逆順行を示すこと思ひ難し。三乘を具にするこ

と並に知んぬべし、結文は見つべし。

第二に「是菩薩摩訶薩の下は解脫大を明す、中に於て、先に別して辨じ、後に總して釋す。別の中に十有り、初に不思議解脱とは神通境界に依る。謂はく、轉變自在なること測量し難きが故に。二に無礙とは能く無量の世界に至りて、願智無礙なるを以ての故に。此は是れ連疾自在なり。三に淨行とは一論に淨智と名く、所知の淨行に略して三門有り。一に世出世を知るは位に約して分別す。二に學無學を知るは因果に約して分別す。一に聲聞等を知るは、人に隨ひて分別す。此は是れ所知の自在なり。前の二は是れ通、此一は是れ智なり。四に普門明とは意に隨つて事を轉ずるなり。謂はく、隨衆生意は普ねく一切の色象門の中に於て、自身を示現すること觀音等の如きを、普門自在者と名くるなり。五に如來藏とは法陀羅尼なり。謂はく、所知の眞如は恆沙の如來の功德を藏積するを、如來藏總指法と名く。六に隨無礙輪とは、能く他言を破して退せざるが故に。七に入三世とは三世劫を意に隨ひて住持す、是れ入劫智なり。八に法性藏とは一切の種の因緣集智なり、此は上の集智に同じ。九に明解脫とは、光身を離れずして能く普く照す。十に勝進と

【七に云云】 七八一對は相入通智、時に約して通を明し、因緣集に約して智を明す。

【九に云云】 九十



の一對は相即に約して通智を明す。身に約して通を明し、時に約して智を明す。五に釋名分を釋す。

【初の中云云】以下別釋するに三、初に釋名する中、初に總じて念力を明す文の釋。

は一時に依りて無量の世界の諸の衆生の心を知る、總結は知んぬべし。次に三昧大、次に陀羅尼大、後に神通大は、並に知んぬべし。大盡分竟んぬ。

第五大段に、是菩薩成就の下は釋名分を明す、中に於て三有り。一は能く諸佛雲雨の

說法を受くるを法雲地と名く。二に自從願力の下は能く法雨を注ぎて、諸の衆生の煩惱

の塵炎を滅するを法雲地と名く。三に復次佛子の下は能く法雨を注ぎて物の善根を生ずる

を、法雲地と名くることを明す。初の中に、若し所受に從へば應に法雨地と名くべく、若

し能受に從へば應に法海地と名くべし。但し今は被受法の處に就いて法雲地と名く。是故

に『論』に釋すらく、「一に雲法相似せり、遍なく覆ふを以ての故に」と。此地の中に開法

相似とは、此は所聞の法の寬廣にして遍く覆ふ、是故に雲と名くること法と相似せり。

如虚空身遍覆故と言ふは能聞の法身を明す。謂はく、受雲の所は其れ唯虚空の故に、能受

の法身は空の如しと説く、若し所聞に隨へば、佛身は雲の如く說法は雨の如し、即ち所受

は雨の若く、能受は海の如し。若し所説の法に對すれば雲の遍覆するが如し、即ち所受は

雲の若く、能受は空の如し。二は塵を滅し、三は生を度す、二に顯なり知んぬべし。初

の中に就いて、先に總じて成就念力を明すと、近説受持義故とは謂はく、佛に近づきて

法を聽いて受持するの義なり。二は能於一念の下は別して受法を明す、中に於て三有り。

初に佛の所に於て多法を聽受す。二に如大海の下は、多佛の所に於て正法を聽受す。三に

問答して前の二種の分齊を明すに、前の中に就いて法喻合有り。二の釋の中に、先に總

釋して說衆多故とは、法の中の無量の法明を釋するなり。二に入如來微密處とは、合の中の微密の法雨を釋す。三に速疾とは一念の頃に能受するを釋す。此地の中に聞くこと勝るを以ての故に、能く多法を受く。所受多しと雖も、若し是は淺淺にして、解し易きの法は、受も亦奇に非ざるが故に。復密と云ふは法多密なりと雖も、若し時を積みて方に受くる事亦難からず、今明さく、一念に速疾に能持するが故に是れ勝れたり。「論」に是中無量と言ふ下は、別して前の三を釋す。初の二は是れ所聞の法、後の一は能聞の徳なり。先に所聞の法を解す。謂はく、「性の故に作の故に」とは開きて二相と爲す。謂はく、三慧の所知なるを法の自性と名け、説いて衆生に授くるが故に名けて作と爲す。別して性を釋する中に、大法明は是れ聞思の智、攝受の故に。大光照は是れ修慧の智、所攝受の故に。經に此句を欠く。云何が大法雨と作すと。大雲の、他に法雨を與ふるが如くなるが故に。下は能聞を釋す。謂はく、信を起すを受と名け、教を領するを堪と名く、是れ文持なり。義を取るを思と名く、是れ義持なり。不失を持と名くるは、前の二位に通ず。經の中に略して堪思の二句無し。第二に多佛所受の法を釋する中に、大海に亦四義有り、相顯なり知んぬべし。第三に問答して分齊を辨する中に、先は問、後は答なり。答の中に亦二有り、先に校量して所聞の廣多を示して、前の初段を顯す。二に如一佛所の下は多佛を類顯して、前の第二段を顯す。前の中に三世法藏と言ふは、「論」に釋すらく、「法界の中に於て三種の事藏有り」と。謂はく、明と照と雨とを三種と爲し、法界に蘊在するを名けて藏と爲す。第二に

【三九】以下、第六に神通力無上有上を釋す。

釋名ある中に、初に雲雷等に寄せて以て菩薩能化の徳を顯し、二に一念等は化時の促なることを明す。上に於て等く化處の廣きことを明す、餘は是れ化益勝なり。又風雲雨等は『論』の如く應に知んぬべし。第三に釋名する中に、八相現成は漸く物善を長ず、文處を見つべし。

第六に菩薩住此地の下は神通力無上有上分を明す。『論』に六種を開く。一に依内とは通じて内徳に依る、此に四種有り。是れ前の大盡分の中の五種の中の、智大と陀羅尼大とを以て合せ説くが故に四と爲す。彼は並に是れ此地の徳用なるを以ての故に、此に同じく説くなり。二に依外とは神通業用は外境に依りて起る。三に自相とは轉變の化用は是れ神通の相なり。此上の二門は、經文は是れ一なり、義を聞き釋するが故に二門と爲す。四に作位持とは常に用絶えず。五に合喜は衆の疑惱を斷ず。六に大勝とは前地に超遇す。第二に依外に就くに外事地等とは是れ所動の世界にして依報の故なり。復有外事自他身等とは、是れ後の現身等にして即ち正報なり。何が故に身等を説いて外と爲すや。釋すらく、前の解脫大等は是れ内徳なるに對するを以ての故に、此身等を説いて以て外事と爲す。三に自相に亦二種有り、一轉外事等とは土及び他身を俱に外等と名く。二は應化自身等とは、此二も亦此一段の文を攝す。初の轉外事に三有り。一に是れ同類略廣轉、二に垢淨異事轉、三に摩容世界等は是れ自在轉なり。二に一座中従り一切佛を示すは是れ應化自身等の所作自在なり。四に或於一念の下は作住持を明す。中に於て十有り。一に身口供讚。二に

八相應機。三に身を三世に現す。四に身の内に刹を容る。下の文は金剛藏は此門に依りて、用て衆疑を斷す。五に毛孔より風を出す。六に海華は佛を示す。七に身光遍照。八に口嘘は地を動す。九に廣く三災を示す。十に身と國とを相作す。佛子の下は結なり、知んぬべし。第五に爾時の下は、喜ばしむることを明す。令喜とは疑を斷するが故に。此に二種有り。一に自在神通力を示現して、以て衆疑を斷じ、二に如來の身口意に順する下は、一切の法を説くことを明す、故に衆疑を斷するを以てす。前の中に亦二あり、初の二は問答して神力無上を顯し、衆をして歡喜せしめ、後の一は問答して神力有上を明し、衆をして歡喜せしむ。前の中に亦二有り、先に問、後に答なり。前の中に亦二有り、先に大衆疑を生ず。謂はく、佛を擧げて菩薩を疑ふは、是れ佛を疑ふに非ず。後に解脱月は疑を領して請を爲す。剛藏の答の中に四有り。一は定に入りて疑を斷じ、二は定の名字を顯し、三は業用の分齊、四は廣多を類顯す。初の中に就いて亦四有り。一は法主は定に入る、二は衆身に入るを見る、三は身の内に佛を見る、四は用を攝して本に還す。第二に名を顯す中に、先に問、後に答なり。前の入定の時に已に其名を顯す、何が故に更に問ふ。釋すらく、當時は法主默然として定に入る、後に結集家取りて以て之を安ず、既に當時顯れず、故に此に問ふなり。答の中に佛國土の體性と云ふは、此三昧に入りて能く佛國を現するが故に、此定を名けて彼體性と爲す。三に問言の下は業用の分齊を明す、中に於て二有り。先に問、後に答なり。答の中に但前の如く一佛刹のみを現するに非ず、其力は乃ち能く塵



等を過ぎて現す。四に菩薩在法雲の下は廣多を類することを明す。中に於て三有り。初に所得廣多なり。謂はく、此地の所得唯一二に非ざるが故に、得如は無量等と云ふ。二に是故の下は業用の難測を明す。中に於て初に、三業は測り難し、神力は是れ前の神通大、次の觀三世は是れ三達の智、次の三昧は是れ前の三昧大、次の智力は是れ前の智大、次の遊解脫は是れ解脫大なり。變化等は是れ外事等を轉變すること知んぬべし。三に佛子の下は總じて廣多を結すること知んぬべし。

第二に解脫月言の下は、此れ佛に對して其有上を顯すことを明す。中に於て先に問、後に答なり。問の中に菩薩を擧げて佛を疑ふは、勝ることを示す。問の辭は上に同なるも疑の意は異有り、答に準じて應に如るべし。下は正しく答ふる中に三有り。初は總じて所問を呵す。一曰天下を十方界に望むるが如し、已に少と爲し竟んぬ、四天の中に於て復土を取るは、即ち是れ少中の少なり、四天下を以て互許の土に望むるに已に多と爲し竟んぬ。彼十方界を四天下に望めて、復更に多と爲す、即ち是れ多中の多なり、但し少を以て多を疑ふは、已に不可と爲す。況んや少中の少を以て多中の多に類せんと欲すること、極めて不可なり、故に汝所問者我謂如是と云ふなり。如來無量等は呵を結して反りて徴す。二に佛子の下は事に約して之を顯す。謂はく、十地の徳の中に、前に説く所の者は互許の土の如し、未だ説かざる者は四天下の土の如し。如來の功徳を十方界の土に喻ふるも、所説の地徳は尙未だ説かざる所の者に比することを得ず、焉んぞ佛果の功徳に比することを得

ん。三に我今當説の下は、佛を引いて地徳の無量を證成す、地徳無量なり。然れども佛に及ばざるの義は、謂ひ難きに在るが故に、佛を引いて證す。如十方の下は正しく菩薩の徳の、佛より劣れるを顯すこと知んぬべし。第二に佛子は菩薩隨如是智慧順如來の下は、正しく是れ調柔、攝報、願智等の果なり。調柔果の中に就きて四有り。一は調柔行を明し、二に菩薩住是地の下は教智淨を明し、三に十方佛説三世の下は法自在を得ることを明し、四に是名の下は至地相を結す。此四の中に於て、前の二段は『論』の中に名けて説法合喜と爲し、餘と及び後の二果は俱に大勝分と名く。前の中、初の調柔行の内に法喻合の三有り、知んぬべし。二に教智淨の中にも亦法喻合有り、知んぬべし。第六に大勝の中に、初に三世等は神通勝と名け、二に攝報の中に、十不可説百千世界塵數の三昧等を得るは算數勝と名く。此二種の事は一切の前地に勝るるが故に、大勝と名く。前の中に初の五句は別して顯し、後の一は五を總結す。『論』の中に攝して三と爲す。初の二は各一、後の三を一と爲すが故に三と爲すなり。一に三世智は是れ疑を斷ずるの行なり、三世に通じて出世道と爲すを以ての故に名く、道の義は應に知んぬべし。二に法界智は是れ速疾神通の行なり、如來祕密の法を説くを聞くが故に。三に下の三句は等作助行に名く、謂はく、衆生に於て平等に化する益なり。一切世界智とは淨佛國土平等と作す、衆生を化せんが爲の故に。二に普照等とは法明平等と作す、是れ教智化なり。三に大慈等とは正覺平等と作す、證智の化なり。擧要の下は總結なり、餘の文は知んぬべし。

【三〇】以下第七に地影像分を釋す。

【阿耨達】(Amvata)池の名。瞻波洲の中心、香山の南、雪山の北にあり、周圍八百里あり、周圍八百里あり、龍王と爲り潜居し、清冷水を出し、瞻波洲を潤す。

【阿伽河】(Agara)舊に恆河、恆伽河といふ。

【辛頭河】(Sindhu)舊に信度河といふ。

【悉陀河】(Sita)新に徙多といふ。

【馮叉河】(Viksha)舊に縛芻河といふ。

第七大段に、是菩薩十地次第の下は地影像分を明す、中に於て四有り。謂はく、池山海珠なり、四の功德に喩ふ。前の三は是れ阿舍の徳、後の一は是れ證徳なり。前の中に池は修行の功德に喩ふ、即ち諸地の中の起修の行なり。二に山は上勝の功德に喩ふ、即ち徳に依りて徳を成じ、徳位高く出でたり。三に海は難度能度の大果の功德に喩ふ、即ち修成の徳にして能至の大果なり、度は猶し到のごとし。四に珠は轉盡堅固の功德に喩ふ、前はく、初地從り進んで法雲に至るが故に名けて轉と爲し、位極りて轉盡くるを名けて轉盡と爲し、證理終極するを名けて堅固と爲す。初の修行功德の中に就いて法喻合有り。法喻の中に阿耨達は此に無熱惱池と名く、此龍王は瞿沙等の三種の苦無きを以ての故に。出四河とは一瞻波河に八河を出し、一阿舍河には二十河を出す、其所以有り。四河を出すとは根本二擧りて廣く、謂はく、此地は香山の頂に在りて、東面に金象口有りて恒伽河を出し、南面は銀牛の口より辛頭河を出し、西面は瑠璃の馬口より、悉陀河を出し、北面は頗利の獅子の口より馮叉河を出す。此四河各池を出でて四十里の間に各各分ちて四河と爲す。池を造ること一區して各各本方に於て大河に流入す。是故に根本の四を并せて即ち二十河と爲る。阿耨達の中に具に名字を列ねたり。如來の出世は彼山の東に在り。是故に東面の五河は人皆具に見るをもて、總じて取りて喩と爲す。餘三の本河は大磔名有り、人見ずと雖も同じく聞かざること莫きをもて、亦取りて喩と爲す。前に通じて八と

【無有】現本に而不に作る。

【第二に云云】以下、上勝功德の文を釋す。

【可梨羅山】或は羅、此に持軸と譯するものなりと。【法陀羅】新に轉地羅 (Kushira) の名。

爲す。餘の河の名は、小人は或は聞ざるが故に論ぜざるのみ。四天下に滿つとは是れ四河各一天下に流るに非ず。此は乃ち總じて是れ一閻浮提なり。何が故に乃ち名けて四天下と爲す。釋すらく、此は是れ言總意別なり。此閻浮提は是れ四天の中の一洲の攝なるを以ての故に、是故に總じて四天と言へども意は閻浮に在り。上の諸會の結通の處に、「此四天下の如く、十方も亦爾なり」等と言ふが如きは、皆是れ此類なり。合の中に四攝は利他なり、四河満足に合す。無有窮盡乃至一切智は自利を増成して大菩提を得るは、大海に入るに合す。【論】の中に依本願力修行とは、菩提心の、善根大願の水を流出するを釋す。此中に但し菩薩必具菩提心と言ふは説を待たざるが故に。以四攝作利益他行とは、彼四攝滿衆生を釋し、自善等は自利を釋すること知んぬべし。

第二に山は上勝の功德に喩ふる中に四有り。一は總じて法を擧げ、二は山の名を列ね、三は山中の物を總し、四は法を以て合す。初の中に十地因佛智有差別と言ふは、謂はく、佛智を以て所依の因と爲して、十地差別の相を起すこと、大地の増上依持に因りて、十山王有るが如し。故に『論』に云はく、「一切智増上に依りて十地を行するが故に」と。名を列ぬる中に可梨羅山とは、此山より法陀羅木を出すが故に以て名と爲す。法陀羅は此には苦鞭木と云ひ、由乾陀を此には持變山と名け、尼民陀羅を此には持邊山と名け、斫迦羅を此には輪圍山と云ふ、餘名は知んぬべし。三に如雲山の下は山中の物を、以て十地に喩ふことを顯す。中に於て一は初地の聖智妙藥に喩へ、二は二地の戒香に喩へ、三は三地の



禪定の妙寶に喩ふ。四に四地の出世は仙人に似たり。五に夜叉を以て五地の善巧自在なる  
 に喩ふ。六に菓を以て六地の因縁集觀に喩へて聲聞の果を説く。不盡とは六地の、聲聞の  
 境に超出するを以て、彼を説くこと窮盡すること無し。七に龍は七地に喩へ、亦辟支に超  
 出するを以て能く彼道を説く。八に心自在とは是れ諸の密迹神にして、自在業と名く。  
 八地の中の自在等に喩ふ。九に修羅は九地の善巧攝生の大力の相に喩ふ。十に諸天は十  
 地の満足に喩ふ。又一論の中に釋すらく、「是中の純淨の諸寶山は八種の地の曠地と善  
 清淨に喩ふるが故に」と。謂はく、十山の中に初の雪山も香山を除く、是れ土石山なる  
 を以ての故に。餘の八は皆是れ金寶の山なるが故に純淨寶と云ふ。後の八地の曠地に喩  
 ふ」とは是れ第三地の、彼淨淨を以て煩惱を斷滅すること、寶の純淨なるが如し。善  
 清淨とは是れ四地已上なり、彼無漏にして諸の煩惱を斷するを以て、寶の純淨なる  
 が如し。復次諸山と言ふ下は諸山の中の所有の諸物を指す。謂はく、淨土等も是れ衆生數、  
 藥寶等は是れ非衆生數なり。中に於て一に藥等は能く内根を資くるを受用事と名く、謂は  
 く、藥は能く病を除くを増損對治と名け、香果は身を資くるを長養事と名く。二に寶は身  
 を資けず、但貯積して以て貧乏を除くべきが故に、守護事と名く。依雪山等と言ふは其處  
 を指定す、謂はく、初の三と、及び第六となり。此四は是れ衆生數の所依に非ず。下は衆  
 生數を指す中に六種の難を治す。一に五通は福田の供なり、富を生ずるを以ての故に貧  
 難を治す。二に夜叉の威は眷屬を制す、人を害はしめざるが故に死難を治す。三に龍は時

【金剛力士】金剛神、執金剛、金剛夜叉、密迹金剛ともいひ、金剛杵を執持し佛法を護る天神をいふ。  
 【四天王】帝釋天の外將、護世四天王といふ。南は増持天、西は廣目天、北は多聞天なり。

雨を降し以て險難を治す。四に金剛力士は惡人を摧伏し、不調の難を治す。五に修羅說呪の力は其眷屬を調し、殺害を行はざるを治惡業と名く。六に須彌頂上の天帝釋等を名けて自在と爲し、須彌腹上の所有の四王を四天王と名く。彼は能く修羅の怨敵を對治す。下は集の中の不窮盡の義を釋す。謂はく、如上に説く所の事は能く一切の物を生ずるが故に、集在其中と言ふ。順行不斷不休息とは窮盡せざるの義を解す。謂はく、次第相續するを名けて順行と爲し、永く斷せざるが故に不斷と名け、覽無に非ざるが故に不息と名く。下は山は海に因りて名有ることを釋す。謂はく、山は海に因るが故に高勝なることを得、海は山に因るが故に深廣なることを得るなり。前に地に依りて説き、今は海に依りて説くことは、彼十山は斯二處に依るに由れるが故に、互に擧ぐるなり。下は法同喻を釋す。謂はく、佛智は海の如く、十地を起して高深の相顯なるに依るが故に因果相顯と云ふなり。是れ則ち一一の山の下に皆大海有ることく一一の地の内に皆佛地有り、此は是れ圓教の中の義なり、若し餘教の中には要す十地の後に方に佛地に至る、之を思準すべし。

第三に大海の十相は、難度能度の大果の功德なることを明す。中に於て先に喻、後に合にして、各總別有り。總の中に不壞と言ふは、謂はく、此十相は同一大海にして、易奪すべからざるが故に不壞と云ふ、地法も亦爾り、同一の佛智の義をもて十地に分つも易奪せざるが故なり。「論」に云はく、因果相順の故に、十地は大海の如し、一度し難きを能く度して大菩提の果を得しむるが故に」と。下は別して釋する中に、十を攝して八と爲すは、

六七を以て一と爲し、九十も亦爾るが故に八と爲る。初の三は知んぬべし、四に護功德とは、護を名けて捨と爲す、餘の一切の差別の相を捨するが故に。又釋すらく、同一味を護りて恆に失はざるが故に。不竭と言ふは、六は深、七は廣なり、水の竭すること無きを以ての故に。護世間功德と言ふは、潮は限を過ぎず、枉て物を害はず、此は九地の、機に應じて法を説くに喩ふ。水を受けて厭ふこと無く、能く百川を容納して、餘水をして世間を損壞せしめざるは、法雲地の、佛法の雨を受けて世間を利益するに喩ふ、餘の法に合する等は文の如く知んぬべし。第四に寶珠の十事を轉盡堅固功德に喩ふ。中に於て亦先は喩、後は合にして、各總別有り。『天論』の中に先に總を釋する中、十寶に過ぐることは知んぬべし。以出故取とは、此は是れ經の中の初の句なり。謂はく、出海を以ての故に、取りて以て用と爲す。放光は是れ第九、示現は是れ第十なり。中を超えて後を擧ぐるが故に乃至と云ふなり。十を攝して八と爲すことは、六と七と八とを合するを以ての故に。此八の中に初後の二句は喩に約して法を顯し、餘は但喩を釋す。初は海を出し、物を益するが故に功德と稱す、以善觀とは法を顯すなり。謂はく、初地の聖智は煩惱の海を出でて善く觀察するなり。二は體色分明、三は團圓なるは喜ぶべし、四は垢穢は斯に盡く、五は光色鮮澤なり、六は異相の莊嚴を名けて起行と爲す、三句の合釋は知んぬべし。七は放光を神力と名け、八は王に隨ひて寶を雨らすが故に護惜無し。下は法を顯すなり。己が善根を以て、一切衆生に與へ、同一善藏を合して衆生に寶物を與ふるなり。過十聖等の文は並に知んぬ

【三】以下第八に地利益分を釋す。

べし。影像分竟ぬ。

第八に、佛子は菩薩の下は地の利益分を明す、中に於て三有り。初に法の利益を顯し、二に十方を結通し、三に他方より來證す。若し論經に依らば更に第四の如來隨喜、第五に佛在の下は説究竟を結すること有り。今此經に依るに、初の中に就いて二有り。一は生信の功德、二は雨華等は是れ供養の功德なり。前の中に二、先に聞の益、後に動地なり。前の中に亦二有り、初に總じて難聞を擧げ、二に問答して益を顯す。答の中に亦二有り、先に正しく顯す。謂はく、佛を擧げて法に類し、法の聞き難きことを擧ぐ。二に何以故の下は釋成するなり。以發菩提心行菩薩道とは、是れ此法器の故に方に説聞す。是故に此聞は必ず彼法に同じく益を成すること廣大なるが故なり。動地は是れ生信の功德なり。緣生の義と爲して十八相等を釋し、及び四種の衆生等の爲なること、並に前の初會の所説の如し。餘の結通證成等、皆前の諸會に同じく知んぬべし。

【四種の衆生】不善の衆生、種種の天を信ずる衆生、我慢の衆生、呪術の衆生。

第三大段に重空の中に二有り、先に觀察等は説偈の意を明し、十種所爲の釋は前の會に同じて知んぬべし。正しく顯す中の九十頌を分ちて九と爲す。初の二十九偈は方便作満足地分を顯す。中に於て初の七偈は、總じて前の九種の地の中の善擇智を顯し、次の二は別して初地を顯し、次の二は二地を顯し、次の二は三地を顯し、次の二は四地を顯し、次の二は五地を顯し、次の二は六地を顯し、次の二は七地を顯し、次の三は八地を顯し、次の五は九地を顯す。二に欲得の下は二は三昧分を顯し、三に若前の下の十は受持分を顯し、

【前の初會】本記第二の七十二左。【三】以上正説分の釋竟りて第三段に重頌分を釋す。



四に住於是地の下の七は大盡分を頌し、五に此地の下の六は釋名分を頌し、六に大土の下の七は神通力無上有上分を頌し、七に菩薩住此の下の八は稠衆等の地果を頌し、八に爲得の下の十九は影像分を頌す。中に於て初の十一は山の喩を頌し、次の四は海の喩を頌し、次の四は珠の喩、池の喩なり。及び九地の利益等は並に略して頌せず。九に末後の二は結説の無盡を頌す。十地品竟んぬ。

華嚴經探玄記卷第十四

# 華嚴經探玄記

## 卷第十五

此卷は相海品を盡す

魏國西寺沙門法藏述す

【一】當品以下の五品は證位中の行用を明すに、初に十種の智明を説きを示す。初に當品の名を釋す。二に當品の來意を明す

【二に云云】

【三に云云】 三に當品の宗趣を明す

【趣及び爲す】 天趣の眼根を天眼といふ如し。

【餘れども云云】 以下依疑を遮して因果不二の火智を示す。

【一】當品以下の五品は證位中の行用を明すに、初に十種の智明を説きを示す。初に當品の名を釋す。二に當品の來意を明す

【二に云云】

【三に云云】 三に當品の宗趣を明す

【趣及び爲す】 天趣の眼根を天眼といふ如し。

【餘れども云云】 以下依疑を遮して因果不二の火智を示す。

【一】十明品第二十三。初に名を釋せば、謂はく、妙用自在にして委く照すを明と稱し、明用無限なるを圓に寄せて十を辨す、即ち十番數釋なり。二に來意とは、一には通じて以下の五品の來意を論ず。謂はく、前は證位成滿を顯し、自下は其勝進の行用を明す。又前は是れ位體、此は行用を辨す。又前は位内の行、此は位後の行なり。又前は本智の證滿、今は後智の大明を辨す、斯四義に由りて是故に來るなり。古人は亦等覺妙覺に配すること有り、此經の中に依るに斯義を辨ぜず、況んや前の法雲地の終心に已に等覺の義を顯すをや。二に別して此品を明す。謂はく、前の十自在の間に答ふ。別譯の『菩薩本業經』を以てせば彼經の間の中に名けて十明と爲すが故に。三に宗趣とは即ち此十明は是れ理量の二智の、明用自在無礙なるを宗と爲す。十明の義は略して三門を作る。一に名を顯すと、一は他心、二は天眼、三は宿命、四は未來際、五は天耳、六は無畏神力、七は音聲、八は色身、九は眞實、十は滅定なり。中に於て、滅定相應の受を天眼天耳と稱するは、趣及び根に従ひて名と爲す、餘は境に従ひて目と爲す。此十は皆是れ智の業用なるが故に、同じく智明と名くるなり。二に體性は同じく大智を以て性と爲す、然れども普賢性起の智に通ず。若

【實に據らば云云】  
以下、一乘の實意  
を示すに、寂用無  
礙の義を以てす、  
故に十明は即ち無  
礙智なることを知  
る。

し相に隨ひて之を分たば、前の八は是れ量智、後の二は是れ理智、實に據らば唯一の無礙  
智なり、後の二明も亦起用を礙へざるを以ての故に。前の八も亦即寂を廢せざるが故に。  
三に諸門分別の中に十有り、一は離世間品の十明と相攝すとは、彼文は所知の明了に約  
し、業用自在に約するに非ず。唯し彼第四は不可思議淨妙の音聲を出生し、無量の世界  
に普ねく聞かざること無き方便智明なり。此一は此に同じて約す、餘は並に別事なり。二  
に十通と相攝するに約せば、此中の他心、天眼、宿命、天耳は、名の如く彼十の中の四  
通を攝し、此中の無畏神力は第五の出生不可思議自在神力示現衆生智通と、及び第七の  
於一念中往詣不可記不可說世界智通を攝す。此中の色身莊嚴は、彼第六の一身示現不可思  
議世界智通と、及び第九の出生不可說不可說示現衆生智通を攝す。彼中の第八の出生  
不可思議莊嚴具莊嚴一切世界智通も亦此に入れて收む、彼は依報を嚴るに約し、此は正報  
を嚴るに約す。此中の未來際智明は亦彼天眼を攝す。彼所見なるを以ての故に。此中の音  
聲明も亦天耳を攝し、此中の最後の二明は、第十の不可說世界成阿耨菩提不可思議示現  
衆生智通を攝す、餘は單じて知んぬべし。三に「智高一」の中の三明と相攝すとは二義有り。  
一には三の所攝に非ず、彼は亦二乘の所得と爲す、此は爾らざるを以ての故に。二には縱  
ひ佛菩薩所得の三明なりとも、此十の中に於て但三に五を攝するのみ、亦盡すに非ざるが  
故に。謂はく、天眼に二を攝す、謂はく天眼及び未來際際明なり、宿命は唯一なり、漏盡  
に二を攝す、謂はく最後の二なり。「涅槃經」に依るに亦三明有り。一は諸佛明、謂はく一

【智論】 本大藏經の卷第二に在り。

【三明】 宿命、天眼、漏盡。  
【七に云云】 智度論の文を引き、二乗の所知分齊の佛に及ぼざるを別すこれ取意の文なり

切智なり。二は菩薩明、謂はく般若波羅蜜なり。三は無明明、謂はく畢竟空、此と同じからず。四は六通に約して相攝すとは亦二義有り。一は六の所攝に非ず、彼亦二乗の得と爲すを以ての故に。二に若し佛の所得は攝して盡さざるに非ず、謂はく、六の中に於て、天眼と天耳と神足と漏盡と、此四を各二に分つが故に十と爲すなり。則ち天眼は現未を見るに約して二に分つ、未來生死智明も亦是れ天眼の所見なるを以ての故に。天耳は聖教を聽聞し、及び音聲を分別するに約するが故に、分ちて二と爲す。神足は業用及び色身に約して二と爲し、漏盡は定慧に約して二と爲す。第九は是れ慧なり、餘の二は分たざるが故に、六に十を攝す。五には通明の差別は「智論」の第三に、「問うて曰はく、「神通と明とは何等の異なり有りや。」答へて曰はく、「二直に過去の宿命の事を知る、是を通と名け、過去の因縁と行業とを知る、是を明と名く」と。復次に「直に此に死し彼に生ずるを知る、是を通と名け、行業と因縁の際會して失せざるを知る、是を明と名く」と。復次に、「直に結使を盡すことを知りて、更に生不生を知らざる是を漏盡と名け、若し漏盡きて更に復生せずと知る、是を明と名く」と。六に教に約して異を顯すとば、若し小乘三乘は、並に三明六通は但分齊の差別なり、若し一乘は、十明十通は前と亦寬狹を異なりと爲す。七に所知の分齊に約せば、「智論」の第三に云はく、「此三明は二乘も亦得。但し漏ぜざる有り、謂はく、過去に於て或は一世を知り、横八萬に至るも、後を知ることを能はず、未來も亦漏り。又一念に類に四諦十五心の結使の、生じ住し滅する等の相を知ることを能は



【八に云云】以下三業に約して分別するに、初に法相に約して三業に分配し後に自體に就て但意業といふ。

【九に云云】見聞覺知の中、今は見聞智を以てす。

【十に云云】以下三一建立差別を明す。

【二】以下、正しく本文を釋す。

【三】以下、十明を別釋するに、初に善知他心明を釋す。

すして、佛に同じからず、佛は三世の衆生の漏盡を知るを以ての故に」と。解して云はく、小乘は但三明を知れども、知ること過ぎこと能はず、三乘は三明平にして遍滿して知り、一乘は十明をもて重重に遍く知ること、因陀羅網なり。謂はく、一念に九世等を攝し、一塵の内に十刹有り、餘念餘塵も皆亦是の如し。中に於て所有を皆實の如く知る。八に三業に約して分別せば、十の中に天耳及び音聲の境は、是れ語業淨、神力及び色身は是れ身業淨、餘の六は意業淨に屬す。若し自體に據らば、但是れ意業なり、悉く是れ智明なるを以ての故に。九に見等に約して分別せば、十の中の二は是れ見なり、謂はく、天眼及び未來なり。二は是れ聞なり、謂はく、天耳及び音聲なり、餘は並に是れ智なり。十に建立に約せば、三乘等の中に但所知の三世に約して以て三明を立つ。今此一乘は理實には明の用は限量無盡なり、則に依りて圓を表し、十に寄せて以て顯すが故に、唯十を説いて増せず減せず。

(二二) 間に文を釋する中に二有り、初は正しく十明を説き、後に安住の下は約數して勝を顯す。前の中に初に數を擧げ、一に辨釋し、二に數を結す。釋の中の十明を即ち十段と爲す、一一に各二有り。先には釋、後には結なり。

(二三) 初に善知他心明なり、釋の中に二有り。先に此一大千界の衆生の心を知り、一は如是等百世界の下の十方無邊世界の衆生の心を知る。前の中に先に總、二に所謂の下は別、三に如是の下は結なり。別の中に三十種の心を知るに二有り。初は行に約して心を明し、二に

【四】以下、第二に天眼明を釋す。

【念佛三昧】報得の天眼を以て佛を觀るなり、智度論七の三四、同二十九の二四、同二十四の十、四丁を見ざるべし。

【五】以下、第三に宿命明を釋す。

聲聞の下は報に約して心を明す。前の中に初の三性、心は總じて擧ぐるなり。二に廣狹とは、善心の中に於て差別を分つ。三に惡勝とは上の不善に順するを名けて惡心と爲し、此に反するを勝と爲し、無記は順流にして、此に反するを背と爲す。二に報に約する中に、菩薩は是れ廣勝心、二乘は是れ狭心、三乘は俱に背、八部は順流、三塗を惡と爲す、餘は皆見つべし。

第二に天眼明の釋の中に三有り、先に總じて擧げ、二に善惡の下は所見の境を出す。中に於て善惡等は是れ通、天龍等は是れ別なり。三に彼菩薩の下は天眼の能見を顯す中に、無礙の明淨の天眼とは、所知障盡くれば是れ報得の自在明なるを以てなり。下は見の用に於て、兼に現在の衆生の生死等を見るなり。『智論』の六度品に云はく、「菩薩の天眼に二有り、修得と報得となり、天眼を得るを以ての故に十方の佛を見、念佛三昧を得るは、是れ報得なり。五通をもて菩薩の道を行す」と。問ふ、「若し天眼は根見ならば、根は是れ障なり、障に障内の色を見て、障外の色を見ることを得ざるべし。」答ふ、「修得の天眼根を天眼通と名く、通は慧を以て體と爲すが故に障外の色を見る。」問ふ、「若し障外の色を見は、何が故に聲聞緣覺の見は遠近の不同有りや。」答ふ、「通慧に増微有るが故に、見に遠近の不同有り、微行の、一切の不至の處を吸はざるが如し。中に於て如所覆轉とは、是れ不定業なり、廻して改易する等有り、餘は竝に見つべし。」

第三に宿命明の中に二有り、先に自他の本事を憶知す。二に又憶の下は過去の諸佛の

【六】以下、第四に未來際智明を明す。

【前の中云云】「隨釋するに二段、初に正しく文段を釋するに、初に未來の衆生業報の相を知る下の釋。

【二は云云】以下未來の佛の因果を知る下の釋。經の「未來の無量無數の」等の文。

因果等の事を憶す。是れ衆生の爲に世に出でし佛なるを以ての故に。多くは八相に約して辨ぜり。此菩薩は九世の眼を得て、過去現在の法を見るを以ての故に、是故に所知に限量無し。若し爾らすんば、彼過去の法若し落謝せすんば過去に非ざるが故に。若し已に謝滅せば則ち法無きが故に。法無くして見ば眞實に非ざるが故に。若し但會て所選の事は、心中に種有りて影現前するが故に憶知すと誇くと言はば、此れ則ち但己が心の影を見て、彼法を見ず。又此れ會て不運の事は應に意知せざるべし。又亦但現在を見るは、是れ過去に非ず、何んが宿住智と名けん、餘の文は見つべし。

第四に未來際智明の中に亦二有り。先に未來衆生の業報の相を知り、二に知未來の下は未來の佛の因果の相を知る。前の中に先は總じて知り、二に知衆生業の下は別して知るに、略して十對を擧ぐ。一は業報の一對、二は所作の善不善を知る、三は善の中に就いて解脱分の善を知るを出世と名け、非解脱分の善を知るを不出世と名く。四は解脱分の中に就いて位定を得る者を定と名け、得ざる者を不定と名く。五は前の不出世善の中に就いて種姓有る者を正定と名け、種姓無き者を刑定と名く。六は有漏善に就いて有使と名け、無漏を無使と名く。七は無漏の中に就いて、果位の善根を名けて具足と爲し、因位は具せず。上の七は位に約し、知衆生の下の三は行に約す。八は初起を攝取善惡と名け、九は造修を積と名く。十の中に不積集惡は未だ必ずしも修善ならず。一は未來の佛の因果を知る中に、初は唯果の用を知り、後に悉知の下は兼ねて因行を知る。問ふ、「大乘の宗は、未來世の

【後に悉知：知る】  
網の「悉く未來の」  
等の下。

【遂】 疏に返に作  
るは善きか。

【七】 以下第五に  
大耳明を釋す。

【曉】 曉なり、煩  
惱の習氣掩翳して  
明かならざるを不  
淨といふ、今は之  
に反す。

【智障】 所知障に  
同じ、今は能知の  
智を障へて生ぜし  
めざるをいふ。

法は體用俱に無し、今云何が知るや。』答ふ、『若し方便の教に依りて釋せば、此は但彼現  
在の因種を見て、彼當來の果相差別を知るより、彼未來の法體を見ると謂ふには非ず。若  
し一乘の宗は、九世の中に於て、未來と現在とは體用俱に有なるが故に、今彼に稱うて實  
の如く知るなり。』問ふ、『未來は未だ有ならず、何んが現在と名くるや。』答ふ、『是れ現  
在の現在には非ざるが故に、現在の中に無し。但し是れ未來の現在なるが故に、未來の中  
に有り。』問ふ、『此有は是れ緣有とや爲ん、是れ性有とや爲ん。若し是れ緣有ならば、緣  
は今未だ會せず、若し是が性有ならば則ち小乘に同す。』答ふ、『若し今時緣性俱に無し  
と看れば、是れ現在の未來は必定して有ならざるを以ての故に。若し未來の時處を達けて  
看れば、是れ未來の現在に還りて今の現在の如く、決定して是れ緣有なり、是故に見るを  
得るなり。餘の文知んぬべし。』

第五に天耳明の中に四有り、初は能聞の徳を擧げ、二に菩薩成就の下は、總じて所聞の  
自在を辨じ、三に於東方の下は別して一方の所聞を顯し、四に如東方の下は十方の所聞を  
顯す。初の中に無礙は是れ總なり、謂はく、其間無聞を礙へて其慮を礙ふること有るこ  
と無し。下は別して十徳を顯す。一に清淨とは智曉を離るるが故に。二に廣大とは徳遍  
きが故に。三に具足とは徳滿するが故に。四に不可稱量とは徳多きが故に。五に修習と  
は行滿するが故に。六に得證とは理圓なるが故に。七に明淨とは智障盡くるが故に。八に  
離障とは煩惱盡くるが故に。九に了達とは所知明了なるが故に。十に決定とは所知實に



【多聞】異本に多聞に作るは佳し。

稱ふが故に。二に總じて初聞の自在を辨するに、十方の中に於て遠き聲有らんに、聞かんと欲すれば礙有りて聞かざらしむること無く、近き聲に於て聞かざらんと欲すれば亦礙の逼りて聞かしむること無し。近からんと欲して遠きことを欲せず、及び遠の中の欲と不欲とのごとく、近の中も亦爾り、並に皆自在にして意に隨ふが故なり。三に別して東方を顯す。初に佛を擧げ、二に法を顯し、三に能く聞持す。法を顯す中に就いて十句有り。初に所説とは總じて教相を擧げ、一に所發とは隱の義を發起し、三に所聞とは深理を聞顯し、四に所示とは其宗本を示す、上の四は是れ理教なり。五に所制とは其學處を制し、六に所謂とは達者を折伏す、上の二は是れ制教なり。七に所教化とは化して行を起さしむ、此一は是れ教化なり。八に所念とは六念等の法なり、九に所分別とは解釋等の法なり。十に所發深妙とは大乘至理の法なり、善解等は總じて多聞の所聞の法を結す。三に如是一切の下は能聞持を辨す。中に於て亦十句有り。一は總じて善く文義を解す、謂はく、味は是れ文なり。二に何れの大衆に隨ふも説く所の法、三に何れの別人に隨ふも、而も説く所の法、四は隨ひて何れの類の音聲を以てして法を説く、五は彼智力に隨ひて解する所の説法、六は何れの識心に隨ふも所變の法、七は彼所化に隨ひて功德の法を得しむ、八は何れの所緣の境界に隨ふも、而も説く所の法、九は何れの所依の根器に隨ふも法を説く。十は何れの乘に隨ふも而も出離するの法、悉能の下は天耳の聞持を結す。四に如東の下は十方も亦爾りと類顯す、是れ則ち天耳の聞持は無盡無盡なればなり。

【八】以下、第六に神力智明を釋す

第六に神力智明に四有り、初に名を標し、二に體を顯し、三に若聞の下は業用を明し、四に是名の下は結して體を顯す、中に就いて十二種の神力有り、一は無功用、二は理性に同ず、三は能く普遍す、四は量知り難し、五は依を待たず、六は念に應じて至る、七は此を起たず、八は用を廢せず、九は窮竭すること無し、十は餘の境に非ず、十一は善根を増す、十二は彼行に順ず。三に業用を顯す中に五有り、初は所往の處の佛を明す。二に聞已の下は能く彼に往くを顯す、設使知法は是れ前の廣大等の神力業用なり。三に示現の下は其自在を明す、計はく、十方に現じて一處を離れず、是れ前の不轉神力等の業用なり。四に悉自の下は法を請するなり。了知は是れ前の長養神力等の業用なり。五に無損神力の下は遍く至りて行を成ずるを明す、是れ前の念至及び順行等の神力の業用なり、名を結すること知んぬべし。

【九】以下第七に分別言智明を釋す

第七に分別言智明の中に、初は總じて知り、所謂の下は別なり。中に於て三有り。先に報の言智を知り、二に善分別の下は語法の施設を知る。謂はく、假喫等なり。三に摩訶薩斷其の下は知ることを得るの所由を明す。先は法説なり。此菩薩遍く世界に入りて、彼中の衆生の性類を識知するに由る、是故に其言智を解す、施設の喻合は知んぬべし。

【十】以下第八に色身莊嚴智明を釋す

第八に色身莊嚴智明の中に三有り。初に無色法界を知り、二に面菩薩の下は巧に多色を現じ、三に佛子の下は無色と現色の意を明す。又初に色即無色を明し、次に無色即色、三に雙べて其意を顯す。初の中に五句有り。一に總じて色性を知る、二に不生は是れ眞性に

【二】以下第九に眞實智明を習す。【三あり】二の誤

【初に本智云云】此二段は四義を以て述す、一に本後二智に約し、二に内證外理に約し、三に證體説用に約し、後、後に事理不二に約す。

【業用の中に十】初八は正しく業用を明し、後二は疲用無礙を明す。初八の中、初二は説法、次に五善巧、後一は結示なり。

【非安立】安立とは施設の義、安置建立あるなり、即ち有差別と名言と

稱ふ、三に無種種は是れ異相を離れ、四に安執を離れ、五に形顯を離る。二に多色を現する中に、總別合せて一百一十種の色有り、此等は並に是れ法界に稱ふの實色なり、餘の教の或は十一色、或は二十五色等には同じからず。三に現色の意を明すに三有り。初は總じて應機を擧ぐ。二に所謂の下は別して益用を顯すに十種有り、並に是れ前の法色の勝用に於て、生を益し化を成ず。三に悉能の下は業用を結す、名を結すること知んぬべし。

第九の眞實智明の中に三有り。初に本智、謂はく、證理明、二に不捨の下は後智攝化明なり、亦是れ初は自ら内に證し、後は外に他を利す、亦是れ初は證法の體、後は説法の用なり。亦初は即ち事は常に理、後は理は恆に事なるが故に、業用を離へざるなり。前の中に二有り、先に正しく法を證するに、略して五十門を辨じ、二邊を遠離して中道に著せす、相性俱に泯じ有無を變べ遣ることを明す、三無性に依りて準じて釋すること知んぬべし。二に菩薩知如是の下は成智を證して著を離るるの益を結す、二に後智の業用の中に十有り、初に實を照して權を捨てざることを明す。謂はく、前は實を照すと雖も、非安立に約して二諦に著せず、然も本願を捨てざるが爲に、遣りて安立に約して一諦を見、決定して法を知る、是れ世諦を知るなり。二に雲雨の法を興し、三に度入善巧なり。謂はく、創起を入と名け、終極を度と爲す。四に巧説深廣なり、謂はく、眞法に違はずとは度は深に顯するなり。五に大悲を以て因と爲すは巧説無盡なり。六に無名に於て名を立てて、而も名の性を壞せず、性は是れ文字即ち解脫の相なり。七に觀察の下は巧觀離染、八に解了の下は、

は安立にして、無差別と離名言を非安立とす。

【九に：明す】以下寂用無礙を釋す

【二】以下第十に滅定智明を釋す。

【所得の滅定】五衆の法の當體寂滅なるを示し法相宗に據ぶ。

【三に云云】後八は差別を示す中、三四五は因果差別六七八は所學差別九十は二利差別。

善言をもて生を攝して自證を捨てず、九に於不二の下は理事無二の法を明すに、事を退して而も理に没せず、理を退して而も事に没せず、亦是れ寂用雙運の故なり。十具足の下は無礙具徳自在の相を明す。

第十に滅定智明の中に六有り。初は所得の滅定を明す。不退轉と言ふは、正しく常定を明す、未だ曾て退失せず。二に亦不捨の下は、寂にして恆に用なることを顯す。謂はく、身は滅定に在りて、菩薩の十種の業用を捨てず。一は總じて菩薩の作事を明す。下の九は皆是れ菩薩の事の故に。二は別して慈悲、三は十度の行相を顯す。四は大願をもて生を救ひ、五は正しく法輪を轉じ、六は方便をもて生を調ふ、七は諸佛を敬養し、八は法自在、九は常に仰を見、十は恆に法を聞く。三に悉能出生の下は滅定の業用を明す。謂はく、此滅定は直に前の十種の行用と相違せざるに非ず、亦乃ち此定力に由りて、十種の殊勝の行用を出生す。一は總じて出生を明す。謂はく、定に即して用を起すを能出生と名け、定用隔無きを無礙の法と名く。此悉能出生は下の諸句を貫く。二は法の平等を知る。三に具足の下は果法の願を成ず、四に深入の下は、智は土海を窺む、五に究竟の下は因際を究盡す。六に於一切の下は遍く所學を學す、七に一切の下は深く法相を悟る。八に善知の下は妙に緣起に達す、九に於一切の下は教義を解すること明す、十に於一切の下は權實の智具なることを明す。四に菩薩摩訶薩の下は住定の劫數を明し、五に顔容の下は住定の威儀を明し、六に悉能成の下は行用を廢せず。問ふ、一此滅定に住する、身儀動せ



【滅定：現す】 維摩經の文。

【此上の二門云云】 始終二教、小乗の無作用に對す。

【三】 以下、第二大段に結歎顯勝す

【四】 當品は十明所依の智體の無盡を明す。初に名を釋す。

す、云何が所作の事有ることを得るや。」答ふ、「若し小乗の滅定は總じて業用無し、若し初教に依らば正しく滅定に在りては、諸の轉識總じて現行せずと雖も、前の加行悲願力に由るが故に、第八阿賴耶識を擊發して、威儀を具せしめて、諸の所作を作す、是故に亦「滅定を起たすして諸の威儀を現す」と云ふ。若し終教に依らば、事即ち理と觀するが故に、滅定に在りて而も事用を礙へずして、諸の威儀を現するを、亦雙行自在と名く。此上の二門は皆心中の止定にして、身儀の作用有り。此は但理事無礙を得るを以ての故に。續教の中には用不用を説くべからず。若し圓教の中には、二事無礙なるを得るに由るが故に、是故に滅定の體坐は即ち是れ往來の法なり、亦身を分たすして而も動靜成就す。佛天に昇りたまふに、覺樹を起たさるが如き等、此に同じ之に準すべし。餘の義は滅定章に説くが如し。下は結すなり、知んぬべし。別釋訖んぬ。

第二に菩薩摩訶薩の下は、結歎して勝を顯す、中に於て三有り。初は勝を數す。一は人天に過ぎ、二は世間に越え、三は二乘に超え、四は下地に踰ゆ、此四は劣に形へて勝を辨す。五は總じては三業、六は別して定を擧げ、七は智用を顯す、此三は當相に勝を辨す。八は唯佛のみ方に究む。二に佛子の下は結なり、三に此菩薩の下は業用を顯す。謂はく、三世の佛の智明を得るも、是れ三明と謂ふには非ず、十明品竟んぬ。

十忍品第二十四。初に名を釋する中に、十とは圓數無盡、忍とは智照總達す、亦帶數釋なり。二に來意に二有り、遠くは前の普照の十定の問を答ふるが故に來れり。眞理を忍受

【二に云云】當品の來意を明す。

【三に云云】當品の宗趣を明す。

【大乗は二分つ】大乘不共の義は忍智不二なるも、小乘に類して言へば智の作用の忍受の邊を忍、嚔傲の邊を智といふ。

【所斷の障】十地終心所斷の二愚、今唯證金光明等に合せて微細等といふ。

【或は苦忍・非ず】小乗の所談なれば省略す。

し情安くして動ぜざるを以ての故に名くるなり。近くは十明の依を顯すが故に次に來れり。三に宗趣とは、先に宗、後に趣なり。宗に五門有り、一は體性なり。此忍は智を以て

性と爲す、若し小乗の忍は、劣は因に屬し、智勝は果に屬す。大乘は不二なるも但忍受すと嚔傲すると、用に約して之を分つ。二に所斷の障は、此中に微細の著、微細の礙無明を圖するに寄當す。三に位を定むとは、若し漸教ならば、此十忍の行は諸位に通該し、十

地の後の等覺位の中に寄當す。若し圓教ならば過く五位に通ず。此に寄せて四種の類を説かば、或は一なり、謂はく、無生忍なり。或は二なり、謂はく、二無我忍なり。或は三なり、謂はく、三無性忍なり。佛性論に出でたり。或は四なり、謂はく、四種の無生なり。

第八地の論の中の如し。或は五なり、謂はく、地前を伏忍と名け、初二三地を信忍と名け、四五六地を順忍と名け、七八九地を無生忍と名け、第十地及び佛地を寂滅忍と名

く、此は「仁王經」に依る。或は六忍なり、謂はく、信忍、法忍、修忍、正忍、無垢忍、一切智忍なり。解して云はく、初の三は次の如し、是れ地前三賢なり。後の三は次の如し、

是れ十地と等覺と妙覺となり、知んぬべし、此は「瓔珞經」に依る。或は苦忍等の八は、此に辨する所に非ず。或は十なり、亦第八地の經の中の如し。又十は此文なり。或は十四

なり。「仁王經」に依るに、五忍の中の前の四は各各三に分つ、謂はく、上と中と下となり。後の一は唯二に分つ、謂はく、因と果となり。五は別して十忍を釋す。中に於て初の

三は法に約し、後の七は喻に就く。法の中に初の一は資糧位に約し、次の一は加行位に約

【二五】以下正しく  
本意を釋す。

【初の中に云云】  
以下先づ數を擧げて  
勝を歎す。

【二に名云云】二  
に名を列ねて要を  
顯す。

し、後の一は正證位に約す、寄相此の如し。若し通ずるときは則ち過ぐ十地に在り、知んぬべし。第二に宗趣とは、此の如く十忍の行を學するに由るが故に、因圓に果滿することを得。故に文に、能得一切等と云ふなり。

(二五) 四に文を釋する中に二有り、長行と頌となり。前の中に三有り、先に數を擧げて勝を歎じ、二に名を列ねて要を顯し、三に解釋し結歎す。初の中に二有り、先に總じて告げて數を擧ぐ。二に勝を歎する中に、能く無礙の忍を得とは自分の因滿を顯し、又得の下は勝進の果圓を明す、此十忍に由りて斯因果を得るなり。二に名を列ねて要を顯す中に亦二有り、先に名を列ね、後に要を顯す。前の中に、初に普賢は是れ教、隨順は是れ行なり、謂はく、無生の教を説くに於て、信順じ境行を忍受するを名と爲す。二に眞理を顯覽す、而れども未だ眞に契はざるが故に順忍と名く、行體に名を立つるなり。三に順觀既に極りて眞理を證契するを無生忍と名く。無生は是れ理、境に従ひて名と爲す。又亦無生は是れ行の當相を目と爲す。下の七喻の中に、光統の云はく、「前の四喻は普賢忍に喩へ、電化の二喻は順忍に喩へ、虚空の一喻は無生忍に喩ふ」と。又云はく、「幻は起るに起の相無く、烟は境として境の相無く、夢は知るに知の相無く、響は聞くに聞の相無く、電は住するに住の相無く、化は有るに有の相無く、空は爲に爲の相無し」と。又古人の云はく、「識は幻の如しと觀じ、想は炎の如しと觀じ、受は夢の如しと觀じ、聲は響の如しと觀じ、行は電の如しと觀じ、色は化の如しと觀す。總じて一切の雜染處等は畢竟空の故に、虚空の

【攝論の第五云云】  
以下、論を引いて  
述す、初に總問  
答を引きて、勝前す  
【他復云云】以下  
別して七喻の文を  
釋す。

【無性の釋】 釋論  
第三の四左。

如しと觀す」と。又遠公は二諦の法を知るに約す、「謂はく、俗は實に非ずして、幻の如しと知り、俗は倒有にして炎の如しと知り、俗は心に從りて起るを夢の如しと知り、聲塵は不實にして響の如しと知り、俗の響く有ることは電の如しと知り、變易無體にして化の如しと知り、眞は別を離れて虚空の如しと知る。又前の六を有爲空に嘘へ、後の一を無爲空に嘘ふ。『金剛般若の九喻の如き、皆有爲に嘘ふるなり。又『攝論』の八喻に準依他を顯し、疑に疑を釋するが爲の故に。』攝論の第五に、「何に緣りてか經に説くが如く、依他起の自性に於て幻等の喻を説くや」とは、總して對ふなり。「依他起の自性に於て他の虛妄の疑を除かんが爲の故に」とは答なり。「他復云はく何ぞ依他起の自性の上に虛妄の疑有りや」とは、別して問ふなり。他は此に於て是の如きの疑有るに由る、云何が實に義有ること無くして、而も所行の境界を成ずる、此疑を除かんが爲に、幻事の喻を説くなり。無性釋して云はく、「虛妄の疑とは、虛妄の義に於て起す所の諸の疑なり。『云何が無義にして、遍く計度する時に分明に顯現し、所行の境に似たる。』此疑を遣せんが爲に幻事の喻を説く、實に象無きに而も幻象有るが如く、所緣の境界の依他起性なるも亦復是の如し。色等の所緣の六處無しと雖も、遍く計度するの時、所緣有るに似て、六處顯現す。云何が無義の心本法を轉するや。』解して云はく、此疑の意は、虚法は實の見を生ぜず、世法離らざるが故に無に非ず。『論』に云はく、「此疑を除かんが爲に、陽炎の喻を説いて釋す」と。『論』に云はく、「又陽炎の如きは飄動の時に於て、實に水有ること無き



【炎の水】陽炎に  
變はれたる水。

に而も水の覺を生ず」と。釋して云はく、以て水覺を生ずべきが故に、則ち實に水有りとな爲す、器世間も亦復是の如し。『論』に、「云何が無義なるに、愛と非愛と受用の差別有りや」と。釋して云はく、炎の水は渴を解くに受用有ること無し、世法爾らざるが故に、是れ實に有なり。『論』に此疑を除かんが爲に、所夢の喩を説いて釋す。『論』に又夢中の睡眠所起の心心法聚の如き、極めて昧暗を成す、女等の種種の境の義無しと雖も、愛非愛の境界有りて受用す、覺の時亦爾り。釋して云はく、夢中に女等の造願の受用を見ること有るを以て、則ち實有と爲すべし。又疑ひて云はく、夢中の受用は夢者に於ては有り、覺め已れば則ち無し、世法は爾らず、凡聖俱に見る。釋す、響の如きは長幼同じく聞けば、則ち有と爲すべし。『論』に「云何が無義なるに、種種に戲論し、言説して轉するや」と。此疑を除かんが爲に、谷響の喩を説いて釋す。『論』に又谷響の如きは實に聲有ること無し、而れども聽く者をして多種の言説の境界を聞くに似せしむ、種種の言説講業も亦爾り。又疑ひて云はく、響は是れ聲にして色に非ず、世法は爾らず。色も亦具に有り、云何が有に非ざる。釋す、電の如き亦色有り、豈是れ實有ならん。論に此喩無し。又疑ひて云はく、電の色は速かに滅し、世法は久しきを經、覺彼に同ぜんや。邪に釋して云はく、化の如きも亦久しきを經、豈是れ實有ならん。又疑ひて云はく、凡愚は顛倒して、妄に見て有と謂ふ、菩薩は倒無し、其有を見ず、如何が亦攝化衆生有るや。釋す、化の所作の如きが故に實有に非ず、論に云何が無義なるに、諸の菩薩無顛倒の心有る、有情

の諸の利樂の事を辨せんが爲の故に、思うて生を受く、此疑を除かんが爲に變化の喩を説いて釋す。「論」に又變化の如きは實に有なること無しと雖も、而も能化の者は顛倒有ること無く、所化の事に於て勤めて功用を作す、菩薩も亦爾り、論の如く應に知んぬべし。又疑ひて云はく、所作は化の如し實有あること無かるべし、能く化を作すは是れ化の所依にして、應に是れ實有なるべし。釋すらく、虚空の如く色が與に依と爲る。豈是れ實有ならん。是故に諸法は畢竟じて性空なり。佛子是爲の下は要を結す、三世の佛、同じく此を説くを以ての故に。其要勝を顯す。

【二六】以下第三に別して十義を釋するに、初に隨順音聲忍を釋す。

第三に何等の下は別して十義を釋す。一一に各各三有り、謂はく、牒起と釋義と結名となり。初の中に、釋の内に十句有り。初の一は總じて所聞を擧ぐ、謂はく、三無性の理を眞實の法と名く、下の九は、能聞の入法を顯す。二に無相の眞なるを聞いて驚かず、遍計は所有無しと解するを以ての故に。三に無生を聞いて怖れず、依他は必ず無生なりと解するを以ての故に。四に無性を聞いて畏れず、眞如は無性の性と解するを以ての故に。又釋すらく、眞空の法に於て聞く時も驚かず、思ふ時も怖れず、修ある時も畏れず、又有の所有無きを聞いて驚かず、空の所有無きを聞いて怖れず、斯二の所有無きを聞いて畏れず、並に諸本の般若論に釋するが如し。五に信解と聞慧の始なり、先に信じ、後に解す。六に受持とは聞慧の終なり、先に受し、後に持す。七に愛樂とは思慧の始なり、謂はく、法を受し觀を樂む。八に順入とは思慧の終なり、謂はく、思擇して味を得るが故に順入と云

【二七】以下、第二に願忍を釋す。

【起信論】修行信心分の終の文。

【二八】以下第三に無生忍を釋す。

ふ。九に修習とは修慧の始なり、謂はく、縁に對して造修す。十に安住とは修慧の終なり、謂はく、修行成立す、具に釋すること「瑜伽」の菩薩地の中の如し。

第二に願忍の釋の中に四對八句有り、初は創修止觀なり、謂はく、止行は寂に順じて諸法を觀照す。二は止觀漸次なり、謂はく、平等正念とは止行堅固なり、不違諸法と言ふは觀照して縁に隨ふ。三は止觀純熟す、謂はく、隨順深入等は止行深玄、清淨直心等は觀行深玄なり。四は止觀俱行す、謂はく、止に即するの觀を平等觀と名け、觀に即するの止を深入具足と名く。

【起信論】に云はく、「修行坐臥皆應に止觀俱行すべし、謂ゆる諸法の自性不生を念すと雖も、而も復即ち因縁和合の、善惡の業と、苦樂等の報とは失せず。壞せざることを念す、因縁善惡の業報を念すと雖も、而も亦即ち性不可得なりと念す」と。釋して云はく、法に約すれば既に理事混融し、行に約すれば則ち止觀雙運す、是の如きを方に願法の忍と爲すなり。

第三に無生忍なり、釋の中に先は標、何以下は釋なり。前の中に不見法生は必ず滅を待たず、緣起の事なるが故に亦滅を見ず。又此無生の理は是れ斷滅の無に非ず、故に不滅と云ふなり。又既に本不生なるが故に滅すべき無し。下は釋する中に、先に滅するに二意有り。一に云はく、既に無生を標す、何が故に亦無滅と云ふや。二に云はく、既に無生と言ふ、但し寂然無生とや爲ん、亦行圓位果等有りとや爲んや。下の釋の中に十句有り。初の一句は初の意を釋す、知んぬべし。問ふ、「若し爾らば亦無滅忍と名くることを得るや

不や。』答ふ、『理亦應に得べし、但し無生は必ず無滅を帶し、無滅は必ず無生に隨ふが故に、多くは首名を標す。』『信力入印經』に云はく、『菩薩に五種の法有り、則ち能く清淨なり、初の歡喜地に、何等をか五と爲す。一は謂はく、菩薩は無生忍に住することを得るが故に、亦他をして住せしむ。又云はく、無生忍とは、謂はく、寂滅の故に。二は謂はく、菩薩は無滅忍に住することを得、亦他をして住せしむ。又無滅忍と言ふは、無生の法を證すが故に。』と。釋して云はく、此を以て當に知るべし、亦無滅忍といふを得るなり。二に若不滅の下は第二の意を釋す。謂はく、不生に由るが故に不滅なり、此不生不滅に由るが故に無盡なり、是故に此無盡も亦不生の中に在り。乃至莊嚴も亦皆是の如し、悉く一念無生の處に在り。無盡に二義有り。一は理の限盡すること無し、二は行の斷盡すること無し。三は垢を離るるに亦二義有り。一は理に入りて寂を帶せず、二は事に隨ひて恆に無念なり。四に無壞に亦二義有り。謂はく、理に入りて事を壞せず、事に隨ひて理を壞せず。五に不動に亦二義有り、謂はく、二諦を變斷するに一念を動ぜず。六に寂滅地に亦二有り、境と行とに隨するが故に。七に離欲に亦二有り、種と現とを離るるが故に。八に無行に亦二有り、能所を斷するが故に。九に大圓に亦二有り、寂に沒せざることを願ひ、能く體に應ずることを願ふ。十に住莊嚴に亦二有り、理行相應るを方に究竟と爲す。

第四に如幻忍の中に六門を作る。一は總じて所喻を明す、『攝論』は幻を所縁の六處に喩へ、下の離世間品は識蘊に喩へ、『密嚴經』は第八識に喩へ、『般若論』は外の器世間に

【九】以下第四に如幻忍を釋す。



【四は兎の…死】  
生即死なるが故に

【十論】 智度論第  
六の初に十論を釋  
す。

喩ふ。此經は總じて世間出世間の依正染淨等に喩へ、『楞伽』の中には一切の法に喩へ、『掌珍論』は直に有爲の法に喩ふ。小品の中に「乃至一法の、涅槃に過ぐる者有らば、我亦説いて如幻如夢と言はんと」と、故に知んぬ文は爲無爲に通ずるなり。問ふ、『涅槃の無爲は何んが如幻なるを得るや。』答ふ、『意は見を絶するに在るが故に亦幻の如し。謂はく、有無等の見非見、幻のごとき故に。若し見を幻と爲さば亦非見も幻なり。見は幻なる若し絶せば方に見ゆと爲す、況んや餘の見有らんや、是故に非幻の幻は方に見ゆなり、見を絶するの見は方に見ゆなり、意を取りて之を思へ、言説及び難し。』二は別して義門を開く、一の幻兎の如し、其五義有り、一は所依の中、二は幻師の術法、三は所見の幻兎、四は兎の生ずる即ち是れ死なり。五は愚小は有と謂へり、中に於て中は所依の如來藏に喩ふ。二に幻師、及び術は能起の因縁に喩ふ、無明等の如し。三は幻兎の相は依他起性に喩ふ、四は兎の存する即ち亡なるは依他の無性に喩ふ。五は凡小は有と謂ひ、取りて人法と爲す。問ふ、『術法は幻を成ず、即ち是れ幻に非ず、若し爾らば果法は是れ幻なり、因縁は幻に非ずや。』答ふ、『因縁も亦依他展轉して皆是れ幻なり。』問ふ、『若し爾らば幻師も亦應に是れ幻作なるべし。』答ふ、『此中に所作の幻を擧げて以て一切に喩ふ、即ち同なりと謂ふには非ず。若し爾らば喩は即ち是れ法なり、何んが喩況を成ぜん、十論は「十論に『徳女經』を引けり、『佛言はく、幻の樂器従り幻の樂音を作し、幻の無明従り幻の行等を生ず』と、廣くは彼に説くが如し。三は有無門の中に三重有り、一は上の四義に於て

【四句】一に非異  
二に非一、三に非  
非一非非異、四に  
非亦一亦異。幻師  
【餘の三位】幻師  
の術法等の三。  
【二に相對して云  
云】巾は是れ如來  
藏にして二義あり  
兔は依他起性にし  
て亦二義あり、故  
に相對して非一異  
の義を辨ず。

各各有無有り、一は巾の性は有、相は無なり、兔の爲に隱さるるを以ての故に。二は術の用は有、體は無なり、巾に依りて體無きを以ての故に。三は兔の相は有、實は無なり、實は無なるを以て而も現するが故に。四は生は即ち是れ無、死は即ち是れ有なり、無礙にして一と爲すを以ての故に。二は各各四句有るに由る、思準して知んぬべし。三は四の位互に相對す、次の如く、交絡して多門の四句有り、亦思準して知んぬべし。四は一異門にも亦三重有り。一は巾の自位に約して辨ずるに、巾の如き二義有り。一は自位に住するの義、二は學體重を成ずるの義なり、此二は無二にして二ならざること無きが故に、一異等に非ず、四句は知んぬべし。餘の三位に各各四句有り、亦これに準じて知れ。二に相對して辨ずるに兔の如き亦二義有り。一は相の差別、二は體空の義なり。此兔と巾とは相對の相にして、一に非ず異に非ず、略して十句有り。一は巾の上に兔を成ずるの義、及び兔の上の相別なる義とを以て、此二合して一際と爲すが故に不異と名く。此は是れ木を以て末に隨ふ末に就いて不異を明さば、經に云はく、「法身の、五道に流轉するを名けて衆生と爲す」等と。『楞伽』に云はく、「如來藏は苦樂を受く、因と俱に若は生じ、若は滅す」等と、二に巾の上の自位に住する義と、兔の上の體空なる義とを以て、合せて一際と爲し、名けて不異と爲す、此は是れ末を以て木に歸す。本に就いて不異を明さば、經に云はく、「一切の衆生は即ち如なり。復更に滅せず」等と。三は攝末所歸の本と、攝本所從の末とを以てするに、此二雙融無礙にして不異なり、此は是れ木末平等なるを、名けて不異と爲す、前の二

【本末雙べ混ず】  
 本を全うして末と  
 等を以て本は便  
 ち隠れ、末を全う  
 して本となるが故  
 に未は便ち亡ずる  
 をいふ。

の經文相離れざるを以ての故に。四は所攝歸本の末と、亦所攝隨末の本とを以てするに、此二相奪するが故に不異と名く。此は是れ本末雙べ混じて不異を明す、眞妄平等にして不可得に異するを以ての故に。五に下は非一を明す。巾の上の白位に住する義と、兔の上の相差別する義とを以てするに、此二本末相違し、相背くが故に非一と名く。『楞伽』に云はく、「如來藏は阿梨耶識の中に在らず、是故に七識に生有り滅有り、如來藏は不生不滅とは此れ之の謂なり」と。六に巾の上に兔を成するの義と、兔の上體空の義と、此二は本末相反し相害するが故に非一と名く。『勝鬘經』に云はく、「七識は流轉せず苦樂を受けず、涅槃の因に非ず、唯如來藏のみ苦樂を受く」等と。七は初の相背くと、次の相害するを以てするに、此二は義別なるが故に非一と名く。謂はく、相背は則ち各各相背捨し、相去ること懸遠なり、相害は則ち相與に敵對し、親しく相食害す、是故に近遠一に非ず、前の經文相離れざるを以ての故に。八は極めて相害するを以て、俱に混じて而も混せず、極めて相迷るるに由りて、俱に存して而も存せず、存せず混せざる義を非一と爲す。此は是れ成壞一に非ず、七識は空に即して而も是れ有なるを以ての故に。眞如は隱に即して而も是れ顯なるが故に、九は上の四の非一と四の非異とは而も亦非一なり、義雜らざるを以ての故に。十は然るに亦不異なり、理遍なく通ずるを以ての故に。法無二の故に。是故に若し不異門を以て諸門を取らば、極めて相和會す、若し非一門を以て諸門を取らば、極めて相違害す。極めて違にして而も極めて和する者は、是れ無障礙の法なり。三に巾と兔との相

對既に爾り、餘の二及び交絡の諸句は之に準せよ。五に即入門に五門有り。一は理事相即なり、謂はく、中と兔と無二の故に。經に云はく、「色即是空、空即是色」等と。二は二理相即す、謂はく、兔頭即中、兔足も亦即中、二の中別無きが故に即と名く。經に云はく、「衆生と賢聖とは即ち如にして別無し」と。三は理を以て事の名に従へて事相即と説く、兔頭の中は足の中と異ならざるが故に頭即足と説く、「無行經」に云はく、「若し人成佛せんと欲せば貪欲を壊すること勿れ、諸法は即ち貪欲なり、是を知るときは則ち成佛す」と。釋して云はく、應に諸法即空と説くべし、何が故に乃し即貪欲と云ふとならば、貪欲即空なるを以ての故に、是故に貪の名を擧げて貪の實を取る、文の意は此の如し。四は理を以て事を融す、二事相即して兔頭別に有ること無きが如く、即ち中を以て頭と爲んに、中の體圓融するが故に、頭を全うして即ち是れ足なり。此經に「即多等」と云ひ、又此文に深入如幻於一法中解衆多等と云ふは、此は法性融通力に約するなり。五は緣起相由の力を以て、二事をして亦相即せしむ、幻師の玄術の力は多即一、一即多ならしむる等の如きが故に。賢首品に云はく、「或は須臾を現じて百年と作す、幻力自在にして世間を覺ばしむ」等と。良に以みれば、幻法は虚にして障礙無し、是故に自在なるを得。相即の既に爾るが如く相入も亦然り、異體の既に爾るが如く同體も亦然り、此門既に爾るが如く餘の門も亦然り、並に思準して知んぬべし。

【六に云云】 以下  
經文を釋す。

六に文を釋すとは、釋の内に三有り、先に略、次に廣、後に忍行を成す。初の中に先に



喻、後に觀なり。緣起の下は法をもて合す、此は相入門に依りて以て如幻緣起に合すことと、知んぬべし。二に菩薩の下は廣の中に三有り、謂はく、法と喻と合となり。初の中に七句有り、一は刹を分別し、二は衆生界を解し、三は緣起の法界を解し、四は世間の平等を覆じ、五は佛の、世間に出づるも亦如幻なり。六は佛の世間に入るも用は常に寂なり、故に不二入と云ふなり。七は利生を失はざるが故に、出生住持と云ふ。喻の中に、初は上の衆生界に喻へ、二に非樹の下は刹等に喻へ、三に非臺の下は世間に喻へ、四に非定の下は通じて所餘の門に喻へ、五に種種の下は幻法の體を結す。謂はく、種種非幻とは幻、若干の幻無きことを結す、非種種とは若干の非幻を結す、是故に幻の體は是れ一切に非ず。「但幻を以ての故に衆色を示す」とは、既に物に非ずして物を現するは、物は即ち無物の物なることを明す。合の中に、初に總、二に所謂の下は別して九種を釋じ、以て總の中の一切世間を顯すこと知んぬべし。三に菩薩の下は忍行を成ずる中に二有り。初は法に稱うて正しく觀じ、二に出生の下は業用を起すことを明す。前の中に八有り、初は衆生界に約す。即ち是れ業煩惱世間なり。不起とは有の解を作さず、不壞とは無の解を作さず。又木より來た起らざれば、亦壞すべき無し、下は並に之に準せよ。二に佛の世間に約し、三に法世間に約し、四に三世世間に約し、五に菩提等を觀ぜずとは亦法世間に約す。六に佛興等は成壞世間に約す。謂はく、佛の出づるを成と爲し、涅槃を壞と稱す。七に不住大願等は行世間に約す。謂はく、不住大願は是れ大智の行、不取清淨等は是れ大慧の行なり。

【十論】 此下第五の如炎忍を釋す。

八に無出無著は流轉世間に約す。謂はく、不捨の故に出無く、中に在りて二に著すること無し。出生より業を明す、一は利に約して用を顯す、而も定んで體の眞なることを知んぬ。二は衆生界に約し、三は法界、四は三世世間、五は出生陰等は流轉世間を明す、用にして常に寂なり。六は度脫等は行世間の用を明し、七は知一切等は法世間の用を明す。八に化に著せず等、九は衆生の爲の故に等、十は說過去等は並に佛の興世の用を明す、皆是れ理事無礙の行なるが故なり。

第五に如炎忍の中に四有り。初は總じて所喻を明すと、無性の『攝論』には器世間に喻へ、梁の『論』には所縁の境に喻へ、此經の下の方文は想蘊に喻へ、此文は一切の法に喻ふ。二に別して義を聞くに炎に五義有り。一は平地、二は陽氣、三は陽氣と地と合して水炎に似て現す、四は木より來乾きて水無し。五は彼海鹿をして取りて以て水と爲さしむ、法の中亦爾り。一は如來藏の平地、二は無明習氣の熏、三は習氣、心海を熏動して縁起の假法を起す。四は此依他起は本より來無生なり、五は凡小無知にして執して實有と爲す。又『十論』の中に七義有り、一は日光、二は熱風、三は動塵、四は廣野に在り、五は野馬を見る、六は遠く、炎の相を見て、想は謂うて水と爲す、七は近づけば則ち水無し。初の日は結使に喻へ、二に塵は諸行に喻へ、三に風は罪なる憶念に喻へ、四に無明の曠野に喻へ、五に智慧無き者は謂うて一相と爲し、男と爲し女と爲す、是を名けて炎と爲すに喻ふ。六に若し聖法に遠ざかれば無我を知らず、空法の中に於て男女等の想を生ず。七に

【十論】 智度論の第六の初に十論を説くを指す。

【三】以下、第六に如夢忍を釋す。

若し聖に近づけば則ち諸法の實相等を知る、乃至廣説す。三に有無等の句數多くは前の幻に同じ、準思して釋すべし。四に文を釋する内に、先に法、二に喩、三に菩薩の下は合なり。謂はく、本心に依りて現じて方處有ること無し、内外有無斷常等の處に於て、此法を求むるに皆不可得なり。二に觀一切の下は忍行成の中に、初は方便行成す。二に具足の下は證行を成す、知んぬべし。

第六に如夢忍は八門を作る。一は總じて所喩を明す、無性の『攝論』に「又夢中の如し、睡眠の所起の心心法聚極めて昧略を成す、女等は種種の境の義無しと雖も、愛非愛の境界の受用有り、覺むる時も亦爾り」と。梁の『論』に云はく、「譬へば夢の中に實の塵有ること無くして、亦愛憎の受用有るを見るが如し。此依他性の中も亦爾り。實の塵有ること無くして亦愛憎愛用有るを見る」と。又功德施の『般若論』に云はく、「譬へば夢の中の如し、先に見聞あるに隨ひて憶念分別し、熏習して住するが故に、作者無しと雖も、種種の境界分明に現前す。是の如く衆生は無始より來、諸の煩惱善不善の業熏習すること有りて住す、我有りて是れ能作者なること無しと雖も、而も無涯の生死等の事を現す」と。世親、無著の『般若論』は皆過去の境に喩ふ、證智の所知に非ず。一二に義を聞かば夢に五義有り、一は所依、謂はく悟心なり、以て本識に喩ふ。二は所由、謂はく、睡蓋なり、以て無明習氣に喩ふ。三は所現、謂はく、前に依りて夢相の差別を顯示す、以て緣所起の法に喩ふ。四は此夢事は有にあらすして而も有なり、五は夢者をして取りて實有と爲さしむ。三に有

無を辨ぜば四句有り。一に夢は是れ有の義なり、是れ夢なるを以ての故に。謂はく、夢者に於て夢事現するが故に。問ふ、此は既に是れ夢なり、何んが有と爲すことを得ん。又此は若し是れ有ならば、夢者の有と見るは應に顛倒に非ざるべし、顛倒に非ざるが故に是れ覺にして夢に非ず。又覺者は夢に所有無しと見る時は、應に是れ顛倒なるべし。是れ顛倒なるが故に、是れ夢にして覺に非ざらん。答ふ、此は既に是れ夢なり、何んが有ならざるを得ん、知し其れ有ならずんば、應に非夢に同すべし、竟に何の所説ぞ。又若し此夢者の有を見ること無くんば則ち顛倒無し、顛倒無きが故に是れ覺にして夢に非ず。又此夢の有は本夢者に在り、覺處において謂ふには非ず。若し覺者無所有を見ること無くんば顛倒に非ず、顛倒則ち無し。夢者の所見は顛倒にして夢事顯現す、是故に彼無を見るに由りて、方に此有と知んぬ。二に夢は是れ無の義、是れ夢なるを以ての故に。謂はく、虛妄の所見は性必ず空なるが故に。問ふ、若し夢は是れ無ならば、應に非夢に同すべし、夢の義安にか在る。答ふ、要す非夢に同するを方に是れ夢と爲す、其夢の處と及び非夢の處と、二相無きを以ての故に。問ふ、若し爾らば夢者は何んが非夢の處に於て而も夢の相を見ざるや。答ふ、夢者は現に今無處に於て見る、是故に此夢の體は無に異ならず。若し爾らずんば、應に是れ夢に非ざるべし。問ふ、夢は若し是れ無ならば、夢者は應に有を見るべし、有を見ざるが故に、是れ覺にして夢に非ず。答ふ、正しく夢者の、有を見るに由りて、有は是れ有に非ず、夢者と及び所見とは、俱に所有無きを以ての故に。是故に



若し夢者の、有を見るに非ざれば無と言ふことを得ず、彼有に由るが故に、方に是れ無なりと知る。』問ふ、『凡そ夢の法を言はば、相は有にして實は無なり、今總じて無と言はば、豈謗を成ぜざるや。』答ふ、『然く此有無は必ず全く攝するが故に。二相に非ざるが故に。若し爾らずんば則ち夢を誘らん。三に夢は是れ亦は有亦は無の義なり。是れ夢なるを以ての故に、夢法理として必ず二義を具するが故に。』問ふ、『此二義を具すを豈相違せずや、相違の法豈夢を誘らざるや。』答ふ、『半有半無ならば則ち是れ相違なり、今此は有を全うするの無と、無を全うするの有と、二門岳立して相違せず、是故に有無を具する、方に乃ち是れ夢なり、是れ夢なるを以ての故に相違せず。』四に夢は是れ非有非無の義なり。是れ夢なるを以ての故に二義俱に融じ、形奪變盡す。故に俱非なり。問ふ、『若し此二義要す相形奪せば、如何が前説の二義は俱に存せん。』答ふ、『要す形奪するに由りて方に俱に存することを得。是故に若し無を奪ひて盡さしめずんば、無は以て無と爲ん。若し有を奪ひて盡さしめずんば、無は以て有と爲ん。是故に存亡攝へず俱泯自在なるを、方に夢法と爲す。是故に經に云はく、『世間は猶し夢の如し、智は有無を得ず』とは此れ之明なり。』四に一異門とは二重有り、初の中に四句有り。一に夢は是れ一なり、是れ一夢なるを以ての故に。二に夢は是れ異なり、夢を以て種種に現するが故に。三は俱なり、一念に於て多劫等を現するを以て、無二にして而も二なるが故に。四は俱非なり、形奪俱盡する、方に是れ夢なるを以ての故に。又夢は是れ一なり、所依の心に約するを以ての故に。二に夢は

是れ異なり、睡蓋の所現に約するを以ての故に。三に俱なり、所現の夢相に約するを以ての故に。四に俱非なり、夢性に約するを以ての故に。融通無礙なる之を思つて見つべし。是故に前の門の有無は、無處に於て有と爲し、此中の一異は一處に於て多と爲す。是の如く無礙なるを方に夢法と爲す、是故に上の經に「夢の自在法門を以て教化す」と云ふは此れ之謂なり。五に眞妄門とは亦四句有り。一に夢は是れ眞實なり、是れ夢なるを以ての故に。前の所説の如く諸義を具するが故に。聖智の所知の夢性は甚深なるが故に。問ふ、「夫れ夢と言はば是れ虚妄の法なりと了知して、顛倒せざるが故に是れ實なり。」二に夢は是れ妄なり、是れ夢なるを以ての故に。若し虚妄に非ずんば是れ夢ならざるが故に。是故に亦是れ實、亦是れ虚、眞に非ず妄に非ず、四句の無礙之を思へ、此經に「夢の性は寂滅なり」と云ふは此れ之謂なり。六に自在とは、夢の境は、虚妄相即相入し、多處に少を現じ、少處に多を現じて皆障礙無し、故に上の文に「夢の自在法門を以て教化す」と云ふは、此れ之謂なり。『攝論』に云はく、「夢に處して年を経たりと謂ふも、寤めては乃ち須臾の頃なり、故に時は無量なりと雖も一刹那に攝在す、緣起の夢法の、無礙自在にして即入重重すること帝網等の如し」と、並に準じて知んぬべし。七に觀を明すとは、諸の世間は皆悉く夢の如しと觀するを、以て正觀と爲す。問ふ、「若し夢に在りて、爲れ實と謂ふが故に是れ夢なりと知らざれば、夢を見るとは名けず。若し夢覺めぬれば則ち夢の相無く復所見無し、是

故に此夢を誰か能く見るや。答ふ、一夢者は夢を見ず。其は是れ夢なるを以ての故に。覺者  
 は夢を見ず、其覺めれば物有ること無きを以ての故に、此の如しと了知すること、是  
 れ覺者なるが故に、是故に夢の義は是れ覺者の所知にして、夢者には非ず、此道理に由り  
 て夢は是れ觀の境なり。經に云はく、菩薩は一切の法を受持するに夢の如し」とは、此れ  
 之謂なり。一問ふ、覺者は無を見て夢を了知す、夢者は有を見て亦了知するや不や。答  
 ふ、一若し此覺者の、夢法を了知する、正に覺する時無ければ即ち知夢と名く、若し覺め已  
 りて無しと爲と言はば、此は是れ覺むれば無にして、是れ夢には無に非ず、夢と識ると名  
 けず。是故に夢の有、夢の無は但是れ夢の時なり、覺むる時に望むるに非ず。若し覺め已  
 りて無と爲すを取らば、此れ還りて是れ夢なり、名けて覺と爲さず、是故に夢覺前後なり、  
 有と謂ひ無と謂ふ、俱に夢と識らず、之を思うて見つべし。一第八に、交を釋する中に亦  
 三有り、初の一句は總して擧げ、二に譬如下は別して辨じ、三に覺悟の下は義を結す。  
 初の中に一切世間とは、謂はく、染淨緣起の法は、亂識の所現の故に知夢と云ふ。二に別  
 して辨する中に二有り。初は喻を擧げ、二に如是の下は法を顯す。又釋するく、亦初は是  
 れ方便觀なるが故に解一切世間等と云ふ、二は是れ眞實觀なるが故に、覺悟一切世間等と  
 云ふことを得べしと。前の中に亦二有り、先に夢の有は、之に即して非有なるを明し、二  
 に非有にして而も有を現することを明す。前の中に五對有り、一は是れ世出世の法に非ず、  
 二は三界に非ず、上は依報に約す。三は生死に非ず、正報に約す、四は淨穢に非ず、世出

【三に不著云云】

緣起は夢の如しと解知して一切世間を離れざるが故に著するところ無し【此は凡れ云云】離世の法に非ざるが故に二乗の如きは證すべからずと

【三】以下、第七に如響忍を釋す。

世の因に約す、五に清濁に非ず、世出世の果に約す。皆悉く實にして、彼法に非ずして而も彼を示現す、是れ夢法なり。二に法の實觀を顯す中に八句有り。初の「一は總じて顯し、二に不壞夢とは此夢法の自性は一切に非ざることを明す、壞を待たざるが故に。」又壞すべきこと無きが故に。又此は是れ世間に非ず、四相の爲に壞せられざることを顯すが故に。三に不著夢は緣起の夢を解知して、離れて所著無きが故に。此は是れ世の法に離るるに非ざることを顯す、故に證すべからず。四に夢性寂滅とは、此は本從り來た、性は自ら寂滅なることを明し、三界喧動の法に非ざることを顯すが故に。五に夢無自性とは、此無性は生に非ず滅に非ざることを明し、前の非生非死を顯す。六に受持一切等とは觀相を結成す、謂はく、常に此解を作して、心首を離れざるが故に受持等と云ふなり。七に不壞夢とは、夢を取捨せざるが故に。前の非淨穢を顯す、穢を捨てて淨を取るに非ざるを以ての故に。八に不虛妄取とは、分別せざるが故に淨にも濁にも非ざることを顯す。下の一句は義を結する等知んぬべし。

(三)第七に如響忍の中に四門を作る。初に喩相とは、無性釋して云はく、「又谷響の如きは、實に響有ること無けれども、聽く者をして多種の言説の境界を聞くに似せしむ、種種の言説語業も亦爾り」と。梁の「論」に云はく、「實に響摩無くして而も可聞を顯現するが如く、言説の事も亦爾り、實に所有無くして可聞を顯現す」と。此經の意に三義有り。一は一切の法は響の如しと知り、二は佛の聲は響の如しと知り、三は能く如響の言音を以て、而も



【聲を離れて云云】  
經文の「彼音を聽く者は」以下を釋す。

【二三】以下第八に  
如電忍を釋す。

爲に法を説く。二に義を開かば響に亦五の義有り。一は空谷、二は聲有り、三は響空谷を撃てば便に響應有り。四は此響は有に非ずして而も有なり、五は愚小は有と謂ふ。三に有無等の諸句は並に前に準じて之を知れ。四に文を釋する中に四有り。初に「一切法は響の如しと知る」とは、謂はく、出生等は能知の徳を顯し、知一切等は所知を明す。二に分別の下は論じて音聲響の如しと知る。三に別して佛の聲は響の如しと知る、不從内等とは佛は空谷の如く、聲を離れて成ぜざるが故に。内より出づるに非ず。邊感は聲の如し、谷を離れて成ぜざるが故に、外より出づるに非ず。兩ながら俱に相伏るが故に内外に非ず。聲を離れて聞くこと無きが故に内に非ず。根を離れて聞くこと無きが故に外に非ず。非二の故に俱非なり、此に由りて無性の緣起は響の如し。是故に恆に有にして而も有に非ず、有に非ずして而も法を説くが故に亦不壞法施と云ふなり。四に深入の下は能く自の如響の聲を以て法を説くことを明す、亦是れ忍行成就して起用自在なり。中に於て十句有り、初は法に稱うて善く學す、二は如帝釋の下は圓音に喩況す、三に菩薩の下は稱性の起用を明し、四に於無量の下は業用の分齊を顯す、五に受持の下は難進仰學し、六に出生の下は妙音の廣大なるを明し、七に普令衆生の下は業用益を成ずることを顯し、八に而音の下は用即甚深を顯し、九に智音聲の下は定聲の語を辨じ、十に亦不染の下は能知の自在を明す。

第八に如電忍の中に亦四有り。初に喩相とは「般若論」には現法の久しく住せざるに喩

ふ。故に功德施の「論」に云はく、「譬へば電光の生ずる時即ち滅するが如く、心も亦是の如し、刹那に必ず謝す」と。又彼論の八不の中には、不去の義に譬ふるなり、此經の中に亦三有り。一は一切の法の速かに滅すること電の如くなるに喩へ、二は菩薩の身は無礙にして電の如くなるに喩へ、三は菩薩の智の、闇を了すること電の如くなるに喩ふ。二に義を聞かば亦五義有り。初の三は上の速滅等の如し。四に能く影を現顯し、五に體は遠近に非ずして能く遠近を照す。三に亦有無等の諸句有り、之を思うて見つべし。四に文を釋する中に三有り、先は法、次に喩、後に合なり。初の中に二、先は遮に約して止行を成ずるに九對有り、皆二邊を離れて、言絶無寄なり。二に所行眞實の下は表に約して觀行を成ず、亦不受持正法流轉とは、理を得て證せざるが故に。二に喩の中に四有り、初は電の照明、二に譬如下は轉喩なり、鈔曜の日光の、壁上に影を現するが如く、油等も亦爾り、電光に同するが故なり。三に電不離等は體と用と相離れざるを明し、四に電能遠照等は體用不即なり。三に法合に二有り、初に前の照現に合し、二に而其智の下は照遠而非遠に合す。三に如種の下は轉喩なり、種に根芽無けれども能く根芽を生ず、若し有るときは則ち生ぜず、菩薩も亦爾り、無二に二を説く、有なるときは則ち無二なり、故に無礙と云ふなり。二に若菩薩の下は忍成の徳用なり。謂はく、身智無礙にして速疾なること電の如し。

【三】以下、第九に如化忍を釋す。

第九に如化忍の中に亦四有り。初に喩相とは「攝論」に聞思慧の意業所生の果は、有に

【十喻論】 智度論  
第六の初、十喻の  
第十の文。

【涅槃の…亦化】  
亦の字異本に非に  
作る、或はいふ不  
の字の誤りか。

【深法】 異本に染  
法に作る、住きか

似て實に非ざるに喩へ、亦菩薩の變化身に喩ふ。又龍樹の『十喻論』に云はく、「彼化人の、  
生無く老無く、病無く死無く、苦無く樂無くして餘人に異なるが如し、是義を以ての故に、  
空にして實有ること無し、一切の諸法も亦皆是の如く生住滅無し。是を以ての故に諸法は  
化の如しと説く」と、廣くは彼に説くが如し。二に義を聞かば化に四義有り、一は化心に  
依り、二は化事を現じ、三は實に有ること無く、四は義用を現す。「十喻論」に云はく、「猶  
し化事の如きは、空にして實無しと雖も、能く衆生をして憂苦瞋恚喜樂癡惑せしむ、諸法  
も亦爾り、空にして實無しと雖も、能く衆生をして瞋恚等を起さしむ、是を以ての故に諸  
法は化の如しと説く」と。三は亦融通の句數有り、應に準思して辨すべし。四に文を釋す  
る中に四有り。初は法に約して化を辨じ、二は喩に就いて化を明し、三は法に合して化を  
顯し、四は忍成の化用なり。初の中に二有り、初は所知を顯し、後は能知を辨す。前の中  
に先は總、所謂の下は別なり。中に於て初の八句は深法に約す。一に業は心に從ひて起り、  
二に行は造修して成じ、三に安境は虚無なり、四に倒は苦樂を起し、五に妄に取りて情有  
なり、六に世間は眞に依りて有り、七に覺觀は語言を起し、八に想起り相觸す。次の三句  
は菩薩の化を明し、後の二句は佛の化なり、並に各因を出すが故に名けて化と爲す。中  
に於て無生平等とは、無生を得るを以て方に不退と名く、是故に不退は體無くして化の如  
し。問ふ、「此化は有爲の法に喩ふとや爲ん、亦通じて無爲に喩ふとや爲ん。」答ふ、「或は  
唯有爲に喩ふ。「大品」に云はく「問六、若し一切の法は化の如くならば、云何が涅槃の一

【初に能知云云】  
初に決定して廣大を知るは能知の深廣、無量無際等とは所知の深廣、如如を知るとは明徹なるか。

【二五】以下、第十に如虚空忍を釋す

法も亦化の如しと言ふや。答ふ、若し一切の法、乃至涅槃も皆化の如しと説かば、新發意の菩薩は即ち驚怖せん、新發意の菩薩の爲の故に、生滅は化の如し、不生滅は化の如くならずと分別す。或は亦無爲に喩ふ、十地の如化智の中の如き、法界化と名く、或は俱に通ず、『大品』の如し。若し新發意の、菩薩の爲にせず」とは、即ち通ずることを明す。但し彼實の見を破して實法を見せしむ、何んが所喩を定めん。佛子の下は化を結し、世間は前の八句を結し、離世は後の五句を結す。二に決定知の下は能知の相を顯すに、初に能知所知の深廣、明徹なり、具足の下は知自在無礙の起行を顯す。第二に喩に約する中に四十句あり、初に不從心起とは、心内の種子従り生ずるに非ざるが故に。餘は並に知んぬべし。第三に、法に合する中に四有り、初に總じて化行に合し、二に不著の下は化行の體に合し、三に而不捨の下は化行の用に合し、四に譬如の下は重ねて喩をもて、無所有に從ひて行果を建立することを明す。佛子の下は結なり。第四に佛子若菩薩の下は、忍成するの化用に十句有り。初の一は忍成、餘の九は化用なり。化に九義有るを明すに、菩薩の九種の業用を顯す。中に於て初の二句は、先に法、後は喩なり。後の七句は喩を擧げて法を顯す、準釋して知んぬべし。

第十の如虚空忍の中に四句有り、前に同じ。初に喩相とは『佛地論』には清淨法界に喩ふ、差別の相を離るるを以ての故に。『中邊』等の論は圓成實性に喩へ、此經及び『大品』等は一切の法に喩ふ、悉く無性なるを以ての故に。『十喩論』に云はく、「猶し虚空



【十喻論】 智度論  
第六、十喻の中の  
第四の文。

は見るべきの法に非ざるも、遠く觀るを以ての故に。眼光廻轉して則ち縹色を見るがごとし、一切の諸法も亦復是の如し、空にして所有無きも、凡夫の人は、無漏の慧に遠ざかるを以て實相を棄捨して則ち彼我男女等の物を見る、而も實に此物竟に所有無し」と。二に義を問かば第八地の虚空に十義有るが如し、具には前に辨ずるが如し。『十喻論』の中に四の復次の釋有り。初の一は近無遠有に約し、二は性淨を樂と謂ふに約し、三は初中後無きに約し、四は體は實に物無しと、廣く釋すること彼の如し。『佛地論』にも亦十の復次有り、彼の如く應に知んぬべし。此經の中の多門の釋は文の如く知んぬべし。三に亦離有無等の諸句有り、思準して知んぬべし。四に文を釋する中に三有り、初に忍の解を明し、二に佛子如是菩薩の下は忍の行を明し、三に若菩薩の下は忍の徳を顯す。亦總じて四に分つべし。謂はく、標と釋と結と歎となり。釋の中に就いて二有り、先は所解を明し、後は成忍を顯す。前の中に十句有り、虚空の十義を以て十種の法に喩ふるが故に。初の一は虚空無性の義、法界に同じきが故に。二に不起の義、刹の緣従りするも亦無起なるに喩ふるが故に。三に一味の義、法性の無二なるに喩ふるが故に。四に無行の義、行即無行なるに喩ふるが故に。五に無分別の義、法の無分別に喩ふるが故に。六に無異の義、佛力齊等なるに喩ふるが故に。七に三際に遍する義、入地の釋、三世を攝すに喩ふるが故に。八に離言の義、諸法の自相は不可説なるに喩ふるが故に。九に無礙の義、佛身の相障へざるに喩ふるが故に、感に隨ひて即ち應ずるが故に。十に周遍の義、法體の普遍なるに喩ふるが故に。

【五に云云】以下第五に示現諸海分齊の文に就て三解を叙す、初は本記の主の自義なり。

に。第二に成忍の中に三有り、初は總じて三業の忍相の、空に齊しきことを擧ぐ。二に別して空の義を顯すに菩薩の徳に類す。中に於て虚空の十一義を擧げて、菩薩の十一種の徳を顯す。初の一は虚空に等しき身を釋し、二三四の三句は空に等しき忍智を釋す。初の一は體、後の二は用なり。中に於て向は是れ因、成は是れ果なり。五に空に等しき口を釋す。謂はく、方所無きに依りて、空も亦海の際畔なり、古人の云はく、「海水に齊くして、已上を虚空と爲すが故に」と。又云はく、「大海は廣しと雖も、空は其際を容るるが故なり」と。六七の二句は空に等しき身業を釋す。八は空に等しき口業を釋し、九は空に等しき心を釋す、性淨なるを以ての故に。後の二句は空に等しき心業を釋す。三に何以故の下は微責し釋成す。責めて云はく、何に因りてか菩薩、虚空に等しき三業を得るや」釋して云はく、自の善根を思惟すること虚空の如し、此に依りて三業を得るも亦空の如し。中に於て先に十種の善根を擧げたり、皆虚空の如し。一分とは緣起二分の中の眞分なり。一量とは同じく理性の故に。二に不忘一切の下十句は、所得の三業を明す。初に不忘等は意業なり、二に遊行等は身業を明し、三に普於十方等は意業を明し、四に出生等は口業を明す。第四に、徳用を數する中に二十句有り。初の十は十身を得、後の十は三業に通す。一に各標と釋と有り、此十身と前の十行品の十身と、及び離世間品の十身と互に相攝すること有り、知んぬべし。得虚空際の下は三業に通す、皆虚空の如し、中において初は總じて含藏を顯し、次の二は別して口業を辨じ、次の三は別して意業を明す。離貪欲

三六 以下、第二  
六段に重頌を釋す

故とは、心淨なるが故に佛土も淨なり。次の三は別して身業を明す。一は用、二は體、三は相なり、謂はく諸根なり。後の一は總じて智の深きことを結す。問ふ、「此七喻は何の別ぞや。」答ふ、「幻等の五は假有を以て實有を破し、如化は不有の有を以て假有を破し、末後の虚空は性相俱絶を以て一切を破す。又前の六は有を遣りて空を會すること多く、空に依りて有を存すること少し。後の一は有を遣るに空に入ること少く、空に依りて有を存すること多し。」問ふ、「何んが多喻を須ふる。」答ふ、「理智を明淨ならしむるが故に。異門をもて法を顯すが故に。義理堅固なるが故に。長行は竟んぬ。」

第二に重頌の中に一百一十九頌有り、長に十一段を分つ。初の十頌は隨順音聲忍なり。中に於て初の二頌は前の聞眞實法なり。次の一頌は不驚等、次の二頌は信解、次の二頌は受持愛樂、後の三頌は順入修習安住等あり知んぬべし。第二に譬如功德人の下の十頌は順忍を頌す。初の三は初に隨順寂靜觀等を頌し、次の一は不違諸法を頌し、次の一は隨順深入等を頌し、次の二は清淨直心等を頌し、後の三は修平等觀深入具足を頌す。第三に三十三天從り下の十頌は無生忍を頌す。初の三は前の不見有法生、不見有法滅を頌し、次の四は何以故の下の十句の釋成を頌し、後の三は結歎顯勝を頌す。第四に觀察諸世間の下の十頌は如幻忍を頌す。初の二は前の略説を頌し、次の四は廣説を頌す、中に喻と合とあり。後の四は忍行成立を頌す。第五に菩薩摩訶薩の下の十頌は、如焰忍を頌す。初の二は法説を頌し、次の四は喻を約して法を顯す、謂はく、焰水は想從り生ずるが故に

之に喩ふ。又想の故に法有り、而も實には有に非ず、焰の、水に似て而も實に水無きが如し、故に以て喩と爲す。後の四は喩と法と雙べ擧げて、法の甚深を顯す。第六に彼能解世間の下の十五頌は、如夢忍を顯す。初の二は一切世間如夢を顯し、次の一は夢非欲界等を顯し、次の一は夢性寂滅及び不著夢を顯し、次の二は不壞夢を顯し、次の二は夢の無自性を顯し、次の四は受持一切法如夢を顯し、後の三は不壞夢、不虛妄取夢等を顯す。第七に菩薩摩訶薩の下の十七頌は、如響忍を顯す。初の二は知一切法如響を顯し、次の三は分別衆聲、如呼響を顯し、次の三は解如來音不從內等を顯し、次の二は入離虛妄法界巧出、無量聲等を顯し、次の三は無礙音令衆生發起善根等を顯し、後の四は音聲非語而隨順語亦不覺著等を顯す。第八に寂靜の下の七言十頌二十行は、如電忍を顯す。初の二は觀の意を顯し、次の二は不生世間等を顯し、次の二は不隨世流不受正法等を顯し、亦於不二法分別二相等を顯す。次の二は不内世間等を顯し、次の一は不行菩薩行不捨大願等を顯し、後の一は數徳成益を顯す。第九に修習甚深の下の十頌は、如化忍を顯す。初の三は行菩薩行如化を顯し、次の三は知衆生業行等、及び佛菩薩等皆如化を顯し、次の二は著行隨世を顯し、後の二は數徳化用を顯す。第十の虚空忍に亦十頌有り。初の二は衆生及び世間如空、次の二は境と智との如空、次の二は慧及び法の空、次の二は能所説の空、後の二は三世三業の空なり。第十一に是名の下の七頌は、結數顯勝す。初の三は二利の圓、次の二は因果の滿、後の二は廣勝を結す。



【三七】當品は數量の甚深不可思議を説いて行徳校量の分齊を顯す。今初に名を釋す。

【教證】攝論の十一議の中の數識を例と爲す。

【二に：故なり】二に當品の來意を明す。

【三に：如し】當品の宗趣を明す。

【俱舍論】第十二の五左に、解脫經の六十數を引く。  
【智論】大智度論第四の八右。

【智論】現行本第五の二右。  
【百數の當品】本經初に、百千より

心王菩薩問阿僧祇品第二十五。初に名を釋すとは、心王菩薩は是れ能問の人、數法は心に依ることを表す、數識等の如し。菩薩の洞達自在なるを王と名く。阿僧祇は是れ所問の法にして、十數の初なり、首に従ひて名と爲す、若し具にせば應に十大數品と名くべし。二に來意とは前問を答ふるに非ず。何が故に來るとならば、前の十明は行用を辨じ、十忍は行體を明し、今は行徳校量の分齊を顯す。即ち下の母の中の所數の徳是なり。又釋すらく、前の諸品の中の所有の數量なり、謂はく、光覺品等の中に、皆數法有るが如し、今此は釋成するが故なり。三に宗趣とは二有り。一は能數の數、二は所數の徳なり。前の中に亦二有り、先に所知を定め、後に能知を顯す。前の中に阿僧祇とは、此には無數と云ふ、即ち數の極なり。故に諸の準數の中に通じて同數有り。一は俱舍論一に準するに、數六十重に至るを一阿僧祇と名く、録を參。此は小乘に約す。二は智論一の第九に依るに、數十重を過ぐる已後を阿僧祇と名く。『論』に云はく、「一の一を二と名け、二の二を四と名け、三の三を九と名け、十の十を百と名け、十の百を千と名け、十の千を萬と名け、千の萬を億と名け、千の億を那由他と名け、千萬の那由他を頻婆と名け、千萬の頻婆を迦他と名け、迦他を過ぐるを阿僧祇と名く。是の如く數へて三阿僧祇なり」と。解して云はく、此れ既に迦他を過ぐると云ふ、亦即ち通じて後の諸數に通ぐるが故に阿僧祇と名く、此は始教に約して説く。三は『智論』の第六に依るに、此品の文を引き、還た百數有りて阿僧祇に至る等は、此は終教に約して説く。四は此品に依るに、百數の僧祇は始にして是れ初數

不可說轉の轉に至る百二十一重あり其中阿僧祇は百三に當る、今大途に順じて百數といふ【初數】阿僧祇以後十大數の初なるをいふ。

【智論】現行本第七の二十五。

なり。是の如く次第に所數を以て能數に等しくして、第十に至るを不可說轉と名け、不可說轉等を方に數の極と爲す、是故に前教の數の極は乃ち是れ此中の初數なり。故に知んぬ此門に極めて廣く同數に約して辨ずるなり。二に能知を顯すとは亦五重有り。一は人中の數法は最下なり、二は諸天の數法は人に過ぐ、天の中にも亦自在天王の如く、一念に數へて大千の雨滴等を知るに同じからず。三は小乗の中に、舍利弗善く數法を知ること人天に過ぐ。四は諸の菩薩の中において數知亦差別す、下の釋天童子の、沙を算ふるの數法の如き、二乗の能く知るところに非ず。亦文殊普賢の、刹摩の數等を知るが如き、下位の知る所に非ず。五に佛の自ら知る所は最極にして自在なり、一切の餘位は總て知ること能はず。【智論】の第九に云はく、「佛祇洹の外の中に在して樹下に坐す、一婆羅門有り、來りて佛に問ふ、「是林に幾の葉か有る。」佛答ふらく、「若干の數有り。」彼心に疑を生ず。誰か證知する者ならん。」と、即ち私に少しき葉を却けて還りて佛に問ふらく、「此樹林に定んで幾の葉か有る。」佛答ふらく、「今や若干の葉を少く。」と、所却の如くに之を語る。婆羅門知り已りて心に大に敬ひ信じ、佛に求めて出家して阿羅漢果を得たり。是を以ての故に知んぬ、佛は能く恆河沙の數を知ると。釋して云はく、此は佛恆沙の數を知るに約す、今此品の文の唯佛の所知無極の數なるが故に、佛自ら説かく、又云はく、佛智の境界甚深なる義の故なり。二に所數の徳に亦二有り。謂はく、普賢の徳、及び佛の果徳なり、並に各因陀羅網等に通ず、具には下の頌の中に辨ずるが如し。

【三八】以下正しく  
本文を釋するに、  
初に問を釋す。

(二八) 四に文を釋するに此文に二有り、先に問、後に答なり。問の中に亦二有り、先に取問の法を擧げ、後に世尊云何の下は、法を以て諮問す。初の中に何が故に此十數を擧すとならば、是は諸品の別名及び結通の處に、皆此十有り。然れども未だ解釋せざれば分齊を知らざるをもて、顯はして知らしめんが爲の故に問ふなり。十句の中に第二の不可量は、下の答の中には無量と名け、第五の不可數は下に無數と名く。第六と第七とは同じく一句なり、謂はく、不可稱及び不可量なり。不可量は下の答には第八に在り、不思議は第七に在り、餘は並に知んぬべし。

【二九】以下答を釋  
するに、初に文を  
分ち後に長行を釋  
す。

(二九) 第二の答の中に三有り、先に問を數じて聽くを識め、二に心王の敬順、三に法を擧げて正しく答ふ。正しく答ふる中に二、先は長行なり、正しく能數の法を顯す、二に偈頌は所數の徳を辨す。前の中に總じて百二十轉有り、前の十問を答ふ。初の百二轉は初の偈の百千なるが故に百千、百千と云ふ。皆所數を以て能數に等くす、『智論』の皆十億を以て量と爲すに同じからず。「一俱梨と名く」とは、新には俱瓶と名け、或は翻じて億と名く、此れ恐らくは百千は是れ十萬なるを以て、十萬を一億と爲すべからず。此れ即ち億箇の億を方に俱瓶と名け、亦俱梨箇の俱梨を方に一不變と名く、餘は皆此に準せよ。其中に或は此土の名、或は梵音有り、皆是れ數の名なること知んぬべし。後の十八の中に於て、初の十七は是れ因の數、後の一の不可說轉の轉を果の數と爲す、極は即ち數の表を越ゆるを以

【三】以下偈頌を釋す。

【三】は……ことを上の一切を釋す。

て、果海に同じく越絶する故なり。

第二に、頌の中に一百二十三頌半有り、二に分つ。初の七頌は能數の法を定め、二に於彼一一の下は總じて所數の徳を顯す。前の中に數を積みて十重有り。一に初の句は第十の不可説不可説を以て本と爲す。二に次の一句は復積みて一切不可説の中に入る、此二句を總と爲す。三は未だ知らず、幾の不可説を名けて一切と爲すことを。次の二句は不可説劫を顯すが故に一切と名く。四に次の一頌は、彼多劫の所説を以て一塵の内に入ることを辨す。五に前は直に不可説佛刹と言ひ、未だ爲さず、未だ知らず、幾か復不可説劫なることを。故に次の一頌半は一念の中の不可説刹を辨じ、是の如く念念に復不可説劫を盡す。六に次の一頌は多刹塵の内に、各多劫所説の不可説有ることを明す。七に次の半頌は多刹塵の内に、各多の衆生を攝することを明す。八に次の半頌は彼衆生を以て普賢の徳の廣きを敬す。九に次の一頌は、此廣徳の普賢を以て復不可説箇有りて、同じく一端に在くに、同時に各説くこと上の不可説の言の如し。十に半頌有り、十方無邊の世界を類顯すること、亦此説に同じ。此十重の積集の中に、初の六は是れ所用の數法廣し、後の三は核算して能説の人の廣を顯す。是の如き等の衆、是の如き等を説くを以てなり。數數於如の下は、所數の諸佛菩薩の殊勝の徳なり、文の意此の如し、之を思つて見つべし。第二に所數の法の中に二有り。初に果徳の無礙と因位の善寔を明し、二に不可稱説諸如來従り下は、果徳の深廣と因の能趣入を明す。前の中に亦二有り、先に果法の無礙なるを辨



じ、後に菩薩於一毛端の下は四位の善窮を明す。前の中に亦二有り、依果の自在、後に一  
一毛道出名身の下の下は正報の自在を明す。此中に於て四有り、初は總じて三業の自在を明  
し、二に攝取の下は別して語業の自在を明し、三に無礙心の下は別して身意二業の自在を  
顯し、四に淨方便の下は、法を以て機に應ずるの徳を明す。第二に、因位の善窮の中に十  
有り、初に因陀羅網の土を明す、是れ起行の處なり。二に意根より下は三業勤勇の行を明  
し、三に一切衆生より下は應器攝生の行を明し、四に應現色像より下は遊方供佛の行を明  
し、五に成就施心より下は廣修十度の行を明し、六に彼淨法輪より下は攝法遊刹の行を明  
し、七に深入衆生の下は調伏衆生、八に於彼一一毛端より下は三業深淨の行を明し、九に  
彼諸菩薩より下は願智自在の行を明し、十に不可稱說一切劫より下の一頌は徳の無盡を結  
す。第二に、果徳の深廣と因の能趣入を明す中に二有り、亦先は果、後は因なり。初の果  
の中に就きて三有り。先は總じて佛の果徳を歎じ、二に若於一小より下は別して依報の果  
を顯し、三に於彼一一佛刹中より下は、別して正報の果を明す。第二に菩薩究竟より下は、  
因の顯入を明す中に二有り、先は自分の行、二に惑於一時より下は勝進の行を明すなり。  
僧祇究竟んぬ。

【三】 當品は別して佛徳を顯し、佛の壽命は機に違ひて長短あるを明す釋するに四門を問

壽命品第二十六 初に名を釋すとは、往業所引の報果を壽と名け、色心を任持して斷ぜざるを命と名く、品の内に此を辨するが故に以て名と爲す。二に來意とは二有り、一に遠意は普光の十順の問を答へんが爲の故に、十重相望を以てし、各各終極と爲すを頂と名く

く、初に名を釋す  
【二に：明す】  
に當品の來意を明  
すに遠近の二意あ  
り。

【十順】十頂の誤  
【此名字云云】以  
下決釋。

【此壽命云云】壽  
命と言ふは四門に  
屬するを以て、果  
問に答ふるの義を  
許さず。

【二に住意】異本  
に近意に作るは住  
きか。此下略して  
三品の差異を述す

【三に：最なり】  
三に宗趣を明す。

【案同分】有情を  
報を得せしむる因

ることを得、故に知んぬ、安樂界を娑婆の頂等と爲す。古に釋すらく、一將に佛の壽命の問に答へんとす」と。此名字亦相當ると雖も文勢は順ぜず、謂はく、此壽命の問は十地等の前に在りて、答へて此處に在る合らず、十順の問地の後に在りて、更に別答の文無し、故に知んぬ此に屬するなり。二には佳意。前の偈祇品には、佛菩薩の實德平等にして數量を超過することを顯す。此品は別して佛徳を辨じ、機に就いて修短有ることを示す、後の住處品は別して菩薩の法用を辨じ、機に約して住處の差別を明す。三に宗趣とは三義有り。一は汎く命を明すに三種有り。一は報命。謂はく、煖識を捨てざれば退せず、衆同分の故に、不相應行を性と爲す。二は戒命。經の中には淨命と名く、破戒せざるに由るが故に比丘の法を失はず、淨戒を以て性と爲す。三は慧命。不放逸に由るが故に、正法を退せざるを、名けて慧命と爲し、正慧を性と爲す。二に別して此文を定むれば、諸佛の壽命に亦三義有り。一は徳に約す。謂はく、前の如きの三種の命を具足するが故に、其報命是れ無盡なり、善根の所生なるが故なり。二は實に就く。謂はく、命根無盡にして未來を盡すが故に。三は權に就く。謂はく、機の所感に隨ひて修短を現するが故に。今此文の中に斯三義を具す。三に次第を顯すとは亦三義有り。一は漸教に約す。謂はく、娑婆等は局りて地前と爲す、化佛の土と爲すが故に。安樂等は通じて地上と爲す、報佛の土と爲すが故に。乃至賢首の刹は十地の後の不可説處に當るなり。二は同教に約す。謂はく、娑婆等を三乘の土と爲し、漸漸に細に向ひ、一乘に入りて、乃至賢首利等を方に究竟と爲す。何を以て

【三】以下、本文を釋す。

【三】當品は具に住處に約して菩薩の化用を明すに、

の故に。別教に就かば、娑婆即是れ蓮華藏なるを以ての故に。三は別教に約す。娑婆は是れ見聞解行の處、中間の諸土は唯解行の處、最後の佛土は解行の滿と及び證入に通ずるが故に、是故に信滿位の處、亦賢首と名くる故なり。

四に文を釋する中に、心王菩薩の説とは世識の自在を顯す。故に劫數有るなり。中に於て三有り。初に十世界を擧げて漸次を校量し、次に百萬を類顯し、後に最後の玄極を辨す。安樂世界等の如きは、何を以てか晝夜と爲すや。釋すらく、或は蓮華の開合を以て用を辨じ、娑婆の一劫に當ると。又釋すらく、此娑婆の一劫の中に總じて若干の日夜有り、

此日夜の數に依りて、一劫を數へて一日夜と爲し、還りて數へて若干の劫に至り、方に安樂世界の一劫と爲す。即ち此劫量を以て後の諸の世界に於て、皆此に準じて量計す、知んぬべし。是れ則ち最後の世界の一劫に至りては、最初の世界に於て、不可説不可説劫に當るべし。賢首の利に至る已後は、則ち利海平等にして優劣有ること無し。是故に此中に

普賢等充滿すと説くことは、下に望めて最極なるを以ての故に、普賢を以て量と爲し、上に望むれば猶數の中に在るが故に説かず、唯し佛、此諸の世界に充滿すること、『天傳名經』の中にも亦説けり。又玄奘法師は別に一卷を顯じて『顯無邊佛土經』と名く、是れ此

品なり。

菩薩住處品第二十七。初に名を釋すとは、菩薩の大悲の、方に隨ひて攝化し、物に應ずる所を名けて住處と爲し。人處に名を提ぐ。二に來意に亦二有り、一には遠く普光の隨喜

機に續ひ法處に邊  
 初なきを以て、初  
 に品名を釋す。  
 【二に：：：：：】  
 二に當品の大意を  
 明す。  
 【三に：：：：：】三  
 に當品の宗趣を明  
 す。

【四】以下正しく  
 本文を釋す。

【初に仙人云云】  
 以下、別して八處  
 を釋す。  
 【香嚴】一には香  
 稱に釋す。

心等の十句の間に答ふるが故に。二には近く菩薩機に應ずるの所在を顯す故に。又前の品  
 の賢首の刹等は皆是れ淨土なれば、菩薩充滿す、未だ知らず、婆婆の華界に菩薩有りと爲  
 んや、以下や。今此界にも亦無量の菩薩の所住有ることを辨す。故に次に來れり。三に宗  
 趣とは三有り、一は心住なり、謂はく、智は眞理を證し、悲は衆生を念す。二は身住なり、  
 謂はく、實教は淨土に居し、權に染界に現す。此は大悲をもて機に震いて、所住するに由  
 る、亦大智は世の所染に非ざるに由る。此悲智は二相無きに由るが故に、即ち無住處に住  
 す。

四に文を釋せば、處に於て識は自在なることを得るを以ての故に、心王は世を説く。中  
 に於て三有り、初に八方の住處を擧げ、二に四海の住處を辨じ、三に諸國の住處なり。初  
 の中に八方は唯此界に據りて、他方に約するに非ず。此界の中に就いて唯此閻浮提に約し  
 て、是れ離洲に非ず。初に仙人起山は應に是れ東海の蓬萊山等なるべし。二に樓閣山は應  
 に是れ下の文の南海岸の樓閣城の側、自在海神の所住處等なるべし。又梵本を勘ふるに、  
 應に離洲山と名くべし。三は金剛尖山は、應に是れ西海の邊等なるべし。四は香嚴山は、  
 應に是れ華花の香山王なるべし、是れ彼山中に多く菩薩の住すること有るを以ての故に。  
 五は清涼山は即ち是れ代洲の五臺山是れなり。中に於て現に古の清涼寺有り、冬夏  
 積雪あるを以ての故に、以て名と爲す。此由及び文殊の靈應等は、傳記三卷有り、具には  
 彼に説くが如し。六は杖堅固山は梵本を勘ふるに、正しくは制多山と云ふ。此には歸宗と



云ふ、即ち塔の類なり。應に此國の正南の海邊に在るべし。七は樹提光明山は、應に是下の文の觀音の住處たる、光明山と相連なるべし。梵には樹提と名く、此には照曜と云ふ。八は香風山は、應に香山の西畔に在るべし、風穴有るが故なり。此八は皆山に在りては、山居寂靜、長道の處を表す、賢聖所住の故なり。

第二に四の大海の中に二の住處有り、一に枳怛とは、具には阨枳多と云ひ、此には涌出と云ふ、即ち海島山の名なり。曇無竭は此には法生と云ひ、亦是法勇と云ふ。二窟は是れ海の別處なり、梵本に準ずるに、應に間錯莊嚴窟と名くべし。

第三に毘舍離の下は、諸國の中の菩薩の住處を明すに十三所有り。初に毘舍離は是れ中印度なり、亦吠舍離といひ、此には廣嚴城と云ふ、即ち維摩の住する所なり。此城の南十四五里に塔有り、是れ七百の賢聖の、重ねて結集の處なり。更に南八九十里に僧伽藍有り、其側に過去の四佛の座、及び經行せる遺迹の處有り、具には『西域記』の第七に説くが如し。二に巴連弗とは具には波吒喇補怛羅と言ふ、其波吒喇は此は是れ黃華の名にして、即ち母の號なり。補怛羅は此には子と云ふ、兒なり。即ち上代の黃華女の子創めて此に於て居するが故に以て名と爲す、亦是れ中天の摩竭國なり。具には『西域記』の第八に説くが如し。三に摩偷羅とは正しくは秣鞞羅と云ひ、此には孔雀と云ひ、或は密と云ふ、並に是れ古世に事に因りて名と爲す、是れ中印度なり。此國の中に舍利弗等の塔、及び文殊師利の塔有り、王城の東五六里に於て山寺有り、是れ烏波毯多の造する所の寺なり、北

【持神影】又は俱  
珍那に作る。

巖の間に石室有り、是れ毘多の人を度し、壽を安ずる所なり。又東に大林有り、中に過去  
 の四佛經行の迹有り。亦舍利弗等の千二百五十人の修定の所有り、具には西域記の  
 第四に在いて説けり。又梵木に準するに、此處は是れ窟の名なり。四は拘陳那耶とは、正  
 しくは俱珍と云ふ、是れ名なり、此には大盆と云ふなり。那耶は法律と云ふ。昔、五通の  
 仙有り、此に於て一つの大盆を置き、水を畜へて仙を修す、因つて斯號を立つ。彼仙此に於  
 て廣く法律を説けり。謂はく、護淨、經行、養性等の法を、人をして修學せしめ、相繫  
 けて絶やさず、衆人同じく拘陳那を姓とす。五は清淨彼岸國は應に是れ南印度なるべし、  
 牟眞は此に解脫と云ふ、是れ龍の名なり。鄰陀は此には處と云ふ、即ち解脫龍の所住の  
 處なり。六に風地とは、風孔有るの處を無礙と名く、是れ龍王所造の窟なり。七に甘露園  
 とは正しくは劍蒲と云ふ、是れ北印度なり。此園に多く美女を出す、故に以て名と爲す。  
 最上巖とは大集經の中に慈窟と名く。八に眞旦とは、或は震旦と云ひ、或は支那と云  
 ふ、是れ此漢國の名なり。那羅延山は此には堅牢山と云ふ、即ち青州の界に東牢山有り、  
 應に是れなるべし。彼に現に古佛の聖迹有り。九に邊夷國とは梵語に準するに、當に疎勒  
 國に似たり、今は俱利伽羅の江南に牛頭山有り、彼中に現に佛窟寺有り、即ち北印度の境  
 なり。傳に云はく、「四辟支佛の影有りて、時時に出現す」と。又此窟古時亦影有りて  
 此處に居す、現に靈王の陵有るが故に、亦邊夷と名く。十に罽賓とは正しくは迦濕彌羅と  
 云ひ、此には阿誰入と云ふ。此國舊には是れ大池なり、末田地は佛滅後に於て彼池の龍を

【三五】當品以下三品は、修生の滿果を明す中、初に總

隋すとき、膝を容るゝ處を乞ふ、池龍既に許すに、羅漢、通力を發し以て其身を廣くし、多の地處を得るに因りて、遂に國及び併伽藍を造ることを得たりとは、佛の記したまふ所の如し。中に於て現に佛牙寺及び五百の羅漢の、毘婆沙を造れる處有り、「西域記」の第三に説くが如し。薛提尸山は此には遠聞山と云ふ、謂はく、多處の遠人皆聞くが故に。即ち此國の四周の山の處なり。十二に難提拔檀那とは、難提は此には喜と云ひ、拔檀那は此には増長と云ふ、即ち南印度の境なり。梯羅浮呵とは、此には上座と云ふ、即ち尊者の名なり。此窟に居せしを以ての故に、因りて以て目と爲り。「文殊問經」に、體毘裏部此には上座部と云ふとは、此名に同じ。十二に菴浮梨摩國とは、正しくは菴羅と云ひ、此には無垢と云ふ、是れ菓の名なり。此菓は能く衆の病垢を療するを以ての故に無垢と云ふ、彼國には多く此菓を出すが故に浮梨摩と名く。正しくは邪曲を治するを、此に託して號と爲す。十三に乾陀羅國とは正しくは建跋と云ひ、此には香と云ふ。陀羅は此には過と云ふ、謂はく、此國處に過くして、香草先に發するが故に、以て名と爲す。寂靜窟とは相傳ふるに是れ佛の影を留めし窟なり。具には「西域記」及び「大集經」「月藏」の第十卷の中に説くが如し。上來は此閻浮提の菩薩の住處を明す、餘の四天下は之に準ぜよ。餘の須彌山界、及び樹形等の世界は並に之に準ぜよ、無盡無盡なり。

佛不思議法品第二十八。初に名を得すとほ如来の果法は、適に言慮を超ゆるが故に、以て名と爲り。二に來意とは三有り。一に遠とは此下の三品は通じて普光の佛の無土地等の

じて果徳の體用の味勝不可思議を明す。釋するに四門あり、初に品名を釋す。

【二に：來れり】以下、當品の來意を明す。

【普光の：答ふ】第二普光明殿會の初佛の無上地等の十句の間に答ふ。

【二に：來れり】以下十地品の後に對す。

【三に：故に】以下當品の宗趣を明す。

【若し一味云云】維摩、思益經等。今總じて先覺品を指し、名號、四諸品を等取するか。

【信等の善根】信は萬行の首、故に信進念等を該ぬ。

十句の間を答ふるが故に。問ふ、『若し遠く前の問を答ふるならば、何が故ぞ此に更に請すること有りや。』釋すらく、『相去ること遠きを以ての故に、更に發起するなり。』若し爾らば前の品は何んが爾らざるや。釋すらく、『前の品は同じく是れ因位なり。今は果法を辨す、位を隔つるを以ての故なり。』又釋すらく、『此は是れ法を念じて説を怖ふなり、是れ別して請するに非ずや。』若し爾らば何爲ぞ前の諸品に此例無きや。釋すらく、『果法は深細にして法器を顯すこと懸至なるが爲の故に、須らく念すべし。因法を説くことは此に反するが故に例に非ず。二に次に來意とは、前は已に修生の因滿を辨するに爲りて、今此は正しく酬因の果圓を顯す、故に次の三品來れり。三に近き來意とは、前の住處品は是れ因滿の終なり、此品は是れ果成の首なるが故に次に來れり。

三に宗趣とは、此中には正しく佛の果徳の法を明すに、略して四門を作る。一は通じて佛徳を辨じ、二は別して義相を顯し、三は此文を辨定し、四は不思議を顯す。初の中に、若し一百四十の不共法等を説くは、小乘及び初教等に通ず、若し淨法界及び四智を徳と爲すを辨するは、即ち始終漸教に通ず、若し一味の實徳を以てするは、則ち唯願教なり。光覺等の品に説くが如し。若し一切無盡の徳を具すとは、此文等の如し、是れ一乘圓教なり。二に別して義相を顯さば、諸佛の功徳は二種を過ぐる事無し。謂はく、修生と本有となり。此二相對するに總じて四句有り。一は唯修生なり。謂はく、信等の善根は本無今有なるが故に。二は唯本有なり。謂はく、眞如は恆沙の性功徳なるが故に。三は本有の修生な



【若し斤兩云云】  
以下別して顯すに  
六。初に前の第二  
句に喩ふ。

【樹王】 菩提樹。  
【丈六】 一丈六尺  
の佛身即ち應身佛  
をいふ。

り、謂はく、如來藏は彼了因を待つ、本隠れ今顯るるが故に。四は修生の本有なり、謂はく、無分別智等は内に眞如に契ひ、冥然として一相なるが故に。此に四義有れども四事は無し、猶し金莊嚴の具の如し。若し斤兩を稱取せば、本有は金の如し、若し嚴具の相狀なれば工匠の修生なり。若し嚴具を成ずるに由りて、方に金の徳を顯すは則ち修生の本有なり。若し嚴具は、金を攪りて成ずれば、別の自體無し、則ち本有の修生なり、是に知んぬ。唯金にして而も嚴具たることを礙へざるが故に、唯一法身にして報化たるを礙へず。唯嚴具にして而も金たることを礙へざるが故に、單の報化も亦即ち法身を具す、餘は並に之に準ぜよ。是故に化身即法身等と説くことを得、全體を收め盡す、餘は之に準じて思ふべし。三に此文を辨定すとは、然も上の四義攝するに二門有り。一は佛の自徳に約するに、圓融無礙不可説なり。二に機に就きて出現するに復二門有り。一は分相門なり、謂はく、化身は地前を化するが爲に染土等に現じ、報身は地上を化するが爲に淨土に現す、此は三乘の差別の機に約して説く。二は無礙門なり、謂はく、報化を分たす、權に即して實に實なり。樹王の下に十佛の身を現するが如し、丈六は十方に遍し、八相は法界を該ぬ、諸儀は九各各限量無く、亦限量有るを礙へず、是れ則ち限無限の無礙なり。且は一乘の圓機に約して説く。攝するに四重有り、此品に説くが如し。一は略して十門を擧ぐ、品の初の所問の如し。二は次に三十二門を辨す、答の中の六位の如し。三は具に三百二十門有ることを顯す、答の中に別して辨するが如し。四は廣く多門を明す、十方に類して、一一皆各各無盡無盡な

【果の用云云】佛果上の作用は吾人凡情の及ぶ所に非ざるをいふ。【第四を辨す云云】以下、別して果の用を辨す。

【三六】以下、正しく本文を釋す。

るが如し。四は不思議の義を顯すとは、汎く論ずるに四有り。一は理の妙は測り難し、二は事の廣は知り難し、三は行深くして世を超ゆ、四は果の用は情を超ゆ。今此品の文は通じて前の四を具し、別して第四を辨す。第四を辨する中に復開きて四となす。一には何者か不思議なる、二は何に於て不思議なる、三は云何が不思議なる、四は何の用か不思議なる。初の中に略して十種を辨す。一に智は世表に超え、二に悲は常情に越え、三に無思にして事を成じ、四は染に同じて淨なり、五は所作祕密なり、六は業用廣大、七は多少即入、八は分圓自在、九は依正無礙、十は理事一味なり、並に文に顯なるが如し、繁を恐れて列ねず。二は何に於て不思議なる、亦四位有り。一は世間に過ぐるが故に。二は二乘に越ゆるが故に。三は因位に超ゆるが故に。四は法の自體を顯すが故に。三は何が不思議なる、亦四種有り。謂はく、聞思修及び報智の境に非ざるが故に。四に何の用か不思議なる、亦四種あり。謂はく、信向せしむるが故に。行を起して求むるが故に。分に隨ひて證するが故に。圓滿に得るが故に。

【三七】第四に文を釋すとは、此下の三品は果法にして亦諸徳有り、將に三身に配せんとす。謂はく、初は法、次は報、後は化なり、文恐らくは顯せず、此品の中に廣く八相等の用を顯すを以て、豈唯法身ならんや。亦有が將に佛の體相用に配せんとす、後の二品は然るべし。初品に妨有り、此品中に亦相と用有るを以てなり。今謂はく、此品は總じて佛徳の體用の殊勝を顯し、次の相海品は別して勝徳の相を顯し、後の小相品は別して勝徳の益用を辨

【三七】 初に請分を釋す。

【三輪】 身、口、意業。

【三八】 二に加分を釋す。經の一爾時下。以下の文の

す。此初品の中に就きて、文を分つに四有り。一は請分、二は加分、三は證分、四は説分なり。

初の分の中に二有り、先に能請の人を明すに、衆同じく念ずるは、法の深細なるを表すが故なり。二には正しく所念の十法を顯す。此に不思議と言ふは、果徳の法の、言慮を出過することを顯す、此不思議を念じて其説を怖ふなり。初の一は佛の出處を問ひ、二は出現の因を問ふ。謂はく、本願に由る、覺本には過去の願、清淨と云へり。三は出生の處、種族の家を問ふ、此釋、覺名に依れば、是れ因中の佛の種性等に非ず。四は總じて機に應じて世に現するを明し、次の三は別して三輪の業用を顯す。八は大用の體を問ひ、九は大用の相を問ひ、十は大用の自在を問ふ。

第二に加分の中、先に法器を知る、二に與青蓮等とは正しく加相を顯す。果は自ら彰れず、寔に因に由りて顯るることを表すが故に、青蓮に於て其をして説かしむるなり。十句の中に初の五は勝徳を興へて身に充たしむ。中に於て初の三句は佛の三業を興へ、佛の辨等に同ずることを顯す。神力は是れ身業、智は是れ意業、辯は是れ語業なり、後の二句は佛の福智を興ふるが故に、無畏は是れ智なり、後の五は智用を興へて心に充たしむ。一は究竟等は佛の内知法界無餘智を興へ、二は佛の作用境界智を興へ、三は佛の無礙行智を興ふ。謂はく、無思にして事を成ずる等なり。四に分別等は佛の法器を知るの智を興へ、五に不可數等は佛の多門善巧智を興へ、其をして能く説かしむ。一何が故に身請の加無き。

『定に入らざるを以ての故に。』何が故に唯意の加なる。『法界に入らしむるが故に。』  
『此菩薩、豈法界を證せざるや。』釋すらく、『彼の證に分限有り、甚深に非ざるが故に、  
無礙に非ざる故に。』

【三九】 三に證分を釋す。

第三に證分の中に、初の五は自利にして一は總なり。謂はく、佛果法界は無障礙なるが故に、佛加して得せしむるが故に入と云ふなり。下の文に云はく、『一切諸佛の所説は皆甚深法界に入る』と。餘の四は別して顯す。一は深行、二は廣願なり。此二は自分にして即ち是れ普賢法界の行願なり、今既に此に入るが故に成ずることを得。三は順果、四は現果なり、謂はく、佛果の自嚴なるを以ての故なり。後の五は利他の徳にして、一には總なり。悲は衆生を覆ひて、要す垢を離れしめんとする故に、淨行を成ぜしむるが故に、淨信を得しむるが故に、清淨と云ふ。餘の四は別して顯す、一は量智、二は理智、三は總持、四は辯説なり。何が故に入三昧とは云はざる。』古に釋すらく、『此は即ち是れ定に入る』と。又古に釋すらく、『果法は已に深し、更に定に入りて信解を退せんかと恐るることを顯すが故に定に入らず、復法深きが爲の故に、密かに法界に入る』と。今更に釋すらく、『此は加力を得て勝進して佛果法界に入り、能く説かしむるが故に。』

【四〇】 四に説分を釋す。經の「爾時、青蓮華」等の下。

第四に説分の中に、蓮華藏に告ぐることは、深奥の勝器なることを顯す。又果法を含攝して、當に聞蒙有るべきの名を表す。果徳は限無し、略して三百二十門を以て、以て前の問を答ふ。中に於て初の十門は、宗を標して略して答へ、後の三百一十は義に隨ひて廣く



【四一】以下、説分の中第二に義に隨ひて廣く答ふる文を釋す。

顯す。前の中に、初句の所住の淨妙は、前の刹の間を答へ、二に住無量自在は淨願と種姓の二間を答ふ。此は俱に是れ佛出の所依なるを以ての故に自在と云ふ。三に機に應じて出現して時を失せずと名くるは、即ち前の佛出の間を答ふ。四は法輪、五は四辯は音聲の間を答ふ。六に不思議法は、神力、無礙住、及び解脱の三間を答ふ。七に淨音は重ねて前の音聲の分齊を顯す。八に分別法界は前の智慧の間を答ふ。九に光明照は身業の間を答ふ。十に亦語業所説の至深なるを顯す。又釋すらく、此十は總じて如來の機に應じて事を成ずるを明す。一は佛自住の眞理を顯し、二は不滯寂を明すが故に自在と云ふ。三は但内に滯寂せざるのみに非ず、亦外に應じて差はず、四は應機不失にして何等の事をか作す、謂はく、轉法輪なり。五は何を以て轉ずる、謂はく、四辯なり。六は何なる法をか説く、謂はく、不思議の法なり。七は能く轉じて何に齊るや、謂はく、至らざる所無し。前は辯説に窮盡すること無くして一切時なり、此は音聲の一切處に遍きことを明す。八は所轉の法は幾許と爲すや、謂はく、無量法界なり。前の不思議の法は深きを顯し、此中の無量は廣きを明す。九は語用既に爾り、身用は云何ぞ、謂はく、光明普く照す、謂はく、苦根を息めて惡業を滅し、羣機を警めて法に入らしむる等なり。十音教は即ち理に同じきが故に入法界と云ふ。又説法は機に就き、悉く眞を證せしむるが故に、入法界と云ひ、究竟して深法に入らざること有ること無きが故にと末後に結歸するなり。

第二に義に隨ひて廣く答ふる中に三百一十句有り、大なる間に三十一位有り、古の諸

【前の第一佛刹】  
當品の初を指す。

【四三】 自下は隨釋  
するに十一門ある  
中、第一大段の前  
の第一佛刹の間に  
答ふる文を釋す。

徳に依ば、前問を答ふるに屬するも、問の次第に依れば、文極めて不順なり。今更に超次して科配せば少く相當ること有れども、終に自ら見難し。良に以みれば佛徳は無碍自在にして、言の能く次を顯すところに非ず。中に就きて長に分ちて十と爲す。初の四門は前の第一佛刹の間を答へ、二に十種出生住持智慧より下の三門は、第二の淨土の間を答へ、三に十種功德無惡清淨より下の二門は、第三の種姓の間を答へ、四に於一切世界一切時有一十種佛事より下の三門は、超えて第七の佛智慧の間を答へ、五に十種無量說佛法門より下の三門は、第六の佛音聲の間を答へ、六に十種無礙住より下の六門は、超えて第九の佛無礙住の間を答へ、七に具足十種不思議法已成正覺より下の六門は、却て第四の佛出世の間に答へ、八に十種最勝力より下の二門は、第八の佛神力の間を答へ、九に十種定法より下の三門は、却て第五の佛法身の間を答へ、十に十種一切智住より下の三門は、第十の佛解脱の間を答ふ。目らく處に此禮を作せども、通相圓融すること、並に準じて知んぬべし。

(四二) 初の四十に就いて、初の十は佛の六根の依正を辨じ、勝徳の體を明し、二に諸刹に普くして、機に應じて出生し、處に依り起用することを明し、三に用は機に應じ、化は時を失はざることを明し、四に業用廣大にして圖度を出過し、並に刹に於て現ず、此は正を擧げて依を顯し、以て初の間を答ふるなり。一一の間の中に各各三有り。謂はく、標門と別して列ぬると、及び總結となり。初の中に色身等を法界と名くることは、一多の故に法界と

【第二に云云】經文の「佛子、十の無盡智を出生し」等の下。

【初の五】下天、出世、出家、成道轉法輪。

【果象】異本に果象に作るは佳し。【異異業應】經の「種種に莊嚴し、無數に莊嚴す」等をいふ。

【第三に云云】經文に「十種の未曾失時有り」等と説く下。【六は…失せず】經に「捨を行ずる

名け、二は廣の故に法界と名け、三は妙の故に法界と名く、十八界の中の法界の攝なるを以ての故に。四に所依に従ふ、法界を證して成ずるを以ての故に。五は義相に従ふ、謂はく、妙軌法に稱ひ、分齊、各別なるを界と名く。六は當相に約す、即ち眞性に同じきが故に法界と名く。此色身を總と爲す。是れ餘の入所依なるが故に。次の六は知んぬべし。第八に無礙解脫は是れ自在の業用なり、下の文の如し。一塵の内に於て三世の佛等を現す。第九に嚴土應機、第十に因圓果滿なり。第二に出、生無盡智とは、前は相を以て性に從へて同じく法界と名け、今は用を以て體に従へ、名を同じうして智と爲す。又亦前は則ち相、性に依りて現じ、今は用、智よりして起る。無盡に三義有り。一は時無盡なり。謂はく、念念等なり。二は處無盡なり、謂はく、一切の世界等なり。三は用無盡なり、謂はく、命終出生等なり。初の五は知んぬべし、第六は所成の利益を明し、第七は嚴身應機なり、謂はく、果象關等なり、第八は異異業應なり、機惑不同なるを以ての故に。第九に清淨衆生とは、謂はく、衆生を調伏して垢障を離れしむ。上の九は別して辨す。第十は三世の佛を現す、爲種種根等は總じて多門の益物を結するが故なり。第三に未曾失時とは、所作は宜きに合ひ、衆病相應す。初の一は機感現するに成じて差失せず、二は宿願の善根、業報差はず、三は根熟せるに記を與へ、善根を増せしむ。又は當得の果を記する時に改易無し。四は邪歸依の衆生等に於て神力をもて應ず。五は念佛の衆生等に於て、應に佛身を現す。六は化は益を成じ訖りては、捨てて而も失せず。七は城に入りて行乞するに、食時



に未だ曾て時を失はず」と云ふを釋す。

【第四に云云】經文に不可喻不可思を説く下、

【覺樹】正覺を成ぜし處の樹即ち菩提樹のこと。

【用にして恆に廣】寂用無礙自在なるをいふ。

【闕】以下第二大段に第二淨願問を答ふる文を釋す。

【及び】古に反に作る。

に至らんと爲す。八は佛を見て喜を生じ、化を受くるの時に至る。九は變く化し難きを捨てて、戀仰を生ぜしむ。十は機に隨つて、逆願自在なること思ひ難し、亦是れ總名なり。第四に世に比況無きを不可喻と云ひ、情に慮ること能はざるを不可思と名く、此は業用自在にして、情況を超過することを顯す、初の四は知んぬべし。五に不離本等とは、覺樹を起たずして天に昇る等の如し。六に決定一法等とは、一法即一切法なるを以て、而も一法を壞せざるが故に決定と云ふ。七に於一念等とは、如意の神力は能く速かに普遍す。八は示現果徳、九は現三世佛、十は教化衆生なり。常に滅定に在りて、用にして恆に寂なるを以ての故に。上來は初の問を答へ竟んぬ。

第二大段に出。生住持智慧の下の三門は、前の第二の淨願の問を答ふ。初の十は皆本智に依りて後智を出。生し、衆生を教化するが故に出。生住持智と名く。又釋すらく、理實には無差別なれども、智は此を照して及び知差別智を起す、謂はく、理に住して事を持つが故に出。生住持と云ひ、亦事に住して理を持つが故に皆智と云ふ。若し顧らざんば、事に住して理に迷ふ、是れ愚にして智には非ず。初の中に、先は理實を擧ぐるが故に趣向無く、後は隨事を顯すが故に淨願を出。生す。此は正しく前の問を答ふ、之を標すこと首に在り。第三の中に、無二とは能覺所覺無し、而生等とは巧に能所を出して無二に乖かず。下は無二に乖きて二を出。生す、餘は並に之に準ぜよ。第二に内法とは徳を續みて心に在るを名けて内法と爲す、亦是れ内心所證の法なり。一は内身に垢無くして能く三世に



【總持】陀羅尼の譯語。善法を持して散ぜしめず、惡法を持して起らしめざる力用をいふ

【四照】古に内照に作るは佳し。

【四四】以下、第三大段に第三の種姓の間に答ふる文を釋す。

順入し、二は内に三輪を具す、一は身業神通輪、二は語業正教輪、三は意業記心輪なり。三は内に總持有りて法智を持し、四は内に四辯說法智を具し、五は内に無緣の大慈悲有り、六は内に理を證して機を觀ず。七は内に善根有りて、並に是れ巧便をもて、衆生を調ふるに堪へたり、八は内に法界有り、是れ所證なり。住とは是れ智能く證す、無礙住とは能所平等にして、障礙無きが故に。九は内に多佛を現じ、十は四照多劫本來是れ一日、新に相即するに非ず。第三に甚深大法とは、業用無崖なるを名けて大法と爲し、無思にして理に稱ふを名けて甚深と曰ふ。又小に過ぐるを大と云ひ、因に超ゆるを深と曰ふ。初の二は力用大、次の二は攝化大、次の四は三業不虛大、次の二は依正自在大、末後の一は正覺大なり。此に一句を剩すは増數の十なり。上來淨願を答へ竟んぬ。

第三大段に離惡清淨の下の二門は、第三の種姓の間に答ふ。初の十は過として盡さざること無きが故に離惡淨と云ひ、後の十は德として圓ならざること無きが故に究竟淨と云ふ、皆是れ種姓清淨にして、譏嫌すべきこと無きが故なり。初の十の中に、初の一は宿因淨、二は現果淨なり、謂はく、三世の如來の家に生ず。正しく種姓の間に答ふるに、之を標すること首に在るが故なり。三は未來淨、四は三世淨なり、皆無著なるを以ての故に。五は一味淨、六は多德淨、次の二は身語淨、九は名稱淨、十は應念淨なり。第二に究竟淨とは、亦是れ畢竟じて無染なり、初の三は願行淨なり。捨離優婆提とは、有が釋すらく、此は是れ優婆夷なり、此れ女想を離るるが故にと。有が釋すらく、此には翻じて聞鈍

と名く、佛の久捨を明すが故に清淨と云ふ。又翻じて戲論と名く、佛已に捨するが故に。次の四は依正の家眷淨、後の三は理智業用淨なり、亦是れ法身、般若、解脱の三徳淨なり。上來は種姓の間を答へ竟んぬ。

【四五】以下、第四大段に第七の佛智慧の間に答ふる文を釋す。

第四大段に、於一切世界の下に三門有り、超えて第七の佛智慧の間を答ふ。中に於て、初の十は智用の機を照すを明し、次の十は智體の宏深を明し、後の十は智徳の無斷を明す。初の十とは時處廣大にして頓に起りて益を成ずるが故に云ふなり。又一切世界とは遍なり、一切時とは常なり、謂はく、相續して絶ゆること無し。『攝論』に云はく、「恆に樂を受くるが如く、恆に食を施すが如し」等と。初の二は現身說法、次の二は増行して位を定む。正法位と言ふは初地已上なり。次の二は機に應じて利に遊び、次の二は悲化をもて物を攝し、後の二は體用をもて生を利す。第二に無盡智海とは、前は應用常に遍く、此は則ち智海宏深なるが故に無盡と云ふ。一に智は理に同じて深く、二に福は智に同じて廣く、三に所見は懸に遠く、四に善根量り難し。五行は法性に同じ、六に法雨は滂流し、七に徳を盡すること無盡なり、八に行願廣大、九に常用は竭ること無く、十に心行海を知り、十一に福智無盡にして一句を利す。第三に常法とは、此十法は是れ諸の如來常に所有の故に。常に所行の故に。初の二は行を成じて過を離れ、次の二は大悲と大力、次の二は法を説いて生を度し、次の二は應化して身を現じ、次の二は存没して念無し。智慧の間を答へ竟んぬ。

【圖六】以下、第五  
大段に前の第五の  
佛の音聲の間に答  
ふる文を釋す。

【圖七】(Dhāraṇī)施  
與又は布施と譯す

【圖七】以下、第六  
大段に、前の第九  
佛無礙住の間に答

第五大段に、十種說佛法門より下の三門は、前の第五の佛音聲の間に答ふ。中に於て初の十は音聲說法、次の十は餘事說法、後の十は因を擧げて果を結す。初に就いて說法門とは、所說の法門を顯すに、初の三は衆生當位の法門を説く、一に如來藏は是れ果なり、二に善惡不動は是れ行なり、三に苦樂等は是れ業所得の報なり。次の二は化衆生門なり、一に無量方便度衆生とは、謂はく、貪欲多き等には不淨觀等を教ふ。二に淨衆生行とは、戒學等を授與す。次の二は化菩薩門なり。一は行、二は顯なり。次の二は染淨欣厭門を説く、初に染界の成敗を説きて厭はしめ、後に淨を説いて欣はしめ、末後は三世の佛興を説いて往いて供養せしむ。第二に常爲衆生作佛事とは、此十法を以て衆生を聞覺し、法に入りて益を成ずるを、名けて佛事と爲し、作停息無きが故に常と云ふなり。初の二は身語の作、次の二は受不受にして佛事を作す。謂はく、受けては檀を成ぜしめ、不受には彼をもて少欲を做ひ學せしむ。次の二は四の大神力を以て佛事を作し、次の二は名號と刹土をもて佛事を作し、後の二は刹海默住して佛事を作す、乃至一切の法は悉く佛事を爲すに堪へ、常に作して息まず。第三に堅固土法とは、若し能く此十堅固の法を行するを堅固土法と名く。一は剛堅、二は行堅、三は教化堅、四は大悲堅、五は大心堅、六は背世向出堅、七は背小向大堅、八は照法淨心堅、九は厭大救生堅、十は代苦攝生堅なり。上來は佛の音聲の間に答へ竟ぬ。

第六大段に、十種無障礙住より下の三門は、超えて第九の佛無礙住の間に答ふ。中に於

ふる文を釋す。經に佛の十種の無礙莊住を明す下し。

【二同】 上同の觀

て初の十は正しく所住の無礙を顯し、次の十は具德無礙を明し、後の十は彼自在無礙を辨す。初の中に、身智を安ずる所、物の能く礙ふること莫きを無礙住と名く。初の五は身は世界に於て無障礙住なり、後の五は智は所知に於て無障礙住なり。中に於て初の二は、證理說法住なり、謂はく、三世法界に住す、是證は三際を絶するの眞性なり。次の二は下化二同住なり、謂はく、下は衆生に於て根を知りて巧に化し、上は佛法に於て慧身安住す。後の二は分別染淨住なり、一句を剩す。第二に最勝とは、已に下位を超ゆるが故に。無上とは上に加過するもの無きが故に。莊嚴勝德をもて自ら嚴るが故に。十の中に各各先づ莊嚴の義を釋し、後に其名を結す。初に三は三業の嚴を明す。第二に語業の中に、八音等は聲體の具德を明し、演說等は聲用の善說を明す。悉令等は物を益して虚からず。三は意業の中に、先に意攝の衆德を明し、於一念等は意用の無崖を顯す。四に光明莊嚴の中に、初は光の體、一一等は回業を明し、普照等は示現業、除滅等は止業降伏等、現佛等は敬業なり。五に咲花の中に、初に普照の義を顯し、悉授記等は癡を離るるを顯す。謂はく、益を成じて虚しからざるが故に。六に出經、法身は染を離るるを嚴と爲す。七に常光嚴の中に、諸餘の光は皆此中より出づるを以ての故に、名けて藏と爲す。八は妙色に六句有り。初の一は總、餘の五は別なり、皆世表に超絶するを名けて妙と爲すなり。九に種姓嚴とは、此は是れ生種姓も亦是れ眞如の家に生ずるなり。十は大慈等嚴の中に、無上受者と言ふは、愛施田の中において佛は最も無上なるが故に名く。第三に自在正法とは、



法に於て自在にして障礙無きが故に。初の二は教法に於て自在なり、先に教を説き、後に根に應ず。次の二は世界に於て自在なり、先に動、後に嚴なり。次の二は時處自在なり、先に時、後は處なり。亦是れ住壽自在、遍至自在なり。七は正覺自在の中に二の釋有り。一は文に隨ひて釋す。謂はく、一切の佛は各各自の所化を調化することを爲すが故に。各各成正覺を示すが故に念念と云ふ。是れ一佛に非ず、既に各各成ずることを示す、先に覺せざるを、今乃ち始めて覺するに非ざるが故に、非不先覺等と云ふ、此は是れ化身の用を現す。二に義に就いて釋せば、一は佛即ち一切衆生に遍ねく、十方微塵に周くして三世を盡し、念念同時、前後に俱に正覺を成ず、此れ則ち實成にして化に非ず、但し成ぜざれば則ち已みなん、成ずれば則ち舊來成なるを以ての故に、非不先覺等と云ふ。三世を攝し盡すを以ての故に、過去に成ぜざること無きが故に不住學地等と云ふ、此は宗に準じて之を思へ。八は諸根互用自在なり、若し小乘ならば但變化の用、漸教大乘は即ち改轉の用、圓教一乘は亦不變不改にして一たび入るに舊來一切の用を作す。九は毛孔に衆生を置くは、法性融通門に依る、之を思ふべし、此は是れ衆生世間自在なり。十は一念に正覺を現す、此は是れ智正覺器世間自在なり。中に於て、先に一念に於て一等法界の佛を現じ、二は彼念の中に於て多佛を類顯し、三は一念を擧げて多念を類顯し、四は一華座を擧げて虚空法界等の世界を類顯す。各各等しく法界の佛身を現すること、之を思へ。當に知るべし、佛境界の不可思議は此に在るなり。上來は無礙住を答へ竟ぬ。

【六八】以下第七大段に第四の佛出世の間に答ふる文を釋す。

第七に、具足十種不思議法已成等正覺の下の六門は、却つて第四の佛出世の間に答ふる。中に於て初は縁を擧りて覺を現じ、二は無の中に巧に現じ、三に所現は量り難し、四は果位齊均なり。五は智は妙境に住し、六は法を知りて遺すこと無し、各各門を提げて見るべし。初の中に十四有り、初の二は果相具す、謂はく、先は外相備り、後は内徳圓なり。次の二は内徳滿す、謂はく、先に福、後に行なり。次の二は機に應じて現す、謂はく、無壞の妙法は是れ降魔の功德なり。次の二は初を嚴りて智を具す。次の二は相圓にして徳備れり、後の一は事果の終を示す。第二に巧妙方便とは、謂はく、證理平等にして能く有の中の、殊勝の行を起すが故に巧と云ふなり。初の一は知法無究竟とは理を證するなり。而究竟義等は是れ巧便なり。若し理無に處せば此事の有に乖く、或は事の有を説かば彼理無に乖く、皆巧便に非ず。若は二義各別なるも、或は合一して雙べ失ふも、俱に巧便に非ず、今並に此に反するが故に巧妙方便と名く。是れ佛出世の義を擇するを以ての故に、方便に就いて事に向うて説く。二は能見所見無く、而も巧に法界を見ることを證す。三は無相にして相を知り、無性にして色を現す。四は三際を混ずるの理を證して、而も三世の佛究然たるを見る。五は三業に造ること無くして、法を演ぶること熾然なり。六は理は染淨を亡じて、而も世間及び佛の智用を壞せず。七は非時の法に依り、時を融じて相入するを以て、又互に非時に住して、時に應じて法を説く。八は所證は非時にして時を離れざるを以て、十辯を具足し、無盡の法を説く。九は證法は名無きも、巧に名句を起す。十は藕界處

【四等】大悲、大慈、大喜、大捨。

無くして而も法相を壊せず、又善く二空に達して巧に三聚等を分つ。第三に有十種佛事無量等とは、謂はく、果現は量り難くして、皆物を攝して道に入るを、同じく佛事と名く、業用廣大なること、並に是れ微細相容門の故に。餘の境に非ず。初に兜率天の攝生佛事を作す中に、切は別して能攝を擧げ、總じて所攝を顯す。二に大慈の下は總じて能攝を顯し、別して所攝の利益を明す、並に文に顯るるが如し。二に兜率天より神を母胎に降し佛事を作す中に四有り。先に智徳内に圓なり。二に於最後等は、其位處を辨す。三は或以神力等は、正しく業用を顯すに十有り、文の如し。中に於て或は從初發心とは過去を攝するが故に。或は涅槃は未來を攝するが故に。是故に入胎の時は、直に八相を具するのみに非ず、亦過去の囚行をも攝す、下の法界品の摩耶の處に説くが如し。四に此第二地の下は、正しく八相の時方等を具に攝し、而して佛事を作すことを明す。三に王宮に在りて欲境を受くる時の攝化佛事なり。中に於て、初に自行は内に圓なり。二に大悲の下は、四等をもて善く觀す、三に廣、能爲説の下は、正しく攝益を顯す。四に踰處王宮の下は、攝益深廣なるを明す。謂はく、一切處を廣と爲し、淨三業を深と爲す。四は出家する時の攝益の中に四有り。初に貪愛の衆生を引いて、淨行を得しむるが爲に。二に示現世間捨離の下は、愚癡の衆生を引いて、智慧を得しむ。三に示現衆生無上の下は、薄福の衆生を引いて、福智を具せしむ。四に廣爲衆生の下は、正法を授與するの相なり。五は成道する時の攝益の中に三有り。初は自ら正覺を現じ、二に莊嚴一切の下は内眷屬を攝し、三に令一切衆生の

【有る本に：作る】  
所知法同とするなり  
【然るに餘處云云】  
本記第三の五右に

下は、廣く衆生を益す。謂はく、先に行成じて、徳をして滿ぜしめ、悉分別の下は廣大の智を立てしむ、六は法を轉ずるの時の攝益の中に十種の法輪有り。一は教堅にして退せず、二は輪多く通知す、三は所説決定し、四は成益虚しからず、五は輪の體廣大なり。六は輪の境甚深なり。七は輪の用をもて下を照し、八は輪能く上に現じ、九は輪の性平等なり、十は總じて無盡を結す。一乗の十たび無盡の法輪を轉じて應ずとは此文なり。七には入王城等の時の攝益の中に、初に城に入りて物を益す。二に一切諸佛色身の下は、能く色相威儀等を以て益するを明し、三に彼諸衆生の下は、益する所の相を顯す。四に以如是の下は總じて無盡を結す。八に或住阿練若の下は、隨所住等の攝益の義を明す。中に於て四有り、初は所住攝益、二は境界を以ての攝益、三は所説を以ての攝益、四は所住時を以ての攝益なり。九に無盡の功德藏を以ての攝益するに、中に於て三有り。初は化所成の益にして、菩薩の位に入ることを明し、二に或現涅槃の下は、能化の方便を顯し、三に或發衆生の下は、化して佛の境に入らしむ。十は涅槃を示す時の攝益の中に三有り。先は示滅憍慕の益、二は碎身舍利の益、三は爪牙髮塔なり。謂はく、因を成じて果を得しめ、恩を念じて徳を歎す。第四に法王無異法とは、果位の齊均を明す。一は記別の無異、二は遂願皆同じ、三は法身殊ならず、四は智慧齊等なり、五は所知佛同なり。有る本は法の字に作る。六は所知の利同なり、果に優劣無きを以ての故に、七は語同法言、八は物を化するに非ざることを無し、九は染淨同じく泯す、十は善根同如なり。然るに餘處に四種等を説くが故に、毘婆尸



楞伽の字語身法の四等しきを説く。

【三達】 過現未の一切の法界を悉く知るをいふ。

【四九】 以下、第八の佛の神力に答ふる文を釋す。

【初の力用云云】 以下は文相を釋す

は即ち是れ釋迦と説く。此中の十種の無異、亦是れ平等の意趣なること、知んぬべし。第五に十種住法とは、謂はく、佛は此十種の法をもて上の初住に向ふが故に。初の一は佛住、二は梵住、三は宿願に依る、四は現悲に住す、五は無功用、六は妄情を離る、七は念、憂くも失ふこと無し、八は心に障礙無し、九は定に在らざること無し、十は眞實際に住す。第六に知十種悉無餘とは、大智無限にして照境遺すこと無し。初の三は即ち三達圓明、次の三は世間の衆生を知る。謂はく、多類の衆生、言普路別するを語言道と名く。次の二は出世を知る、謂はく、菩薩及び佛なり。後の三は法門を知る、初は總じて緣起を知り、二は別して事相を知り、三は理を以て事を會すること、常綱重重の如し、並に前の『地論』の中に、已に釋するが如し。上來は佛の出世間を答へ竟んぬ。

第八大段に十種最勝力の下は、第八の佛の神力の間を答ふ。中に於て一百の門有り、謂はく、初は十門を列ね、是總標下の十門は別釋なり、一一の總門に十の別門を具し、及び一一の別門に十の總門を攝するが故に百門を成す。何を以て知るとならば、標の中に十種の最勝力、大力、無量力、乃至佛所住法と云ふを一句と爲し、標するが故に、知んぬ十種の言は、下の九力を貫くに、各十有り。後に何等をか十と爲すの言は、通じて前の十力は各十の義を徴す。俱に義同じきを以ての故に。亦通じて十門を以て、前の十を通釋す。是故に結の中に、各唯初を結す。此十種は皆是れ大力那羅延等なるを以て也大力を以て總と爲し、餘の九は大力の中に攝在す、故に十種の大力有り。初の力用は、劣に過ぐるを最

【下は別して云云】別して釋する中十あり、今は初たり【青婆云云】婆沙百五十一、涅槃二十八に因縁あり。

勝力と名く、二は當體の廣能を名けて大力と爲し、三は多門の業用、四は大福勝用、五は威徳特尊なり。外道の、佛を見るが如し、自を遺れて先に制せられ、覺えず起ちて禮する等なり。六は所作屈せず、七は能く魔軍を壞る、八は他の爲に壞せられず、九は業用は世表に超ゆ。十は世を擧げて能く破すること無し。大力那羅延轉等と言ふは、初の總に結歸す。那羅延とは此には堅牢と云ふ、即ち帝釋力士の名なり。近を擧げて佛所住の力に況せんと爲るなり。下は別して釋する中に、初の一は身命無損力なり、此は最勝大力を釋す。佛の加持する所の衆生及び佛の使はるる所の衆生は、上の如く金剛雨等も悉く損すること能はず、普婆を遣るが如く、火に入りて兒を抱くに蓮池等の如し。二には毛孔容持力なり、此は無量力を釋す。如虚空とは能く廣く容るるが故に。疲倦すること無きが故に。三には毛持圍山連歩力なり、此は大功德力を釋す、如來の一身の毛孔と、十方法界の一切衆生所有の毛孔と、頭數齊等なることを明す、毛孔既に多きことを顯す、各持すること上の如し。金剛圍山は所掌の重きことを明す、一步等は行歩の大なり。念念等は所行疾し。十方虚空界等は所至遠し、盡過去等は行時長し。無漏弊等は、不行と異なること無し。四には定用自在力なり、此は尊重力を釋す。中に於て初に身は定を起たすして、化は時を失はず、二に指は生界を持し、起たすして廻く坐す。五には普遍常轉法輪力なり、此は不退轉力を釋す。中に於て二有り。初は一佛身法界に周遍するを以て、常に法輪を轉す、二に如來一化身の下は、一切身常に法輪を轉するを明す。前の中に、先に一一等は是れ多説なり。盡

塵數劫等は是れ常説なり。轉正法輪等は説の益なり。後の中に、一一毛端處念念化等は、  
 佛身多く重重普遍無礙にして常に説くことを顯す。問ふ、「若し此文に據らば、佛、説かさ  
 る時無し、何が故に乃至一部に流行するや。」答ふ、「此は是れ衆生の感處を説いて一部と  
 爲す、而も如來の説法は未だ曾て暫くも息まず、大機は常に感じて、間斷無きを以ての故  
 に。」問ふ、「若し空界毛端の處に遍くして悉く説法すること有らば、何が故に此處に現  
 するに、今聞かざるや。」答ふ、「根の熟すること無きを以ての故に。猶し生盲の、目を見  
 ざるが如し、日の、世間に出づること無しと謂ふには非ざる等なり。亦聾の故に聞かざる  
 を、説くこと無しと謂ふには非ず。」若し爾らば、説は應に衆生界に遍からざるべきぞ。」  
 釋すらく、「遍きを以ての故に、聞かざる處に至りて能く聞かざらしめ、聞くべき處に至り  
 て聞かすむ。限有るの聞處、限無きの聞處に至り、皆彼の如く現するが故に名けて遍と爲  
 す、是故に今において聞かざるも亦是れ佛説法するなり。」六には胸徳字相降魔力なり、  
 此は堅固力を釋す。七には音聲遍徹力なり、此は不可壞力を釋す。八には證理現事無礙力  
 なり、此は一切世間不能思議力を釋す。中に於て、初は證理立に絶し、後に隨智慧轉の下  
 は現事自在なり。九には法身微密力なり。此は一切衆生不能壞力を釋す。中に於て、初は  
 平等法身の普く現すること無礙なり、二に其身充滿等の下は、應現無方にして稱性平等  
 なり。十には具菩薩行大智力なり、此は末後の大力を釋し、之に力を結同す。中に於て、  
 初に菩薩の行を具して佛果の用に順じ、二に諸佛住の下は、勝智圓滿の徳を明し、三に以

【五】以下、第五の法身の問を答ふる文を釋す。

【六】以下、第十大段に無礙解脫の問に答ふる文を釋す。

明淨智の下は無邊の境界を照達する徳なり。

第九大段に、十種の定法の下の三門は、却て第五の法身の問を答ふ。中に於て、初の見は身業の攝定を明し、次の門に見已りて益を獲ることを明し、後の門は觀の勝徳を勸むることを顯す。初の中に化身の八相は、諸佛等しく有るが故に定法と云ふ、略して涅槃の相無し。此中に正しく身業の作用を顯すこと文の如し。第二に見佛得十果報とは、所作の虚しからざることを明す。中に於て初の二は、惡を滅して善報を生じ、次の二は善因樂果の報、次の二は除疑不退の報なり、謂はく、地前三賢の位に入在す。次の二は證位淨根の報なり、初地從り七地に至るまでは證地無きを以ての故に出世と名け、出觀有るが故に世間と名く。後の二は障を滅して辯を得るの報なり、謂はく、八地已上なり。第三に十種の淨法有り、菩薩應念とは、因を念じて做學し、界を念じて善を増す。中に於て、初の六は因行を念じ、後の四は果徳を念ずること知んぬべし。上來は法身を答へ竟んぬ。

第十大段に、十種一切智住より下の三門は、第十の無礙解脫の問を答ふ。中に於て、初の門は後智の業用、次の門は妙定の自在なるを顯し、後の門は正しく解脫無礙を明す。此解脫は定慧に依りて成ずるを以ての故に。初の中に智は能く迅疾にして、廣く知るを名けて智住と爲す。初の二は所化の器を知り、次の二は能化の事を成じ、次の二は佛及び神力を現じ、次の二は說法及び趣を知り、後の二は念に應じて形を現す。第二に十種の無量不思議三昧有りとは、此法に在りては定、彼法に於ては用なり。又此定即用なり、故に思議



【五二】當品は佛の九十四相を擧げ、別して勝徳の相狀を顯す。釋するに四門あり、初に品名を釋す。  
【二に…來れり】二に當品の來意を明す。  
【三に…如し】三に宗趣を明す。

し難し。中に於て初の二は人法に約し、次の二は時處に約し、次の二は佛の三業に約す。普く法界に遍じて、而も一切處に現不現有り等と説く。次の二は理事の法に約す。九に定は離世に在りては、恆に世嚴を現じ、十に定は衆生に在りては、恆に佛趣に至る。第三に十種の無礙解脫有りとは、礙障既に盡くるを名けて無礙と爲し、作用自在なるを名けて解脫と爲す。若し三乘教の中には、佛に八解脫等有りと説くは、此所收に非ず。此十門の無盡は是れ一乘の解脫なること、應に準じて之を知るべし。初の二は現佛說法、次の二は生を調へて土を現じ、次の一は己が授記を調へ、次の三は三世の佛の依正の神力を現じ、後の二は三世の能化所化を現す、此等は法に約し、是法性融通力は智に約す、是れ如來の自在力なり。良に以みれば、此智は彼法に達するが故に、無礙圓融の故に、能く是の如し。此は果圓滿に約して説く。若し菩薩分得せば、維摩の不思議解脫の如し、皆此類なり。不思議法品竟んぬ。

如來相海品第二十九。初に名を釋すとは、如來と言ふは人を標して徳を顯し、相海とは人に依りて相を顯す、福報の奇狀炳著なるを相と名け、徳廣多にして奥積すること海の如し、梵本を勘ふるに如來十身相海品と名く、深廣の相は十身に在るを以ての故に。二に來意とは、若し遠に約せば此れ前の品と同じく、普光會の中の後の佛の果徳の間に答ふ。若し近に約せば則ち前の品は總じて果法を明し、此品は別して相の徳を顯すが故に來れり。三に宗趣とは、正しくは佛果無邊の相海を辨するを、即ち以て宗と爲す。別して此義を

【智論】 現行奉論の卷第四の二十四丁。

【瑜伽】 卷五十七の二十三丁。

【對法論】 卷十四の二丁。

【觀佛三昧經】 經第九の初。

【雜華云云】 以下は解釋するに二、初に雜華を釋し、此三の下は料簡す

【瑜伽】 卷四十九の二丁。

【地持】 卷八の九丁。

釋するに、略して八門を作る。一に名を釋すと「智論」の第五に、問ふ、「相の義云何。」答ふ、「知り易きが故に相と名く、水の火に異なるが如きは、相を以ての故に知るなり。」

と。解して顯著の義、明了の義、標別の義、是れ相の義と云ふ。二に體性とは、此三十二相を、小乘は俱に色形を以て體と爲す。若し初教大乘ならば、「瑜伽」に依りて二十二根の中に於て四根を體と爲す。一は眼根、二は舌根、三は男根、四は身根なり。若し終教に

依らば、「對法論」に依るに、定慧を以て體と爲す。又相を攝して本に歸れば、唯是れ淨識を體と爲し、又縁を會して實に歸すれば、唯是れ眞如をもて性と爲す。若し圓教の中に

は相海は無盡法界を以て性と爲す。三に種類とは「觀佛三昧經」に依るに三類有り。一は略中の略説に三十二相有り。二は略説に八萬四千の相有り、三は廣説に無量の相有り。

『雜華經』の中に、普賢賢首等の爲に説くが如し。解して云はく、「雜華」は即ち華嚴の異名なり。此品の中の十蓮華藏世界塵數の相を無量と名く。此三の中に、初は唯小乘、次は

前を兼ねて三乘と爲し、後は前を具して一乘と爲す。又初は唯地前の見、次は唯地上の見、後は五位の見に通ず。又初は唯し化身の相、次は唯報身の相、後は是れ十身の相なり。四

に因を出さば「智論」に依るに、此三十二相は俱に布施を以て因と爲す。彼論の中に、一

一を施に約して別別に釋出す。二に「瑜伽」と「地持」とに依らば、俱に持戒を以て因と爲す。三に有る經の中に、同じく忍辱を因と爲す。四に「善生經」には大悲を以て因

と爲す。彼經に云はく、「是三十二相は即ち是れ大悲の果報なり」と。五に「楞伽經」と

【或は一：成じ】  
以下感得の差異。  
【或は：約す】以  
下説相の差異。  
【智論】本大藏經  
卷第四の中、取意  
の文。

及び『如來藏經』とは、並に如來藏の中の恆沙の功德は三十二相を具すと。則ち藏性を以て因と爲す。六に『大集經』の第七に依るに、三十二相の一一に、各別に因を出す。餘經解して云はく、良に以みれば、佛果の萬德圓融するが故に、或は一行通じて多想を感じ、或は萬行俱に一相を成じ、或は性は了因を待ちて唯行を説き、或は行は理を證し、成は唯性具に約す。五に積成とは『智論』の第五に云はく、「一一の相は皆百福の所成と爲す。其百福とは、或は一轉輪聖王の福を以て一と爲し、是の如く數へて百に至る。或は一の帝釋の福を以て一と爲し、或は一の他化天王の福を以て一と爲し、或は補處菩薩を除いて、餘の一切衆生の福を一と爲すと云ひ、或は同感の一三千大千世界の福を一と爲すと云ふ。或は云はく、大千世界の一切衆生皆盲なるに一人ありて治差し、一切の人、毒藥を被むるに、一人有りて治差し、一切の人病死すべきに、一人有りて救脱するが如し。一切の人破戒破見なるに、一人有りて淨戒、正見を教ふ、是の如き等を一幅と爲し、數へて百に至る等なり。或は云はく、「福德量るべからず、譬喩すべからざる等を一幅と爲し、乃ち百に至る」と。解して云はく、彼は小乘及び初教等に約して説く。若し此相海無盡の福所成に準ずれば、上の文に云はく、「空の邊際を求むることは、猶得べし。佛の一毛孔は崖限無し」と、是れ則ち、若は大、若は小、若は皆法界に満ちて、悉く限量無きなり。六に修時とは、三十二相は若は、小乘及び初教は、三僧祇の後、百劫の中に相好の別業を修す。若し或は極めて遅きものは百劫、或は九劫を超ゆる等なり。『智論』の第五に説くが如し。若し終教已去

【智論】本大藏經  
卷第四の中の文。

【五三】以下本文を  
釋するに、先づ能  
說の主を示す。

ならば、初發心より修因滿じ果便ち現じて、或は是れ修生、或は是れ修顯なり。若し一乘の相海ならば、無量劫に修す。七に建立とは『智論』の第五に云はく、問ふ、『菩薩の相、何を以ての故に、三十二より多からず少からざる。』答ふ、『有が言はく、端正にして亂れざるを以ての故なり、若し少ければ則ち端正ならず、若し多ければ身相亂れん。』と。又『觀佛三昧經』に、『佛、世間に生じて人に示同するが故に三十二相を説き、諸天に勝るが爲の故に八十種好を説き、諸の菩薩の爲に八萬四千の相を説く。菩薩は八萬四千の諸の度行を修するを以ての故に』と。上は三乘等に約して説く。若し一乘ならば、此十蓮華藏摩數の相を普賢等の爲に説くは、普賢無盡の行海を修するを以ての故に。八に業用を明すと、一乘の業用は『小相品』の説の如し、餘の乘の相用は別に説くが如し。

四に文を釋すと、佛の相海曠くして法界を周ることを明す故に普賢の説なり。文の中に三有り、初に聽を誡めて説を許し、二に略して九十四相を説き、三に廣く十華藏摩數を結す。第二の略説の中に就いて大相に九十四種有り、相の所依を明すに十九處有り、然も一一の相の中に皆四義有り。一は相の名を列ね、二は相の體莊嚴を顯し、三は相光の業用を明し、四は業用を辨じ、益を成するに亦具せざる者有り、文に至りて應に知るべし。最初に頂上の相を明し、最後に足相を明すことは『觀佛經』に依るに順觀と逆觀と有り、頂より漸く下るは順觀を明し、足從より漸く上るは逆觀を明す、今は順觀を顯すが故に。



【五四】以下隨釋する中、略説するに十九あり、今初に頂相を明す。

（五四）初に頂に三十二種の相有り、何が故に此中に略して十九處の相を明すや。『多少不同なることは、釋すらく、此れ皆無盡なり。但し説の少多に隨ひて、多少在ること無し。開ふ、』既に各無盡ならば、何が故に頂相は最も多きや。』答ふ、『最勝なるを以ての故に。故に『善生經』に云はく、『一切世間所有の福德は、如來の一毛の功德に及ばず、如來の一切毛の功德は、一好の功德に及ばず、八十種好の功德を聚め合するも、一相の功德に及ばず、一切の相の功德は白毫相の功德に如かず、白毫相の功德は復無見頂相の功德に及ばず』と。頂相の中に、初の七は正しく頂相を明し、後の二十五は別して莊嚴を顯す。初の中に明淨と名くることは、梵本を勘ふるに、毘盧遮那と名くとは、具に翻すれば、光明遍照法莊嚴と名く。二に三十二寶を以て莊嚴と爲すとは、正しく相體の具徳を顯す。名を釋する中に、淨の字は即ち是れ莊嚴の義なり。三に普放等は放光の業用を顯す。此は明の字を釋す、即ち光明の義なり。四に遍照等は業用の益を成ずるの相を明す、即ち遍照の義を釋するなり。此一門は亦是れ總亦是れ別なり。三十二相を標するを以ての故に是れ總なり。即ち三十二の中に是れ初門の故に亦別なり。二の中に圓滿の下は相體の具徳を明す。三に金剛の下は光の業用を顯す、此光明を彼世界に於て起すが故に所起と云ふ。此は佛方便海と名くることを釋す。四に普照法界とは業用の益を成ずることを顯す。理法界を證するが故に。事法界を照すが故に。三の中に、初に事を窮めて理に遍し、果を充して因を該ぬるが故に充滿法界と名く。雲とは周遍の義、潤益の義、無本の義、無處の義、現相の義、

【白下に云云】後に二十五相を説く文を釋す。

降雨の義、是れ雲の義なり。下は並に此に準ぜよ。四の中に普照と名くることは二義有り。一は相の中に難思の佛刹を現するを普照と名く。二は法界を照現する佛光を普照と名く。五の中に、摩尼寶王の下は第二の相體の具徳を明し、名の中の琉璃寶を釋するなり。三に普照の下は相光の業用を辨じ、名の中の普照を釋するなり。歎仰等は略して往因を出す。四に悉放の下は、正く成益を顯し、名の中の大白在雲の義を釋するなり。六の中に、初に名體合せ舉げ、二に放諸光明の下は、業益を齊しく明す。謂はく、平等に普く法界を照すを以て、等しく教聲法燈を以て、菩薩の功徳をして佛の離垢相寶轉海に立てしむ。七の中に、伊那の下は體相の具徳を顯す。伊那羅は此には主と云ふ、即ち天主寶等なり。並に可貴の義等の六種の義を具す。是故に寶と名け、自在の義等をもて是故に王と稱す。悉く是れ佛果無障礙の徳にして、此は佛光を釋す。三に普照の下は業益を明して廣雲の義を釋すること、知んぬべし。

白下に二十五種有りて頂相を莊嚴す。中に於て初の内に、琉璃摩尼の下は、業用及び益を明し、圓滿光明の義を釋成すること、知んぬべし。二の中に、先に名體同じく舉げ、二に無量世界の下の業用を顯して光明雲を釋し、三に出生無量の下は成益の相を明して深大の法を説くは、菩薩の行藏を釋す。三の中に放琉璃色等は、明等は三業の用に於て、身光輝智を明すは、普照雲を釋す。四の中に、於一切の下は業益を明すに聞覺除障有り、覺雲の義を釋す。五の中に、業用の内に智身を長養すとは、體の中の心海王を釋するなり。長

法身とは如意法寶を釋し、彼をして如來の相海を満足せしむ。六の中に、初に寶華をもて刹を嚴り、後の四は行をもて人を嚴る。或は四攝或は四無量等も亦得たり。初の相は事法界を嚴り、後の行は理法界を嚴る、故に一切莊嚴と名くるなり。七には三昧を明し、念念に佛を現じて、機をして見ることを得しむ、此を用て相と爲す。八には佛の無障礙なる意業の中従り出す所の、依正の一切の化用なるが故に化海と名く。九には其座の内に於て諸佛の像を現するを、名けて解脫と爲し、光明をもて法を演べ、刹を嚴るを雲と稱す。十は内の業用の中に、正法光雲をもて一切を嚴淨すとは、菩薩を開覺し、因の種姓をして、正行を増修せしむるが故に嚴淨と名く。即ち覺佛種姓を釋す。餘は亦此に同じ。十一に過去の福智の相、輪の如く、顯現するが故に以て名と爲す。十二に頂寶華の中、法界を盡窮する諸佛の依正は皆中に於て現するが故に普照自在雲と名く。十三の中に、普照一切等は入一切に名く。十四に明淨と名くとは、若し具には亦遍照莊嚴と名く、體用の中に具に此名を釋すること知んぬべし。十五に法輪を以て光明と名く。一切を開覺するが故に以て名と爲す。十六に能く菩薩の道場に成佛を現するを、一切莊嚴と名く。十七には衆生の業報を現するを法界因と名く。但し因を現すれば必ず果を帶ぶるが故に亦報有り。十八には法輪普く一切世界に被るを以て普照と名け、莊嚴して深く法界を解らしむるが故に、淨法輪雲と云ふなり。十九の中に標釋は知んぬべし。二十には巧に衆生等の位に入りて、法界を照現するを淨燈雲と名く。二十一に智は無量の諸の三寶海を照すを分別法界と名

【智論】現行本の  
第四の文。  
【撰】本大藏經本  
には卷に作る、第二  
【五五】以下、第二  
大段に眉相以下十  
八處を釋す。

け、一切衆生等をして明かに所爲を分別せしむること知んぬべし。二十二に智光光凝住して空法界に遍し、普く諸佛菩薩の功德を現じ、觀じて厭足無からしむ。二十三の中に、眉間より寶光を出す等とは、古人は此下の三相を將て眉間に屬して收めたり。今は次後の二相は並に是れ頂相、末後の一種は復是れ眉間相なるを以てす、此一相は或は是れ交錯す。或は亦此を用て頂相を莊嚴すれば、頂に屬して收む、光明普く照して、勝益を成ずるを以ての故に、寶光炎雲と名く。二十四に頂上は次第に諸の莊嚴を起す。謂はく、佛身を嚴現し佛刹を嚴現し菩薩を嚴現す。故に一切法界莊嚴雲と名く。二十五に如來頂相悉能等は、總結する中に、先に纏に前の三十二種の寶相莊嚴を結し、後に細に莊嚴一切法界を結す。【智論】第五に、「頂に骨髻有りて捲等の如く、其頭上に在り」とは、「觀佛三昧經」の合捲の相の如し。上來三十二門をもて頂相を明し竟んぬ。

第二大段に眉相を明す中に一相有り、釋の中に二有り。先に普照法界を釋し、後に出生の下は遍光明雲を釋す。【智論】に、「白毛眉間に生じて、高からず下からず、白くして淨く右に旋りて、舒ぶれば長五尺なり」と。第三に、眼相も亦一なり、釋の中に初に所見無礙なるが故に自在と名け、後に眼より佛を現するを、亦自在と名く。【智論】に「眞眼の相、青蓮華の如し。又牛王の眼睫の、長く好くして亂れざるが如し」と。第四には鼻の一相は知んぬべし。第五に、舌に四相有り、初に廣長の相を明す中に、先に名體及び因を擧げ、次に普照等は其業用を攝し、後に出生等は其益相を明す。二の中に舌掌の相



を釋す。謂はく、舌掌の内に於て、衆寶を以て嚴と爲すが故に安住と云ふ。此は勝德備はることを明すなり。安住一切法とは、一切所説の法門を明すこと並に舌掌の内に在りて安住す。此は大智具することを明すなり。是故に舌掌を法界地と名く。三に舌端の相を明す。中に於て出生無量の下は用益を明す。謂はく、光は佛海を照すを佛法界と名け、又妙音遍く至るを、亦順法と名く。又衆生をして、聞くことを樂はしめ、法界に順入するに亦此名を立つ。四には亦舌端の相の中、出生の下は用益を明す中に、一に妙音等は讚、二に妙德等は覆、三に妙智等は入、四に妙刹等は現の故に平等法門と名く。一智論に、「舌相は面を覆ひて髮際に至り、口に入るも亦滿たす」と。第六に隔相の德、體の中に、一は勝德外を嚴る。伊陀尼羅は此には帝青寶と云ふ。二は法界内に充つ。三に大衆悉く滿つ。佛の齶齶の中に、既に諸の法界地悉く其内に在るを以て、是故に諸の菩薩雲も亦悉く充滿して、其斷の内に在り。出生の下は其用益を明す。中に於て、所照の十方は還りて斷の内に在り。諸の法界は唯理に非ざるを以ての故に、是故に但此齶の中に即ち法界を攝し盡し、頭背手足も亦其中に在り。十方の世界及び諸の衆生、菩薩、諸佛も悉く唯此中に在り。餘の門に虚空の如くにして所有無しと。然も齶相は大ならず法界は小ならずして、全く其内に在りて外相宛然たり、空界無邊なれども齶外を出でず。是を如來の勝相と謂ふ。是れ心識思量の境界に非ず。此一既に兩り、餘は並に例するに然なり。第七に大牙の相に四有り。謂はく、四の大牙なり。初は右邊の下の牙なり。衆寶莊嚴とは體の具

【智論云云】本大藏經本卷第四、三十二相を説く中、菩薩の齒を四十枚とし、齊相、密相を説く、今は取意の文。

【人等知る云云】此下の文落脱誤入あるべし、本文に「齒密なる相は、人の知らざる者は、謂ひて一齒と爲す齒の間には一毫を容れず」と知るべし。

徳を明し、放大光等は業用の廣大なるを明し、普放光等は利益の相を顯す。此は是れ所照の佛身、後は放光の益なり。一は右邊の上の牙なり。如意寶王等とは、寶炎須彌藏を釋成す。放寶光明の下は業用の深廣なるを明すなり。一一の光の内に佛の依正を現するが故に、名けて藏と爲す。三に左邊の下の牙の用の中に、一切の佛及び眷屬を照現するが故に燈雲と名く。四に左邊の上牙なり、中に於て出生の下は業用を明す。謂はく、此大牙に因りて大妙音を出し、佛の因果の法等を現す。『智論』に、「牙の白きことは雪山王に勝れたり」と。第八に齒に一相有り、梵に金暮菩薩と云ひ、此には頸旋螺文と云ふ。即ち佛の齒の形狀なり。放大光の下は業用の利益を明す。『智論』に、「齒に四十有りて多からず少なからず、齊密にして蠶細無く、人等知るものは、謂ひて一と爲す。一の齒の間には一毫を容れず」と。第九に肩の相に五有り、初に右肩の相を名けて一切寶地と爲すとは、體徳に従へて名と爲す。光炎普照等は利益を明すこと知んぬべし。二に右肩の平滿の相は、普照の業用なり。三に左肩の相の中に、普放等は業用を明し、内に盡法界の諸佛の神力を現す。四に左肩遍照の相の用の中に、光を放ちて法界の佛の依正等の報を現す。五に右肩無動の相の中に、出生の下は業用を明し、理事人法因果法界を照す。『智論』に「肩の圓好なるの相なり。一切の諸肩に是の如き者無し」と。第十に胸相に一有り。胸に勝妙の相海有りと言ふは、此は是れ徳の字の相なり、能く怨敵を破る。周遍の下は業用利益を明す。第十一に脇相に一有り、中に於て出生の下は利益を明す。此は是れ兩の脇を同く辨す。

【電光】 此下古に雲の字あり。

【句】 古に向に作る。

【類して定むべし】 古本に「定め難し」中に作る、蓋し本文中の第二、第三、第四及び下分の相文中の第十の言、解し難き故にいふ

『智論』に云はく、「兩腋の下平滿の相なり、高からず深からず」と。第十二に、腹藏の相に七有り。初の相の中に、菩薩功德の下は體の具徳を明し、普現の下は業用利益を明し、普現如來雲の義を釋す。二の中に、一に名を標し、二に如來の下は華の義を釋し、三に放香炎の下は開敷の義を釋す。三の中の妙樂をもて心を充すを可悅等と名く。此は是れ世人が五藏の中の心の藏なり。『何が故に、餘の肺等の藏を説かざるや。』『佛の金剛の身に餘の藏無きを以ての故に。』『何が故に唯心の藏のみ有るや。』『最勝なるを以ての故に。他をして觀見有らしむるが故に。』放摩尼等は用益を明す。四に勝徳深廣にして圓滿なるが故に勝海と名く。釋相は知んぬべし。五に光照法界を名けて電光と爲す。下第二勝功德平等地相とは、或は是れ五藏の中の第二等に當る、或は身分の中の句の下の第二等は、既に別の指し無し。是故に類して定むべし。下の文の第三等は此に準ずべし。六には無量の菩薩の法界を照現するが故に、以て名と爲す。七には最淨の法界及び極果の依正三世間の相を照現するが故に、照最高雲と名く。第十三に下分の相を明すに二有り。初は是れ妙音をもて法輪を轉するの相なり。離垢清淨とは餘人の穢なるに同じからざるが故に。正法道とは是れ破路に非ざるが故に。香炎等は業用を明す。佛の内心及び所證の法界を照現するが故に。二は佛因を宣暢し、智は利を嚴るが故に莊嚴と名く。第十四に手相に十二種有り。初は手掌の相の中に、放大光等是用益を明す。法輪を轉じて佛海を照し、法界を嚴るなり。二は寶手の相の中に、體は衆徳を具するを海を名け、用光をもて物を驅るを照と名く。三

は妙手相の中に、常に青瑠璃寶を以て、用て其手を嚴るを普莊嚴と名け、亦微妙の手と名  
 くり、普照一切の下は兼用利益を明す。四は離垢燈照手相は亦是れ網緞手相なり。用の中に、  
 菩薩を引導して、彼岸に到らしむ。五は現實手相なり。謂はく、寶蓮華の光は法界を照す  
 が故に、以て名と爲す。六は照明手相なり。用の中に、寶光をもて法界を照し、香光は刹  
 海を照る。七は瓊瑤燈手相の中に、體は瓊瑤の徳を具し、光用燈照の雲有り。八は智燈手  
 相の中に、金光普照を即ち智燈と爲す。九は蓮華手相の中に、體に寶華を具するを  
 名けて蓮華光と曰ふ。世界を覆ふが故に安住す。十は滿法界手相なり。用の中に光照は如來  
 を現じ、及び法界に充滿す。後に如來妙手の下は、手の具徳と及び用は刹海に滿つること  
 を明す。十一に、正しく立てば手は膝を摩す。と。十一に右手の指相なり。用の中に、  
 寶華妙音は刹海を實現す、故に成就等と名く。十二に指鬘より寶相を出し、能く佛の寶藏  
 法界を照すを以て、安住一切寶と名け、徳に従ひて名と爲す。放大光等は用益を明す。初  
 は三寶海を照現し、後に出生の下は聲を出して遍ねく覺し、願行を増長することを明  
 す。第十五に馬上戴相に三種有り。初に隱密相なり。用の中に、法界を照すとは、理を證  
 すること深し、虚空界を照すとは、事を照すこと廣きなり。寶藏法界とは行は眞性を嚴り  
 て妙果を出生するなり。二に一相現一切相海なり。用の中に此名を稱顯し、復餘の一切  
 の佛の威力を照現す。三に法界海相の中に、體は能く十方の諸佛及び法輪海を照現し、用  
 は能く自らの無數の相を示現す。此上は是れ十身の相なり。若し化身の相ならば一智論一



【傳】經には腦に作る、股肉なり。

の馬陰藏の相にして、佛、弟子をして陰藏相を見しめたまふは、疑を決せんが爲の故なり。又有が言はく、馬寶、象寶を化作して、諸の弟子に示し、「我陰藏の相も亦是の如し。」と。第十六に、脛相に二有り。初に右の脛の相を普示現雲と名くとは、衆雲現じて嚴るが故に。妙法光現するが故に。出聲寶をもて嚴るが故に。念念心海を示すが故に。二に左の脛の相を普照一切廻向海雲と名くとは、用の中に光を放ちて、普く一切衆生を照し、佛海に趣向せしむるが故に、以て名と爲す。第十七に、躡相に二有り。初に右の躡相なり。伊尼延とは、此は是れ鹿の名なり、躡は佛に似るを以ての故に、以て喻と爲す。『智度論』の第五に云はく、「伊尼延鹿王の躡相の、隨次に鬚纖なるが如し」と。用益の中に、初に光照震動、次に佛音普聞、次に化身充滿、次に身光淨利なり。後に化は法界に滿つての文は、並に見つべし。二に左の躡の相なり。用の中に、光は無量に遍くして法海を開化す。第十八に毛端の相に一有り。初に毛の内に刹を現すと、是れ名を標するなり。於一毛孔悉放等は徳を顯すなり。一毛孔示現等は勝用を明すなり。『智度論』の中に、「一一の孔に一毛出づるの相なり。毛は亂れずして、青きこと瓊瑠色のごとし、毛は右に靡きて上に向ふ」と。第十九に足の相に十三種有り。初に金剛足下の相を菩薩海莊嚴と名くることは、用の中に釋し顯す。謂はく、光は菩薩の法を照開するが故に。化菩薩を出すが故に。光は菩薩海に住するが故に、以て名と爲す。『智論』に「足下安平の相なり。足下の一切を地に著くるに、間に受くる所無く、一針を容れず」と。二に足跡上の相を明淨雲と名くることは、衆寶

【普】本大藏經本に青に作るは住し

【智論】本大藏經本卷第四、三十二相所明の中、長指の相、手足の指、綫綯の相等の取意。

【二】王に作るは住し。

莊嚴とは體に業徳を攝す。「智論」に「足趺の上は眞金色にして、上の毛に於て普瑠璃色のごとし、具足の嚴好なること離寶履の種種に莊嚴するが如し」となり。放妙の下は用益を明す。釋名は知んぬべし。三に足指間の相を覺雲と名くることは、用の中に初に覺相を示し、次に所覺の法を照し、次に覺處を現じ、後に覺用時を照す。未來は未だ有ならずれども、若し照を爲さば、九世に依るを以て、彼の如く現するが故に。「智論」に「足指に網縵あり、織くして長く端直にして次第に躡好に指節參差す、指の爪の淨きこと赤銅の如し」と。四に千幅輪の相を照法界海と名くることは、用の中に初に得海を照照し、次に佛海を嚴照し、後に法界海を照淨するが故に、以て名と爲す。「智論」に、一千の幅と輪ととなり、三事具足し自然に成就して人工を待たず、諸天の二輪、毘首羯摩天も化作すること能はず」と。五に足相を示現一切諸佛海雲と名くることは、用の中に、初に發行雲、聲教雲、華嚴雲を世界に示現するが故に、以て名と爲す。六に足相を自在光明雲と名くることは、佛の光明を示現するが故に自在常放等と云ふ。業用を顯すこと知んぬべし。七に足下後分とは是れ足跟の相なり。普照の下は用を明す中に、初は法界を照し、化身を現じて普く覆ひ、後に一一の身より普薩海を出して法界に充滿するが故に、以て名と爲す。「智論」の跟の廣平なる相なり。八に足底の相を深寶源底と名くることは、體に寶藏を具し、用は源底を窮むること、文の如く知んぬべし。九の中に、初の一切寶等は名體合して擧げ、後の於念念の下は益用俱に融ぶること知んぬべし。十に普雲藏と名くとは、體は普雲を具

【五六】 以下第三大段に廣く大相を結する文を釋す。

へ、光用は藏を照す。十一に平等光雲と名くとは、出生の下は業用を明す中に、音聲は法界に稱ふが故に平等と云ふ。次の一一の相の下は、光は法界に稱ふが故に平等光と云ふなり。十二に示現莊嚴雲と名く。初に體は德嚴を具し、次に用は佛刹を嚴り、次は佛雲は刹に滿ち、次に因法海を嚴り、後に因果の法を照す。同く法界を嚴るが故に、以て名と爲り。十三に詔佛自在普示現雲と名くとは、放不思議の下は業用を明す中に、先に佛光の自在を現じ、後に佛聲自在雲を顯すこと知んぬべし。上來總じて十九處に略して九十四種の大相を明し竟んぬ。

佛子の下は、大段第三に廣く大相を結することは、別説するに盡し難きを以て、是故に總じて結す。略して能く盡すところに非ざるが故に、須く廣く顯すべし。然れども、一箇の蓮華藏界已に法界に過し、況んや復十を説き復無盡を顯すをや。是れ則ち無盡は普眼に非ずんば觀ざるなり。相海品竟んぬ。

華嚴經探玄記卷第十五

# 華嚴經探玄記

## 卷第十六

此は性起  
品を盡す

魏國西寺沙門法藏述す

【一】第六會の第九の説法にして、前品に於て勝徳の相状を示せるを以て、今勝徳の益用を辨ずる一品を辨す。

【二】「來れり」二に當品の來意を明す。

【三】「説なり」三に當品の宗趣を明す。

佛小相光、明功德品第三十。初に名を譯するに、佛とは人を標して徳を表し、小相とは人に依りて徳を辨す。光明とは體に依りて用を起し、功德とは用所成の益なり。此は則ち人に依りて徳を顯し、體用によつて名を爲る。二に來意とは、前の品の大相に各光明有りて、善法界を照せども、而も未だ所照の利益の相を顯さざるが故に、今此品には、正しく益者を同す、大相は明し難きが爲の故に、小相を辨す。小相も復多し、但一相を辨せば、一相に多時の益有り、且く一時を説く。此一時の益も、復明め難きが故に、佛自説するなり。此を以て論ずれば、前の大相の兼用は無邊、無邊にして極めて知り難きのみ。又前の大相に依りて、形好を流出するが故に次に來れり。三に宗趣とは、如來の相徳利用を宗とし明すに、略して二門を作る。一は分齊を定むとは、既に三十二相に八十隨好有りて以て感る。即ち知んぬ、十蓮華嚴微塵數の相の一一に、各塵數等の好有ることと。又此大相は既に一一深廣にして、三十二の中の諸相と同からず。則ち知んぬ、隨好も亦甚深廣大にして不可量なりと。二に兼用を辨すとは、八十隨好の如きは、但佛形を顯りて以て淨信を生ぜしむ。今此に小相を明すは、佛菩薩爲りし時の相續、隨好にして最下位の處の用なり。是はく、



【二】此下正しく  
本文を釋するに略  
實の二釋を以てす  
初は略釋。

一の光を放ちて十世界の塵數の刹を照すに、地獄の衆生皆天に生ずることを得、十地の十眼耳等を成就す。即ち此天子の毛孔の香華、普く衆生に熏じて、亦十地の白淨轉輪王を得たり。又此輪王は光を放つに、復無量の衆生をして、復十地の十眼等を得しむ。是の如く展轉して、未來際を盡して邊際無きこと皆不可說なり。菩薩の小相既に爾なり、如來の大相の海の利用自在なること不可說不可說なり。

四に文を釋する中に二有り。先は略、後は廣なり。前の中に亦二有り。先に果用の攝益、後に又菩薩の下は因用の攝益を明す。前の中に何が故に佛自ら説くとならば、古人釋して云はく、「前の佛祇品は因の究竟を明し、此品には果の究竟を明すが故に、俱に佛説なり」と。又釋すらく、「相の極は至小にして、用の極は廣大なり、此事を明め難きが故に佛自ら説く」と。寶手に告ぐることは、能採取の故に。法王の隨形好とは是れ足下の相輪の處、大相の邊、隨好の小相なり。餘の大相の業用明め難きを以ての故に、最下相輪の用を説く。又相輪の大相、猶明め難きを以ての故に、隨好を説く。隨好猶多し、故に海王の一好を説く。此は是れ果用猶亦明らめ難きが故に、兜率に在りて、菩薩爲りし時の攝益を説く。此因の用に就きて二有り。初に苦を離れて天に生れ、安樂行を成ぜしむ。二に、天上に生れ已りてといへる以下は、天樂に著せずして、饒益の行を成ぜしむ。亦是れ前は身光の餘、後は是れ空聲の益なり。前の中に、十眼等を淨ならしむとは、彼衆生は宿普賢の法を見聞せし種有るを以て、復舍那法界の光觸に遇ひしが故に、十眼普賢の益を得たり。二に天上

【三】 以上は略して明し、自下は廣く文を釋す。

【於彼】 經に「彼海玉の於て」といふを指す。

【四】 此下、前の聲天處を就益するを廣説する文を釋す。

の益の中に、初に示聲名不可樂とは、著樂せしめざる故に。下は正く説法するに、四の因縁有りて天上に生ずることを得。初に不放逸とは、惡を厭ひて對治す、二は宿勝善を植う、三は普て善友に遇ふ、四は今の佛の加持、此に由りて天に生ず。此因果を示して、放逸なるべからずと。

(三) 第二に廣く辨ずる中に亦二有り。先に前の光は惡道を救ふことを廣し、後に前の聲は天處を益することを廣す。前の中に亦二有り。先に放光を明し、後に照益を明す。前の中に普照王の光は、是れ相輪の大相の中の光にして、於彼とは彼大相の處に於て、此海王隨好の小相有り。一をば清淨と名くとは、多光を簡去して、今は但一を説く。普照の下は、照益を明す中に、衆生の境界に隨ふとは所住の差別にして、亦是れ所觀の不同なり。善根に隨ふとは、其宿何の乘の善根を種えしかに隨ふ。隨意とは、意樂の差別にして、亦是れ欲願の不同なり。皆根に稱ひて益を成じ、餘の益に越ゆるが故に、乃至阿毘等と云ふ。此下の文に但彼地獄を照して、兜率天に生ずる一の益を説くを以ての故に、餘に越ゆるなり。

(四) 第二に天上の饒益を廣する中に六有り。初は勸に因りて疑を釋く。二に汝等應當の下は、正く報恩を勸む。三に時諸天子聞是音の下は、勸に依りて供を興す。四に是故諸天子の下は、發心して悔過せんことを教ふ。五に説是法時の下は、教を聞きて益を獲るなり。六に爾時諸天子於一一毛孔の下は、得益傳通して、無盡行を成ずることを明す。

【五】隨釋するに六あり、初に勸に因りて疑を釋く一段の釋。

初の中に三有り。初に勸、次に疑、後に釋なり。初の中に善哉とは其所得を數じ、重恩有ることを明す。次に舍那の所住を顯して、不忘恩を勸むるが故に敬念せしむ。二に爾時諸天子の下は、正しく疑怪を生ず。何由とは何因なり。謂はく、何の因由に從りてか此音聲を出す。三に爾時音聲の下は、疑を釋して法を顯す。中に於て亦三有り。初に續、次に別、後に結なり。總の釋に云はく、此聲は是れ善根の功德の所成にして亦來る處無し。二に諸天子如我的下は、別釋する中に六門有り。一は空聲無我的の喩にして、佛の二我を離るるに喩ふ。復疑ひて云はく、「若し實に我無くんば、誰か來りて成佛する」と。二に釋するに、天聲無從來の喩は、佛の勝果は來る處無きに喩ふ。復疑ひて云はく、「佛果は理を證して來ること無かるべく、凡愚の善報は應に體有るべし」と。三は猶如汝等の下は、苦報無本の喩にして、善趣の天聲に亦方處無きに喩ふ。復疑ひて云はく、「一勝報劣報は俱に無體なるべし、佛果の大用は豈有ならざらんや」と。四は如普照王の下は、果用無作の喩を明し、天聲は是れ定慧の所起にして無作の成益なるに喩ふ。復疑ひて云はく、「一若し爾らば、何が故に現に所益の天報有る」と。五は譬如須彌の下は、天樂無來の喩を明して、天聲應に方面無きに喩ふ。復疑ひて云はく、「少益は來ること無かるべし、多の用は應に倦むこと有るべし」と。六は諸天子譬如の下は、天聲廣うして疲るること無きの喩を明す。此天聲は則ち稱性なるを以ての故に、常に所有無きが故に。所益の衆生も亦是の如きが故に、是故に疲るること無し。化すべからざる衆生に於て厭惡を生ぜず、化を受け難き衆生に於て疲倦を生ぜ

す、化し易き衆生に於て放逸を生ぜず、已に化し竟れる衆生に於て憍慢を生ぜず。此上の六種は是れ喻況にして、亦即ち是れ法説なり。末後は結構す。舍耶とは是れ初門の勸導なるを以ての故に。無垢三昧に二位有り。一は因の終に約す、第十の法雲地の菩薩の所得の如し。自の二障微細の垢を離るるが故に。二は果の初に約す、此文の如き是なり。將に現に成佛せんとして、此天上に在りて此三昧に住し、能く衆生を利し垢を離れしむるが故に。二乗不能如とは、用の深廣なるを結するが故なり。

【六】以下、第二大段に、正く報恩を勸むる文を釋す

第二大段に、汝等應當從り下は、前に依りて、正く勸むることを明す。中に於て四に分つ。約は報恩の大益を明して其修行を勸む。中に於て法と喻と合と結との四分有ること知んぬべし。二に諸天子共有衆生の下は、恩に背かば須有ることを明し、其捨離を勸む。三に諸天子汝曹の下は、昔重恩を受けしことを明し、今應に善を長ずべしと。四に憍慢の下は、示すに正法を以てし、勸めて修學せしめ、亦是れ天樂の空なるを示して、空言にて著せざらしむ。中に於て無我有用の喻を擧げて、天報の依正は有に似て實に無なるの義に喻ふ。五に欲具等は依報、五願等は正報を明し、緣起無作にして有に即して常に空なるを以ての故に、不生滅なりと。若知是の下は、破執の定を結構す。

【七】以下第三大段に、勸に依りて供養を興す文を釋す。

第三大段に諸諸天子聞是音聲の下は、勸に依りて供を興すことを明すが中に二有り。先に隨相事供養に亦二有り。初に供を興して天宮に菩薩を見ず、遂に無の見を生ず。後に聞淨を觀見し、將に往きて供せんと欲して、復有の見を生ず。二は時天妙音の下は、平等恩を



【八】以下第四大段に發心悔過を教ふる文を釋す。

示す、中に於て四有り。謂はく法と喩と合と結となり。不命終とは無の見を離れしめ、不生彼間とは有の見を離れしむ。體は實を普遍するを以て、眼の所見に非ざれども、而も能く用を起し、化するに時を失はず。捨離等は離執を結するなり。

第四大段に是故諸天子の下は、正しく發心して悔過するの後に教ふ。中に於て二あり、初には法を擧げて總じて教へ、二には問答して別して示す。初の中に先に發心を教ふとは、是れ衆行の本なるを以ての故に。佛の正因なるが故に。次に三業の淨戒に住することを教ふ。威儀は是れ身語戒なり、意淨は是れ意業戒なり。次に四障を懺するを教ふるに、業と報とは因果に約して二に分ち、煩惱及及び見とは利鈍に約して二に分ち、増上の邪見は能く善根を斷するを以ての故に、別して分出するなり。後に法界等を以て、懺悔の方便を教ふ。此は是れ普賢廣大の懺悔、甚深の懺悔なるが故に、法界と稱するなり。二に時諸天子の下は、問答して別して示すが中に、先は問、後は答なり。問ふ意は云はく、『既に是の如きの三業を以て、四障を憶念して、佛に對して懺することを爲すや、更に若爲ぞや。』答の意は『但罪の空なるを觀すれば、直障のみ滅するに非ず、亦乃ち此に即して大行を成ずるが故に、此門を以て教へ一懺せしむるなり。』答の中に先は顯に起の所由を答ふ、謂はく、外緣と内因との二力なり。次は正しく答ふる中に十有り。初には障は體無けれども、但倒に由りて起ることを推す。經に云はく、『一切の業障海は、皆妄想より生ず』とは此謂なり。二には天聲隨說無我の喩は、業の所住は因果有りと雖も、而も求むるに得

ざるに喩ふ。經に云はく、「若し除滅することを求めんと欲せば、端坐して實相を觀ぜよ」とは此謂なり。前の中に總じて因果を説くを隨業報行と名け、別して三學に隨ふが故に、隨滅等と云ふ、喜は是れ慧なり。三には少福不聞受化者聞の喩は、業は作らざれば受けず、作り已れば定んで受くるに喩ふ。四は聲非生滅の喩は、業は報を感ずるが故に滅せず、緣成の故に生ぜざるに喩ふ。又釋すらく、業性は即ち生滅せず、而も業報を失せず。五は天聲無盡の喩は、業は若し懺滅せざれば、報を受くること無盡なるに喩ふ。又釋すらく、業は即ち空にして盡すべき無し。六は天聲不隨邊見の喩は、業性の斷常を離るるに喩ふ。七は天聲隨應の喩は、業は善惡を作らば、即ち苦樂の報應有るに喩ふ。八は鏡含萬像の喩は、業影は本識に現じて、實に來去無きに喩ふ。九は幻師眩日の喩は、業體の本性は空なれども有に似て、凡夫を誑すに喩ふ。十は若知是知の下は、眞の懺悔を結成す。

【九】以下、第五大段に菩薩、教を聞きて益を獲る文を釋す。

第五大段に淨是法時の下は、法を聞きて益を獲るを明す、中に於て四有り。一は餘の免奉天子得忍の益なり。或は初地、或は是れ八地に當る。二は六欲の天子發心の益、三は天女の益、此二は地前の益なり。四は爾時の下は、當機の天子を益す。是れ普賢の諸位相攝の大善巧の法を以て、是故に割めて地獄を出で已りて、此普法を聞くことを得、即ち十地を得るは、三乘の漸次の教と同じからざることを明すなり。中に於て初に位を得るの益、二は行成の益、三は勝報の益、四は滅障の益、五は見佛の益、六は益の分齊を結す。謂はく、十地の因滿を得と雖も、果に同じからざることを簡ぶ、故に猶未能等と云ふなり。

【二】以下、第六  
大段に、得益傳通  
して無盡の行を成  
ずるを明す文を釋  
す。

（二〇）第六大段に爾時諸天子於一一毛孔の下は、展轉傳通して、無盡の行を成ずることを明す、中に於て二有り。先は毛孔於り法界の供具を出して、佛を供養す。二に供具所成の利益を顯す。中に於て三有り。先は華益、廣く諸佛を見るが故に。二は香益、廣く惑障を滅するが故に。三は蓋益、廣く大行を成ずるが故に。香益の中に就いて、一は法、二は喻、三は合、四は結なり。又釋すらく、此四の中に、初の二は香を聞きて樂を得、次の一は障を滅し、後の一は善を成ず。前の中に身心快樂とは、定んで香熏の故に。滅障の中に、五塵の内外に於て各各五百の煩惱とは、『四分律』の中に五百有りと雖も、總じて數を結するに、亦別に名を列ぬること無し。既に經論に見えず、古來の諸徳の皆解釋を作す、有る一師の釋に云はく、『衆生の煩惱の根本に十使有り、一の惑力に復各各十有り、即ち一百と爲る、計して分ちて九品と爲すべし。但上品は重きが故に、開いて三品と爲し、中と下とは輕きが故に各各一品と爲し、合して五品と爲り、即ち五百と爲り、内外の境に於て起るを、合して一千と爲す、此は是れ根本の使にして、自の五塵を以て内と爲し、他の五塵を以て外と爲す。一一に各各五百あれば即ち五千と爲り、別に四諦に迷へば則ち二萬と成り、本の一千に并せて、則ち二萬一千有り。三毒等分に依るが故に、八萬四千有り」と。又有るが釋して云はく、『十惡を以て本と爲し、展轉相成して一一に各各十の故に一百と成る。自の五塵に迷ふを五百と爲し、他の五塵に迷ふを五百と爲し、合して一千と爲る。正しく十諦の法門に迷ふとは、謂はく、四諦三諦二諦一實諦なり、或は誠諦等の十諦を説くに迷ひ、或は

十善に迷ふが故に一萬と爲る。然るに十諦に迷ふに空有同じからず、分ちて二萬と成る、  
 或は十善の二諦に迷ふも亦是れ二萬にして本の一十に并せて、總じて二萬一千なり、三善  
 等分に依るが故に、八萬四千の諸の塵勞門有るなり。と。若し賢劫經に依らば、別に  
 八萬四千有り、上の九地の釋の如し。此諸煩惱皆悉除滅とは、現種使習一切皆盡き、普ねく  
 滅して別に非ざるを以ての故に。何の位に滅すとならば、五位に通ずるが故に。云何が滅  
 すとならば、虚空の如きが故に、本來盡くるが故に。三に見蓋利益の中に三あり。初に此  
 法界法門の蓋を見るが故に、一旛沙の輪王の善根を得、皆白淨寶網等の如きことを明す。  
 此は是れ世界性の中の萬子已去の輪王にして、愛見善慧王等の如し。是れ金輪の千子の、  
 四洲に王たる等には非ず。謂はく、一旛沙箇の白淨寶網輪王の善根は、暫く此蓋を見る  
 に、頓に成就することを得ん。二に菩薩摩訶薩の下は、此王位所化の利益を得ることを明  
 す。中に於て、初に所化廣多なるに、法と喻と合と有り。二は放曼陀羅の下は、所益の殊  
 勝を明すに、亦法と喻と合と有り。光に遇ひて十地を得とは、此中に三重の益有り。初に  
 佛光普ねく照すことを明し、諸天子をして十地を得せしむ。二は此二天子の毛孔所出の香  
 華鬘等、復生を益して輪王たることを得せしむ。亦是れ十地なり。三は輪王光を放ちて  
 餘の衆生を照し、亦十地を得せしむ。此三位の益皆悉く齊等にして、同時に顯に成す。  
 各の摩訶の多類あり。此を以て却推するに、總じて是れ如來の一小相の中の一の光明  
 力なり。一光既に滿り餘光も亦然なり。一の小相既に滿り、餘の小相も亦然なり。小相既





深廣無邊なることを。「智論」に云はく、「五眼の中の肉眼は、但三千大千世界の内の事を見、若しは大千界の外を見れば、則ち、何んが天眼を用ふることを爲さん」と。解して云はく、彼は三乘漸次の教に約して説くが故に、同じからざるなり。二は亦於念念の下は、佛身を見ることを明す。鏡光珠の照燭廣大にして、復明淨なるが如きが故に。下は珠の分齊を辨す、亦餘位の所見に非ざるが故に、輪王に結屬す。是の如きの廣大の肉眼は、是れ第三重の益なりとは、通じて向上の輪王及び天子に皆十眼等有ることを釋す、准釋して知んぬべし。小相光明品竟んぬ。

【二】上來修生差別の因果を明し、以下二品の因果を明し、就中廣大なる普賢の行を十門に綜括し、又各十門を開いて百門とし、普賢無盡の因行を顯す一品なり。初に名を釋す。【二に：來れり】二に當分品の來意を明す。

普賢行品第三十一。初に名を釋すとは、先に分の名を辨す。第二の修因契果生解分の中に就きて二有り。上來は修生の因果を明し、竟り、自下の二品は修顯の因果を明す。亦是上には差別の因果を明し、下は平等の因果を顯す。若し五周の因果の中に就かば、此は是れ第三に自體の因果を明す。二に品名とは、徳は法界に周ねきを普と曰ひ、用は善に順成するを賢と稱し、徳を攝して人を表すを、名けて菩薩と爲し、縁に對して造修するを、之を目けて行と爲す。普賢の行は、普賢即行なることを知んぬべし。二に來意に亦二有り、先に分の來るは、謂はく、前の差別の因果を會して、平等に歸せしむ。即ち前の第二會從り、菩薩住處品に至る來の差別の因を會して、此普賢の圓因に歸するが故に。性起品は不思議品來の三品の差別の果を會して、平等に歸するが故に、是故に來れり。又釋すらく、上乘の差別は三乘の因果を明し、此下は一乘の因果を明して、上の三乘の與に

【三に：如し】三に當品の宗趣を明

所依と爲ることを明すが故なり。又前の差別を推すに、此本位に至るが故に來れり。又前には修生を明し、此には修顯を明すが故なり。二に品の來ることは、前の品には前位の修の果を明し、此品には後位の了因を辨ず、義の次第なるが故に是故に來れり。三に宗趣とは二有り、先に宗、後に趣なり。普賢の行を宗とし明すに、略して十種有り。一は時劫に達し、二は世界を知り、三は根器を識り、四は因果を了し、五は理性を洞かにし、六は事相を鑿み、七は常に定に在り、八は恆に悲を起し、九は神通を現じ、十は常に寂滅なり。此上の十種に各各十門有り。時劫の中の如し。一は陀羅尼門、一念の中に多劫等有り。二は相卽門、三世卽一念等なり。三は微細門、多は一の中に在りて齊しく現する等なり。四は帝網門、重重に顯現する等なり。五は不思議脫門、智に隨ひて自在に修顯等を現す。六は一身普遍門、身は遍して卽ち三世劫等に入る。七は一身普攝門、三世劫海は毛孔等に在り。八は現因門、前後際に遍くして、常に菩薩の大行願等を行す。九は現果門、普く三世に於て現に正覺等を成す。十は現法門、普く劫法雲に於て雨澤ある等なり。前の五は意業自在にして、後の五は身語自在なり。時劫に約するに此十門有るが如く、餘の九も亦十あり、之に准じて則ち略して百門の普賢の行を攝するに、餘義は具さなること文に顯なるが如し。第二に趣とは、此普行を明す意は、性起の果用に對顯するに在り。問ふ、「此れ性起と何んの別ぞや。」答ふ、「三の別有り。一は此は因に約し彼は果に就く。二は此は是れ能發、彼は所發と爲す。三は此は修生に通じ、彼は唯性起なり、餘は性起品に説くが如し。

【二】以下正しく本文を釋す。

(二二) 四に文を釋すとは、後の二品の中に就いて、先に此品は普賢の圓因を明し、後の品は性起の滿果を顯す。此品の中に就いて二に分つ、謂はく、長行と頌となり。長行の中に就いて、亦二有り。謂はく、正説と及び瑞證となり。正説の中に就いて亦二有り、初は説の所因を序し、後は正しく所説を顯す。又釋すらく、亦是三と爲すべし。初は略を擧げて廣を顯し、普の義を釋成す。二は菩薩起一嘆より下は、惡を擧げて善を顯す、亦是れ剛を擧げ柔を顯し、賢の義を釋成す。三は佛子是故從り下は、六十の行門を辨じて行の義を釋成す、是故に普賢の行と名くるなり。

【二三】以下隨釋するに初に長行を釋す。中に於て初に正説する因由を序ぶる文を釋す。

【二二に遠云六】第一二會以下の差別の因果に過對していふ。

初の中に就きて二有り。先に總じて少説を標し、二に何以の下は少の所因を釋す。前の中に如向普等とは、釋に二義有り。一は近に約せば、前の「小相品」の所説の如き、諸の天子をして、普賢の行を成せしむ、是れ微少の説なり。所化の愚癡の衆生の惑業障重くして、惡道に墮する者に隨ひて、小相の用を顯すを以ての故に爾るなり。若し彈轉く智慧ある衆生に約して、大相の業用を辨ずれば、則ち廣大不可説不可説なり。二に遠に約せば、即ち五別因果の中に、前の第二周の如きは、是れ微少の説なり。前の五位は漸次の因、三位は著別の果なるを以て、諸門の内に亦普賢圓證の義有りて、三乘に同じからずと雖も、然も其門相の階降あるは、彼三乘に同じく、機に逐ひて病に就き、法源を盡さざれば微少の説と名く。此下の二品は、普賢の因果を明し、法性に逐ひて、染機に就いて以て階降を分たざれば、廣大の説と名く。文の意此の如し。釋の中に就いて、先に微、後に釋なり。



【二】以下二に正しく所説を顯すに初に所治の廣大なるを明す次を釋す

【毘尼經】 同經の十二丁。【菩薩善戒經】 卷一の八丁。

の中に先に總じて釋するに、一切如來とは、謂はく、此の如く病に隨ひ機に就いて少説するは、三世の諸佛皆悉く同じく爾るが故なり。二に別釋する中に、隨ふ所の衆生の惑染多しと雖も、略して十種を顯す。一は無明、二は諸纏、三は我所を計し、四は我見に著し、五は四倒、六は邪見、七は横に計す、八は欲縛の上に苦因を備ふ、九は苦果を具足し、十は出道を遠離す。三に爲如是の下は結なり、既に此の如きの具縛の衆生の爲に、如來出世して法を説きたまふ、豈能く具に法性を盡さんや。

第二に普賢の行を明す中に、光明の所治廣大にして百千の障有り、後に能治の廣大を顯すに六十行有り。前の中に三有り、謂はく、標と釋と結となり。標の中に暗の煩惱は皆悉く遍く一切の聖道を障ふと雖も、然も暗の一種は親しく、菩薩の大悲をもて物を攝するを障ふ、是故に偏に嗔を擧げて以て餘の惑を徧す。又釋すらく、嗔の障は最も重きを以ての故に偏に之を説くこと決定せり。『毘尼經』の中に、一菩薩は寧ろ百千の食心を起すとも、一の嗔を起さざれば、大悲に違害すること、此に過ぐるること莫きを以ての故に」と『菩薩善戒經』も亦此説に同じ。釋の中に百千等と言ふは、是れ總じて擧げ、何等の下は別して百門を辨す。中に於て位に寄せて五を分つ。初に十倍の行を障ふ。二に不樂佛法の下は十住の行を障ふることを明し、三に菩薩清淨諸根の下は、十行を障ふ。四に誹謗佛法の下は、十處向の大願行を障ふ。五に不樂菩薩共住の下は、十地の旨證の行を障ふ。菩薩の萬行は、五位に過ぎずして一の嗔心を起さば、一切頓に障ふ。又所障の法界は帝網の如くに重重にして、

【第二に云云】上は所對治の障を明し、今は能對治の行を顯す文を釋す

能障をして所障に同じからしめて、亦皆無盡なるを以ての故に、一噴を起すに百千の障を成ずといふとも理實には無盡なり。結の中に結有り釋有ること知んぬべし。第二に普賢能治の行を辨釋する中に、先に正しく顯し、後に結成す。初の中に六位有り、皆前に依りて後を起す。初の中に佛子是故とは、是れ前の一噴、百千の邪法障を成するが故に、勸めて十種の正法を修習せしめ、用ひて以て之に翻す。然るに此十法は、直に前の邪噴に翻するのみに非ず。亦乃ち疾く菩提を得るが故なり。正しく辨する中に十句有り、攝して五對と爲す。初の二人は人に約す、一は下を捨てず、二は上を慢らず。次の二人は法に約す、一は教を誹らず、二は事に迷はず。次の二人は心行に約す、一は行を樂み、二は心を堅くす。次の二人は因果に約す、一は果智、二は因辯なり。後の二人は悲願に約す、一は悲、二は願なり。第二に清淨の中に、初は前の正法に依りて行成することを明し、離染の故に清淨と云ふ。十の中亦五對と爲す。初の三は教法に於て淨なり。一は信、二は求、三は護なり。次の二人は理法に於て淨なり。一は廣、二は甚深なり。次の二人は化法に於て淨なり。一は器を了し、二は善を増し、次の二人は時劫に於て淨なり。一は不著、二は觀察、後の一は性を結成す。第三に正智とは、染障を離るるに由りて、智をして明淨ならしむ、故に正治と云ふ。此十は亦五對と爲す。初の二人は所化を了するの智、次の二人は化法を知るの智、次の二人は持辯を知るの智、次の二人は身語を具するの智、後の二人は依正を照すの智なり。第四に巧隨順入とは、正智を得て能く所知を廻轉し、互相に順入するを以ての故なり。此十を亦五對と爲す。初の二人は身土無礙、

【起信論】 解釋分の第三、分別發越道相を明す中、信成就發心の文、是れ有無一異等の一切善邪の相を離るる體なり。

【二五】 以下、感瑞と證成を明す文を釋す。

次の二は時法無礙、次の三は根境無礙なり。謂はく、入は是れ境なり、又智入の所知なり、根は是れ眞理に非ず、又亦是れ境なり。次の二は言相無礙、後の一は三世無礙なり。第五に直心とは、廻轉自在にして、正しく眞實に趣かしむるを以ての故に、直心と云ふ。此十にも亦五對あり。初の二は機を念じて教を設く。次の二は深廣の法に住し、次の二は教義の法に住し、次の二は行法に住し、後の二は果法に住す。兼に正心をもて趣向するが故に直心と名く。『起信論』に云はく、「直心とは正しく眞如の法を念ずるが故に」と。第六に巧方便とは、前の正直に依りて此巧便を起す。初の三は證するに依りて説を起す。一は深理を照し、二は勝智を出す、亦是れ理性を顯す。三は巧に言を設く。次の二は眞を證して俗を遠ざかり、別相を分別するは、是は俗諦の法なり。後の五は法の自在に入る。中に於て、前の四は法に入る、謂はく、一は理法に入り、二は果法に入り、三は行法に入る、謂はく、行法の巧便は能く一にして一切に入る。四は教法に入る、謂はく、多門善巧の故なり。後の一は上の所入に於て自在にして、退轉せざるが故に。第二に佛子是故の下は結勸す。初は聖受を勸め、何以の下は、要勝を釋し顯す。普賢の行は必ず一は一切を攝するを以ての故に、是故に少功力を以て、疾く菩提を得。此方便とは是れ功用なり。正説は竟んぬ。

【二五】 第二に感證の中に二有り。先に瑞を感じ後に證成す。此二に各各二あり、謂はく、此と結通となり。初の感の中に三有り。初に所因とは、謂はく佛力なり。二に動地、三に雨供なり。問ふ、「此會は他化天に在りて説く、何に因りてか結通に乃ち」此の如き四天下に



【六】以下、偈頌を釋す。初に説偈の意を序す。經に「爾時普賢等」の文の下、

【亦諸德云云】諸德の前に觀するを詳せざるは、是れ孤起偈なればなり

佛道場に坐して」と云ふや。』答ふ、『菩提樹下は本なるを以ての故に彼に結歸す。又天に昇ると雖も、覺樹を離れざるを以ての故に。』若し爾らば何が故に前の十地等は、皆此に同じからざるや。』答ふ、『前は同教に約し、通じて天宮及び彼覺樹を結して、本末合説す、此は別教に就いて、未を會して本に歸す、唯道場に據るの意此に存す、下の性起品等皆此釋に同じ。二に證成の中に亦三有り。初は所由、二は力なり、前に同じ。二に來人の數量、三は作如是言の下は讚述證成す、及び結通等は並に知んぬべし。』

第二に偈頌の中に二有り。先に意を序し後に正しく頌す。前の中に二有り。初には示相、謂はく、自他の二力は是れ所因なり、觀十方は是れ教を設くる分齊なり。觀法界は是れ義理の深廣なるを顯すなり。二は欲明の下は意を述ぶ、謂はく、此十種の意を述べんと欲するが爲の故に、此偈頌を説く。一は因行を明し、二は果徳を顯し、三は大願を説き、四は行起の時處、五は機熟して佛を現じ、六は根に稱ひて法を授く、七は所説の利益、八は因の得果を明し、九は果淨身を現す、十は語業をもて開覺するなり。此十種の義は下の偈頌の中に、並に具に之を顯す。正しく頌する中に一百二十一頌有り、二に分つ。初の二十二頌は説の分齊を顯し、餘の九十九頌は正しく普賢の行用を辨す。謂はく、前は略、此は廣なり。前は體、此は用の故に。亦諸德有りて、將に前の長行に配せんとするに文相當る無し。故に知んぬ意異なりて臆度すべからざることを。前の中に就いて初の二は、誠聽許説を尊し、二に一切諸劫の下の八頌は、此菩薩の、過去の佛のみもとに於ける、弘誓の願行



を明す。三に於一賢劫の下の十一頌は、現末佛に於て、三輪の行を修することを明す。中に於て初の七は現末の佛を擧げ、後の四は三輪を成ずる淨行を明す。四に行者の下の一頌は、説の分齊を結す。

自下は第二に正しく普賢の行相を顯す中に亦二あり。初に六十九頌有り、自徳の大智行を明し、二に度無量衆生の下の三十頌は、外化の大悲の行を明す。前の中に普賢十種の大智行を明すに、一は初の七頌は、善く帝網の大智に入るの行を明す。二は深入微細の下の十七頌は、深く時處の微細智に入るの行を明すと云。三に世界及び如來の下の五頌は、三世の佛心了する祕要の行を明す。謂はく、世界の名及び佛の名は、此等の最も顯なるものも、猶し多劫に於て説くとも盡す能はず、況んや佛心の中の所知の境界をや。謂はく、眞の妙法界等を、然も此菩薩は亦能く了知して、普賢の大智行を成ず。四に如是未來世の下の四頌は、未來攝化の業を了する行。五に現在十方の下の四頌は、現在佛の境界に通達する行。六に菩薩具出の下の五頌は、六根化用の行を明す。七に深入智境の下の十頌は、器世間自在の行を明す。八に菩薩知諸法の下の六頌は、智正覺世間自在の行を明す。九に清淨法身の下の五頌は、非身不身法身の行を明す。十に譬如工幻の下の六頌は、非量不量淨心の行を明す。上來は自徳の智行は竟んぬ。第二の外化の非行の中に就いて亦十行有り。初の六は物を化して菩提を發さしむるの行を頌し、二に如來淨身の下の二頌は、現佛攝生を讚歎するの行、三に一頌有り、過去の佛の舍利を分布する行、四に一頌有り、能

く未來の佛徳を知るの行、五に如是三世の下の四頌は、法輪深入の行を明す。六に無量無邊心の下の五頌は、物の心器の染淨を了するの行、七に一切衆生の下の三頌は、物の業報縁起を了するの行、八に如是諸根の下の五頌は、根境無礙を了達する行、九に一頌有り、五種の説法を了知するの行、十に最後の二頌は、三世の相是れ自在の行を明す。

【七】 當品に於ては廣く十門の性起を擧げ、又各善に十門分門して百門を成じ、十身如來の無礙の大明を説く。釋するに四門あり、初に古名を釋す。

【佛性論】 卷二の七丁の如來を釋す。

【如來秘密藏】 具には大方廣如來性起秘密藏といふ、二あり。

【如來興顯經】 四卷、竺法護譯。

【二に當品の來意を明す。】

【三に當品の宗趣を明す。】

【三に宗趣とは、性起の法門を明すを即ち以て宗と爲し、此義を分別するに略して十門を

作る。一は分相門、二は依持門、三は緣攝門、四は性德門、五は定義門、六は染淨門、七

は因果門、八は通局、九は分齊、十は建立なり。初に分相とは、性に三種有り、謂はく、

【三に宗趣とは、性起の法門を明すを即ち以て宗と爲し、此義を分別するに略して十門を

作る。一は分相門、二は依持門、三は緣攝門、四は性德門、五は定義門、六は染淨門、七

は因果門、八は通局、九は分齊、十は建立なり。初に分相とは、性に三種有り、謂はく、

【三に宗趣とは、性起の法門を明すを即ち以て宗と爲し、此義を分別するに略して十門を

【初に分相云云】以下隨門別釋するに十あり、今は初なり。

【分相】三位各各性各各起なりといひ、以て三種性起の義別を容易に知らしむ。

【性に三種云云】

三性は本有に約し三起は修生に約す而も修生即不生の故に還りて性に同じ本有は全く修生に等しき故に全體起用と成る。

【初に謂はく理云云】以下、理性起、行性起、果性起を明す。

【果性起】上の二性起の故に果位に至る、所謂至得果佛性なり。

理と行と果となり。起にも亦三有り。初に謂はく、理は了因を待ちて顯現するを起と名く。

二は行性は聞熏を待つに由りて資發し果を生ずるを起と名く。三は果性起とは謂はく、

此果性は更に別體無し、即ち彼理行は兼ねて修生を具し、果位に至る時に合して果性と爲し、應機の化用を之を名けて起と爲す。此故に三位は各各性各各起の故に性起と云ふ。今

此文の中に、正しくは後の一を辨じ、兼ねては前の二を攝するなり。二に依持門とは、一

は行は理を證して成ずれば則ち理を以て性と爲し、行成するを起と爲す。此は菩薩の位

に約す、凡位には性有りて起無きを以ての故に。二は證圓にして果を成ずるは、則ち理

行を性と爲し、果成するを起と爲す、此は佛の自徳に約す。三は理行圓成の果を性と爲し、

感に起き機に應ずるの用を起と爲す。是れ則ち理行は業用に徹するが故に起は唯性起なり。

三に薩婆門とは、既に行は理に依りて起るときは、則ち行は虚、性は實なり。虚は盡

きて實現すれば、起は唯性起にして、乃至果用は唯是れ眞性の用なり。金の、銀等と作るが

如く、銀は虚、金は實なり。唯是れ金の起なること、之を思ひて見つべし。四に性徳門と

は、理性即行性なるを以て、是故に唯理性起る。此と前の門とは徧んが別とならば、前

は理を以て行を奪ふに約して記き、今は理本より行を具するに約して説く。問ふ、一理は是

れ無爲、行は是れ有爲にして、理顯るるを法身と爲し、行滿するを報身と爲す、法と報と

は同じからずして爲無爲の異あり、云何ぞ理性は即ち是れ行なるや。二答ふ、一如來藏の中

に恆沙の性功德を具足するを以ての故に。一起信論の中に、大智慧光明の

【横中の模】異本に模中の象に作るは佳し。

【寶性論】卷四の八丁。

【五は云云】以下の五門は別して當品に就いて明すに今は當品所説の性起の義位を定む。

【一に果…の性】性海果分なり。

【機…明し】緣起四分普賢の境界

【起り…顯す】正しく性起を明す。

【問ふ云云】三番問答の一、性起淨不染問答。

義と、遍熟法界の義等有り。『涅槃』に云はく、「佛性とは、第一義空に名く、第一義空を名けて智慧と爲す」と。解して云はく、此れ則ち無爲性の中に、具に有爲の功德の法有るが故に。『如來藏經』の横中の模等、及び「寶性論」の眞如を種性と爲す等は、皆是れ此義なり。是故に修に藉りて引きて果位に至るを、名けて果性と爲し、果性の感に趣くを、名けて性起と爲す。

五は定義門とは、問うて云はく、『下の文に「小因縁をもつて、等正覺を成するに非ず」と云ふは、此は乃ち縁起なり、何が故に唯性起と言ふや。』釋して云はく、「四義有り。一に果海の自體は、不可説不可説の性なるべきを以て、機感すれば縁を具すとは縁に約して起を明し、起り已れば縁に達し、而も自性に順ず、是故に縁を廢して但性起と名く。二に性の體は不可説なり、若し説かば即ち起と名く、今は縁に就いて起を説けば、起は餘の起無し、還りて性を以て起と爲せば性起と名けて縁起と名けず。三は起は縁を攪ると顯も、縁は必ず無性なり、無性の理は縁の處に顯る、是故に顯に就きて但性起と名く。無住の本によりて、一切の法を立つる等の如し。四に若し此所起は、彼縁の相に似るによりて則ち縁起に屬す。今は所起を明すは、唯淨用に據り、眞性に順ずるが故に性起に屬す。六に染淨門とは、問ふ、「一切の諸法は皆性に依りて立つ、何が故に下の文に性起の法は、唯淨法に約して染を取らざるや。」答ふ、「染淨等の法は、同じく眞に依ると雖も、但違順の異なるが故に、染を無明に屬し、淨を性起に歸す。」問ふ、「染は性に非ずして起らず眞を離る



【問ふ染云云】二  
に染非性起離眞問  
答。

【問ふ衆生云云】  
二に衆生煩惱性起  
問答。

べし。』答ふ、『眞に違するを以ての故に、眞を離るることを得ず。眞に違するを以ての故に、眞の用に屬せず。人の顛倒して靴を帯して帽と爲すが如し、倒は即ち是れ靴なるが故に靴を離れず。首に帯して帽と爲すは、靴の所用に非ず、當に知るべし。此中の道理も亦爾なり、染は眞の體を離れざるを以ての故に、衆生即知等と説くなり。眞の用に順ぜざるを以ての故に、此性起の攝に非ず。若し留惑に約して淨用有らば、亦性起に入れて收む。問ふ、『衆生と及び煩惱とは、皆是れ性起なるや不や。』答ふ、『皆是なり。何を以ての故に。是れ所救の故に。是れ所斷の故に。所知の故に。是故に一切は性起に非ざること無し。』七に因果門とは、問ふ、『菩薩の善根は亦性に順じて起る、何が故に下の文に唯佛果を辨するや。』答ふ、『未だ圓ならざるを以ての故に、辨せざるのみ。若し性起の因と爲るの義、及び眷屬の義に約せば、皆性起の攝なり、下の文に藥樹王の牙を生ずる時、一切の樹同しく生ずる等の如し。若し此義に従はば、初發菩提心已去を皆性起に攝め、唯凡小を除く、二處に牙を生ぜざるを以ての故に。若し縁と爲りて彼をして善を生せしむるに據らば、亦性起に攝む、口の、生盲を照すが如き等なり。八は通局門とは、問ふ、『此性起は唯佛果に據らば、何が故に下の文に「菩薩は自ら身中に性起の菩提有ることを知る」と。一切衆生の心中も亦爾るや。』答ふ、『若し三乘教は、衆生の心中には但因性有りて果相の相無し、此圓教の中の盧舍那の果法は、衆生界を該ぬ、是故に衆生の身中に亦果相有り。若し圓ならずんば、則ち但是れ性にして起の義無く、此品の説に非ず。文の意は爾らず、性起は唯果法

【但し果…具す】  
佛に約せば則ち三  
世間を融じたる十  
身、衆生身業報身  
あり、土に約せば  
三世間を融じたる  
十蓮華藏、衆生形  
世界等あり。

【二八】以下正しく  
本文を釋す、如に  
分文、次に攝經七  
門の中、第一に佛  
分を釋す。

を明すを以ての故に。但し果の中に三世間を具するを以て、是故に衆生は亦此所排なり。一問ふ、既に佛果に局らば、何が故に下の文は、一切の法に通ずるや。一答ふ、若し三乘教は眞如の性は情と非情とに通じ、開覺佛性は唯有情に局る。故に涅槃に云はく、非佛性とは、謂はく艸木等なり」と。若し圓教の中には、佛性と及び性起とは皆依正に通ず、下の文に釋するが如し。是故に成佛に三世間を具し、國土身等皆是れ佛身なり。是故に局れば唯佛果なれども、通じては非情に遍す。九に分齊門とは、既に此眞性融じて一切に遍するが故に、彼所起も亦一切を具し、分圓無際なり。是故に分の處に皆悉く圓滿し、皆無盡法界を具せずといふこと無し。是故に一切時一切處一切法等に通じ、因陀羅網の如く、具足せざることを無し。十に建立門とは、問ふ、法門は無塵なり、何が故に下の文に唯十種を講ずる。一答ふ、無盡を顯すが故に。二何等をか十と爲す。一は總して多終は、以て正覺を成ずることを講ず、二は正覺身、三は語業、四は智、五は境、六は行、七は菩提、八は轉法輪、九は入涅槃、十は見聞共敬供養の益なり。此十は略して佛果の業用を收むるが故に増減せず。此十義は前の九位に通ず、皆具に之に准せよ、餘の義は下の文に當に現すべし。

四に文を釋すとは、此品は長に分ちて七と爲す。一は加分、二は本分、三は請分、四は受分、五は顯者受分、六は表讚證、七分、七は偈頌總攝分なり。初の分の中に就きて二有り。先に毫光は請主に加し、二に口光は說主に加す。前の中に亦二有り、初は光加、後

は加の益なり。前の中に十有り、初は出處を明す。眉間とは證道の二邊を離るることを表すが故に。白毫とは性起を表す、是れ諸教の本なるが故に。二に光の名を顯すに、明如來法とは、佛の性起の法を説くことを表さんと欲するが故に。三は因業、四は舒業、五は敬業、六は覺業、七は止業、八は降伏業、九は示現業、十は卷業なり。妙徳の頂に入るとは、正しく加の相を明す。何が故に此菩薩に加すとならば、名の如く性起の法を説くことを表すが故に。頂に入るは是れ加持の相なるが故に。二に爾時の下は、加の益を辨す。中に於て二有り。先は大衆の益にして、初に心喜等は法器を成ずるの益、二に念法の益なり。二に妙徳の益の中に、光頂に入るを以て、三業は儀を改め以て請相を成ず。初に身儀祖跪、二に心に異念無し、三に語偈讚請なり。讚請の中に十偈有り六に分つ。初の一は佛を歡じて禮を申ぶ。二に五頌有り、佛の放光を歎す。三に一頌有り、前の光益を歎す。四に一頌有り、衆に聞くに堪ふるの徳有るを歎す。五に一頌有り、佛に開示の徳有るを歎す。六に末後の一頌は、佛に説主を示さんことを請す。何が故に佛を請せずして、乃し餘の説主を求むるや。一光の身に入るの時、已に佛の自説に非ざることを知覺せしむるを以てなり、又上に同じく例多し、佛説に非ざることを知るが故に、別に説主を求むるなり。二に口光、説主に加する中に、前に既に示を請するが故に、今之を示すに亦二有り。先に加、後に益なり。加の中に亦十有り、初に出處を明す。口放光とは教道の傳通を表すなり。二に、光を無礙と名くることは、辯才無礙なるを表すが故に。言教自在なるが故に。無畏と

【華嚴經】序品の瑞相を結する文。

【二】二に本分を

【三〇】三に請分を請す。

は理の深きを懼れざるが故に。衆に處して畏無きが故に。餘の義は前に同じ。普賢の口に入るとは、説をして佛説の如くならしむるが故に。又是れ口傳なるが故に。又若し口より出でて耳に入るは、聞かしめんが爲なり。今口より出でて口に入るは、説かしめんが爲なり。何が故に唯し普賢に加するや。此所説は是れ普法なることを表すが故に。何等しく是れ如の相なり、何んが頂に入らざるや。教を兼ぬるを以ての故に。又「涅槃經」の中に、「佛は口より光を放ちて還つて自の口に入る」とは、收滅を表すが故に。彼經に云はく、「如来の光明出で還りて還りて入ることは因縁無きに非ず、必ず十方に於て所作已し畢じ、將に是れ最後に涅槃せんとするの相」といふは、此と別なり。二に爾時の下は、加の益を明す中に、過百倍は同類に超過し、以て法の勝ることを表し、灌じて佛に同することを恐るるが故に之を結す。加分竟んぬ。

【二】二に本分の中に二あり。先に問、二に爾時普賢の下は答なり、中に三有り。先に古事を引き、二に今に請して答へ、三に問名の益なり。初に動地とは、本分の題名を明し、此大法門に興らんとするの處を表す。論辯の光を出すことは、此妙徳は名を聞きて、請問の覺を發するが故に、能く十門の性起を請問することを明す。若し爾らずんば、何の所請なるを知らんや。

【三〇】三に請分の中に、亦二あり。謂はく、長行と頌となり。長行の中に三あり、先に法を擧げて請し、二に衆の請を對じ、三に説主の請を對す。衆を數する中に就いて三あり。



初に衆大を標し、二に善學の下は徳具を數じ、三に成就知是の下は、衆集を結す。徳を數する中に就いて、略して十徳を數す。一は淨戒業、二は念慧成、三は二嚴を滿じ、四は佛儀に住し、五は佛行を具し、六は正念の下は大定の徳、七は大悲の徳、八は決定の下は智者の徳、九は勝通の徳、十は佳果の徳なり。三に結す、知んぬべし。三に仁者の下は、説者の説くに堪ふるの徳有ることを數するに、亦十徳を顯す。一は多善を植ゑ、二は妙行を成じ、三は定の自在、四は深密を證し、五は善く疑を除き、六は教法に達し、七は善く根を知り、八は器に隨ひて説き、九は佛智に順じ、十は無盡を結し、善哉の下は請を創す。善哉に三種有り。一は法の要妙、二は衆の堪聞、三は仁の、説に堪ふるが故に、「願くば説け」と云ふなり。二に偈をもて請する中に十九頌有り、三に分つ。初の一頌半は説聽を標し、二に正しく十門の性起を請し、三に清淨眞の下は徳を數じ説を勸む。正しく請する中に就きて、初の二句は初請の總門、二に次の句は別して身業を請す。三に次の句は語業、四に次の句は意業、五に次の句は所知の境、六に次の句は所行の行、七に次の句は所得の甲を示す。有本には此中に更に二句有り、謂はく修習等なり。八に次の二句は所轉の法輪、九に次の二句は所人の涅槃、十に佛子の下の四頌半は、第十の見聞敬養の益を請す、並に下の答の中に廣く釋するが如し。三に清淨の下は、徳を數じて説を勸むる中に六有り。初の一は普賢に深廣の境を説かんことを請す。一に次の一は衆の樂聞を説かんことを請す。二に次の一は衆の樂聞の徳を數じ、三に次の二は巧言因喻を以て説かんことを

勸む。四に次の二重は、三業を擧げて以て説を請し、五に次の二は、衆會の希有を敬じて以て説を勧め、六に次の二は、請を結して衆衆を顯す。

第四に説分の中に、前の十問を答ふるに、即ち十段と爲す。一一に各各二有り。長行と

頌となり。十の中に初に性起の正法を答ふとは、是れ總相なるが故に。身等の九種は是れ

別相の故に、皆是れ性起なり。同異成壞は皆准じて知るべし。又釋すらく、此初は是れ所

依の法、餘の九は是れ能依の徳なり、法に依りて徳を成ずるを、同じく性起と名く。又此

十門は皆縁に約して性を顯す、性は縁に従ひて現するが故に性起と名く。亦諸徳有り、此

十の中の初の一を將て因と爲し、後の九を果と爲すも、文相に順ずるに非ず。

初の長行の中に就きて三有り。先に法に約して略して説き、二に喩に就きて廣く陳べ、

三に法に據りて通じて結す。此三に各各十門有り。中に於て初の十門に、有が十地に配して

一一に別釋せんとするも、悉くは文に順せず。有が此十を將て下の廣説に於て、一一に別

に釋するも文亦順せず。今釋すらく、此は略にして、一一皆十の廣釋の中に通じ、下の

十の結文も亦一一通じて十の廣釋を結す。是故に此中の因縁の數に、總じて四重有り。

一は十種と云ふは初の略に據るなり。二は百と云ふは、初の略の十の、廣の十の中に入る

に約す、一一に十を具するが故に百門有り。三は千と云ふは、後の十の結の、一一に百を

結するに就くが故に千門有り。四に無量阿僧祇等とは、彼廣等の中の一一に各各多門有り、

四智の攝攝十光明等の加し。又亦通じて身等の九の中の、諸の因縁を攝するが故に無

【三】以下、當品の正説分にして、前の十問に答ふる十段の支を顯す。

【十の中に云々】以下列じて十門別をまざるに、先づ六門に約し、次に法徳に約し、後に當品に就て結す。

【亦諸徳有り云々】亦諸徳有り云々す古人の武を否定す

【三】以下廣釋す

【一一】初に據じて廣正覺を顯す

【一一】初に據じて廣正覺を顯す

【一一】初に據じて廣正覺を顯す

【四智の風輪】四智の風輪、即ち正念、止觀、禪、離垢。

【此十は皆云云】  
總じて判ずるに二  
釋あり。初は但利  
他の釋、次は二利  
具足するを性起と  
す。

單等なり。文を釋する中に二有り、初に衆に告げ、二に顯釋す。顯釋の中に二あり、初に總じて數するに、甚だ廣きが故に不思議と云ふ。二に所以の下は釋成す。初に總釋に二義有り、一は因縁廣多にして無量なるを以て、名けて不思議と爲すが故に、下に非少因縁等と云ふ。二に甚深微妙なるを、名けて不思議と爲すが故に下に云はく、「作者有ること無く、亦成者も無し」等と。此二は並に下位の測量するところに非ざるが故に、不思議と云ふなり。二に以十種の下は正しく顯す、中に於て標と釋と結と有り。釋の中に初の「一は是れ行の本にして、此大心長劫に重習して、衆生を捨てざるに由る、是故に今に於て成正覺を現す。二に久しく衆善を修して、正直の深心此善根を引きて成正覺を現す。三は慈悲をもて生を救ふに、限盡無きを以ての故に、成正覺を現す。四に積行廣多の大願は竭くること無く、未來を盡して成正覺を現す。五に積徳成滿すと雖も而も度生増善は情に厭足無きが故に、成正覺を現す、首比丘の與に針を貫く等の如し。六に二利の徳圓にして、是を以て成佛す。七に巧智多端にして、機に應じて出現するが故に、正覺を成す。八は福藏圓かなり。九は智嚴具す、是故に正覺を出現すること、窮盡すべからず。十に若し成佛せずんば、無盡の法義を宣説するに由無きが故に正覺を現す。此十は皆是れ果成の處に、彼因縁を説く。但是は生の爲に佛を現すの因にして自徳を取らず。又亦即ち生の爲に佛を現するを以て其自徳と爲すも、更に別の自無し。是故に因を攝して、皆盡さざること無し。是の如きの因縁は既に自性無し、無自性の理を本と爲して用を起すが故に、性起と名く、

【第二に云云】  
 下第二に喻に就て  
 廣く陳ぶるなり。

結文は知んぬべし。第二に喩説の中に就きて亦十有り。一一の中に皆三先に喩、次に合、後に結なり。前の請する中に二因縁及び譬喩をもて、我爲に分別して説けしと言ふは、前の十には因縁を辨じ、此下には譬喩を明すに、亦因縁の義有り。初は是れ大千興造の喩にして、佛の衆縁共じて起る性起の徳を喩ふ。中に於て喩の内に、初は總じて多縁を擧げ、二は別して雲雨を辨じ、三は雨に因りて風を起す。一は能持と名くとは、衆生の業力、空劫の處に於て世界の將に成ぜんとするに、上空の中に於て先づ雲雨を起す。若し風の持つこと無くれば、雨水は停まること無くして、餘の世界を壞す。是故に業力は初の風輪を起す。水若し減ぜずんば、諸の天の宮殿を起すことを得るに由無し。是故に業力は次の風輪を起し、能く水を消すと雖も、處起るに由無し。是故に業力は第三の風を起して、一節水を減じ、一の天宮を起す。是の如く漸く下りて、須彌山と及び大地等を成するに至る。總處を起すと雖も、彼別類の莊嚴を辨ずること能はざるが故に、彼業力は第四の風を起して、此世界をして方に圓滿なることを得しむ。此器世間は先に成じ、衆生世間は後に成ず、廣くは「俱舍論」に辨するが如きのみ。四に業因を結する中に、菩薩善根と言ふは、同じく受用するが故に。地前の菩薩は穢土に生ずるが故に。五に多縁を結す。此四を首と爲せども、理實には無量なるが故に、如是等と云ふなり。六に法如是故の下は、緣起法爾にして各自性無きを明し、作者有ること無しとは能作の體空を明し、亦成者無しとは所作の性空を明す。二に法合の中に、上の六句に於て略して第五無し、餘は次第に合せよ。此中の四智



【第二…因縁なり】  
第二、洪澍大千の  
喻を釋す。

【第三…因縁なり】  
第三大雨無從の喻  
を釋す。

【第四…能はず  
と】第四大雨難知  
の喻を釋す。

を、有人は將て聞修證に配するも文相は順ぜず、今釋すらく、四の中に、一は總持納法の智、次の二は法に依るの起行の智なり。一は滅惑、二は成徳、後の一は依因得果の智なり。前の三は既に因なり、何が故に皆如來智と言ふや。釋すらく、「果位に在りて彼往因を説くを以ての故に、曾於過去等と云ふなり。果の中に但攝化の果を取るが故に。令衆生等と云ふなり。四に如來無漏の下は結なり、餘は並に知んぬべし。

第二に洪澍大千の喻なり。此は即ち是れ前の風所持する雨にして、以て佛の深廣難知の徳に喩ふ。謂はく、無盡陀羅尼力を得るを、成蕪諸力と名く。若し一乘に約せば、十信已去の菩薩是なり。若し三乘に約せば、八地已上は能く此法を受く。問ふ、「此門は但法の難知を顯す、何んが因縁を成ぜん。」答ふ、「彼大水は是れ衆生の業に感じて、世界を成ぜしむるを以て、彼大菩薩は機の所感なるが故に、如來は世に興りて、此法雨を説くが故に、是れ因縁なり。第三に大雨無從の喻なり。此は亦是れ前の所説の大雨、衆生の業力にして、雲より澍ぐ所、本より停佇無く、後に消滅するの時亦去る處無きを、性起は縁に頼りて來去無きの徳に況す。謂はく、佛に於て從ふこと無く、機に入りて去ること無く、此佛興るに由るが故に、是れ因縁なり。第四に大雨難知の喻なり、亦是れ摩醯知滴の喩と名く。此は亦是れ前の劫初の大雨にして、佛の性起は大機受くるに堪ふるの徳に況す。謂はく、已に十地の行を修する力を具す、是故に器大にして、方に此を受くるに堪ふ。古人釋して云はく、「性起に四有るを以てなり。一は教廣、二は行大、三は因深、四は果遠なり。是

【第五に：知んぬべし】第五大劫成敗の喩を釋す。

【第六に：知んぬべし】第六一雨隨別の喩を釋す。

【第七に：故なり】第七に二喩あり、搜玄記に、勝緣先濟の喩、隨欲所成の喩といふものはなり。【第八に三喩を釋す】第八に三喩を釋す。

【又一節云】以下第二の風輪起處の喩を釋す。

故に二乗は知る能はず。と。第五に大雨成敗の喩なり。佛の、惑を滅し智を成ずる徳に況す。各各五種有り、初は能く姿職を滅し、二は能く處所を起し、三は能く大水を壞し、四は能く海中の一切の諸寶を成じ、五は能く大千界の處を莊嚴し分別す。法の中に初の二は、障を滅して福を成じ、次の二は障を滅して智を成じ、後の一は法を以て機を照すこと知んぬべし。第六に一雨隨別の喩なり。佛の一味隨器の徳況すること知んぬべし。第七に二喩有り、初は先に色界を成ずる喩は、佛勝緣を先に濟ふの徳に況す。下の一喩は疑を釋す、謂はく、三有り。先に成ずることは業力に由り、沙の異は機別の異なるに由るか故なり。第八の喩の中に三有り、初に蓮華表佛の喩、二に風輪起處の喩、三に是れ結を爲す。初の中に、五卷の「大悲經」の第三に依るに、云はく、「何が故に賢劫と名くる。阿彌、眞三千大千世界の劫の、成せんと欲するの時、盡く一水と爲る。時に淨居天は大眼を以て、此世界を觀見するに、唯一の大水なるに、千枚の諸の妙蓮華有り、一一の蓮華に各各千葉有りて、金色の光大いに明かに普く照し、香氣芬重として甚だ愛樂すべきを見る、波淨居天、此事を見るに因りて、心に歡喜を生じ、乃至讚じて言はく、奇なる哉希有なりと。此の如く劫の中に、當に千佛出世すべし、故に此を號けて賢劫と爲す。と。解して云はく、此中の華を如來性起と名くとは、佛の出世を表す爲なり。又此中に應に生千蓮華と云ふべきが故に、下に「華の數くが如く、諸佛の世を知る」と云ふは、大悲經に同じ。又一節に、水滅じて一の風輪起りて一處所を成じ、十の風次第に處を成じて満足す。法に合せば佛の

第九：知んぬべし  
第九四輪相依の論を釋す。

第十：知んぬべし  
第十大千饒益の論を釋す。  
第三に：竟んぬべし  
以下、法に據りて

大事を成辦するの徳に況す。初に佛の出世を上の大水に合し、光の菩薩に記を授くるを、上の華生じて佛を表すに合し、又能善知の下は、上の華敷の如きの佛出づるを知るに合す。二に復有光名難垢の下は十風に合す。亦諸徳有り、將に十地に配して、次第に別釋せんとす、文は少しく顯するに似たれども恐くは其意に非ず。但知る、各各是れ一義にして、皆佛徳を表し、一應感不同なることを。如來大悲の下は、上の結文に合し、佛子如來性起の下は疑を釋す。初に正理を辨じ、二に衆生念言の下は疑情を擧げ、三に非此如來の下は疑を釋す。四に外疑ひて云はく、「既に佛の迷に非ず、佛は復何の用ぞ。」釋して云はく、「佛は但善友爲り、因縁の所成にして、無作無性なり、是故に遊りて性起の本法に闕す。第九に四輪相依の喩は、佛の體用依持の徳に況す。然るに水輪相依の風に四義有り。一は水を持つを安住と名け、二は性の移改無きを名けて不動と爲し、三は相續一期なるを名けて常住と爲し、四は體性密寂なるを名けて堅固と爲す。俱舍論に依らば、厚十六洛又等と法に合する中、初に四風に合し後に四輪に合す。前の中に一は擧取、二は授法、三は守護、四は照實なり。亦四攝に配すること有りて四風に合す、並に知んぬべし。四輪に合する中に、饒益衆生は前の地輪に合し、慈悲は水に合し、方便智は風に合し、如來は空の依持に合すること知んぬべし。第十に大千饒益の喩は、淨世に興りて生を利するの徳に況す。三學の益を得しむるの慧の中に、一は内に智實を得、二に外用の照明なり、餘は兼に知んぬべし。第三に結して知ることを勸むる中に十句有り、一一に皆通じて前の十門を結す。謂

通じて結す。

【第二に云云】上に其行釋竟りて、次に佛頌を釋す。

はく、一は皆多の故に。二は皆廣の故に。三は皆深の故に。四は皆妙の故に。五は皆大の故に。六は皆常の故に。七は皆遍の故に。八は皆續の故に。九は皆等の故に。十は皆益の故に。上來は略して辨じ、總じて十門性起の因縁を顯し竟んぬ。

第二に偈頌の中に六十五頌有り、二に分つ。初の二十八頌は、深を數じて説を許す。上の總答を頌す。二に譬如大千の下の三十七頌は、上の十喻を頌す。前の中に二有り。初の二十四頌は、法の量り難くして甚深なるを數じ、後に是故の下の四頌は、許説の分齊を明す。前の中に亦二有り。先に二十二頌は所知の深を數じ、後に如來甚深の下の二頌は、能知の器の淨なるを顯す。前の中に亦二有り。初の二は總じて佛徳の深廣にして量り難きを顯し、後に一切諸如來の下の二十頌は、別して佛徳の十門の量り難きを顯し、各各二頌をもて佛の一徳を顯す。初の二は佛の難思の徳を顯すに、先に總じて擧げ、後に別して辨すること知んぬべし。

下は喻に約する中に、各各先に喻、後に法なり。二に末塵の喻は、佛の無限の徳に喻へ、三に葦空の喻は、佛の廣大の徳に喻へ、四に數心の喻は、佛の無量の徳に喻へ、五に法界の喻は佛の甚深の徳に喻へ、六に知如の喻は佛の離相の徳に喻へ、七に無礙の喻は佛の無礙の徳に喻へ、八に性空の喻は佛の性淨の徳に喻へ、九に離言の喻は佛の無比の徳に喻へ、十は身障の喻は佛の體用の徳に喻ふ。又釋すらく、此十は即ち是れ前の結文の十句を頌す。中に於て唯第九門は、却て前の第七の句を頌す、餘は並に次に依りて解釋すること知んぬ



【二】には：別して云云「經の「譬へば大千界」等の文の下。

【三】以下第二に性起の身業を明す文を釋す、初に長

べし。次の二は能知淨を顯す中に、初の頌は總じて淨意を勸め、後の一は別して辨ず。上半は離相に合し、見顛倒の下の半は淨意樂を結す。下の四は許説の中に、初の二は聽を誡めて總じて許し、後の二は別して下の九門を擧げて、以て許説を明す。中に於て來深境界の一句の中に、如來の行と及び菩提を攝し、餘門は文に依りて皆具す。白下は別して十喩を頌する中に、初に九頌有りて初の喩を頌す。中に於て初の五頌は總、後の四頌は別なり。二に四頌有りて第二の喩を頌し、三に三頌有りて第三の喩を頌し、四に三頌有りて第四の喩を頌し、五に三頌有りて第五の喩を頌す。中に於て但法合を頌して、略して喩を頌せず。六に二頌有りて第六の喩を頌し、七に四頌有りて第七の喩を頌し、八に二頌有りて第八の喩を頌し、九に二頌有りて、第九の喩を頌し、十に三頌有りて第十の喩を頌す。末後の二頌は益を數じて説を結す。上來は總門性起の正法を答へ竟んぬ。

【二】第二に別して性起の九門を答ふる中に、先に身業を明すは、是れ所依の本なるを以ての故に。長行の中に就いて二有り。先に總じて告標門、二に此菩薩の下は義相を釋し顯す。此中に五百の門の分別有り。初に法に約して總じて顯すに五門有り、二に喩に就いて別して辨ずるに十身在り、即ち五十と爲る。三に通じて能知を結するに亦十門有り、即ち五百と爲る、例するに亦應に千有るべし、但總中の略なるを以ての故に。初の中に二有り、先に總じて徳の廣きことを標し、二に何以の下の釋し成するに、先に反釋、後に順釋す、各各五有り、法は是れ行の所依、行は是れ能依の身是れ行の所成、刹は是れ身の所依、衆

【二に喻云云】以下、喻に就きて別して解するなり。

【初の中：釋す】第一虚空周迴の喻を釋す。

【第二：知んぬべし】第二虚空無染の喻を釋す。

【第三：知んぬべし】第三日光無益の喻を釋す。

【第四：故なり】第四に二喻を釋す。

【第五：結す】第五日照生盲の喻を釋す。

生は是れ所化にして、各各法界を盡すを皆無量と言ふ。二に喻に就いて別して釋する中に、略して如来性起の十身を釋す。一は無邊周普の身、二は周遍無著の身、三は大用成益の身、四は平等應機の身、五は潛光密用の身、六は圓總自在の身、七は一多無礙の身、八は無思慮事の身、九は體用益生の身、十は隨念滿願の身なり。此十身に況して亦十喻を舉ぐるに、一の中にも各各三あり、明はく、喻と合と結となり。初の中に就いて虚空周迴の喻を明す。此れ虚空は形狀無きを以ての故に。能く行じて諸處に至るに非ざるが故に至と云ふ。然るに此れ無礙にして、一切處に遍きが故に、非不至と云ひ、佛の無邊周普の身に況す。隨處現身と言ふは、疑を釋するなり。第二に虚空離染の喻は、周遍無著の身に喩ふ、各各標と釋と有ること知んぬべし。第三に日光饑益の喻は、大用成益の身に喩へ、各各總別釋成有り。合の中、別の内に十益あり。一は滅惡生善の益、二は發解除惑の益、三は興樂拔苦の益、四は授法長道の益、五は信盛遺障の益、六は見理順事の益、七は照境無遺の益、八は無絲慈善の益、九は開發心華の益、十は行成究竟の益なり、下は釋成すること知んぬべし。第四の中に二喻有り。初に日光等照の喻は、佛の平等應機の身に喩ふ、合する中に六位の體感有り。謂はく、三乘及び三聚、無念にして照すの益なり。後の喻は疑を釋す。謂はく、若し但體感に異有りて、法は異ならずといはば、何が故に現に聖教を見るに不同たる。釋す、一は佛望に隨ひて教も亦同じからざる故なり。第五に日照生盲の喻は、佛の潛光密用の身に喩ふ。喩の中に初は無見、後は密益なり。合する中に二有り。先

【四念處】一、身念處（不淨觀）。二、受念處（苦樂觀）。三、心念處（心無常觀）。四、法念處（法無我觀）。

【第六に器】第六月光奇特の喻を釋す。

に略して合し、後に佛子の下は廣く顯す。略の中に就いて、初は生盲不信なり。生盲に四有り。一は邪見、二は犯重、三は愚癡、四は邪命なり、各各信聞無きが故に是れ生盲なり。後に佛子の下は慧日の潛益なり。初に息苦の益、後に斷集の益なり。二は廣く顯す中に二有り。初に能益の光明を辨じ、後に所益の衆生を顯す。前の中に先に十光を列ねたり。初の一は發戒、次の二は定學を成じ、次の二は聞慧を成じ、次の二は思修を成じ、次の二は證智を成じ、後の二は後得智を成す。下は廣を結するに千有り。古人の云はく、「五百下を照すとは、是れ五位の自分の行にして、五百上を照すとは、五位の勝進の行なり。」と。二に所益の中に四有り。初に菩薩を利益するに、先に普賢の位に十の徳を得しめ、後に彼法を得るに因りて種智を成就す。中に於て器入とは、是れ前の十眼耳等なり。二に二乘を利益す。種智を求めざれば生を利すること能はざるを以ての故に、但自の惑を滅す。三に生盲の凡夫を利益す。一は身をして樂ならしめ、一は心を調へ、三は行を成す、謂はく四念處なり。四は惡道の衆生を利益す。中に於て二有り。先に身光をもて惡道を救ひ、二に慈音をもて邪見を破す。又釋するに七有り。一は拔苦得樂、二は因起邪見なり。謂はく、初は佛力に逆ひ、後は梵作を執す。三に爾時の下は、慈音をもて正を示し、四に彼諸の下は、正見を救成す。五に歡喜已下は報恩行を起し、六に佛授記を與へ、七に光の利益を結す。

第六に月光奇特の喻には、佛の圓廻自在の身に喩ふ。合する中に佛の此身に四の奇特



【第七に：知んぬべし】第七梵身菩薩の喩を釋す。  
【第八に：合す】第八寶王巧術の喩を釋す。

【第九に：名なり】第九摩尼利益の喩を釋す。

【第十に：知んぬべし】第十寶王稱念の喩を釋す。

有ることを明す。一は無相にして現する超過、二は常身即ち延促し、三は體に住して恆に器を現じ、四は一身普ねく對現す。菩提器とは、古人の云はく、心海澄清にして、諸の妄念を離るるを以ての故に、佛影現したまふ。』と。今更に釋すらく、謂はく、是れ菩提を成ずるの器なるが故なり。又所聞の法に隨ふとは、是れ地前の機にして、解脫地に隨ふとは、是れ證地の器なり。第七に梵身普應の喩は、佛の多無礙の身に喩ふ。亦念を起すこと無き等は知んぬべし。第八に寶王巧術の喩は、佛の無思成事の身に喩ふ。喩の中に二有り。先に寶王現の徳を顯し、三に彼大醫の下は、殞して後に身を持つこと本の如くにして、物を救ふことを明す。合する中に亦二有り。初は寶王現の徳に合し、二は無量徳の下は、合する中の呪藥をもて身を持ち、殞して後に身を持つに合す。中に於て三有り。初に至到彼岸とは、正しく命終に合す、生死永く盡くるを以ての故に、到岸と云ふなり。二に善學等とは、業牽呪持して有に隨ひて化を起し、住持して絶えざらしむるに合す。三に如來以少方便等は、思念無しと雖も四威儀を具して、業病を療治するに合す。第九に摩尼利益の喩は、佛の體用成益の身に喩ふ。合する中に二有り、先に體、後に用なり。大輻智藏とは、謂はく、輻智は是れ體にして、能く出生するを以ての故に、藏と云ふなり。摩尼藏の能く衆寶を出すに合す。二に光の用の中に、初に諸の外道をして邪を捨てて、正色に同ぜしめ、二に淨因を成じ、三に樂果を得るは、前の兩寶に合す。目佉とは此に面と云ふ、即ち寶の名なり。第十に寶王稱念の喩は、佛の如意滿願身に喩へ、除佛神力の下は、



疑を釋すること知んぬべし。

第三に結して知を勸むる中に亦十あり。一は信心多し。二に入深等は證決廣し。三に住眞等は理玄に住す。四に無生等は體の常なるを結す。五に三世等は三際を圓にす。六は悉能等は妄情を捨つ。七は入未等は彼岸に逮る。八に正法等は化用遍し。九に一切法界とは化體周し、正法充滿の言は下の二句を貫く。十は一切佛等は果徳圓なり。此十種を以て前の十身を知るが故に、五百門を成するなり。頌の中に四十二偈ありて、前の十身を頌す。中に於て第四と第八とに各各五頌有り、餘の門には各各四頌あること應に知るべし。身業を答へ竟んぬ。

【頌の中云云】以下、性起語業の文を釋す。

第三に性起語業とは、謂はく、前に身を明し、次に語を明す、前に色、次に聲の義の次第の故に。釋の中に、長行の内に三有り。初に總じて略して、通じて十を説き、二に別して廣く復十を辨するに、各各前を具に通ずるが故に百門を成す。三に後に十門を以て、通じて前の百を結するが故に、亦千門有りて音聲を分別す。細く取らば各各無量なり、下の結の中に皆無量と言ふが如し。初の總説する中に就いて二あり、先に所知の音聲を辨するに十種有り。一は體廣、二は徳妙、三は悅機、四は演法、五は開語、六は應時、七は増減、八は増定、九は増慧、十は稱性。の故に、如響無主と云ふなり。下に能知の益相を顯すに、此能知、所知の如くなるを以ての故に、是故に彼と同じく極めて無邊なり。略して五種の見を論ずるに各各列名と釋義と有り。知見出生とは名を列ぬるなり、此に二義有り。一

【非量等云云】初は下二釋あり、次は所知に約し、能知に約して釋す非主等も例知せよ

【俱舍論云云】今上二界に生ずる因の別を明して驗の意を顯す。

に此知見は即ち是れ出生にして、善根を長ずとは、出生を釋するなり。二に知見佛聲にして、能く衆生の善根を出生し長養するが故に。餘の四に各各二釋有り。一は能知に約し、二は所知に約すること知んぬべし。又此五の中に、一は多に約し、二は深、三は廣、四は常、五は實なること、並に知んぬべし。二に廣く辨ずる中に、如來の十種の音聲を顯すに、亦十喻を以てす。第一に劫盡唱聲の喻は、佛の平等說法の聲に喩ふ。謂はく、無主なれども平等に法を説いて廢すること無し、中に於て三有り。初に法説の中に、量は分齊に約し、主は體性に約し、智は業用に約す。非量等とは一は云はく、普遍なるを以ての故に量るべからず、詮表を成するが故に無量に非ず。二は量も亦不可得、無量も亦不可得の故に云ふなり、非主等も同じく皆二釋有り。二に喩の中に、先に徴し、次に辨じ、後に結す。俱舍論に依るに、無色界に生ずるに二の因有り。一は因力、謂はく、近習及び數習なり。二は業力、謂はく、上界の後報の業の果報、至らんと欲するが故に。若し色界に生ずるに三の因有り。謂はく、法爾力を加ふ。但し器の壞せんとする時、法爾に聲有り、又次を越えて二禪に生ずることを得ず。仍て火の初禪に至るを待ちて、始めて二禪に生じ、風三禪に至るに仍りて、始めて第四に生ず。合する中に、佛は生死の世間を壞せんと欲して、亦四聲を出して四乘の法を説くことを明すに、聲體は平等にして無主無作は並に知んぬべし。第二に響聲隨應の喩は、佛の無方應現の聲に喩へ、第三に空聲聞覺の喩は、佛の教誡放逸の聲に喩ふ。合する中に五有り。先に總、二に別して二乘の法を説き、三に出

無量の下は、別に大乘の法を説き、四に衆生聞の下は正しく所益を益す。五に如来妙音の下は、聲の絶相離言を明すに、而も開機說法有るが故なり。『大乘莊嚴論』に云はく、「若し諸佛の六十種の音聲は、是れ有法にして無法に非ずと云ふは、諸佛は音聲を以て過く十方無量阿僧祇の國土に至ること能はず。音聲無法非法なるを以ての故に、諸佛は能く音聲を以て過く至る」等と、乃至廣く説けり。第四に寶女妙聲の喩は、佛の法螺回音の聲に喩ふ、謂はく、「一音は多音を出して、一一に多法を説くに、各各異類に隨ひて解するが故なり。第五に梵聲各聞の喩は、佛の根熟獨聞の聲に喩ふ、不生衆外とは、根未熟なるを以ての故に。第六には隨器別の喩は、佛の一異無礙の聲に喩へ、第七に龍王降雨の喩は、佛の長養善根の聲に喩ふ。不從外來とは、佛を離れて聲無きが故に。不内出とは、機を離れて聲無きが故に。第八に龍王漸降の喩は、佛の漸次說法の聲に喩ふ。亦是は審根授法の聲なり。合する中に二有り。一は先に身雲を現じ、七日思惟して即ち説かずとは、根の熟するを得つなり。後に漸く說法して又亦頓に說法せざる故なり。第九に龍王速注の喩は、佛の種種差別の聲に喩ふ。謂はく、聲異にして説異なるなり。並に淨法界より流るるが故に、無異の異なり。

第十に龍王遍降の喩は、佛の普く法界の聲を雨らすに喩ふ。喩の中に六有り。一は雲、二は電、三は雷、四は風、五は雨、六は結なり。合する中に亦六有り。先に十身雲に合す、初は總、九は別なり。別の中に初の四は、外相に約し、次の四は内徳に約し、後の一は稱

【二行相續】 福智  
二行相續。

性なり。二に身雲に依りて、十電光を放つに合す。三に雷震に合する中に、三昧と言ふは、定に依りて説を起すことを明し、所依によりて、白と爲す。十種は知んぬべし。四に風に合す、謂はく、將に法を説かんとするの時、先に慈悲より後智を起し、警覺し加被して身心をして柔軟に以て法器を成ぜしめ、然る後に法を説くなり。五に十法雨に合す。初に道場に坐する菩薩とは、是れ現に道樹に坐して、將に成佛せんとするに臨み、不壞の法を雨らすに三有り。一は是れ金剛三昧は、微障も阻むこと莫きが故に不壞と云ふ。二は出纏眞如の故に不壞と云ふ。三は諸の魔軍を降して壞することを得せしめず。二は後身の菩薩とは、是れ已に胎に處して出生し、未だ道場に坐せず。密教を雨らすとは、是れ佛の秘密の教にして、即ち密智に入るなり。娛樂自在とは、是れ大神通の法なり。上の二は是れ等覺の位なり。三は一生の菩薩とは、是れ未だ胎に處せざる前、彌勒種の智の位に普照の大法輪あるに同じ。四に得記とは、是れ第八地にして大法を雨らすなり。五に得忍とは、是れ初地より七地に至る。雨功德等とは、福の貴きことは實の如く、智の教くことは猶し華のごとし、二行の相續するを名けて不斷と爲す、七地已還は間斷有るを以ての故に、此不斷の行法を雨らすなり。六に向行とは、是れ地前三賢の位に、正證に趣向するを以ての故に向と云ふなり。雨不退等とは、位を得るを以ての故に、他を利して疲れざるを、入化門と名け、自ら行じて厭はざるを入甚深と名く。七に初發心とは、是れ十住の位なり。初發心住には、初來の定等を雨らして止行を修し、大慈等は觀行を修せしめて、止觀行



【頌の中云云】 二に頌を釋す。

【五】 以下、第四に性起の意業の文を釋す。

修して二利俱に起る。八に爲緣覺雨深等とは、無明と行とは識等の果を感ずと知るを、離斷見と名け、果起るは因より流るるが故に、常見を離る。又順觀は斷見を離れ、逆觀は常見を離れ、斷常を離れて而も亦壞せずして解脫の果を得。九に四諦の智藏を得て、四住の惑怨を降せしむ。十は三聖の衆生の爲にして、初は正定、二は邪定、三は不定、各己が根に順じて法益を得しむるが故に歡喜す。六に結の中に正覺心等は、龍王の心平等に合するなり。但以下は衆生の根不同にして、説を感ずるに異有るに合す。第三に通じて十聲を結するに、先に總、次に別、後に結なり。別の中に十種の無量有り、一一に各通じて前の十聲を結す。中に於て各先に無量の名を列ね、後に無量の義を釋す。義は皆見つべし。上來は相乘に總じて、一千門を以て音聲を分別し竟んぬ。

頌の中に四十頌有りて、前の十段を頌す。一一に各四頌有り、次の如く應に知んぬべし。音聲を答へ竟んぬ。

第四に性起の意業なり。先に身と語と、次に意を明す故に、麁より漸く細に、次第を明すなり。此中に於て標門と釋義と有り。釋義の中に先に法に約して總じて辨じ、二に喩に就きて別して顯し、三に總じて所知を結す。初の中に心意識非即如來と言ふは、此は法體を辨定す。謂はく、此文の中に佛心を明さんと欲す。然るに佛心等は、並に轉依をもて智を成ず、是故に智に就きて佛の意業を載するが故に、但知智無量等と云ふなり。此文の意は、佛は心意無く、但是れ智なることを明す。故に攝論の第八に云はく、謂はく、無分

【若し爾らば云云】以下、問答して廣く釋す。

【論】大乘莊嚴論の頌文。

【經云云】金光明經及び華嚴の攝論を引く。

【前の三説云云】前三教の説は趣實すれば會取せんが爲なるのみ。

【二に論云云】以下論に就いて別して攝す文を釋す。

別智の所依は心に非ず、思議するところに非ざるが故に。亦非心に非ざるを所依止と爲す、心の種類なるが故に心を以て因と爲す。數習の勢力引きて此位を得るを、心の種類と名く」と解して云はく、此位に而も心有りと謂はんとには非ざるなり。若し爾らば、豈此智數に所依の王無からん。釋するに多義有り。一は云はく、理實には佛地に淨の八識有り、且智と云ふことは、強勝なるに就きて説く。「論」に云はく、「如來の無垢識は圓鏡智相應の故に」と。智無量故心亦無量と言ふは、數に約して王を例し、能依を擧げて所依を顯す。「佛地論」等に、具に此義を明すと、當に知るべし、此は初教に約して辨す。一は云はく、理實には佛地は唯是れ大智にして、八識及び餘の心法を説かず。經に云はく、「佛に心意等無し」と。「論」に云はく、「唯し如及び如智は獨り存し、餘は一切皆絶す」と。並に此經文及び「攝論」等に同じく此義を顯すと、當に知るべし、此は經教に約して説くなり。一は云はく、佛地の大智は、内は眞性に同ず、照即寂なるを以ての故に。十藏品の中に「如來の大智は不生不滅一等といふは是れ此義なり」と。當に知るべし、此は頓教に約して説く。一は云はく、佛地の大智は、即ち理、即ち智、即ち王、即ち數、或は聞、或は合なり、前の三説相離れざるを以ての故に。無障無礙にして十智を具するが故にと。當に知るべし、此は圓教に就きて説くのみ。

二は論に就きて別して顯す中に、略して十種の大智を擧げ、如來の十種の大智に喩ふ。一は虚空無依の喩は、佛の平等無依の智に喩ふ。謂はく、能く他の與に増上縁と作るが故

【十種の大喩】  
 空無依喩、法界無  
 改喩、大海潤益喩  
 大寶出生喩、寶珠  
 消海喩、虚空合受  
 喩、藥王生長喩、  
 劫火燒盡喩、劫風  
 持壞喩、塵合經卷

に、能く他の依と爲る、自は他に依らざるが故に、所依無きなり。又釋すらく、位滿するを以ての故に、更に所依無きなり。又釋すらく、因智は果に依るも果智は依無し。又世間智は是れ加行なり、離世間智は是れ後得なり、同じく根本に依れども本智は依無し、何が故に眞如に依ると言はざるや。釋すらく、依は是れ希求の義、眞證圓滿なれば更に越求すること無きが故に無依と名く。又釋すらく、智性自ら離るるが故に更に所依無し。若し爾らば餘智は豈爾らざらんや。釋すらく、此智は證理の極なるが故に。第二に法界無改の喩は、佛性無増減の智に喩ふ。三乗の能證に自ら淺深有れども、所證の法界には増減有ること無きが如し。合する中に、能依の後得は世の虧盈に隨へども、所依の眞智の性は増減無し。第三に大海潤益の喩は、佛の益生無念の智に喩ふ。謂はく、衆生を加持して其念力を資くるが故に、潤澤心と云ふなり。第四に大寶出生の喩は、佛の用は興、體は密の智に喩ふ。合する中に、一は佛海に智珠有るに合し、二は出寶の用に合し、三は四名を列ぬ。辨法師の云はく、「此は即ち能く四乗の智慧を生ず。一は能く聲聞乘を生じ、二は能く緣覺乘を生じ、三は能く菩薩乘を生じ、四は能く人天乘を生ず」と。衍英等の云はく、「初に證道智は惑障を斷じ、二は助道智と名くるは智障を斷じ、三是不住道智は障報を捨す。上の三は自利、四は利益衆生智にして、即ち利他の行なり」と。今釋すらく、一は無住著の智、謂はく、無染は有に著せず、方便は無に住せず。二は分別法相智、謂はく、有爲無爲の差別を割折す。三は稱法聞演智、謂はく、異を説いて同を礙へざるが故に、不壞法界と云ふ

【四は深勝六云】經の佛子、此如來の四種等の文を指し、法華の安樂行品に合す。

【方正に合す】經の「菩薩の慧光：特なり」の文を指す。

【俗書】初は山海經の説、次は莊子の秋水篇、【又小乘】起世經婆沙論の説。

なり。上の三は法に約し、四は化して時を失はざるの智にして、此は機に約す。四は深勝に合するに標と釋と有り、知るべし。『法華』の中の「王髻の明珠は、唯功勳有るの臣にして方に見ることを得」等といふに同じ。五は方正に合すること知んぬべし。

第五に寶珠消海の喩は、佛の滅惑成徳の智に喩ふ。喩に合する中に各各三義有り。一は總じて擧げ、二は名を列ね、三は功能を顯す。若し俗書の中に「大海の波濤行は大水を消す」と。又云はく、「尾盧に注ぎて、海をして増さざらしむ」と。又小乘の中は「阿毘地獄は大海の下に在るを以て、火氣上り呑んで以て海水を消す」と。今此文の中を究竟の説と爲すが故に前に同じからず。合する中に、四智を、有る古徳は將に四の三昧智に配せんとす。初は是れ大乘、光明三昧智、二は是れ集輪徳王三昧智、三は是れ賢勝三昧智、四は是れ首楞嚴三昧智なり。又英の云はく、「初は是れ禪定智にして不善の障を除き、二は是れ方便智にして菩薩の障を除き、三は如理智にして煩惱障を除き、四は如量智にして所智障を除く」と。今更に釋すらく、初は能く流散する業障を除き、二は能く味定、著淨の障を除き、三は能く根本無明障を除き、四は障盡きて果を成ずるの智なり。此四は皆蠶より漸く細に向ふ。佛子の下は要勝を結すること知んぬべし。第六に虚空含受の喩は、佛の依持無礙の智に喩ふ。釋の中に、如來智は所として至らざる無しと云ふは、謂はく、佛智は一切衆生の心中に過するを以て、是故に衆生は自心の内種難より生ずる智は、即ち佛智より生じ、還つて佛智に依りて住す、而も佛智に於て迫違有ること無し。第七に藥王生長の喩は、



佛の種姓深廣の智に喩ふ。喩の中に六有り。初は樹處と及び名とを明し、二は從生の因  
 深きを明し、三は樹の功廣大にして、此樹は能く一切の諸樹を、生ずるを以ての故に云ふ  
 なり。四は樹の名を釋し顯し、五は非生處を簡び、六は生性を失はず。合する中に亦六  
 有り。初に法の同喩を擧ぐ、故に亦如是と云ふ。二は從一切の下は、從生の因深きに合す。  
 謂はく、初は是れ本性住性にして、於過去等は是れ習所成性なり。三世無量の下は所  
 生の果滿を明す、中に於て四句有り。初は内德圓なり、二に皆悉の下は外化廣し、三に除  
 滅の下は益虛からず、四に巧方便の下は果相を辨ずるに六事有り。末後に持増減と云ふ  
 は、謂はく、果徳生じれば未來際を盡して、用歇くれども減ずること無く、新に起れど  
 も増すこと無きなり。三に佛子の下は、名を合し及び名を釋す。謂はく、果を得て因を捨  
 せざるが故に、不斷菩薩行と名く。四は彼如來の下は、功用の廣大なるに合するに、亦六  
 事有りて利他の行を成す。謂はく、佛の因は慈悲を根と爲すに由りて、今堪堅くして斷  
 ぜざる故に、菩薩の慈悲行を生ずるなり。二は巧便を以て本と爲すを、名けて輩と爲す。  
 此れ能く菩薩の勤行を策成す。三は淨法界は是れ分齊の義にして、義を枝流と名け、也菩  
 薩の十度の行を流出す。四に禪觀は薩を成するの業にして、他の戒等の業行を生ず。五に  
 七覺内敷の華は、他の善叢の相を成す。六は無上の果力は記果を得しむ。亦佛智を本と爲  
 すに由りて、能く菩薩の行位を生ず。是故に佛智を性と爲して、能く菩薩の行等を成する  
 を起と名く。五は二處不生を合すとは、彼二處は起の義無きを以ての故に。

【釋すらく云云】  
通釋の意は大菩提心の有無を以てし二乘狭小の善を簡去す。

【此中に云云】  
以下正しく當文を釋す。

【若し後の文云云】  
此は法相宗に於て此經に依據して五性各別論を立つるを難殺し悉有佛性説を立てんとするなり。

問ふ、「上の文に准ずるに佛智に依りて、三乗の善根を生ずるは皆是れ性起なり、何が故に此中に二義を簡去する。」答ふ、「前は性起の所益に據る、是れ性起の自體には非ず。彼は但是れ能依なるを以ての故に。」若し爾らば菩薩も亦是れ能依なり、何が故に取るや。」釋すらく、「彼二乗は大菩提心無きを以て、性に順ぜざる故に、名けて起と爲さず、菩薩は爾らざるが故に同じからざるなり。」此中に二乗の涅槃は、地獄の深坑に合す、火燒き灰斷するを以ての故に。犯戒等水輪處に合するに、四の過失有り。一に犯戒は不懺悔の者に約し、二には邪見は斷善の因と爲るに約し、三に貪著は轉改すべからざる者に據り、四に非器は、出世道無き器に就く。或は此は亦是れ通じて上の三を結す。若し直に此文を看れば、初は定性の二乗に約し、後は無性の凡夫に約するに似たり、故に二處に生ずべからざるなり。若し後の文に據らば、生性を捨てざるに合す。則ち知んぬ畢竟無に非ず、此二位は現在に約して説くを以てなり。若し當來に約せば皆悉く能生す。二處に於て生ぜざれども、名けて滅と爲さず、餘處に能生すれども名けて増と爲さざるを以ての故に、知んぬ定んぞ有り。第八に劫火燒盡の喩は、佛知りて盡さざること無き智に喩ふ。合する中に略して四境を擧げて、知り盡さざること無しと。釋の中に不可破壞と言ふは、能知の力竭くること無き故なり。第九に劫風持壞の喩は、佛の巧使留惑の智に喩ふ。謂はく、菩薩に授與して隨眠の惑を留め、菩薩の行を滿じて佛果に至らしむ。第十に摩含經卷の喩は、佛の性通平等の智に喩ふ。中に於て三有り、法と喩と台となり。初の中に二有り、先に標

【頌の中云云】以  
下、頌を釋す。

す。謂はく、佛果の智と衆生の中の因性の本覺とに差別無きが故に。是故に即ち在纏の因は、出纏の果法を具す、圓教の中の因果は無二なるを以てなり、餘の聖教の中には未だ斯義を見ず。二に何以故の下は、因に果を具することを釋す。既に衆生の身に如來の智具足せざる者無しと言ふ、則ち知んぬ若し具せざる者有らば、彼は衆生の數に非ず、何んが更に無情有情有ることを得ん。『若し俱に有ならば、何が故に知らざるや。』釋すらく、『顛倒を以ての故に。』『若し轉倒して知らざる者は、何を以てか有なる。』釋すらく、『若し先に智無き者は、倒を離るるの時何處より有なることを得ん。既に倒を離るるの智起ると云ふ。明かに知んぬ、無には非ず。』一切智とは是れ始覺の智なり、無師智とは是れ本覺の智、無礙智とは是れ始本無二の智なり。喻の中に亦五有り。初に塵は經卷を藏し、二に天眼は經を見、三に饒益無きを傷む、四に念を作して塵を破し、五に經を出して饒益す。合する中に六句有り。初に智は衆生の中に在るは、塵内に經有るに合す。一切塵とは是れ一切衆生なり、妄念は無體細末にして塵の如きを以てなり。性徳は圓滿にして、太き經卷の如し。妄に迷うて眞を覆ふこと、塵に經を藏するが如し。二は倒を以ての故に、比知すること能はず、證見すること能はず、復此教を信ぜず。三に佛眼の觀見、四に饒益無きを傷む、五に我當の下は教へて妄染を除き、念を作して塵を破するに合す。六に如來即時の下、念の如くに作し、經を出して饒益するに合す。第三大段に總じて結す、知んぬべし。頌の中に三十七頌有り、初の一是前の總説を頌し、餘は十喻を頌す。十喻を頌する頌の内に、初

と二とは各三頌、三と四とは各四頌、五と六とは亦各三なり。第七に五頌有り、第八に亦三有り、餘の二は各四頌有り。是故に三十六は次の如くに十喻を顯す。意業を答へ竟しぬ。

【三六】以下、第五に性起の境界を明す交を釋す。

第五に性起の境界を明す。前に既に能知の大智有り、今は所知の境を明すなり。中に於て先に復問、後に顯釋す。顯釋に亦三有り。先に能知を擧げ、二に所知を顯し、三に總じて後知を結す。初の中に、若し此無量無邊の智に約せずんば、廣大の境を説くことを得るに由無し。下は所知を辨する中に二有り。初は當相に廣を明し、二に智に約して廣を辨す。初の中に亦二有り、先に辨するに十境を列ね、一は其廣大なるを釋す。前の中に五義有り。一は二諦の境に約するに、初の五は俗の量智の境に約し、後の五は眞の理智の境に約す。非境界境算と言ふは、是れ識所變の境に非ざるが故に云ふなり。二は三性の境に約するに、初の五は依他性、次の四は圓成實、後の一は過計智なり。三に五海の境に約するに、初の一は衆生海、次の二と及び第九は世界海、次の二は是れ根欲性海、次の三は是れ法界海、後の一は是れ辨海なり。謂はく、佛智は是れ境に非ざるが故に。四は前の明難品の佛境の十種相攝に約す、知んぬべし。五に文を釋する中に、初の一は是れ所化、二は是れ化の所依の時、三世劫等なり。三は所化の處、四は化所用の法、五は化所成の行、六は法界の體不壞、七は法界の用無礙、八は體用俱に實なり。又釋すらく、此三は、初に眞如の體大、次は相大にして、實沙の功德を具するを法界と名け、迭に相妨げざるを無礙と名け、後に



【心意は…非ず】  
第四如來性起の意  
業を明す初の文。

體相無二なるを實際と名く。又釋すらく、此三は次の如く、即ち三無性眞如なり。九は虛無は是れ事無爲の境なり。十は境智不二なるを非境界と名く、智に異らざるの境を以て、名けて非境と爲す、即ち此非境を以て如來の境と爲す。二に佛子の下は境の廣大を顯すことと知んぬべし。第二に智に約して廣を顯す中に三有り。先に法、次に喩、後に合なり。初の中に、當相は明し難きを以ての故に智海に約して以て境の深廣なるを顯す。然るに智は必ず心に依るが故に、心境界と云ふなり。此事に迷ふことを恐るるが故に、釋して「心の無量なるに隨ひて智を生ずることも亦爾り」と云ふなり。此は前の門の初に「心意は即ち如來に非ず」等といふに同じ、之に准ぜよ。又釋すらく、如來所智の境は、並に是れ如來智海の中の事なり、是故に下の文に廣く智海を説くは、即ち是れ境界を釋するなり。又釋すらく、境界に二義有り。上來の十種は所緣に約して境を明し、此下は分齊に約して境を明す、即ち如來の智慧の大海を以て、分齊の境と爲す。

喩の中に三有り。初に龍王心雨の喩は、佛の依心無本の智に喩へ、二に海從龍願の喩は佛の心願所起に喩へ、三に海水宏深の喩は、佛の深廣無岸智に喩ふ。此喩の中に先に海水の深廣なるを明すに、一は四洲の河水多し、二は龍王の雨水多く、三は龍王の池水多し。後に四種の無量を結す。三に佛子如是の下は、法に合する中に亦二有り。先に海の深廣なるに合す。謂はく、法は喩に過ぎて、此比する所に非ざるを顯し即ち合と爲すなり。後に大海に合する中に、四種の無量有り。初發心等は、海中の水の無量なるに合し、二に道品

【頌の中云云】以下、頌を釋す。

【三】以下、第六に性起の行の文を釋す。

【頌の中云云】以下、頌を釋す。

【三六】以下、第七に性起の菩提の文を釋す。

等は、海中の末尼等の寶無量なるに合し、三に無量衆生等は、海中の衆生無量なるに合し、四に大地等は、海中に大地有ること無量なるに合するなり。三に佛子是爲の下は、總じて結す、知んぬべし。頌の中に十偈有り。初の二は法説を頌し、次の四は初の二頌を頌し、後の四は第三の頌を頌すること知んぬべし、境界を答へ竟んぬ。

第六に性起の行とは、前は智所依の境を明し、今は境を明し、今は境に依りて、成ずる所の行を辨するが故に、次に明すなり。辨釋の中に就きて、長行の内に三有り、謂はく、標と釋と結となり。初の中に二行を標す。古人釋すらく、一無礙行とは俗諦の行を明し、二に如如行とは、眞諦の行を明すと。今更に釋すらく、初は是れ事を會して理に同するに、理は事を礙へず、是れ無礙の行なり。二に事盡きて理現するを、如如の行と名く。又釋すらく、初は是れ量智にして、外事に於て用無礙なり、二は是れ理智にして、内に如如を證するなり。二に如如過夫の下は、釋の中に五喻有り。一は眞無遷變の喩は、佛の至絶三際に行に喩ふ、即ち如如の行を釋するなり。下の四には無礙行を釋す。二に此法界無形の喩は、佛體無眼礙の行に喩へ、三に飛鳥翔空の喩は、佛の圓無分齊の行に喩へ、四に金樹搏海の喩は、佛の勝用濟生の行に喩へ、五に日月行空の喩は、佛の無功成事の行に喩ふ。皆後を以て前を釋すること知んぬべし。三に結文は知んぬべし。頌の中に十偈有りて五喩を頌するに、各二頌をもて一喩を頌すること知んぬべし。行を答へ竟んぬ。

第七に性起の菩提を明す。前に既に縁に對して造作するに必ず菩提を示現すること有る

【攝論】第九卷。  
【二智二斷】根本  
後得の二智と、煩  
悩、所知の二障を  
斷するをいふ。蓋  
は、通大乘の菩提の  
體は、智斷の二果  
なるを顯す。

【通は云々】當文  
によれば二菩提を  
指す、これ諸教に  
通ずる法門なるが  
故に。

が故に次に明せり。中に於て略して五門を作る。一は名を釋す。菩提は此には覺と云ふ、謂はく、大智をもて開悟するが故に以て名と爲す、舊に道と云ふは非なり。二に體性は『攝論』に云はく、「二智二斷を菩提の體と爲す」と。若し此經に依らば、一切の法に通ずること、文の如く之を知れ。三に種類に五有り。一に菩提に二有り、謂はく、性淨菩提及び修成菩提なり、『大品經』に出でたり。二に三菩提有り、一は聲聞菩提、二は緣覺菩提、三は諸佛菩提なり、『十地論』に出でたり。三に五菩提有り、一は發心菩提、二は伏心菩提、三は明心菩提、四は出到菩提、五は無上菩提なり、亦『大品經』に出でたり。解して云はく、五の中に、初の一は是れ十住の初位、二は是れ三賢位、三は是れ初地見道、四は修滿、五は是れ佛果究竟道なり。四に十菩提有り、『離世間品』に説くが如し。五は一切法に通ず。經に云はく、「一切の法は即ち菩提等」と。解して云はく、三菩提は初教に約し、二に五とは終教に約し、一切の法は顯教に就き、十種は圓教に據る、通は即ち知んぬべし。第四に業用とは、謂はく、二諦を緣じて二障を斷じ、二空を證して二智を起し、群機を印して萬像を現じ、十身を具して十方に遍し、毛端微塵等の處に周く、固及び果に通じて業用無邊なること、此文の中に之を具にするが如し。

五に文を釋すとは、長行の内に就きて辨釋する中、菩提の義を釋するに、略して十門有り。一は體性を明し、二は業用を顯し、三は甚深を辨じ、四は廣大なるを顯し、五は因果を現じ、六は虧盈を離れ、七は増減無し、八は定に依りて起る、九は法界に周く、十は心

【初に亦云云】以下隨釋するに十門ある中、初に體性を明す文を釋す。

【第二に：同じからず】第二に業用門の文を釋す。

【起信論】本文は分別發趣道相を説く下、一切種智の義に對する疑難を通釋する中の文なり。

【見想】妄見妄想

中(ちゆう)に過(あ)す。初(はつ)に亦(また)十門(じゅうもん)を以(もつ)て、菩提(ぼだい)の體性(たいせい)を明(あ)すに、一(いち)は覺解(かくげ)を性(せい)と爲(な)す。一切(いっけつ)義(ぎ)と言(い)ふは眞俗(しんじやく)の境(きやう)の義(ぎ)なり。二(に)に斷障(だんじやう)を性(せい)と爲(な)す、疑惑(ぎわく)を滅除(めつじゆ)すとは、二障(にじやう)を斷(た)ずるなり。三(さん)は證理(じやうり)を性(せい)と爲(な)す、謂(い)はく、證(じやう)は能所(にやうじゆ)を離(はな)るるが故(ゆゑ)に、不二(ふじ)等(とう)と云(い)ふ。四(よ)は別(わか)して所取(じゆしゆ)の相(さう)を離(はな)るるひとを擧(あ)ぐるが故(ゆゑ)に、無相(むさう)と云(い)ふ。五(ご)は能取(にやうじゆ)の見(けん)を離(はな)るるが故(ゆゑ)に無行(むぎやう)と云(い)ふ。六(ろ)は此相見(しこさうけん)をして、永(とこ)く再起(たうき)せざらしむ、故(ゆゑ)に無退(むたい)と云(い)ふ。又(また)釋(しやく)すらく、四(よ)は當體(たうたい)に相(さう)を離(はな)れ、五(ご)は性選流(せいせんりゆう)せず、六(ろ)は隨流不轉(じゆりゆうふてん)と云(い)ふ。七(しち)は多(た)くの功德(くんとく)を具(ぐ)す、故(ゆゑ)に無量(むりやう)と云(い)ふ。八(はち)は未來(みらい)を盡(じん)すが故(ゆゑ)に、無邊(むへん)と云(い)ふ。九(く)は性淨(せいじやう)を性(せい)と爲(な)す、謂(い)はく、在纏(ざいぜん)して無縛(むわく)、出障(しゆくじやう)して無脫(むだつ)なり。十(じゅう)に中道(ちゆうだう)を性(せい)と爲(な)す、故(ゆゑ)に二邊(にへん)に云(い)ふ。上來(じやうらい)は亦是(また)れに平等(びやうとう)を證(じやう)するなり。第二(だいに)に知處非(ちじゆふ)の下(した)は業用門(ごうじようもん)を明(あ)す。謂(い)はく、隨緣外照(じゆいぜんげ)の故(ゆゑ)に業用(ごうじよう)を成(な)す。中(ちゆう)に於(お)て三有(さんじゆう)り、謂(い)はく、法(ほふ)と喻(よ)と合(あ)ふなり。初(はつ)の法(ほふ)の中(ちゆう)に亦(また)十門(じゅうもん)有(あ)り。一(いち)は處非處(じゆふじゆ)を知る、即(すなは)ち十力(じゅうりき)の中(ちゆう)の初(はつ)なり。二(に)は字(じ)を知る、三(さん)は語(ご)は、四(よ)は他心(たしん)、五(ご)は根(こん)、六(ろ)は煩惱習(ぼんごうじゆ)習(じゆ)、七(しち)は性(せい)、八(はち)は宿命(じやくめい)をもて過去(かこ)を知(し)り、九(く)は天眼(てんげん)をもて未來(みらい)を見(けん)る、十(じゅう)は漏盡(ろうじん)をもて現在(げんざい)を知る、此(こゝ)三世(さんぜ)を同じ(な)く一念(いっぺん)に知(し)るなり。此(こゝ)中の所知(しち)の境(きやう)は、菩提智(ぼだいぢ)の中(ちゆう)に現(げん)するが故(ゆゑ)に知(し)と説(と)くなり、能行(にやうぎやう)等(とう)有(あ)りと謂(い)ふには非(あら)ず。二(に)に喻(よ)の中(ちゆう)に大海印現(たいかいいんげん)の喻(よ)を明(あ)すは、此(こゝ)菩提(ぼだい)は機(き)を現(げん)じて洞照(どうじやう)するに徳(とく)に喩(よ)ふ。三(さん)に合(あ)する中(ちゆう)に心念諸善根等(しんねんじゆぜんこんとう)等は、略(りやく)して前(まへ)の十境(じゅうきやう)を擧(あ)ぐるなり。所現(じゆげん)無(な)きこととは、能現(にやうげん)と殊(こと)ならざるが故(ゆゑ)に、即(すなは)ち自體顯照(じたいけんじやう)の故(ゆゑ)に、名(な)けて覺(かく)と爲(な)す。【起信論(ししんろん)】に云(い)はく、「諸(しよ)佛(ぶつ)如來(にょらい)は見想(けんじやう)を離(はな)れて、過(あ)せざる所(じよ)無(な)し、心眞實(しんしんじつ)の故(ゆゑ)に、即(すなは)ち是(こゝ)れ諸法(しよほふ)の性(せい)なり。自體(じたい)一(いつ)」



【第三に…知んぬべし】以下、第三に甚深を明す文を釋す。

【第四…云ふなり】以下、第四に廣大門を明す文を釋す

切の妄法を顯照す、大智用有り。乃至一切種智と名く」と。解して云はく、此は則ち無思にして同體の境を顯照するを菩提の業用と名く。餘位の能所取有るに同じからず。第三に佛子一切の下は、甚深門を明すに四義有り。一は名を離るるが故に深し。二は絶言の故に深し。三は無此の故に深し。四は不滞寂の故に深し、故に何隨等と云ふなり。又釋すらく、此は是れ疑を釋す。謂はく、既に言暨の及ぶ所に非ず、何が故に上下は皆言喻を以て説くや。聚顯すること文の如し。即ち無説の説にして、非喻を喻と爲すこと知んぬべし。第四に佛子如來の下は、廣大門を明す、中に於て三有り。初に身の廣大を擧げ、二に語意を類顯し、三に總じて多門を結す。初の中に成菩提時住佛方便と言ふは、此菩提は方便對機の説に由りて、成ずること有ることを明すなり。此れ増數の十身なるが故に、十三種有るのみ。初の一は是れ業生世間身、謂はく、能く一切業生の身に同ずることを得るの身なり、等とは猶し同のごとし。又釋すらく、等は猶し過のごとし。即ち過じて一切業生を以て、自身と作すが故に云ふなり。下は皆二釋有ること文に准せよ。二に一切染淨に同ずる身亦即ち知んぬべし。三に器世間國土に同ずるの身亦即ち國土を以て身と爲す。四に一切の九世十色諸劫に同ずるの身、亦即ち彼を以て身と爲す。五は一切の佛の證道に同ずるの身、六は一切の佛の智覺に等しきの身にして、亦前は如道平等、此は是れ覺道平等なり、上の二は智正覺世間身なり。七は彼能詮の言教を以て身と爲す、即ち佛の名言說法身の如し。八は所詮の法界を以て身と爲す。九は大虛無爲に同ずるの身、十は因陀羅法界に同

するの身、互相に涉するが故に無礙と云ふ。十一には用は身を起さざること無きが故に、出生と云ふなり。十二には徳、備らざること無き身なるが故に、一切行と云ふ。十三には體寂ならざること無き身なるが故に涅槃なり。又此十三を攝して六對と爲す。初の二は入法の一對、次の二は時處の一對、次の二は境智の一對、次の二は教義の一對、次の二は理事の一對にして虚空を事と爲すなり。次の二は因果の一對にして、行は是れ因なり。後の一は總じて平等を結す。二に類顯する中に、身に依りて語意を辨ずるに、語意に亦十三有り、身に同じて知んぬべし。三に總結の中に、身等の一一は各各法界に等し、故に皆無量と云ふなり。

【第五に…思へ】  
以下、第五に現因果門の文を釋す。

【問ふ云云】次に問答して廣く釋するに八段あり、初に約事約理の間。

【答ふ云云】二に教の淺深に約して答ふ。

第五に佛子如來身中の下は、現因果門を明す、中に於て三有り。謂はく、標と釋と結となり。標の中に菩提身は、衆生に等しきを以ての故に、是故に衆生は悉く中に於て現ず。彼所現は能現に同じきを以ての故に、是故に衆生として成佛せざること無し。此文は是れ大節なり。幸に之を輕んぜざれ。問ふ、此中に所現の衆生成佛は、是れ事に約すとや爲ん、是れ理に約すとせん。若し是れ事に約せば、何が故に下に、皆悉く一性なるが故に一等と釋するや。若し是れ理に約せば、何が故に標の中に乃ち一發心修行等有りと云ふや。答ふ、此は是れ別教の中の義なり、若し諸宗に約して分別せざれば、解を得るに由無し。何となれば、然も諸の衆生は、若し人天の位に於ては入法二戒の實物を具足することを看、若し小乘教の中には、此衆生は唯是れ一聚の五蘊の實法にして、本來人無し

【問ふ云云】 三に現有衆生の問。  
 【答ふ云云】 見解淺深の答。  
 【問ふ云云】 五に更に衆生を化するの問。  
 【答ふ云云】 六に化生淺深の答。  
 【問ふ云云】 七に門別有無の問。  
 【答ふ云云】 八に總成緣起の答。  
 【若し此等無し】 此れ性相無礙を明し、其離相の當體即空無所有にして性相無礙なるを大緣起門といふ。

と看る。若し大乘の初教は唯識の所現にして、如幻似有なれば、當相即ち空にして人無く法無し。若し終教に約せば並に是れ如來藏緣起にして舉體即ち如にして恆涉の德を具す。乃至是れ衆生なるが故に『不增不减經』に云はく、『衆生は即ち法身、法身は即ち衆生なり、衆生と法身とは義一にして名異なれり』と。解して云はく、此宗は理に約すれば、衆生即ち佛なり。若し頓教に約せば、衆生の相は本來盡き、理性は本來顯れ、挺然として自ら露れて更に所待無し、故に佛に即して佛に即せずと、説くべからざるなり。淨名の杜默の意等の如し。若し圓教は即ち一切衆生並に悉く舊より來發心も亦竟んぬ、修行も亦竟んぬ。成佛も亦竟んぬ、更に新に成ずるところ無く、理事を具足すること、此經文の如し。問ふ、『若し爾らば、何が故に現に衆生有り、即ち佛ならざるや。』答ふ、『汝今初に人天の位の中に就きて、彼衆生を觀るに當相即空にして猶亦得ず、況んや復圓教の中の事を見るを得ん。是故に汝現に衆生有りと見るも、我は彼に約して此成佛を説かず。但情見をして若し破せしめば、法界圓現の一切衆生は成佛せずといふこと無し。』問ふ、『若し爾らば、何が故に諸佛は、更に衆生を化する。』答ふ、『衆生を教化するに、亦淺深有り、今は即ち此菩提身に、衆生の成佛を現すとは、究竟教化と名け、餘の宗に同じからず。故に下に結する中に、如來無極大慈度脫衆生と名くるなり。』問ふ、『既に總じて成佛す、何が故に亦發心等有るや。』答ふ、『若し成佛門の中に總じて成ず、若し修行門の中には總じて修行す。若し發心門ならば總じて發心するなり。若し此等の總印を離れては、空にして所

【乃至：故なり】  
以下、乃至を追釋す。

有無し、大縁起門に准じて之を思へ。乃至涅槃と言ふは、八相の中に於て、初乃至末を擧ぐる故なり。二に皆悉の下は、釋し成ずる中に、「云何が現する。」同一眞性の故に、是の如く現す。「何を以てか衆生同菩提の性なる。」略して十因を以て、此義を釋成す。一は衆生は菩提に依りて、自性無きを以ての故に、是故に菩提に同じて、正覺等を成す。二に自の染相無きが故に。三に盡くべき所無きが故に。四に本來不生の故に。五に亦新に滅する無きが故に。上の四は同じく一句と爲す。六に我の性自ら空の故に。七に繋縁の生は是れ生に非ざるが故に。八に設ひ覺智を起すも、所覺無きが故に。九に所依の法界も亦無性の故に。十に本性の空界は體性無きが故に。三に如是等の下は、總じて結する中に、無盡智とは照用無限の故に。自然智とは、功用を待たざるが故に。無極の大悲とは同體攝化の故に。問ふ、此釋の結に准ずるに、理に約して衆生成佛を説くに似たり。何が故に標の中に、發心等の五位の因、成佛等の八相の果有りや。答ふ、此は是れ法性融通門を以て釋す。謂はく、事は理に隨つて以て融通するが故に、相即相入するを得る故なり。又餘教の中に無生を觀するは、唯理性を照し、此圓教の中には、一切の佛菩提の法を具足す。宗に依りて之を思へ。

【第六に云云】以下、第六に轉釋盈門の文を釋す。【第七云云】以下第七に用無増減門の文を釋す。

第六に佛子譬如の下は、體融對盈門なり、中に於て二有り。謂はく、喻と合となり。初の虚空常性の喻は、菩提の性、増減無きの徳に喻ふ。體常に滿じ成ずるを以て成せざる無し、性無二の故に。第七に佛子設有の下は、用無増減門を明す、中に於て三有り。謂は



【第八に云云】以下、第八に依定起用門の文を釋す。

【第九云云】以下、第九に周遍法界門の文を釋す。

【第十に云云】以下、第十に遍心中門の文を釋す。

く、喩と合と結となり。初に化現無形の喩は、菩提成不平等の徳に喩ふ。喩の中に初の化多心とは、各各多因を修するに喩ふるなり。心化如來とは、多果を成ずる喩なり。此因果俱に色相無きを以て、是故に化と化せざる等と異有ること無し。合と結とは知んぬべし。第八に佛子如來應供の下は、依定起用門を明す、中に於て三あり。初に一定門を擧ぐ、謂はく、順理驚機を名けて善覺と爲し、此定門に依りて、衆生數等の菩提の身を出す。二に類顯するに、一定の既に爾るが如く、餘の一一の定も、各爾所の身を出す。多三昧の既に各是の如くなるが如く、餘の一一の法門、謂はく、大悲大智大總持等の一切の法門も、各是の如く出るときは則ち知んぬ。菩提の身は無盡無盡にして稱説すべからざるなり。三に結は知んぬべし。第九に、復次佛子の下は、周遍法界門を明す、中に於て三あり。先に標の中に亦三有り。初に一毛道とは、謂はく、空中に於て一毛を容るる處を、名けて毛道と爲す。即ち此處に於て、前の門の中の衆生數等の菩提の身を見るに、圓滿せざることを無し。二に一切の毛道は、一皆爾なりと類顯し、三に一切の法界の處、悉く重重普遍すと類顯す。二に何以の下の周遍の義を釋成し、三に如來の下の法を結して人に屬す。謂はく、此盧舍那佛、菩提樹下に於て菩提を成ぜし時、究竟して是の如き等の類を具足すれば、法界に周遍する重重の菩提なり。是故に佛身は不思議不思議なり。此れ即ち非情一切處に遍するなり。第十に復次佛子の下は、遍心中門を明す、中に於て二有り。先に自を擧げ、二に他に例す。初に自の中に先に標す。此は佛地の果徳を明し、菩提は菩薩及び諸の衆

【若し爾らば云云】  
以下、性淨修成問  
答にして、性淨を  
以て修成の果を離  
ず。

【頌の中云云】  
以  
下、頌を釋す。

生の身心の中に遍在す。是れ菩薩に菩提の因生有るのみに非ず、文の中に正しく佛菩提を辨するを以ての故に。二に何以の下の下は釋成す。菩薩の心は既に自性無く、無自性の法即ち佛菩提なるを以ての故に、不離と云ふ。若し爾らば無自性の理は、即ち性淨菩提ならば、何ぞ必ずしも是佛果の位の法を要せん。解釋すらく、佛果の大智、内に眞原に契ひ、融じて同一性なるを以て、是故に如理、普く衆生の心に遍く、衆生の心中の菩提の性は、既に果法と差別有ること無し。則ち衆生の身中に、果徳の菩提有り、唯因性のみに非ず。此に亦諸教の不同有り。若し小乘宗は總じて佛性を辨ぜず。若し三乘宗は一切衆生の位の中に、但因性のみ有り。『涅槃』に云ふが如し、佛性は是れ因にして果に非ず」と。若し一乘宗は亦果法を具すること、此經文の如し。問ふ、此菩薩の心は、如來の菩提を離れずとは、是れ菩提心を發して、菩提を緣じて境と爲すが故に、不離と云ふに似たり。何んぞ必ずしも即ち是れ心の自體ならん。』答ふ、『若し爾らば衆生は既に未だ發心せざれば、菩提を緣じて境と爲さず、應に彼を觀じて亦菩提有るに例すべからざる故に、所緣に約せず。』二に他に例する中は先に例す、二に無量の下の徳を結す。無處不有とは普遍を明すなり。不可壞とは遍く衆に在りと雖も、惑業の爲に壞せられず、亦治道の爲に破せられず。不可思議とは染に同じて而も壞に非ず、是れ不思議なり。因に同じて而も是れ果なる、亦不可思議なり。三に結の中に方便門とは、前の十門を結す、知見菩提は並に是れ善巧の義なり。頌の中に十二偈有り。初の二は初の體性門を頌し、次の二は第二の業門を頌し、次の二は第六の體

【九】以下、第八に性起の轉法輪門の文を釋す。

離麁盈門を頌し、次の二は第七の用無増減門を頌し、次の二は第八の依定起用門を頌し、後の二は第五の顯現因果門を頌し、及び初門の業用の中の法説を頌するなり。餘の門は略して頌無し。菩提門を答へ竟んぬ。

第八に性起の轉法輪を明す。謂はく、前には菩提を得、次に轉法輪なり、以て次第と爲す。長行の中に三有り。標門と辨門と和知となり。釋の中に七門有り、轉法輪の義を分別す。一は體相、二は深廣の相、三は無盡、四は無住、五は分齊、六は出生、七は知益なり。初の中に、略して十義を以て其體相を明す。一は一切隨とは是れ法輪の所依、二は一切法とは是れ所轉の法、三は轉無所轉とは、相を會して體を明す。四に本無所起とは稱性轉體、五に三轉圓滿とは德相圓滿なり。謂はく、示相と勸知と引證を三と爲すなり。六に皆悉清淨とは、是れ梵輪の故に、性淨の故に經に云はく、三び法輪を大千に轉じ、其輪本來常に清淨なり」とは、此謂なり。七に悉能等とは離障の故に、破見の故に、業用の故に。八に離欲等とは離に所離無きが故に。九に一切諸法等とは離言の故に。十に一切法等とは離相の故に。此第十の中の故の字は、上の九義に通じて一一に皆有り、之に准ぜよ。第二に菩薩摩訶薩の下は、深廣門を明す。中に於て四義有りて各標と釋と有り。初の一は廣、次の一は深、後の二は亦深亦廣なり。初の中に先に廣大を標す。如來の下は因を出して釋成す。如來の音聲は、一切世間の文字語言に於て、至らざることを無きを以ての故に、皆法輪を轉するなり。二の中に、先に甚深を標す。實性故とは深義を釋成す。

【音音等】 器界音を等取す。

三の中に先に深廣を標す。佛の轉法輪に主無きが故にとは、釋成するなり。各緣に従ひて成じて自體無きを以ての故に、同じく一性と爲し、悉く是れ法輪なり。四の中に先に標す。無流の故に深なり、無盡の故に廣なり。内外無所有とは釋成するなり。第三に佛子譬如文字の下は、無盡門を明す。中に於て、先に文故無盡の喩にして、後に法輪無盡に合すること知んぬべし。第四に如來法輪悉入の下は、無住門を明す。中に於て法と喩と合すること三有り。字母無住の喩は入緣無住の德に喩ふ。中に於て一切處は是れ總なり、別して五處を擧ぐることに知んぬべし。第五に一切衆生諸語の下は、分齊門を明す。中に於て二有り。先に標し後に釋す。若し小乗の一説の五音は是れ法輪の聲にして、餘の阿難に「天雨るや」等と問ふは、皆法輪の攝に非ず。若し三乘の中の、佛の一切の音聲等は皆是れ法輪にして、餘は皆則ち非なり。若し一乘の一切衆生の言音等を、亦法輪に入る、用に約して皆法輪を成ずることを得るが故なり。第六に復次佛子の下は、出生門を明す。中に於て四有り。一は標門、二に何等の下は徵起、三に如來の下は總じて擧げ、四に何以故の喩は別釋するなり。別釋の中に先に通じて辨す。謂はく、法輪を轉せんと欲して、此三昧に入るとは、是れ所依の門なるが故なり。無礙とは是れ辯才なり。無畏とは言に怯懼無し。二に如來入此の下は、正しく多音を出生するを顯し、總の中の衆生念心等の音を釋成するなり。悉令衆生等とは、根に稱うて法を授くるが故に喜ばしむるなり。第七に佛子若如是の下は、知法の益を顯し、上の如くにして大菩提に順ずるを知ることを明す、爾らず



【頌の中云云】以下、頌を釋す。

【性起の涅槃を明す文を釋す。】以下、第九

【雙林：涅槃】釋尊の入涅槃。

んば則ち非なり。三に結文は知んぬべし。頌の中に十偈有り。初の二は初の體相門を頌し、次の二は第三の無盡門を頌し、次の二頌半は第四の無住門を頌し、次の三頌半は第六の出生門を頌し、最後の二頌は卻りて第二の深廣門を頌す。第五と第七とは略して頌無し、轉法輪を答へ竟んぬ。

第九に性起の涅槃を明す。謂はく、轉法輪は既に訖んぬ、次に涅槃を辨するを以て次第と爲す。涅槃の義に略して五門を作る。一は名を釋し、二は體性、三は種類、四は業用、五は文を釋す。前の四は別に盡くが如し。文を釋する中に、長行の内、釋の中に長に分ちて八門有りて、大涅槃を釋す。一は體は實にして眞常なり。二は灰斷に簡異す、三は出沒を凝へず。四は器の麴盈に隨ふ、五は起盡は緣に隨ふ、六は存亡して常に湛む、七は用は來際を窮む、八は總じて所知を結す。初の門の中に眞きて三有り。先に法を擧げて知を勸む、當に云何が知るべき、謂はく、如如假涅槃等、當に是の如く知るべしと。二に如如の下は、正しく所知を辨するに、先に一如門を標して、以て涅槃を釋す。謂はく此雙林北首の涅槃に即して、即ち眞如平等一味にして不生不滅なるに同じきが故に、猶如眞如涅槃亦爾云ふなり。下の九は、例して然り、並に是れ如の異名なり。意は、涅槃は眞實性に同じて、明淨ならしむることを顯す、故に此多門に約して説くなり。三に何以故の下は、法を釋して喻に同じ、亦是れ事を釋して理に同す。何が故に彼清淨門に約して、此眞如は即ち是れ涅槃なりと説かずして、乃ち猶如と言ふや。釋して云はく、一若し眞如の實際

即ち涅槃なるに約せば、此は則ち但是れ性にして、起の義有ること無し。若し但彼化現の  
 涅槃を取らば、則ち但是れ起にして、性の義有ること無し。今起は不起に同ずることを顯  
 すは、是れ性起を明す、則ち是れ事を會して理に同じて、性起を説くに約す。涅槃の下は、  
 喻説する中に此義彌顯る。第二に灰斷に簡異する門なり、中に於て標有り。釋有る中に、  
 菩薩の爲に究竟して永滅すと説かざるは、是れ人に約して實を顯す。謂はく、二乘に於て  
 は亦如来は永く斷滅すと説くが故に、今は大機の實教の盡理に就くが故に説かざるなり、  
 下に釋する中に二行り。初は菩薩をして實に稱うて、彼三世の諸佛に、總じて涅槃無きこ  
 とを見せしめんと欲す。前の門は理性に同じて而も常住なり、今は實徳も亦滅度無きこと  
 を辨す。「何が故に總じて涅槃無しと云はずして、乃し不説究竟涅槃と云ふや。」釋して云  
 はく、「諸の菩薩の爲に、亦方便示現の涅槃を説くは但し究竟に非ず。」「十住斷結經」の第  
 六卷に云はく、「佛最勝に告げたまはく、三世の諸佛、世尊に名號有りてより已來、吾未だ  
 泥洹の者を見ず」と。此經の下に文に、善財の知識の長者、梅檀佛塔を聞き、三世の諸佛  
 無涅槃の者を見るといへり。二に出世の下は、妙色を出生して、機に應じて絶えざるこ  
 とを明す。然るに無分別の用は、常に寂の故に、菩薩をして起用入滅の二有ることを見せ  
 しめず、亦此無二の處に著せしめず、標釋は知んぬべし。第三に佛子但如来の下は、出沒  
 を礙げざるの門を明す。中に於て先に標す。謂はく、機に應じて出沒有ること有るも、實  
 は遷らざるを礙げず。二に何以故の下は、無礙を釋し顯すこと知んぬべし。第四に佛子設

有日出の下は、隨器虧盈門を明す。中に於て先に喩、後に合す。謂はく、日影隨器現不現の喩を擧げ、佛の、器に隨ひて虧くる有り盈つること有るに喩ふるが故に、無性の「攝論」の第十に云はく、問ふ、「若し如來は是れ常住ならば、一切の時に於て何が故に現ぜざる。」答ふ、「衆生界の罪に現ぜざること、月の破器に於けるが如し。破器の中に水は住することを得ず、月の影現せざるが如し。是れ月の過に非ず、是れ器の失なり。衆生の身中に、著摩他清潤の定水無くんば、佛影の現ぜざるは如來の過に非ず、是れ衆生の失なり。」と。解して云はく、梁の「論」の中の器は持戒に喩ふるなり。又「攝論」に顯現甚深を明すに「現不現有るは、機に由りて如來の答に非ず」と。此經に滅度甚深を明すに滅不滅有るは、器の全不全に由りて、亦佛の過に非ず。又此中の涅槃は亦是れ器感の故に、應見等と云ふなり。

第五に譬如大火の下は、起盡隨緣門を明す、中に於て三有り、喩と合と結となり。初に火は著の有無に隨ひて燒かざるの喩を擧げて佛の彼化緣に隨ひて、起盡有るに喩ふるが故に「攝論」の第十に云はく、「或は涅槃は火の如しとは、世間の火の有處には燒然し、有處には息滅するが如し、諸佛も亦爾なり、諸の善根の未だ成熟せざる者に於ては等正覺を現じ、其をして成熟し速に解脫を得しめ、諸の善根已に成熟するを得、已に解脫の者に於ては、般涅槃を現す、所爲無きが故に」と。解して云はく、此上の二喩は、「攝論」並に此經に依りて而も作れり。第六に復次佛子如大幻の下は、存亡常湛を明す、中に於て亦三有り、謂はく、喩と合と結となり。先に幻師の隨ひて捨不捨するの喩を擧げて、佛の機

に隨ひて、此に滅し彼に存するも、本智常に湛なるに喩ふ。如來幻身常住如法界と言ふは、佛の修生の身も亦同じく法界にして、常爲るを明す故なり。第七に復次佛子如來示現の下は、用究竟際門を明す、中に於て十有り。初に定力をもて身を現す。二に光は華座を現す。三に座に依りて佛を現す。四に數は所化に齊し。五に具德滿願。六に機に應じて化益す。七に化は來際を窮む。八に體は有無を離る。九に常住の所由を明す。十に正しく細見を結す。此等は並に是れ如來、雙林に北首して涅槃に入るの時、此事行るなり。第八に復次佛子此菩薩の下は總じて能知の相を結す。中に於て十句有り。一は無量無邊とは、上の簡異及斷門を結して、大涅槃の功德無邊を明す。二は究竟法界とは、萬德の所依と爲し、存亡常湛門を結す、故に上に如來幻身常住任住如法界と云ふなり。三に無障礙とは起盡隨緣門を結して、滅と不滅とは障礙有ること無きを明す。四に不生滅とは隨喜勸盈門を結す、故に上に其實如來不生不滅と云ふなり。五は淨如虛空とは、不礙出沒門を結す、故に上に其實如來無涅槃是故同虛空と云ふなり。六に安住實際とは、前の最初の體實眞常門を結す。謂はく、上の文の實際等の十義は知んぬべし。七に隨其所應示現とは、通じて諸門の内、應機現用の文を結するなり。八に本願所持して衆生を捨てず。九に利を捨てず。十に法を捨てず。此三は最後の用窮來門を結す。謂はく、願力持するが故に、來際等を盡究すること知んぬべし。頌の中に、初の二は第四を頌し、次の二は第五を頌し、次の二は第六を頌し、次の四は第七を頌し、後の二は初門を頌し、餘の三は略して頌せず。涅槃を

【頌の中云云】  
下頌を釋す。

以



【三】以下、第十に性起の見聞敬養の善根を明す文を釋す。

答へ竟んぬ。

第十に性起の見聞敬養の善根を明す。前に既に涅槃をしめ、今は供養を明す。餘跡益を成じて虚からざるが故に、次に明すなり。長行の内の釋の中に三有り。先は法に就き、二は喻に約し、三は喻を簡んで法に異す。初の中に先に總じて辨す、謂ゆる、佛に於て若し佛及び像を見、若し名を聞き、及び稱念し、若し三業に恭敬し、若し四事供養す。此四位に於て、種うる所の善根は、廣多にして限無く、稱說すべからず、故に功德無盡と云ふ。下に別して顯す中に、略して三種の果を擧ぐ。一に惑障を斷滅するの果。二は於一切の下、徳は來際を窮むるの果、三に起諸佛の下は、大菩提を成ずるの果なり。又初は唯斷果にして涅槃を行しめ、後は唯智果にして菩提を得しめ、中間は二に通ず、謂はく、有爲を棄てて無爲に隨順する故なり。第二の喻の中に亦三有り。初に少金剛を呑む喻は、前の第二の徳は來際を窮むるの果に喩ふ。謂はく、微少の善根の性は、盡くすべからざるなり。二に小火能燒の喻は、第一の惑障を斷滅するの果に喩ふ。謂はく、少善根の性は能く惑を滅す。又釋すらく、前は所知障を滅し、後は煩惱障を滅す。三に藥王多益の喻は、第三の大菩提を成ずるの果に喩ふ。合する中に二有り。初に佛を以て藥樹に合し、見聞等は佛の在世に、六根の境と作ることを明す。故に【寶性論】に云はく、諸佛如來の身は、虚空の多く無相なれども、諸の勝智者の爲に、六根の境界と作り、微妙の色を示現して、千の妙音聲を出し、佛の戒香を嗅がしめ、佛の妙法の味を與へ、三昧の觸を覺らしめ、深妙の法を

【六根】眼耳鼻舌身意の六。  
【寶性論】卷一の十一丁。

【如來藏經】卷  
下の二十一丁。

【大悲經】卷三の  
四丁。

【三】以上は説分  
を釋し竟り、以下  
に第五大段に顯名  
受持分を釋す。  
【要妙の故に】一  
部の肝要深妙の究  
竟は此品に在るの  
意。

知らしむ」と。大いに此經に同じ。二に若有得經行の下は、地土等に合して、佛滅後の益を明す。上來は廣饒益を明し、二に佛子乃至不信の下は、深饒益を明す。『如來秘密藏經』に藥を罵るも之を服すれば力を得る等、沈を罵るも燒き已れば還りて香有り等、佛を罵るは、猶し外道を敬ふ等に勝ると。五卷の『大悲經』には、「但出家の人袈裟を身に著け、假令左の手に男を攜へ、右の手に女を攜へて、一の酒家より一の酒家に至る。佛の言はく、「我此人を記さん、賢劫を出ずして、當に般涅槃すべし」と。是の如き等の文は、同じく如來の法の不思議を明すなり。第三に喩を簡んで法に異するに、標有り禪有り、世の喩の能く類する所に非ざるを以ての故に、過思議と云ふなり。但隨の下の方便説の喩は、是れ其類に非ざることを明す。是爲の下は結なり、知んぬべし。偈頌の下に在るは其鈎鐔を顯す故なり。上來は説分を竟んぬ。

第五大段顯名受持分なり、中に於て二有り。先に二問を興し、後に還つて兩答す。何が故に此中に名を釋じて、持すといはば義の實を顯すが故に。性起は是れ法體なるを以ての故に。要妙の故に。答の中に先に名を答ふるに、光統等に依らば、總じて十名を作る。一は「諸佛秘密藏經」と名く。是れ諸佛内證の法なるを以ての故に。二は「世間不能思議經」と名く、凡小は測ること莫きを以ての故に。三は「如來所印經」と名く、此深廣なるは是れ如來の所印の法なるを以ての故に。四は「大智光明經」と名く、佛智は光を垂れて、明かなることを得しむるが故に。五は「開發示現如來種姓經」と名く、性起品の名は、此に従ひて

【二に佛子云云】  
上は名を答釋し、  
今は持を答ふる中  
の器あり、初に能信  
の釋なり。

而して立つ。又釋すらく、佛の種姓をして用を起して現前せしむるを、開示と名くるなり。  
六は「長養菩薩功德經」と名く、前は種姓發心起行に依り、今は此行をして、修するに隨ひ  
て漸く長ぜしむ。七は「世間不能破壞經」と名く、彼行體は常に世間に在りて、八法の所壞  
に非ざることを明す。又釋すらく、四相の所遷に非ざるが故なり。八は「隨順如來境界  
經」と名く、彼行因は能く果に順ずるを以ての故に。九は「令衆生皆清淨經」と名く、  
佛果に於て淨信を生ぜしむるが故に。又他を利して雜染の障を離れしむるが故に。十は「分  
別說佛究竟法經」と名く。上は義に約し、此句は教に約す、所說の佛果性起は是れ究竟の  
法なるを以ての故に。又の義に上の十名は皆後を以て前を釋すと。知んぬべし。  
二に佛子如是經典の下は奉持を答ふ。中に於て四有り。初は法器を辨定し、二に益を舉  
げて信受せんことを勧め、三に信順して益を成じ、四に勸修成益を明す。初の中に三有  
り、謂はく、法と喩と合となり。初の法の中に二有り。先に總じて器と非器とを標し、二  
に何以故の下は釋成す。前の中に先に器を標す。不思議乘に乗ずる。乘とは運載の義な  
り、但運載に二種有り、一は次第運載、謂はく、微より著に至り、階位漸次にして以て究  
竟に至るを、可思議乘と名く。二は一運載は即ち一切運載なり、謂はく、十信の滿心に即  
ち諸位を攝し、圓融無礙なるを不思議乘と名く。一向專求とは、直に所乘の法の相攝無礙  
なるのみに非ず、能乘の行も亦餘念を雜へず、下の法界品に、「一切の菩薩は、無量劫に修  
し、善財は一生にして皆得」と云ふが如し、皆直心の精進力に由るが故に。二に不爲餘人

とは、非器を簡ぶ、但餘に三種有り、一は凡夫、二は二乗、三は權教の中の初住の菩薩なり、謂はく、可思議に乗ずる菩薩なり。此下の文の、億那由他劫に、六波羅蜜を行じて、聞かず信ぜざる等の如し。二に何以の下は釋の中に、「一乗は深廣にして普く群品を支ぬ、何が故に餘人の爲に説かざるや」と釋すらく、「只深廣にして普く該ぬるが爲に、狭機の受くる所に非ざるが故なり」と衆生の手に入らず」とは、手に七義有り。一は位に約す。謂はく、此經を修學せば、必定して衆生の境を超出するが故に、不入手と名く、此は是れ世法の攝に非ざるを以ての故に。二は心に約す。謂はく、若し大菩提心を發起せずんば、此經の器に非ざるを、不入手と云ふ。是故に若し發心せずんば、終日卷を執るに未だ曾て手に入らざるなり。三は行に約す。謂はく、此經は是れ菩薩の道を行ずる者の要とする所なり、若し惑を起して業を造らば、衆生の行と名く、經は彼要に非ざる故に手に入らず。是れ則ち若し名聞利養の爲に此經を講讀せば、遍數は縱ひ多くとも未だ曾て手に入らず。四は智に約す。謂はく、諸の世間執見の智は衆生の衆と名く、經は彼見を超越るを不入手と名く、是れ則ち若し此經を受持するも、執見破せずんば、元より此經を曾て相見ざるなり、是故に要す須らく衆生の見に違し、此法に順すべき者は、方に入手と名く、「十地」に云はく、「若し聞くときは則ち迷悶す」とは、論に釋すらく、「聞いて聞の解を作せども、得ず聞かず一等と。五は信に約す。謂はく、見を破して正しく入ること能はずと雖も、此情外の難思議の事に於て、能く決定して信ずるを亦入手と名け、若し信ぜざる者をば、不入



手と名く。故に『法集經』に云はく、「是經は闍浮提に行はると雖も、諸佛所護の衆生の中に於て行はれ、能く深法を信する者に於て常に住す。是の如きの衆生の心手の中に行はると。解して云はく、信は能く採納すること、手の義に同じきが故に。賢首は信を歎じて云はく、「清淨の手は衆生を受くると爲す。」とは斯謂なり。六は二乗の人に約せば、亦其手に入らず。七は權教の菩薩に約するも、亦手に入らず、聞くと雖も信せざるを以ての故に。「唯菩薩をば除く」とは、既に不入一切衆生手と言ふ、此言に濫有るが故に。今は前に翻する七種を簡除して法器を簡取す、則ち是れ不思議に乗する菩薩なり。喩の中に五句有り、合の中にも亦五有り。一は此經は七寶に合す。二は不入手は、無堪持に合するなり。三に唯除眞子從種姓。中生とは、第一夫人所生の太子に合す。四に種如來相等とは、聖王の相を具するに合す。五に若無此等とは、若し太子無くんば七寶散滅するに合す、修行無きの教法は、行はれざるを以ての故に經滅と名く。「譬若論」に云はく、「法の滅せん」と欲する時は、唯行滅するが故に」と。何以故の下は眞子無くして經滅するの所由を釋す、知んぬべし。

【第二に云云】 第二に益を擧げて信を勸むる次を釋す經の「佛子是故に」等の下。

第二に益を擧げて信を勸むる中に二有り、先に聞信の益を明すに、標有り釋有り。少方便とは、普門に依りて互相に攝するを以ての故に。一得一切得の故に。善慧の一生、龍女の速疾等の如し。二に聞信攝得を明す。謂はく、若し菩薩は三乘漸次の教の中に依て、縦ひ爾所の劫を経て、六度の道品等の行を修習するも根未だ熟せざるを以ての故に、此一

【法華】 囑累品の初の文。

【問ふ更に何の云云】此は極邊の人に約して問ふ。【極めて此位】三賢位中を指す。

【第三に云云】第三に信順成益の文を釋す。經の「佛子若し菩薩」等の下。

乘經を聞信せず。若し爾らざる者は、『瓔珞經』等に十千劫の中に修信成滿すといふ。豈無量億那由他劫に六度を修行して、猶此經を信ぜざるべけんや。既に二乘に非ず、更に是れ何等の菩薩ならん。此は『法華』の中に、『若し此法を信ぜざらんには當に如來の餘の深法の中に於て示教利喜すべしといふに同じ。亦上の文の「大乘を求めん者は猶易しと爲す、能く是法を信するを甚だ難しと爲す」といふに同じ。問ふ、『爾許の劫の行、猶未だ信ずること能はざれば、今諸の凡愚は云何が信ずることを得ん。』答ふ、『宿に種姓有らば聞いて便ち信受せん、若し爾らざる者は多劫にも入ること難し。今時人行りて多く信ぜざるは、怪と爲すに足らざるなり。』問ふ、『此等の信ぜざるは、是れ何の位の菩薩ぞや。』答ふ、『文に正しく斷する無し、其劫數に准するに十千は已に過ぎ僧祇は未だ滿たず、應に是れ三賢の位の人なるべし。』問ふ、『更に何の位に至らば、則ち能く此を信するや。』答ふ、『極めて此位に至りて、必定して信じ、此一乘の法に入らず、終に地を證して而も此を信ぜざるは無し。』問ふ、『何が故に二乘は縱ひ羅漢を得とも、亦未だ信入せず、三乘の菩薩は地上に至らずして而も能く信するや。』答ふ、『三乘は勝るを以ての故に。是れ近方便の故に、二乘に同じからざるなり。是故に若し此法に入れば、則ち十信の滿心に於て、一切の位を具して、同時に得るなり。』假名菩薩と言ふは、但權教に依りて修行して、一乘の實行を得ざるなり。「種姓より生ぜず」とは、方便にして是れ佛の正因に非ざるが故に。未だ三世の佛の本性に順ぜざるが故に。第三に佛子若菩薩の下は、信受の利益を明す、中に於て十句

【第四に云云】 第四に修行の益を明す文を釋す。經の「佛子菩薩」等の下

【三】 以下第六に表瑞證成分を釋す。總の一爾時十方不可說一等的の下。

有り。一に眞子を成じ、二に佛境に順じ、三に因法を具し、四に上境に住し、五に下位に背き、六に佛行を長じ、七に因位滿す、謂はく、十地の終極を菩薩の彼岸と爲す。八は果法に入る、謂はく、佛の秘密自在神通は、測量し難き處なるに、能く善達するなり。九に果位を得、謂はく、唯佛は師無し。十は果際を窮むるが故に、深入と云ふなり。此十の中にて、初の三は三賢の益を成じ、次の四は十地の益を成じ、後の三は佛果の益を成す。此法を信受すれば此等の益を成ずること應に知んぬべし。第四に佛子菩薩聞此の下は、修行の益を明す、中に於て亦十句有り。一には悲智の心、謂はく、平等は是れ智、無量は是れ悲なり。二に遠離の下は背向の心、謂はく、直心をもて理に向ふなり。三に面對の下は、念慧の行なり、謂はく、念すれば面に對して現じ、慧照平等なり。四に分別の下は因行に達し、五に具定の下は、果智を成す。六に遠離一切の下は、離染の行、七に發清淨の下は廣大の行、八に深入の下は甚深の行、九に平等觀の下は觀果の行、十に深入此等の下は證玄の行、佛子の下は益相を結すること知んぬべし。

頌の中に但前の第十の見聞等の益を頌して、名持等を頌せず。八偈を二に分つに、初の二は法説を頌し、餘の六は三喻を頌するに各二なること知んぬべし。  
第六に表瑞證成分の中に二、先に瑞を表するに亦二有り。先に此土、謂はく、動地雨供は法の眞實を表し、後に如此の下は十方を結通して、即ち一説一切説なることを顯す。此は亦通じて前の所説の法を結し、根に順じて益を成するが故に、菩薩をして皆大いに歡喜

せしむ。二に證成する中に亦二有り、先は果、後は因にして、各一證一切證有り。佛の果證の中に就きて亦二有り、初に現身證に三有り。初に現身、二に讚說、三に引證なり。二に說此經時の下は、益の證を擧ぐ、中に於て五有り。初に菩薩位の滿の益にして、一切明は是れ智なり。二に衆生發心の益、同じく勝境と號くることは、性起の勝法を緣じて境と爲すを以て、發心の因に此名を立つ。三に是故の下は、佛の護持の意を明す。四に如此の下は普遍を結通す。謂はく、乃至法界虚空等の世界は、一一に各各所許の菩薩、所許の衆生有りて各各斯益を得。五に遍く所因を出して、出入の因を略す、是れ滅數の十なり。初の二は能說所說を一對と爲し、次の二は能感所感を一對と爲す。謂はく、善力は是れ能感なり。次の二は能化所化を一對と爲す。謂はく、緣根熟して化は時を失せず、即ち時と緣と會するが故なり。後の二は能成所成を一對と爲す。謂はく、普賢の行は是れ能成の因なり。第二に菩薩の證成の中に、何が故に此品に因果の二證有るとならば、性起の玄妙を顯すが故に。因果の本と爲すが故に。佛果の所得なるが故に。菩薩の所學なるが故に。經の上下の證に四句有り。或は唯佛の説、發心品の如し、初心成佛の事は恐くは信じ難きを以ての故に。二に或は唯菩薩の證、前の諸會の如し、諸位の所行の菩薩の所得なるを以ての故に。若し爾らば何んが證することを須ひんや。釋すらく、一一の行位に一切を攝するを以て、事は常規を越えたり、是故に須らく證すべし。三に或は俱なり、此品の如し、所由は前の如し。四に或は俱非なり、第一會等の如し、彼文は未だ盡さざるを以ての故に。



【四】以下第七に重頌分を釋す。經の爾時普賢菩薩等の下。

此文の中に就いて二有り、先に一證、後は一切證なり。初の中に五有り。一に菩薩此に來りて法界に充滿す。二に示現の下の十門は、其徳用を辨じ、三に時彼の下は、此所説を數じ、四に佛子の下は、己を述べて名を顯す。謂はく、名同じく處同じく主同じく、行同じく説同じく句同じく、字同じく義同じく理同じ。五は己が來意を顯して、作證と爲すが故に、佛力法力に略して二因を出すなり。下は一切證を結通すること句んぬべし。

第七に重頌分の中に二有り。先に意を序し、後に正しく頌す。序の中に先は衆を觀じ、後は意を顯す。意を顯す中に十一句有り、重ねて前の十門の性起を顯さんと欲するに、初に性起正法は是れ前の初門なり、二に無量功德は身業を明し、三に正法不壞は音聲の善説を明し、四に智慧は同じ、五に具佛法は超えて如來の行を辨じ、六は群生の心は是れ境界なり。上に心境界は是れ如來の境界と云へり。下に化は時を失はず、是れ衆生は時に應じて、大菩提を得ることを示すなり。八に分別一切等は是れ轉法輪なり。九に變化は是れ涅槃を現す。十は身無異は是れ法身常住なり、上の二は涅槃を顯す。十一に出生一切等は、是れ見聞救養は廣く勝善を生ず。下は正しく頌する中に七偈有り。初の二は前の説分を頌し、次の三は前の顯名受持分を頌し、後の二は勝を敬じて持を觀む、初の中に就いて、所成就威儀とは、佛の動止所作は言の能く説くところに非ず、譬の能く況するところに非ざることを明す。此は佛果の性起の當相の、明し難きことを顯す故なり。一若し爾らば何が故に上の文の十門の性起は、並に是れ如來所成の威儀なり、廣く言喻を以て辨説するや。

【上に結通して云】第六表瑞證成  
分の初に一諸の菩薩は歡喜せしめたるが如く」といふを指す。

釋すらく、「衆生を益し解を得せしめんが爲の故に、方便影響して少喻を以て説き、巧に眞實を顯し、其をして懸に會せしむ、彼法は即ち此喻の如しと謂ふには非ず、故に以非喻等と云ふ。此は縁に約し、方便して以て性起を顯す。次の三句は顯名受持分を顯する中に、初の二句は現在の具徳、方に聞くことを得るに堪ふことを明す。謂はく、精進は前の一向専求等を顯し、智慧は前の乘不思議等を顯し、微密及び如來藏は前の經名を顯し、次の二句は宿因力を具することを明し、聞きて便ち喜を生ずるは、前の種如來善根等を顯し、次の二句は天佛の讚歎を明すは、聞の益相を顯し、後の二句は勝を歎じ持を勸むる中に、初の二句は人に約して法を歎じ、上の二句は此經は是れ佛勝人の内藏なることを顯し、次の二句は佛の内藏を以て、大菩薩に被らしめて、其をして歡喜せしむることを顯す故に、上に結通して即ち合諸菩薩皆大歡喜と云ふは此謂なり。後の偈の中に、上の二句は用に約して勝を歎じ、諸菩薩は此勝法を緣じて、普賢無漏の聖道を出生することを明し、下の二句は奉持せんことを結勸す。性起品を釋し竟り、總じて第六會了んぬ。

# 華嚴經探玄記

## 卷第十七

此第一會  
を盡す

魏國西寺沙門法藏述す

【一】此は第七に重ねて普光法堂に開かれたる說法にして、一會一品なり。前品は性果の殊勝なるを顯し、此品には彼に依て起す行用を明せり。今四門を以て釋すること前の如し、初に釋名す。

(二) 離世間品第三十三。將に此文を釋せんとするに、四門は前に同じ。初に名を釋するに三有り。一は分の名、謂はく、此は第三に記法進修分と名くることを明す。即ち行法に依託して正行を修成するが故に斯名を立つ。二に會の名とは、處に約せば普光重會と名く。今何が故に、此に重ねて會すとならば、前の普光は、是れ生解の初なるを以て、今は解に依りて行を起すことを明すが故に、重ねて之を會す。若し爾らば何んが三四等の處に、亦重ねて會せざるや。釋すらく、前は是れ解を生ずるの法にして、多處に寄すべし、今は但前の法に依りて行を成するが故に、多く會せず。三に品の名に四有り。一は下の文に十義有り、彼に至りて當に辨すべし。二に別翻の一本には「度世經」と名く。三に更に一本有りて、「普賢菩薩答難二千經」と名く。四に此品を離世間と名くるに亦四義有り。一は妄執に約して世間と爲し、即空を離と爲すが故に。上の文に云はく、「一切諸の世間は皆妄想より生ず」と。是諸の妄想的法は、其性未だ曾て有らず。二は緣起に約して世間と爲し、無自性の故に名けて離と爲すなり。上の文に云はく、「三世五陰の法を、説いて名けて世間と爲す」と。斯れ虛妄に由りて有り、無きときは則ち世間を出づ。三は行に約す。

【二に…來れり】  
二に當品の來意を  
明す。

【第三に…准ぜよ】  
三に宗趣を明す。

謂はく、常に世に在りて、而も世の攝に非ざるが故に離と云ふなり。四は位に約す。人天は是れ世、二乗を離と爲し、二乗を世と爲し菩薩を離と爲す、菩薩は分段變易を俱に世間と爲し、佛果究竟を方に以て離と爲す。今此に辨ずる所は、六位の行相なるが故に、因果の二位は俱に世に即して而も世に非ざる故に離と云ふなり、品の内に此を明すが故に以て名と爲す。二に來意とは亦三有り。初に分の來ることは、上は修因契果生解分を明す、則ち法に於て解を起す。今は託法進修行徳分を明す、則ち解に依りて行を起す、義の次第の故に是故に須らく來るべし。二に會の來ることは、前の第六會には、因は果に契うて解を生ずること周圓なるを明す。次に正行は世に處して、無染なるを顯すが故に次に來れり。三に品の來ることは、前の『性起品』には、性果の殊勝を顯すことを明し、今は彼に依りて起す所の行用を明すが故に、次に來れり。

第三に宗趣とは二有り。先に類に約し、二に義に約す。前の中に二有り、先に人に約し後は法に約す。人に化主と助化と有り。化主は内證の行海を以て體と爲し、助化は入定動地を以て相と爲す、餘は並に前に同じ、之に准ぜよ。二に法の中に教事の内に、略して二百の間を標するを以て本と爲し、廣く二千を答ふるを相と爲す。讚は物を益するを用と爲す義を成じ、理の中の平等性海を體と爲す。摩算の行徳を相と爲し、教と相應するを用と爲す。餘の相即等は並に之に准ぜよ。二に義に約すと四有り。一は法、二は行、三は俱、四は涙す。初の中に二有り、先に世間を明し、後に離を明す。前の中に三類有り。一



【二に云云】以下  
離の字を釋す。

【論】 梁の攝大乘  
論。

は事相に約するに世間に二有り、一は器世間、二は五蘊世間なり、此は依正に就いて之を分つこと餘の論に説くが如し。二は麤細に約するに亦二有り。一は有爲世間、二は無爲世間なり、此は分段と變易とに據りて二と爲す。變易は是れ三有の據に非ざるを以ての故に、名けて無爲と爲す。「勝鬘」に云はく、「有爲生死無爲生死」とは、是れ此義なり。三は衆淨に約するに三種有り。一は器世間、二は衆生世間、三は智正覺世間なり。初は是れ所依、次は是れ所化、後は是れ能化なり。「地論」に説くが如し。二に離を明さば二有り。初は世間即ち是れ離なることを明し、二は世間の離を明す。前の中に三種有り。一は不同の故に離と名く、智正覺を名けて世間と爲すが如し、而も世に同せざるが故に、名けて離と爲す。二は相望離、無爲世間を分段に望むるが如し、亦名けて離と爲す。三は性自離、諸の世間の皆自性無きが如し、本來無生なるが故に亦離と名く。「論」に云はく、「世間と涅槃と少分別有ること無し」と。是故に世間を即ち離と爲すなり。二は世間を超出するを、名けて離と爲す中に亦三有り。初の不同離及び相望離は、皆他世に超出するを名けて離と爲す。性離の理は亦世の據に非ず、是故に俱に世間を超出するを、名けて方に離と爲すなり。二に行に約する中に亦三有り。一は行は縁に従ひて起るを名けて世間と爲し、自性の無生なるを即ち名けて離と爲す。二は行體は惑を滅し、世に背かしむる故に名けて離と爲す。三に行は妙果を成じて、永く二死を超ゆるが故に、名けて離と爲す。此三は次の如く前の三離に同じ、又三種の例性等に同じきことを思へ。三に俱に約して辨ずる中に、世

【二】以下正しく本文を釋するに初に序分を釋す。

【第二の中云云】以下、智正覺世間を釋す。

【受用身】自受用他受用の二身あり他の菩薩見聞する能はず、佛自ら法樂を受用すると、初地已上の菩薩を

間を以て境と爲し、悲智を行と爲す、悲を以ての故に常に世間に行じ、智を以ての故に恆に世間を離る。又世間と性離と無二なるを以て境と爲し、悲と智と無二なるを行と爲す。境行通融するに亦三句有り。一に智は悲ならざること無きが故に、世は離ならざること無し、是故に常に世間に在りて、未だ曾て出でず。二は悲は智ならざること無きが故に、離は世ならざること無し、是故に恆に世表を超えて世に遊ばざること無し。三に雙融の故に動靜無二にして、唯是れ一念なり、謂はく無念なり。是故に菩薩は無念にして、念を起さずして常に世間に行じ、常に世間を出づること無障無礙なり。四に俱非の中に亦三有り。一は境に約す。世間と離と形奪兩ながら亡す。二に悲智俱に融じ、二念雙べ泯す。三に境行相由り、形奪して齊く遺り絶待離言不可説なり、之を思うて知んぬべし。下の文の二千の行相是なり。此等の義は思うて以て之に准ぜよ。

【第四】文を釋すとは、此會の中に長に分ちて八と爲す。一は序分、二は三昧分、三は起分、四は請分、五は説分、六は結勸分、七は表證分、八は偈頌分なり。序分の中に就いて三有り。初に器世間圓滿を明し、二に智正覺世間圓滿を顯し、三に衆生世間圓滿なり。初の義は前の釋の如し。第二の中に成等正覺等とは、此は是れ受用身の二十一種の功德にして、『攝大論』の第五及び『佛地論』の第二に、並に廣く此文を釋するが如し。今彼二論に依りて、略して少分を示さん。初の一句は是れ總、餘の二十句は是れ別なり。初の中に後の二十の殊勝の徳を具するが故に、名けて正覺と爲す、即ち正理に稱うて開覺す。又邪障

して感見せしめ、  
彼をして法樂を受  
用せしむるとなり

の覺を離るるが故に名く。又正覺は理智に約し、等覺は量智に約すること知んぬべし。別  
の中に二、不二念とは「論」には不二現行と名く、是は一向無障の殊勝の功徳にして、二  
障を離るるを以ての故に。凡小に異なりて、二處に住するが故に。又釋すらく、遠時方等  
の境に於て、知不知の二念無きが故に、即ち此に由るが故に等正覺と名く。三は無相念と  
は、彼論には趣無相と名く、是は調化の方便功徳なり、他をして無相の涅槃を趣證せしむ  
るが故に。又釋すらく、能入の無二の功徳に名く。謂はく、自ら能く有無の相を離れて、  
清淨眞如に入る。亦他をして入らしむるが故に。四に佛住に住すとは、是れ所調化を觀  
するの功徳なり。謂はく、大悲に住して常に世間を觀するが故に。又是れ任運にして佛事  
を休息せざる功徳にして、恆に聖天及び梵住に住するが故に。五に等一切佛とは、是れ一  
切の佛相事業を得るの功徳にして、又法身の中に於て、所依の意樂作業無別の功徳なり。  
謂はく、所依の智は同じく生を益するに、意同じく報化の業同じき故に等と云ふなり。六  
に到無礙趣とは、是れ永斷所治の功徳なり。謂はく、二障の習滅を證得し、及び彼治道を  
修すること成就し現前するが故に。七に得不退法とは、是れ外道を伏するの功徳なり。謂  
はく、證教の法は、彼轉すること能はず、彼を伏して己が正道の法を顯すが故に。八に無  
礙境とは、是れ魔怨を伏するの徳なり。謂はく、違順中の境も、心を礙ぐること能はず、  
及び世の八法も、拘礙すること能はず。九に住不思議とは、是れ安立法教の徳なり。謂は  
く、諸の勝教は、尋思を出過し、餘の能く測るところに非ざるが故に。十は三世を離る

とは、「論」には「三世平等の法性に遊ぶ、是を三世を記別するの功德と名く」と。謂はく、去來を記別すること、皆現在の如く分明にして、倒無きが故に平等と名く。此中の離とは三世を離る、記明了ならざるが故なり。

十一に一切世界に於て、普く身を現すと、是れ同時に普く一切世界に於て、受用の化身を示現する功德なり。十二は一切法を知るとは、「論」には一切法智無疑滯と名く、是れ一切の疑を斷ずる功德なり。謂はく、諸法に於て自ら疑を斷じ、決定の智を得、他をして亦得しむ。十三は具足成就一切妙行とは、「論」には「一切の行に於て大覺を成就す、是を種種の行に入るの功德と名く」と。謂はく、所化の有情の所宜に隨ひて、同類の身を現じ、彼をして入らしむるが故に。十四に永く疑惑を滅すとは、是れ當來の法に達する智を生ずるの功德なり。謂はく、二乘の境に過ぐる微細の善種は、瓦石中の細金の種子の如し。是の如き等の境は、無倒にして遍く知るが故に。十五に虚妄の身を離るとは、「論」には不可分別と名く、是れ自身無染の徳なり。謂はく、惑業苦の離染分別の所起に非ざるが故に。又其勝解に隨ひて、應の如く身を現すること、末尼珠の如し、分別無しと雖も、増上の力の故に、金色身等を現す。十六に能く菩薩に無量の智慧を與ふとは、「論」には一切菩薩正所求智と名く、是れ種種不斷の方便を成就する功德なり。謂はく、諸の菩薩は諸の有情の調伏方便に依り、皆如來の増上力に由るが故に、法を聞き思修することを得、次第に妙智を獲得す。異類の菩薩は攝受し付屬し展轉相續無間にして轉ず。十七に佛の無二



彼岸に住すとは、『論』に得佛無二住勝彼岸と名く、是れ法身の諸度、極めて成満する徳なるが故に。謂はく、法身無二の度行満するが故に。十八には具足乃至法門とは、相間雑せず。如來解脫の妙智究竟じて、是受用身及び土を、穢に隨ひて應現し、互に雜らざる等なり、此不可沮壞は是れ彼間雜せざるなり。十九に究竟無量無邊とは、『論』には證無中邊佛地平等と名く、是れ三身の方處に、分限有ること無き功德なり。又是れ眞如を證し、有爲無爲中邊の相を離るるが故に。方處中邊の相を遠離するが故に。此れ佛地は後の句の中に在り。又釋すらく、世界中邊無きが故に、佛の現することも亦中邊無し、中邊無きが故に即ち總じて無邊なり。二十に法界等とは、『論』には極於法界と名く、是れ果相を證得する功德なり。謂はく、清淨法界を窮むるが故に。又是れ生死の際を窮め、常に現起して一切有情の利益を作す功德なり。謂はく、淨界より流れて經法を起すに依りて、巧に生を益するが故に。二十一に虚空等とは、『論』には盡虛空性と名く、未來際を窮む。劫を経て成壞すと雖も、而も空は常に盡くること無し、此れ自の實徳に同じ。來際無盡は斯れ利他の勝用にして、常に休むこと無きなり。第二會の初には唯初の十句有り、此釋に准じて之を知れ。問ふ、『佛地經』及び『解深密經』に、十八圓滿受用土を辨ずる中に、受用身に此二十一種の功德有ることを數す。今此佛身は摩竭國に在り、即ち是れ變化なり、何に因りてか亦此功德を具することを得る。設ひ此化身は地上の見に約して、此徳を具せば、何が故に佛を見て土を見ざるや。又此化を見るを即ち報と爲せば、豈地上の菩薩は、變化

身を兼ね見ることを得ざるや。」答ふ、「是に知んぬ、此中は十佛の功德に約し、見は五位に通じ、處には染淨を該ぬ。二千の法の中に亦地前の四十位有るを以ての故に、地前地上所見を同するが故に。摩竭と華藏と融じて無二なるが故に。餘は前に説くが如し。」

【第三に云云】以下第三に衆生世間圓滿を釋す。

第三に衆生世間圓滿の中に二有り。初には數を擧げて德を數じ、二は名を列ねて德を數す。亦是れ前は數を擧げて總じて數じ、後は是れ名を列ねて別して數す。前の中に二有り、初は數を擧げて簡定し、二に具足の下は勝德を數じ顯す。前の中に一は數を擧げ、二は大を簡びて小に異にし、三は終を簡びて始に異にし、四は客を簡びて主に異にす。二に德を數する中に二有り。先に別して數じ、後に總じて結す。前の中に亦二有り。初の十句は因位の自分の德を數じ、二に於一念の下は、果位の勝進の德を數す。前の中に亦二有り。初の五句は巧慧の德を數じ、後の五句は攝生の德を數す。前の中に初の句は總標なり、謂はく、此中央の一菩薩は、即ち已に具に一切菩薩所有の方便智慧を成する故なり。下の四は別して顯す中に二有り。初は前の二義を釋し、後は雙べて功德を顯す。前の中に二有り。初に方便を釋成す。謂はく、此調生入法の巧を具するが故に、方便と云ふなり。衆生をして二乘地に墮せしめざる故に、縱ひ入る者も亦起たしむるが故に、要す菩薩の法の中に住せしむべきが故に、善巧勝方便と名く。二に上の智慧を釋する中に二有り。先に量智をもて世界の染淨差別を知る。二に理智をもて解脱の眞境を觀達す。又釋すらく、前の句は世界相の不同を知り、後の句は相入相即を知り、解脱の境と爲すことは、十解脱等の如し。

二に功德を顯す中に二句有り。一は滅障の徳、二は成行の徳なり。謂はく、前の巧慧に由るが故に、障は盡さざること無く、行は具せざること無きこと、知んぬべし。二に攝生の行の中に亦五有り。初の一句は總標なり、謂はく、善攝等とは巧に俱器を識るなり。深入無量等とは、深く法藥を解するなり。

下の四は別釋するに亦二有り。初の二は上の二義を釋し、後の二は化を顯して體に歸す。前の中に二有り、先に器を識ることを釋する中に、一は衆生の根器差別を了し、二は心の所念を知り、三は彼煩惱に輕重有ることを知り、四は根機に生熟軟中上等有ることを知り、五に其所緣の境界差別を知り、六に彼入法方便の所宜を知り、又亦是起行方便を知る。二に三世の下は、上の深解法藥を釋す。謂はく、三世の佛説は法要を顯すなり。善聞とは巧に聽くが故に受くるを領納するが故に持する者忘れざるが故に。廣説とは群機に授くるが故に。下の二は化は體に歸することを釋す。一に能く無邊の世間に遊入し、衆生を教化すと雖も、而も常に世間の表に超出す。二に「何を以て世に處して恆に出づるや」釋すらく、有爲は、即ち是れ無二法界と釋するを以ての故に。第二に勝進の中に十一句有り。初の一句總なり、謂はく、速に佛果を成ず。轉譯の華嚴に依るに、「不思議佛境界分の中に、普賢文殊等並に是れ他方の諸佛、毘盧遮那佛と與に衆會を爲さんと欲するが爲の故に、菩薩の身を現すと。故に知んぬ、此等は並に實に是れ諸佛なり、故に得一切佛智と云ふ。下は別して果用を顯すに、一は自ら佛身を現す。謂はく、念念無間にして未來際を盡し、

當に成佛を現じて自ら法主と爲り、常に菩薩に依りて他の爲に化を助く。二に能く他をして成佛せしむ。謂はく、殊勝の巧便力を以て、衆生を廻轉して要す大菩提を得る時に合當し、必ず得べきが故に。三に自在智を得。謂はく、一切衆生の心所行の境は無量無邊にして、直爾に遍く知ること、已に希有と爲す、況んや今一に入りて而も一切を知るは、其智徳の極めて自在なることを明すなり。四は自在身を得。謂はく、果位を離れずして因身を現するが故に。五は自在位を得。謂はく、因身を現すと雖も、而も果智を轉せず、因果無二なるを以ての故に。六は自在行を得。謂はく、隨事の行を捨てずして、而も無行に入る、境の理事無礙なるに約するを以ての故に。智に約せば寂用無二なるが故に。七は自在悲を得。謂はく、已に成佛すと雖も、衆生の爲の故に更に無量劫に於て、當に菩薩の行を修し、未だ曾て休息せざるべし。八は自在の徳を顯す。謂はく、此自在希有の寶は、值遇し難きが故に。九は攝化自在なり。謂はく、轉法輪は化法の體を明し、調伏とは法の勝用を顯し、令速得等とは所成の益を顯す、理を見て深く徹するが故に明淨と云ひ、又所知障を離れしむるが故に明と云ふなり。煩惱障を離れしむるが故に淨と云ふなり。智は法界を照すを名けて法眼と爲す。十は諸佛に同ずるを結す。謂はく、三世の諸佛の所有の清淨功德、及び所仕の位地に同じて、所成の行相、所起の大願を、此諸の菩薩皆悉く成就して彼と無二なるが故に。二に具足の下は、徳の無盡を結すること知んぬべし。

【第二に云云】本  
經に其名を普賢  
等といふ下。

第二に名を列ね徳を數する中に三有り。初に名を列ぬる中に、行相遍周く備に法界に滿



するを、同く普と名くるなり。二に數を結すること知んぬべし。三に德を數するに、十句有り。初の一は總なり。謂はく、具に普賢無障礙の願を得。此は普賢無邊の行及び普賢無障礙の願にして、普賢の德を數するなり。別の中に、一は法を攝する上首行、二は正法を受持するの行なり。上の二は普く正法の德行を數するなり。三は諸の衆生を化し、佛種をして此を斷ぜざらしむる普化の德なり。又釋すらく、次は後に更に佛の興ること有るが故に、佛種不斷と云ふ。四に諸佛と諸の菩薩と、次第受記する法を了知す。又釋すらく、諸佛の滅後に次第受記して、諸佛世に興るを知る、此れ普賢の德なり。五に隨諸の下は、佛の説法の行を成す、此れ普眼の德なり。六に處に隨ひて要す佛行を現す、此れ普光の德なり。七は感染の行を離れしむ、此れ普觀普照の德なり。八に能く業障を除くの行は、此れ普懂の德高くして業障を出づるなり。九は法界の行を證せしむ、此れ普覺の德なり。此上の九種を、若し宿誓今成に望むれば、即ち是れ普賢の願の攝にして、十大願等の如し、准配して之を知れ。若し現縁の所作に望むれば、即ち是れ普賢の行の攝なり。是故に此文は亦是願、亦是行なり。序分を竟んぬ。

【三】以下、第二に三昧分を釋す。

【果相を…故に】果德を嚴る義なり

第二に爾時普賢正受の下は、三昧分を明す。中に於て二有り。先に入定、後に益を辨す。前の中に普賢に入ること、是會の主なるを以ての故に。此行法普く周遍することを表すが故に。此從り彼無邊の行を出すが故に。華嚴定は略して四門を作る。一に名を釋すとは、因行の華嚴は果相を感じ、顯著ならしむるを以ての故に。二に體性とは、法界行門

【華嚴三昧】

一眞法界無盡緣起の理趣に達し、一心に萬行を修して佛果を莊嚴するをいふ【上に六云】賢首品第八の一の文。

【四に位地】

得定の位を明す。【第十地云云】本經二十八の三有、華嚴三昧現前すれば、百萬阿僧祇三昧現前すといふが如し。

【信位の滿心】

本經六の終、十三昧の隨一。

【四】

以下、第三起分の釋にして、三昧かんがため三昧より起つなり。

は心海を體と爲す、等持廣大にして限量無きを以ての故に。三に業用を明すとはいは此に依りて華嚴の法を顯説するが故に。『無量壽經』に、菩薩の徳を歎ずる中に、佛華嚴三昧を得て、諸佛の經典を宣説す」と言ふ。二は此に依りて華嚴の行を顯示するが故に、上に「施戒、忍辱、精進、禪、方便智慧の諸の功德有り、一切自在にして思議し難し、華嚴三昧の勢力の故に」と云へり。解して云はく、諸の行法深廣多端なるを以て、別に説く能はず、故に一切自在等と云ふ。即ち下の文の二千の行法なり。四に位地を明すとはいは四句有り。一は若し始を攝し終に歸すれば第十地に在りて得ず、法雲地に説くが如し。二に若し終を攝し始に歸すれば、信位の滿心に在りて得ず。前の賢首品に説くが如し。三に若し始終無礙なれば、一切の位に遍ず、前の如きの二説相離れざるが故に。彼始終は中間を括るを以ての故に。四に若し始終を超絶するは、總じて位に依らず、此文の如し。但行法に約して、以て其相を辨するが故に。二に益相の中に二有り。先に動地は機縁を覺悟するを以ての故に。後に聲を出して、法音を聞かしむるが故に。即ち此は亦是れ三昧の業用なり。何が故に此中に加分無しとならば、所顯の行法は前の解に依りて起る、別法無きを以ての故に。若し爾らば何が故に、更に定に入るを須たん。謂はく、攝解成行の故に、須らく定に入るべし、法は前に異ならざるが故に、加すべからず。三昧分竟んぬ。

第三に起分なり。三昧の事訖るを以ての故に、説時至るが故に、定は無言説の故に、是

【五】以下、第四請分の釋なり。

故に起るなり。安禪とは審諦の狀なり、謂はく、定從り起り已りて、念亂れざるが故に安禪と云ふなり。

第五に問時普慧の下は、請分を明す。中に於て三有り。初は總じて問の意を擧げ、二は正しく問の辭を辨じ、三は結して説かんとを請し願す。一何が故に前の諸會には、入定の前に問を發し、此には爾らずといはば、前の諸會は相從り實に入るを以て、以て正解を成じ、此中には體に依りて發起し、以て正行を成ずるが故に同じからず。又未だ入定せざる前は、衆は則ち誰が爲に説法するやを知らざるが故に、先に此定に入りて、衆をして主を知らしめて而して問を起すが故に。何が故に普慧問ふとならば、滿法界の慧は、發起するに堪ふることを表すが故に。何が故に一人問ふとならば、此行法は、各獨り成ずることを表すが故に。知諸菩薩雲集とは、問の時至るを知る、法を顯すの緣、已に具すと知るを以ての故に。此は問の所依を明すなり。問普賢とは、無盡の行法、遍滿法界從り流出するを以ての故に。二に所問の法を明す中に二百句有り。其別行の一度世經に、彼中に別して六翻の問を作り、還六翻の答を作る。古來相傳して皆彼文に依りて、用て此經を科して即ち六段と爲す。初の二十句は十信の行を問ひ、二に何等發普賢心より下の二十句は、十住の行を問ひ、三に何等爲持より下の三十句は、十行の行を問ひ、四に何等爲寶住より下の二十九句は、十廻向の行を問ふ。五に何等身業從り下の五十句は、十地證行を問ひ、六に何等爲觀察の下の五十一句は、因圓果滿究竟位の中の行を問ふ。此經の上下に總じて三

【六】以下、第五の説分を釋す。

遍有りて六位を説く中に、此は第二にりに約して、六位を説くに當る。普賢の行は六位を該ぬるを以ての故に。是故に『度世經』に云はく、「唯爲に諸の菩薩の行を解説して、始より終に至り、疑無からしむるなり」と。彼經の六段は、信等の六位に配せずと雖も、既に始より終に至ると云ふ。復末後に於て佛果を成ずることを明すを終と爲す、故に知んぬ最初の信行を始と爲すこと此れ言を待たず。故に知んぬ定んで六位に約するのみ。

第五大段に爾時普賢の下は、説分を明す中に、初は總じて告げ、二は正しく答ふるなり。前の二百の間に於て、一は皆十門を以て答ふるが故に、二千の行法有り。此二千の普賢の行法を釋するに、略して五門を作る。一は因果に約し、二は行位を分ち、三は普別を顯し、四は互攝を明し、五は行相を辨す。初の中に就いて四句有り。一は大位に約し、以て前の五位等を分ち、總じて因行と無し、後に成佛等は總じて果行と爲す。二に纏對に約して、二百門の行を辨するに、一一皆悉く佛果に徹す、是故に諸文の末に、悉く普結して即得佛等と云ふなり。是れ則ち皆因果の二位に通ず。三に或は總じて因位に屬す。普賢の位の中に亦成佛生等を現するを以ての故に。四に或は總じて果に屬す、下の文に多くは成備するを得と雖も、而も菩薩の所行を斷ぜずと云ふを以て、是故に此行は皆是れ果行なり。二に行位を分つとは、謂はく、二千は是れ行にして實に位に稱ひ、位は行を攬りて成ずれば、位は虛にして行は實なり、亦四義有り。一は行を束ねて位を成ず、此二千を束ねて分ちて六位を成ず。二は總じて位に屬して收む、行は並に是れ位の中の行なるを以ての



故に。三は總じて行に屬して攝む、普賢の行體は位に依らざるを以ての故に、唯自分と勝進と有り。即ち究竟と爲す。四は一行は六位に遍く、一位は二千を該ぬ。是の如く無礙にして、而も前後を壊せざるが故に、是れ普賢の行なり。三に普別を顯すとは、謂はく、一行の相は必ず一切に遍し、然も恆に雜らず、雜らざるが故に別の義元より分れ、必ず遍するが故に普の義該收す。猶し錦文の朱紫の類別なるが如きが故に文を成ずることを得。朱紫の變通すれば、織にして繡に非ず。當に知るべし此中の行相も亦爾なり、普に即して是れ別なり。別に即して普と爲すも皆障礙無し、之を思うて見つべし。若し爾らば此れ則ち普別具足す、何んが獨り名けて普賢の行と爲すや。釋すらく、普を守りて、而も別なること能はずと謂ふには非ず、亦別を作して而も普を失ふには非ず。實には謂はく、能く別して而も普を壊せざるは、是れ普賢なり。四に互に收攝すとは四重有り。一は位を以て位を收む、六位の内、一一に各各一切の位を收むるが故に、是故に一位は即ち二千を具し、萬二千と爲るなり。上に一地に在りて普く一切諸地の功德を攝す」と云ふは、此謂なり。二は門を以て門を收む、即ち二百門の中に、一一に各各一切の門を收むるが故に。即ち二百箇の二百を破じて、八萬の行と爲すなり。三に行を以て行を收む、即ち二千の行の内、一一に各各一切の行を攝するが故に、即ち二千箇の二千を成ずるなり。億兆等に過ぎたり。四は略を以て廣を攝す、此れ説く所の二千の行等の如し。下の頌に結して如大地一塵之説と云ふなり。此一塵の略説は、十方の廣地を離れざるを以て、是故に廣を攝して、亦盡さ

【七】以下、別して顯すに六、初位の行を明すに二段あり、初に自分の行滿を明す下。

【増】古本に壞に作るは佳し。

ざることを無し。此れ乃ち無極の法界に等しく、無際の虚空を超ゆ。下に「虚空は度量すべけれども、菩薩の徳は無盡なり」と云ふは斯謂なり。五に行相を辨ずとは、文に隨ひて解釋す。應に知んぬべし。此二千の行の中に就いて、前の六位に依れば、即ち分ちて六と爲す、前の如く知んぬべし。

初の二百句は、前の二十の信の間を答へ、信位の行を明す中に、中に於て三に分つ。初の九十句は、自分の行滿するを明し、二に十種入從り下の八十句は、勝進の圓なるを明し、三に十種不可壞智從りの下の三十句は、二行究竟の信を明す。初の中に就いて、何が故に最初に依果を明すとならば、是行の起る所依なるを以て、寂は首に居するが故に。文の中に四有り。一は數を擧げて總じて標し、二は名を列ねて義を釋し、三は説の分齊を結し、四は勝を數じて學を勸む。下の諸文の中に、多くは皆此を具するも亦具せざるも有り、文に至りて當に知るべし。依果と言ふは、因從り生ずる所の果を簡非す、亦世界の依報の果に非ず。但是れ諸行は、或は前に依りて後を起し、或は互に相依りて各各増長するを得るが故に、以て名と爲す。即ち相依の果を、名けて依果と爲す。又釋すらく、世界の依果は、是れ衆生の所依なり。依果若し増すれば、即ち所依を失ひ、正報立せざるが如し。今此菩薩も亦爾り、此十法を以て、所依の依果と爲す。此れ若し斷絶するときは、則ち所依を失ひ、菩薩と爲すに非ず。菩提心を忘失すれば、即ち菩薩に非ざるが如し。是故に文の中に不忘失を取りて、以て釋成せり。十の中に皆先に名を標し、後に義を釋す。

刹の句は是れ總なり。菩提心は是れ萬行の本なるを以て、是故に二千の首なり。唯此を刹に建つるは、謂はく、此不忘の菩提の心に依り、方に餘行をして、悉く生長することを得しむればなり。二に内に勝心有りと雖も、若し外に善友無ければ、行も亦成すること無し。若し善友に順同せずして功無きことは則ち依果に非ず。是故に要す隨順と和合を以て、依果を釋成するなり。三に善友に遇ふと雖も、若し宿善根無ければ、順修すること能はず、又亦病等の餘の障礙の故に。是故に要す宿善に依りて、更に新行を増す。四に宿善有りと雖も、若し所行を得ざれば、諸度の法を造修する所無し。五に行法を得と雖も、若し理法虚通に達せざれば、則ち途に觸れて皆斷ぐ、是故に一切の法に依りて皆出づることを得るなり。六は理法を得と雖も、若し大願無きときは、則便ち漏洩して菩提を増せず。七は自分の行有りと雖も、若し勝進し廣く修せざれば、究竟するに由無し。八は内に二行を具すと雖も、要す須らく外に勝信に依るべし。一生の菩薩は餘の菩薩に於て、見と爲り長と爲るを以て、方に依と爲るに堪ふ、此は極に誇りて説く。九は菩薩に依ると雖も、理は直く供を佛に興して、以て堅信を成すべし。十は要す唯如來は是れ究竟の所依にして、菩薩に於て能く正しく教授して、倒を離れしむるを以ての故に。又能く正しく教授するが故に。倒を離れて教授するが故に。第四に勝を歡じて學することを勸むる中に、佛は無上の果智を以て、所依の果と爲し、菩薩は北十法に住して、常に亦彼を得べきが故に云ふなり。又得すらく、菩薩は未だ曾て菩提の心に依らざるにあらず、恆に忘れざるを以ての故

【第二に奇特想】  
經に十種の奇特想  
を説く文を釋す。

に。二に菩薩は未だ曾て善友に依らざるにあらず、常に隨順し與に和合するを以ての故に。三に菩薩は未だ曾て善根に依らざるにあらず、常に長養するを以ての故に。餘は亦是の如く之に准ぜよ。

第二に奇特想とは、前は因縁に依りて以て諸行を成じ、今は勝想に依りて以て善根を攝す。十の中に、初は他の善根を隨喜するを以て、己が善根と作すが故に、奇特と云ふ、二は凡小等の善は、皆成佛するに堪ふるが故に種子と云ふ。三に下は闍提に至るまで、皆菩提の器なり、悉く佛性有るを以ての故に。四は一切の菩薩の願は、己が願に同じきを以ての故に。五は一切の法性は淨にして、生死に非ざるを以ての故に。六は他を以て己が體に同じうす。他の行は則ち己が行、又他の所行は是れ己が行法の故に自の想を生ず。七は一切の法は則ち是れ眞如の故に。又一切の法は悉く成覺に堪ふるが故に佛法と云ふ。八に一切の語言は、皆法輪を作すに堪ふるが故に道と云ふなり。九に菩薩の善根は、皆是れ諸佛の慈悲の體分と知るが故に、慈父と云ふなり。十は一切の如來は悉く同一の體と知るが故に無二と云ふ。此十は皆意外に超ゆるの想なり、故に奇特と云ふ。若し此想を得れば、則ち一切法の想を轉じ、一切の法は皆想に隨ひて轉ずるを以て、此は是れ佛徳なり。第三に十種の行とは、勝想の解に依りて、此大行を起すを以ての故に次に之を明す。十の中に初の四は戒行なり。中に於て初の二は攝衆生戒、次の一は律儀、後の一は攝善、次の一は三昧行、次の二は智慧行なり。一は加行、二は正證なり。次の一は嚴佛土の行、後

【第三に云云】  
經に十種の行を説く  
文を釋す。



【第四に云云】以下、經の十善知識を説く文を釋す。

【第五に云云】經に十種の勤修精進を説く文を釋す。

【第六に云云】經に十種の正希望を説く文を釋す。

【第七に云云】以下、經に十種の法の衆生を成就す云の文を釋す。

の二は報恩行なり。第四に十善知識有りとは、行超は必ず善友に依るを以ての故に次に明せり。初の二は堅心を發せしむ、二は修善を習はしむ、三は度行を滿ぜしむ、四は智行を得しむ、五は悲行を成ぜしむ。六は辯才行を具す。七は染著無き行、八は無厭倦の行、九は善行を成ず、十は佛智に入る。第五に十精進行りとは、善友に遇ふと雖も、若し策勤せざれば、進行するに由無し、故に次に明すなり。此中の意は、何の義の爲の故に此精進を修する、此十種の所作を作さんと欲するが爲なり。中に於て一切法に入るとは、智の證入なり。衆生をして惡を滅せしむとは、其苦因を滅するなり、餘は文に顯なるが如し。第六に十の正憶望行りとは、前の精進に由りて、自他を憶欲し行をして究竟せしむるが故に次に明せり。中に於て初の二は行の本に約し、次の二は離過に約し、次の二は成行に約す。一は行因、二は行果なり。次の三は證入に約す。一は證位、二は證法、三は證道なり。謂はく、證法に由るが故に誘を離るるなり。後の二は勝進の佛果に約す。一は佛願滿じ、二は佛智圓なり。無上平等大智憶望と云ふは、是れ佛地の無功用の故に、平等と云ふ、攝生無盡なるも亦憶望と云ふ。第七に十法の衆生を成就する有りとは、此に二義有り。一は此十法を以て通じて用て一切衆生を成就し、二は各別に一類の衆生を成就す。別の中に一は慳貪貧窮の衆生を成ず。二は憍慢の衆生、三は愚癡の衆生、四は假僞の衆生、五は貪愛の衆生、六は二乘を業ふ衆生、七は世間を厭はざる衆生、八は佛果を欲せざる衆生、九は邪歸依の衆生、十は邪智狡猾の衆生にして、此十法を以て次の如く教化して、其をして道

【八に云云】以下經に十種の戒を説く交を釋す。

に入らしむるが故に成就と云ふ。第八に十戒有りとは、前の十法衆生を成就するに依るが故に、惡として離れざることを無く、善として積まざることを無し、故に次に明すなり。此十の中に、初は若し菩提心を失墮するときは、則ち是れ菩薩戒を破す、乃至第十に若し如來の身に取著せば、則ち是れ戒を犯すなり、餘も亦是の如し。之に准せよ、此十は所應に隨ひて三聚の所攝なり。

【第九に云云】以下、經に十種の自ら受記を知る」等の交を釋す。

第九に十種の自ら受記を知る有りとは、前の離過の徳成するに依りて、自ら己が行を驗し、必ず當に果を得べきこと、決定して疑無きが故に、自知受記と云ふ。一は自ら菩提心を一向に廻せざるを驗するが故に。二は自ら所修の菩薩の善行に、厭足無きを驗するが故に。三は設ひ多劫修すれども、須臾の若しと謂ふが故に。四は自ら佛の教法に違はざることを驗するが故に。五は自ら佛の所説の深法を知り、決定して信するが故に。六は自ら所修の善根、悉く具足することを知るが故に。七は自ら能く衆生をして、菩提心に住せしむることを知るが故に。八は自ら善友に於て、其教に違はず、善根を同じうするを知る、善財等の如し。九は自ら善友に於て、佛の想を起し成ずるを知るが故に。十は大菩提の願を守り、常に忘れざるが故に。此十行に於て自ら驗し、一有るときは期ち定んで當に佛の受記を得べしと知るなり。又「瑜伽」の菩薩地の中に、「菩薩は六相に由りて佛受記したまふ。一は種姓未發心の位に安住す。二は已發心の位、三は現前住、四は不現前住、五は定まれる時限有り、謂はく、爾所の時菩提を證す。六に定まれる時限無し、

【瑜伽】第四十六の二十一有。

【不經菩薩】常不輕菩薩をいふ、因縁は法華經の中に説けり。

【七種】愚くは十種の誤か。

【下は第二云云】以下、第二に勝進文を釋す。

【第二に云云】以下、經の十種の深入如來一等の文を釋す。  
【三輪】身、口、

謂はく、時限を説かずして授記を與ふといへり。又『善戒經』に云はく、「但種姓の人のみ受記を得るに非ず、非種姓も亦受記を得」と。解して云はく、「不輕菩薩の、四衆を敬ひ受記を與ふる如きは、非種姓の人に約す。遠きも亦得べきが故に亦受記す。十住の中の記は、是種姓の人の如し、種姓の決定するに約するを以ての故に。發心已去決定して不退の如き故に。是れ三賢の位なり。梁の『論』の第六に云ふが如し、「十行の菩薩を受記と名く」とは是なり。初地已上は證理成就するが故に受記す。『地論』の如く第八地の中に受記するが如きは、是れ無功用の行成するが故に、燃燈佛の邊において記を得る等の如し。此中の七種は圓教に約すれば諸位に通じ、始に據れば十倍の中に在り、餘義は別に説くが如し。上來の九十句は、自分の行を明し竟んぬ。

下は第二に十種入從り下則ち八十句は、勝進の行を辨す。中に於て初の十八とは、既に自分の行成じ、次に勝進して諸の所入の處に入るを明す。入は猶し證のごとし、得るなり。初の二は大圓行に入り、三は八萬四千の法聚等に入り、四は十度等に入り、五は行位圓滿に入るが故に具足と云ふ。六は差別の大願に入り、七は眞性に證入し、八は嚴刹に入り、九は心に隨ひて神力を現じ、十は一切世界に入りて出生を示現す。第二に十種の深入如來とは、前は因境に入ることを明し、今は轉勝して果境に入ることを明すなり。初の一は成菩提を示し、次の八は三輪を以て攝化し、後の一は入涅槃を示す。前の八の中に、初の四は諸業にして、一は總じて法輪を擧げ、二は廣轉巧便の法、三は龍經の妙音、

【第三に云云】以下、經の「十種の衆生心行」等の文を釋す。

【又此十入云云】今此十句に各入一切の言あるを説く【第四に云云】以下、經の「十種の世界」等の文を釋す。

【第五に云云】以下、經の「十種の劫」等の文を釋す。【三際】前中後の三際、即ち過現未の三をいふ。

四は正しく轉じて衆生を調す。次の二は身業にして、一は身に依りて通を現じ、二は多の異身を現す。後の二は意業にして、一は定、二は慧なり。又三世の諸佛は悉く亦同じく、是の如きの作用を作すを以ての故に、亦共入と云ふなり。此中の信の内に亦此法を得とは、是れ圓教の中の普賢の行相たるが故なり。第三に十種の衆生心行に入る有りとは、前は則ち上佛境に入り、此は下衆生に入ることを辨ずる故なり。初の三は總じて、三世の衆生の心行に入ることと明し、次の二は別して善不善の衆生に入り、六は欲樂の心行に入ることと明し、七は根の利鈍に入り、八は其種姓差別に入り、九は煩惱の輕重、十は治を起すの不同なり。謂はく、根の未だ熟せざる者には、時を待つが故に。已に熟せる者には時を待たず。又釋すらく、時とは其熟する時を待ちて調伏するが故に。非時とは方便をもて聞覺して時を待たざるが故に。又此十入に因りて、則ち普く一切に入るは、佛果に同じ。第四に十種の世界に入る有りとは、前は衆生の正報を知り、今は其依報を知るが故なり。中に於て初の二は染淨に約し、次の四は麤細に約し、次の二は形狀に約す。謂はく、伏とは向下、仰とは向上なり。後の二は佛の有無に約す。又普入一切とは、此十を離れざるを以ての故に。

第五に十種の劫に入る有りとは、前は入處を明し、今は入時を辨ずる故なり。中に於て初の五は別劫に入り、後の五は相攝劫に入る。前の中に初の三は、別して三際劫に入り、次の二は別して多少劫に入る。後の五は相攝する中に、一は少を以て多を攝する故に、可



【第七に云云】以下、經の「十種の三世間」等の文を釋す。

【阿毘達磨】(二) (hīhama) 舊に大法又は無比法、新には對法と譯す、智慧を以て眞理を達觀する義、轉じて論部に名く。

數不可數と云ひ、二は多を以て少を攝し、三は事を會して理に入るを以て、劫は非劫に入る。四は理依り事を起し、非劫は劫に入る。五は二事相即す。謂はく、前の可數等は緣起相由門に約し、非劫等は法性融通門に約す。此一切劫は則ち一念とは、通じて、門の無礙自在なるに約するが故に。又皆是れ數譯の所現なるに由るが故に、自在を得るなり。第六に十種の三世を説く有りとは、前は劫に約し、今此は世に約するが故に明せり。中に於て前の九は別して説き、後の一は總じて顯す。『別の中に未來に未來を説く、既に是れ無盡なり、過去に過去を説くと、何んが亦同じからざるや。釋すらく、『未來は續起するを以ての故に無盡と云ひ、過去は起らざるが故に云はざるなり。』又現在に現在を説くは、即ち現在と殊ならざる故に平等と云ふ、過去に過去を説くと、何んが亦同じからざるや。釋すらく、『過去の過去は是れ無なるを以ての故に、現在は是れ有り故に同じからず。餘義は十世章に辨ずるが如し。』第七に十種の三世間に入る有りとは、前は既に時劫無礙に達し、今は時の中の法に入ることを明す故に、次に明せり。中に於て初の九は、總じて所入を明し、餘の九は別して所入を明す。此中、一に語言を以て道と爲す、所詮の義を顯すが故に。二に性とは文字の性なり、類は則ち字界等なり。三に聲文とは、音教は假りに施設するが故に。四に想とは、想に依りて名を立つる等なり、即ち名等異名有り、一語に云ふが如し、「阿毘達磨の想を標幟と爲す」等と。五は名字とは正しく、名句字身等語を顯す。六に語言とは音聲語業を明す。前と何の別か有るとならば、前は能く論を成じ、此中

は通じて擧ぐ、惡阿等の聲の如し。七に盡とは、上の諸門を明すに並に是れ虚假施設にして、盡くること有ること無きが故に。八に離欲とは、體不可得なるが故に。九に寂滅とは、性清淨なるが故に。此十法を明すに、皆過未等の三世の中に通ずるが故に、入三世間と云ふなり。又釋すらく、前の語言道は、是れ所詮の法にして、是れ語言の所遊の路なるを以ての故に。二に性は是れ理性にして亦是れ所詮、此れ義理世間なり、次の四は是れ言說世間、後の三は是れ實相世間なり。又釋すらく、十の中に初の一是器世間、次の六は衆生世間、後の三は智正覺世間なり、三釋有りとは雖も、初の釋、文に順ず。第八に十種の憂惱を捨離する等有りとは、前には既に時法を達解し、起行攝心の故に憂等を離る。謂はく、行成じ心を遂げんに憂惱を捨離し、時は空しく過ぐることに無く、心に厭悔する無し。中に於て初に佛に供して友に近き、法を求めて法を聞く、此四は自利の行なり。次の三は攝生、一は說法、二は調して過を離れしめ、三は佛道に住せしめ、次の一は重ねて自行の廣を明し、次の一は重ねて化他の廣を攝じ、後の一は二行満足して佛果を出生することを明す。上來の八十句は、信の中の勝進の行を明し竟んぬ。

【自下は第三云云】  
以下、二行究竟位を明す文を釋す。

自下は第三に十種不可壞智より下、三十句有りて前の二行究竟を明す。中に於て初の十種不可壞智は、謂はく、法に稱うて更に改易無きが故に、不可壞と云ふ。中に於て衆生を知る等は染法に約し、三寶を知る等は淨法に約し、世界を知る等は亦是れ染亦是れ淨に約し、法界を知るは非染非淨に約すること、並に知んぬべし。第二に十種の陀羅尼有りとは、前

【智論云云】以下體性の異説を擧ぐ智度論第五の十五丁。【佛地】論五の五丁。【瑜伽】論四の五の十四丁。【瑜伽：故に】以下類別の異説を擧ぐ、今此十種は別途無盡の法門なる故に相攝すべからざるをいふ。

【第三に云云】以下、經の十種の佛位。【信滿】十信の滿位。

は既に法の不壞を知るをもて、此は法を持ち失はざるを明す故なり。【智論】には定慧を以て體と爲し、『佛地』と『瑜伽』には、増上の念慧を性と爲す、慧を以て法を照し、念に憶持するが故に。『智論』の中に正しく翻じて持と云ふは、能く種種の善法を以て、散失せざらしむること、完器に水を盛る等の如し。或は遮と云ふは、能く諸の不善心等を遮して生ぜしめざるが故に。『瑜伽』等には四有り。謂はく、法義兜忍にして、此十種と相攝すべからず、類別なるを以ての故に。此中に初の二は教法を持す、一は修多羅法を持す、二に阿毘達磨の法を持す。三に理法を持し、四は慧法を持し、五は定法を持し、六は異方の語法を持し、七は三世の異義を持し、八は辯才の法を持し、九は無礙耳根の法を持し、十は果法を持す。安住とは與に相應するが故に。第三に分別して十佛を説くとは、前は持法を明し、今は佛を辨じ解する故なり。又此は信滿に、佛果を得ることを明す故に明すなり。若し爾らば後に位滿を解するも、亦佛果を得、何んが明さざるや。釋すらく、信は初なるを以ての故に。解は此に准するが故に。此十佛の義は具には別章の如し。今は略して名を釋するに、一は自然に開悟するを名けて正覺と爲す、正覺、則ち佛なり。二は自體に無礙の大願、成滿す、願、則ち是れ佛なり。三に萬行の因感するが故に業報と云ふ。四に萬德、積成し任持して失はず。五は機に應じて化現す。六は理に稱うて普周す。七は唯心の所現なり。八は常恆に定に在り。九は眞性は不變なり。十は無功の大用を如意佛と名く、末尼珠等の如し。又釋すらく、下の十種の見佛の處に同じ、彼を以て此を釋すること



【八】以下大門第二に、行間を答へ、十住行を明すに、四初に別して十解を明す中、初位發心の文を釋す。

【又釋す…名く】大正藏本に「次の六は護小乗心、次の四は護信心、後の三は護小心、餘の四は護煩惱心」とあり。  
【後の三十心】恐くは十心の二字衍か。  
【二に十種云云】以下經の普賢十種の願行法を釋す。  
【三に十種云云】以下經の十種の大悲の文を釋す。

應に知んぬべし。上來の二百句は、前の二十句の間を答へ、十信の中の十行相純熟するの位を明し竟んぬ。

（八）自下大門第二に、十種發普賢心從り下二百句有りて、前の二十句の、十住の中の行法を問へるに答ふ。中に於て、十種に分ちて四と爲す。初の六十句は別して十解を明す中に、初位發心住の義なり。二に十種波羅蜜より下の六十句は、餘の九住の中の、所成の内徳の行を明し、三に十種說法從り下の三十句は、諸住位の中の外化攝生の行を明し、四に十種勝法より下の五十句は、無礙殊勝の行を明す。初の中に就いて、劍に住位を得るは信心を以て本と爲す、是故に最初に發普賢心を明す。中にて初位の三は、下衆生を救護するの心、次の三は上佛果を求むるの心、後の四は厭離行爲の心にして、此三心を具するを乃ち大菩提心と名く。又釋すらく、初の三は護小乗の心、次の四は護信心、後の三十心は護煩惱心なり。是故に凡小に異して菩提心と名くるなり。又此十心は各是れ一行に亦相收めず、無盡を顯すを以てなり、各先に標、後に釋すること知んぬべし。二に十種の普賢の願行法有りとは、謂はく、前の信心に依りて、廣く願行を起すが故に次に明すなり。中に於て前の九は因行廣く、後の一は成果廣し、普賢は因果に通ずるを以ての故に。前の中に初の二は自行の廣く、次の一は益生の廣く、餘は二行の廣く通ず、皆廣大無限の誓願を立つるが故に、同じく普賢の願と云ひ、願に依りて行を成ずるを願行法と名く。三に十種の大悲有りとは、前の普賢の行法中に依りて、別して大悲を辨す、深要なるを以ての故に次に明



【四に十種云云】  
以下、經の十種の  
發菩提心因縁の文  
を釋す。

せり。是故に「論」に云はく、「菩薩は大悲を以て本と爲す」と、故に別に顯すなり。此悲心を用て衆生を緣念し、曾て暫くも廢すること無きが故に常觀と云ふ。中に於て一は苦逼りて歸するところ無し。二は設ひ依を欲求すとも、乃ち邪道を倒求す。三に設ひ正に向はんと欲するも、乃ち貧くして宿善無し。四に設ひ小善有れども、生死に樂著して聞覺する能はず。五に設ひ覺を欲求すれども、唯倒に不善を行す。六に設ひ善を修すること有れども、欲を難るること能はず。七に設ひ離欲を求むれども、還りて復輪廻す。八は無始の或明有つて久遠に病まざる、九は佛因を欲せず。十は佛の果法を失ふ。又釋すらく、此十の初の二は顛倒の衆生にして、一は眞無く、二は偽を逐ふ。次の四は欲求の衆生にして、一は出因に乏しく、二は出果無く、三に縛因を具し、四は縛果に處す。次の二は有求の衆生にして、一は深、二は遠なり。後の二は梵行求の衆生にして、一は異道を求め、二は異脱を求む。菩薩は此を緣じて大悲心起し、要す當に救拔すべし。四に十種の發心因縁有りとは、非斷の行起ること必ず所因に觀るが故に次に明せり。又前は所發心の體を明し、今は發心の所因を辨する故なり。或は四縁の發心は、「瑜伽」「地持」等の如し、或は七縁は「智印經」「起信論」等の如し、並に前に説くが如し、今十縁を顯して以て無盡を明す。中に於て前の五は、下衆生を以て緣と爲し、後の五は上佛果を以て緣と爲す。「論」に云はく、「菩薩は菩提を以て、所縁の境と爲す」とは此謂なり。前の五の中に、初の一は縛、後の四は別なり。別の中に、初の二は苦を除き樂を興へ、後の二は愚を除き智を興ふ。後の

【五】一本に宜に作るは佳し。

五の中に亦初の一是總、後の四は別なり。別の中に、初の二は教に順じて相を見、後の二は義に順じて徳を顯す、餘義は知んぬべし。五に十種の善知識に親近する有りとは、既に發心し已る。理として善知識に近くことを互め、善提心を具して、而して増長することを得る故に次に明すなり。又釋すらく、此上の五十門の行は、悉く並に同時にして、説くに前後有り、善友に依りて方に能く發心する等を以ての故に。中に於て五有り。一は意を標し、二は徵責し、三は總じて釋し、四は別して辨じ、五は數を結す。別の中、十の内、一は身業走使、二は語は教命に應じ、三は意に乖隔せず、四は身心俱に悦ぶ、亦善友を見て慶ぶ。五に情に異求無し、六は唯出道を期す、七は其勝行を同じうし、八は彼要期に同す、九は師を敬ふこと佛の如くす、十は果に同じく圓成す。又前の六は友に事へ、後の四は修を同じうす。六は十種の清淨有りとは、前の發心に依りて、此淨報を得る故なり。此は是れ發心家の近果なり。中に於て初の六は三業淨なり。謂はく、前の三は體淨、後の三は用淨なり。次に眷屬の下の二に、伴生淨を明し、後の二は願行淨を明すこと並に知んぬべし。上來は別して初住位を明し竟んぬ。

【下は第二に云々】以下第二に通じて第二住已下九住に至るまでに成ずる内徳の行を明す支を釋す。

【檀】(檀)譯して布施又は施與といふ。

下は第二に十種波羅蜜より下六十句有りて、通じて餘住の中に成ずる所の内徳の行を明す。中に於て初の十は正しく諸住所行の行を明す。中に於て十度は並に深勝に約して以て釋す。是故に檀の中に、捨財等を云はずして、乃し捨一切有淨佛具佛忍等と云ふこと應に知んぬべし。第六に般若は正體智に約する故に、如如を以て境と爲す、後の四は多くは

【二に十の隨順云】以下、經の隨順覺智を明す文を釋す。

【三に十決定云云】以下、經の十種の決定智を明す文を釋す。

【四に十種云云】以下十種力の文を釋す。

並に是れ後得智なり。第七は應に方便と名くべし、能く深く佛力に入るを以ての故に、智の名を立つ。第十は應に智と名くべし、能く諸佛の法を領擇するを以ての故に、境に従ひて名と爲す、餘は並に前の十行の處に説くが如し。二に十の隨順覺知有りとは、前の行成するに由りて、能く所知に於て無倒に了達するが故に、隨順覺知と云ふ。中に於て一は依報の染淨差別の多門なるを知り、二は衆生の正報、異類にして難思なるを知り、三は緣起の法の一異無礙なるを知り、四は眞如法界の平等離相を知り、五に虚空の無爲無際なるを知り、六七八は三際世界を知る、又亦一切は俱に是れ過去、俱に是れ現未なるを知る。九は諸佛は萬行を具して、一念の中に在りと知り、十は諸佛は同一行にして、以て三際に遍すと知る。三に十決定智有りとは、前の隨順無倒覺知に由るが故に、能く此決定智成することを得。中に於て初の二は、法を知ること分明なり。一は一念に在りと知るとは、能知の迅速を顯すなり。二は以無礙智とは、能知の自在を顯すなり、所知障無きを以ての故に、無礙智と云ふのみ。次の五は衆生を知る。一は心の樂欲を知り、二は根同の眞性を知り、亦是れ菩提の根に同するを知る。三は煩惱の細習を知り、四は正使の行を知り、五は所化の善惡を知る。後の三は菩薩及び佛を知ることを知んぬべし。一門を缺けり。餘の本を檢せよ。四に十種力有りとは、智は既に決定するに由りて、多く堪能すること有るが故に力を明すなり、中に於て初の一は總、餘の九は別なり。別の中に初の二は依他性如幻化を解り、三に圓成の性を解り、四に所執性則ち空なるが故に無染を解るなり。五に行法を求め、六に善友を敬

【五に云云】以下經の十平等の文を釋す。

【六に云云】以下經の十種方便佛法の句を釋す。

【下第三云云】以下第三に外化攝生の行を明す文を釋す。

養する力は、法を以て彼に従へば力無壞を求むるを得る故なり。七に廻向力に由りて、能く善根をして佛果に至らしむるが故に。八は信解力に由りて、能く甚深の佛法に於て、誹謗を免る。九は大果を求むるの心に於て、堅強にして退せず。又釋すらく、前の五は解力、後の五は行力なり。五に十種の平等有りとは、既に智力の堪能有るが故に、能く諸事に於て平等の眞觀を作す、故に次に明すなり。中に於て一に情は怨親を絶し、二は眞俗一味なり、三は染淨理均し、四は一道無二なり、五に同じく一性に會す、六は果法は豈殊ならんや。七は因より異顯無し、八は十度齊備す、九は行は理原に契ふ、十は法身等ろして二無し。又釋すらく、前の五は行等し、一は等悲、二は等智、三は等淨、四は等行、五は等修なり。後の五は德等し、一は果德等し、二は願行等し、三は六度等し。四は因行等し、五は法身等し、六に十種の方便佛法句有りとは、前は既に平等に正しく證す、理は宜しく後得の巧便設教を起すべし、故に次に明すなり。中に於て初は一切法を知るに但言説有るは此は廻計性に約す。二は似有如幻、三は速滅すること猶し電のごとし。四は無性は縁に従ふ、五は緣作本淨なり、六は言は但名のみ有り、此上は依他性に約す。七に無生の眞、八に無相の眞、九は無性の眞なり、上は空如來藏に約す。十は具德法界、是れ不空如來藏なり、佛法の句を以て此十義を顯すに由るが故に、同じく此名を立つ。上來は内德成じ訖んぬ。

下第三に十種說法の下三十句有りて、外化攝生の行を明す。中に於て初の十は教に於て



【二に云云】以下經の十種受持の文を釋す。

【三に云云】以下經の十種の辯の文を釋す。

【下は第四云云】以下第四に無礙殊勝の行を明す文を釋す。

能く説き、次の十は法に於て能く持ち、後の十は言に於て能く辨す。初の十の中に、初の二は理法を説く、一は深一は妙なり。次の四は行法を説く、一は具徳の法、二は佛智の法、三は順度の法、四は生果の法なり。後の四は因果の法を説く、初の二は三世の業法因果を説き、後の三は淨法の因果を説くこと知んぬべし。二に十種の受持有りとは、前に既に之を口に宣ふ、今此は之を心に纏むる故に次に明すなり。中に於て初の七は因法を記し、後の三は果法を記す。前の中に一は行法を記持し、二は教法を記持し、三は順法の喩法を記し、四は巧に解を生ぜしむるの法、五は總持を生ぜしむるの法なり。謂はく、少文にして多義を攝する等なり。六は難に答へて疑を斷ずるの法、七は菩薩の行位なり。後の三の中に、一は佛の定法、二は佛の慧法、三は佛の通法なり。三に十種の辯有りとは、前は記持して心に在るを明し、今は巧に口に宣ぶるを明す故なり。中に於て一は情謂を取らざるが故に、名けて辯と爲す。是に知んぬ、若し性執在らば、縱ひ巧言百端なるも未だ辯と爲すに足らず。二に順法無行、三に無著の法を顯す。四に此辯は亦空なるを方に辯と爲すなり。五は體に無明無し、六に辯は佛持に同じ。七は辯法に他をして自ら悟らしむ。八は無名相の法に於て、巧に名言を以て説いて、他をして言に於て、言の解を作さざらしむ。九は衆生の義門を説く辯なり、上は機に應じて喜ばしむる辯なり。又前の五は是れ無作の淨辯にして、後の五は有作の淨辯なり。上來外化攝生の行竟んぬ。下は第四に十種の勝法を説く下に五十句有りて、無礙殊勝の行を明す。亦是れ當位成滿

【二に云云】以下經の十種無著の文を釋す。

【三に云云】以下經の十種平等心の文を釋す。

【四に云云】以下經の十種智慧の文を釋す。

の行なり。中に於て初の十勝法とは、前の辯才無滯なるを以て、遂に徳相の凡小に挺過することを顯す。故に勝法と云ふ。中に於て一は悲勝、二は智勝、三は修勝、四は行勝、五は戒勝、六は廻向勝、七は策勲勝、八は降魔勝、九は因行勝、十は成果勝なり。二に十無著有りととは、前は行徳超昇なるが故に、今は境に於て執無きが故に無著と云ふなり。またさき則ち行高くて殊勝なり、今は則ち下染著を離る。此十は皆是れ自心の顯現せる意言の所作なり、是故に智慧は中に於て著せず。初に化處に於て著せず、二は所化に於て著せず。三に化處に於て著せず、四は正しく化業を作して著せず、五は化所成の善に著せず、六は機に應じて生を受けて著せず、七は自の本願に於て著せず、八は所行の行に於て著せず、九は因に於て著せず、十は果に於て著せず、自ら此無著智に安住するに由りて、則ち能く速かに異念衆想を轉じて佛の無上智を得、所著するところ無し。三に十平等心有りととは、無著智を成ずるを以ての故に、衆法の中に於て心無分別なるが故に、平等心と云ふなり。此れ前の十平等と何んが別とならば、前は法辯平等に約し、此は心辯に約するが故に、平等心と云ふなり。中に於て初の八は因等に約し、後の二は果等に約す。前の中に一は所長養に於て、二は所發の言に於て、三は所化の生に於て、四に所化の因果に於て、五は所知の法に於て、六は染淨の土に於て、七は好醜の人に於て、八は所行の行に於てなり。後の二の中に一は功德智、二は正證智なり。此十の中に於て皆異念を生せず、故に平等心と云ふなり。四に十種の智慧を出生する有りととは、前の平等の體寂より、後得の

【五に云云】以下  
經の十種變化の文  
を釋す。

【九】以下、十行  
位中の行法を答ふ  
る中、初に大志曠  
遠の行を釋す。

勝智を出生するが故に云ふなり。中に於て初に衆生の性に入るとは、衆生の眞性に證入するなり。出生智とは入り已りて後得智を出生するなり、餘の文の入出は皆之に准知せよ。二に初に一異無しとは、體の俱絶に約するが故に。又相を攝して體に従ふが故に無異を明し、體を以て相に従ふが故に無一を明す。又多は則ち一なるが故に異無く、一は則ち多なるが故に一無きなり。三に世界を帝網の如しと知り、四に土の形相を知り、五に巧に法體に入りて一無く異無し。三に釋は初に同じ、塵に知んぬべし。六に異類の身報を知り、七に倒惑の身の因を知り、八に究竟一乘を知るは、同別に通ずるなり。九に法界自在の徳を知り、十に佛種不斷の徳を知る。五に十種の變化有りとは、前よ正證に依りて後得を起し、今は後得に依りて自在の用を起すが故に明すなり。謂はく、轉變は本無なれども化現して有ならしむるが故に變化と云ふ。中に於て初の一は他の衆生の身に變ず、殊の鶯子に變ずる等の如し。二に自身を變じて、異類等と作し、三に業刹を變じて淨等と爲す。四は香華等を變現し、五は菩薩等を化現す。六は願行を化現し、七は調生を化現す、満足王等の如し。八は成佛を化現し、九は轉法輪を化し、十は舍利等を化現す。又釋すらく、此十は亦是れ實を以て化に同ずるは、其平等なるを顯す。上來の四段二百句の文は、總じて是れ十住位の行を釋し竟んぬ。

(下) 自下は大門第三に、十種持より下、三百句有りて三十句は十行位の中の行法を問へるに答ふ。中に於て三に分つ、初の六十句は大志曠遠の行を明し、二に十種不思議より下の九

【二に云云】以下經の十種大正希望の文を釋す。

十句は、定慧の業用の行を明し、三に十種蘭林より下、一百五十句有りて德備成滿の行を明す。初の中に就いて二有り。先に二十句有りて、依起大欲行を明し、後の四十句は依起勝念行を明す。前の中初の十持は行の所依を標す。謂はく、此任持力に依りて、方に能く大志を起す。此中には通じて『地持』の中の三持、及び『地品』の中の十持を攝す、准辨して應に知んぬべし。中に於て初の三は、則ち三寶力持なり、衆生は是れ僧寶なり。四に大悲の所作を、業持と名く。五は十大願力は行をして相續せしむ、亦佛力持に由るが故に、佛果の化用は未來際を盡す。六に十度行力は所餘を住持す。七は衆生及び菩提を、所緣の境持と爲し、菩薩の悲智の行心を起す。八は眞如の理を以て妙と爲すなり。九は福、十は智にして各各勝力有るが故に持と云ふなり。問ふ、『此持と前の十陀羅尼及び十種の受持と、各各何の別か有るや。』答ふ、『陀羅尼とは是れ文義を總持する等なり、受持は領納し憶持する等に約す。此中は加持依持等に據るが故に不同なり。』二に十種の大正希望有りとは、前の持力に依りて此廣大無邊の欲樂を起すを、大正希望と名く。前の正希望と何の別か有るとならば、前は自分に約するが故に大と言はず。今は勝進に據るが故に同じからざるなり。何が故に此大欲願を起すとならば、行成ずること此に由るを以ての故なり。上の文に『智慧王の所説欲を、諸法の本と爲す』とは、清淨の欲を起して、無上道を志求すべしと云ふは此謂なり。中に於て一は定んで、佛に順じて喜ばしめんことを望み、二は定んで佛を供して、盡さしめんことを望み、三は定んで法を同うし行を成ぜんことを



【第三云云】以下  
經の十種の深入佛  
法の文を釋す。

望み、四は定んで長時修行を望み、五は定んで畏を離るるを望み、六は定んで衆生をして、先に已に成佛せしめんことを望み、七は定んで盡く利海を嚴ることを望み、八は定んで衆生をして惡因果を滅し、善の因果を成ぜしむることを望み、九は定んで直心もて佛を見、法を聞かんことを望み、十は定んで來際を盡窮して、大法輪を轉ずることを望む。第三に十種の深入佛法有りとは、怖望已まざれば、便ち能く深入することを明す。是故に前の大欲に依りて、能く佛法深遠の邊際を盡すが故に云ふなり。下の四十句の中に、初の二十を所依と爲し、後の二十を所起と爲す。前の中に初に此十深入は内證なり、中に於て初の四は、器世界佛法に入り、一切の世界は一一に各別に一切世界に入る、故に一切世界悉分別入一切世界と云ふなり。次の二は衆生世間佛法に入り、次の三は智正覺佛法に入り、後の一は總じて法界に就いて佛法に入る、理を以て行に就いて分つが故に、一異無きに於て一異を説くと云ふ。謂はく、五乘の位は異なりて、成佛して一と爲り、行同じうして理に歸するが故に入無所入と云ふ。二に十種の依止有りとは、前は行の深入を顯し、今は所託の縁を辨す。中に於て一は善友の教授に依り、二は多聞の重力に依り、三は善佳處に依りて資縁乏からず。四は悲力に依り、五は深く大行を證し、六は本願力を滿すに依り、七は本菩提心に依り、八は佛果に依る、是れ所求の故に。第九第十を説す。須ら三に十種の發無畏心有りとは、前に既に所依有りて、遂に行心をして深勝ならしめ、可畏の事に於て能く所畏無く、難作として作す能はざること有ること無きを以ての故なり。中に於て一

は大勇猛を奮ふを以ての故に、能く十種の難作の事の中に於て悉く能く作す。一は悪業滅し難し、二は遺法護り難し、三に惡魔降し難し、四は身命捨て難し、五に外道伏し難し、六は物心に稱ひ難し、七は大衆喜び難し、八は八部調し難し、九は下乘離れ難し、十は上行修し難し、此十難に於て皆畏るること無きなり。又『智論』の第六に云はく、菩薩に四無畏有り。一は聞持を以て善く説き、二は根欲を知りて説いて解脱を得しめ、三は一切方の中に、難有りて答ふること能はざるを見ず。四は疑有りて釋くこと能はざるを見ず。と。四は十種の發無疑心有りとは、前は難に於て懼無きを以て、此に由りて自ら所作皆易きことを知る、故に疑無きなり。中に於て一は十度を以て生を攝し、二と三とは佛に供して土を嚴り、四は大心疲ること無く。五は本の大願を滿し、六は定んで世燈と作り、七は巧に諸法を説いて皆生を攝するに堪ふるは、俱に是れ佛法なり。八は定んで正覺を成じ、九は事を會して理に即し、十に倒を滅して智を顯す。上來の六十句は大志曠遠の行を明し竟んぬ。

【下は云云】以下第二に、定慧の業用の行を釋す。

下は第二に十種の不思議より下の九十句は、定慧の業用の行を明す。中に於て三に分つ。初の三十句は融慧超情の行を明し、次の十三昧の下の二十句は、深定普周の行を明し、後の十法門の下の四十句は、業用自在の行なり。初の中に就いて、初の十は行に約し、次の十は語に約し、後の十は智に約す。行に約する中に、十種の不思議有りとは、前に心決定して疑無きに由るが故に、所修をして測ること無からしむるなり。中に於て一は乃至一

【尼俱陀】(フ、ニ、俱、陀、  
Omit) 即ち榕樹な  
り。

【三倒】 心、想、  
見顛倒。

【彼深密の法】 法  
體甚深にして測量  
すべきこと難く、  
言語道斷心行處滅  
にして密深密な  
るをいふ。  
【密子云云】 第八  
會にあり、五百の  
聲聞と同座せるも  
今は一人のみを舉  
ぐ。

念の善根も、悉く佛果に至る故に不思議と云ふ。尼俱陀の子は小なれども樹は大なるが如し。二に本願力に由りて、無思にして任運に果用無盡なること、滅定前の願力等の如し。三は如幻の法は有ならずして而も有なり。四は無住に依りて善を失はず、五は理を得て事を捨てず、六は因に在りて能く果を現じ、七は果を得て因を捨てざることを皆不思議なり。八は法無礙を解するに、中に於て五對十句有り。一は迷悟の境に約す。謂はく、凡は無相に於て妄に有相を見、聖は凡の有に於て無相を悟見す。又相に即して是れ無相、無相は即ち是れ相にして、一事變離の故に難思なり、餘の對は之に准ぜよ。九は發心を菩提に等しと解り、始を以て終に齊しくし、次の句は終を以て始に等くす。後に心佛及び衆生、是三無差別とは、心を解りて錯らざるが故に、三倒無し。三倒は前の「發心品」に轉するが如し。十の中に四句有り、初は盡漏不盡漏無二なり。二は佛法世法一にして雜へず。三は事を攝して理に同じ、入りて而も入ること無し。四は無二を轉成す、不變とは一味の故に無二なり、是故に俱に難思なり。二に十種の巧方便密語有りとは、正しく内行は測り難きを以て、遂に發言をして巧密ならしむ。汎く論ずるに密語に五種有り。一は彼深密の法を説くが故に、名けて密語と爲す、上の性起の中に、如來密藏等と名くるが如し。二は一言を以て一切法等を説くを密語と爲す。三は近きを以て而も聞かず、驚子如聲等の如し、遠くとも而も限り無し、口連聲を尋ぬる等の如きを名けて密語と爲す。四は言は近くして意は遠し、三乘を説いて究竟等と爲すが如きを、亦密語と名く。五は異言を以て異法を説

【不堅爲す】攝論所引の頌の文、これ四秘密（令人相、對治、轉變）の中の轉變秘密なり。今は異言異説をもてその旨を得しむ。

【三に云云】以下本藏經本第三十八卷初、十種巧方便分別智の文を釋す

き、不堅を覺して堅と爲す等と説くが如し、今此文の中には、唯初の義に約して説く。中に於て初の一是教法に約す、意の玄を得るが故に、同異を會するが故に。二は般涅槃に同じて、密に受生を現するを示す。三に東方に入定し西方に密に出づる等の如し。四は巧に衆生の善の中に惡有る等、苦の中に樂有る等と説く。五は巧に衆生の不染にして染なるを垢と爲し、染にして不染なるを淨と爲すと説く。六に巧に一が中に一切等有りと説く。七は壞處に成有り、「法華」の中の、「天人は劫の盡くるを見るも、此土常に安穩なり」等といふが如し。八は佛の普遍にして、現生に入滅するに於て、此密處を見て言を發する故に。九は衆生は則ち涅槃にして復更に滅せずと解り、而も大願をもて攝生するを捨てざるを、以て巧密と爲す。十は自ら悟りて他に由らざれども、而も善友を求めて息まざるを、以て巧密と爲す。三に十種の巧方便の分別智有りと、前は既に巧に密處を説き、今は智達し明了なるが故に云ふなり。初の二は世界の、一は淨一は染なるを知り、次の三は衆生の機器を知り、次の三は三乘の行相を知り、後の二は世出世の法を知る。又釋すらく、初の二は器世間、次の七は衆生世間、後は智世覺世間なり。又釋すらく、初の二は何の處をか化する。次の三は何の所化ぞ、次の三は化して何の處にか置く。後の二は何の法を以てか化する。上來の三十句は、融慧超情の行を明し竟んぬ。第二に十種の三昧有るといふ下の二十句は、深定普周の行を明す。中に於て初の十は定體を明し、後の十は業用を明す。又初は深定を明し、後は普周を顯す。前の中に一は入定の處を明す、謂はく、一切重重摩利に遍



す。二は入定の身を明す、謂はく、一切衆生の身を以て、而も定に入るが故に。童子身入正受等の如し。三は定は法の實を照することを明す。四は定中に佛を見る、五は定は多劫を持す、『十明品』の第十智明に説くが如し。六は定は身雲を出す、海幢比丘等の如し。七は或は佛身を以て入定を示現す。八は衆生を覺悟せんが爲に定に入る。後の二は各各一念の中に於て、一切の菩薩の定慧を得、二行を具足して定に入る。又初の二は入定の處、次の二は入定の身、次の六は入定の用、後の二は入定の時なり。二に十種の一切處有りとは、前は入定を明し、今は定に従ひて用を起し、一切處に遍することを辨するなり。一は悲の託處、二は身の依處、次の三は解を起すの處、一は正報の根性を解し、後の二は依報の劫壞を解するに、三災の中に略して風災無し。次の一は是れ所供の處、次の二は所成の處にして、一は依、一は正なり。後の二は是れ所作の處、一は慧、一は福なり。上來は深定普周の行竟んぬ。

【第三に云云】以下、業用自在の行を明す文の釋にして、經の十種の法門有り一等の文の下。

第三に十種の法門有りとは、下の四十句は業用自在の行を明す。中に於て初の十は自在の法門を明す。初の二は身普現、二は多處異現、三は多をして一に入らしめ、四は住持を失はず、五は上は果に同じて現じ、六は處として遍ぜざること無し、七は時として遍ぜざること無し、八は一刹に多身を現じ、九は一身を多處に現じ、十は一念に普く示現す。此等は並に是れ法性融通門等なり、故に法門と名くるなり。二に十種の神通有りとは、正しく身を以て法門を現するに、業用無限なるが故に云ふなり。一は宿命、二は天眼、三

【轉依】第八護中の煩惱所知の二障を轉捨し、無漏の眞智(菩提)を轉得するをいふ。

は他心、四は天眼にして、次の五は神足なり。一は神力を現じ、二は多身を示し、三は速に往來し、四は能く刹を嚴り、五は化身を現す。後の一は漏盡にして成菩提を示す。此十は皆通慧を以て體と爲す故に智通と名け、悉く定より起つを齊して出生と名く。三は十種の明有りと、前は無揮を以て通とけひ、今は委顯を明と爲す。中に於て初の一は衆生の業果差別を知り、二に衆生の、寂滅の境に於て淨信心を起すを知り、三は衆生の理に證入するの智を知る、上の三は所化を知る。四に語業、五に意業、六に身業なり、此三は能化を顯す。七に境に於て分別の想を轉じて、正智の因と爲す。八は理平等にして起行の無礙を知る。初は三無性の理は、行を起して成佛するを礙げざるを知る。九は衆生の眞心は、理に稱ひ縁に隨ひて事を顯し、化用を失はざることを知る。中に於て初は理に稱うて事を現じ、化用を失はざるを知る。二に何以故の下は無礙を釋成す。初の中に又初は一向に化他、二に自行を失はず、三に何以故の下は釋成す。前の中に初の四句は衆生の眞體を知る。二に知因の下の八句は、衆生緣起の相事を知るとは、是れ因緣從り生ずる所の報なり。三に知愚癡下の六句三對は、衆生の染淨の差別を知る。四に知生死の下八句四對は、衆生の理事無礙を知る。五に知轉の下八句四對は、衆生の道器差別を知る。初に轉依未轉を知り、二に治道の起未起を知り、三に惑滅して道の立つことを知り、四に行成じて根別なるを知る。下の句は總結して化を成す。謂はく、緣起に稱うて觀察するなり。十の中に七有り。初は善能く著を離れ、二に不見の下は善く行願を起し、三に見一切の

下は、善く徳本を植ゑ、四に自在の下は善く勝通を起し、五に知種種説の下は、善能く境を照す。六に永斷の下は、善く自他を益し、七に除滅の下は、善能く果を得ること並に知んぬべし、餘の義は前の「十明品」に説くが如し。四に十種の解脫有りとは、前は大智明を起し、今は無明障蓋を辨する故に解脫と云ふ。解脫に二種有り、一は作用自在なるを名けて解脫と爲す。上の「不思議法品」の十種不思議解脫等の如し。二は縛に於て繫を離るるを、名けて解脫と爲す、此所説の如し。中に於て初の四は、凡夫に於て脱を得、初の二は惑障を脱す、一は鈍使、二は利使なり。次の一は業障を脱し、後の一は報障を脱す。五は小乘に於て脱を得、六は地前に於て脱を得、七は地上に於て因位に解脫を得、八は微細の著、微細の礙に於て解脫を得、亦是は累外自在の故に解脫と云ふは、後の二門を脱するなり。上來の四十句は、業用自在の行を明し竟んぬ。

【二〇】以下は第三に具徳成滿の行の文を釋す。

(二〇) 下は第三に十園林從り下の「一百五十句」は、徳傳る成滿の行を明す、中に於て四に分つ。初の四十句は報徳圓滿の行を明し、二に十種發不動心の下の二十句は、心住堅深の行を明す。三に十種智慧觀察の下の五十句は、智徳殊勝の行を明す。四に十種不可稱量從り下の四十句は、徳重高深の行を明す。初の報徳圓滿の行の中に就いて、初の十は園林に遊賞し、次の十は宮殿に栖止し、次の十は中に於て娛樂し、後の十は將出東帶の故に莊嚴と曰ふ。初の十園林の中に就いて、一に皆初に園林の名體を擧げ、後に義を以て釋成す。謂はく、遊觀し適悅する故なり。前の七は自分の因行、後の三は勝進の果行なり。前の中に初

【四梵】慈悲喜捨の四無量心。是法は能く大梵の果報を感じ、是れ梵天の所住なればなり

【第二に云】以下心住堅深の行の文を釋す。

の二は利他の行、後の五は自利の行より、一は時、二は處、三は違、四は順、五は修行にして、道品等は佛從り流出するを以ての故に、慈父境と云ふなり。後の三の中に、一は果法を念じ、二は法輪を現じ、三は正覺を示す。二に十種の宮殿有りとは、前は園林、外に遊び、今は宮殿、内に安んずるが故に次に明せり。亦皆先に名體を標し、後に義相を釋顯す、謂はく、若し菩提心を忘失するときは、則ち正行をして栖止する所無からしむるが故に云ふなり、此一を行の本と爲す。次の七は利他行を明すに、初の四は三界の衆生を化す。色界の中に二を分つが故に。四梵とは四無量なり。無色は是れ難處にして、彼難を滅するが爲に、菩薩中に生ずるなり。次の三の中に、一は通化、二は眷屬を化し、三は憍慢を化す。後の二は自行成滿にして、一は修因、二は果得なり。三に十種の樂在りとは、既に宮殿に住して、情は勝利を忻ふが故に樂と云ふなり。中に於て初の八は、因法の中の樂、後の二は果法の中の樂なり。前の中に初の六は自利の法、後の二は利他の法なり。第四に十種の莊嚴有りとは、既に樂心成ず、勝徳を以て自嚴するが故に次に明すなり。中に於て初の二は力無畏、次の二は義法辯、次の二は剛行嚴、次の二は利を以て法を雨らし、後の二は行を以て化を現す。上來は報行竟ぬ。第二に二十句有りて、心住堅深の行を明す。中に於て初の十は心堅、後の十は深入なり。初の中に一は捨有心堅、二は向法、三は供佛、四は悲觀、五は慈攝、六は專求、七は常修、八は信堅なり、有根信とは佛果を生ずる故に。不濁信とは無明を離へざる故に。離垢信とは世有を求めざる故に。明淨信と



【下は云云】以下  
智德殊勝の行の文  
を釋す。

は正證理の故に。供佛信とは向果の故に。不退とは凶行堅の故に。不壞とは外縁不動の故に。九は果を窮め、十は行圓なり。二に十種の不捨深心有りとは、行堅して動かざるを以て、乃ち深理に窮達する故に云ふなり。又此心をして感重を離れざらしむるが故に、不捨深心と云ふなり。中に於て一は智、二は悲、三は化意を顯し、四は友に近き、五は供佛、六は求法、七は淨戒を持し、八は同行を攝し、九は佛法を持し、十は願行を修す。下は第三に十種の智慧觀察有りの下の五十句は、智德殊勝の行を明す。中に於て初の十は能く心感にして捨てざるを以て、遂に智慧をして巧に所作を觀せしむ。中に於て一は教法を觀じ、二は行法を觀じ、三は通力法を觀じ、四は巧便法を觀す。五は佛持とは若し用に約せば、佛の神力加持を明す、若し體に約せば法身は萬德を住持す、上は觀法自在なり。六は內持、七は外說、上は說法自在なり。八は觀深、九は觀廣、十は觀多、十一は觀無礙、上は觀法の深廣なり、是れ増數の十なるが故に、一門を割すなり。二に十種の分別有りと、既に能く觀察し、遂に能く諸法を簡擇するが故に、分別と云ふなり。中に於て初の二は、依他起性を分別す、一は法、一は喻、次の一は遍計性の無所有を知るが故に、評ふべき無し。後の七は圓成實性を分別す。一は恆沙の功德を知り、二は體實にして依無し、三は堅きこと金剛の若し、四は則ち是れ法身如來、五は法身の體寂、六は證道の所攝、七は體相一味なり。三に十種の無垢有りと、深法を簡擇するに由りて、障を除き垢を離るる故なり。此中に十種の垢を離る。一は異求の垢無く、二は疑惑の垢無く、三は邪

【悲は：故に】 菩薩は大悲を以て之の本領とするをいふ。

【下は云云】 以下 德重高深の行の文を釋す。

見の垢無く、四は所知障の垢無く、五は不欲佛果の垢無く、五は訥言の垢無く、七は怯弱の垢無く、八は大悲を障ふる垢を除く、悲は是れ菩薩の所住なるを以ての故に。又十地を障ふるの無明無し、十地は是れ菩薩の所住なるを以ての故に。九は散動の垢無く、十は微細疑著の垢無し。又釋すらく、初の三は心淨に約す。一は深心、二は信心、三に解心なり。次の一は境淨に約し、次の五は行淨に約し、後の一は果淨に約す。四に十種の智印有りとは、垢障を離るるを以ての故に、德をして堅固に、楷定不動ならしむる故に次に明せり。中に於て一に安受苦の境に於て、忍智動せざる故に印を明すなり。變易苦とは是れ境苦なり。二は他の不饒益に於て忍行決定し、三は深佛法に於て信忍決定す、則ち法思忍なり。四は決定成佛して當に衆生を度すべし。五は決定して教を解り諸佛に等しきが故に。六は大欲決定に十一句有り。初に善欲は是れ總にして、餘の十は是れ別なり。七は決定して身命を惜まずして佛果を求む。八は善根未熟なる衆生に於て、生長せしむ。九は已熟の衆生をして沙に入らしむ。十は因圓果滿なり。五に十種の智慧光明有りとは、既に能く決定し、遂に照用無礙ならしむる故なり。中に於て皆先に所照を明し、後に能照を顯す。初の二は果を求めて佛を見、次の二は機を見て法を授け、次の二は友に依りて佛を示し、次の二は生を攝して法を説き、次の二は佛持行滿なり。

下は第四に十種の不可稱量住の四十句有りて、德重高深の行を明す。中に於て初の十は兼重行を明し、次の十は勇修行、次の十は高勝行、深行、深廣の行なり。初の十の中

に、行用の測り難きことを明すは、凡小闕ふこと莫きが故に云ふなり。中に於て一は眞に住して證せざるの難、二は善を成じて取らざるの難、三は理を解りて事を疑はざるの難、四は長劫に怠無きの難、五は滅を得て住せざるの難なり。又釋すらく、四は生死を厭はず、五は涅槃に住せず、六は無劫に劫を説くの難、七は非行にして行を起すの難、八は唯心を解了するの難にして、三界は是れ處識、三世は是れ數識なり。心無邊とは、通じて餘の一切の法を攝するなり。九は悲廣無限の難、十は得果不受の難にして、此難測に由るが故に、凡小に過ぎ、言も稱すること能はず、智も量ること能はざる故に云ふなり。二に十種の無懈怠心を發す有りと、既に行用超過して、遂に勇猛に無間ならしむるが故なり。中に於て初の三は邪を破し正を授け、次の二は行を滿じて生を攝し、次の二は果を成じて物を調し、次の一は多刹に佛を現じ、次の一は一切に廣く施し、後の一は一念頓に解る。中に於て五有り。初は所解の法を擧ぐるに九門有り。二に如是等の下は、能解の相を對辨し、三に於一切の下は、略して不顛倒を解ることを明し、四に無二智の下は、廣く無倒解の相を顯し、五は法界等の下は、無倒智の業用を辨す。三に十種の須彌山王正直心有りと、正しく勇猛の行を以て、大心の決定を成じ、正しく菩提に向ひて、傾動すべからざる故に云ふなり。中に於て初の一は、能證の智を修して決定し、二に所證の理を觀じて決定し、三に決定して此福慧をして、所證の無垢白淨眞如に趣入せしむ。四は決定して求法の行を成就す。盜法を離るとは、謂はく、他に從ひて法を聞き、「我自ら解れり」と云ひて

師を稱讚せず。『觀佛三昧經』に准するに、「地獄に墮つることは、箭の射るが如し」と  
 なり。一切施心を起すとは、法を擬して一切衆生に施さんと欲する故なり。五は大忍度生  
 の行。如如捨とは、如を觀じて相を捨つるが故に。大忍法とは大智現前するが故に。六に  
 魔の境界を越ゆる行を成就す、中に於て四有り。初は勝法を成就し、二は此勝に味せず、  
 三は但正法を求む。四は因を擧げて釋成するなり。七は楷準勇修の行にして『攝論』に  
 云はく、「愚修は小時怠ると雖も、心に疑ふこと已に久し、佛無量劫に於て勤勇して須臾と  
 謂ふ」と。八は惡人を捨てざるの行、九は孤子勇修の行、十は空に即して有を成するの行  
 なり、中に於て四有り。初に一法等有事無く、正しく理の實無を見ることを明し、二  
 に而菩薩の下は、不捨悲願を明し、三に法を擧げて釋成す。謂はく、則ち此無所有は善  
 提を出生するが故に。四に而此菩薩の下は、稱理造修を明す、亦是の如きの恐怖を生ぜ  
 ず、「若し一切空ならば、我何の義有りてか無上道を求む」と。四に十種の深智慧大海に  
 入る有り等とは、前は志山の堅聲を明し、今は智海の廣深を顯す故に次に明すなり。大海  
 の如きの智慧を以て、深悟して此十種の法に證入し、無上菩提を成ずるが故に名くるな  
 り。是れ此智慧海の中に入るに非ず、別して顯す中に、無量の衆生界に入る等と云ふを以  
 ての故に知ることを得るなり。一は衆生界に入ること無量、二は世界に入ること無量、三  
 は虚空界に入り、四は法界に入り、五は三世の佛無邊善根界に入り、六七八は三世の諸佛  
 界に入り、九は能く多佛に供し、十は能く多法を求む。上來は總じて第三の十行位の行相



【二】以下、本大藏經本卷第三十九初、十廻向位の九問に答へて行相を明す文を釋す。

を答へ竟んぬ。

自下大門第四に十種の寶住従り下に三百句有りて、前の二十九問を答へ、十廻向位の中  
の行相差別を明す。十自在の中の章門の十句は、問の中に在らざるを以ての故に。三百有  
り、二十九問を答ふるなり。中に於て三に分つ。初の一百一十句は廻向の位の中の、行體  
堅固の義を明し、二は十自在従り下の一百二十句は、行用自在の義を明し、三に十種の遊  
戲神通従り下の七十門は、行位圓滿の義を明す。

初の行體の中に就いて二を分つ。初の四十門は行體成就して、高く彼岸に栖むを明し、  
二に十不壞信従り下の七十門は、行體の離障と諸の勝徳を攝するを明す。前の中に就い  
て初に十種の寶住とは、正法の貴ぶべきの所に住するが故に、寶住と云ふ。又無住を以て  
住と爲すを亦寶住と名く。中に於て、一は佛に近き、二は法を聞き、三は自在に受生し、  
四は法を知ること自在なり、謂はく、總別無礙なり。五は智斷自在なり、謂はく、資糧道  
息み、加行道に離れ、無間道に斷じて、實際を證せずとは、二乘に異なるが故に。留惑の故  
に、實際の岸に到るとは、法無我の際に到る故に究竟なり。六に悲智自在なり、謂はく、  
衆生の空を知りて而も化度を行す。七は理事無礙の法を知り、八は理無にして、起行を礙  
げざるを知り、九は空に於て善巧にして、所願虚からず。十は多佛の異説するを聞きて、  
善解し會通す。謂はく、四意等を以て決するが故なり。佛智不思議なるを以ての故に、異説  
多し、法體殊らざる故に、言無二と云ふなり。二に十種の發金剛心有りとは、既に所住は

貴ふべし、能く大乘無限齊の法に於て、堅固心を以て其際を窮盡するが故に、莊嚴等と名  
 くるなり。中に於て一は三世無際之法を知り、二は多の菩薩を引きて、自ら己を策勵し、  
 三は無際の世界を嚴り、四は福慧は無際衆生に清し及ぼす。五は善根を以て無際の佛を  
 供し、六は深く無際の佛法を解る、謂はく、釋の中に一切攝取と云ふは、謂はく、無相不  
 壞の相を攝取と爲す、無相に相を攝するを以ての故に、相に無相を攝するが故に、一切攝  
 と云ふなり。七は能く無際の苦惱を忍ぶ。級とは俗書に云はく、賊の首を斬るを級と爲し、  
 爵一給を賜ふ」と、因りて以て名と爲す。任不二法とは、苦及び我不二、則ち法思のなり。  
 八は無際無際の時、無際無際の處に於て菩薩の道を行す。九は必要を以て無際の大行を成  
 じ、十は寂に即する用を起すの行なり。中に於て四有り、先に空寂に住し、二に面亦不捨  
 の下は、起事用行を明し、三に何以故の下は、大願を擧げて釋成し、四に善知是法の下  
 は、雙融の大願行を明す。三に十種の大事を發す有りとは、所作の大事に於て、發起し現  
 前せしむる故に云ふなり。中に於て初の三は、福業大を作し、次の三は化業大にして、土を  
 嚴り攝生を爲すなり。次の二は勝進攝融を明す。九は成佛、十は說法なり。四に十種の  
 究竟大事有りとは、前は大事に於て但能く現前を起し、今は所作の成滿を明すが故に究竟  
 と云ふ。中に於て一は供して佛境を盡し、二に本の所謂を滿じ、三に正法を求盡し、四に  
 次の二は因を増し果を出す。次の二は願行成滿、後の三は供人間法なり。

【第二に云云】以  
 下經の十種不壞信  
 を明す文を釋す。

第二に十不壞信有りといふ下に七十門有り、行體は障を離れて諸の勝徳を攝すること

を明す。中に於て、初の四十門は信慧善巧を明し、後の三十は心行攝徳を顯す。前の中に就いて、初は十種の不壞信を明すと、深入の法に於て淨信は壞せずして、不信の障を破す。初の六は信行の縁、後の四は信行の體なり。前の中に衆生を信すと、信は是れ所化の悲の境なるが故なり。又其如來藏佛性等有りと信する故に。二に十種の受記有りとは、既に内に堅信を懷き、外に記別を蒙るが故に受記有り。前は自ら受記を知るを明し、今は諸佛の與記を知るが故に別と爲るなり。中に於て、一は解脫分の善根を種ゑて法を聞くに毛堅つ等なり。二は初地の見諦を得るを諦滿等と名く。三は修位の中に於て廣く諸行を行す。四は現象の前に對し、五は衆の不現前に對し、六は自心本覺の義を悟るに因る、七は法忍の位成す。八は化功已に立つ、九は劫數已に滿す、十に位は自在に至る、餘は前に説くが如し。三に十種の善根廻向有りとは、己が善根を以て善友に順向するが故に云ふなり。初の二は同心、次の一は同行、次の二は同修、次の二は同治なり。謂はく、正しく能く治するを念じ、現前し清淨にして所治已に離る。次の一は同位、後の二は同證にして則ち無異なり。同とは謂はく、此菩薩の善根廻向と善知識の善根と、一體にして無異の故に名けて同と爲す、是れ別體の相似を同と名くるには非ず。四に十種の智慧を得る有りとは、廻向の徳熟して智能自在なるを以ての故に明せり。中に於て初の四は自分なり、一は施を解る、二は法を樂しむ、三は佛境に入る、四は能く疑を遣る。後の六は勝進なり、一は實を悟り、二は權に入り、三は小善も佛を生ずるを解る、四は具徳、五は佛に往く、六は法

を悟る、此等を解るに由るが故に、智の自在を得るなり。第二に十種の無量無邊廣心を發す有りとは、下の三十門は心行攝徳を明す。中に於て初は無限の境に於て、稱境の心を發す故に云ふなり。一は廣く所求を念じ、二は廣く所度を念す。次の二は廣く所顯を念す。一は事を會し、二は理を顯す。次の二は廣く因果の位を念す。七は廣く業報を了し、八に廣く利を嚴り、九は大衆に入り、十は圓音を觀す。二に十種の藏有りとは、既に大心普周するを以ての故に、今徳は海奥を窮むるが故に次に明せり。一は字藏、二に義、三は持、四は辯、五は慧、六は通、七は巧、八は見佛、九は入劫、十は喜敬なり。此等は皆含攝萬積有るを同じく藏と名くるなり。三に十種の調順有りとは、既に積徳盈滿すれば、明慧斯に盡くるが故に次に明せり。一は謗を離れ、二は疑を離れ、三は慢を捨て、四に白見を捨て、五は下乘に背き、六は散動を離れ、七は異見を捨て、八は三不善を離れ、九は魔怨を降し、十は六弊を離る。此は遮に約して釋す、若し表に就いて言はば、所作の行熟して、至順調柔なるが故なり。上來は行體堅固を釋し竟んぬ。

【六弊】淨心を覆蔽するもの癡貪、嗔戒、瞋恚、憍念、散亂、愚癡。  
【下は第二云六】以下行用自在の文を釋す。

下は第二に十自在の下に、一百二十門有りて行用自在を明す。中に於て初の十は總じて自在を明し、後の一百一十は別して自在を顯す。前の中に十自在とは、作用無礙にして延促、已に由るが故に自在と云ふ。此中の十自在は、第八地中に釋するに同じ。此中の莊嚴は、彼には財物自在と名け、此中の解脫は彼には信解自在と名け、梵本に准ずれば應に勝解と名くべし。此中の神力は彼には如意自在と名く、一一は皆名を標し、後に義を釋する



は前に同じ、知んぬべし。『法集經』の第二卷の中にも亦此義を明す、第二に別して顯す  
 中に、初は十章を列ね、後は百門を以て次第して解釋す。名を列ぬる中に第九は身力、第  
 十は智力、餘は下に釋するが如し。後に次第に釋する中に、先に衆生の自在を辨す。是れ  
 所化なるを以ての故に。中に於て初の五は、衆生の中に於て轉變自在なり。後の五は衆生  
 の中に於て、上首自在を作す。又釋すらく、初の一是總、餘の九は別なり。別の中に其願  
 を起して樂想斷ぜざるを持と名く。二は物に依りて法を授け、三は益を得しむるを變と名  
 け、四は法界に入らしむ。後の五は上首の身なること知んぬべし。二に利自在の中に、初  
 の三は法界を以て細に入る自在にして、漸次に深入し乃至無盡なり。次の三は身土無礙自在  
 なり。一は身に利を滿じ、二は利に身を滿じ、三は擲ちて動かしむ。次の二は嚴利自在、  
 後の二は佛を現じ利を現する自在なり。何が故に皆是の如きの自在を得るとならば、釋す  
 るに略して五義有り。一に緣起相由門に了達するが故に。二は法性緣通門に達するが故に。  
 三は定力自在にして、勝通を起すが故に。四は解脫力を得て、能く廻轉するが故に。五は  
 智力をもて幻夢の法を了知し、自心に隨ひて現に自在を得るが故に。並に所知障盡くるに  
 由るが故に然ることを得。餘の上下の文は皆、此釋に同じ、應に知んぬべし。三に法自在  
 の中に、一は一多自在、二は要す智に由りて出づ、三は理事無礙、四は總別、苦に巧なり。  
 五は無言の言、六は巧に一乘を轉ず、七は多劫に一を説く、八は染に即して淨を成じ、九  
 は巧に多端を現じ、十に體は用を礙けず。四に身自在の中に、初の二は自他無礙、次の二

は果徳無礙、次の二は依正無礙、次の二は定慧自在、後の二は理事自在にして、亦これ染  
 淨自在、眞妄自在なり。五に願自在の中に、一は因願同求の故に、彼は則ち自なり。二は  
 果願同じく現するは、皆衆生の爲なり。三に願は果を得しめ、四は常に願息まず、五に無  
 身に身を現す。謂はく、凡夫の識身を離れて、二乗の智身に著せず。又取相識身を離れ、  
 亦無相智身に著せず、而も能く身を現するは願力に由るなり。次の二は同事教化、八は修  
 因多時、九は成果多處、十は普く法雨を雨らし、並に願體無障礙の願力に由りて、作意を  
 待たずして自然に成就するが故に、願自在と名く、六は境界自在とは、分齊の境界に於て  
 廻轉無礙なり。此十種の勝劣相違の境の中に於て、皆勝を得、劣を現す故に自在と稱す。一  
 は理事相違、二は邪正、三は染淨、四は因果、五は靜亂、六は眞妄、七は凡聖、八は悲  
 智、九は體用、十は大小なり。謂はく、大に處して小を現する故なり。七は智自在とは、  
 智は自ら顯れず、所知に約して之を顯す。初の二は能化の智にして、一は説、二は持、次  
 の三は所化を知るの智にして、一は根を知り、二は欲を知り、三は惑治を知る。六は上は  
 十力に入り、七は下は三世を知り、八は正覺を示し、九は根業を知り、十は音聲に達す。  
 八に通自在の中に、一は神足、二は天眼、三は漏盡にして亦是れ應に成ず。四は語業、五  
 は宿命、六は現通、七は義法智通、八は教法智、九は敬護、十は理法智なり。九は神力  
 自在の中に、初の二は幻通力なり。塵の中に現すとは、塵内に先に有り、是れ外より入る  
 に非ず。次の三は如意通力にして、初の二は正の中に依を現す。謂はく、毛孔は是れ正報

【二】以下第三に  
行徳の圓備を明す  
文を釋す。

なるが故に。後の一は毛は園山を繋ぐ。次の三は劫に於て自在にして、一は多小自在、二は三災を示現して、衆生を憐さず、三は劫災壞の時、其資具を恃して壞損せしめず。後の二は處に於て自在にして、一は遠擲、二は解空なり。十には力自在とは、是れ悲智の力なるが故に、前の門に同じからず。一は調生の力、二は鐵土の力、三は法身力、四は常修の力、五は開覺の力、六は擲行の力、七は度生の力、八は自覺の力、九は種智の力、十に大悲の力なり。各各先に名を標し後に義を釋す。皆業用屈せざるを力と爲すなり。下は通じて所知を結す。上來は行徳自在竟んぬ。

下は第三に十種の遊戯神通の下の七十門は、行徳圓備を明す。中に於て初の二十門は、行徳殊勝を明し、後の五十門は行徳圓滿を明す。前の中に、初の十は住志の行成じ遊賞自在なるを明す故に云ふなり。中に於て初の二は、染の正報を以て、淨の依報に對して以て相作を明す。此中に四種の自在有り。一は依正相作、二は染淨相作、三は染の正、淨の依の相作、四は此土の相作は已に其だ希有なり、況んや各各不壞不雜の故に極自在と爲し、遊戯通と名くるなり、下は並に之に准ぜよ。次の二は佛身を以て二乘に對して相作を明す。問ふ、『佛は是れ果人、菩薩は因人なり、何が故に因人は能く佛身をして、二乘と作さしむるや。』答ふ、『此は是れ普賢の位の中の菩薩は佛と齊しきが故に。』又釋すらく、是れ佛なり。下は容に就いて其作の故に。次の二は因位果位の相作、次の二は生死涅槃相作して、而も生死に著せず、涅槃に染せざるなり。亦不究竟無餘とは、生死不亡を明すな

【第二に云云】以下行徳の圓滿を明す文を釋す。

【四は……】大正藏本には一四は無畏、五は三業無失畏」とあり。

り、此中に唯是れ果位の方便淨涅槃なり。此中は是れ性淨涅槃に非ず、性淨涅槃と生死と相作すること奇と爲るに足らず。後の二は定用の相作を明す。二に十勝行有りと、遺履自在なるを以ての故に、所作皆悉く精微ならしむるが故に、勝行と云ふ。中に於て初の三は攝生の行にして、前の二は法を以て機に就き、後の一は機を攝して法に同ず。次の三は法行を知る。一は因果相出、二は有爲無爲相出、三に生死涅槃相出なり。後の四は三業の行にして、一は語業、次の二は身業、後の一は意業なること知んぬべし。

第二に十力有りの下の五十門は、行徳の圓滿を明す中に、初の十力は正しく徳勝れ智用堪能なるを以ての故に力と云ふなり、皆標と釋と有り。中に於て、初の七は自分の因力にして、一は三界に染せず、二に四信を壞せず、三は巧に終行す、上の三は自行なり。四は物の心を知り、五は物の顯を滿じ、六は常に化し、七は柔を現す、上の四は利他の行なり。後の三は勝進の果力にして、一に佛身を現じ、二は菩提を悟り、三は法輪を轉す。二に十種の無畏有りとは、正しくは智力の功強なるを以て、外に懼るる所無きが故に云ふなり。中に於て初の二は共に文義を持し、難に答へて畏れず、三は二空に了達し、妄念を畏れず、四は滅債缺くること無くして畏れず。五に三業失無くして畏れず、六に魔等を畏れず、七は聞持すること能はざる畏有ること無し。八は悲願をもて生死の煩惱を畏れず、九は二乘に示同して、二乘を畏れず。十は機に感じて而も現する能はざることを畏れず。三に十の不共法有りとは、正しく智力雄猛にして、凡小の闕ふこと莫きを以ての故に不共と云ふ。



又釋すらく、既に皆他に由りて悟らずと云ふは、則ち知んぬ行起ることは自心にして、他の共する所に非ざる故に、不共と名く。一は自己の行、二は化他の行、三は廻向の行、四は巧便行なり。中に於て三有り、先に巧に二乗を離る、二に於生死中の下は、巧に世間に順す。三に於世間の下は、巧に彼岸を窮む。五に智慧行なり、中に於て三、先に總じて定慧を擧げ、二に常在涅槃の下は、別して十門の自在智慧を辨じ、三に菩薩成就の下は、總結して勝を歎す。六に三業は智に隨ふの行、七に悲は他の苦に代るの行、八は慈は他の供を受くるの行、九は自淨淨他の行、十は位滿常修の行なり。四に十種の業有りととは、正しく内徳不共なるを以て、所作をして必然ならしむるが故に、業と云ふなり。中に於て初の一は處に約し、次の三は人に約し、次の一は時に約し、次の二は用に約す。一は身行、二は身光なり。後の三は護持に約す、一は護法、二は說法、三は願持なり。此等は多くは境の事に約して名と爲す、各各標と釋と有ること知んぬべし。五に十種の身有りととは、業因既に備り、身の果現前するに由るが故に。此れ多は亦是れ廻向の位滿に、得る所の十身なり。初の二は體に約す、來りて趣に入らざるを以ての故に。後は趣の中に於て、亦出で去るべきこと無きが故に云ふなり。次の五は用に約す、一は同世に願じ、二は眞を失はず、亦是れ世間の所知眞實なり。三は用は來際を盡し、四五は正しく隨緣不變なるを以ての故に、堅固不動なるを得るなり。後の三は相に約す、一は稱相、二は理相、三は果相なり。此十身は前の『十行品』の中の第九の行の内の十身と、同有り異有りて相攝すること知ん

ぬべし。上來三百句有りて、十廻向の中の行相を答へ竟んぬ。此上の十業十身は古より諸徳は多く將に後の十地の位の中に入れて收めんとせり。然れども別行の『度世經』の六番問答の中に、此は第四の末に在り、今は彼經に依りて此文を科判して、廻向に入れて攝む。

【二三】以下第五に前の五十問に答へて、十地位中の行相を明す文を釋す

自下大門第五に、十種身業より下五百句有りて、前の五十の間を答へ、十地の位の中の行相を明す。中に於て四に分つ。初の一、二十門は、十地の中の三業殊勝の行を明し、初地に寄在す。二に十種の方便従り下の九十門は、造修離障の行を明し、二三地に寄在す。三種の離生従り下の九十門は、造修純熟の行を明し、四地に寄在す。四に十種の足より下の二百門は報相圓滿行にして、八地已上の位に寄在す。初の中に就いて三に分つ、初の二十門は身業行を明し、二に次の四十は口業行を明し、後の六十は意業行を顯す。初の中に就いて、先に身に依りて業を起す。一に一切處に遍し、二に一切の機に趣き、三に一切の生に同じ、四に一切の刹に遊び、五に一切の佛を請し、六に一切の土を擧げ、七に一切の山を碎き、八に一切の事を現じ、九に一切の生を覆ひ、十に一切の佛を現す。皆是れ身の作用なれば同じく身業と名く。二に十種の身在りとは、前の間に准すれば、應に淨身業と名くべし。下の口業の中も亦此に同じ。又此は是れ行法を身と爲るが故に、前に同じからず。中に於て初の二は六度四攝、次の二は慈悲、次の二は福智、次の三は體用、後の一は成果なり。第二に十種の口有るといふ下の四十は、口業を明す。初の十は口業の

體を明す。應に語業と名くべし。口は是れ身分の攝なるを以ての故に、中に於て一に惡口を離れ、二に兩舌を離れ、次の二は妄語を離る、一に龜、二に細なり。後の六は綺言を離る、此れ並に遮に約して釋す。若し表に約せば十種各各一徳を顯すこと、文の如く知んぬべし、二に十種の清淨業莊嚴菩薩口業有りとは、語業の淨因を顯し、以て其語を嚴るが故に云ふなり。中に於て初の二は攝法行、次の二は離過行、次の二は攝善行、次の二は法施行、後の二は聞法の行にして、此十行に由りて語業をして嚴淨ならしむるなり。三に十守護を得とは、發言誠諦なるに由りて、幽靈懸かに墮るが故に守護を加へ、八部の外に於て梵王衆及び佛法王を加へて、十と爲すこと知んぬべし。四に十大事を成ずとは、内因の誠實なるに由りて外緣加護して、語力をして廣大ならしむることを致し、其所作を成ずるが故なり。一に能く疑を斷じ、二に能く普く至る。三に其根を動かし、四に其性に入り、五に其使を抜き、六に其習を除き、七に淨信を生じ、八に深樂を起し、九に理を證せしめ、十に大果を得るなり。第三に十種の心有りといふ下の六十門は、意業を明す。中に於て初の十は意業の體を明し、後の五十は意業の用を顯す。前の中に就いて、一に廣心、二に深心、三に勝心、四に淨心、五は利心、六は堅心、七に無染心、八に希有心、九に智慧心、十に無邊心にして、此は並に是れ意業の心なり。二に十發心有りとは、心體既に理に備はる、宜く勝用を發起すべきが故なり。中に於て初の六は利他心を明し、次の二は自利の心、後の二は勝分の中の利他なり。又釋すらく、初の一は總、餘の九は別にして、並に是れ利

他の心なること知んぬべし。三に十種の心満有りとは、前は既に發心して所作を修成し、法界に遍滿するが故に云ふなり。中に於て一に悲心廣く、二に智は深に契ひ、三に解脫の用なり、謂はく、是れ九世は即ち一念なるを、名けて解脫と爲す。四に八相を滿じ、五に遍く器を知り、六に眞諦を了し、七に俗網を解き、八に無生を滿じ、九に心界に達し、十に等覺を現す。四に十根有りとは、前の心満に由りて、法器と爲るに堪へ、能く出生するが故に根と名くるなり。一に信根、二に樂根なり、謂はく、信増するを樂と爲す。三に精進根の故に退かざるなり。四に定根は位に住す。五に慧根、六に悲根、七に堅智、八に明慧、九に法身の器と爲り、十に報身の根と作る。五に十種の直心有りとは、生じての後體立つを以て、正しく所作に向ふが故に直と云ふなり。中に於て初の二は直に下に背き、次の二は直に上に順ず。五に違に於て動ぜず、六に順に於て染無く、七に法に隨ひて能持す。八に悲は處を擇ばず、九に深義に入り、十に廣教を習ふ。六に十深心有りとは、前の正しく向ふに由りて、信樂をして慳重ならしむるが故に深心と曰ふ。中に於て初の二は深く障を離れ、次の二は正しく法に入る、一に行、二に解なり。五に法を知ること無礙なり、六に異の方便に入り、七に所作を成辨し、八に定深く、九に願深く、十に悲深し。上來は初地の行相竟る。

【下は第二云云】  
以下九十門は二地  
已上の行相を明す

下は第二に十種方便の下の九十門は、二地已上の行相を明す。中に於て三に分つ、初め三十句は智慧方便の行を明し、二に十種入業生より下の三十句は、慈悲方便の行を明し、



文を釋す。

三に十種越より下の三十句は、悲智究竟の行を明す。前の中に就いて、初の十方便とは巧に正行を修するが故に。初の六は是れ捨相方便にして、巧に六度を修すること知んぬべし。後の四は是れ攝生方便にして、一に慈は樂を與へ、二に悲は苦に代り、三に智を授け、四に法を與ふ。二に十種の樂修有りとは、正しく善巧無礙なるを以て、能く諸行を欣求するが故に云ふなり。一に勝善を樂み、二に異嚴を樂しみ、三に廣大を樂しみ、四に甚深を樂しみ、五に四無量を樂しみ、六に持戒を樂しみ、七に慈忍を樂しみ、八に明解を樂しみ、九に神通を樂しみ、十に聽法を樂しむ。上は因を辨じ、後の一は所成の果を顯す。三に十種の解脫深入世界有りとは、謂はく、樂修して已まざれば、能く解脫の勝力を以て一切世界をして、相入せしむる等の故に以て名と爲す。中に於て初に多を以て一に入る、二に一を以て多に入る、三に一佛十方に滿じ、四に世界は全く空を示し、五に佛の莊嚴を同ず、六に一菩薩は一切に滿じ、七に毛孔に入り、八に衆生の中に入り、九に一果處遍し、十に妙音滿す。第二に十種の入衆生有りと云ふ下の三十は、悲方便を明す中に、初の十は無緣の大悲を明し、巧に物の性を會するが故に、入衆生性と名く。又衆生界をして、所入有らしむるが故に、入衆生性と名く。性を亦界と名け、界に二義有り。一に分齊の義、二に因と爲す義なり。文の中に、前の五は相入自在を明す。一に事を攝して理に入り、次の二は多事一に入る、四に末を攝して本に入り、五に多界を一に入り、後の五は廻して化用に入る。初の一は所化の器に入り、後の四は能化の相に入る。初の一は隨類相に入りて化

す、餘の三は知んぬべし。二に十習氣有りとは、善く物の性に入るに由りて、串習の氣分を成せしめ、以て行因と爲すは、則ち習氣を熏成するなり。一に行の本氣、二に行氣を成じ、三に下化、四に上見、五に受生、六に大行、七に十願、八に十度、九に理智、十に量智なり。三に十熾燃有りとは、前の習因既に立ち、能く現行を發生して、大用を繁興するが故に名くるなり。初の二は土を嚴り生を攝し、次の二は縁に依りて善を成じ、次の二は慈悲、次の二は行巧、後の二は因果なり。第三に十種の趣有りといふ下の三十句は、悲智究竟行を明す中に、初に十趣とは、到行 到果を名けて趣と爲すなり。初の二は六度と三學、次の二は妙智と眞境、次の二は法に依りて善を成じ、次の二は人に依りて行を起し、後の二は成佛と說法なり。前の八は趣因、後の二は趣果なり。二に十種の事有りて能く佛法を具すとは、此十事現前するに由りて、諸佛の法をして、成滿せざることを無からしむるが故に云ふなり。初の二は人法を信じ、次の二は過失を離れ、次の二は勝境に信入し、次の二は正に住して邪を離れ、後の二は佛を念じ果を信するが故に。此十の中に於て遂に一種と作し、教の如く成就するときは、則ち佛法をして皆悉く具足せしむ、況んや十事を具するをや。三に十種の退失有り、應に遠離すべしとは、既に能く佛法を具足し、便能く修道して縁に在りて退せざるが故に云ふなり。初の四は利他の行を失し、後の六は自利の行を失す、觀じて遠離せしむ。

【下は第三云云】  
以下第三に四地已

下は第三に十種の離生有るといふ。下の九十句は、四地已上七地に至る來の、出世間

上七地までの出世  
間行を明す文を釋

行を明す。中に於て三に分つ、初の三十句は因行の體廣を明し、二に十種の名號從り下の二十は、行用の殊勝を明し、三に十種無量從り下の四十は、行徳の成就を顯す。前の中に初に離生とは、是れ有爲の行を捨つるが故に、離生と名け、又無生を得るが故に離生と名く。又行純熟して生滅等の過患を、離るることを顯すが故に離生と名く。廣く釋するとは一婆婆の中の如し、又大小乘は同じく離生を辨する位は見道に在れども、今此は四地已上の出世間位に寄す。初の二は智慧に約し、次の二は捨著に就き、次の三は惑を離れ生に就く。若し二乘は惑を捨てて生を離れば、有に隨ひて衆生に親近すること能はず、菩薩は此に反す。八に離れて而も離れず、九に離れずして而も離る、十に果を得て因を捨てず。二に十種の決定法有りとは、正しく離生の患を以て、能く法の決定を得。初の五は自分の行にして、一に佛種の中に生じ、二に佛境界に入り、三に解、四に行、五に善を成す。後の五は勝進行にして、一に住果の體、二に得果の用、三に果位に順じ、四に果身に同じ、五に佛住に同す。三に十の佛道を出生し、生ずる有りとは、法に於て既に決するが故に、能く縁に従ひて聖道を出生するが故に云ふなり。中に於て初の二は人に順じて法を信じ、次の二は願善虛からず、次の二は時處廣長なり。次の二は無間に普遍す、後の二は願行をもて生を攝す。第二に十名號有りと云ふ。下の二十句は、行用の殊勝を顯す中に、初の十は正しく實徳内に充つるを以て、嘉名外に響くが故に云ふなり。菩提は是れ所求、薩埵は是れ能求の士にして、所求するに従ひて、菩提薩埵と名くるを以てなり。中

に於て初の四は、所求の菩提の境に約して名と爲す。一に總じて菩提を擧げ、二に小乘に過ぐるに約し、三に因位に過ぐるに約し、四に體は殊勝なるに約す。次の二は自行に約して名と爲す。一に慧は無比、二に上精進なり。次の二は所知の解に約して名と爲す。一に能く上法を衆生に示し、二に能く十方を諸佛に於て知る。後の二は徳に約して名と爲す。一に福高く、二に慧深し。又『瑜伽』の第四十六に云ふが如し、「一切の菩薩は徳に隨ひ、假名に十六種有り。謂ゆる菩提薩埵摩訶薩埵と爲し、乃至十六に名けて法師と爲す」と。『顯揚』の第八、『莊嚴論』の第十二は皆此説に同じ。『莊嚴論』に云はく、「此十六名は皆義に依りて立つ、一切菩薩に總じて此名有り」と。又『商主天子經』に一義有りて名を立つ。二に菩提分に於て、住持して入るが故に、故に菩薩と名く。二に大に入るが故に、故に摩訶薩と名く。三に法を求むべからず、智徳入の故に、故に最勝薩埵と名く。四に煩惱と共に住せず、諸の衆生の爲に煩惱を滅するが故に、精進を發すが故に、故に淨薩埵と名く。五に諸の衆生をして、淨道を行ぜしむるが故に、故に極淨薩埵と名く」と。二に十種の道有りとは、名徳は實に稱ひ、遂に行行虚通するを以ての故に道と云ふなり。中に於て増數に約して、爲て十種を明す。初の一行の本に約す、菩薩の萬行は皆菩提心を本と爲すを以ての故に。二に實慧方便慧に約す。亦是れ正助二行なり。三に三空定に約す、三界に遊出するが故に道と云ふ。四に四行に四障を除くに約す。一に業障、二に嫉妬障、三に諍法障、四に樂世有障にして、亦是れ異果障なり。『智論』に云はく、「行は是れ悔過



【阿毘拔致地】不退  
(Avivarti) 轉と譯す、菩薩一  
大阿僧祇劫の修行  
を経て此位に到達  
す。

等の四行、疾に阿毘拔致地に至る」と。五に五根に約し、六に六通に約し、七に念中に六念の上に於て、念衆生を加ふ、是れ悲心なり。八に正道は知んぬべし。九に次第定とは、並に是れ寂用、變行の故に、是れ菩薩の道の攝なり。中に於て初禪は知んぬべし。二に従喜悦とは、是れ二禪の利益支なり。離退過とは、是れ二禪の覺觀障を離るるなり。三に息喜悦とは、是れ三禪なり。四に離世苦樂とは、是れ第四禪なり。見佛等は定用を明し、並に四無色定及び、滅盡定を九と爲すなり。十に力通の中に欲樂を知る。先に知り後の爲に法を説き身を現する等なり、餘は並に知んぬべし。

第三に十種の無量道有るといふ下の四十句は、行徳成就を明す、中に於て二有り。先に總じて四名を標し、後に各別に顯釋す。初に無量道とは謂はく、是れ菩薩智の所遊の路は、邊際無きが故に。一に事空、二に理性、三に正報、四に依報、五に時劫、六に施設なり。後の四は是れ佛の三業の力用にして淨識を體と爲す。二に道具とは、前の染淨等は實際無きを以て、菩薩の起道の緣も、亦同じく實際なるが故に云ふなり。前の所知の十種の廣大に約して、能知の集起も亦同じく實際にして、更に別法無きことを顯す。三に修道とは、對緣造修の故に修道と名く、是れ見修等の修に非ず。又「攝論」の中に「總じて集修する亦地上に在り」とは此に同じ。初の三は別して三無性に約して修す。一に無相觀の中に、所執の染法の著すべきを見ず、亦淨法の可依として出離を見ず、此に由りて能く三業をして失無からしむ。二は無生觀の中に於て、染分の滅すべく、淨分の増すべきを見

す、無生の理實を以ての故に。三に無性性觀の中に於て、前の二性を有と爲すを見ず、二無を無と爲すを見ず。又眞如の相は有體に非ず無體に非ず。上は正證智に約す。四に後得智に約する中に、別して依他性に就いて以て修行を成じ、唯識如幻等を觀じ、不顛倒の行を成ず。五に三空を作して、三界を離れず、中に在りて善根を長ぜんと欲するが爲の故に。六に教法に於て著せず、七に理の中に於て、恆沙の法不壞なり、八に眞體に於て平等なり、九に起行勇猛なり、十に佛徳に於て平等にして疑はず。四に莊嚴道とは、謂はく、修道行は五に相交飭するが故に名くるなり。又釋すらく、皆逆行を以て用て道を嚴る。中に於て初の五は、自行無染なり。一に亂に在りて常に定なり。次の二は小に處して常に大なり。次の二は欲に在りて禪を行す、次の三は有に隨ひて攝化する行にして、一に樂世を化し、二は邪道を化し、三に犯戒を化して苦を救ふ。九に自行成滿す、中に於て三有り。初に得法滿す。二に爲一切衆生の下は巧便示現す。三に何以故の下は善巧を釋成す。十に因圓果滿す、中に於て三有り。先に因圓得果、二に而亦不斷の下は、果を得て因を捨てざることを明す。三に何以故の下は、行相を釋成すること知んぬべし。

下は第四に十足より下の二百門は、八地已上の報得純熟の行を明す。中に於て五に分つ。初二十句は手足外用の行を明し、二に十腹より下の三十句は、内徳盈滿の行を明し、三に十莊嚴より下の二十句は、外相嚴備の行、四に十頭より下の七十句は、六根業用の行を明し、五に十行より下の六十句は、四威儀動止行を明す。初の中に就いて十足は、行用の進歩

【下は第四云云】  
本大藏經本卷第四  
十一初以下にして  
第四に八地已上の  
報得純熟の行を明  
す文を釋す。

【三聚】 正定聚、  
不定聚、邪定聚。

を其脚足をもて表す。下従りするを初と爲す、是故に先に辨す。中に於て初の二は行に約す、一は戒、一は進なり。次の二は通に約す、一は總、一は別なり。次の二は心に約す。一は信、一は願なり。次の二は定に約す。一は説、一は聽なり。後の二は徳に約す、一は福、一は斷なり。二に十手有りとは、行用の取捨を、其身手をもて表す。中に於て初の四は自行にして、一に取、二に與、三に下を恭ひ、四に上を敬ふ。次の四は利他にして、一に疑網を除き、二に欲泥を抜き、三に四流を濟ひ、四は正法を授く。後の二は二行の滿を明す。一は惑病を除き、二は無明を破す。第二に十腹有りといふ下の三十句は、内徳盈滿を明す中に、初に腹とは、世人の腹に不淨を含容するが如し。今は菩薩の行腹を明し、彼に反して淨を説く。中に於て初の三は戒淨に約す。一に持戒の心、二に正しく戒を護り、三に過を覆さず。次の一は定淨に約す。謂はく、定心は著無きなり。後の六は慧淨に約す。一に惑障を斷じ、二に業障を滅し、三に實法を納む。謂はく、食して滿腹の想の如し。四に緣起を悟り、五に八正を覺り、六に邪見を破す。二に十藏有りとは、前は總じて其腹を擧げ、今は前の腹内の五藏の相を明す、攝藏の義有るに似たるが故に、次に明せり。中に於て初の六は、下衆生を攝し、後の四は上佛果を攝す。前の中に初の三は總じて攝す。一に解を授し、二に行ぜしめ、三に徳を成す。謂はく、僧寶を成するなり。後の三は別して三聚の衆生を攝す。邪定の衆生に善根を生ずることを得しむとは、此は菩薩に約し、外縁の力と爲すなり。『涅槃經』に、「一闍提の人は、善根を斷ずと雖も佛性の力に由るが故

に、未來の善根は還つて生長することを得一とは、彼は内因の力に約するなり。後の四に上攝する中に、一に佛の十力を攝し、二に四無畏を攝し、三に不共法を攝し、四に佛の證智を攝す。三に十心有りとは、前は通じて腹内の諸藏を明し、今は別して心藏を明す、最勝と爲すが故に。五藏の主なるが故に。中實の故に。集起の故に。中に於て初の二は善根を攝す、一に勇、二に勤なり。次の二は惡心を破す、一に惡縁を破し、二に惡因を破す。次の二は行心を成す、一に堅、二に淨なり。上の六は自行なり。次の二は生心を攝す。一に悟らしめ、二に慈救す。謂はく、梵住は是れ慈なり。後の二は徳心を成す、一に深、二に固なり。第三に十莊嚴より下の二十は、外相嚴備の行を明す。初の十は猶し世人の服の身を飾嚴するに同じ。初の二は慈悲の嚴、次の二は願求の嚴、次の三は攝生の嚴、後の三は攝徳の嚴なり。二に十器械有りとは、前は既に束帶して身を嚴り、今は固く器械を執持するは、行はよく障を除くことを顯すが故に。初の五は順杖を以て障を破し、次の三は違杖を以て障を破するは、賊の器械を奪ひて、還りて用て賊を害するが如し。後の二は徳を成じ功を建つるの杖なり。

第四に十頭有りといふ下の七十句は、六根の業用の行を明す、先に頭を明すは身の上なるを以ての故に。中に於て初の二は斷徳深し、次の三は福德高し、次の一は悲徳堅く、次の二は智徳廣く、次の二は攝生の徳、後の一は護法の徳なり。二に十眼有りとは、行徳淨勝にして、縁を照了する故に眼と云ふなり。十眼の義に略して四門を作る。一は釋名、



二は體性、三は諸門にして、上の三は別に説くが如し。四に文を釋する中に、「智論」の中  
 に、「無常の肉眼は大風を畏るるが故に他方を見ず」と。此經は是れ眞常の肉眼にして、十  
 方の色を見るが故に。「無量壽經」に「慧眼は眞を見る」と。又「法眼をもて觀察して諸  
 道を究竟す」といふは此と同じからず、准釋して知んぬべし。此中は皆偃境に従ひて名  
 を立つること知んぬべし。後の五の中に、智眼は事法を分別し、無礙眼は事を見て理を礙  
 げざるなり。普眼は五事平等を見る、餘は並に知んぬべし。三に十耳有りとは、理の如く  
 聽聞するが故に。聞に依りて行を起すが故に。初の二は遠を離れ顯を離る。次の二は小を  
 棄てて大を欣ひ、次の二は苦を愍み樂を離れ、次の二は佛を求め法を究め、後の二は俗を  
 了し眞に至る。四に十種の鼻有りとは、飲嗅行香は鼻に依りて道を増すが故に云ふなり。  
 中に於て初の四は聞香の體にして「雜集論」には唯三種有り。此文に四の會釋有ること知  
 んぬべし。次の三は香を聞くは用を表す。「瑜伽」等の中に、上一界には既に鼻舌の兩識  
 無く、亦香味の二塵無しといへり。此中に悲想等の香を聞くとは、其微細の香等無きに非  
 ざることを明す。菩薩の鼻識は、人天に過ぐるを以ての故に能く了知す。後の三は出世の  
 人法の香を聞く。五に十種の舌有りとは、語業の自在を明し、之に依りて善を増すが故な  
 り。中に於て初の五は、辨説に約して徳を顯し、後の五は順用に約して徳を顯す。六に十  
 身有りとは、身業自在を明し、機に應じて形を現するが故に。中に於て初の三は凡身を現  
 じ、次の五は三乗の身を現じ、後の二は體用の身を現するに一は用、一は體なり。七に十

【第五に云云】以下、第五に十種の行を明す文を釋す

意有りとは、意業の自在を明す。中に於て一は信、二は聞、三は思、四は修、五は止、六は觀、七は總じて調す。八は内思を調し、九は外境を調し、十は佛定を明す。第五に十種の行有りといふ下の六十門は、四威儀動止行を明す中に、初の十行は謂はく、發動遊行なるが故に。初の二は能く聽き能く説く、次の三は自ら調して物を化し、次の一は己が淨慧を成じ、次の二は下化上敬、後の二は果を得て因を存す。二に十種の住有りとは、上恩有るが故に其住を明す。若し小乘は四念等に住すべきも、今は菩薩の住を明す。此十行の初の一は行の本に住し、二に行の相に住し、三に正慧に住し、四に定處に住し、五に疲處に住す。次の二は人法に順じ、次の二は智慧と忍と圓なり。後の一は果滿に住す。三に十種の坐有りとは、住は或は疲るること有るが故に安坐を明す、菩薩は此に處して、行を成じて生を攝するが故なり。初の四は世坐に同じて、以て物を攝し、後の六は法坐を以て徳を感ず。一に辯、二に持、三に定、四に慈、五に悲、六に力なり。四に十種臥有りとは、坐臥は憩息歸靜に順ずるが故に云ふなり。初の二は定の加行なり。一に誼を息め、二に定に趣く。次の一は定を得、後の七は定の果なり。一に慈を起し、二に悔を離る、次の二は慧悟、次の一は願の如し、後の二は滿を成ず。又律の中に仰伏左脇等の臥を得ず、唯右脇を以て明相と思ふ等の如し。今此菩薩は法に就いて、以て用を攝して體に歸するを明すが故に、臥と爲すなり。五に十種の住有りとは、智の極止すること有ることを明す故に、住と云ふなり。前は能住を明し、此は所住を辨す。又前は身住を明し、此は心住を明す。是故

に前は四儀に屬し、此は心行に約するなり。中に於て初の四は四等に住し、次の一は六度に住し、次の三は三空に住し、後の二は行位滿す。六に十種の行有りとは、遠師釋すらく、  
「前は利他の行を明し、此は自利の行を明す。又正しく云へば、前は始終の方便を明すが故に、樂聞等を以て行と爲し、今此は淳熟修を明すが故に、正念等を以て行と爲すこと。又遠摩の云はく、「前は是れ四威儀の中に行住の行、此は始終起行の行を説く」と。今謂はく、亦是れ前は身儀に約し、此は心行に約す。『若し爾らば何が故に前の十も亦心起行有りや。』釋すらく、「此經は菩薩身等の外事は、並に内行に就いて以て其相を顯す、例せば皆是の如きが故に疑はざるなり。』中に於て初の四は自行にして、一に加行、二に法の理趣を覺り、三に後智は佛に順じ、四に六度の行を起す。次の四は攝生の行にして、一に總じて擧ぐ、二に同事、三に愛語、四に利益なり。謂はく、貪等を示同して、彼を覺悟するなり。後の二は二行成滿す。上來總じて五百二十句をもて、上の第五大段の十地位の中の相を明し竟んぬ。

【二四】以下、大門第六に上の因圓果滿の行に答ふる文を釋す。初に因圓究竟の行の文の釋なり。

（二四）自下大門第六に、十種觀察より下の五百一十句は、上の第六の因圓果滿の行を答ふ。中に於て二に分つ。初の三百二十句は、因圓究竟の行を明す、亦是れ等覺の位と相似す。二に十種の住兜率天より下の二百九十は、現果圓滿の行を明す、亦是れ妙覺の位と相似す。前の中に就いて三に分つ。初に一百四十門有り、因行の體性を明し、二に十種の義從り下の八十門は、方便造修行を明し、三に十種の魔從り下の二百門は、因行の障を除くことを

明す。前の中に就いて二有り。初の四十は起行の方便を明し、二に十種の施より下は、十  
 度の行體を明す。前の中に就いて、初の二十は意業觀察を明し、次の十は身業奮迅す、後  
 の十は語業哮吼す。前の中に初の十種觀察とは、觀解の方便なるが故に、善く所行の通塞  
 の相に達するが故に。中に於て初の三は所化を觀す。一に業を知り、二報を知り、三に根  
 を知る。謂はく、能く理性の無根に迷はずして、而も能く事に隨ひて根の別を觀す。次の  
 六は法寶を觀す、一に理法、二に果法、三に教法、四に行法、五六は位法を觀するに、一  
 に障を滅し、二に得記す。後の一は定法は亦是れ所成の果川なり。二に十種の周遍觀察有  
 りとは、謂はく、審察窮盡する故に。解は能く行を起すが故に。又釋すらく、亦前は是れ  
 審慮し瞻度することを得、此は因を擧げて周察することを明すが故なり。初の六は衆生を  
 して、六度の行を得しむるが故に。後は他をして四丈夫の法を得しむ。一に友に近き、二  
 に法を聞き、三に思惟す、謂はく、悲を捨てざるなり。四に修行す、菩提を得しむるが故  
 に。又釋すらく、後の四は是れ自利にして、一に人を重んじ、二に法に順じ、三に悲、四  
 に智なり。三に十種の奮迅有りとは、謂はく、實行内に充ち威徳外に溢る。又功を建てて  
 は極を立て、威肅勇健なるが故に奮迅と名く。初の一は身勝る、二に心大なり、三に教威  
 有り、四に行用有り、五に邪を破し、六に惑を滅す、七に法に達し、八は廣持す、九に辯  
 を具す、十に圓果なり。四に十種の師子吼有りと、既に勇健無畏なるときは、則ち能く  
 決定して、宣唱するが故に名くるなり。『涅槃經』に依れば、師子吼に十一の事有り。具



には彼に説くが如し。此中に一に覺心吼、二に大悲吼、三に報恩吼、四に大誓吼、五に淨戒吼、六に徳を積んで厭ふこと無し、七に智を積んで足ること無し、八に理を證して決然たり、後の二は果成じて決定す。此は皆先に所成の決定を顯し、後に能成の行を結するのと知んぬべし。

第二に十種の淨施有りといふ下の一百門は、十度の行を明す。初の十施とは、已を輕めて人を惠むが故に。一に捨心施、二に滿願、三に一心、四に了因、五に無高、六に著せず、七に身財を捨て、八に大果を求め、九に衆生を益し、十に三輪を淨む。二に十種の戒有りとは、三業の止作を具するに非ざるを防ぐが故に。中に於て初の七は、自分の中に、初の三は律儀戒、次の三は攝善戒なり。一に凡に過ぎ、二に小に背き、三に大に順す。次の一は攝業生戒なり、謝はく、巧に禁を犯すを抜くが故に、微密と音く。後の三は勝進に約するに、亦三聚有るを知るべし。三に十種の忍有りとは、情法に安んずるが故に。初の三は耐怨害忍、他は三業の所觸を忍ぶが故に。次の五は安受苦忍、一に他を害せず、二に命を惜まず、三に小を輕んぜず、四に制戒を受く、五に苦患を忍ぶ。後の二は法思惟忍、一に惑を離れ、二に法を得。四に十精進有りとは、理に順じて勤業するが故に。初の五は三業の精進を明すに、身語は初なり、意は三心なり。亦凡れ勤勇精進なり。六に無足精進、七に離垢精進、八に成事精進、九に入身進、十に大用進なり。五に十種有りとは、心を攝して散せざるが故に。初の四は方便なり、一に信を出で、二に友に近き、三に靜に在

【現法樂住】禪定七名中の一。禪定は一切の妄想を離れて、法味の樂を受けて、而も安住して動かざるが故にいふ。

り、四に闇を離る。次の二は正定なり、一に初得、二に堅成なり。次の二は發慧なり、一に智を起し、二に惑を斷ず。上の八は是れ現法樂住禪なり。九に衆生を利益する禪、十に神通等を引き起する禪なり。六に十慧有りとは、正解をもて理を照すが故に。初の三に法慧を解る。一に因を解りて果に即せず、二に縁を解りて果を離れず、三に果を解りて斷常ならず。次の四は攝生の慧にして、一に邪を抜き、二に器を知り、三に法を授け、四に魔を降す。後の三は證理の慧にして、一法身を見、二に勝徳を攝し、三に平等を覺る。又釋すらく、初の三は加行、次の四は後得、後の三は正體なること知んぬべし。七に十慈有りとは、興樂の意の故に、一に怨親を離れ、二に實益を得しめ、但口に言ふのみに非ず。謂はく、苦因を離れしむるなり。三に苦果を救ひ、四に樂因を授け、五に斷果を得しめ、六に智果を求めしめ、七に身より慈光を放ち、八に心廣くして空の如し。上の八は衆生を縁する慈なり。九に法緣、十に無緣なること並に知んぬべし。『佛地論』中の法緣慈緣は、五蘊の假法にして、此と同じからず。八に十悲有りとは、拔苦の意なるが故に。中に於て初は總じて顯し、餘の九は別して辨ず。別の中に初の六は物に對して悲を起し、後の三は其所益を授く。一に其客妄を惑むが故に滅と爲し、二に其眞の隱るるを傷むが故に爲に顯し、三に彼が知らざるを念するが故に悟らしむ。九に十喜有りとは、物を慶し益を獲しむ。中に於て一に自發心を慶し、二に所有を捨つるを慶し、三に毀戒を救ふを慶し、四に諍訟を和するを慶し、五に正法を護るを慶し、六に正法を樂ふを慶し、七に物の行を同じうす

【第二に云云】以下、造修方便の行を明す文を釋す。

るを慶し、八に自ら佛に供するを慶し、九に他の定を得るを慶し、十に他の智滿するを慶す。十に十捨有りとは、情に取著無きが故に。一に貪瞋を捨て、二に世法を捨つ。謂はく、八法の中に利衰は身に依り、稱譏毀譽は口に依り、苦樂は意に依る。又利と及び稱譽とは是れ生樂の因、衰と及び譏毀とは是れ生苦の因にして、因果通じて説くを以ての故に八有り。三に非器を捨つ、謂はく、法器の衆生に於て、時を知りて法を授け、非法器に於て捨てて而も嫌はず。四に二乗を捨て、五に惑染を捨て、六に背有を捨て、七に異語を捨て、八に非時を捨つ、謂はく、根未だ熟せざれば時を待ちて且く捨つ。九に非縁を捨つ、謂はく、衆生は應に佛化を受くべき有り、是れ菩薩の所化に非ざれば亦強ひて化せず、是故に之を捨つ。十は異見を捨つ。上來は因行の體性を明し竟んぬ。

第二に十種の義有る下の八十門は、造修方便行を明す。中に於て初の四十は自分行を明し、二に十種明足より下の四十は、勝進行を顯す。前の中に初に十義とは、所詮の旨の故に。義に依りて行を成ずるが故に明せり。一は教旨を知り、二に俗諦を解る。餘の八は眞諦を解る。一に離相、二に離染、三に言を絶し、四に平等、五に一味、六に證得なり。謂はく、正智をもて理を證し、如に順じて來るが故に如來と名く。七に盡、八に滅なること並に知んぬべし。二に十法有りとは、自性執持するが故に、法を以て行を成ずるなり。初の一は實行の法、次の四は離障の法、次の三は離相の法、後の二は果法なり。三に十功德の具有りとは、福を成ずる縁なるが故に具と云ふなり。一に謂はく、三寶を斷せず、是

功德の法は何に由りてが成ずる。此れ衆生を勸めて菩提心を發すに由る。是故に此勸を功  
 徳の緣具と名くるなり。餘の句は例して然なり。二に巧に麴向し、三に正慧をもて他に教  
 へ、四に悲心倦まず、五に能く身財を捨つ、六に相好を勤修し、七に小善を輕んぜず、八  
 に小人を蔑にせず、九に大人を敬養し、十に捨心廣大なり。四に十種の智具有りとは、  
 成智の因緣なるが故に具と云ふなり。中に於て一は勝れたる人に近き、能く智を得るが故  
 に具と名くるなり。下は並に之に准すべし。二に内に心を調し、三に念慧に住し、十智顯  
 るること無盡なること、前に説くが如し。四に眞法を樂ふの樂、五に六度四等をもて自ら  
 折伏するが故に。六に出家して心を守り、欲患癡を三覺と爲す。七に法の空淨を觀す、因  
 陀羅の陣の如し」とは、是れ帝釋と修羅と戰ふの時、兵を列ねて空に在るに、影は大海に  
 現するが故なり。八に深く二空を解り、九に無相の彼岸に到り、十に因は漸く智を得。謂  
 はく、五重漸次に相資けて得るなり。自分の行は竟んぬ。第二に十種の明足有りといふ下  
 の四十は、勝進行を明す。中に初に十明足とは、委く解るを明と曰ひ、周備するを足と  
 稱す。又惑闇盡くるが故に、智用滿つるが故なり。初の七は解行に約し、後の三は別して三  
 明を顯すこと知んぬべし。二に十種の求法有りとは、正法を求むるに依りて、以て勝行  
 を成ず。初の五は深心をもて法を求む。謂はく、自ら實心有りて勤求すること能はず、自  
 ら勤求する有りて命を捨つること能はず、能く命を捨つる有りて、他の爲に捨つること能  
 はず、菩薩は爾らざるが故に皆能く捨つ。後の五は廣心をもて法を求む。初の二に智深く



【八十八結】見道所斷の煩惱。

【九に云云】斯陀舍果に人欲界九地の修惑の中、前後の三品を斷じて、尙後の三品を残して、爲に人天に一度受生す新譯家に一來果といふこれなり。

【七に第三果云云】阿那含果（新譯に不還果）欲惑後三品の殘餘を斷じて再び欲界に來らず

【第三に十種云云】以下、離障の行の文を釋す。

して法住せんが爲に、次の二は法を授け疑を斷ぜんが爲に、後の一は正法を満足せんが爲なり。三に十種の明了の法有りとは、既に法を求得し、委く解り照達するが故に云ふなり。中に於て普賢の法を以て、三乗と凡聖の差別の法を了知す。初の二は外凡の法に約し、二は内凡の始を信行と名け、三に内凡の終を法行と名け、四に住聖の初を八人と名く。有人釋すらく、八忍に約して八人と爲すと。又釋すらく、「大般若」の中に第八人と名く。謂はく、阿羅漢の却劫より數へて、須陀洹向に至るを、第八と爲すなりと。五に正しく初果を得て、業結を滅すとは、八十八結見所斷の惑を滅し、惡道生死の流を斷ず。六に品は第二果を得、欲味は是れ患なりと觀すれども、三品の惑を餘して未だ盡さざるが故に。一の受生を潤すが故に、還來受生と云ふ。七に第三果を得、三果は唯欲界を捨つ、此れ實法に約すれば、通じて三界を離る。七に羅漢、九に緣覺、十に菩薩なり。四に十種の向法有りとは、普賢法界に順向するが故に。一に若し善友に違はば、即ち法門に背く、是故に此に反するを、名けて向法と爲す。餘は皆此に准すべし。二に諸天を覺悟し、樂に著せしめざるを向法と名くるなり。三に常に慚愧を懷き、恆に法門に向ふ。四に二乘に背くを向法と名く、五に實心をもて事を爲す、六に小を捨て、七に邪を捨て、八に染因縁に背き、九に根に稱うて法を説き、十に内法界に住す。上來造修の行竟んぬ。

【第三に十種の魔有りといふ下の「百門」は、離障行を明すに二分つ。初の五十は離障成行を明し、後の五十は離障加持を明す。前の中に初の二十は、所離の障體を明し、次

の十は離障方便を明し、後の二十は見佛成行を顯す。前の中に初の十魔とは、道に於て障有り。初の十は無取五蘊を簡去するが故に、貪著と云ふなり。彼は魔に非ざるを故ての故に。二に不染無知等を簡ふが故に染と云ふなり。所知障等は是れ魔に非ざるを以ての故に。三に善業を簡ふが故に障礙と云ふ。四に是れ第六識心の慢にして是れ餘の識に非ず。五に蘊の壞するを死と名くる故に、捨離愛生と云ふ。六に他化天の魔は陵妬なるが故に。七に罪を作りて悔いざれば、善をして皆失はしむ。又善根の心を退失して、悔を生ぜざるが故に、名けて魔と爲す。八に味定道を廢す、九に曲情は相附く、人に依りて法に依らざる等の如し。十に所求に迷うて大願を起さず、此十種の魔は皆持業障なり、謂はく、蘊即魔なるが故に、乃至不知即魔なり。問ふ、「此十魔は四魔の攝なるや不や。」答ふ、「或は攝なり、謂はく、陰と天と死とは各各一なり、餘は皆煩惱に收む。或は攝せず、彼四と六とは各各是れ一門なるが故に。以て無盡を顯すが故に。彼は別門に據り、此は普に約するが故に。」二に十種の魔業有りとは、前は魔の體に據り、今は所因を辨するが故に云ふなり。又此十業は天魔を招感す、一に既に覺心所修の善根を忘れて、唯人天を感ず、豈魔業に非ずや。此は是れ邪善根なるが故に。二に世報を求むるを惡施と名く、「業報差別經」に、「若し布施を行ふこと有れども、急性にして瞋怒多ければ、死して大力の龍と作る」と。三は惡人を厭捨す、大悲を棄つるが故に。四に内に四門有り。一に法を慳み、二に法器を呵して學を退せしむ、三は利を求めて説き、四に非器に深を説き、五に聞の如く行せず。

六に小乗を樂ひ、七に心に礙りて口に説き、身に惡眼を以て視る。八に法を謗り、人を輕んじ、九に文詞世論、十に危きを捨て安きに就き、十一に法を慢りて散動す。一を剩すは是れ増數の十なり。三に十種の魔業を捨離する有りとは、障に對して修治するが故に、捨離と云ふ。一に他力捨、二に自力捨、三に誠信力、四に本を憶する力、五に放逸を離れ、六に本法を求め、七に深法を樂ひ、八に佛に歸し、九に佛を念す。菩提樹とは、菩提を以て廻向するに、要す此樹に於て菩提を成ずるが故に。十に善根同性にして又同一果なり。四に十の見佛有りとは、行障既に離る、佛境界に現するが故に、見佛と云ふ。十の中に各各名を標し義を釋す。初に一に安住世間とは、涅槃を示して著すること無きなり。成正覺とは、世間を示して著すること無きが故に、無著佛と名く。又淨すらく、無著は是れ不滯の義なり、謂はく、體寂に滯らず、世間に現じて成正覺を示す。此は是れ總の句、下の九は別して顯す。一に願力に由りて出現するが故に。上に云はく、「佛願力の故に皆悉く見る」と。二に往の善業を示して此妙果を得、他をして業の虚からざるを知りて信ぜしむ。又釋すらく、勝れたる福業を以て、此相好の身を感じ、物をして信を生ぜしむるが故に。三に淨識の體は善根を住持して、成正覺に順す、又淨土等を持す。四に世間に現すと雖も、常に涅槃に住するが故に。前は則ち持して順起せしめ、此は即ち永く度して滅を成ずること無礙なるが故なり。問ふ、「此れ豈總句を成ぜんや。」釋すらく、「若し爾らずんば、何んが正覺を成ぜん。」五に即ち是れ理法界なるが故に、一切の有爲の行處に遍

し。又此現覺の身は、即ち一切處に過きが故に、法界佛と名く。結通の處の佛の如し。如上は即ち佛身諸の法界に充滿するなり。六に佛は普く機感の心中に過きと雖も、方に乃し安住する心は、即ち是れ佛なり。上に「應に化を受くるの器」と云ふは、悉く充滿するなり。又是れ淨心緣起集成の故に安住と云ふ。七に心中に現すと雖も常に深定に在り、多處に於て皆者無きを以ての故に。八に體性は不變なるが故に決定と云ふ。此は在釋等に通す、此等に由りて乃ち正覺を成ず、爾らずんば則ち非なり。九に能化の意の如く、普く群機を覆ふが故に。又所化の意の如く、皆普く覆ふが故に。又末尼珠の如く普く塵機を覆ひ、思念無きが故に。又釋すらく、如意は是れ自在の大用なるが故に。此中の十佛六相總別等は之に准すべし。

又此十佛を攝して五對と爲す。初の二は能所の一對なり、謂はく、初は是れ所出、後は是れ能出なり。次の二は依正の一對なり、謂はく、初は是れ正報、後の持は是れ依報なり。次の二は常遍の一對なり、謂はく、涅槃は常恆にして法界に普遍す。次の二は現住の一對なり、謂はく、心中に應現して、定に住して著する無し。後の二は體用の一對なり、初は體性不動、後の用は法界に充つ、餘門は別に説くが如し。又「法集經」に云はく、「菩薩は十種の法に入り、能く諸佛を知る。何等をか十と爲す。謂ゆる習氣佛、果報佛、三昧佛、願佛、心佛、實佛、同佛、化佛、供養佛、形像佛なり、乃至廣説す。五に十種の佛業有りとは、前は所見の佛體を明し、今は得佛の因を辨す。又此は起行して佛に順するが故



【第二に云云】以下、離障加持行を明す文の釋なり。

に佛業と名く。各各標と釋と有り、初の二は總じて生を勸化す。次の二は自利の行を顯し、次の二は別して生を化するに約す。一に悔滅の心を化し、二に凡小の心を化す。次の二は惡時に於て護法する行なり、一は正法難の時、二は魔事起る時なり。八に小果を取らず、九に木蘭を斷ぜず、十に無礙の行を成ず。中に於て七句有り。一に道を求むれども離を礙げず。二に於如来の下は、染無くして求むるを礙げず。三に令一切の下は、利を礙りて空を礙げず。四に教化の下は、生を化して無を礙げず。五に諸通の下は、果を具して因を捨てず。六に示現の下は、圓を成せども分を捨てず。七に現大の下は、寂を現すれども生を礙げず。上の五十句は、離障成行を明し竟んぬ。

第二に十種の慢業有りといふ下の五十は、離障加持行を明す。中に於て初の二十は内に離障の行を成じ、後の三十は外に加持の行を成ず。前の中に初の十は障を擧げ、後の十は治を現す。前の中に慢業とは、我を執して自ら高ぶり、他を陵ぐを業と爲す。初の一は人を輕んじ、次の二は法を慢る。四に自ら擧げ、五に他を妬み、六に法を謗り、七に自ら恃み、八に師の過を求め、九に問ふこと能はず、十に慢の、道を障ふるを明す。二に十智業有りとは、對治行を顯すなり。謂はく、既に障惑を識りて增長せしめず、情を制して理に従ひ法行を敬重するが故に、智業と名く。初の二は法を信じ佛を念じ、次の二は人に近き法を樂み、次の二は他を敬ひ自ら淨くす。次の二は理に順じて行を重んじ、後の二は徳を成じて惑を滅す。並に此れ智の作用なるが故に名くるなり。第二に十障に持せらるる有

【二五】以下、第二に果用圓滿の行を明す文を釋す。

りとは、下の三十は外（まへ）の加持行（かぢぎやう）を辨（わ）す。初（はつ）の十は怨障（おんしやう）加持（かぢ）を明（あ）す、即（すなは）ち所離（しより）の障（しやう）なり。後（のち）の二十は佛法（ぶつぽう）加持（かぢ）を明（あ）す、即（すなは）ち能治（のうぢ）の行（ぎやう）なり。前（まへ）の中に内行（ないぎやう）理（り）に乖（あ）くに由（よ）りて、外（まへ）魔（ま）便（べん）を得（え）るが故（ゆゑ）に、攝持（しやくぢ）と名（な）く。又（また）行（ぎやう）に乖（あ）けば、即（すなは）ち是（こ）れ魔（ま）の攝（しやく）なり。初（はつ）の二十は意心（いしん）有（あ）りて法（ぽう）を捨（す）て、次（つぎ）の二十は貪（こん）を起（おこ）して自度（じど）す。次（つぎ）の二十は願（がん）を捨（す）てて斷（た）を起（おこ）し、次（つぎ）の二十は小（せう）を成（じやう）じて大（だい）を捨（す）て、後（のち）の二十は悲（ひ）を捨（す）て法（ぽう）を誘（さう）る。二（に）に十佛（じふぶつ）攝持（しやくぢ）有（あ）りとは、既（すで）に魔（ま）の攝（しやく）を離（はな）るれば、即（すなは）ち佛（ぶつ）加持（かぢ）して邪（じや）を遠（とほ）ざけ正（しやう）に入れしむるの理（り）宜（い）きが故（ゆゑ）なり。初（はつ）の二十は心（しん）の攝（しやく）に約（やく）し、次（つぎ）の二十は起行（おこぎやう）の攝（しやく）に約（やく）し、次（つぎ）の二十は悲智（ひち）の攝（しやく）に約（やく）す、一（いち）は悲（ひ）、二（に）は智（ち）なり。次（つぎ）の一（いち）は巧（かう）慧（ゑ）に約（やく）す、一（いち）に巧（かう）、二（に）に慧（ゑ）なり。後（のち）の二十は智斷（ちだん）に約（やく）す、一（いち）に斷（だん）、二（に）に智（ち）なり。並（な）に此（こゝ）れ佛力（ぶつりき）攝（しやく）持（ぢ）して、此等（こゝろ）の行（ぎやう）を成（じやう）ぜしむるなり。三（さん）に十種（じゆしゆ）の法（ぽう）攝持（しやくぢ）有（あ）りとは、已（おのれ）を捨（す）てて法（ぽう）に従（したが）ふが故（ゆゑ）に、攝持（しやくぢ）と爲（な）す。初（はつ）の四（し）は即（すなは）ち四法印（しほういん）の法（ぽう）、次（つぎ）の二十は十二緣生（じふにゑんじやう）の法（ぽう）、次（つぎ）の二十は即（すなは）ち三乘（さんじやう）の法（ぽう）、後（のち）の二十は即（すなは）ち淨法（じやうぽう）にして一（いち）に性淨（じやうじやう）、二（に）に斷淨（だんじやう）なり。並（な）に法力（ぽうりき）に由（よ）りて、此等（こゝろ）の行（ぎやう）を成（じやう）ずるが故（ゆゑ）に、攝持（しやくぢ）と名（な）く。上來（じやうらい）は總（そう）じて三百二十門（さんびやくにじゆもん）の内（うち）、因圓究竟（いんゑんきゆうけい）し説（わ）る。

第二（だいに）に兜率（たうそつ）に住（ぢゆう）して十事（じふじ）有（あ）りといふ下（しも）の一百九十門（ひやくくじゆもん）は、果用圓滿（くわうぎやうまんまん）の行（ぎやう）を明（あ）す。此等（こゝろ）の多（おほ）くは八相現化（はつさうげんげ）に約（やく）して、佛用（ぶつぎやう）を明（あ）すは、此（こゝ）れ亦（また）普賢（ふげん）等の用（ぎやう）に通（つう）ずるを以（も）て、淨土（じやうど）の實報（じつぱう）の處（ところ）に向（むか）ひて説（わ）かざるなり。又（また）釋（しやく）すらく、此（こゝ）れ唯（ただ）此菩薩（こゝのぼつさつ）の作用（じやくぎやう）なるが故（ゆゑ）に、唯（ただ）八相成佛（はつさうじやうぶつ）を示（し）し、餘（あま）の實成（じつじやう）に非（あら）ずと。又（また）釋（しやく）すらく、彼（かれ）は實（じつ）の成佛（じやうぶつ）にして、成（じやう）不成（ふじやう）無（な）く不可説（ふか）なるが故（ゆゑ）に、八相（はつさう）に就（しゆ）いて説（わ）くなり。中（なか）に於（お）て六（む）に分（わ）つ。初（はつ）の二十は天（てん）に在（あ）るの行（ぎやう）、二（に）に十種降神（じゆしゆかうじん）

より下の二十は、入胎住胎の行を明し、三に十種生より下は、出胎の行を明し、四に十種大莊嚴より下の四十は、在家俗同俗の行を明し、五に十種の出家有りといふ下の六十は、出家期道の行を辨じ、六に十種の覺如來力有りといふ下の四十は、成佛果徳の行を明す。初の中に前の十は在天の行、後の十は現終の行なり。前の中に、一生の菩薩は彼天に在るの時、何等の事を作すや。謂はく、此の如く十種の事業を作す。一に謂はく、彼に於て欲界の天を化し、二に色天を化し、三に三千界の生を化し、四に十方の同類の爲に、下生の法を説く。五に彼十方同處の法化を授け、六に説法して降魔す、七に眷屬の樂聲、欲の諸天を化す。八に諸佛聞法す、九に多佛を供養し、十に多身は生を益す。二に命終するのとき十事を示すとは、所作既に了り將に下生せんと欲するに、鼓十明を現す。大乗方便經の下の卷の中に、菩薩は其本願の如く、兜率天宮に處して、能く阿耨菩提を得。法輪を轉ずること能はずと爲すに非ず。菩薩思惟すらく、「閻浮提に下りて、法を聽受す」と。是故に菩薩を聽受すること能はず、兜率天の人は能く閻浮提到りて、法を聽受す」と。是故に菩薩は兜率天を捨てて閻浮に於て成佛す。一に輪光は苦を滅し、彼を覺らしめ知らしむ。二に毫光は宿世の有縁を覺す。三に手光は界を覆り、併せて非器を除く。四に膝光は天を覺らしめ、供を辨じて隨侍せしむ。五に心光は力士を覺らしめ、六に毛光は助化を覺らしむ。七に堂光照す處、眷屬も同じく生ず。八に樓光は母胎の内を照し闇を現す。九に足光は壽を延ぶ、十に小相の中の光は八相を應現す。餘は百萬等を結すること知んぬべし。第

二に十事有りて神を降すと云ふ下の二十は、初の十は入胎を明し、後の十は住胎を明す。前の中に、何が故に胎に入る。「十の事の爲の故に。一に小根を化し、二に眷屬を攝し、三は念亂れず、四に奇を現じ廣く益し、五に物の本願に稱ふ。謂はく、彼は應に胎中に在りて化すべきが故に。六に人類に同ずるが故に。七は機見るべきが故に、八に同類供に集る。九に定力は奇を現す、十に佛を供して法を聞く。問ふ、「此上の文に據るに、兜率に命終せば即ち入胎する等と。何が故に梁の『攝論』に、「化身は二十年、中陰の中に在り」と明すや。」答ふ、「眞諦三藏の『金光明』の疏の中に釋して云はく、「小乘の別部師有りて云はく、父母の愛生し竟るを待つと聽すが故に、二十年中陰に有り」と。今釋すらく、並に是れ機感に形を現じ、所見各別なるが故なり。二に十の微細趣行りとは、胎中の廣攝を明すに、幽密にして知り難きが故に、微細と名く。初の一は本因を現するの行、次の八は八相を現じ、後の一は神力を現するは、並に胎内に在りて同時に齊現す。第三に十生有りとは、右脇より出づるの時此十種有り。一に内に癡闇を離れ、二に外に大光を放ち、三に未來に更に此最後邊無し、四に理に稱うて生じ、五に如幻は生に似たり、六に頓に十方に現じ、七は内智具す。八は外の光用、九は定慧滿じ、十は震動の益なり。

【第四云云】以下  
在家の行を明す文  
を釋す。

第四に十大莊嚴有りといふ下の四十は、在家の行を明す。初の十は初生來行の前を明すは、大誓をもて自ら嚴るが故なり。一に欲泥より抜き、二に慧眼を開き、三に勝身を得ん、四に憍慢を擯き、五に退屈するを接し、六に大益有らしめ、七に佛力を見せしめ、八に同



【第五に云云】以下、捨家期道の行を明す文を釋す。

行を覺らしめ、九に疲頓を救ひ、十に光觸を蒙らしむ。皆大志を奮起して用以て自ら嚴るなり。二に十事有り、「行くこと七歩」とは創めて起ちて遊行して、自在の貌を顯す。初のいは俱生の力有ることを示すが故に。二に若し家に在らば、輪王の七寶、出家しては七聖の財寶有り。三に他の本願を滿じ、四に自ら超過することを現じ、五に大人の行相を現じ、六に地を履みて金を現じ、七に他に加して力を興へ、八に數相の表に同じ、九に自悟を示現し、十に己最尊と稱す。後身の菩薩は衆生を化せんが爲に、世の七數に同するが故に増減せず。三に十事有りて、童子地を現すと、幼稚無染にして、攝生を現じ學する故なり。初の三は世務に符同し、次の二は常に過失無く、次の三は色力をもて生を救ひ、後の二は佛を供して法を受く。四に十事有りて中宮に處するを現すと、采女圍遶すれども行無染なるを顯す。一に同行の人は、采女の中に在るを以ての故に。下の文の賢慧女等の如し。二は二乗の捨欲の善に同せざるを以ての故に、菩薩の善を明さんと欲すと云ふなり、文殊の、龍女の宮に在りて、夏に生ずる等の如し。三に彼に處して能く捨てて、樂に著するを化するを以てなり。四に濁世に願同し、五に欲に在りて禪を行ずる等なり。六としとは本より期するに應ず。謂はく、化を受くること此に在るが故に。八に世業を以て佛に供す。九は定力の自在を現す。十に法を守護せんが爲なり。上來は在家の行竟ぬ。

第五に十事有りて出家するの下の六十門は、捨家期道の行を明す。中に於て初に出家を明す内に、初の二は染を厭捨せしめ、次の二は勝を顯して欣ばしめ、次の二は其をして惑

を捨てしめ、次の二は挺出自在の徳を現じ、後の二は果に順じて因に同ず。二に十事有りて苦行を現すと、異道に同ずることを示して、諸の邪見を推くことを明す。初の二は小乗の機の衆生有り。謂はく、菩薩は玉宮に生在して、未だ苦行練誦を經ず、何んぞ能く道を得ん、故に示して彼を化するなり。二に外道の邪見は、自餓を以て道と爲すをもて、菩薩は餓を示すこと六年にして、而も道を得ず、乳糜を食して後に方に菩提を覺れり、是故に被邪見を破す。三に業報無しとする邪見の者を化す。大乘方便經の第二卷の中の如し。佛は往昔迦葉佛の時に於て、外道五人を化して、無生忍を得しめんが爲の故に、須らく五人の爲に、迦葉佛を罵りて、禿頭の道人と言ふ。何んが禿人有りて、能く菩提を得ん」と。實には般若に空を觀するを以て、此語を發し此業を示現するも、報を得ることを失はず、苦行すること六年にして、餘の衆生をして信知せしむ。一生の菩薩方便の業も、猶此報有り、況んや我等をやと。乃至廣説す。四に五濁に順ずとは、謂はく、五濁の衆生は皆重罪有りて、憂惱心を覆ひて解脱するを得ず。彼憂を除かんが爲に此業報を示し、彼をして念じて言はしむ。菩薩、佛を謗らば尙解脱するを得ず、況んや我等をや、即ち當に悔除すべし」と。亦彼經に説くが如し。五に懈怠を策つ、六に法を求めしめ、七に我樂を離れしむ。八に殊勝を顯すは、此苦行を示す、此れ正に非ざるが故に、對して菩薩の勝行を顯すなり。九に未來を策つ、十に根の熟するを待つ。三に十事有りて道場に詣づとは、邪を捨てて正に趣くことを明す。亦是れ因滿じ果に趣くなり。中に於て初の二は處

【金剛喻定】是れ三乘の行心最後心の禪定、此に最極の微細の煩惱を斷盡して各極果を得。金剛定、金剛三昧、金剛心といふ又同じ。

【草座】如來成道の時、吉祥草をうけて金剛座に敷けるもの。今は導師の敷く坐具をいふ。

を現じ、次の二は身を現じ、次の二は處を嚴り、次の二は佛を見て定に入り、後の二は供を受けて佛を觀る。並に道場に趣向する行路の時に於て、此十事有り。四に十事有りて道場に坐すとは、此に處して道を受くるが故に。初の四は處に約して相を現じ、次の三は三業に約して相を現じ、後の三は徳の相を成す。一に金剛喻定を滿じ、二は古佛の所座を受く、餘の經には吉安の草座を受くと、三に所應化の生に約す。五に十種の奇特有りとは、大果に將に臨まんとして、奇相先に現するが故に名くるなり。初の二は佛加讚し、次の二は人と物と歸向し、次の二は總持得定し、次の二は通と慧とを具す。亦是上は諸佛に供し、下は化器を識る。後の二は身業の體用を明すに、一に體、二に用なり。六に十種の降魔有りとは、假に魔怨に對して、勝幢の獨絶なるを顯すが故に云ふなり。『方便經』の下卷に依るに、「若し佛力召し來るに非ずんば、彼等の惡魔は佛に近くことを得ること莫し。欲界の中において此を最も尊勝と爲す、尊勝若し降らば、餘は皆隨ひて伏すべし。波旬の四兵は、三十六由旬に滿ちて菩提樹を圍み、留難を作さんと欲するるとき、菩薩は慈悲智慧に住して、手を以て地を拍つに一切散壞し、八萬四千の八部の大衆は、阿耨菩提心を發す」と。廣くは彼に説くが如し。此は是れ魔の眷屬を化すなり。諸天は本魔王の自在を見て、將に佛に勝ると謂へり、彼疑を決せんが爲の故に降すと云ふなり。四に魔道を征し降すを樂ふ、五に己が徳力を顯し、六に他の信力を起し、七と八とは未來の軌則を爲る。謂はく、修行するの時未だ魔障あるを免れず、宜く放逸なるべからず。九に惑は劣り、徳は勝るる

【第六に云々】以下、成佛轉化の行を明す文を釋す。

を顯すが故に。十に惡世の法に順するが故に。

第六に十種の覺如來力有り。下の四十門は成佛轉化を明す。中に於て初の十は成佛、次の二十は轉法輪、後の十は入涅槃なり。初の中に就いて覺如來力とは、前の降魔は無間道斷に當り、此は解脫道證果に當るなり。初の中に魔は是れ惡緣、煩惱は是れ惡因なり、此二は是れ所離の障なり、究竟の行は是れ治道成ずるなり。次の二は定の自在を得、次の二は二徳圓滿す。一に自徳圓なり、二に化徳備る。次の三は三業具し、後の二は諸佛に同す。一に三業同じ、二に十力同じ、是故に結して如來と名けて、菩薩と名けざるなり。二に十轉法輪有りとは、大覺既に圓にして機熟し時至る。理宜く甘露の門を開きて、授くるに正法を以てすべし。餘經には此中に梵王の請有り。中に於て初の十は所轉の法輪を明し、後の十は能轉の因を顯す。前の中に就いて、若し小乘等の法輪は、四諦の下に各見智明覺等の四行有り、今此十行は以て無盡を顯す。又彼四行は既に諦の下に在り、今は此れ亦十諦の下に在りて、各各十行有り。百行法輪を成ずること、並に前の法輪の章に辨ずるが如し。中に於て初の三は知んばべし。此等は並に是れ所轉の法にして能轉に非ずとは、此等を具すればなり。四に佛果無礙の法に順入す、五に悲心普覆の法、六に教法、虛からず、七に宿因の法を顯し、八に教體の一切處に至ることを顯し、九に一切時を説盡し、十に轉じて一切の法を談ぬ。三に十の白淨法等に因るとは、能轉の因は是れ、佛の無染清淨法界を顯すが故に白淨と云ひ、此に由りて轉じて衆生の心中に入り、問熏の種子と成



【二六】以下、第六  
結勸修學分を釋す

るなり。出生無相とは、此種子に依りて無相の聖智を出生するなり。決定不慮とは、更に異の因無きが故に。『攝論』の中に、「多く聞熏習は、最も清淨なる法界より等流して、無流の現行を生ず」とは、是れ此義なり。一に佛の過去の弘誓の願力に由りて、此法をして衆生の心中に入らしめ、無相を出生して決定して虚からず、餘も亦是の如し。二に宿世の大悲の任持する所なるが故に。三に現在に衆生を捨てざるが故に、四に根に稱うて法を説く、五に時を差へざるが故に。六に生をして厭はしめず、又足らざるに非ず。七に三世を知るの智、後の三は殊勝の三業なり。四に十義有りて大涅槃を示現すとは、化縁既に畢る、用を息め眞に歸するが故に、示現大般涅槃と名く。初の二は有爲の失を顯し、次の二は涅槃の徳を顯し、五に法身を求めしめ、六に無常決定す、七に愛は必ず離るること有ることを明すは、自在にあらざることを顯すなり。八に總じて三界は皆堅牢ならざることを擧げ、後の二は涅槃の體相を顯す、一に體、二に相なり。佛子一切如來の下は、總じて三世の諸佛の化儀齊等なることを結す。上來一百九十句は、第六の究竟の位の中の行法を明し竟る。上來總じて二千の行門、六位の差別を辨じ、大門第五の普賢の説分を明し竟り。

【二六】第六大段に、佛子は爲菩薩清淨より下は、結勸修學分を明す、中に於て二有り。初に義を結し修を勸め、二に佛子此經出生より下は、名を結して學を勸む。前の中に亦二有り。先に義を結し、後若有衆生の下は、修行を勸信す。前の中に初は總じて結し、二に引

二七 以下、第七大段に表瑞證成分を釋す。

證す。結の中に障盡くるを淨と名け、徳高きを勝と曰ひ、用廣きを大と稱し、理深きを妙と爲す。此四の中、淨勝は是れ行なり、大妙を法と爲す。二に諸佛所説の下は引證なりと謂ふなり。謂はく、如上の所説は並に是れ三世の諸佛の所説にして、有智等をして明かに説いて益有らしむ。二に佛子若有りの下は、修行を勸信する中に三有り。先に益を標し、二に何以の下は釋成し、三に佛子の下は結勸す。第二に佛子此經出生の下は、名を結し學を勸むる中に亦二有り。先に名を結し、二に是故の下は勸持す。名の中に十有り。一に諸行を生じ、二に妙徳を出し、三に深智に入り、四に法門を攝し、五に世間を離れ、六に二乘に遠かり、七に不共を顯し、八は普く法を照し、九に善根を長じ、十に衆生を度す。前の中に功德義華とは、是れ功德を妙行間錯すること、華の如くにして以て嚴飾を成す。上の功德華聚十行の如くに相似す、華嚴の名は此に依りて立つ。此十は并に是れ所説の義にして、義に従ひて名を立つるなり。二に勸持する中に、先に總じて勸め、若菩薩の下は益を擧げて勸持すること知んぬべし。上來は結勸分竟んぬ。

第七大段に説此出生より下は、表瑞證成分を明す、中に於て二有り。先に經を説くに瑞を表すことを明す、謂はく、動地と放光となり。二に爾時の下は諸佛證成す、中に於て四有り。一に總じて善説を讀じ、二に佛子汝已の下は、別して説の徳を歎す。此中に久しく已に善學し、中間に決定して證知し、今時は機に臨みで快く説く。三に我等の下は已同説するを顯す、現に説くこと殊ならざるを明すが故に。四に是故の下は、已が護持を

【二八】以下、偈頌分を釋す。

述して未來に斷ぜざらしむるが故に。上來は表瑞證成分竟んぬ。  
第八大段に爾時普賢より下は、偈頌分を明す。中に於て二百三十頌有りて四に分つ。初に一十六頌有りて、徳廣くして説き難きを顯し、二に持衆生善根従り下の百三十三頌半は、略して行徳の差別の相を示し明し、三に常依如来従り下の四十三頌は、正しく略して前の二千の行相を頌し、四に菩薩修諸従り下の三十八頌半は、前の結勸修學の文を頌す。初の十六頌の中に就いて、各各二頌を一結と爲し、即ち八事と爲す。一に供佛攝生の行を數じ、二に上の二事に於て、皆無染の行なり。三に摧壞滅惑の行、四に現化爲物の行、五に救生成果の行、六に六度四等の行、七に捨自存他の行、八に總じて廣多にして、小分を説くことを許すを結す。第二に持衆生の下の百三十三頌半は、略して行徳の差別の相を示す中に、總じて分ちて二と爲す。初の六十七頌は託事長法を明し、行相の殊勝なるを顯し、二に一身無邊際より下の六十六頌半は、行用の廣大なるを明す。前の中に就いて十五種の行相有り。初の八頌は法樹鳥獸の行を明し、二に生死の下の四頌は尊迷治惑の行、三に菩薩爲法王の下の四頌は、法輪王の行を明し、四に甚深智慧海の下の四頌は、大海須彌の行を明し、五に深心の下の四頌は、金剛法雨の行を明し、六に白淨の下の四頌半は、法城金翅の行を明し、七に淨戒の下の四頌は、日月照臨の行を明し、八に自在の下の四頌は、法王梵主の行を辨じ、九に遠離の下の四頌は、離過威徳の行、十に無量方便の下の四頌は、四大珠寶行を明し、十一は菩薩功德の下の四頌は、華香幢蓋の行

を明し、十二に菩薩無上の下の四頌は、龍象希燈の行を明し、十三に菩薩功德河の下の四頌は、河船林葉の行を明し、十四に菩薩等如來の下の六頌は、等同佛果の行、十五に菩薩悉成の下の四頌半は、障盡き徳圓かに勝行を行するを明し、略して結勸を示し、行相の殊勝なるを聴かしめんぬ。第二に一身無邊の下の六十六頌半は、行用の廣大なるを明す中に、分ちて十行と爲す。初の六頌は三十三深廣の行を明し、二に菩薩現如是の下の五頌半は、供佛受法定慧の行を明し、三に示現種種の下の四頌は、逆順行、成徳滿行を明し、四に或現聲聞の下の五頌半は、隨順現身難思の行を明し、五に或在天宮の下の八頌半は、八相念劫法印の行を明し、六に如是知衆生の下の七頌は、了衆生根欲の行を明し、七に菩薩一念中の下の七頌半は、身心迅用甚深の行を明し、八に猶如人夢の下の六頌半は、智廣廣大玄絶の行を明し、九に觀色如聚沫の下の十一頌は、智徳圓明照法の行を明し、十に廣入甚深の下の五頌は、結徳殊勝無盡の行の徳用を明し、略して所證を結するを示せり。但功成じ徳立するを以て、行は法界を該ぬ、其旨深奧なり、詎ぞ言ふべけんや。難か一塵の説を擧げて、以て玄趣を擬するなり。三に常依如來の下の四十三頌は、正しく前の二千の行法を頌す、中に於て前の六位を頌するに、即ち六段と爲す。初の四は前の信位の中の二百門の行を頌し、二に一切妙功德の下の四は、前の十住の位の中の二百門の行を頌し、三に住持一切劫の下の六は、前の十行位の下の三百門の行を頌し、四に金剛妙寶位の下の六は、前の廻向位の中の三百門の行を頌し、五に清淨身身業の下の



十は、前の十地位の中の五百門の行を頌し、六に觀察善逝智の下の十三頌半は、前の因圓果滿究竟位の中の五百門の行なり。第四に菩薩修諸行の下の三十八頌半は、前の結勸修學を頌する中に三に分つ。初の一頌は總じて所説を結す。謂はく、前に二千を結して、名は小分を擧ぐ。二に無量劫の下の三十三頌半は、別して徳用を結し、三に末の四頌は、廣を結して修を勸む。前の別の中に就いて二有り。先に二十一頌半は、別して徳用の廣大なるを結し、二に淨身の下の十二頌は、別して行徳の殊勝を結す。前の中に五に分つ。初の五頌半は、刹の自在を明し、二に無量金剛山の下の六頌は、三乘の自在を明し、三に過去一切劫の下の三頌は、三世間の自在を明し、四に深知の下の五頌は、身智の自在を明し、五に示現如是の下の二頌は、自在にして無盡なるを結す。二に淨身の下の十二頌は、別して行徳の殊勝を結する中に、三に分つ。初の六頌半は、輪王の七寶、宮殿、器械を明し、二に陀羅尼の下の三頌半は、林、井泉、遊觀、飲食、乘御を明し、三に此等の下の二頌は、上の諸行の多劫修得なるを結し、三に末後の四頌の中に、初の二は徳の無盡なるを結す。後の二は益を擧げて修を勸む。離世間品竟ぬ。

華嚴經探玄記卷第十七

# 華嚴經探玄記

卷第十八 十住の知識を盡す

魏國西寺沙門法藏述す

【一】此品は一品一會にして祇園重閣に於て開かれ、前會に二千の行法成ぜるを以て、今は人に託して證入法界を明す。釋に四あり、初に名を釋す。

【二】 卷四十八 四五丁

【一】此品は一品一會にして祇園重閣に於て開かれ、前會に二千の行法成ぜるを以て、今は人に託して證入法界を明す。釋に四あり、初に名を釋す。

【二】入法界品第三十四。將に此品を釋せん、四門は前に同じ。初に名を釋するに三有り。一に分の名とは、謂はく、廣く勝友に依りて深く法界を證するが故に、依人入證、成徳分と名く。二に會の名は、處に約すれば祇園重閣會と名く、謂はく、此法の濟物攝生を表すが故に給園に在り。又悲は本智に依りて起る、重出の相を顯すが故に重閣に在り。三に品の名とは、入は是れ能入なり、謂はく、無解證得する故なり。法界は是れ所入なり、法に三義有り。一には是れ自性を持するの義、二には是れ軌則の義、三には對意の義なり。界にも亦三義有り、一には是れ因の義、依として現消を生ずるが故に。二は境に云はく、法界とは是れ一切の淨法の因なるが故に。一と。中邊對に云はく、一現法の因を義と爲すが故に、是れ法界と説く、現法は此境に依りて生ず。一と。此中の因の義は是れ界の義なり。二には是れ性の義なり、謂はく、是れ諸法の所依の性なるが故に。此經の上の文に法界法性と云ふは、兼に亦然るが故なり。三には是れ分の義なり、謂はく、諸の緣起の相の釋らざるが故に。初の一は唯依主、後の一は唯持業、中間は二釋に通ず、心境合して目くるが故に入法界と云ふなり。

【二】 第二に來意を明す。

【三】 第三に當品の宗趣を明す。

【論】 攝大乘論卷一の三丁。

二に來意とは、初に分の來ることを明す。謂はく、前は託法進修を顯し、今は依人入證を辨す、義の次第なるが故に是故に來れり。會の來り品の來るも亦此説に同じ。

三に宗趣を明さば、亦分と會と品と同じ、既に入法界を明す、即ち此を以て宗と爲す。中に於て分別するに三門を作る。一は義に約し、二は類に約し、三は位に約す。初の中に、先に所入の法界の義を明すに五門有り。一に有爲法界、二に無爲法界、三に亦有爲亦無爲法界、四に非有爲非無爲法界、五に無障礙法界なり。初に有爲法界に二門有り。一に本識

は能く諸法の種子を持するを、名けて法界と爲す、【論】に云ふが如し、無始の時より來界たり。一と、此は因の義に約す。二に三世の諸法の差別の邊際を、名けて法界と爲す。

『不思議の門』に云はく、「一切の諸佛、過去の一切の法界は、悉く餘有ること無きを知り、未來の一切法界は、悉く餘有ること無しと知り、現在の一切法界は、悉く餘有ること無き等と知る」と。二に無爲法界にも亦二門有り。一には性淨門なり、謂はく、凡位に在りて性恆に淨きが故に、眞空一味無差別なるが故に。二には離垢門なり、謂はく、對治に由りて方に淨を顯すが故に、行の淺深に隨ひて十種を分つが故に。三に亦有爲亦無爲とは亦二門有り。一には隨相門なり、謂はく、受想行の蘊及び五種の色、并に八無爲、此十六

の法は唯し意識の所知なり、十八界の中に名けて法界と爲す。二には無礙門なり、謂はく、一心法界には具には二門を含めり、一には心眞如門、二には心生滅門なり、此れ二門なりと雖も、皆各各總じて一切の諸法を攝す。然るに其二位は恆に相雜はらず、其れ猶し水を

【二の名言云云】  
 言語道斷の故に表  
 義名言も及ばず、  
 心行處滅の故に顯  
 境名言も至らざる  
 をいふ。  
 【解深密經】卷一  
 の勝義諦相品第二  
 の文。  
 【普賢門】此は即  
 事入理門に約す。  
 【圓通門】此は事  
 理圓融に約す。

攝するの波の靜に非ず、波を攝する水の動に非ざるがとし、故に「回向品」に云はく、  
 「無爲界に於て有爲界を出して、亦無爲の性を壞せず、有爲界に於て無爲界を出して、亦有  
 爲の性を壞せず」と。四に非有爲非無爲とは亦二門あり。一には形奪門なり、謂はく、縁  
 は理ならざるの縁無きが故に有爲に非ず、理は縁ならざるの理無きが故に無爲に非ず、法體  
 平等形奪雙べ浪す。「大品經」の三十九に云はく、須菩提、佛に白して言さく、「是法は平  
 等なり、是れ有爲の法と爲んや、是れ無爲の法と爲んや。」佛言はく、「有爲の法に非ず、  
 無爲の法に非ず。何を以ての故に。有爲の法を離れて無爲の法は不可得なり、無爲の法を  
 離れて有爲の法は不可得なり。須菩提、是有爲の性、無爲の性は、是二法合せず、散ぜず。」  
 とは此れ之謂なり。二には無寄門なり、謂はく、此法界、離相離性なるが故に此二に非ず、  
 離相に由るが故に有爲に非ず、離性なる故に無爲に非ず。又是眞諦に由るが故に有爲に非  
 ず、是安立諦に由るが故に無爲に非ず。又二の名言の能く至る所に非ざるが故に、是故に  
 具非なり。「解深密經」の第一に云はく、「一切法とは略して二種有り、謂ゆる有爲と無爲と  
 なり。是中に有爲は有爲にして無爲に非ざるに非ず、無爲は無爲にして有爲に非ざるに非  
 ず」と、乃至廣說せり。五に無障礙法界とは亦二門有り。一には普攝門なり、謂はく、上  
 の四門に於て、一に隨ひて即ち餘の一切を攝するが故に、是故に善財は或は山海を觀、或  
 は堂宇を見るも、普法界に入ると名く。二には圓融門なり、謂はく、理を以て事を攝する  
 が故に、事をして分齊無からしむ。謂はく、微塵は小に非ず。能く十刹を容る、刹海は大



【性起品云云】上一の異を融す。一は一に非ざる故に諸、諸は諸に非ざる故に一、乃至重重無盡なるを二文を以て示す。

【暫時：見る】時圓融と處圓融を明す。

【第二に云云】以下、第二に類に約して明す。

に非ず。一塵に潛に入る。事を以て理を融するが故に、理をして分つこと無きに非らざらしむ。謂はく、一多無礙なるを、或は一法界と云ひ、或は諸の法界と云ふ。「性起品」に云はく、「譬へば諸の法界の分齊不可得なるが如し、一切は一切に非ず、見るに非ず、取るべからず」と。此は諸は即ち諸に非ざることを明すなり。「舍那品」に云はく、「此蓮華藏世界海の内に於て、一一の微塵の中に一切の法界を見る」と。此は一は即ち一に非ざること

を明すなり。是故に善財は、或は暫時手を執るに、遂に多劫を經、或は樓觀に入るに普く三千を見るとは皆此類なり。上來の五門十義は總じて所入の法界を明す、應に總別圓融の六相を以て、之に準すべし。二に能入を辨するに亦五門有り。一に淨信、二に正解、三に修行、四に證得、五に圓滿なり。此五は前の所入の法界の五門の内に於て其二門有り、一に一の能入に隨ひて、五の所入に通じ、一の所入に隨ひて五の能入に過す。二に此五の能入は其次第の如く、各各所入の五の中の一に入る。又此上の心境の二義、十門無礙圓融して總じて一圓と爲る、無障礙法界も亦六相を以て準攝して之を思へ。

第二に法界の類別に亦五門有り、謂はく、所入、能入、存亡無礙なり。初の所入の中に亦五重有り。一に法法界、二に人法界、三に人法俱融法界、四に人法俱泯法界、五は無障礙法界なり。初の中に十有り。一には事法界なり、謂はく、十重の居室等なり。二には理法界なり、謂はく、一味湛然たる等なり。三には境法界なり、謂はく、所知の分齊等なり。四には行法界なり、謂はく、悲智廣深等なり。五には體法界なり、謂はく、寂滅無生な

【三に人法云云】  
以下、俱融俱況を以て人法融ずることを明す。

【二に能人云云】  
五重あり、身智を本と爲す。

り。六には用法界なり、謂はく、勝通自在等なり。七には順法界なり、謂はく、六度正行等なり。八には違法界なり、謂はく、五蘊業轉等なり。九には教法界なり、謂はく、所聞の言説等なり。十には義法界なり、謂はく、所詮の旨趣等なり。此十法界同一縁起無礙鏗融して、一に一切を具すること、之を思つて見つべし、二に人法界とは、此下の文に準ずるに亦十門有り謂はく、人天、男女、在家、出家、外道、諸神、菩薩、及び佛なり。此れ竝に縁起相分れて、參へて雜らず、善財見已りて即ち法界に入るが故に、人法界と名くるなり。三に人法俱融法界とは、謂はく、前の十人十法は同一縁起にして、義に隨ひて相分るるも融攝無二なること、之を思つて見つべし。四に人法俱泯法界とは、謂はく、平等果海は言敷を離れ、縁起と性相と俱に不可説なり。五に無障礙法界とは、謂はく、前の四句を合す、彼前の人法に於て、一異障無く存亡を礙へず、自在圓融なること理の如く之を思へ。二に能人を明すに亦五重有り、一に身、二に智、三に俱、四に涙、五に圓なり。謂はく、樓觀に入りて還りて合するは身證なり、無邊の理事を鑒みるは智證なり。普賢に同じて、普く通ずるは俱證なり、身智相即して、兩ながら亡するは俱泯なり。一異存亡無礙自在なるは圓融なり。又『發心品』に云はく、「甚深の眞法性は、妙智隨順して入る、無邊の佛土の中に、一念に悉く周遍す」と。案じて云はく、前の二句は、智は法界に入り、後の二句は、身は法界に入る、身智無礙なるに由るが故に、智は理に入り、身は上に遍す、餘は準じて知んぬべし。三に能人所入混融無二にして際限を分たず、義に就いて異を聞けども

【次】の如く反て通界に入り、二に智は入法界に入り、三に身智俱存して無二法界に入り、四に身智俱混して入法界に入り、五に入法界にして無障礙法界に入る。

【第三】に云云以下位に約して明す

【前の果位】云云は舍那果門の能入は頓にして漸に非ず、故に五位を經ず、諸菩薩普賢因門の能入は從因向果の次第ありて五十三知識あり。

【四】以下、第四に正しく經文を釋す。

【五】以下、序分を釋す。

理は仍ほ雜らす。此五の能所は次の如く反て通ず、理の如く思攝すべし。四に能所圓融し形奪俱泯す、五に一異存亡無礙にして具足す。上來は類に約して攝じ竟ぬ。

第三に位に約して入法界を明さば、下の文の中に準ずるに、所入の法界は大位に二有り、謂ゆる因と果となり。前の入法に於て、皆是れ佛果の所收ならざることを無し、即ち如来師子奮迅三昧所現の法界自在是れなり。前の入法に於て、皆因位の所收に屬せざることを無し、即ち文殊と普賢の所現の法界法門是れなり。此因位の中に、曲に分ちて五有り、即ち信等の五位の法界なり。準攝して知んぬべし。二に能入を明すに、文に準ずるに亦二有り、前の果位に對して、諸の菩薩の頓に法界に入ることを明し、前の因位に對して善財の漸入法界を寄顯す、因果は既に其れ無礙なり、漸頓も亦乃し圓融す。但教を布き詮を成ずるを以て、斯位の別なるに寄するのみ。

四に文を釋せば、此一品の中に、大いに分つに二有り。初に本會を明し、二に爾時文殊從善住樓閣出の已下は末會を明す、亦則ち前は果法界を明し、後は因法界を明す。又前は頓入法界を明し、後は漸入法界を明す。又前は總、後は別なり、即ち本末圓融無礙なることを之を思へ。前の本會の中に就いて、長に分ちて十有り、一に序分、二に請分、三に三昧分、四に現淨土分、五に集新衆分、六に擧方顯勝分、七に偈頌讚德分、八に普賢開發分、九に毫光示益分、十に文殊速德分なり。

初の序分に就いて三有り、初に爾時佛在とは智正覺世間圓滿を明し、舍衛城等は器世間

を釋す。

【須達】(Sudatta)  
給孤獨長者の本名

圓満にして、與五百等は衆生世間圓満なり。初の文は知んぬべし。器の中に三有り、謂はく、一に城、二に園、三に闍なり。城の名は具に言はば室羅伐悉帝と名け、訛略して舍衛と稱し、此に翻じて聞者城と云ふ。謂はく、昔、古老の仙人有りて此處に住す。復少仙有り、名けて聞者と爲す、老仙の所に於て法要を聽受せるに、老亡じ已りて後に、少仙此處に於て城郭を建立す、因りて以て名と爲す。園は城の南に在り、三四里可り、祇は是れ太子の名なり、具には耆多と言ひ、此には戰勝と云ふ。又父無きを孤と言ひ、子無きを獨と言ふ、須達長者惠施資給するを給孤獨と名く。然るに長者は金を側けて地を買ひ、太子は樹施して同じく成す。二人共に伽藍を立つるが故に俱に以て名く。園内の別闍の、宣法の所を名けて講堂と言ひ、體の周からざること無きを大と言ひ、徳の備はらざること無きを嚴と言ひ、用は體に依りて起るが故に重闍と言ふ。第三に、衆の中に亦三有り、謂はく、一に菩薩、二に聲聞、三に諸の天王なり。初の菩薩の中に亦三有り、謂はく、一には數を擧げ、二には名を列ね、三には徳を歎す。名の中に先は上首二人を標す。其は是れ助化の主なるを以ての故に。釋に三義有り。一に普賢は法界門に當る、是は所入なり。文殊は般若門に當る、是れ能入なり。其入法界を表すが故に。二に普賢は三昧自在、文殊は般若自在なり。三に普賢は廣大の義、文殊は甚深の義を明す、深廣一對の故に上首を標す。次に名を列ぬる中に一百四十一の大位有り、十の十に十四位有り。初の十は同じく幢と名く、行徳の高く出づるを顯すが故に。二の十は同じく端嚴と名く、福智の二嚴を表すが故に。



【歎德の中云云】  
經に此語の菩薩一  
等といへる文を釋  
す。

十の中に一を缺くは是れ減數なり。三の十は同じく藏と名くるは、徳備り含攝することを顯すが故に。四の十は同じく眼と名く、法界を照すことを明すが故に。十の中に二を剩せり、是れ増數なるが故に。五の十は同じく天冠と名く、淨徳を心頂に冠することを表すが故に。六の十は同じく周羅と名ひ、此に頂髻と云ふ、徳重く尊高なるを表すが故に。七の十は同じく光具と名く、身智の光は内外を照すが故に。八の十は同じく幢と名く、幢に二義有り。前は獨出の義を明し、今は降伏の義を辨す。九の十は同じく音と名くるは、美音をもて機を悅ばしむることを明すが故に。十の十は同じく上と名く、徳は衆表に過ぐるが故に。十一の十は同じく妙徳吉祥と名く、勝るるを顯すが故に。十二の十は同じく王と名くるは、法に於て自在なるが故に。十の中に一を劑すは亦是れ増數なり。十三の十は復同じく音と名く、音に二有り。前は音の體の美妙なるを明し、今は巧に妙法を施するを顯す。十の中に一を剩すは亦増數なり、知んぬべし。十四の十は同じく覺と名く、理を隱み、機を察するが故に。十の中に二を缺けり、亦是れ減數なり、知んぬべし。如是等は結なり。歎德の中の十句に就いて二義有り。一に此十句の徳は、遍く上の諸の菩薩に通じて、一に皆具す。二に別して前の十五位の徳を數す。謂はく、初の句は前の二上首の徳を數す、普行普境に皆一切に通ずるを以て、彼二は同じく此徳を成ずるが故に。二に持無量等は前の十幢十藏の二位の菩薩を數す、謂はく、身幢獨り出でて、具徳端嚴にして能く遍く至るが故に。三に具足無礙等は十藏十眼の二位の菩薩を數す、謂はく、無礙藏を見、淨眼をも

て佛を見るが故に。四に至無量等は十天冠、十周羅の菩薩を數ず、謂はく、天冠、頂髮をもて自ら身を嚴るを以て、梵王の形に同じ、諸佛成道の所に至りて、佛を觀じて休むこと無く、說法を請するが故に。五に無量智光等は十光十幢の菩薩を數ず、智光普く甚深の法を照すが故に。又寔闍を伏するが故に。六に於無量等は十音の菩薩を數ず、謂はく、美音清辯をもて説くこと無盡なるが故に。七に究竟等は十十妙徳の菩薩を數ず、謂はく、虚空の土智に同じく、淨境の妙徳を極むるなり。八に無所依等は十王菩薩を數ず、謂はく、無依にして現色自在なるを玉と爲し、亦王身を現するが故に。九に除滅等は後の十音菩薩を數ず、謂はく、内に智障を離れ、巧に説いて衆生界を分別するが故に。十に虚空智等は十覺菩薩を數ず、謂はく、阿含光を放ちて善く覺照するが故に。又釋すらく、此十句を攝して五對と爲す。初の二の一對は、初に行徳内に充ち、後に多身外に通ず。次の二の一對は、初に淨眼をもて佛を觀、後に觀て厭足すること無し。次の二の一對は、初に内智は法を照し、後に辯説無盡なり。次の二の一對は、初に内智は空に同じ、後に現身普應す。次の二の一對は、初は内に智障を離れ、後に慧光を演ぶ。又釋すらく、此十句の中に、初の句を總と爲し、餘の九は是れ別なり。皆普賢の行を顯さざること莫きが故に。一に身は佛に詣づること普し、二に通く佛を見ること普し、三に見て休むこと無くして普し、四に智の、理を照すこと普し、五に辯は多劫に普し、六に理智淨きこと普し、七に量智の身を現すること普し、八に斷障普し、九に光照普し、並に準釋して知んぬべし。二に聲聞

【二に聲聞衆云云】以下、聲聞衆を釋するに、初に述門の實類の如者に約して釋す。  
【佛地論】 卷二の十丁。

【又釋す云云】以下、本門に約して、不思議境界分を引證す。

【分段】 分段生死の身。凡夫は六道に輪廻し分段段の果報を受くればなり。

【結】 填闕。

【方便の慧】 利他善巧方便の後智の大悲をいひ、實慧に對す。

【實際を證す】 修道なり、餘の修惑を斷じ惑滅する處に生空の理を證るをいふ。

衆の中に二有り、數を擧げて徳を敷す。聲聞と言ふは『佛地論』に云はく、「佛の言音を聞いて聖道に入るが故に聲聞と曰ふ」と。又「瑜伽」の八十二に云はく、「他從り正法の言音を聽聞す、又能く他の正法の聲を聞かしむるが故に聲聞と曰ふ」と。大とは是れ第四の果なるが故に、又是れ不動種姓なるが故に。諸の聲聞の中に最も尊大なるが故に。鷲子等の如し。又此等は並に是れ回向大乘の聲聞なるが故に大と云ふ。『佛地論』に云はく、「如實の義は、皆不定種姓の聲聞は、小果を得已りて大菩提に趣くが故に、名けて大と爲す」と。解して云はく、其れ未だ圓教一乘普賢の法に入らざるが故に、是故に下の文に聳首の如しと。上の「性起品」の如きは、聲聞と緣覺とは此經を聞かずと云へり。又云はく、「若し菩薩、億那由他劫に六波羅蜜を行じ、道品の善根を種うるも此經を聞かず、雖も信ぜず、是等は猶し假名菩薩と爲す」とは、此謂なり。又釋すらく、此等は並に是れ大菩薩示現して聲聞と作すなり、新譯の華嚴の不思議境界分の中に説くが如し、「此法の深勝なるを顯すを以て、聳首の如きを示現す」と。二に數德の中に十句を四分す。初の句は涅槃を證して生死を捨つ、謂はく、覺眞諦とは是れ見道なり、證實際とは是れ修道なり、深入性とは無學道なり。此に由りて理を證し、満足するが故に。分段を捨離するが故に離生死海と云ふ。又生死を怖畏するに由るが故に離と云ふなり。又方便の慧無きに由るが故に實際を證するなり。大悲無きに由るが故に生死を捨離す。二に次の二句は空に住して結を斷ず。初に住空とは謂はく、此人空の理は亦是れ如來二空の一なる故に如來境と云ふなり。唯此



【四住の惑】見愛住地に見惑を攝盡し、欲愛住地に欲界の無惑、色愛住地に色界の無惑、有愛住地に無色の無惑を攝す。

【九結】愛、悲、慢、無明、見、取、疑、嫉、瞋、【十使】無慚愧、憍、慢、悔、眠、掉舉、昏沈、忿、

【六】以下、請分を釋す。【答云云】意法及び今家の釋共に違に約すと雖も前は大小對に約し今家は三一相對に約す。

分に契ふが故に安住と云ふ。後の句は入空に住するに由りて、四住の惑を斷離す、謂はく、九結十使相應し纏縛せり。三に次の二句は通方自在なり、謂はく、世に於て無染なるが故に、不着一切と云ひ、神通遍遊の故に遊行虚空と云ふ。四に次の二句は疑盡き信堅し、謂はく、不壞信を成就するが故なり。又釋すらく、此は並に佛の甚深自在の果法を信す。明に知んぬ是れ大菩薩なり。三に諸天の中に亦二有り、數を擧げて徳を數す。數徳の中の十句を攝して五對と爲す。初の二の一對は宿因の徳を數す、謂はく、已に過去の佛を供し、久しく已に衆生を益す。自下は皆現行の徳を數するに、次の二の一對は行慈入智の徳を數す。謂はく、慈念無間にして生を救ひて智に入れしむ。次の二の一對は在業顯淨の徳を數す、謂はく、果法を護り、正教をして流通せしめ、因法を持ちて性決定を證す。又外に能く持法の者守護し、内に自ら佛の眞性の法を受持す。後の二の一對は家業の徳を數す、謂はく、佛家に生れて求佛の業を作すに、一切智の因を名けて彼門と爲す、能く通じて以て佛智に至るを以ての故に門と云ふなり。上來は序分竟んぬ。

(六百三) 第二の請分の中に三有り、初に業の念請、二に念の所請、三に念の請現なり。問ふ、下の聲聞に準するに、皆聖旨の如し、何が故に此中にして而も同じく疑念するや。答ふ、意法師釋して曰はく、理處隔てざるが故に同じく疑ふことを得。未だ大心を積まざるが故に、其次に廂はらず」と。又釋すらく、同じく祇道に在ることを表すが故に、同じく念請す。普眼未だ聞かざるが故に盲等の如し」と。又釋すらく、「實には是れ菩薩なり、是れ同念を



以て、跡あとを聲聞しやうもんに現げんず、是こゝを以て盲まうの如ごとし。」と云云。所請しよしやうの中に總そうじて六十句ろくじつく有り。古德ことく釋しゃくして云はく、初はじめの三十さんじふは佛ほとけの自入じまひ法界ほふかいを明あかしし、後のちの三十さんじふは佛ほとけ、他たをして法界ほふかいに入いらしむることを明あかしす。今釋いましゃくすらく、六十ろくじふの中に、初はじめの十じふは果法くわふほふを念請ねんしやうす、何なにを以てか所請しよしやうは是こゝれ果くわなりと知しることを得うるとならば、謂いはく、次つぎの十じふは下位げゐの不能ふのう測量しやうりやうを明あかしすが故ゆゑに。既すでに下したは之これを知しること能あたはず、何いかんが今請いましやうせんと欲ほつするや。謂いはく、次つぎの十じふは因緣いんげん力具りきぐするこゝとを明あかしす。或あるは亦また知しることを得う。力具りきぐして知未ちみ知ちを得うと雖いへども、此衆このしゆに知しる力りき有りや不いや。謂いはく、次つぎの十じふは、此衆このしゆの根器こんき力具りきぐするを顯あらわす。衆器しゆき具ぐすと雖いへども、若もし佛力ぶつりき無なければ亦また能あたく知しること無なし。謂いはく、次つぎの十じふは佛ほとけの因具いんぐすることを明あかしす。利他いんげんの因滿いんまんすと雖いへども、若もし利他りたの果用くわうりやうを現起げんきすること無なければ、亦また知しらしむるに由よし無なし、次つぎの十じふは果用くわうりやうの攝生せつしやうを辨べんず。既すでに此これは緣具げんぐするが故ゆゑに、結請けつしやうして唯願ゆゐ現等げんとうと云ふ。又釋またしゃくすらく、此中このちゆうに、初はじめの三十句さんじつくは念法ねんぽうの請しやう、後のちの三十句さんじつくは念德ねんとくの請しやうなり。前まへの中に、初はじめの十じふは正ただしく所請しよしやうの果法くわふほふを念ねんじ、次つぎの十じふは深じん玄げんにして測はかり難がたきを明あかしし、後のちの十じふは緣會げんげを明あかしすこと知んぬべし。初はじめの中なか、一いちは悲智ひち無礙むゐ無功むくわう用の行ぎやうを問とふ、『性起しやうき品ひん』に説とくが如ごとしして二にに佛智ぶつち所知しちの眞俗しんじやく無礙むゐを問とふ。亦また性起しやうきの境界きやうがいの中なかに説とくが如ごとし。三さんに佛地ぶつち總持そうぢ無邊むへんの念慧ねんゑなり。又また十佛じふぶつの中なかの持佛ぢぶつに辨べんずる所ところの如ごとし。又『不思議品ふしぎひん』に十持じふぢ等とうを説とくが如ごとし。四よに是處ぜいち非處ひじち等とうの十力じふりき、又また那羅延ならえん幢どう等の十種じつしゆ等の十種じつしゆの大力たからりきなり、亦また彼品たかひんの如ごとし。五ごに四無畏しむゐ十無畏じふむゐなり。六ろくに師子奮迅しふんしん等の、不可稱量ふかしょうりやうの諸しよの三昧海さんまいかいなり。七しちに理及り及び功德くわんとく、并ならびに諸しよの刹土せつどは皆是みな是こゝれ如來にょらいの身智しんちの

【攝門】 或は請問の誤か。

所住なり、亦「不思議品」に説くが如し。八に殊勝功德なり、初二會の問の中に佛佛の勝法と名くは、彼は通じて辨ずるに就き、此中は別して福德に約して勝るるを顯す。九に三身、十身圓滿の相なり。十に四智十智理量融照す。又有る經本に、此中に更に一句有りて、如來の法と名くるは、或は是れ剎り來り、或は是れ上の諸句を結す。又此十問は、前の初會所問の果と多分に是れ同じ、彼攝門を以て此に於て宜く用ふべし。又十の中に、初の一は是れ總、餘の九は是れ別なり。別の中に、初の一は所知の徳、次の三は智用の徳、次の一は大定の徳、次の一は所依の徳、次の一は勝福の徳、後の二は身智の徳なり、知んぬべし。第二に下位の測量に非ずといへる中に、謂はく、前の十種の如來の法の中に於て、高きが故に知ること能はず、廣きが故に度ること能はず、深きが故に底を得ず、多きが故に受くること能はず。此四は聞慧の境界に非ず。玄なるが故に思ふこと能はず、妙なるが故に觀ること能はず、此二は思修の境を離る。法界に稱ふが故に分別すること能はず、一切の故に因智を開發すること能はず、證せざるが故に宣明すること能はず。言議を超過するが故に解脫すること能はず。又前の六は三慧を離れ、後の四は四辯を超ゆ。謂はく、法辯も分つこと能はず、義辯も聞くこと能はず、辭辯も宣ぶること能はず、樂説も説くこと能はず。又釋すらく、此十を前の十種に配せば、次第に甚深の義を顯示す、準じて之を知んぬべし。又釋すらく、前の一義に於て則ち此十有り、此一門に於ても亦前の十有り、準じて百門を成する等知んぬべし。第三に緣會知るべき中に初の四は佛力を緣と爲し後の

【青蓮華云云】 不思議品の説主を引く。

【交殊の云云】 此は攝比丘會の事を引く。

【迦葉云云】 此は涅槃經を引く、以上は共に是れ現縁なり。

六は根力を因と爲すこと、方に知ることを得べし。初の中に佛持力とは是れ佛の加持力なり、青蓮華菩薩を加持して佛の功德を知らしむること、「不思議品」等に説くが如し、二に自在力とは是れ回轉無礙力なり、文殊の驚子を轉じて説の深理等を知らしむるが如し、三に威神力とは、密に威を以て加し、佛徳を知らしむ、迦葉をして如來心等を知らしむるが如し。四に本願力とは、是れ佛の往昔の本誓願力なり、是故に他をして佛の深徳を知らしむ。下の六の中に、初に宿世の多生に善根力を種ゑ、二に多生に一乘の善友に親近するの力、三に現在に深く淨信心に徹するの力、四に上勝の法に於て、願求せんと欲するの力、五に無明を離へず、直に所發の大菩提心に住するの力、六に深心をもて専ら一切種智を求め、二乗の心を離へざるの力なり。此十の中に於て、一種の力に隨ひて、分ちて知ることを得べし。或は二或は三乃至十種を以て無盡を顯す。第二に三十句は念徳講の中に、初の十は機の堪受の徳を數じ、後の二十は佛の能説の徳を數す。初の中に思量は是れ意多きが故に種種なり、思に従ひて欲を起し、欲増するを解と名く、即ち勝解して印持するなり。解に依りて言を起す、方音も亦異れり。所住の行位優劣同じからざるを、地と云ふを以てなり。受法の根器の、利鈍生熟三品不同の故に根と云ひ、根に依りて業を作り、造修不同の故に方便作業と云ひ、所縁の境相一に非ざるが故に境と云ふ。皆佛果に依りて縁と爲し、差別して法に入ることを得。或は佛光に依り、或は説法等に因りて、所説の淺深廣略を聞かんことを樂ふに、各多少同じからざるが故に樂聞法と云ふなり。二に佛の

【福田】 佛に供養すれば諸の福報を得ること、田に播種して收穫あるが如きをいふ。

能説を歎ずる中に、初の十は佛の因の圓滿を説くことを念じ、後の十は佛の果徳備るを説くことを念す。前の十の中に、初の一は昔の初發菩提心の願を明す。二に願に依りて行を起すが故に淨波羅蜜と云ふ。三に行成じ位に入るが故に諸地と云ふ。四に位に依りて行を成ずるが故に満足行と云ふ。五に總じて諸行を説くに、皆二嚴を具するが故に菩薩莊嚴と云ふ。六には別して一行巧に一切を攝することを辨じ、互相に嚴飾するが故に方便嚴と云ふ。七には別して自利の行、攝すること前に同じきを顯し、道莊嚴と名く。道は是れ因の義、通じて果に至るが故に。八に別して利他の行、巧にして多端なるを明すが故に出方便海と云ふ。嚴の義は前に同じ。九に二利無礙雙融し究竟して、各一切を攝し、普賢の行を成ずるが故に自在莊嚴と云ふ。十には多劫に身を受け、恆に勝行を修するが故に本生海と云ふ。本生の身多きが故に海の如く、多身の修行の行も亦廣多なることを顯すなり。後の十は佛の果徳備はることを説くことを顯す中に、初に前は既に因圓なり、何の所得か有る。謂はく、菩提自在なり。二に既に菩提を得ば何の所用か有る。謂はく、自在に法輪を轉ずるなり。三に何の處に於てか轉ずる。謂はく、淨利なり。四に轉じて何の益する所ぞ。謂はく、衆生界を嚴る。五に何の法をか轉ずる。謂はく、法王の法なり。六に何の智を以てか轉ずる。謂はく、道明の智なり。七に菩提は諸機を照す、何んが悟るに由る。謂はく、自在に能く衆生の處に入るが故に。八に入りて機の處に至り、何の所益をか作す。謂はく、福田と作るが故に。九に何を以て福を成ずる。謂はく、説いて功德の達觀を成ず。



【七】以下第三  
に三昧分を釋す。

達禪とは尊婆須密の論には檀漸に作る、此には財施と云ふ。律に云はく、報施の法を名けて噉喫と曰ふ一と。福地に導引するを亦噉喫と名く。『西域記』に云はく、「正しくは達禪拏と言ひ、或は馱器尼と云ふ、此には右手と云ふなり。右の手を用て他の所施を受くるを以て、其が爲に福を生ずるが故に、之に従りて名を立つ。今明さく、佛は衆生に功德を施與するが故に功德達禪と云ふ。十に何を用てか攝生する、謂はく、三輪なり、身業は神通輪疑を破りて信を成す。語業は正教輪、惑を破して解を成す。意業は眞念輪、結を破して行を成す。下は結請なり、知んぬべし。請分竟んぬ。

(七)第三に三昧分の中に、何が故に入るとならば、前には問願具に現するが故に、今は定に入りて、其が爲に法を現す。何が故に前の諸會には、衆を集めて後に定に入る、此は乃し定は先なるべし。釋すらく、前は相從り實に入ることを明し、今は體に依りて用を起すことを辨す。又前は因人定に入り、今は果位自在の故に不同なり。何が故に、此會は佛、自ら定に入る。法界解脱の自在は、唯佛のみ窮むることを表さるるが爲の故に。文の中に四有り。一には入定の緣、二には入定の因、三には正しく入定し、四には入定の意なり。初の中に心念を知るとは、他心智を以て前の疑念を領す、即ち入定の緣なり。二には四種の大悲を以て入定の因を明す、謂はく、定に入りて物を益するは、要す大悲を以て本と爲すが故に、以て因と爲す。一に身とは利物の身、悲を積みて立つ、即ち三昧所依の身なり。二に門とは、然るに佛には大智、大定、大悲等の門有り、今生を益せんと欲するが故に、

唯大悲門に依るなり。又亦此悲門を開きて以て群品を攝するが故なり。三に首とは、即ち物を益するに、諸の造作する所は、皆大悲の先導なるを以ての故に、首と爲すことを明す。四に隨順方便法とは、悲を首と爲すと雖も、若し巧便無くんば、悲法は物の根縁に隨ひて以て具をして同じく法界に入らしむること無し。此四亦佛從り機に向ふの漸次なり。三に正しく三昧に入るとは定の業用を明すに、喻に從へて名と爲す。謂はく、師子奮迅の時は諸根開張し身毛皆堅ち、其威怒を現じて哮吼するの相は餘の獸類をして威を失し竄伏せしめ、師子の兒をして其雄猛を増し、身の長大なることを得せしむるが如し。今佛も亦爾なり。一には大悲法界の身を奮ひ、二には大悲の根門を開き、三には悲毛を堅つ、之れ先導なり、四には塵穢の威を現じ法界の法門を吼して、一乘の諸獸をして藏竄して鬣首ならしめ、菩薩の佛子は百千の諸三昧海及び陀羅尼海を増長す。是の如く相似するが故に以て喻と爲す。又一體世間品の十種の師子奮迅は、此に於て具に論ずべし。四に令一切の下は入定の意を明す、謂はく、此法界清淨の法を現じて、衆をして觀て入らしむるを樂法と名く、三昧分竟んぬ。

【八】以下、第四に現淨土分を釋す

第四に、現淨土分の中に三有り。初には器世間圓滿を現じ、二には智正覺世間圓滿、三には衆生世間圓滿なり。初の中に二有り。先に此祇洹に嚴淨土を現ずることを明し、後に十方に同じく淨土を現ずることを類し結す。前の中に亦二有り。初に正しく莊嚴を顯し、後に所因を出す。前の中に三有り、初には重閣莊嚴、二には園林莊嚴、三には虛空莊嚴な

【第二に云云】以下、莊嚴の所因を明す下、經の「何を以ての故」等の文を釋す。

り。光純の云はく、「空を嚴るは無爲緣起を表し、園を嚴るは有爲緣起を表し、園を嚴るは自體緣起を顯す故に」と。初の中に二あり、先に處を廣くすること無邊にして、忽然廣博とは、謂はく、權を案じて實を顯し、情を破して法を顯すが故に。二に正しく莊嚴を顯すに、中に於て十種有り。一に金地、二に一切摩尼の下は地上の布寶を明し、三に琉璃の下は闍柱を明し、四に闍浮の下は成閣を明し、五に摩尼の下は闍上に於て網を安ず、六に寶幢を建て、七に幢蓋を懸け、八に光を放ちて法界を照し、九に雜寶は外を莊り、十に四邊の階道は登陟すべからしむ。二は嚴園の中に、佛神力は是れ所因なり。忽然廣等は廣處を顯すなり。衆寶の下は亦十種の莊嚴なり、一に總句、二に寶を以て地に布き、三に寶牆、四に寶樹、五に香河、六に多の樓閣、七に光照、八に寶をもて地を莊り、九に妙香を出し、十に寶幢を建つるに十七種有り。三に虚空を莊るに亦十種有り、一に天宮、二に香樹、三に須彌、四に寶樂、五に寶樹、六に寶座、七に寶像、八に珠網、九に樓閣、十に解脫音樂なり。第二に嚴因を出す中に二有り、先に徵す、謂はく、何を以てか此不思議の嚴有る。故に二に釋する中に十句有り、一に是れ如來不思議の善根の所生に由るが故に。此は因に約す。二に是れ佛果無流の法に由るが故に。此は果體に約し下は果用を明す。三に總じて神力を擧げ、四に別して力通を擧ぐ。五と六との二句は身土無礙にして微細相入するを明し、七と八とは過去の佛を現じて現在の刹を照し、九と十とは佛を出し刹を現す。此上の莊嚴は並に是れ是の如く佛果の體用にして、餘位の能く知るところに非ず、是故に皆不思議

と云ふ。上來は一方の紙沍（しつこ）竟（つひ）んぬ。一に類（るい）して結（むす）する中に、此の如き紙樹（しじゆ）等とは此を擧ぐ。一切の法界は類を通じて法界は此現土に同じ。此處（こゝ）巖なるに隨へば、是れ須達（しよたつ）が造る所なり、然れども其れ細に據れば乃ち法界に稱周（しやうしゆ）し十方を兼ね、三際を盡す、通は局を礙（さ）へざるを以ての故に、須達の新造の巖は、細に異ならざるを以ての故に、所造即微細にして法界に同じ、常在靈山、及び案是所現の如きは皆此類なり。二に如來充滿等は智正覺世間圓滿を明す。是れ並に此所現の初の内に於て、各如來有りて俱に此に來詣して、紙沍の中に滿つ。三に業生世間の中に二あり。初に菩薩充滿し、二に十種の供養雲を雨らす。上來現淨土分竟んぬ。

【九】以下、集新衆分を釋す。

第五に集新衆分の中に二有り。初に所集の衆を明し、後に皆是如來威神力故とは集の所由を釋す。前の中に亦二有り、初に別して十方を集め、後に總じて其德を歎ず。初の中に、十方を即ち十伎と爲す。中に於て、初の二及び第六に於て各九門有り、餘方に十有り。先には東方の九義なり。一には集處の遠近なり、謂はく、不可說の初摩界を過ぐとは法の深遠を表す。二に世界海有り金剛等と名くとは、所依の法界を表す。金剛に二義有り、一に堅、二に利なり。雲にも亦二義あり、一に遍、二に潤なり。明淨にも亦二義あり、一に普照、二に離染なり。今梵本を勘ふるに、俱に此に明淨と名くるの言は、皆梵には毘盧遮那と名く。證にも亦二義あり、一に闇を破し、二に現を照す。莊嚴にも亦二義あり、一に事を飾り、二に理を嚴る。三に佛號等は能依の因果を表す、謂はく、明淨は前に同



じ、妙徳は梵に室利と名く、即ち吉祥の勝徳なり。王は自在を顯す。四に主菩薩の名を標し、能依の分目を顯すに、明淨は前に同じ。願は是れ白體の大願なり、光明は無明を破して法界を照すなり。五に眷屬俱に來り、六に供養雲を興す、謂はく、天華等の事供は虚空に滿てり。七に諸佛を禮供し、八に本方に樓閣華座を化作して、結跏して坐す。九に寶網をもて身を覆ふとは勝徳自嚴を顯す。若し下の餘方に準すれば第十を加ふ。或は鬘珠、或は天冠は其勝相を顯し、幘幘爲るが故に、餘方の世界の佛名等は、準釋して知んぬべし。南方供の中に、妙香等の雜事の、一切の佛世界に充滿すとは、此は並に法界の沙門に稱うて此供を成ずるが故に、是故に或は虚空に滿ち、或は法界に遍すと云ひ、或は一切の刹に通じ、或は衆生界に充ちて皆障礙無く、參はりて雜はらず。西方の供の中に同じく須彌雲と名くることは、妙高具徳の相を顯し、皆法界に充つとは、行は理性に同ずるが故に。一切如來の相好を須彌山と爲すは、果徳の妙高なるを明すが故に。菩薩の所行を須彌山と爲すは因行高く成ずるが故に。此等は並に人を以て法に同じ、正を以て依に同じ、果を以て因に同ずるは、無礙法界自在の徳なり。北方の供の中に、同じく衣を以て供するは、慚愧嚴身の相を顯すが故なり、亦人法教義等に通ず。東北方の中には同じく樓閣を以て供と爲すことは、重成高出階級の相を顯し、亦理事等に通ず。東南方は同じく圓滿光雲を以て供と爲すことは、是れ身に瓊ぶる所の具徳勝用を表すが故なり。内行及び外事に通ずと雖も、文の中に佛の無見頂相を以て供具と爲すは、尊貴の極を顯し、佛を以て佛を供する、

【第二に六六】以下、總じて衆德を歎ずる文を釋す。

方に際を窺むることを明すが故に。西南方は同じく毛孔より諸の光雲を出すことは、惑の薪を燒きて理を照すことを顯すが故に。身より此光を出し、乃し三世を照すは、九世の緣起貫通することを明すが故に。一切處に遍じて一切時を該ぬるを以てなり。西北方は同じく相好及び毛孔より三世の十身を出すは、三世間に通じて身業の勝能を明す。法界佛果の大用と同じて、以て供具と爲す。下方は同じく毛孔より十音雲を出すことは語業自在を明し、佛の果德機に應じて說法無礙の相に同ず。上方は同じく六處の内より、三世の佛、十度等の行を出し、因果圓融するは意業自在を明す。此上の十供の供具は亦初從り末に至るまで漸深の相を顯す、並に是れ圓滿教の中の菩薩、佛果に同じくして自在なり、是故に下位及び二乘等の能く知見する所に非ざるなり。第二に衆德の中に四十句有り、三に分つ。初の一句は總じて歎じ、二に成就三世の下の三十八句は別して歎じ、三に此諸菩薩の下の一は結歎す。別の中に亦三有り。初に佛の三業を攝することを明し、二に於大衆の中の下は攝化の智を明し、三に世界を知るの智なり。初の中に亦三有り、初の四句は語業自在を明す、一に佛眼を得て法を見、二に能く佛の所轉を轉じ、三に佛の圓音を攝し、四に因を超えて果に至る。二に於念念の下の六句は身業自在を明す。一は念念無間に諸佛の所に詣でて休息有ること無し、二に法界身雲、一は一切に遍することを明し、三に能く佛業に於て淨法身を現じ、四に幻通の力は摩中に初を現じ、五に常に佛の所に在りと雖も、而も衆生を化して恆に時を失せず、六に身の毛孔より法雷の音を出す、密嚴經の中に、金剛藏

菩薩の遍身の毛孔より同時に聲を發し、妙法を演說するが如き、亦此に同じ。三に知衆生  
 界の下の七句は意業自在を明す、一には衆生の緣集幻の如きを知り、二には諸佛、用有  
 ること、電の如きを知り、三には有趣に實を現すること夢の如きを知り、四には果起りて  
 因に翻ゆること鏡像の如しと知り、五には生の相は有なり、體は無なること炎の如しと知  
 り、六には廣器顯現すること、變化の如きことを知り、七には具足等は、能知に果智を具  
 することを結するなり。上來は佛の三業に同じ竟んぬ。二に衆生の三業を攝する中に十句  
 有り、三に分つ。初の五句は語業の攝生を明す。一には決定して宣說す、二には辯海無盡  
 なり、三には物の言音に同じ、四には理に於て礙へられず、五には評に於ては斯に盡く。  
 二に二句有り、身業の攝生なり。一に通智を具すとは、通は慧を以て性と爲すが故に妙智  
 と名く。二に勤行は魔を摧くとは、精勤力を以ての故に魔王摧伏す。又神通力を以ての故  
 に、邪を伏して衆生に歸依するが故なり。三に安住の下の三句は攝生の意業を明す。一に  
 は三達殊勝の智、二には世に處する無染の智、三には佛の圓果を得るの智なり。三に知一  
 切有の下の十一句は、世界自在智を明す。中に於て初の二は眞諦智を明す。一には安空を  
 了し、二には深入等は眞性を證し、三には量智普く入る、謂はく、眞を改めずして俗に入  
 るが故に、不壞智と云ふ。四には入り已りて、回轉して身を現すること自在なり。五には  
 同時に示現し、多處に生を受く。六には方圓等の形類差別を知り、七八二句は廣狹自在智  
 を明す、亦是れ微細の世界を知るの智なり。九には佛の持刹を得るの智なり、身能く佛住

【二】以下、第六に舉失顯徳分を釋す。釋の一爾時諸の大衆」等の下。

【摩訶日乾連】  
Maha-Maudgalyāyana  
日神通第一の人。

【摩訶迦葉】 Maha-  
Kasyapa 頭陀行第一の人。

に住するは、即ち器世間身なり。十には淨慧は十方を照し、十一には自在に普く周遍す。結文は知んぬべし。如來の神力は是れ衆を集むるの所因なり、此文應に前に在るべし、但し西方の語法に順ぜんが爲の故に、此後に在りて辨す、上來集新衆分竟んぬ。

【二】第六に舉失顯徳分の中に三有り。初には能不見の人を顯し、二には所不見の境を明し、三には不見の所由を釋す。初の中に、前の文は通じて大數五百を列ね、今此は別して上首を標するが故に、十大弟子を擧ぐ。舍利弗とは此には鶖子と云ひ、梵の正音には奢訶補坦囉と云ふ。奢訶は此には鶖と云ふ、即ち百舌鳥の類に當るなり。吳の僧會法師、六度集の中に釋して鶖鶖子と爲すは、此は是れ母の名なり。其母辯才有りて峻捷なること彼鳥に似同し、眼轉た明利なることも亦彼鳥の如きを以て、喩に從へて名と爲す。補坦囉は此には子と云ふ、兒を以て母に從へて名と爲り。古に譯して身子と爲すことは、梵語の中に身を名けて舍利と爲すを以てなり、佛の身分を舍利と爲すが如し、此に用ふる所に非ず。智論』の中に「亦是れ過去に發願して、釋迦佛の弟子と爲り、而も此名を立つ、論義を能くするを以て、亦優婆提舍と名く」と。二に摩訶目乾連とは、梵の正音には摩訶沒特伽羅といひ、此には大探救氏と云ふ。上古に仙有り、山の靜處に居し、常に菘豆を採りて食ふ、囚りて以て姓と爲す。尊者の母は是れ彼族、母氏の姓を取りて、而も其名と爲し、大神通を得たり、餘の此姓に簡ぶが故に大探救氏と云ふ、此と鶖子と二人の因縁は別に説くが如し。三に摩訶迦葉とは、梵音に具には摩訶迦葉波と名け、此には大飲光と云ふ、飲光は是



【頭陀の不行】Titā 譯して抖擻、浣洗といふ、是れ衣食住の三の食著をはらふ、行法なり

【餘の迦葉】十力 迦葉、迦耶迦葉、那提迦葉等。

【難婆多】Kevata 又は Kaivata の音譯、坐禪第一の人

【二鬼・事】旅人 二鬼の屍を諍ふ因縁を説く、是れ離婆多悟道の因縁なり。

【須菩提】Subhuti 解空第一の人。

【阿泥盧豆】Anuruddha 佛の從弟、迦毘羅城の釋氏、舊稱阿那律といひ天眼第一の人。

【難陀】Nanda 孫陀羅難陀に對して牧牛難陀といふ。

【金毘羅】Kaṃpha Ilā

【迦旃延】Kāśyapa Yama 論議第一の人の姓なり

【姓の名】迦多行 那は婆羅門十姓中の一。

れ姓なり。婆羅門姓の中に、上古に仙有り、身光は日月の光を飲奪す、迦葉は是れ彼族なるが故に以て名と爲す。是迦葉の身光も亦能く日月の光を飲奪す。又是は大富長者の子にして、大財姓を捨てて出家して、能く少欲頭陀の不行を行じ、大人の爲に識らる、餘の迦葉に簡ぶが故に大と名く。四に離婆多とは、具には頡盧伐多と云ひ、此には空星と云ふ、即ち北方の星なり。之を祀りて子を得たり、因りて以て名と爲す。又阿喇波多と名け、此には所供養と云ふ。有るが云はく、「假和合と名く」と。即ち「智論」の中の二鬼食する事をもて之を顯す。五に須菩提とは正しくは蘇補底と云ひ、此には善現と云ひ、亦是善實と云ふ、古に善吉と云へるは非なり。六に阿泥盧豆とは正しくは阿泥盧陀と云ふ、泥盧陀は此には滅と云ひ、阿は無と云ふ、即ち無滅と名く、是れ佛の堂弟なり。七に難陀とは此には喜木と云ふ、是れ牧牛の人なり、佛に牧牛の十一種の法を問へるに因りて、佛の一切智を具することを知り、阿羅漢果を得たり、性極めて聰明にして、音聲絶妙なり。人をして聞いて喜ばしむ、故に以て名と爲す。八に金毘羅とは正しくは劫比羅と云ひ、此には黃頭と云ふ。上古に黃頭仙有り、因りて以て姓と爲し、亦姓に従ひて名と爲す。九に迦旃延とは、具には摩訶迦多行那と云ふ、此は是れ姓の名なり、此には大剪髮種男と云ふ、婆羅門の姓なり。上古に仙は多く山中に靜處し、年歲既に久しくして鬚髮稍長じ、人爲に剔ることを無し、婆羅門の法として剔髮を爲すことを要す。時に一の仙に二子有り、俱に來りて父を觀る、子さき者は乃し諸仙の爲に髮を剔る、諸仙願護し後仙曹と成る。爾來此種を皆剪

【富樓…子】 *Purnamāhāryavānī-putra*  
 說法第一の人。

【鶯子】 舍利弗。

髮と稱す。尊者の身は是れ男子、威徳あつて特尊するところ、餘の此種を簡ぶが故に、大剪髮種男と云ふ。又西方に亦母の姓を取る者有り、今は是れ父の姓なることを顯すが故に男の名を置きけり。十に富樓那彌陀羅尼子とは、富樓那とは正しくは補刺拏と云ひ、此には滿と云ふ。彌陀羅とは正しくは梅呬利曳と云ひ、此には慈と云ふ、尼は是れ女聲なり、弗四囉は此に子と云ふ、即ち滿慈女の子なり、母に従ひて以て其名を立つること、鶯子等の如し。如是等とは其不見を結す。

第二に所不見の中に二有り、先には法界の因果を見ざることを明し、後には法界の菩薩を見ざることを顯す。前の中に十句有り、上の衆人所念誦の法と多分是れ同じ。問ふ、若し全に器無くんば、前に同念すること能はず、若し器有りて能く念せば、何が故に今乃ち之が不見を示さんや。答ふ、希法の心有れば、前は能く同念す、眼未だ開かざるが故に、之が不見を示す。又前には但し自らの三乗の佛果を念じ、今は一乘を示すが故に見ることを得ず。初の一は總なり、謂はく、如來斷盡き、作用無礙なることを顯すが故に自在と云ふ。下の九は別なり、一に勝果の位の二嚴、二に果位の分齊及び佛の所知、三に作用多端四に同音決定、五に攝相を離するの徳、六に無思の利物、七に威力自在、八に諸佛の所作を持す、九に所依の淨刹なり、此等は並に是れ前後所現の身土等の事なり。如是の下は其不見を結す。二に亦復の下は、菩薩衆を見ざることを明す。中に亦十有り、初に大會を見ずとは總なり、下の九は別なり。別の中に、一には境界業用集來の相を見ず、二には眷屬

の來處及び此中の宮殿に坐するを見ず、即ち前の樓閣を化作する是なり。三に加坐三昧觀  
察を見ず、四に菩薩の所作の供具等を見ず、五に受記長善等を知らず、六に菩薩所受の身  
に五身有るを見ざることに知んぬべし。七に菩薩の圓光等を見ず、八に菩薩の一身、一切十  
方に充滿することを見ざる等、九に菩薩所有の德行を知らず。又釋す、此上の九の中に、  
初の四句の中に、細かに開かば十句有りて、前の雲集の菩薩衆を釋す。後の五句の内にも亦  
十有りて、普賢等の本衆を釋すること並に知んぬべし。如是の下は總じて不見を結す。

三に不見の所由を釋する中に二有り、初に法、後に喩なり。前の中に亦二有り、先に因  
の時、其見の因を修せず、是故に見ざることを明し、二に亦無三昧の下は、果の時に絶し  
て其見の分無し、是故に見ざることを明す。前の中に四有り。初に行は劣にして勝に達せ  
ざることを明し、二に是諸功德の下は、勝は以て劣に過ぐることを顯し、三に何以故の下  
は、勝は以て劣に非ざることを釋し、四に是故の下は、劣の、勝を見ざることを結す。初  
の中に、先に微問して云はく、若し善根無くんば、應に會に在るべからずば、若し善根有  
らば、應に見ざるべからざるが故に何以故と云ふ。下の釋成する中に、初に總じて釋し  
て云はく、善行有るが故に會に在ることを得。是れ別異の善行なるを以ての故に見ざるな  
り。又凡に同ぜざるに由るが故に善根有り、菩薩に同ぜざるが故に、同善根無し。下は別  
して釋する中に十九句有り。初の十二句は別して、前の佛果を見ざるを釋す、中に於て初  
の二句は略して釋す。謂はく、初を釋するに、本大菩提の善根を修習せざるを以ての故に

本能く如來の自在を見るの善根を修習せざるが故に別異と名く。是故は因無ければ佛を見  
 ること能はず。自在は是れ前の佛果の十句の中に、初の句は是なり。二に但涅槃に入趣す  
 るの行を修するが故に、不修淨佛土行と云ふ。是れ前の十の中の末後なり、是故に初を擧  
 げ、後を擧ぐ、中は則ち知んぬべし。下は廣く捨する中に、初の七句は利他の行を修せず  
 後の三句は自の勝行を修せず。亦則ち初は是れ狭心、後は是れ劣心なり、文の釋は知ん  
 ぬべし。二に不求菩薩の下は、別して菩薩を見ざるの所由を釋する中に、七句有り。一に  
 は通明を求めず、二には彼善を修せず、三には彼願を生ぜず、四と五とは法空を知らず、  
 六には彼位に入らず、七には普眼を得ず。二に勝は劣に過ぐることを顯す中に、上の二種  
 の、修すること能はざる所の功德の法は、二乘に超過して、與に共ぜざることを明すが故  
 に、是故に彼法は此能修に非ず、彼を修すること能はざるを因縁と爲すが故に、彼に於て  
 見ること能はず等なり。謂はく、眼に見ること能はず、耳に聞くこと能はず、證に入るこ  
 と能はず、比して知ること能はず、察して覺すること能はず、慮りて念すること能はず、  
 智をもて觀すること能はず、意に思ふこと能はず。三に釋の中に、先は微問して云はく、何  
 を以てか此の如く、總じて知ること能はざる。是れ總じて知るべからざるが故に知ること  
 能はずと爲んや、二乘は總じて智無きが故に知ること能はずと爲んや、故に何以故と云ふ。  
 下に釋して、菩薩智の境と云ふは、是れ總じて知るべからざるに非ず、深智は能く知るを  
 以ての故に。聲聞智の境に非ずとは、亦聲聞は是れ智慧無きに非ず、但し智淺くして境深



【第二に果時六云】  
經の「亦三昧の清  
淨」等の下。

【四攝行】布施、  
愛語、利行、同事。

きが故に知ること能はず。四に是故の下は不知を結す、解すべし。上來は因を修せざるが故に見ざることを竟ぬ。第二に、果時は分を絶するが故に見ざることを明すとは、謂はく、小果を得るが故に、此法に於て分を絶して入ること無し。是故に前文には但不能修習等と言ひ、今此文の中には乃し三昧眼等無しと云ふ。故に知んぬ、前は因時に修すること能はざるに約し、今は果位に就いて、總じて分つこと無きなり。文の中に三有り。初には總じて擧げ、二には微釋し、三には不見を結す。初の中に十句有り、一に深定の眼無く、二に所得の法無く、三に大悲の功德無く、四に此處の智無く、五に大智の眼無し。此上は自らの勝徳無し。下の五句は利他の徳無し。二の微釋の中に、徴して云はく、聲聞の因果は、豈是れ佛境界の中の一分の所攝にあらざるべけんや、何を以てか總じて彼法無しと言ふや。若し總じて無くんば、彼は凡夫と何んの別ぞと、故に何以故と云ふ。釋の意は、三界を出づるを以ての故に凡夫に同じからず、權に住して實に乖くを以ての故に彼法無きなり。又四の失有るに由るが故に、是故に總じて無し。一に塵を出づれども而も細を離れず、謂はく、但し分段の三界を出づれども變易生死を離れざるが故に。二に權を得れども而も實を得ず。三に寂に滯りて而も悲を失す、四に自ら調して而も物を救はず。又初は過を離るること盡さず、二に法を得ること深からず、三に大悲心無く、四に四攝行無し。三に是故の下は不見を結す、上來は法說竟んぬ。問ふ、有る經に言ふが如し、聲聞緣覺の若は智、若は斷は皆是れ菩薩の無生法忍なりと、既に亦是れ彼菩薩の所得なり、何が故に此中

【三乘逐機の説】  
三乘の機相應の説

【法界緣起】  
法界の事法、有爲無爲、色心、依正、過去、未來、盡く一大衆を成じ、單獨に存立せずと説くもの

【成法因】  
第五、華嚴の第八等に十因を明す、今相違因を除ける

【問六六】  
以下の重ねて論ずるに、あり初に凡外道不問答、答の中先づ不堪を明す中、凡夫外道と餘の聲聞に就く。

に總じて無しと言ふや。一答ふ、二乗は是れ菩薩の法忍なれども、菩薩は是れ二乗の所知に非ず。一問ふ、若し爾らば、何が故に經に汝等所行是菩薩道と云ふや。一答ふ、回心に由るが故に、是れ漸悟の菩薩道にして、是れ頓圓に非ず、此は頓圓に約するが故に彼分に非ず。一問ふ、只聞くとも信ぜざるべし。一文殊行經の中の五百の聲聞の、聞くとも信受せざる等の如し。何を以てか此中に、總じて聞見せざる。一答ふ、彼は是れ三乘逐機の説なるが故に、亦聞くことを得しむ、今は此れ一乘の逐法高出するが故に聞くこと能はず、其在猶重陽の空に響き、雷を發し響を振へども、蟻子等の類は聞見すること能はざるがごとし。一問ふ、若し爾らば二乗は應に法界の所攝に非ざるべし。一答ふ、法界は廣きが故に二乗を攝す、二乗は狭きが故に法界を攝せず。一問ふ、法界緣起は一塵猶能く一切を攝す、何が故に、二乗は狭くして廣を攝せざるや。一答ふ、廣狹相攝は是れ菩薩の知る所、二乗は此無きが故に此攝に非ず。一問ふ、二乗は豈亦是れ菩薩の所知の法界ならずや。一答ふ、是れ此攝なるが故に、彼は知見せずして擧旨の如し。一問ふ、若し是れ此攝ならば、應に知見すること菩薩の如くなることを得べし。一答ふ、法界緣起に略して二門有り、一には頓緣門なり、成法因等の如し、即ち佛と菩薩は要す是を知見して、方に攝することを得べきのみ。二には違緣門なり、相違因等の如し、即ち二乗の衆は要す知見せざれども、方に乃し攝するのみ、此二の緣門を所起の法に望むれば、悉く功力有り、是故に此に同じく、緣起の所收に見不見の異有り。一問ふ、若し爾らば凡夫外道も亦是れ違緣なり、何んが此れ

【是故に云云】以下如聲を明すに、初に述門、後に本迹に約す。

【問ふ若し云云】以下二乗得法問答【聲旨：入る】此は違縁門を示して得の義と爲す。

【問ふ、若し云云】以下得應知見問答【問ふ二乗云云】以下行者趣入問答【答ふ云云】初に

比況して不信の失を示し、是故の下は勤めて見聞の益を成ぜしむ。

【第二に喩況云云】二に喩を釋す。經の一譬へば「餓鬼」等の下。

【第二に喩況云云】二に喩を釋す。經の一譬へば「餓鬼」等の下。

攝ならざる。』答ふ、『彼は無徳の人に於て此に堪へず、聾盲の如きが故に。設ひ餘の聲聞も猶恐らくは堪へず、是故に要す鷲子等を以て諸の大聲聞に類す。或は是れ菩薩の變化の所作にして、方に法の勝るることを顯す、是故に之を辨す。』問ふ、『若し爾らば此聲聞等は此法を得るや不や。』答ふ、『竝に法を得べし。何を以ての故に。聾盲の如くにして縁起に入るが故に、此を以て得たりと爲す、之を思うて解せしむべし。』問ふ、『若し得れば應に知見すべし。』答ふ、『若し知見せば即ち得ず、是れ相違縁起の攝に非ざるを以ての故に、得とは名けず。菩薩は此に同じからざるが故に例せず。』問ふ、『二乗の高徳にして尙聾盲の如し、今の凡夫の如き、豈受持することを得んや。』答ふ、『往昔凡の時に受持せざるが故に、今時對面して聾の如く盲の如し。今の如く。若し受けざれば還りて亦彼に同じ、是故に只高徳の二乗は聾盲の如しと爲すが故に、故に須らく受持すべし、信力を増長すれば、後に之を得しむべし。』

第二に喩況の中に、十の喩有りて之に況ふ。遠法師等の諸徳は皆十喩を將て、前の所述の佛果の十句の功徳に配するに、唯第九の一は天の喩にして上の第二の如來莊嚴に喩ふ、餘は皆次第して配釋すること知んぬべし。又此十の中に就いて、見不見の分別に三義有り。一に第一、第五、第十の此三は、二乗の佛果の功徳を見ざるに喩へ、二に第二、第三、第四の此三は、菩薩の能く果徳を見るに喩へ、餘の四は如來自ら果徳を見、亦二乗等の法を見るに喩ふ。又釋すらく、此十の別相は、一に鬼對恆河の喩は、二乗は所知障有るが故に

## 【四相】 生住異滅

殊勝の境を見ざるに喩ふ。辨法師の云はく、餓鬼の如きは、二乗の人の、菩薩の法師行の食を得ざるに喩ふるが故に餓と云ふ。鬼とは人に似て人に非ず、二乗の所得の涅槃は、似て而も眞に非ざるに喩ふるなり。裸形とは菩薩の慚愧の行服無きを以てなり、飢渴とは無二の理觀の其神を活すことを得ざるを以ての故に。擧身燒然とは、四相に遷されて息まず。畜獸所逼とは、生死は是れ自心の所作なりと知らず、乃ち怖れて之を捨つ。往詣恆河求水飲とは祇洹處に越きて、解脱の味水を求むるなり。或見枯竭等とは唯涅槃を證斷して法身の淨土、法界の徳水を見ざるなり。罪業障とは法執無明の所障に喩ふ。下は喩に合するのと知んぬべし。二に覺對夢境の喩は、二乗の人は劣を守り勝に乖くが故に、見ざるに喩ふ。先に喩、後に法なり。法の中に先に總、次に別、後に結なり。別の中に、菩薩の觀見に九種の因を出すが故に、知んぬべし。三に遇對雪山の喩は、二乗の人の狹心にして、悲無きが故に見ざるに喩ふ。四に呪見伏藏の喩は、彼二乗は巧方便無きが故に見ざるに喩ふ。五に盲不見寶の喩は彼二乗は淨の慧眼無きが故に見ざるに喩ふ。六に塗眼隱身の喩は、彼二乗は深智無きが故に見ざるに喩ふ。七に遍處定境の喩は、彼二乗は深定無きが故に見ざるに喩ふ。喩の中に天とは空處識處なり、衆生境界とは是れ青黃赤白なり。八に瞠身自見の喩は、彼二乗は深行無きが故に見ざるに喩ふ。九に二天隨人の喩は、彼二乗は密智無きが故に見ざるに喩ふ。十に滅定無見の喩は、彼二乗の住位は求むるを息むるが故に見ざるに喩ふ。上來は總じて擧劣顯勝分竟ぬ。



【二】以下第七に  
偈頌讚徳分を釋す  
【第一の頌云云】  
本文「堅固の人」以  
下。

【第二の頌云云】  
本文「眞の佛弟子」  
以下。

【第三の頌云云】  
本文「堅固の人」以  
下。

【第四の頌云云】  
本文「譬へば大寶」  
以下。

【第五の頌云云】  
本文「譬へば青寶」

第七に偈頌讚徳分なり、中に於て十方の菩薩の説を即ち十段と爲すに、初段の中の十頌を二に分つ。初の九は前の三昧の業用の明し、後の一は用の所依を結す、即ち是れ前の師子奮迅定を顯すなり。前の中に初の五は、佛の身土の無礙を數す、中に於て、初の一は自在、次の二は甚深、後の三は廣大なり。後の四は菩薩の衆徳を數す。中に於て、一には前の雲集を顯し、二には願行深し、三には二乗を超え、四には定慧堅なり、二に用の所依を結す。第二の頌の中に六に分つ、初の二は衆の具徳を數す。初は位滿、後は徳深なり。次の二は處に衆の集れるを數し、次の一は斷障證理、次の二は不動と普遍、次の一は佛力に結歸し、後の二は佛法に了達するに、初は義、後は教なり。第三の頌の中に二に分つ。初の三は法説にして、一には佛の説法は、時に應ずることを數じ、二には佛力の用は邪を摧くことを數じ、三には佛法は情表を超ゆることを數す。後の七は喻況の中に、一には智は三際に達するの喻、二には無漏徳の喻、三には自在遍知の喻、四には徳に限礙無きの喻、五には法輪荷載の喻、六には無礙速遍の喻、七には智輪爲本の喻なり。第四の頌の中に、一には徳山猛物の喻、二には悲海除災の喻、三には行高深證の喻、四五の二頌は智海出生の喻を明す、六には巧現應機の喻、七には隨願畢遂の喻、八には種智普照の喻、九には隨方現法の喻、十には見佛淨長の喻なり。又釋すらく、此十の中に、一は大福、二は大悲、三は大定、四五は理智、六は量智、七は悲用、八は種智、九は鏡智、十は慈用なり。第五の頌の中に四に分つ、初の一は見の益を數じ、次の三は菩薩を益するに、

珠」以下。

【第六の頌云云】  
本文「最勝は三世」  
以下。

【第七の頌云云】  
本文「大智無礙」以  
下。

【第八の頌云云】  
本文「癡を離れ」以  
下。

【第九の頌云云】  
本文「無量無數劫」  
以下。  
【第十に云云】本  
文「菩薩は如來」以  
下。

一は總じて歡じ、一は別して法を得しめ、一は別して行を成せしむ。次の一は三世間を現じ、次の三は法を現じて益を成ず、一は能を擧げ、一は廣く現じ、一は智を成ず。後の二は法輪は物を益す。第六の頌の中に三に分つ。初の三は凡小の知ること能はざるを明し、次の四は所不知の徳を顯す。一は智深、一は福廣、一は巧化、一は徳法なり。後の三は能知の徳を顯す。一は修行、一は我を破し、一は願滿なり、斯等の能知は、是れ佛徳に非ざれば、總じて知るべきに非ず。第七の頌の中を三に分つ。初の五は佛の體徳圓備を數す。中に於て初の一は、總じて身淨を數じ、次の二は萬行を因と爲す、次の二は障を滅して徳を成ず、次の三は妙用の測り難きを數す。中に於て初の一は色の用、後の二は智の用、末後の二は總じて結す、一は不思議、一は不議なり。第八の頌の中に三に分つ、初の二は智徳を出すに、一は聞に依りて出で、一は心に依りて出づ。次の三は堅固の行なり、一は精進行、一は信智行、一は回向行なり。後の五は斷徳の行なり、中に於て初の二は、離染して自行を成じ、後の三は離染して利他を成ず。第九の頌の中を四に分つ。初の二は佛の語業の利益を數じ、次の二は身業の利益、次の二は身語雙益、後の四は利益見聞なり。第十に十一頌有り、四に分つ。初の二は佛の菩薩を益するを數す、一は徳を現じて見せしめ、一は法を轉じて聞かしむ。次の五は佛の、生の爲に苦を忍ぶことを數す、是れ大悲深厚なり。次の一は苦を忍ぶの所以を釋し、餘の三は佛を見たてまつり益を成ずることを明す。上來は偈讀分竟んぬ。

【三】以下第八普賢開發分を釋す。

（二）下は第八に普賢開發分を明す、衆をして信を生ぜしむるが故に。中に於て二、初に長行、後に偈頌なり。前の中に三、初に說意を明し、二に能說の方便を顯し、三に所說の分齊を辨す。初の中に欲重等とは、前は教主自ら此定に入りて、廣く其事を現することを明し、法界を開現して未だ言說行らず、今明すらく、普賢は言を以て廣く說きて、更に重ねて前の定を聞き、法界を用ひて便ち顯現し照明し、諸の菩薩をして、同じく此法に入らしむるが故に重開等と云ふなり。二に以法界等の下は能說の方便を明すに三有り、初に總、次に別、後に結なり。別の中の十一種の方便に、以と言ふは是用なり、此等の法界等の諸方便を用ひて、十種に廣く如來の三昧の徳を説くことを得るなり。一に法界等とは、謂はく、法界の既に邊盡無きが如く、此能說の方便も亦法界に同じきが故に等と云ふなり、餘は皆是の如し。何を以て爾るとならば、奮迅定の業用廣大なるを以て、餘の方便を用ては顯すこと能はざるが故に。是故に十一は皆無分齊の法を將て、用を以て之を類す。此一は是れ總句なり、餘の十は皆是れ法界の別句なり。中に於て希望は始に約し、欲は終に據り法光は是れ能化の法、隨時は根に就きて、生熟の時等に約す、餘の門は知んぬべし。三に爲諸菩薩の下は顯意を結成す、謂はく、法界等の方便を以て、諸の菩薩の爲に、十種に廣く師子三昧を説く、虚空界等の方便も亦十種の説有り、餘は竝に之に準ずべし。三に何等爲十の下は所說の法を明すに亦十門有り、前の能說に望むるに二門有り。一に次第して前の十一の方便に配するに、謂はく、前の方便を以て、其次第の如く此所說を説く、是

故に各各一種に配す、唯し第十の中に後の二方便を攝す、準釋して死んぬべし。二に前の十一の方便の十一に皆十種の廣説有れば、則ち一百一十門を成す、細に思ひて、準釋して義理を見つべし。此十は何の別ぞ、一に多佛出づ、二に多時に説く、三に多處に現す、四に多衆を攝す、五に一念に九世を攝す、六に一身をもて法界に充つ、七は依報の境の中に佛徳の位を現す、八に依報の塵中に佛の自在を現す。前と何の別とならば、境は麤、塵は細なるが故に別なり。九に正報の毛孔に音を出して恆に化す、十に遍く道場に坐し常に法輪を轉す。此十は竝に此れ師子奮迅三昧の徳なり、猶是れ略して説く。佛子の下は、未説の者、更に廣多なることを顯す。唯如來智境とは、更に廣多に有れども、菩薩の能く知るところに非ざることを明す。第二に爾時の下は其重頌を明す、文の中に亦二有り。初に意を序し、後に正しく顯す。意の中に承佛力とは自の能に非ざることを顯すが故に。觀如來とは所承有ることを明すが故に。觀大衆とは所爲有ることを明すが故に。餘の句は其所説を觀するが故に、此等は竝に是れ佛果の差別の徳なるが故に。正しく顯するが中に、前の十法に於て次第に之を顯す。初の中に一一毛孔中とは、前的一切法界中を顯し、餘の三句は佛與等を顯す。二の中に淨法輪は、前一切の佛所説を顯し、三の中に最勝如坐等は、前の現成正覺を顯し、四の中に菩薩雲集等は、前の大衆皆往詣等を顯し、五に中に説諸法界は、前の充滿一切法界を顯するなり。六の中に顯現諸佛初入法界智海等は、前の充一切世界海等を顯し、七八の二頌半は前の第七法を顯し、安住於如來一切諸境界とは、



【三】以下第九毫  
光示益分を釋す。

前の一一の境界を頌するなり。亦有本には一切諸世界に作る、世界は亦是れ依報の境なり。安住如來地とは、前の自在功德地を頌するなり、中間は竝に是れ三世の佛の功德の法なり。九の中に初の二句は、前の第九の法を頌し、後の二句は却りて第八の法を頌す。最後の頌の中に、初の二句は前の遍坐を頌し、後の二句は常説を頌す、上來は開發信分竟んぬ。

自下は第九に毫光示益分は、衆をして法界に證入せしむるが故に。中に於て三有り。初に佛の放光を擧げて示法の緣と爲し、二に時祇洹の下は、衆の、緣に依りて法を見ることを明し、三に其有衆生の下は法を見て益を得ることを辨じ、正しく法界に入るなり。初の中の五句は、先に意を標す、菩薩、因人をして、分に隨ひて亦此三昧を得しめんと欲するが故に。又此三昧の中の所顯現の事は、即ち是れ大衆前に疑問とする所なるが故に、佛、問に答へて此定に入り、衆をして亦得しめ、方に益と爲るなり。二に放白毫光とは中道平等白淨法界を顯す、是れ前の三昧攝生の用なり。三に名照法界とは義に依りて名を立つ、謂はく、三世の法界法門を照現して、諸の菩薩をして此門に入ることを得しむるが故に云ふなり。四に眷屬を攝するは、主伴を具することを明すが故に。五に照十方等とは攝化の分齊を辨す。二に衆をして法界を見しむる中に二有り。先に能見の人を擧ぐ、謂はく、普く雲集するは新舊二衆に通ずるなり。二に所見の法を明す中に亦二有り。初に此方の法界を見、後に十方の法界を見ることを類す。初の中に亦二有り、先に一切の世界の中に現身說法するを見、二に或見天宮の下は、一切の宮殿の中に現身說法するを見ることを

明す。前の中に先に所現の處を擧げ、如是等の下は正しく現身說法を明すに、三世間を具  
 すること知んぬべし。二に天宮等の中に亦二有り、先に所現の處、即ち前の世界の中に於  
 て、更に微細の十種の宮殿を取る。二に現種種身の下は正しく現身說法を明すに、亦十種  
 有り。中に於て種種持とは是れ義持なり、教持は是れ法持なり。此等の所現は、竝に是れ  
 通じて前の十句の疑問を答ふ、謂ふは、佛自在等は準思して釋すべし。二に十方を見るを  
 類する中に二有り、初に此を擧げて彼に類し、二に自在を顯す。彼に類する中に、初に識  
 に十方世界に類す。諸業所起とは、彼十方の中の器世間及び衆生等なり、竝に是れ實報顯  
 現するが故に名く。二は細にも孔の中に類す、知んぬべし。二に自在を顯す中に、初の一  
 句は廣事を壞せず、謂はく、毛孔微細の中に在りと雖も、而も亦三世九世の廣大無邊の衆  
 生界等を壞せず、差別して宛然たり。次の三句は業用を明すに、一に其心を照し、二に爲  
 に身を現じ、三に法を開示し、後の一句は神力を結す。第三に見法得益を明す中に二有り、  
 先に見法の因縁を辨じ、後に所得の益を辨す。前の中に亦二有り、初は佛に縁有るに約す、  
 宿縁あつて見ることを得。二に行已に修するに約す、徳を具して方に入る、三句有り、一  
 に利他、二に自利、三に入法の方便を攝成す。二に所得の益を明す中に三有り。初に見る  
 に因りて法を得ることを明し、二に彼諸の菩薩の下は、法に因りて徳を成ずることを明  
 し、三に爾時の下は、徳に因りて用を起すことを明す。初の中に二有り、先に速得の下の  
 一句は其所得を標す、謂はく、佛地廣大の三昧を得たり。此衆は竝に是れ普賢位の中の諸

の菩薩なるを以ての故に、是故に所得に漸次有ること無し、故に即ち究竟するなり。二に  
 或得の下は其所得を辨す、中に於て三有り。先に總じて所得を標するに略して十門を列ぬ。  
 中に於て初の六は菩薩の行位の究竟を得ることを明し、後の四は佛果の自在成滿を得るこ  
 とを明す。二に此諸菩薩の下は、略を結して廣を顯す。中に於て初に數を結し、後に名を  
 結す。名の中に十句あるは是れ增數の十なり。何を以てか知るとならば、數を結する中に、  
 十不可說等と云ふを以ての故に知るなり。種種道とは前を結す、法身は是れ智の所遊の處  
 なるが故に道と云ふ。然るに多類の不同有るが故に種種と云ふなり、理實には無二なり。  
 何を以てか多と言ふや、謂はく、攝生異なるが故に。能遊の智に淺深有るが故に。二に種  
 種門とは前の色身の異類を結す、別を標するが故に門と云ふ。三に種種入とは諸行を具し  
 て能く證入すること有ることを結するが故に。四に種種度とは諸波羅蜜度到彼岸を結する  
 が故に。五に方便とは前の淨行の巧能く圓かなることを結するが故に。六に至とは菩薩  
 の究竟地を得ることを結するが故に、七に方とは菩提自在に十方に遍することを結するが  
 故に。八に光明とは三昧の業用は光明を起すことを結するが故に。九に功德及び具と  
 は、諸行の智力を結するが故に。十に自在とは無礙辯才を結するが故に。三に深入菩薩の  
 下は但前より廣きことを釋す。初の句は所得の三昧の一門なり、餘は類して之に準すべし。  
 中に就きて二有り、先に因を明して廣の義を顯す。中に於て二有り、初に深く因位を究め、  
 自分の終極を明し、後に入如來海の下は、妙に果海に契ひ、勝進圓滿することを顯す。前

の中に三有り、初の一句は總じて標し、二に所謂の下は百門をもて別して辨じ、三に如是  
 の下は略を結して廣を顯す。此百三昧は上の十句の種種の中に於て、一一に各各此の如く  
 百門と及び後に廣を結すると有り、彼十種は是れ大門を標するを以ての故に。所謂の已下  
 は是れ別して辨するが故に、是れ上の文に數を結して十不可説と云ひ、此中の下は結して  
 直に不可説と云ふ、故に知んぬ、此は是れ十の中の一なることを。又釋すらく、此百は但し  
 是れ前の十が中の、種種の門の内の一門なり。何を以てか知ることを得るとならば、以下  
 に結して不可説刹塵三昧門と云ひて、道等と云はざるが故に知ることを得、又上の文には  
 但し十不可説等の妙功德と云ひて、唯三昧と言はざる故なり。問ふ、此種種の門の内に、  
 舍んで陀羅尼門等の無量の諸門有り、何を以てか此中に、唯三昧門を辨するや。答ふ、初  
 に標して建得如來不思議自在三昧と云ふ、是故に此に就きて以て廣く之を顯す。又前に爲  
 欲令諸菩薩住劔子奮迅三昧と云ふ、是故に偏に此門を顯す、理實には諸門に皆具せざること  
 と無し、下の文に云ふが如し、「一一に皆不可説等の大悲の法門を得たり」とは、亦是れ此  
 類なり。又此百門は竝に業用の異なるに由るが故に、差別して名を立つ、準釋して知んぬ  
 べし。中に於て、初の一句は所依の本を明し、無盡の行海を以て用ひて平等法界に類し、出  
 纏究竟じて圓明具德ならしむるが故に、以て名と爲し、最後の一句は其位に攝歸することを  
 明すが故に、觀察劔子奮迅菩薩三昧と名く。上の諸の三昧は、皆此三昧に趣向するが爲  
 の故に觀察と云ふ、然るに此佛地所得に同じからざるが故に菩薩と云ふなり。中間の諸名



【第二に云云】以下第二に法に因りて徳を成ずるの文を釋す。

【第三に云云】以下第三に徳に因りて用を起すの文を釋す。

は義に隨ひて思ひて釋すべし。二に入佛果とは前の所得の因位の終盡するに由る、是故に果海に方に能く趣入す、知んぬべし。上來は見に因りて法を得ること竟んぬ。

【第二に法に因りて徳を成ずる中に二有り、初に坐をして廣大ならしめ、二に現大自在の下は正しく所成の徳を顯す。中に於て二有り、先に別して顯し、後に總じて結す。別の中に十門有りて徳を顯す。初に深智を成就するの徳、二に悉爲衆生の下は、法を了して師と爲るの徳、三に樂寂滅の下は、縁に隨ひて著する無きの徳、四に安住莊嚴の下は衆生を成就するの徳、五に解一切衆生の下は解深くして、行を具するの徳、六に具足十力の下は得法智能の徳、七に巧妙方便の下は巧便勝智の徳、八に得一切法無礙の下は理智の眞に契ふの徳、九に放淨法光の下は攝生見佛の徳なり。中に於て、初は生を攝して益を成じ、後に常見の下は見佛得益なり。諸法の自在に大小相攝することを分別し了知するを以ての故に、一切の法に於て無諍境界を得るなり。十に決了如來の下は照法圓滿の徳なり。中に於て先に總持轉法の徳、二に成就如來の下は、妙に佛境を窮むるの徳なり。二に彼諸の下は總結なり、知んぬべし。上來は所成竟んぬ。

【第三に、徳に因りて用を起すを明す中に三有り。初に總、次に別、後に結なり。初の中に深入等は前を結す、身中等は用を起すの處なり、以樂法力等は用の因なり、於念念等は總じて用の相を擧ぐるなり。別の中に十事の差別は知んぬべし。結の中に法力とは、是れ此所得の法界法門の力なり。上來は大段第九に、示法成益分竟んぬ。

【二】以下第十文殊述德分を釋す。

自下第十に文殊述德分なり、中に於て二有り、先に述讚、後に顯德なり。前の中に二有り、先に序意は知んぬべし、後に正しく頌するに、十三半頌有り、二に分つ。初の五は祇洹の中の所顯示の法を教す。中に於て初の二は祇洹中器世間自在の用を教じ、次の二は菩薩の衆生世間自在の用を教じ、次の一は正覺世間自在の用、二に餘頌は諸の菩薩等の得法業用を教す。中に於て、初の一頌は前の境界等の中の所出の妙用の内に、初に三世の佛の功德を教し、次の一頌は前の第二の句の説衆生淨業果報等を教じ、次の一は超えて出佛化身雲等を頌し、次の一は一切の佛刹に於て佛の功德を讚するを頌し、次の一は超えて末後の轉法等を頌す、即ち方便度生是なり。次の一は却りて願行莊嚴等を頌し、次の一は三世の佛の嚴道場雲等を頌し、末後の一頌半は所歎の普賢行等を頌す。此等は竝に是れ祇洹林の中の當時所現の事なり、今文殊の頌の中に述讚して辨す。第二に得益を顯す中に三有り。初に所得の行體を明し、二に一毛孔の下は所得の行相を明し、三に隨其所應の下は行の勝用を明す。初の中に佛の三昧の照すに由るが故に此大悲を得て利他の行體と爲す。二に毛孔の光所出の尊重身雲は大悲の相を明す。第三の勝用の中に就きて二有り、初に總じて大用を辨じて以て法界に滿つ、二に現不可說の下は別して悲用を顯す。中に於て五門有り、一に欣厭の二門を以て化し、二に或於一切世の下は十度門を以て化す、中に於て三有り。初に現處を明し、二に爲一切衆生の下は正しく所現の十度を明す。中に於て初の六は知んぬべし。七に善知時會従り下は方便度を明し、八に悉能供養諸佛菩薩は、此

一句は是れ顯度なり、九に降伏の下は是れ力度なり、十に知一切の下は是れ智度なり。三  
 に以如是の下は、法をもて化を成ずることを結す。三に或現天宮の下は、三輪門を以て化  
 することを明す。中に於て四有り、初に化處を明し、二に大悲智の下は化心を明し、三に  
 或以名號の下は化行を明す。中に於て、光明等は是れ身業神通輪なり、餘の二は知んぬ  
 べし。四に現處處の下は化實を明す。謂はく、此菩薩、法界に遍くして化用攝生すと雖も  
 而も本此佛の衆處の園内の座上を離れず、此れ不動にして而も普遍し、繁興すれども而も  
 恆に寂靜なることを顯すなり。四に或放化身の下は、三世間の身を以て化する。中に於て  
 初に智正覺身を以て化する。無二とは爲と無爲と無二なり、又一身は即ち一切の故に無二な  
 り。二に或現聲聞の下は、衆生世間身を以て化することを明す。三に或現一切城邑等像は  
 是れ器世間の身、共に隨ひて化用を結成す。五に或現種種の下は三業門を以て化する。中に  
 於て初に身語の化を明し、次に種種巧術の下は意の化を明し、後に悉現の下は化處を結成  
 す。上來、會の初從り此に至るまで、十段同じからず、總じて本會を明し竟んぬ。

【五】以上は本會  
 を釋し竟れるを以  
 て、以下末會を十  
 門を以て釋す。

第二に、爾時殊從り下は、其末會を明す。中に於て前は則ち末に異ならざるの本なる  
 が故に、卷くと雖も恆に舒ぶ、即ち後の文是なり。後は則ち本に異ならざるの末なるが故  
 に、舒ぶと雖も恆に卷くと、即ち前の文是なり。是故に本末無礙にして同じく一品と爲すの  
 意、此に在り。今通釋するに、此下の文、略して十門を作る。一に諸の古説を叙す、二  
 に會數の閉合、三に會主の多少、四に會の名義を定む、五に二位統收す、六に分ちて五相

【二六】 初に古を叙す。

を成す、七に圓に始終を攝す、八に法界の人類を明す、九に法界の事義、十に文に隨ひて解釋す。

【二六】 初に古を敘する中に諸説極めて多くして、以て備に擧げ難し、且らく一二を叙せん。

一家に云はく、此中の知識に四十五人有り、後の文殊を立てざれば只四十四人有り。初の

一は是れ十信の知識、次の四十は是れ十住等の四十位の知識、次の二は等覺位の知識と爲

し、後の一は是れ妙覺位の知識なり、舊に補闕の文無きを以ての故に。但四十四を辨ず

るのみ。光純等の諸徳、竝に多くは此説に同じ。更に一家に依らば、總じて位に配せず、

亦懸に科せず、但諸會に隨ひて文に依りて散釋す。即ち五臺論、及び意法師等の如き、竝

に此釋に同じ。此二の中に前の説は文に於て小く違し、後の説は義に於て妨無し、深思

して見つべし。

【二七】 二に會數の開合を明す。

二に會數の開合を明さば、中に於て六有り。一に若し所攝の機に約すれば唯三會有り、

一は攝比丘會、二に攝龍王會、三に善財會なり。功德雲より已去は竝に同じく第三會の攝

なり、所攝の機に差別無きを以ての故に。二に若し能化の主に就かば五十二會有り。謂は

く、初の三と及び後の第五十四普門城の會は、俱に是れ文殊にして別の主無きが故に。餘

の五十一は各別の人の會なり、是故に主に約すれば唯五十二なり。三に若し能所通じて

辨するに約すれば五十五會有り、謂はく、善財に五十三有り、比丘及及び龍とに各一有

るが故に、四に若し主伴別して分つに約すれば一百一十會有り、下の文に辨するが如し。



【二八】三に會主の多少を明す。

【二九】四に會の名義を定む。

五に若し散説の所依に約すれば、三千大千世界微塵數の會有り、後の文殊の處に説くが如し。此は彼三乘の機を引くに約して辨す。六に若し普賢の徳に約すれば十方世界微塵數の會有り、下の結通の處に辨するが如し。

(二八)三に會主の多少を明さば二重有り。一に若し唯一人に就きて説かば五十四人有り、謂はく、五十五會の中に於て四は唯一人、謂はく、文殊なり。又兩會に各二人有り、謂はく、遍友衆藝、并に童子、童女なり。是故に會には五十五有れども主は五十四有り。二に若し會に約して人を顯さば五十七人有り、謂はく、五十五會の中に於て、二處に各各一を加ふ、謂はく、遍友等知んぬべし。

四に會の名義を定むとは、問ふ、「此等の諸會は竝に佛の説爲し、何んが經と爲ることを得ん。」答ふ、「此等は是れ傳法の菩薩なり、結集當時の求法説法の諸の菩薩の事は、上の本會所現の祇洹自在等の法に同じく、彼大衆をして觀入りて法に入らしむ、佛語無しと雖も豈亦經に非ざらんや。」問ふ、「前の本會の中に、佛、説くこと無しと雖も、諸の所現の事、竝に佛會の中に在り。今は此れ乃ち遠方の異處に在りて説く。佛説に非ず、復佛に對せず、豈例と爲ることを得んや。」答ふ、「遠處に在りと雖も而も本會を離れず、是故に常に佛前に在り、上の文の中の、祇洹林の内の如し、一一の境界に尙十方一切の佛刹を攝す、況んや此諸處を攝せざらんや。是故に此五十五會は本を出でざるが故に、名けて一會と爲す、謂はく、入法界品なり。」問ふ、「既に此諸處、竝に祇洹に在らば、下の文の善財は應に

普賢、及び佛の大衆、此重閣に在るを見るべし。何が故に、乃ち金剛道場に在るを見るや。答ふ、「覺樹金剛を八會の本と爲るを以ての故に、是故に覺樹を動せずして、諸會處に通ず、末を尋ねて本を見るに、還りて此に在るが故に。又此會の初に、普賢及び佛、祇洹の中に在り、更に移動無ければ之を覺樹に見る、即ち此祇洹も亦樹下に在り、之を思ひて見つべし。」

攝す。

五に二位を

五に二位を攝すれば、此五十五會は二主に統收す、初の文殊より後の文殊に至るは是れ文殊の位、般若門に屬し、後の普賢の一位は法界門に屬す、般若に非ざれば、以て法界に入る事無し、是故に善財創めて文殊を見、法界に入るに非ざれば、以て般若を顯すこと無し。是故に善財終に普賢を見、是故に二人を二位に寄せて以て入法界を明す。又前の文殊は則ち法界甚深の義、後の普賢は法界廣大の義を顯す、是故に二門相影して具德す。問ふ、「前の中に亦功德雲等の餘の善知識有り、何が故に乃ち總じて是れ文殊と云ふや。」答ふ、「皆是れ文殊攝化の德なるが故に、悉く文殊の智慧の大海從り出生する所なるが故に、是故に下の文に或は「文殊、我に相厭の法を教ふ」等と云ふ。彌勒も亦云はく、「汝今諸の善知識を見ることを得て、我所に來る、皆文殊師利の攝受する所に由ると、之を勘ふべし。是故に有形の文殊を閉覺の初縁と作し、無相の妙徳を終歸の妙趣と爲す。」中に於て三有り、初の一は始起を實際に明し、二に功德雲從り下は善修を實際に明し、後に文殊は終歸を實際に明す、此れ亦是れ一周の行相なるのみ。實際の中に就きて、初の四十人は

【三二】 六に五相を分つ。

位内の行縁を明す。即ち四十心の位に寄す、後の十は位後の行縁を明す、即ち位外の所修等なり。

六に五相を分たば、長く此文を科して、總じて五相と爲さば、一に寄位修行の相に四十一人有り、二に摩耶夫人従り下に九會十一人有り、會縁入實の相を明す、三に彌勒一人は攝成因の相を明す、四に後の文殊一人は智照無二の相を明す、五に普賢の一位は顯因廣大の相を明す。又此五相亦是れ菩薩の五種の行相なり。一に高行、二に大行、三に勝行、四に深行、五に廣行なり。

【三一】 七に圓に始終を攝す。

七に圓に始終を攝すとは、謂はく、此諸會の差別の位の中に、一一に各一切の諸門を攝す、是故に一位に即ち五十五、及び百一十、并に剎等有り、一の如く一切も亦爾り、重重も之に準ぜよ。但し法に寄せて異を顯すが爲に、之を前後に布く、之を思つて見つべし。問ふ、「若し一即ち一切を具すれば、何んが廣く諸位を歷ることを須ひんや。」答ふ、「此歷る所、竝に是れ一が中の一切なるが故に一を出でず。問ふ、「若し是れ一が中の一切ならば、一を得ば即ち多を得ん、彼何んが更に歷ることを須ひんや。」答ふ、「一を得ば即ち是れ多を歷、是故に同時に障礙有ること無し、之を思つて見つべし。」

【三〇】 八に法界の人類を明す。

八に法界人類に二行り、先に類別を辨じ、後に義相を顯す。前の中に總じて通論するに五十七人有り、と雖も、流類を收攝するに但二十有り。一に菩薩、二に比丘、三に尼、四に優婆塞、五に優婆夷、六に童子、七に童女、八に天、九に天女、十に外道、十一に婆羅門、

【四】九に法界の事義を明す。

十二に長者、十三に博士、十四に醫人、十五に船師、十六に國王、十七に仙人、十八に佛母、十九に佛妃、二十に神なり。二に義相を顯す中に四句有り、一に果の攝化に約すれば、總じて是れ佛智の攝生の用にして、海印三昧の顯現する所なり。二に因の成行に約すれば、總じて是れ菩薩の成行の攝生、但し願力に隨ひて形の差別を現じて、以て羣機に應ず。三に義に約して徳を顯さば、總じて是れ緣起法界の中に、人法門の攝なり。四に相に約して異を辨ずれば即ち是れ菩薩なり。五に生に收めらる、一に息苦生、二に隨順生、三に最勝生、四に増上生、五に最後生なり。良醫等の如きは息苦生の攝なり。外道等に女人等、夜天等は皆隨順生の攝なり。大光王等、善現比丘等は皆勝生の攝なり。滿足王等及び所餘は皆増上生の攝なり。彌勒等は皆最後生の攝なり。通じては即ち前の四に各各具す。之を知んぬべし。中に於て菩薩に六有り、三處に身を現す。一は初の文殊を佛母と爲るが故に、本有の緣の故に、初位劣なるが故に唯一人なり。二に中間に漸進して二人を現す、謂はく、觀音正趣なり。後位成熟して徳の勝るを顯すが故に、共に三人有り、謂はく、彌勒と文殊と及び普賢となり、餘人は位別に寄顯す、文に至りて當に辨すべし。

九に法界の事義の中に、下の諸位に通じて總じて十門有り、一に正報法界、二に依報法界、三に現相法界、四に表義法界、五に言說法界、六に義理法界、七に業用法界、八に說往因法界、九に結自分法界、十に推勝進法界なり。然るに此十門は同一緣起互融無礙なり、一に隨ひて各具す、下の文の中に於て具不具有り、文に隨ひて之に準すべし。



【三五】十に隨文解釋するに五、二に寄位修行相、三に攝德成因相、四に智照無二相、五に顯因廣大相、今は初なり。

【至相】至相大師智嚴、華嚴宗の第二祖、本經を釋せる搜玄記の外、孔日章、五十要問答等の著あり。

【寄位修行の相】信、十住、十行、十廻向、十地の四十一位に寄せて修行轉勝の相を明す、文殊の教化によりて善財信位に入る文を釋す。

【三會】以下三會を分つ、即ち攝比丘會、攝龍王會、攝善財會なり、今は初の釋なり。

(二五) 十に文を釋せば、今至相の科に依りて此文を釋せん。初の寄位修行の相の中に就いて四十一の知識有り。内に初の文殊一人は十信の知識に寄當す、信は位を成ぜざるを以ての故に十人を辨ぜず、餘の四は位成するが故に各十行り。

初の中に就いて二に分つ、先に發起能化の縁を明し、後に爾時尊者承力の下は彼化事を成ずることを明す。初の中に三有り、先に主伴閣より出づるは、本に依りて末を起すことを明す。如を證せば念を離るを善安住と名け、法界數重を名けて樓閣と爲し、此正證從り後の妙智を起すを、閣從り出づと名く。同行とは智の眷屬なるが故に。文殊は是れ吉祥智を表すを以ての故に。菩薩は是れ内の眷屬、餘の力士等は外の眷屬なり。十大とは梵に提婆と云ひ、此には天と云ひ、亦神と云ふ。上の初會の中の地神河神等と同じく、竝に是れ法門の神なり、名の如く準釋すべし。此は内報離染を顯す。次に八王有り、法自在を表すこと、知んぬべし。此れ竝に文殊の威徳を顯すのみ。二は俱に佛前に到る、三は敬を設けて辭し去るは、機に就いて救濟することを明すが故なり。

(二六) 二に化事を成ずる中に三會有り、即ち三段と爲す。初に攝比丘會の中に二有り、初に身儀の益を明すは則ち根熟をして欲を起さしむ。二に爾時文殊告諸の下に語業攝益を明すは、則ち正に法門を授く。前の中に七有り、初に勝縁を觀、二に勝念を起し、三に勝機を攝し、四に勝境を示し、五に勝益を明し、六に勝人の所に到り、七に勝攝を蒙る。初の中に驚子、會に向ひて盲の如し、何が故に此中に乃ち見ることを得と云ふや。釋すらく、本會を

【驚子】舍利弗のこと。

舍利弗の

出づるを以ての故に、佛力を承くるが故に。二に見已等とは根熟なるを以ての故に此勝念を作すなり。三に爾時の下は勝機を攝す、中に於て總じて辨するに、六千の比丘は是れ所被の勝なり。自房従り出づとは小涅槃を捨つることを表すなり、文殊に向ふとは一乘の道に趣くことを表すなり。又文殊の闍を出でて、佛を詣りて南に遊ぶは、化主と爲すが故に。驚子の房を出でて、佛を詣りて南に遊ぶは従ひて助化と爲す、六千を引攝するは正しく所化と爲すなり。問ふ、若し爾らば驚子も亦是れ大菩薩なり、何んが同じく闍に在らざる。答ふ、迹を寄するに是れ聲聞なるが故に彼に在らず。二に此六千の下は別して所被の獲を顯す、中に於て三あり。先に數と位とを攝す、共行とは驚子と同じく行く、上の文殊同行の菩薩の如し、此も亦是の如し。又釋すらく、彼驚子と同じく、相は聲聞を示す、徳に據らば實は菩薩の行の故に共と云ふなり。新出家とは未だ羅漢果を得ざるが故に。樂習未だ深からず、回し見易きことを明すが故に。又釋すらく、新に小乘分別心の家を出でて、已に三乘の位に入る、驚子は是れ三乘の中の法將なるを以ての故に、之を引いて新に出す。文殊は是れ此一乘の法將、方便して之を引く。二に其名曰の下は名を列ぬ。比丘とは梵に三名有り、或は比呼と云ひ、或は梵智と云ひ、或は比丘と云ふ。此に正譯無し。義翻に三有り、謂はく、怖魔威惡、及び乞士なり、釋相は知んぬべし。三に已曾の下は徳を數ず、中に於て八句有り、觀の二句は宿、大因有ることを明し、三に性樂の下は深信有ることを現す。四に大顯を現行し、五に佛の勝境を觀じ、六に法の實相を了し、七に大悲をもて物

【自下第二云云】  
以下攝比丘會の中  
第二に語業攝益を  
益す下の釋なり。

を益し、八に佛果を樂求す。此等皆是の下は徳を結して緣に由れり、謂はく、過去に已に  
文殊の攝護を蒙むることを明す、是故に今時還りて救濟を爲す。四に爾時の下は勝境を  
示すことを明す、中に於て二あり、初に自分の境を觀するに六有り、一に身光の勝を觀せ  
しめ、二に眷屬の勝、三に威儀の勝、四に行處の勝、五に依果の勝、六に供養の勝なり。  
二に海智の下は勝進の境を觀することを勸む、謂はく、加持の勝なり。五に爾時の下は勝  
益を得ることを明す、中に於て初は讚を聞いて悉く喜ぶ、是れ總句なり。下は別して十  
三句の益有り、故に歡喜す。中に於て五に分つ、初の五句は離障の益を明し、二に現見の  
下の三句は發心の益、三に速得の下の二句は成器の益、四に長養の下の三句は増行の益、  
五に悉見の下の一句は見佛の益、六に時諸比丘の下は勝人に詣することを明す。中に於て  
二あり、先に自尊者等は勝欲樂を起すなり、二に往詣等は詣して來意を告ぐるなり。七に  
爾時文殊の下は勝攝を蒙ることを明す、中に於て三あり。初に象回顧視とは攝受の相を明  
し、二に比丘禮足は歸誠の相を明し、合掌して立つは、佇みて説を聞くの相を明す。三に  
作如是念の下は勝願して心に重じ、方に法を受くるに堪ふることを顯す。初に知法を願  
ふは涅槃を得るを以て、後に身相等を願ふは菩提を得るを以てなり。前の中に如舍利弗と  
は生空の實相に約し、釋迦とは法空の實相に約するなり。又釋すらく、舍利弗の所依の釋  
迦の如しと。此れ即ち舍利を擧げて而も釋迦を取るなり。上來、文殊の身儀攝化竟んぬ。  
自下第二に、語業授法の中に文に二有り、先に自分の法を授け、二に爾時文殊の下は勝

進の法を授く。前の中に亦二有り、先に法を授け、二に彼諸比丘の下は益を明す。前の中に三有り、初に響告總標、二に何等の下は別して行法を示す、三に若善男子の下は益を擧げて修を勸む。別の中に十門有り、以て無盡を顯すに攝して五對と爲す。初の二を一と爲す、謂はく、大心をもて佛を敬ふ。次の二を一と爲す、謂はく、法を求めて行を修す。次の二を一と爲す、謂はく、定に依りて用を起す、用とは則ち是れ大悲方便なり、有に隨ひて生を受けて正念を失はず、能く生死に於て久しく處して生を攝す、此れ則ち彼二乗の、生死を怖るるの見到翻するなり。次の二を一と爲す、嚴土攝生なり。後の二を一と爲す、謂はく、自行化人なり。又釋すらく、前の八は自分、後の二は勝進なり、知んぬべし。三に益を擧げて修を勸むるの中に、十種の益を擧げて、以て修學を勸む。一に生善の益、二に離染の益、三に超出等は小を出づるの益、四に如來等は入大の益、五に具足等は大願の益、六に行菩薩行は成行の益、七に住位の益、八に成果の益、九に降魔の益、十に制外の益なり。二に彼諸の下は正しく開法得益を明す中に二有り、先に開法得定の益を明し、二に得此の下は定に因りて行成ずるの益を明す。前の中に亦二有り、先に所得の定體を明す、謂はく、所見徹過するが故に無礙と云ひ、能見は障を離るるが故に淨眼と云ふ。下は業用を明すに亦二有り、先に現在の無礙を見、後に又能の下は過未の無礙を見る。前の中に初に正覺及び衆生を見、二に器世間を見る。謂はく、所見の境界廣大無邊なるを明すが故に、如來十眼の境と云ふなり。三に前の所見の諸佛の説を聞く、四に他心通等を以



【三七】以下、三會の第二攝龍王會を釋す。

て、前の所見の衆生の根欲を知る、五に生死智通を以て彼受生等を知る。二に過未を知る中に、八位に各十と言ふは、應の如く圓數は無盡を顯すが故に。二に此定を得るに因りて、行をして成立せしむることを明す中に、初の句は所得の心を標す。十を具すとは廣くして無邊の故に。實際とは深くして無底の故に。二に主伴の定、三に主伴の戒、四に主伴の智、五に十明は是れ智の用なり。『十明品』に説くが如し、此は是れ圓教の、機を攝して頓に大益を成するが故に、創めて大心を立つて、乃ち十地の後の十明の用を得たり、始を以て終を攝すること、上の『發心功德品』及び『小相品』等の説の如し、餘教の中は則ち此事無し。第二に勝進の中に亦二有り。先に教勸、後に得益なり。不死通明とは大悲を因と爲す、業繫を離るるが故に。又釋すらく、分段を離るるが故に。又釋すらく、通明の作用は休息無きが故に。此處を離れざる等に二有り、一に此因を動ぜずして、果を出生するが故に生如來等と云ふ。二に一處を離れずして、能く佛身を出し、十方界に滿つ、此は是れ不死通明の力なり。一切の佛法を具すとは、果徳を成ずるの法を明す、上來は比丘を攝して、法界に入らしむるの一會を明し竟んぬ。此中に二乘の廻心の義を明すに略して三門を作る。一に廻の有無を明し、二に廻心の身位を明し、三に廻心の至得を辨す云云。

【三七】以下、三會の第二攝龍王會を釋す。

白下第二に龍王を攝して法界に入らしむる會の中に四有り、初に結前起後、二に説法の處を定む、三に所説の法を辨す、四に所得の益なり。處の中に辨法師釋して云はく、覺城とは本覺なり、東とは始覺なり、大塔廟とは始覺本覺を覺るなり、即ち此處に於て普照法

界を説くことは、即ち始覺に於て本覺を覺る處、心を覺るに初無し、本從り已來、遍く法  
 界を照すが故に」と。又日照三藏の云はく、「此城は南天竺に在り、城東の大塔は是れ古佛  
 の塔なり、佛世に在せし時已に此塔有り」と。三藏親しく其所に到るに、其塔は極めて大  
 なり、東面に鼓樂饗養すれど西面に聞えず、今に於て現在せり。此處の諸入處處に善財の  
 歌辭を唱ふ。此城内の人、竝に解脫分の善根有りて、修道の器と爲るに堪へたり、覺分有  
 る者此城内に在るが故に覺城と云ふなり。此れ則ち覺者の城を名けて覺城と爲す。又釋す  
 らく、文の中に既に是れ「過去の諸佛の遮止せられし處」と云ふ、佛は既に覺と名くるが  
 故に知んぬ、亦是れ覺者の城なり。又釋すらく、下の文に準ずるに、城、山、處等の所有る  
 名義は、皆是れ法門の所表なり。謂はく、覺とは生死に於て覺察すること有るを表すが故  
 に。城とは徹の外難を防ぎ、内に徳を守るが故に、即ち覺の用なり。東とは開明の始、是  
 れ發覺の初を表す、終位の覺に簡ぶが故に云ふなり。塔廟とは此覺徳は此れ歸宗の所なる  
 ことを顯す故なり。若し餘教の中には處に託して法を表すも、處は即ち法に非ず。此圓教  
 の中には、所託の處即ち是れ所表の法なり、名義は即ち事義なり。之を思準すべし。下の  
 文の處の意竝に此に同じく辨すべし。三に所説の經は所託に従ひて名を立つ、謂はく、  
 智用廣く舒ぶるを名けて普照と爲し、所照深廣なるを稱して法界と爲す、即ち是れ入法界  
 の經なり。主伴を具足する、是れ圓教の法門なり。四に益を獲る中に、初は惡身を捨て、  
 後は堅勝の心なり、此れ亦前の比丘の、不退轉普賢の菩提心の位に住するに同じ。第二會

【三八】以下、三會の第三攝善財會を釋す。

竟んぬ。

白下第三に攝善財會なり。今通じて辨ずるに、下の文相別して不同なるに、略して十門を作る。一に起求の差別を明し、二に修入衆の別、三に示方の差別、四に示處の差別、五に教問の差別、六に歎不歎の別、七に推不推の別、八に結不結の別、九に去不去の別、十に文を釋す。初の中に三句有り。初に文殊自ら覺城に就く、機の初劣にして未だ發心せざるを以ての故に、之に就いて方に攝す。二に功德雲已去は善財往いて求むること有りて、位成ずることを顯すが故に。根漸く勝るるが故に。已に發心するが故に。知識に就かざるは法重く人尊きを顯すが故に。三に末後の普賢の中は、知識に就かず善財往かざるは、法界の位滿じて來去無きことを明すが故に。二に修入衆の別とは、中に於て唯初位の内に三會四衆有り、是れ修の始なるを以ての故に。餘位は唯善財の一身、行別して人に在るを以ての故に。三に示方の差別とは、大位に三有り、初に地前の知識多くは南方に在り、地内の方無く、地の後亦南方の者有り。其南といふに四義有り、一には是れ正の義なり、指南の護等の如し、向ふ所の邪に非ざることを表すが故に。二には是れ背間向明の義なり、障を捨てて理に向ふが故に。三には是れ離増減の義なり、日の東に出でて西に没するが如きは、是れ増減の相なり、南は二邊を離れ中道法界を表す。四には是れ生の義なり、謂はく、南は其陽を主とす。是れ其生の義なり、北は陰を主とす、是れ滅の義なり。此れ善財の因行の漸く増するを表すが故に、生の義を顯す。如來涅槃の全積の北首なるは、其滅の

【如來…表す】佛入滅に際し頭北面西したまふをいふ

【最後の普賢】善  
 財最後に普賢菩薩  
 に見ゆるをいふ

義を表す。此四の中に於て、前の二と後の一とは地前に之を表し、其離増減の義は地後に之を表す、地の中は正證離相の故に南をもて表すべからず、地後は業用を顯し、地内に同じからず。後の文殊に示有りて方無きは般若に加持有るも、證は無二なることを表すなり。最後の普賢は示無く方無きは、法界の徳圓にして、普遍なるを表すが故なり。四に處を示すに四句有り、初に三賢未だ證せず、諸處に散在す。二に地上は眞を證り、佛家に生ずるが故に、多く佛衆の中に在る等なり。三に地後の起用亦散じて縁に隨ふ。四に普賢は因圓に果を望するを表す。亦佛の所に在り。五に遺不遺の中に二有り。初後の二位は教へて遺すこと無くして而も自ら至る。初は謂はく、文殊自ら就くが故に人の教ふること無し、後に普賢遍の故に、眼を開きて自ら見るに又至る。後の文殊は、般若の智成りて自ら法界を見るが故に教ふることを待たず、餘の位は此二義無ければ皆教へて遺る。又若し教へて遺らずんば、則ち諸の知識獨り已に於て善しとす、何んが自行を成せん。又唯一を知ると言ふ、若し餘を遺りて求めずんば、何んが圓備の益を成せん。又若し遺らずんば、豈一位にして進んで後に昇らざらしめん。六に數不數の中に三あり、初に文殊は亦是數こ亦は數せず、謂はく、善財未だ發心せず、但し勸めて發さしむるが故に數せず、後に勸めて發心せしめ已りて、方に乃ち之を數す。中間の知識は皆數有り、發修して進むを以ての故に。數ぜざる者有るは應に是れ略なるべし。後に文殊普賢數ぜざるは、位成滿するを以ての故に。七に推不推の中に二あり、謂はく、諸位の知識は皆自分を結すること有りて、



仰きて勝進を推すことは唯初の一なり、後の三は結無く推する無きは、人尊く徳満することとを顯さんが爲の故に。若し爾らば何を以てか遣ること有るや。謂はく、位をして増せしむることを表すが故に。法門の別なるを顯すが故に。餘位は結有り推する有るは、因行未だ圓ならざるを以ての故に。若し爾らば普賢等は何を以てか佛に推せざる。因位の善友の攝に非ざるを以ての故に。八に結不結の中に、前の諸文は皆結通無し、行未だ究竟せざるを以ての故に。唯し後の普賢は十方を結通して、摩訶に等しきこと有り、普遍なるを以ての故に。行滿するが故に。事究竟するが故に。九に去不去の中に、唯し末後の二位は辭し去ること無きが故に。文殊は離相を以ての故に去無く、普賢は徳滿するを以ての故に去無し。餘位は此に非ず、皆辭し去ること有り。若し辭し去らずして一師を封守せば、何んが遍く法界の知識を求むることを得ん、何んが昇進の行を成せん。

十に文を釋する中に、覺城攝善財會に、十信の行を成する中に就いて、文別に四有り。初に衆集を明して所被の機を顯し、二に機を觀じて方便を授説することを斷ずることを明し、三に正しく所授の法を説き、四に勝進の行を引起す。初の中に二あり、先に總じて擧げ二に時有的下は別して顯す。別して顯す中に四衆あり、優婆塞とは古は翻じて善宿男と名け。今は譯して近事男と名く。謂はく、比丘に親近して承事するが故に。女も亦之に同じ。又修達多是此には善施と名け、波須達多是此には財施と名け。跋陀羅は此には賢と云ふ、餘の名は準釋して知んぬべし。第二に文殊知覺城人の下は、機を觀じて爲に方便

【十に云云】 以下  
經文を釋す。

を授説することを明す中に二有り。初に通じて説の意を標す、知んぬべし。二に觀察は別して善財を觀す、中に於て亦二有り、初に其現生の勝事を觀じ、二に此童子者の下は其宿因の徳行を察す。初の中に三あり、初に總じて標し、二に別して顯し、三に善明相師の下は總じて結す。別の中に此福報に由りて財寶の相起り、善財の名を立つ、即ち善を因と爲し、財を果と爲す。又此順道の財を得るが故に善財と曰ふ。又生るる時に寶現するを財と爲し、後に其行徳を數じて善と爲す、善現空生等の如し。又一智論に常啼の名を稱する等、此に準じて知んぬべし。二に其徳行を數する中に十句あり、五對と爲す、初に曾て佛を供して善を種うるは、此善財已に曾て宿し解脫分の善根を種うることを明す。二に淨を樂ひ友を近づぐ、三に三業淨修す、四に果法を求修す、五に心淨くて行を具す、心に異念無きを以ての故の淨きこと空の如し。又現の煩惱等無きが故に。問ふ、「此善財は是れ何の位の菩薩ぞ。」答ふ、「經に正斷無くして、位相明も難し、或は判じて地上の菩薩と爲すこと爲すこと有り。設は後に發心するも即ち是れ因種の發心の中の後の二位なり。又此論の中の三の發心の内の證發心なり。或は有るが説かく、是れ實報の凡夫なり、但し信心有りて能く善友を求むと、今更に準釋するに、應に善趣の位の中の行人なるべし。圓教の宗に依るに其三位有り。一に見聞位、即ち是れ善財の次前の生の身なり、此の如く普賢の法を見聞するが故に。彼解脫分の善根を成するが故に。數徳の中に辨するが如き者は是なり。二には是れ解行の位、頓に此の如きの五位の行法を修す、善財、此生に成する所にして、普

賢の位に至るが如き者はなり。三に證入の位、即ち因位窮め、終りて潛に果海に同ず、善財の來生是なり。若し爾らば善財は定んで是れ何の位ぞ。謂はく、是れ何の位も有り、信に在れば是れ信の位なり、住に在れば是れ住の位なるを以て、一身に五位を歷ること隨ひて在れば、即ち彼位は一切に過ぎが故に。普賢の位の如し、餘の義は宗に準じて思うて釋すべし。第三に文殊如來回の下は正しく所授の法を説くことを明す中に二有り。先に機を攝して説を許すことを明す、身首俱に回ること象王の如しとは現身攝受の相なり。觀察自視は意の攝受の相を明し、告げて説を許すは語の攝受の相を明す。二に即爲の下は正しく所説を宣ぶ、佛の果法を説いて、信を成せしむるが故に。彼をして發心して此果を求めしむるが故に。八句の中に、初の二は總、後の七は別なり。別の中に初の三は、好用攝生の德なり、一に機爲の世に出づることを明す、二に放光集衆の法、三に正しく所説の法を説く。後の四は體相圓備の德を明す、中に於て前の二と後の二とは、各各先に相、後は體なること知んぬべし。第四に爾時文殊の下は勝進の行を引成することを明す、中に於て三有り。初に文殊の、南に行いて引發す。二に善財隨逐して教を求む、三に文殊象回、攝受す。初の中に先に前を結し、後に遊行南方は後を生ず。前の中に信位に菩提の心を成せしむるが故に、歡喜等と云ふなり。過去の善根を顯明すとは、彼過去の所修の善根をして、今の菩提心に由るが故に、更に增長することを得しめ、失沒せざらしむるが故に顯明と云ふなり。不捨本座等とは、覺城を離れずして遍遊することを明すが故なり。上の覺樹を起

【三有】欲、色、無色の生死ある境界の意、三界の異名。

たずして六天に至る等に同じ、上に已に釋するが如し。若し爾らば童子も亦文殊の如く、去らずして諸位に過すること、之に準ずべし。二に善財隨逐の中に二有り、先に經家の叙事、二に善財偈を説いて救を求む、中に於て三十四頌有り、二に分つ、初の四は已が迷淪して自ら出づること能はざるを傷み、後の三十は文殊の徳を敷じて、救濟を請求す。前の中に四頌あり、通じて皆具に感業苦の三有り、別して分たば、初の二は惑を起し、次の一は業を造り、後の一は苦轉す。初の中に三有等は起惑の處なり、癡闇等は起惑の因なり、惡魔等は起惑の縁なり。三毒等は正しく惑を起すなり。造業の中に就いて、初の二句は正行を失し、後の二句は邪行を成す。苦報の中に就いて、譬等は餓鬼の因を擧ぐ、下は感苦の果を結す、知んぬべし。第二の三十頌の中に就いて亦二あり、初の九は文殊の徳を敷じて其救厄を求め、生死の苦を離れんことを希ふ。後の二十一は徳を敷じて其與法を求め、成行得果を希ふ。又前は凡地の苦を離るることを希ひ、後は二乗の樂を離るることを望む。又前は涅槃を得ることを望み、後は菩提を得ることを望む。初の中に九頌は文殊の九種の功徳を敷す。一に悲智の徳、二に慈悲の徳、三に法化の徳、四に願滿の徳、五に救苦の徳、六に自在の徳、七に力用の徳、八に善淨の徳、九に淨眼の徳なり。又前の八と及び後の頌は、皆初の三句は徳を敷じ、下の一句は救を求む。二に遠離の下は菩提の法を求むるの中に四に分つ、初の二は果法を示して所求の菩提を知らしむることを求め、次の一は三世の諸佛を見て、菩提の行を成ずる縁を求む。三に次の十七は正しく能く菩提を得るの因



【第三に文殊云云】  
經の「爾時、文殊  
師利一等以下の文、  
本藏經卷第四十六  
初。

行を求む、是故に皆棄と云ひ、或は道と云ふなり。四に後の一は請を結す、因行の中に就いて四に分つ、初の五は智慧定の攝徳を數じ、次の三は十度の行の圓徳を數じ、次の四は二利滅障の徳を數じ、後の五は隨事攝生の徳を數す。第三に文殊攝受の中に五に分つ、初に回觀して善を數するは受の相を明す。二に是故善男子の下は善友に近き、菩薩の行を問ふことを教ふ、三に偈を説き徳を數じて、其をして修を喜ばしむ。五に時善財の下は聞くを慶びて、辭退し教に依りて趣求す。第二の近を教へ行を問ふ中に就いて、初に善友に近くことを教へ、二に行を請問することを教ふ。中に於て十句あり、初の一句は創めて修行の法を問ひ、二に行成滿するの法を問ひ、三に淨治行の法を問ひ、四に淨めばりて圓成の法を問ひ、五に行從り行を生ずる法を問ひ、六に所行を念持する道を問ひ、七に彼差別の境界を緣するの道を問ひ、八に法を増長する用を問ひ、九に普賢を攝成する行を問ふ。亦是れ別を攝して普を成するの行なり。此上の九種は皆前に依りて後を起すこと知んぬべし。三に偈の中にも十句あり、二に分つ。初の九種は皆前に依りて後を起すこと知んぬべし。三に偈の中にも十句あり、二に分つ。初の九種は皆前に依りて後を起すこと知んぬべし。九は普賢の行を數じて修せしむ。一に大願を發すを行の本と爲すことを教へ、次の二は普賢の行を擧げて彼を勸めて求めしむ。一は行を擧げ、一は求を勸め、後の六は普賢の行を辨じて修せしむ。一は多く法を聞くの行、二は多く佛を見るの行、三は教に願じて修行す、四は一切處の行、五は一切時の行、六は大益を成するの行なり、謂はく、衆生有りて彼普賢の名號を聞く者は還りて彼行を成じて大菩提を得ん。上來信位の成滿を明し竟ん

【二九】 以上文殊攝化分の釋了りて、次に十住の初發心住位の知識文を釋す。

【經】 毘婆沙經。  
【阿闍世王云云】 耆婆大臣の諫言に由りて、殺父の罪を免れしをいふ。  
【善知識云云】 法華妙莊嚴王品の文

ぬ。

第四に後位を指示し、第五に聞くを度びて辭退する、此二段の文に就いて、若し有に約して分つときは、則ち前の會に屬す、是れ前位の善友の說なるを以ての故に。若し法に約して分つときは、則ち後の位に屬す、是れ後の位の方便なるを以ての故に。今通じて下の文の諸の善知識を歸するに、略して四門を作る。一に善友を求むるの意を明し、二に善知識の義を顯し、三に文段を料簡し、四に本文を消釋す。初の中に何が故に交殊、即ち其一切の爲に宣說せずして、善財をして廣く多處を歴て、善友を求めしむとならば、釋して云はく、意は乃ち多端なり、略して論ずるに八種あり。一には軌範と爲すが故に。謂はく、諸の善友は佛の聖法に於て恆に二行を修す、聞はく、法を求め法を説く。經に云はく、諸の善友は法を求めて懈らず、法を説いて悟むこと無きことを明す、此中に斯二行を顯して諸の衆生に示す、是故に善財は求法の妙軌を成じ、善友は説法の良規を顯し、諸の衆生をして此軌を軌として行を成せしむ。則ち佛華は常に敷け、廣嚴恆に著るる者なり。二に行緣勝るるが故に、謂はく、成行の要は良友を以て先と爲さざること莫し、阿難の言へるが如し、「善知識は是れ半の梵行なり、佛の言は爾らず、是れ全の梵行なり」と。經に云はく、「阿闍世王、若し耆婆の語を用ひずんば、來月七日に定んで地獄に墮せん、是故に我言ふ、道を得てより來善友に若くは莫し」と。又「智論」に説かく、「迦延は應に地獄に入るべからしめ、弟子は聖果を得」と。又經に言はく、「善知識は是れ大因緣なり、

能く汝等をして當に佛を見ることを得しむ」と。又下の文に云はく、「善知識とは是れ奇特の法一等と。是要用に由りて、是故に善財は之を求めて足ること無し。三に見慢を破するが故に。善財等の新學の菩薩をして、自の憍慢と及び執見とを破せしむるが故に、其をして法を求めしむるに、男女、長幼、貴賤、道俗、尊卑、神天、外道を簡ばす。但し身を卑くし屈辱して務めて法を得ることを存す。經に云はく、「知法の者有らば、若し老、若し少、應當に恭敬して猶し諸天の、帝釋に奉事するが如くすべし」と。四には細魔を難るるが故に。若し人を封じて一を守らば、直に後行増さざるのみに非ず、亦乃し執著の失を成するが故に。「離世間品」の十種の魔の中に善知識魔有り、彼に於て著心を生ずるが故に、是故に著を離れて更に進修す。五に成行に寄するが故に。問ふ、「此善財一法門を得れば修行を成するに足れり。何んが修習することを爲し、乃し遊歴して厭くこと無きや」と。答ふ、「即ち此れ廣く求むるは菩薩の事、善友の行、及び求法の行を成就す、歡ひ法を得ざれども此れ已に行を成す、況んや皆彼未曾得の法を得て、慧眼開明し眞法界を見るをぞ。」  
『華手經』の中に「法を求むること千歳にして而も聞くことを得ず、茲に因りて命を捨てて佛土に生ず」といふが如き、此は即ち是れ其所得の法なり、謂はく、行を得るの法なるが故なり。問ふ、「何んが空を觀して理に入らずして、乃し事に隨ひて諂諂たる、豈善慧甚深の行を成ぜんや。」答ふ、「即ち此れ事に隨ひて常に理を見るが故に、是故に遍遊して而も未だ嘗て去ること有らず。」問ふ、「若し未だ仍遍遊すること有らずといはば、何んが未だ嘗て

去ること有らずして、而も不去ならざるや。』答ふ、『亦相似す、去不去二相無きを以ての故に。』若し爾らば何んが坐しても而も去ること有らば、外に去るとも而もなほ坐するにあらずや。』亦相似す、俱に無性なるが故に。』六に位を寄顯するが故に。謂はく、廣く善友に寄せて信等の五位の差別の相を顯す、文處見つべし。問ふ、『何が故に善財は、佛の所に向ひて法を求めざるや。』答ふ、『因行未だ圓ならざれば、未だ佛に至らざることを表すが故に佛の所に到らず。』七に深廣なることを顯すが故に。謂はく、佛法の廣くして無邊なることを表顯するが故に。諸の知識は、位法雲を極むること有りと雖も、猶我唯此一法門を知れりと稱す。豈能く諸の大菩薩の無量の行相を了知せんや。佛法の深くして底無きを表顯するが故に、善財縱ひ位は登地に至るとも猶而も「我未だ知らず、云何が菩薩の行、菩薩の道」等と云ふがごとし、況んや今具縛少善の凡夫、微しく所解有れば便ち自ら一切の佛法を解りと謂ひて、慢を起し自ら高ぶり他人を陵蔑するをや。知らずして便ち經圖を臆斷して自ら陥り、人を陥るること有らば、何んぞ悲しみの甚しき。八に緣起を顯すが故に。善財善友と同じく一緣起を成ず、能入所入二相無きを以ての故に。是故に善友の外の善財無きが故に、一即一切を彰し、善財は諸位を歷ることを明す。善財の外の善友無きが故に一切即一を顯し、多位の成ずること、善財に在ることを明すなり。是に由りて卷舒自在、相融無礙なること、之を思うて知んぬべし。

【第二に知識云云】  
以下、善知識の義を釋す。

第二に知識の義を釋せば二有り、先には通、後には別なり。通じて眞の善知識を論ずる



に其三類有り。一に人、二に法、三に人法合して辨ず。初の人の中に六有り。一に人有り能く其現苦を濟ふと雖も、而も修善を勧めざれば眞の善友に非ず。二に世善を修することを勧めて惡趣を免ると雖も、而も出世の路に修向することを勧めざれば亦眞友に非ず。三に二乘の出世の善行を修して、三界の苦を免ると雖も、而も菩薩の道を行することを勧めざれば亦眞友に非ず。四に菩薩の道を修することを勧めて、二乗を免ると雖も、猶相善を存すれば亦眞友に非ず。五に要す衆生を勧めて無相の行を修する、方に眞の善知識と爲す、此は『佛華經』及び『智論』等に依りて辨ず。六に要す勧めて普賢の行徳を具せしむるを方に究竟の眞の善知識と名く。此上は竝に是れ行の善知識なり、行を以て機を引くが故に、唯人に屬す。二には法の善知識に亦六重有り。一に人法の法、二に二乗の法、三に初教の法、四に終教の法、五に頓教の法、六に圓教の法なり。此等の法に依りて正行を成するが故に名けて善友と爲す、但し教の權實に隨ひて眞の善友を辨ず。三に人法合して辨ずる中に亦六重あり、謂はく、上の六位の法に於て各一門を説き、機縁に授くるを以て則ち人法雙べ辨ず。此は是れ善知識の法を説き人に授くるを解するを以て、前位の眞の善友等に同じからず、之に準じて解しつべし。今此下の文は、上の三位六門の内に於て、通有り別有り、通は即ち六門皆有り、別は唯末後のみ、竝に普賢の行を成就するを以ての故に。又『離世間品』に十種の善知識有り、亦此に於て之を叙す。二に別して下の文の諸の善知識を辨するに、皆前の三を具す。此三位の中に各各三義有り、其人の中の三は、初に名

を聞く等を方便と爲し、二に正しく人を見るを法界を得と爲し、三に法等を問ひて其徳を彰す。二に法の中の三は、初に言教を方便と爲し、二に智眼の所得を法界と爲し、三に通明の業用を、以て其徳を顯す。三に人法合して辨ずる中に、初に名を聞きて至處するを方便と爲し、二に人を見て、法を得るを、法界を得と爲し、三に往因を説き、及び勝進を推して以て其徳を顯す、下の諸の知識は皆此に準じて知んぬべし。

第三に科文の分齊を明すに、増數に十有り。初に總じて一と爲す。謂はく、各各一位の故に。二に蓮法師に依らば二に分つ。初に善友に親近し、後に告言の下は正法を聽聞す、其繫念の思及び説の如く行ずるは、竝に聞の中に攝在す。近友の中に就きて四有り。初に善友を聞き、二に善友を求め、三に善友を見、四に法を請問す。初の善友を聞く中に就きて亦四有り、初に國の名を列ぬ、是れ通處なり。二に山の名は是れ別處なり。三に善友の名、四に教へて往誥せしむ。二に善友を求むる中に三有り。一に初めて聞きて心に喜び、二に足を禮して去り、三に漸く行きて友を訪ふ。三に善友を見る中に二有り。初に往きて見、後に禮を設けて退して住す。四に請問する中に三有り、一に已に發心すと白すは、已に機有ることを明す、二に而も未だ知らず等を問ふ、三に我聞等は徳を數す。善友に近くことを請ふること竟んぬ。二に正法を聞く中に二有り。初に其發心を數じ、後に正しく爲に法を説く。法を説く中に、初に證量の法門を説き、後に仰推等は教量の法門を説く。此上の科文の諸位多くは同じきも、少しく同じからざる者有り。三に辨法師に依れ

【第四に云云】以下、正しく本文を釋す。

ば三分に分つ。初に聞名、求覓等は是れ加行位、二に其所説を受くるは是れ正證法界、三に仰推勝進は是れ後得の位なり。四に衍法師等に依らば、分ちて四量と爲す。一に初めて名を聞く等は是れ教量、二に教に依りて尋求するは、是れ信量、三に彼依正を見るは是れ比量、四に彼所説を聞くを現量と爲す。此四は即ち是れ聞思修證なり。五に諸徳有りて五分を聞く。上の第四の現量の中に於て、自分勝進の二位を開出ず、餘は前に辨ずるに同じ。六に意法師等に依らば、分ちて六分と作す。一に、求詣の心行を明し、二に見え敬ひて諮問することを明し、三に已知を讀説して以て善財に授け、四に己が未知を説き、五に更に知者を示して、勸めて往詣せしめ、六に辭退して彼に造る。七には或は分ちて七と爲す。此六の中の第二の内に於て、先に見え後に敬するが故なり。八には或は分ちて八と爲す、此七の中の第三の内に於て、先に發心を讀し、後に己が法を説く。九には或は分ちて九と爲す。此八の中に於て第五の内に、先に指示し後に往くことを勸む。十には、或は分ちて十と爲す。上の九の中の第六の内に於て、先に敬を致し、後に辭し去る。謂はく、一に求、二に見、三に禮、四に問、五に讀、六に説、七に推、八に指、九に敬、十に去なり。此上は増數の十種の科の中に、初の五は位に約して科し、後の五は會に約して科す。第四に文を釋する中に、今日く位の五分の科に依りて釋せば、一に法を擧げて修を勸め、二に教に依りて趣入し、三に推求簡擇し、四に正しく法界を得、五に仰推勝進す。此初位發心住の知識の内の五分の中に就きて、初に勸を擧ぐる内に四有り。一に處の名、二に

人の名、三に教へて問はしむ、四に徳を歎す。初の處の中に、國とは攝生八齊の義を表す。但し此十住の初は是れ信地の所欣なるが故に可樂と名く、山とは相の閑靜なるに隨ひて賢聖の所居、亦是れ修三昧の所なり、若し法に約せば、即ち住位高く信門の上に出づることを表す。和合と名くることは、比丘中に於て三昧を得、相應するが故に和合と云ひ、又善財をして住位と相應せしむるを亦和合と名く。又辦法師の云はく、「閑重と解性と和合して轉、聖人の依と成すが故に發心住に入るなり」と。二に人名の中に、比丘の義は前に釋するが如し、創めて外凡を出づるが爲の故に、比丘を以て之を表す。天竺の木を助ふるに、梵には迷伽室利と名く。迷伽は此には雲と名け、室利は此には徳と云ふ、彼に順すれば應に雲徳比丘と名くべし。但し雲に四義有り。一に普通の義、二に澤潤の義、三に蔭覆の義、四に法雨の義なり。徳にも亦四義有り。一に定徳、二に福徳、三に悲徳、四に智徳なり。雲の四義に於て次の如く醜釋して知んぬべし。又定眼普く開きて周遍すること雲の如くにして、佛の好徳を見る、境智に名を立つ。又普眼は佛を見ること多きが故に雲の如く、斯徳有るが故に以て其名を立つ。此經は是れ于篋の本に、翻じて功德雲と名く。義亦相似せり、知んぬべし。三に汝語彼の下は、往を勸めて問ふことを教ふる中に、十問は前に同じ。是故に初二、乃至十を擧ぐ。四に善男子の下は彼比丘の徳を歎じ、其をして去ること喜びしむ。法を擧げて修を勸め竟んぬ。

第二に教に依りて趣入する中に、法を聞きて歡喜すとは所向有ることを知るが故に。悲



【般舟三昧】般舟は梵語、此には佛立現前三昧と名く此三昧を得れば諸佛住立顯現したまひて前に在します【一行三昧】閑靜なる處に住し一佛を專念し稱名憶念して勤修精進する時無量の佛を見奉

戀とは深恩を荷ふが故に。第三に推求簡擇の中に二有り、初に登山とは見心して位を降ることを明すが故に。二に於彼の下は實義を尋求することを明す。七日とは古説には、七方便を度りて方に本位を見ることを表す。又亦應に是れ彼山處に於て、先に身語七支の失を淨め、然る後に眞の善知識を見ることを得べし。第四に爾時善財見彼の下は、則ち正しく法界を得ることを明す、中に於て五あり、初に人を見、二に禮を設け、三に諮問し、四に讚問し、五に正説す。初の中に山頂に在すを見るとは、茲住位不退の際を表す。靜思經行とは般舟三昧等を修することを明すが故に、亦是れ一行三昧の故に。又靜思は止を修し、經行は觀を成す。又是れ賢護等の經の思惟諸佛現前三昧の相狀なり。二に禮の中に、右邊は是れ極尊敬の相なり。三に諮問の中に二有り、先に已に發心すと白すは法器有ること顯し、其をして説き易からしむ。二に未だ知らざる所を問ふは、已法に漏することを彰し、悲を起して速に説かしむ。下の諸文の處は、皆此に同じて釋すべし。問の中に、前に十問を教ふと雖も、下の諸位の内には多く此二を存す、梵本を勘ふるに依らば應に云ふべし、而も未だ知らず菩薩、菩薩の道に於て應に云何が學すべき、應に云何が行すべきと。此れ則ち先に解、後に行なり、文處に解しつべし。我聞大師善能宣暢とは、梵本に依らば應に「我聞く、大師は諸の菩薩に於て善能く教授し、善能く教誡す」と云ふべし。此れ即ち教授に由りて前の解を成じ、教誡に由りて前の行を成す、傳譯存略の故に、總じて宣暢と云ふ。下の諸文は皆此に同じ。四に讚問の中に、先に總、後に別なり。別の中に

【不思議解脫云云】  
是は維摩經中の所  
説、此解脫を得れ  
ば、此定中に不可  
思議の境界を現出  
す。

九句有り、前に教ふる所に同じきも、初の二句は正しく同じく、餘の句は次ならず。三に菩薩の境に入るは、是れ前の菩薩の境を緣するなり。四に出生等は亦同じ。五に廣心は是れ前の増廣等なり。六に具足等とは是れ具普賢の行なり、七に隨順等は是れ前の満足等なり、八に於生死等は是れ前の究竟等なり、九に有爲等は是れ前の清淨及び正念等なり。此竝に他心智を以て根に稱ひて歎す。五に善男子の下は正しく法界を示す、中に於て二有り。先に義を示し、後に我唯の下は名を結す。前の中に二有り、前に所得の法體を明し、二に普照の下は其業用を明す。前の中に解脫力とは、正法師の云はく、「此は是れ發心住の體なり、謂はく、本解の性は大乘の聞熏習に由るが故に、凡夫の依を轉じて其をして得脫せしむるが故に解脫と名く、此に依りて證する所の能證の智を名けて力と爲す」と云ふ。今釋すらく、此は定に依りて發す所の作用無礙なるを稱して解脫と爲す、不思議解脫等の如き、一塵の處に於て多世界を見る、今此も亦爾なり、此處を離れずして、十方の佛の依正差別を見る、是は此解脫の力用のみ。逮得慧眼と言ふは、然るに、此解脫は能く小處に廣大を容致すること有り、一處に於て一切を見ること有り。今二の中に於て偏に能見を取りて能致を取らざるが故に、於彼逮得此と云ふなり。此は別して定所得の法體を簡ぶ。二に業用を明す中に二あり。先に通、後に別なり。通じて論ずるに、此眼は一切世界等を見て、但佛を見るのみに非ず。普照等は慧眼を釋し、境界無礙は方便を釋し、除一切障は消淨を釋す。二に一切佛化の下は別して一佛を見ることを辨ずるに、先に能見の力を明す、

【念慧】念は憶持して失はず、慧は簡擇して濫ぜざる力用あり。

謂はく、陀羅尼を此には總持と云ふ、念慧を以て性と爲す。然るに多種有り、或は法持、或は佛等の持なり、今は法等の持を簡ぶが故に佛と云ふ。然るに佛の中にも亦法身報化有り、今は法報を簡びて、但化を取るが故に一切佛化と云ふ。是故に所見の佛、種種の形色等は竝に是れ化身の佛なり。二に正しく所見の佛を明す中に、先に佛身を見るに、初に東方、後に九方に類す。二に種種の下は作用を見る、中に於て先に佛の、機に隨ひて種種の依正を現することを、二に佛の、衆に於て決定して法を説くを見る。二に善男子の下は名の分齊を結する中に、普門とは別門を簡異するが故に。謂はく、別門の中には、或は一方二方、一佛二佛等を見る皆十方と稱せず、今は彼に依らざるが故に普門と云ふ。此門若し開けば普く十方摩數の諸佛を見ること、文に顯る所の如し。光明とは所見分明なることを明すが故に、此普門の光明は是れ前の普照なり。觀察とは所見審細の故に、是れ前の觀察なり。正念とは見る時亂れざるが故に、是れ上の除障等なり。上來は是れ能見にして、諸佛は是れ所見、三昧は是れ彼見の所依の定なり。創めて住位の光明念佛三昧に入りて、廣く佛を見ることは、佛は是れ究竟所依の本なるを以ての故に。自分竟んぬ。佛に依りて方に餘行を成するが故に。

第五に豈能了知の下は、仰推勝進を明す中に二あり、先に總、後に別なり。前の中に豈能了知等とは、已彼に於て實に知ること能はざることを顯す。何の法を知らざる。謂はく、菩薩圓滿等なり、即ち謂はく、佛境に照達するを名けて智行と爲す、障として盡さざ

【第二に云云】經  
文の「無壞境界」等  
の文を釋す。

ること無きが故に清淨と云ひ、徳として備へざること無きが故に圓滿と云ふ。二に諸大菩薩の下は、別して顯すに二十一門有り、各各先に所得の定門を擧げ、後に業用差別を辨す。初の十は念佛の勝徳圓備を明し、後の十一は念佛の妙用自在なり。前の中に初の一は、具に佛の自作依正を見るが故に圓滿普照と名け、二に念佛は衆をして離倒の徳を生ぜしむるが故に、清淨と名く。總の中の圓淨は此に依りて應に知るべし。三に念佛は是處非處等の力の徳、亦此れ大力那羅延等の十力なり。四に念佛は法に於て無倒なり、能説能授と亦是れ、菩薩の心、法に於て無倒なるが故に、能く佛を見巴りて、法を聞きて受持す。五に佛海の智に達するを以て如來を分別す、能念の智に約して名と爲す。六に念佛微細の境なり、謂はく、一念に八相等を具すること、前後に説くが如きが故に自在と云ふ。下位の菩薩は總じて上位の菩薩を見ること能はず、見ると雖も證入すること能はざるが故に名く。七に念佛常住なるを以ての故に不倒と云ひ、八に念佛は機に應じて未だ曾て斷絶せざるが故に隨時等と云ふなり。九に念佛は土に依りて身を現じ、十に念は三際を窮む。第二に妙用自在門を明す中に、初の一は佛一切差別の境の中に遍滿するを念じ、二には佛の涅槃の相を念するが故に寂靜と云ひ、三には佛の、時を超えて時を離れざること念じ、四には佛身の、法界に滿することを念するが故に廣大と云ひ、五には佛の毛孔に重ねて現することを念じ、六には佛一切處に於て成覺を現することを念するが故に莊嚴と名け、七には佛光照して衆を離れ、淨法輪を轉することを念じ、八には唯心念佛、九には念佛に由る



【三〇〇】以下第二治地住に寄せて明す交を釋す、經に「爾時、功德比丘」等の下。

が故に所作の業を見ること由し鏡像の如し。無體有相のごとき著者の染を離るるが故に淨業と云ひ、十には佛の修生の功德は眞如法界を嚴ることを念じ、十一には佛の大智等の功德、遍く法界等を照すことを念す。十住の第一位竟んぬ。

第二に治地住位の中に、五門は前に同じ。初に法を擧げて修を勸むる中に、前は既に己が不知を推して誰か能く知らんやと。故に今は後位を指示して、勸めて修入せしむ。中に於て海門と言ふは、此國に近うして南海在り、城門海に向へるが故に名く。又觀海の門開きて治地法界を見ることを表すが故に、以て名と爲す。比丘は前に同じ。海雲とは、此比丘常に海岸に在りて、緣起の大海及び彼海上の人法莊嚴遍覆して雲の如きを觀る、所觀に従ひて名と爲すこと、菩提薩埵等の如し。又此比丘、内勝德を具して、深廣なること海の如く、外群機に應じて法を雨ふらすこと雲の若くなることを表す。又所觀の法界深廣なること海の如く、能觀の大智周遍すること雲の如きが故に、境智に従ひて名と爲す。往を勸め間を教ふることに前に同じく知んぬべし。二に善男子の下は彼勝德を教するに十句有り。初の二は總、餘の九は別なり。具因善とは地前の善なり。大地は是れ地上なり、大力は是れ佛地なり。次の二は能教の因を増廣ならしめ、次の二は行願をして淨現ならしめ、次の二は二利の德をして滿ぜしむ。三に時善財の下は教を設けて辭し去る。第二に爾時善財の下は、教に依りて趣求することを明す中に、先に心に法門を念じて、散動無きことを顯すが故に。前の所得を溫むるが故に。後位を憶望するが故に。淨心を長養するが故に。二

に身歩漸く進みて後位に至る。第三に見已りて敬請する中に二有り、先に敬を設け、後に請を申ぶ。中に於て先に己が意樂を申べ、二に而未知の下は正しく所要を請するに十句有り。初の五句は自行を問ひ、後の五は利他の行を問ふ。一一に各各二有り、謂はく、凡に背きて佛に向ひ、生死を捨てて佛果に向ふ。初の二は轉位に約し、餘は多く喻に約すること準釋して知んぬべし。第四に爾時海雲の下は、法界を示すことを明す中に二有り、初に法器を敷じて、授法の方便と爲し、後に正しく法を示して、其をして修學せしむ。前の中に亦二有り、先に問答審定し、二に善男子の下は正しく其德を敷す。中に於て初は總じて敷じ、二に得普門の下は別して敷す。別して敷する中に、初の十句は能發の德を敷す、謂はく、此德を具する者は方に能く發心す、二に大悲心の下の十句は所發心の德を敷す。謂はく、此十德を具する、是れ菩提心なり。前の中に初の得の字は下の九句を貫き、後の者の字も亦前の九門に通ず、其初の普門普照等は、多く是れ前の功德雲の處に得る所の法なり、亦是れ宿、普賢の種性有るが故なり。十心の中に、増數に十一有り。初の四は攝生の心なり。一に現苦を救ひ、二に現樂を授け、三に當苦を滅し、四に彼因を除く、謂はく惡業なり。次の二は障を滅する心なり。一に煩惱障を斷じ、二に所知障を除く。次の二は證理の心なり、一に正證、二に後得なり。後の三は佛心を起す、一に佛身を見、二に佛の量智に顯じ、三に佛の理智を究む。二に善男子の下は己が法界を示す、中に於て五有り。初に大海を觀察して、證門の方便と爲し、二に法界の無礙の依正を見ることを得、三に所

【十二住】 瑜伽、地持の説に由るに發心已前を種姓住地前三賢を勝樂住初地已上十地を十二と爲すが故に十二となる。

【十住の第二】 十信は是れ十、二住を二とす。

【身加】 身に功德を被らしむ。

流無邊の教法を領受し、四に衆生に傳授して同じく法界に入り、五に己が所知を結するに、唯一にして餘に非ず。初の中に十二年とは有人釋すらく、十二因縁の大海を觀するが故にと。有が云はく、菩薩の十二住に住するが故にと。有が云はく、此は是れ十住の第二の故に十二と云ふなりと。觀海の中に、初の二句は是れ總じて所觀能觀を擧げ、下の十句は別して觀相を顯す。此中の十種は、一十地品の中の大海の十相と同有り別有り、準釋して知んぬべし。善男子我知是の下は、重ねて更に研窮し、海門をして開かしむ。二に作是念從り已下は、海門既に開きて法界の依正を見ることを明す、中に於て先に依報を見、後に正報を見る。前の中に四有り、初に蓮華の出づるを見、眞法界に依りて淨土集成することとを明す。二に百萬の下は外相の莊嚴を明すに、二十句有り。初の十一は衆生世間莊嚴を明し、後の九は器世間の莊嚴、三に彼寶蓮華の下は出づる所因を明す、亦是れ智正覺世間の莊嚴なり、中に於て亦十句有り、知んぬべし。四に隨顯世間の下は無盡を結歎す。謂はく、實に據らば唯佛の境なるが故に總じて不可說なり。若し方便に約し、世間に順じて説かば亦盡きず。二に見彼華上の下は正報の佛身を見ることを明すに、二十句有り、初の十は佛果の徳の備はることを明し、後の十は妙用の自在を明すこと、玆に知んぬべし。

三に時如來の下は所流の教を受くることを明す、中に於て五有り。初に華頂は身加なり、攝受の相を顯す。二に說普眼の下は所流の經法を明す。普眼とは所詮に從ひて目と爲す、此は是れ總名なり、唯如來境の下の十種は別名なり、準釋して知んぬべし。三に善男子

我從の下は、總じて已聞を顯し、四に假使の下は別して所聞の法の廣きことを辨じ、五に我於佛所の下は別して己が廣く聞持するの力有ることを顯す、此十持力の中に、皆先に所聞の廣き法を擧げ、後に能持の大力を辨す。大海等の墨等を以て一品を書けども盡さず、一日の中に於て、此十持を以て爾所の阿僧祇品を受く。是の如く千二百歳に於て、一日の日に新に受く。此『普眼經』は是れ一乘無盡の修多羅なるを以ての故なり。四に其有十方の下は衆生に傳授して、同じく此法に入らしむることを明すこと、知んぬべし。五に善男子の下は己が所知を結す。第五に豈能盡知の下は仰推勝進なり、中に於て二行り。先に總じて擧げ、二に何以故の下は別して辨す。初の五は自分の行、後の五は佛果の行に入る。皆海と云ふことは、此比丘は但自らの一海のみを知りて、更に多海有りて己が能く知るところに非ざるを以ての故に皆推するなり。第二に治地住竟んぬ。

【三】以下、第三修行住位の善友を説く文を釋す。

第三に修行住の位の中に亦五あり、初に法を擧げて修を勸むる中に、六十由旬とは古人の云はく、「六度の行を修するが故に。海岸國とは此國に海濱在るが故に、天竺の本に海岸楞伽道と名く」と。解して云はく、此國の道は楞伽山に向ふが故なり。又勝流法界の岸に到るが故に。又前は海門に入り、今は海岸に達到するが故なり。善住とは巧に理に入りて住す、又身は虚空に住し、行理無礙なるを名けて善住と爲す。往を勸め問を教へ、敬ひ還りて辭退すること、竝に知んぬべし。略して歎德無し。第二に爾時善財の下は、教に依りて趣入する中に、先に前法を憶念し、路に隨ひて行くに、十句有る中、初に彼教法を念じ、



次に彼義を思惟し、次に略して法行を修習し、後に深に入りて正しく證し、法を攝して障を除く。第三に見已りて敬請する中に四有り、初に彼に至つて其依報を見んと惟求し、二に見彼の下は正敬を見ることを明す、智は無相に住するを以て、身は虚空に遊ぶ。下の天等供養するに十句有り、眷屬行を明す。三に爾時善財の下は親しく臨みて敬を設く。四に自言の下は己が請意を申ぶるに、初の十句は法の、行を起すことを問ひ、後に我聞大聖の下十句は行の、勝用を起すことを問ふ。前の中の十種は普微従り著に至ること、準釋して知んぬべし。後の十の中に、初の二句は不離三寶の行を明し、次の不捨大願の下二句は、二利の行を明し、次の不捨佛刹の下二句は、攝佛依正の行を明し、次の不離有爲の下二句は、悲智無住の行を明し、後の常聞の下二句は、攝法の行を明す。第四に爾時善住の下は、正しく法界を示す中に二有り。初に其法器を發すことを歎じ、二に我已成就の下は己が法界を示す、中に於て四有り、初に總じて法門を標す、謂はく、法界無障礙の義を證し、能く事に隨ひて用も亦無礙ならしむ。二に我已修習の下は上の法門を釋するに、初に上の成就の義を釋す、謂はく、修習明了の故なり。逮得の下は無礙の義を釋す、謂はく、所作に照達するを無礙慧光と名く、即ち十二句は是れ照用自在無礙の相なり。利那とは此には念頃と云ふ、一彈指の頃に於て、六十刹那有り。一百二十刹那を二彈指那と名く、此間の歸息の頃に同じ。六十の阻刹那と一羅婆と名け、三十の羅婆を一摩訶伽路と名く、此には須臾と云ふ。三十の摩訶伽路を一日一夜と爲す。何以の下は無礙の義を釋成

【三】以下、第四生貴位の善友を説く文を釋す。

す。無所有とは理性に稱ふが故に。無作とは無功用の故に。天竺の本に無體性と名く、無作の神力なり。三に善男子の下は法門の業用を明す中に三有り。初に總じて通用を擧げ、二に於一念中の下は、速に十方に至りて佛を見て供養し、法を聞く等の行を明し、三に若有衆生の下は利物不空の行を明し、四に名を稱すること、知んぬべし。天竺の本に得普通疾不空超度究竟無盡菩薩解脫と云ふは、解して云はく、速かに十方に至るを普疾超度と名け、供佛利生を不空と名く、此用無限の故に究竟無盡と云ふ。第五に仰推勝進の中に二有り、初に別して二十門の淨戒を辨じ、善男子の下は總じて無量を結す、皆知説すること能はず。第三の修行住竟んぬ。

(三三三) 第四に生貴位の中に五分有り前に同じ。初に法を擧げて修を勸むる中に、國は通なり、城は別なり。自在と名くることは良醫此に於て攝化自在なるが故に、以て名と爲す。又此位の中の種種尊貴にして、佛家に生在することを表す、是故に國を自在と名く。城を祝業と名くることは、謂はく、此城中に於て三昧の光を放ち、無明の闇を破すること、呪の鬼病を除くが如く、輪字の法を説きて餘の煩惱を破すること、藥の餘疾を瘳するが如し。此を以て良醫は天竺の本に達羅閉多と名く。解して云はく、此は是れ種類の號なり、南天竺に在るも、亦此方の吳楚等の類の如し。但し此類の中に此人醫を善するが故に。能く法藥を以て善く惑病を治するが故に、以て名と爲す。此を以て無漏の位に寄當するが故に。滅障の義顯なるが故に、以て之を表す。彌加とは此に翻じて雲と名く、謂はく、能く法雨を

注ぎて衆生を潤益するが故に名く。略して歎徳無し、餘は前に辨ずるに同じ。第二に爾時善財の下は、教に依りて趣入する中に、前法を思念し、便ち純熟成滿す。十句の中に初の二句は、所得所具を念じ、次に正念佛の下の二句は所歸所離を念じ、次に念善知識の下の二句は所求所度を念じ、次に於一切の下の二句は護煩惱行を明し、後に悉能の下の二句は護小乘行なり、此を以て心に熏じて其正行を増す、漸至等は進んで後の處に至ることを明す。第三に敬ひて請を申ぶる中に四有り、先に入りて依報を見、二に正報を見る、法堂は其正位を顯す。說輪字莊嚴光經とは所説の教輪を明す、有本に錯りて論の字に作る、諸徳は種種に解釋せり。近兩本の梵經を勘ふるに、皆各輪の字なり、請ふ即ち改正すべし。謂はく、三藏解して云はく、輪に多義有り、一に字相に約せば、『楞伽』の中の字輪圓滿なること象跡等の如し。二に所詮に約せば理を盡して周備すること輪の如くにして満足す。三に用に約せば、謂はく、下の所言不虛等は傳授の義、滅惑の義有ること法輪等の如し、即ち輪字は教法詮示す、莊嚴光は行なり、除障を光と爲し、證理を嚴と爲す。三に時善財の下は親近して敬を設く、四に白言の下は情を申べて請問す。問の中に初の二句を總と爲し、後の十句を別と爲す、竝に準釋して知んぬべし。第四に爾時良醫の下は法界を示すことを明すに二有り。初に敬ひて法器を敬じ、後に己が法門を授く。前の中に四有り、初に其發心を審かにし、二に敬禮供養す、何が故に禮するとならば、古に釋して云はく、法を敬ひ人を重することを顯すが故に、諸の弟子の、法を修行する時、法を

敬ふこと具なるに、歸は即ち歸らずんば、因に教を過ぐるの徳有ることを顯す。是故に弟子に於て、常に敬法の心有るも、但身事ふること得ざれば起ちて禮することを明す。今此には心の行明め難きを以ての故に、相を現じて之を表す。又云はく、其道器を敬ふなりと。又云はく、末學を輕しめざるなりと。今更に釋すらく、菩提心は是れ佛の因なるを以ての故に、其果を重んじて而も其因を敬ふ、此敬は則ち是れ菩薩の行を行するが故に、其軌則を示して業をして敬學せしむ。又釋すらく、佛果の大心は難と爲すに足らず。仰めて大心を起す、此は則ち難と爲す。是故に經に云はく、發心と畢竟と二にして別ならず、是の如きの二心前心難し、自ら未だ度し得ずして先に他を度するが故に、我初發心を頂禮すと。又釋すらく、此心は希有なり、能く廣く出生す、是故に敬禮すと。新翻の「法界無差別論」の中の如し、「菩提心を敬禮することは、世間の人の自分の初月を禮して、滿室を禮せざるが如し。希に現するを以ての故に。滿月は此に由るが故に」と。三に敬重の下は言中に徳を歎ずることを明す、中に於て三有り。初の十は大心の功能を歎ずるに、佛の二は佛果依正の性と爲す。性とは因なり、菩提心は是れ因法なるを以ての故に性性と云ふ。次の二は所化を成ずるの因、次の二は業行を成ずるの因、次の二は願智の因なり、計はく、願は常に有に隨ひ、智は恆に欲を離る。後の二は入果の因と爲す、謂はく、菩提涅槃なり。二に爲一切佛の下の十句は十王の爲に敬護せらる。三に彼爲安慰の下は敬護を得るの因を明すに亦十句有り、知んぬべし。四に善男子の下は況く一切の菩薩の勝徳を明す中に二有



【三】以下、第五方便具足住位の善知識の文を釋す。

り、初に法説、二に菩薩爲大風の下の下十三句は、喩に約して德を顯す、準釋して知んぬべし。二に爾時良醫の下は、己が法界を示す中に二有り、初に口光をもて衆を集め、法を説いて廣く益し、二に還りて本坐に昇りて方に己が法を示す。問ふ、「前に既に敬禮す、今何んが坐に復する。」答ふ、「前は未だ法を興へず、弟子に非ざるが故に。敬を致すに咎無し今は師位を現す、是故に坐に還る。」所言不虛とは言へば必ず饒益するが故に。天竺の本には得妙音陀羅尼法門と名く。解して云はく、即ち是れ此中に、分別して天龍等の語言を知る是なり。業用と及び名を結すること知んぬべし。第五に云何能説の下は、仰推勝進の中に三有り、初の一句は總じて擧げ、二に彼諸菩薩の下は別して顯す、十句は悉く是れ言音字句施設等、繁廣なること海の如く、勝進深入すること己が能知に非ず。三に逮得の下は彼所得深妙の法を結す。第四の生貴住竟ぬ。

第五に方便具足住の中に、五分は前に同じ。法を擧げて修を勸むる中に、住林とは行徳建立するを林と名け、安固にして動ぜざるを住と稱す。又此長者の輛、大林は長道の所に薄る、因りて以て名と爲す。又三昧に住する、身の内に廣く佛境の依正の因果を現することと林の如し。長者を解脫と名くることは、財有徳有るを名けて長者と爲し、身内に無邊の佛境を現すべく、定用自在なる者を解脫と爲す。第二に爾時善財の下は、教に依りて趣入する中に、初に法の熏修を念じ、二に如是念より已下は身の遊陟を明す。前の中に初の一句は總じて前法を念じ、二に入菩薩の下六句は利他の行を明し、三に堅固菩薩の下十

句は自分行成ずることを明し、四に速得普眼の下の十句は勝進行立ずることを明す。  
 二に身遊十二年とは古人の云はく、自分勝進各六度を修するが故に以て之を表し、後漸  
 く後處に至る。第三に正しく敬請する中に三有り、先に推求簡擇し、見已りて敬を設く、  
 二に作如是念の下は勝欲樂を生じ、遭ひ難きの想を起す、悌望すること多年にして今方に  
 見るを以ての故に。九句は知んぬべし。三に白言の下は意を申べて請問す、諸文は皆先に  
 己が力の、菩提心を發すことを述べ、然して後に法を請す、此文を以て驗するときは則ち  
 知んぬ、大法を受けんと言ふれば要す須らく菩提心を發すべし、若し此心を發さずんば此法  
 器に非ず。是故に諸文皆先に定んで發心し、或は善友重ねて問うて、然して後に爲に此を  
 説くを佛法の大轍と爲す、應に思うて記すべし。請を申ぶる中に三有り、初に自らの欲樂  
 を申べ、二に我聞大聖の下は徳を歎じて説を勧め、三に唯願の下は請を結して説かしむ。  
 前の中に四有り、初の十句は佛寶の境界を窮めんと欲す、二に欲聞一切佛法の下の十句は  
 法寶、僧寶の境界を窮盡せんと欲するに各五句有り、知んぬべし。三に欲得一切諸佛普  
 薩因縁の下十句は、十藏の海底を窮盡せんと欲することを明し、四に欲滿諸願の下の句  
 は、萬行をして圓備ならしめんと欲することを明し、四に欲滿諸願の下の句  
 を歎じて説を勧むる中に、初に能善く教へて餘の菩薩をして障を離れて果を得しめ。二に  
 其心の下は其自心の常淨具徳を歎じ、三に唯願の下は請を結すること知んぬべし、第四  
 に時解脫長者の下は、法界を示す中に三有り。初に入定默示し、二に出定告示し、三に唯

【無礙云云】以下  
無礙の四義を明す

此一をしれりと結す。初の中に亦三有り、先に具縁入定の内に、文殊の憶念力とは、是れ善財の善友不捨の力なり。攝刹は境に從へて目と爲し、旋轉は智に從へて名と爲す。彼刹を攝し、己が智に隨ひて轉じ、含攝して總持するを以ての故に號と爲す。二に入已の下は法界の業用無礙の相を明す。中に於て初に身内に佛を現す、三種世間の實報の因果なり。二に或於一刹の下は、佛の八相權化攝生を現することを明し、三に善財悉聞の下は、善財は前の法界に入りて、彼身内の佛の所説の法を聞き、又彼身内の佛の神力等を見ることを明す。二に爾時解脫の下は、定を出でて告示することを明す中に亦三有り、初に法門を擧げ、二に正しく業用を辨じ、三に勧めて入らしむることを明す。初の中、無礙に四義有り。一には一一の如來に各一切の無礙莊嚴を具す、二には一一の如來、互に遍して無礙なり、三には一切の如來の莊嚴は悉く皆此長者の身内に入る、四には十方の佛海を徹見す。此文には四を具するが故に無礙と云ふ。二に得此法門の下は、正しく業用を顯す中に四あり、初に略して十方に各萬刹塵の佛を見、二に若欲見安樂の下は、心に隨ひて廣く一切の諸佛を見るに、佛皆此に來りて此をして見せしめず、此より彼に往かずして而も常に彼を見る、是の如く無礙なり。三に知一切の下は、來往せずして知見する所由を釋する中に、先に標し、後に釋するに五對有り、初の一對は標、下は釋なり、何を以てか從つて來至すること無き。『能見所見俱に夢中に在るを以て各自體無し。』何れの所より來至するや。『夢に處所無きを以ての故に。此は體に約して釋す。』二對の中に、如常等は佛の大用を歎す

るに、四種の義有り。一には水を照して影を現す、機に應ずるを以ての故に。二には闇を破して道を見る、衆生の障を滅するが故に。三には執持すべからず、離相無礙なるを以ての故に。四には速かに滅して住せず。世の攝に非ざるを以ての故に。心水の定澄めば能く彼像を現するに、水も亦去らず電も亦来らず。而も像現せざること無きが故なり。三に如幻對の中に、幻心無礙なるを以ての故に、能く無礙の幻佛を現じ、幻身の内に於て多の幻佛を現じ、障處する所無し、此は是れ緣起相山門の中の自在の義なり、之を思準すべし。四に如響對の中は上の聞佛說法音聲等を釋す。如是知の下は知を結す、證入するが故に自在を得るなり。四に善男子當知の下は通じて結す、所作は皆自心に由る、諸佛の境界は一切に圓滿するを以てなり。但心垢を以て之に對すれば見えず、若し自心を修治して障を離れしむれば、一切の佛の境界、當處に便ち現することを得るが故に云ふなり。三に是故の下は其修學を勸む、是れ前の所說、心に由りて得るが故に。勤むるに十法を以てし、修治して心を息めしむ。謂はく、一には善を以て心を長じ、二には法を以て心を潤し、三には境に於て心を練り、四には勤を以て心を策ち、五には定を以て心を攝め、六には智を以て心を洗ひ、七には慧を以て心を反照し、八には法を以て心を純熟し、九には佛果の心に等しくし、十には十力をもて心を照す。下は己が唯一を結す、知んぬべし。第五に仰推勝途の中に、初の一句は總、次の五句は別して行體無礙を顯し、次に於一切諸方の下は行用自在を明す。然るに諸文の仰推に二類有り、一には即ち自己の法門の内に於て更に深細有



【四】以下、第六  
正心住位の善知識  
の文を釋す。

【七轉】  
七轉議を

りて、己が能く知るところに非ず、即ち此文及び前位等の如し。二には異類の法門は己が能く知るところに非ざることを推す。前の第三住の中に菩薩戒等を推するが如し。上下の諸文皆此に準ず、應に知るべし。第五住竟ぬ。

(三四)第六に正心住の中に、初に法を擧げて修を勸むる内に、國を頂と名くることは、此は閻浮の最南畔の處に在るが故に頂と云ふ。第六の般若の終極を表すが故なり。海幢とは古人の云はく、「一定深きこと海の如く、智勝るること幢の若し」と。又釋すらく、「一定身獨出するを幢と名け、業用繁多なるを海と云ふ」と。數を設けて辭退する中に、徳を敷じて悲泣すとは、己が無始より善友に逢はざることを傷むを以て、今遇うて心原に會するが故なり。又般若の門を指示する、恩を荷ふこと深きが故に。第二に爾時善財の下は、教に依りて趣入す、謂はく、前を念じて後に趣くなり。念の中に初の二句は總、下の十句は別なり。一に能く慧に入り、二に所證の理、三に所攝の徳、四に所趣の用なり、次の四は所知の刹海、後の二は受持する行願なり、皆是れ解脫の業用を知り難きを、同じく不思議と名くるなり。二に漸く趣きて後に至る。第三に見て敬請する中に、初に彼依報を見て推求簡擇し二に正報を見るに靜處に安禪す。第四に三昧正受従り下は正しく法界を示す、中に於て七有り。初に法體を辨じ、二に法界の業用を示し、三に善財をして法界を觀證せしめ、四に定を出でて徳を敷じ、五に問答して名を顯し、六に問答して用を顯し、七に唯一を知ることを結す。初の中に、身を安じて動ぜず、心寂にして覺無しとは、七轉已に息みて唯第

【奇杖】 一本岐杖  
に作る。

八身はつしんを持もち、定前ぢやうぜんの加行かぎやう等願力たうげんりきの故ゆゑに。定身ぢやうしんに於おて諸しよの業用ぎやうようを起おこさしむ。若もし圓教えんぎやうの中なかは、法界ほふがいに融攝じゆうさつして自在じざい無礙むがいの故ゆゑに。業用ぎやうよう無方むかたにして未だ曾まて念ねんを起おこさず。總すべじて十四門じふしよもん有り、初はつに足下あしもとより長者ぢやうぢやう等の業ぎやうを出いすは、修行しゆぎやうの初はつに施せを以もつて首くびと爲なすことを明あす。二にに兩膝りゆうかた従したがり利り利り等たうを出いすとは、具ぐには利り帝てい利りと云いふ、利りは此こゝには土田どゐんと云いひ、帝てい利りは此こゝには主しゆと云いふ、即すなはち王種わうしゆなり。王種わうしゆは福ふくを以もつて人ひとを化けし、婆羅門ばらもんは智ちを以もつて化導けだうす。三にに腰従えうじゆり仙人せんじんを出いすとは、多おほく斷常だんじやうに著ちやくするを以もつての故ゆゑに兩邊りうへんより出いづるなり。三奇杖さんぎぢやうとは上かみに於おて安居あなごす、觀くわんを持もちするは洗淨せんじゆうの用ようなり。西域さいやくの外道げだう多おほくは此瓶杖こゝろびやうぢやうを執とり。四にに脇わきより龍りゆうを出いし、五にに胸むねの徳字とくじより阿修羅あしゆらを出いし、六にに背はいより二乘にじやうを出いすとは、大乘だいじやうの正せい面めんと相背さうはいくが故ゆゑなり。此こゝは是こゝれ他たの財さいを食むさぶが故ゆゑに慈觀じくわんをもつて治ちし、無情むじやうの物ものを嗔ちんるが故ゆゑに緣起觀えんぎくわんを教おしへ、是こゝれ邪見愚じやくけんぐの故ゆゑに巧觀くわうくわんを教おしへ、法體ほふたい二我にが無なきなり。七にに肩かたより夜叉やしやを出いし、八にに腹はらより緊那羅きんなら等たうを出いし、九にに口くちより輪王りんわうを出いし、十にに兩目りやうもくより日ひを出いし、十一にに眉間みげんより帝釋ていじやくを出いし、十二にに額かぶより梵王ぼんわうを出いし、十三にに頭かぶより菩薩ぼさつを出いし、十波羅蜜じゆはらみつを以もつて衆生しゆじやうを教化けわくわす。十四にに頂ちやう上じやうより佛ぶつを出いすは極果ごくくわ尊勝そんじやうなるを明あすが故ゆゑに。中なかに於おて二有にいうり、先まづに十二位じふにゐに菩薩ぼさつ衆しゆを攝さつし、後のちに二十事にじふじに雜難ざつなん衆しゆを攝さつす。前まへの中なかに初はつに平等びやうどう法ほふとは、道場だうじやうの菩薩ぼさつをして速すみかに佛果ぶつぐわを成なぜしめ、諸しよの古佛こぶつに齊いしからしむ。二にに普門ふもん法ほふとは、因位いんゐ既に滿みじ別べつを攝さつして普ふに歸きせしむ。三にに普莊嚴ふしやうげん法ほふとは、灌頂くわんぢやう受職じゆぢやくを以もつて普ふく法門ほふもんを嚴げんり第九住ぢゆうくぢうに授じゆけ、其そのをして修學しゆがくせしむ。四にに堅固山法けんこさんほふとは、第八住だいはちぢうの中なか、三業さんごふに過はなを離はなれて

不動なることを成ずるが故に。又此不動を捨てざらしめて、進んで第九の無礙の説法を受  
けしむ。是故に方に堅固なること山の如し。五に海蔵とは第八住の無生の藏海を以て第七  
に授與し、其をして修學せしむるが故に。六に普境界法とは、七住の中の善巧周遍所縁の  
境法を以て第六に授與し、其をして修學せしむ。七に自性地普聲法とは、六住の中の讚毀  
の自性は、但言聲有るを以て五住に授與し、其をして修學せしむ。八に隨順世間法とは、  
第四住をして五住の、世間に隨ふ五明等の法を進修せしむ。九に厭離法とは、第三住をし  
て世間を厭離し、第四の出世住に向はしむるが故に。十に長養法藏とは、此をして第三住  
の聞持陀羅尼甚深の法を受持せしむるが故に。十一に精進法とは此初心を策を、更に進修  
して後に至らしむるが故に。十二に信行とは住前の信中の菩薩なり、何を以て言はざると  
ならば、位を成ぜざるを以てなり、但し是れ行するが故に。無盡法と言ふは普賢無盡の行  
を修せしむるが故に。問ふ、此文に準依するに、十住滿するの後、即ち道場に至りて成佛  
す、而るに十行等を説かざるは何んぞや。答ふ、此は是れ普賢の十住にして、後の諸位を  
攝して皆此中に在り、一位即ち一切位なることを顯すが故に、是故に一位滿するの後即ち  
佛地に至る、知んぬ、上の十行等の後の成佛も此に同じ。此は是れ位を以て位を攝するの  
門なり。若し行を以て位を攝すれば、即ち十信の滿心に成佛すること、「賢首品」に説くが  
如し。此一轍は此圓教に非ずんば餘の處に總て無し、正しく是れ一乘宗の大例なり。自下  
の二十門は、諸天は竝に是れ入法界の器なるが爲に、是れ世法に非ず。一に色究竟天は是

れ長壽なりと雖も終に有盡に歸するを以て、今は爲に法身平等無盡の法を説く。二には初禪の梵王は慈有れども普からず、爲に大慈を説いて普く衆生を覆ふ。三には自在天は世中の大力なりと雖も終に滅盡に歸す、爲に法身を説いて善根力を生ぜしむ。四には正法の幢を建てて彼邪心を降すは、此は亦是れ他化天の攝なり。五には化樂自ら念じて樂具を化作す、爲に淨念を説いて法門を念ぜしむ。六には爲に出世の淨意樂を説くが故に、其をして執手の樂心を遠離せしむ。七に夜摩の喜樂も終に無常に竟る、爲に出世の眞法の歡喜を説く。八に彼地居の有爲の莊嚴に著す、爲に福智莊嚴の性空を説く。九に此夜叉をして惡心を指離して、衆生の命を護らしむるが故に歡喜と云ふ。十に彼眷屬の諸天而も自在ならず、爲に出世の法樂圓滿にして、他に繫屬せざることを説く。十一に修羅の大力は天の爲に伏せらる、爲に出世の法身の大境の、物として能く過ぐることを莫きを説く。十二には彼金翅鳥は大力有りと雖も、只一界に遊ぶが故に、今爲に法身の金翅の、無量の世界を覆ふことを説く。十三に緊那は樂を作し、愚にして無益に著す、爲に出世の勝智の、益生して自他俱に樂なるを説く。十四には人王は世間の五欲に樂著す、爲に欲の過を説いて、不可樂と名く。十五には龍に熱沙、金翅等の憂有り、爲に無我を説いて彼をして歡喜せしむ。十六には摩睺の愚性事の中に靜息を好む、即ち爲に甚深の寂靜を説く。十七に地獄の苦に逼れて心亂る、爲に法を説いて心を安じ、正念を得しむ。十八には智を説いて癡を治す。十九には閻羅王の處の苦具は畏るべし、法を説いて之を除くが故に無畏と云ふ。二十には餓



鬼は飢渴して常に悪く怖望すれば、法を説いて之に翻ぜしむ。悉令衆生と言ふ下は、上の所説を結す。皆出世賢聖の門に向ひて放光利益あるを明すこと、知んぬべし。

第三に爾時善財の下は、善財の親見得法を明す中に二有り。初に比丘の身を觀じて、人の法界を證することを明し、二に念彼三昧の下は、法の法界を證する中に四句有り。初の一句は彼法體を念じ、二に業用の測り難きを思ひ、三に其大用深廣なることを思ふ。無量と言ふは前の十四處の所出廣多なることを明すが故に。無作と言ふは功用を作さざること。を明し、其甚深なるを顯す。四に觀察法界の下は法の起る所因を明す、謂はく、法界嚴智は是れ因力、依佛智等は是れ緣力、出菩薩等は所作の事を現す、善財悉く其本を得ること。を明すが故に具に知るなり。第四に定を出でて徳を數する中に二有り、先に出定とは利益の事吃るが故に。六月六日とは是れ第六佳の故に。二に爾時善財の下は善中に徳を數することを明す、中に於て二有り。初の十句は三昧の體深廣にして徳を具するを數じ、二に大聖共有の下は業用を數す、中に於て初に上の三達人天等を數ふことを數じ、二に發菩提の下は上の菩薩を數する用を數す、謂はく、信行及び修道等に至る。第五に問答して名を顯す中に、答に三名有り、初の一は總じて普賢等の法門と名く、法界を見るが故に障として盡さざること無きを捨と云ひ、理として證せざること無きを得と名く。二に淨數若は智に約して障を離る、三に淨數は境に約して證するの徳なり。善男子の下は立つる所由を尋す、良に此徳は其第六の般若の位に當るを以ての故に。第六に大聖の下は、問答し

て業用を離す、答の中に二十三句有り。初の六句は器世間自在を明し、二に見一切佛の下  
 の十一句は、智正覺世間自在を明し、三に大悲攝の下の六句は、衆生世間自在を明す。第  
 七に己唯一なるを結すること、知んぬべし。第五に仰推勝進の中に三有り。初の一句は  
 總じて推し、二に皆悉深入の下は別なり。三に我尚不能の下は不能知を結す。積行成徳  
 の行尚知らざるを以て、所成の徳に況す。第六住竟んぬ。

【不退住】以下、第七  
 の文を釋す。

第七に不退住の中に、初に法を擧げて修を勸むる中に、海潮とは別の住處を顯す、大海  
 の側に近くして、潮浪之に至る處は、此第七の巧便、機に就くの用は限を過ぎざることを  
 表すが故に。園林とは衆行建立する栖止の所なり。普嚴とは勝徳圓備す。優婆夷とは是れ  
 慈悲の貌なり。休捨とは「智論」の第十に呼捨羅と名く、天竺の本を勘ふるに阿舍と名い、  
 此に翻じて意樂と名け、亦滿願と名く、能く一切衆生の願を滿するを以ての故に。二に往  
 を勸めて問を教ふ。三に時善財の下は己が所得を毀び、敬を設けて辭退す。第二に爾時善  
 財正念の下は、教に依りて趣入することを明す、中に於て二有り。先に敬うて人法を念ひ、  
 二に又作是念の下は、其勝徳の身を見て漸く遊行す。第三に至海潮の下は、見已りて敬請  
 することを明す、中に於て四有り。先に依報を見、二に正報を見、三に體を設け、四に請  
 を申ぶ。初の中に六十三事は此園林を嚴るなり。初に寶鬘、二に華樹、三に堂、四に闍、  
 五に殿、六に池、七に大宮殿有り、八に殿内に十種の座有り、九に寶帳は座を覆ふ、十に  
 寶網は帳を覆ふ、十一に光明普く照す、十二に十種の電光有り、十三に百種の雲嚴有り。

【涅槃…多し】  
 經に四依の供佛を  
 説く。初依の菩薩  
 は五恆沙の佛を、  
 第二依は六恆沙の  
 佛を、第三依は七  
 恆沙の佛を、第四  
 依は八恆沙の佛を  
 供養す。合して二  
 十六恆沙の佛のみ  
 今は三十六恆沙の  
 佛を供するを以て  
 なり。

【闡提】一闡提の  
 略、成佛せざるを  
 いふ。今は菩薩の  
 大悲心に依て一切  
 衆生を悉く濟度し  
 盡して後成佛せんと  
 欲する故に、畢竟  
 成佛の時期なき  
 もの。

二に爾時優婆夷の下は正徹の莊嚴を辨ず、中に於て三有り。初に勝德をもて身を嚴る、吉  
 山羅とは此に臂印と云ふ莊嚴なり。二には眷屬圍遶す、三には其有見の下は物を利して空  
 しからざるを明す。三に爾時の下は善財正しく禮を設くることを明し、四に白言の下は請  
 を申ぶること、知んぬべし。第四に答言の下は正しく法界を示す、中に於て四有り。初に  
 法門の體用を擧げ、二に因縁の厚薄を明し、三に來果の久近、四に法門の名字を顯す。初  
 の中に四有り、初の一句は法門の體を擧げ、二に若見聞の下は其勝用を明し、三に東方の  
 下は佛の被益を顯し、四に我此大衆の下は眷屬の行成することを明す。二に往因の厚薄  
 の中に先に問、後は答なり。答の中に二有り、初に過去に事ふる所の諸佛を擧ぐ「涅槃」  
 の中に八恆の佛所なり、此位の中は彼よりも多し。二に了知の下は十句は所成の法界の行  
 德を明す。三に來果の久近の中に、亦先に問、後に答なり。答の中に三有り、初に限齊の  
 爲の故に發心せず。二に欲教化一切の下は正しく無齊限の事を作すが爲の故に發心す、中  
 に於て各各十四の事相有り、翻じて知んぬべし。三に是故の下は自らの修行を結す、無限  
 齊の故に自身成佛の期を辨せず。問ふ、「若し爾らば豈成せざるべきや。」答ふ、「菩薩の闡提  
 亦成ぜざるが故に。衆生は須らく成すべし。亦現成の故に。自らの證理を成すること無き  
 を望むるが故に。四に法の名字を顯す中に、先に問、後に答なり。離憂安穩幢と言ふは、  
 大心は多劫に苦に遭へども憂ふること無く、正行を造修し安穩にして倦むこと無く、大  
 志獨拔せり、是故に幢と云ふ。天竺の本には無憂建立幢と名く。我唯の下は己を結するこ

【六】以下、第八童心住位の善知識の文を釋す。

と、知んぬべし。第五に仰推の中に二有り、初の一句は總じて擧げ、二に諸菩薩心の下の九句は別して行徳を顯し、我當の下は總じて結す。第七住竟ぬ。

第八に童眞住の中に、初に法を擧げて修を勸むる中に、國を海潮と名くることは、潮浪を起すと雖も海に増減無きがごとく、此位は無増減法界を得ることを表す。又理を證して悲を起すこと、海の潮を起すが如し。前の處に同ぜば、第七已上は同じく是れ菩薩なることを表すが故に、仙人とは第八の童眞清潔の貌を表す。又純無漏を表すが故に。又唯變易

身なることを表すが故に、八地に同じき等なり。毘目多羅とは、天竺の木に比目多羅涅懼沙と名く、此に翻じて最上無恐怖聲と名く。上の文に佛處を敷じて、一切智微妙の音を以て、無邊の衆生界を安慰すと云ふに此名を得たり。二に徳を敷じて往を勸め、問を教ふる

こと知んぬべし。三に善財は恩を荷ひ、敬ひて辭する中に十一句有り、初の一句は總、餘の十句は別なり。一に大乘の眞友は暫く逢ふこと亦難し、二に況んや同じく止ること多時

なるを得んや、此二は善友に遇ひ難ふして之に値ふ。三に値ひ難きの友に値ふと雖も、若し自ら大乘の根器無くんば、亦成ぜざるが故に得菩薩根器と云ふ。四に根器を得たりと雖

も、正直の眞心此れ發すこと亦難し。五に此因を具すと雖も、同行同願なることを得て善知識に作ふこと亦復更に難し、此三法器辨じ難し。六に正しく法身を得て證し難し。七

に正しく法身を説くも聞き難し、此二法義得難し。八に大心を生ずること難し、九に果智

を求むること難し、十に大行を長ずること難し。此三は心行備へ難し。第二に爾時の下は、



教に依りて趣入する中に、初は前の法を念す。初の句は總なり、心能長養の下の十句は、別して所念を顯す。皆心能と言ふは、心若し淨なるときは、則ち行成ぜざることを無し、是故に教に順じて心法の功能を念す。初の二は心を行縁と爲し、次の二は心能く行を起す、次の二は心能く法を攝し、次の二は心定慧を成じ、後の二は心能く障を除く。二に漸遊の下は正しく後位に趣き、推求簡擇す。第三に見て敬請する中に五有り。初に依報を見、二に爾時善財見彼の下の、正報を見ることを明す、樹皮衣等は少欲の相を明す。三に禮を設くる中に、五體投地は敬の極なり。四に念善知識の下の、勝れたる念想を起すに十句有り。初の五句は彼能作成果の因を念じ、後の五句は彼悲智巧運の度を念するが故に。五に作是念の下の敬ひ遠りて請を申ふ。第四に時彼仙人の下の、法界を示すことを明す中に二有り。初に發心を敬じて授法の方便と爲す、中に於て三有り。初に仙人の歎するに十句有り。善財の大志、所作の徳を明す。二に眷屬供禮して歎するに亦十句有り、善財の廣く衆生を益することを明す。三に時彼仙告大衆の下の、大心をもて當に大果を成すべきことを結歎す。二に告善財の下の正しく法界を授く、中に於て四有り。初に法門の名體を示す、此位の中に高く功用の表に出づるを以ての故に幢と云ふ。然るに相惑の爲に動されざるが故に無壞と云ふ。智慧は是れ其法體なり、是故に天竺の本には無能勝幢菩薩解脫と名く。又此仙人の定慧の作用勝出して、屈すること無きが故に以て名と爲す。二に其業用を辨する中に、先に問の中に、境界とは其業用の分齊を問ふ。即申右手の下の、用を示して現

答するなり。摩頂執手は是れ加持の相なり、中に於て三有り。初に廣處に入りて佛を見、  
 法を聞いて以て大行を修す。二に惑自見の下は復多時を経て、以て勝行を修す。三に法  
 門照して益を得るの相を明すに、十句五對有り、初の一是總、後の四は別なり。能照は皆  
 是れ無壞幢の別義なり、照に因りて得る所、皆是れ明淨藏の異德なり、此明淨は梵本  
 に名けて毘盧遮那藏と爲すを以て、是故に該攝す。三に放手の下は、用を怠めて本に歸す  
 ることを明す。放手とは其をして出觀せしめ、還在本處とは、此處を移さずして而も十  
 方を見るが故に。處既に本に還る、時も亦未だ一日を経ず。是故に一時一處に於て頓に十  
 方多劫の行を修成して成ずることは、皆善友圓教の法門の力なり。是故に善財一生に究竟  
 位に至るは、良に此等に由れり。又下の文に、一切の諸佛は無量劫に修すれども、善財は  
 一生に皆得と云ふは亦是に由るなり、是故に普賢の位の中は、或は無量の不可說劫に修し  
 て唯三祇に非ず、法力加持して經る所の時劫の如し。或は一生一念、本時等の如し、皆定  
 限無し、之に準じて通すべし。汝憶念とは觀中の事を問ふ、唯然とは正しく憶して忘れず、  
 知識方とは是れ勝位の加持なり、自力に非ざることを顯す、即ち所由を答ふ。四に我唯の  
 下は己が所知を結し。授法既に盡くることを顯す、更に遺惜無きが故に。第五に仰推勝  
 進の中に三あり、初に總じて推し、二に諸大菩薩の下は別なり。於一切時輪自在とは、古  
 人の云はく、一切の時機に於て三輪自在なり。又は一切の時劫に於て、回轉自在なるべき  
 が故に、輪の言を説く。三に我豈能の下は己が分に非ざることを結す。第八住竟んぬ。

【三輪】 身、口、

意。

【三七】以下、第九法王子位の善知識の文を釋す。

【婆羅門】 Brahmin

【大梵天】 天に事へて淨行を修す、印度四姓の一。

【梵志】 梵天の法を求めて修する行者。

【無生忍】 無生法の略。眞如實相の理を無漏の智慧を以て證すをいふ。

第九に法王子位の中に、初に法を擧げて修を勸むる中に、國を進求と名くることは、道

に反するの相なり、人皆背捨して既に順用を成ずるが故に進求せしむ。又反道の位に在り

て、怠慢すべからざるが故に以て名と爲す。天竺の本に依らば伊舍那と名け、此に曠野と

云ひ、亦稀求と名く、婆羅門とは梵志の淨行するなり、方便命とは、事に隨ひ方便を以

て命と爲すが故に、刀火も損すること能はず。又刀火は道に反するを、以て方便と爲し、

正行相續するが故に稱して命と爲す、天竺の本には是れ野人なり。第二に爾時善財の下

は、教に依りて趣入するに亦二有り、先に前を念じ、二に漸漸等は後に趣く、此等は亦總

じて前位に屬することを得。謂はく、初に見て敬ひて請を申ぶ、是れ善知識に親近す、二

に告言等は總じて是れ正法を聽聞す、三に前の法門を念ずるは是れ繫念思惟するなり、四

に進みて後處に至るは是れ如說修行なり、是故に總じて四親近の行を成ず。前法を念ずる

中に四あり、初に前の無壞幡の照すに因りて得る所の三昧等の法を念ず、中に於て聲聞忍

は是れ人空、無生忍は是れ法空なり。善財は此處に無生忍を得することは、是れ前の第八

住位の益なるを以ての故に第八地に同じ。二に常行菩薩行の下は、前の遊諸佛所成の勝

行を念ず、三に於一念頃の下は前の遊諸刹海行を念ず、四に又知無量の下は前の所見の諸

佛の化衆生行を念ず、是れ則ち諸文の成益、皆悉く此憶持法門に在りて、純熟せし

むることは、會究竟することを明す。二に到處は知んぬべし。第三に見て敬ひて請を申ぶ

る中に三あり、初に苦行の相を見、二に禮、三に問なり。初の中に四面火聚とは、正法師



【四無礙智：燒く】  
 四無礙智法、義辭、樂説に於て自在なる智を得て第九地に起る第六識と俱起する知障の一分の煩惱を斷ず【刀山】無分別智眞如を體得する眞智の、妄念安解に及ぶべからざるに喩ふ【般若波羅云云】般若智の體は無相離念のものなる故に、四句百非を絶するをいふ。

の云はく、「四無礙智は能く惑の薪を燒く」と。刀山とは眞の無分別、妄解を出づるなり。彼山上從り自ら火聚に投ずるは、加行相應の意、言はく、無分別の緣、眞より證に望めて眞顯れ妄滅するが故なり。又解すらく、火聚とは是れ根本般若の故にと。「智論」に云はく、「般若波羅密は猶ほ大火聚の如し、四邊觸るべからず、四句を遠離す」と。解して云はく、「般若火に四義有り、一に煩惱の薪を燒き、二に無明の闇を破り、三に善根を成熟し、四に證理を照現す。刀山とは是れ加行智なり、證に越くこと疾利の故に。高峻とは即ち正證に非ざるが故に、投下とは彼從り此に入るが故に。又刀は是れ斷德なり、障として割かざること無きが故に。火は是れ智德なり、理として照さざること無きが故に。投下とは障盡きて理を證するが故に。此火聚刀山は即ち是れ法門にして、更に別の表示無し、若し爾らば何が故に刀火の相有りや。解して云はく、即ち此相は即ち是れ法門なるを以て、知んぬ甚だ解し難きは是れ此文の意なり。敬を設けて請を中ぶること、知んぬべし。第四に答言の下の法界を示す中に六有り。初に法を示して修を勧め、二に善財作如是念の下は此に對して疑を生ず、三に作是念時の下は菩薩加して勸む、四に童子聞奇特の下は疑悔の過を除く、五に即登刀山の下は説の如くに修行し、正しく法界を證す、六に我唯成此の下は已唯一なるを結す。初の中に就いて若し能登刀入火と言ふは、其分別を捨して正證法界に入ることを勸む。菩薩行淨とは分別盡くるが故に。障を離れ清淨にして法界を證するが故に。菩薩の行成す、何が故に要す此の如きの法を以て勸むるや。其見を破せんが爲の



【上下の文中云云】  
【三知謙、三毒染、癩毒、瞋毒、嫉欲】  
を以て三徳の法を顯す。

【淨名】 維摩經の佛道品に或は現じて姪女と作りて、諸の色を好む者を引き、先づ欲の鈎等といふ。  
【留惑潤生】 七地以前に故意に煩惱の種を留めて、生死の事業をなす。

故に。菩薩深密の法を解せしむるが故に。顯相は解し易く、道相は知り難きが故に知らしむるなり。是の如く道に反するに、上下の文の中に總じて三類有り、一に此位は邪見に同じ、二に満足王は嗔恚に同じ、三に婆須蜜は貪愛に同じ。是故に三毒の相において、竝に正法有り。然るに四義有り、一に當相即空なるを以ての故に。「諸法無行經」に云はく、「貪欲は即ち是れ道なり、悲癡も亦復然なり、此三重の中に於て無量の佛法有り」と。解して云はく、此れ即空は是れ佛法なることを歎す、三事即ち是れ佛法と謂ふには非ず。二に巧に生を攝するに約し、説きて佛法と爲す、即是と謂ふには非ず。「淨名」に云ふが如し、「先づ欲の鈎を以て牽き、後に佛智に入らしむ」と。三に留惑潤生は菩薩の道を長ずるに約して佛法有りと説く、即是と謂ふには非ず。「淨名」の、一切の煩惱を總じて如來種と爲すが如し。四に當相即是に約すは、前の三に同じからず、此れ極めて解し難し、不思議の故に。此文の如きは是なり。二に疑を生ずる中に、初の十二句は現得を念じて疑を生ず、恐くは道縁を壊し、正行を失はんが故に。二に此將非の下は當得を念じて疑を生ず、我應に得べきを壞して得しめざるが故に。惡菩薩とは實は是れ惡魔なり、酌りて菩薩を現す。又是れ初心の菩薩已に本心を退して妬害せんと欲する者を惡菩薩と名く、躋菩薩、狗菩薩等の如し。三に加勸の中に三有り、初に色界の梵天勸む、二に欲界の六天勸む、三に龍神八部勸む。初の中に三あり、善財に告げて「是念を作すこと莫れ」とは、總じて疑ふこと莫れと勸む。二に別して多身の本意の徳を難じ、三に時諸梵天の下は、此に囚りて

【偽の中云云】以下、經の偽を釋す

通化攝生の徳を明す。四種道とは四無礙智の道なり。二に一萬の魔等は六天の中なり、一萬の諸天とは是れ夜摩天なり、初刹の四天等と同じく説く。曼陀羅等とは大小の白華なり。伊那槃那龍とは、伊那は是れ樹なり。槃那は是れ葉なり。過去に樹葉を壞するを以ての故に、龍の中に墮在して此名を立つ。難陀等は歡喜極、歡喜龍と名く。餘の勸むる等は知んぬべし。四に疑を除き悔過なる中に三有り、初に眞心を起し、二に禮謝悔過し、三に説偽して懺を受けて開道す。善財は是れ大人なり、何が故に疑ふとならば、相は是れ道に反するを以て、理として須らく疑ふべし。若し爾らずんば以て邪正を甄別すること無けん。何が故に勸むるとならば、實徳を顯示するが故に。若し爾らずんば亦以て眞偽を簡ぶこと無けん。是故に疑ふが故に其邪相を拒み、勸むるが故に其實徳を受く。問ふ、若し是魔王此を作せども、豈亦此勸を現すること能はざるや。答ふ、亦前の善知識の此人を指示するが如し、固より誤るに非ず、況んや勸むる中に、魔の能する所に非ずと説く。善財已に超魔の眼を得たり、豈之を見ざらんや。若し爾らば是れ魔に非ざることを知れり、何が故に疑を生ぜん。大菩薩の境は未だ知ること能はざるを以ての故に、法は疑ふことを須つが故に。前に説くが如し。偽の中に、初の一は、教に順じて障を除かんを勸め、後の一は因を修して果を得るを勸む。五に如説修行の中に三あり、初に安住三昧を得とは是れ加行定なり、謂はく、散動する無きの智なり、刀を以ては應に割斷せらるべし、此に反するが故に安住す。二に既至とは正證の位に到る、寂靜は是れ所證の理、安樂は是れ能證の智、照明

【三八】以下第十灌頂住位の善知識の文を釋す。

【眞際】眞實の邊際、即ち至極の義にて、空平等の眞性をいふ。

は是れ證相應す。亦是れ無明を破す。火に入らば應に燒の苦有るべし、此に反するが故に寂靜安樂なり。三に自言とは、後得智をもて證を説くを明す中に、事觸とは證智と理と融するが故に快樂と云ふ。六に我唯の下は名を結す。無盡とは、智は大定に依りて遍く法界を照すが故に云ふなり。又反道の用は法界に普周するが故に無盡と云ふ、天竺の本に得普攝道場菩薩解脫と名く、解して云はく、普く無盡の諸の衆生界を攝すること、上の力勸の中に顯すが如し。皆佛果に向はしむるが故に。道場と云ふは梵本に毘目又と名け、此に解脫と云ひ、舊には翻じて法門と名く、但出離を得るに依りて法門と名く、即ち此を亦解脫と名くるは、亦業用の自在有ること知んぬべし。第五に仰推勝進に三有り、初に明淨法王等の一句は是れ總、二に満足の下は別、三に如是等の下は結推なり、知んぬべし。

第九住竟んぬ。

第十に灌頂住の中に、初に法を擧げて修せんことを勸むる中に、城を師子奮迅と名くとは、謂はく、三昧の徳用自在の相なり。童女とは位滿じて離染貞潔の相なり。彌多羅尼とは此には慈女と云ふ、謂はく、智徳内に圓にして、慈心外に彰るるが故に名く。天竺の本に彌多羅衍那と名け、此には慈救物と云ふ。彼本に亦云はく、此女の父を師子幢と名く、即ち是れ王の女なり。位滿するを以ての故にと。第二に爾時善財の下は、教に依りて趣入する中に、先に前の法を念じ、後に後處に至る。前の中に、初に自分の境を念ずる中に眞際等を觀す。二に決了知佛の下は、勝進分を念ずることを明す中に、果法等は漸く後處



【正報に現ず】  
一は佛身に國土を  
現じ、一は國土の  
莊嚴中に佛身を現  
ずるをいふ。

に至ること知んぬべし。第三に見て敬請する中に五有り、初に推問、二に指示、三に入りて殊勝の依正を見る。金色とは貴ぶべきの貌なり、位滿顯彰す。四に敬を説く、五に請を申ぶること、知んぬべし。第四に答言の下は法界を示す中に四あり。初に法を示して觀ぜしめ、二に觀じ已りて名を顯し、三に法の業用を講じ、四に己が唯一を結す。初の中に三あり、先の一句は法を擧げて修を勸む、則ち業用自在にして法界に依止す。二に見一の下は、正しく觀じて法界を證することを明す。略して辨するに十句の一一理實に無違なり。下の文の普賢毛孔現塵刹等は即ち正報に依を現す、此中は即ち依報に正を現す、皆是れ無礙法界自在の故なり。又此は亦是れ器世間の内に智正覺を現す、亦是れ因位の中に果法を現す、亦是れ體の中に用を現するなり、法喻合有り。三に皆是れ彼女の下は法を結して人に屬す、亦是れ果は因に由ることを結す。二に爾時善財正念の下は法門の名を顯すに、先に問、後に答なり。答の中に般若と名くるは、第十住の位知度滿するが故に、即ち智自在にして法界に依止す。普莊嚴とは智に依りて用を起し、具徳圓備す、法雲に顯す所の如き、即ち其事なり。彼諸如來以異門令我人とは、別を攝して普に歸するが故に。一切一を成するが故に。一の甚深を顯すが故に。廣多の故に。三に白言の下は業用を顯する中に、先に問、後に答なり。答の中に三有り、先に法を擧げて總じて標す、生平等時とは正證相應の時を明し、法門の體を得るを明すなり。得普門等とは、總じて所得の業用を明すなり。此中に陀羅尼門三摩地門を得て、法界に依止するを以ての故に。十住十地の境、位同



なるを以ての故に、法を得ることも亦相似せり。二に所謂の下は別して所得を顯す、中に於て略して擧ぐるに總じて一百一十六門有り、分ちて十位と作す。初の八門は所知の理事持を明し、二に功德の下の十門は願行持なり。三に業陀羅尼從り下の八門は業持を明し、四に善行三昧從り下の六門は定用持を明し、五に心海の下の五門は知他心持を明し、六に發起衆生の下の十一門は知所化持を明し、七に大悲の下の十五門は能化持を起し、八に世界起の下の十七門は知利海自在持、九に分別佛身の下の二十七門は知佛海自在持、十に菩提心色の下の十門は知色海無礙持なり、我唯の下は已を結す、知んぬべし。第五に仰推勝進の中に三有り、初の一句は總じて深廣の德を推し、二に安住の下の十句は別して顯す。中に於て初の二句は行深を明し、次の難礙の下の二句は慧廣を明し、次に得無礙の下は眼智無礙を明し、次に一切世間の下の二句は行堅固を明し、後に悉能の下の二句は攝化自在を明し、三に如是の下は已の分に非ざることを結す。上來十位照得十住竟んぬ。

華嚴經探玄記卷第十八

# 華嚴經探玄記

## 卷第十九

第六地の知  
議を盡す

魏國西寺沙門法藏述す

【一】以下十行位の菩薩に寄せて説く下、初に歡喜行位の善知識の文を釋す。

自下十行の善知識を明すに十人有りて、各各一位に當る。初に歡喜行の中に亦五分有り。初に法を擧げて修を勸むる中に、國を救度と名くることは、常に法財を以て、一切に施すが故なり。又行は能く物を濟ふが故に、名けて救と爲し、出世を得しむるを復名けて度と爲す。比丘善現とは、行相超昇する比丘にして、施行内に成じ、勝報外に現ずることを表示するが故に、善現と名く、往を勸め問を教ふる等知んぬべし。第二に爾時の下は、教に依りて趣入する中に、先に前法を思念し、後に漸く後位に至る。前の中に初の一句は、總じて前の般若普莊嚴門を念じ、下の十一句は別なり。一は所證、二は所依、三は所度、四は所行にして、亦是れ自爲の諸行無性なり。五に刹那は生滅の心を離る、六に幻現すること光の如し、七は理の眞性を念じ、次の二は語義を念じ、後の二は因果を念す。第三に於城の下は、見て歡ひ請を申る中に、初に推求簡擇す。都市等に於て求むるは、無著の行は縁に隨ひて造修することを表すなり。二に見彼比丘の下は、勝相を見ることを明し、在林經行と言ふは、出世の相を表し、亦修行の所を顯す。次に正報殊勝なるは、行は佛果に順ずることを表すが故に、相は佛に同じ。地品に云はく、説の如く行する者は、乃し

聖法を得」とは、斯れ之謂なり。次に天龍の下は、勝眷屬の諸の供養を興すことを明す。三に爾時の下は敬を設け請を申ること知んぬべし。第四に答言の下は、己が法界を示す、中に於て三有り。初に依縁得法を示し、二に善男子の下は、法の業用を顯し、三に我唯の下は、法門の名を結す。初の中に亦三有り。初に年少くして出家の日近しとは、初めて行の位に入るが故に年少と名け、創めて十住の家を離るるが故に、日近しと云ふ。二に自我の下は、所供の諸佛を明すに、前位は三十六なり、此中は漸く増するが故に、三十八恆なり。又云はく、自我生來とは、一生に於て爾所の劫を経て、彼諸佛に供す、此れ何の義ぞや。釋して云はく、或は壽命は極めて長し、或は一生に多劫を攝するを以て、念に劫を攝する等の如し。或は佛法に入るを生と爲す。三に云はく、「我此菩提心を生じてより來、爾所の劫を経て、爾所の佛を供す。又涅槃に八恆の佛を供し因位を攝す」と云云。三に彼諸佛所の下は、成行得法を明す、一句は總、二に莊嚴の下は別の中に三種を標す。一に定願、二に行を數じ、三に具足の下は德備る。三に嚴淨の下は、攝するに三因を出す、次の如く知んぬべし。

二に業用の中に就いて、十一句は指先に業用を辨じ、後所因を出すが故に。初の三は是れ前の定願莊嚴力、次の一は是れ前の普賢の行力、餘の七は、是れ菩薩の行願力なり。中に於て初の二は佛を供し法を聞く、是れ前の知菩提護法輪等なり。次の二は行定の深、後の三は知智の廣なり。三に名を結すとは、遠照顯煥を名けて燈明と曰ふ、即ち十不可說

【二】以下第二體益行位の善知識の文を釋す。

等なり。常に用ひて竭くること無きを、名けて隨順と爲す。天竺の本には、不休息智燈菩薩解脫と名く。第五に諸金剛の下は、仰推し勝進する中に、此は是れ同類に仰推す。初に生族の勝を顯し、二に報命の勝なり、前には一生に不可說劫に到ると雖も、未だ不死を得ざる故に推せしむるなり。三に報體の勝なり、謂はく、内智は盡くすること無く、外色は壞すること無し。四に普觀の下は、業用の勝を明す。五に我當云何の下は、己が分に非ざることを結す。第一の歡喜行竟んぬ。

第二に總益の行の中に、初に法を擧げて修を勸むる内に、初に圓を輪那と名くるとは、此に淨と名け亦淨と名く、是れ大江の名なり。謂はく、圓に此江有り、事に從ひて名と爲す。諸の外道世人皆云ふ、「此江の中に於て洗浴すれば、悉く罪を滅し福を増す」と、故に以て名と爲し、持戒の行は業非を捨離することを表す。童子を釋天主と名くるとは、童子は戒行清潔にして、戒に於て自在なることを表す。童子を釋天主と名くるとは、童子の本に准せば、應に諸根自在と名くべし。梵名に、因陀羅は此には帝釋と云ふを以て名く、因陀羅は此には根と云ふなり。濕婆羅は、此には自在と云ひ亦主と名くるとなり。釋天及び根は、梵音相近きを以ての故に、各各一名に據るなり。二は往を勸め問を教ふ。第二に時善財の下は、教に依りて趣入する中に、初に勝念を起すを明し、二に敬を以て辭退し、三に衆と同じく至る。第三に見て敬ひ請を申ぶる中に、初に推求告示す。善城は亦是れ輪那の名なり。天竺の本に城善と名く、而も城の外と言ふことは、戒行は外を防ぐことを表す故



【三聚戒】大乘の菩薩は出家在家共に受くる戒にして攝律儀戒、攝善法戒、攝衆生戒の三をいふ。

【三】以下第三無志恨行の善友を明す文を釋す。

なり。河水の側とは、定水の發すことを表すが故なり。河水は即ち是れ彼江氣なり。二に其所作を見るに、沙弄びて戲るとは、三聚戒は數方便集起することを明すなり。三に敬を設け、四に請を申ること知んぬべし。第四に答言の下は、己が法界を示す、中に於て三有り。初に法門の體を擧げ、二に善男子我因の下は、業用を明し、三に我唯の下は其名を結す。初の中に文殊教とは、人能く戒を護るを明すが故に相を知る。十善は是れ吉、十惡は是れ凶なり、戒相一に非ざる故に、算數の法と云ふ。「智度論」に云はく「菩薩の戒品は微塵數なり。善惡因果の理は、決定の故に印法と名く」と。又有人釋して云はく「初は因を相するは、律儀戒を除斷するなり、次は算善は恆に攝善戒を修するなり、後は機を印し救療するは攝生戒なり」と。此に因りて一切の巧匠等を得とは、巧に世法を知りて、出世の用を轉成す。是れ天竺の本に、我巧に能く一切法を轉變する智を得たりと。二に業用を明す中に二有り。初に相印の二法の功能を顯す。相は善惡を知り、印は災を除くを以ての故に、是故に同じく辨す。二に復次の下は、算法の功能を現す。羅叉は此には萬と云ふなり。三に己が分を結す、知んぬべし。第五に諸大菩薩の下は、仰推勝進する中に、初に總じて所推を擧げ、後に我當の下は、正しく己が分に非ざることを推す。第二饒益行竟る。

【三】以下第三無志恨行の中に、初に法を擧げ修を勸むる内に城を海住と名くとは、若し相に隨ひて釋せば、此城は南海に近うして住す。若し下の文に准せば、財法を出して施すこと不

【四攝】布施攝  
 衆生の欲するもの  
 を與へて、開法  
 の縁を作る、要語  
 擇一對機の程度を  
 考へて、善言軟語  
 を以て慰諭し、攝  
 入せしむ、利行を  
 (身口意に善行を  
 なし衆生を利し攝  
 入せしむ)同事攝  
 (形を衆生と同じ  
 て、誘引す)。

可盡の故に、海住と云ふ。優婆夷を自在と名くることは行に約す、即ち忍は瞋癡を離るるが故に自在と云ふ。若し徳用に約せば、志に任すが故に自在と云ふ、則ち下に顯す所是なり。天竺の本には、眞實富滿と名く。解して云はく、財法遍充するを以ての故なり。第二に時善財の下は、命に依りて趣求する中に、初に熏修を得ることを明し、二に敬を設けて辭退し、三に懇慕して徳を敷す。十喻有り知んぬべし。第三に見て敬ひ請を申ぶる中に、初に推求等は、入法の方便を明し、二に進入の下は、正報を見ることを明す、嚴具盡服を除くことは、忍の相を表するが故に。三に於其宮の下は、依報を見る、四門を聞くとは、四攝をもて生を攝する故なり。四に一萬女の下は、眷屬の勝を見る、中に於て語音身香皆大いに物を益し、禮を設け請を申ぶ。第四に答言の下は、正しく法界を示す中に三有り。初に法門の體を擧げ、二に以一器の下は業用を辨じ、三に我唯の下は、法を結して已に屬す。初の中に業用を出して、窮竭する無きを以ての故に、無盡藏と名け、所出物を利し、勝徳を具するが故に、功德莊嚴と名く。二に業用の中に三有り、初に法門の業用を明し、二に汝見我此の下は、同益を見しめ、三に且待の下は、現を擧げ、驗成す。前の中に三有り。初に衆生に食等を施すの益、二は二乘等に施すの益、三は菩薩に施すの益なり。はじめの中に一器食とは、古に釋して云はく、機に依は一味の眞如なりと。隨其所欲等とは、機に稱ひて法を説くなり。而無増減とは用ひて盡くる無きなり。又釋すらく、只是れ一器の飯、即ち法界に融同するは、無盡緣起なり。是故に機に應せざることを無く、應に益せざ

【二に同益云云】  
本文の「善男子、  
汝我此一萬の眷屬  
女」の下。

【四】以下第四無  
盡行の善友を明す  
文を釋す。

【財法無盡云云】  
財寶のみならず、  
法寶をも衆生に與  
へ、眞俗意に隨ひ  
出生涌現し、自在  
に利潤す。

ること無かるべく、益として本位の法界に稱はざることを無きが故に、故に、欲に隨ひ而も増減無しと云ふなり。二に同益を現する中に二有り。初に己が眷屬の根行等同じきを擧ぐるに二十八句有り。初の十句は自分方便行と名け、次に同境界の下の四句は、所修の法同じきなり。後に同具菩薩の下の十四句は、自他の行の滿じて同じきなり。二に此諸菩薩の下は、己を現じて攝成するの相なり。三に善男子且待の下は、現事を擧げ驗成す。三に我唯の下は、名を結す、知んぬべし。第五に仰推の中に、初に別して所推を擧げ、二に己が分に非ざることを結す。第三の無慧行竟んぬ。

第四に無盡行の中に、初に法を擧げ修を勸むる内に、城を大興と名くることは、精進熾然の故に云ふなり。又廣く財法を以て、起して大施を成ずるが故に、以と名と爲り。長者は前の如く釋す、精進行は味の中の最勝なるが故に、甘露と名け、德勝出すること、之を表すに頂の如し。第二に時善財の下は、教に依りて趣入する中に、先に教を設けて辭退す、二に爾時の下は、前法を憶念す。三に漸漸の下は、後位の處に至る。第三に周遍の下は、見て敬ひ講を申ぶる中に、初に推求、二に樂求の下は、勝欲を起し、三に正しく殊勝の依正、及び勝眷屬を見、四に敬を設け、五に講を申し行を問ふ。第四に長者答言の下は、己が法界を示す中に、初に發心を數じ、二に善男子汝見處の下は、法攝の眷屬、十種の饑益を成ぜしむること知んぬべし。三に己が法門を標す。謂はく、財法無盡にして、虚空に蘊在し、意に隨ひて給施するが故に、以て名と爲り。四は隨其所順の下は、法門の業



【五】以下第五體  
 變亂行の善知識を  
 明す交を釋す。

用を明す中に、初は總じて功德の寶藏意の如く益生するを擧げ、二に且得の下は、事を擧げて驗成す。先は衆の集まれるを見て次に空より物を雨らすを觀す。此れ破虛空器三昧に同じく、正しく是れ十行の所得なり。後法を授けて喜ばしむ。五に己が法門を結す。第五に仰推勝進の中に、初に總じて推す。二に謂の下は、別して十句有り。三に我當の下は、己が分に非ざることを結す。第四に無盡行竟る。

第五に離癡亂行の中に、初に法を擧げて修を勸むる内に、城を師子重閣と名くることは、十德疊起する狀重閣に類す、諸佛菩薩雄猛の士は、彼位に處在するが故に師子と云ふ。此字は彼城に在り、城は宅に依りて號するが故に、以て名と爲り。長者法寶周羅とは、此は頂髻と云ふ、即ち法を以て人を成じ寶を頂髻と爲す。天竺の木に有法長者と云ふを、寶周羅と名くるは、其定用可貴尊極の相を顯す。第二に教に依りて趣入する中に、初に敬を設けて辭退す。二に前の法門熏修長養を念じ、三に漸く後位に至る、並に文處を見るべし。第三に周遍推求の下は、見て敬ひ請を申ぶるを明す中に、道に於て遇見するは、道力緣に隨ひ物に觸れて便ち應ずることを明す。第四に時彼長者の下は、己が法界を授く、中に於て四に執手等は、是れ方便を授く、即ち加行なり。二に遍觀等は正しく法界を見る、即ち正證なり。三に問法因緣は即ち後得なり。四に我唯等は己が所知を結す、即ち名を立つるなり。初に執手將歸とは、所證に攝歸することを表す。且觀我家とは、法を以て正しく授く。二に善財遍觀の下は、法界を證見するに、先に總觀、二に其宅廣大の下は、別觀な



【檀行】 布施の行

【五明論】 一、聲明(言語文字の學)二、工巧明(工藝技術算數等)三、醫方明(醫學)四、因明(論理學)五、內明(婆羅門教では四吠陀論、佛敎では三藏十二部教)

り。謂はく、此宅十重とは、上に向つて重ぬるなり。此相は定め難し、略して三釋を作る。一は古師に依らば、云はく、十重は即ち十地なり。八聖道を以て、通じて遊入するが故に、以て八門と爲す。或は四攝四無量も亦八門と爲す。初に食を施すは、謂はく、初地の檀行なり。二に寶表を施すは、二地の慚愧戒行の衣服なり。三に寶嚴の具を施すは、三地の忍行用以て身を嚴る。四に内の眷屬を施すは、四地道品の助行なり。五に結集正法行等とは、五地に五明論等を得。五に得波若菩薩滿等とは、六地に般若を得て、大智現前す。中に於て三有り。初に總じて深智を現じ、二に所謂の下は別して十門を顯す。一は照即ち寂なり。二は寂即照なり。三は外緣轉ぜず、四は内照は染を離る、五は體堅、六は用廣、七は勝徳を含む、八は法界を見、九は巧使多し、十は物の機に稱ふ。十一には喩に約して顯す、是れ増數の故なり。三に結集如是の下は、廣を結して略を顯す。七は響忍菩薩等とは、七地に有の中の殊勝行を得、種種の教法、別異の儀無きを知り、成ずること響忍の如し。八は常住菩薩等とは、此中に二徳有りて、八地に無増減の法界を證得す。神通利等とは、三世間に於て自在なるが故なり。詣一切等とは、九地に佛法を受持するを明すなり。九に補處等とは、十地の受職位等も亦、是れ等覺の位なるを明す。十に一切如來とは妙覺の位なり。從初發心等は、因を攝して等を成ずるを明す。第二に更に此上の十重を釋するに、即ち總じて是れ此十行の位にして、始に施食に従ひて、歡喜行と名く。乃至第十の如來の如來充滿は、是れ眞實行なり。一位に於て一切位を攝するを以ての故に。此に二重有り。一

十行は、前に十住及び十信行を攝し、後に廻向及び十地の位を攝するを以て、二には既に十行に諸位を攝し盡すを以て、自の十内に於て、復一位に一切位を攝するを以て、是故に此第五行の中に於て、斯十行を具す。前の海幢比丘は、十住の位に在りて、頂佛說法し、還つて十住門を以て一切位を攝す。今此長者は、十行の位に在り、所居の宅に還つて、十行門を以て一切位を攝す。是れ則ち兩處の攝義の分齊なり。但前は第六住に寄せて説くを以て、此は第五行に約して辨す。又前は頂佛に寄し、此は居室に約することは、並に勝劣不同を表さんが爲の故なり。第三に又釋す、總じて位に約せず、但此菩薩は、行を以て機に就かば、勝躋に居するを現す。則に依らば十を説き、以て無盡を顯す。初の四は物を以て施す、初は易く後は漸く難し。次の二は法を集めて施す。初は淺くして後は深し。次の二は受法を領す、初は狭くして後は廣し後の二は勝德を現す、先は因にして、後は果なり。總じて此十位は皆總より漸く細なること知んぬべし。又此長者は具に因果行等の法を攝し、總じて所依と爲すが故に、以て宅と爲り。三に後得の中に法の本因を顯す。中に於て先の間、後に答なり。答の中に善根をもて三處に廻向す。謂はく、初は貪苦を滅除すとは、即ち十重の中の初の四は、是れ其報なり。二に佛菩薩等を見、三に恆に正法を聞く。此二は即ち五重已上是れ其報なり。故蓮華報とは、三處に十重を滿すことを廻求するなり。四に我唯の下は、法の名字を結す。謂はく、宿願所求の三處の福は、遂に之十重を成滿するが故に、滿足大願法門と名く。天竺の本に云はく、「菩薩の解脫を得るを、無礙莊嚴道

【五】以下第六善  
現行の善知識を明  
す文を釋す。

場と名く」と。釋して云はく、十重の宅を嚴道場と名け、宿願徹し成ずるを、無礙願と名く。即ち彼無障礙の願力を以て、此宅處を嚴るを、道場と名くるなり。第五に仰推の中に、初に別して十句を辨するに皆不可壞と云ふは、德窮滿するが故に。進昇すること無きが故に。縁の爲に動ぜざるが故に。我當の下は、己が分に非ざることを結す。梵本に依らば云はく、「我云何が能く彼功德を知り、能く彼行を説くべきや」と。解しては云く、是れ則ち彼已成の德に於て、了知する能はず、現行の行も亦説くこと能はず。上下の諸文は皆此に同じく應に知んぬべし。第五行竟んぬ。

第六に善現行の知識の中に、初に法を擧げて修を勸むる内に、國を實利根と名くることは、國は境位の分齊なり、般若は倒を離れ理に稱ふを實と名け、明照後を生ずるが故に、利根と名く。此は是れ處に託して第六行を釋す。城とは外を防ぎ内を守る、是れ妙智の用は狹を簡びて廣を取るが故に普と云ひ、通入遊涉するが故に、復門と稱す。普は即ち是れ門、普門は即ち城にして、皆持業釋なり。此は法に約して辨す。又釋すらく、城は眷屬を攝し、多の所趣と爲るが故に、城の普門は此れ事に約して釋するなり。長者普觀妙者とは、智は根樂を照し、普く衆生に熏するが故に、以て名と爲り。第二に教に依りて趣入する中に、一は辭、二は念、三は到なり。念の中に十句有り。初の一句は總じて前の法を念じ、次の二句は念に因りて得る所を明し、次の一句は樂求して厭くこと無し。次の三句は菩薩の解脫根力を成就し、次の二句は行願心に隨ふ、後の一句は智の體用を得。第三に見て

散ちりまひ請まうを申まうぶる中なかに、初はじめてに求もと趣めして念ねんと作なす、二にに勝たれたる依え正ちやうを見み、三さんに敬けいを設たてけ、四しに請まうを申まうぶ。第四だいしに己おのれが法ほう界かいを授さうく。中なかに三さん有り。初はじめてに發はつ心しんを敷たんして授さう法の方ほう便べんと爲なし、二にに我が知ち一切いっけつの下したは、法ほう門もんの業ごう用ようを授さうけ、三さんに我が唯ただの下したは、法ほうの名な體たいを結むすす。業ごう用ようの中なかに就じゆいて二に有り。初はじめてに療りやう病びやう通つう化けの下した、衆しゆ生じやうを益やくす。二にに我が又また善ぜん知ちの下したは、香かうに因よりて行ぎやうを起おこし、上かみ諸しよ佛ぶつに供くす。前まへの中なかに四し有り。初はじめてに其その身み苦くを除のぞき、二にに其その身み樂らくを與あたへ、三さんに然しか後ご爲な説せつの下したは、其その心しん病びやうを療りやうし、四しに稱しやう揚やうの下したは、正ちやうしく大だい行ぎやうを授さうく。此この四しの中なかに初はじめての二には共ともじて衆しゆ生じやうを安あん樂らくにす、亦また是こゝれ攝さつ化け方ほう便べんなり。後のちの二には是こゝれ利り益やく衆しゆ生じやうにして、亦また是こゝれ正ちやうしく法ほう行ぎやうを授さうく。第四だいしの中なかに就ついて、十じふ四し句く有り。初はじめての三さんは是こゝれ菩ぼ提だい心しんの法ほうを授さうく。是こゝれ行ぎやうの本もとなるを以もつての故ゆゑに。一いちは例れいの功こう德とくを讚さんじ、一いっ切けつ智ち心しんを發はつ求せうせしむ。二には大だい悲ひ救きう業ごう生じやう心しん、三さんに諸しよ度た淨じやう智ちは是こゝれ厭えん離り有ゆう爲ゐ心しん、亦また是こゝれ廣くわう修しゆ勝じやう行ぎやう心しんなり。説せつ諸しよ大だい願がんの下したの十じふ一いつ句くは、智ち度たを顯けん所しよ修しゆの十じふ度たの行ぎやう法ほうを授さうく。初はじめては大だい願がんに因よりて、施せ行ぎやう攝さつ生じやうし、乃すなはち至いた末ま後ごの二に句くは、智ち度たを顯けんす。二にに香かうに因よりて行ぎやうを起おこす中なかに、初はじめては諸しよ香かうの體たいを知しり、二にに香かうを燒やきて願がんを起おこし、三さんに願がんの如ごとく普ふく熏くんじ、大だい供く養やうを成じやうす、文ぶん處ちよは見みるべし。梵ぼん本ほんの中なかは、是こゝれ賣ばい香かうの人ひとなるを以もつての故ゆゑに。三さんに名な體たいを結むすする中なかに、令りやう衆しゆ生じやう歡かん喜ぎとは、前まへの所しよ説せつの如ごとく、衆しゆ生じやうを利り樂らくするが故ゆゑに。普ふ門もんとは前まへの所しよ説せつの如ごとく、燒や香かう普ふく熏くんじて、法ほう界かいを嚴げんるが故ゆゑに。見けん一切いっけつ佛ぶつとは、是こゝれ所しよ供くの諸しよ佛ぶつの故ゆゑに。天てん竺ぢくの木きに、得とく令りやう一いつ切けつ衆しゆ善ぜん足たく普ふ門もん見けん供く養やう香かう身み法ほう門もんと云いふ。第五だいごに仰ぎやう推すい勝じやう進しん分ぶんの中なかに、初はじめての一いつ句くは其その人ひとを擧あげ、次つぎの一いつ句くは總すべて大だい益やくを推すいし、三さんに共とも有ゆう見けん



【七】以下第七無  
著行の善知識を明  
す文を釋す。

の下は、別して見益を推す。我當の下は己が分に非ざることを結す。第六の行竟んぬ。  
第七に無著行の知識の中に、初に法を擧げて修を勸むる内に、城を滿幢と名くることは、  
方便の境備り、勝出するを名と爲す。王を満足と名くることは、善巧智圓にして違順  
自在なるが故に、其王を以て復斯號を表す。第二に教に依りて趣求する中に、初に辭、二  
に念、三に到なり。念の中に初の一句は總して念す、此無著は是れ善巧の位なるを以ての  
故に、總じて已前の諸位の法を攝する故に、次第幢等と云ふ。此れ即ち其教法を念す。二  
に復作の下は、其人力を念じ、三に如是の下は、思念に因りて勝進を得るを明す。大心に  
十六句有り。初の九は自分行の心、二に見諸佛の下は、勝進の心を得。第三に見て敬ひ請  
を申る中に七有り。初に問答指示す。二に遙見彼王の下は、勝たる依正を見る。三に其道  
相を觀じ、四に以て疑怪を生じ、五に天は決を爲す、中に於て二有り。初に前の教は眞實  
なることを擧げ、疑を生ぜざらしめ、二に菩薩方便の下は、後の行玄密なるを明し、具  
をして信じ入らしむ。初の中に謂はく、前の善知識は、汝を教へて此に至らしむ、彼教は  
虚からず、何を以てか疑を致す。問ふ、「善財は豈自ら前の教を憶せざるや。何が故に疑  
を生ずる。」答ふ、「瞋害障道の相に對するを以ての故に、理として須らく疑を安んずべ  
く、方に乃ち菩薩道の中の反道順道の、二行の差別を知ることを顯す。爾らんば邪正は  
以て甄別すること無からん。」梁の論の戒學の中に、甚深を釋して云はく、「菩薩は此の  
如きの方便勝智に由りて、殺生等の十事を行ずる、染濁の過失無くして、無量の福德を生

【瑜伽】 同論に四十四攝戒を説く下

じ、速かに無上の菩提を得、要す大菩薩は此を行ずるに堪へたり、此に二種有り。一に實  
 行、二は變化なり。實行とは、前人必ず定んで無間等の業を作るべく、別の方便の、此惡を  
 離れしむる無し。唯命を斷すべくば、便ち惡を作らずと了知す。又此人若し命を捨て已ら  
 ば、必ず惡道に生ずることを知る。又菩薩自ら念すらく、我殺業を行す、必ず地獄に墮し  
 て、彼が爲に苦を受けん。彼現に少輕の苦惱を受くと雖も、來世には必ず樂の果報を受けん  
 と。解して云はく、此は「瑜伽」の菩薩地の中の戒品の内の説に同じ。二に變化とは、那羅  
 王及び善財童子の如し、或は可愛の事を見、或は可畏の事を見、各衆生をして善處に生  
 ぜしむ一と。解して云はく、彼に此經を引く、是は變化して作す。那羅は是れ梵語、此に  
 は滿と云ふなり。或は可愛の事を見るとは、此前の文を引く。初に依正を見て、可愛を生  
 じ、後に王法等を犯すを見て可畏を生ず。皆益生の爲の故なり。二に菩薩の所作の玄密を  
 明す中に、初の二句は巧智思ひ難し、後の五句は業用思ひ難し。謂はく、跡は違し行は順  
 ず、下位の測量するに非ざるが故に云ふなり。六に敬を設け、七に請を申ふ。第四に時滿  
 足王の下は、己が法界を授くることを明すに二有り。初に授法の方便。謂はく、執手將入  
 等は、彼加行を攝して、眞諦に趣かしむ。二に善男子汝觀の下は、正しく法界を示して、  
 證と相應せしむ、中に於て五有り。一は果を擧げて入らしめ、二に見我此軌の下は、因を  
 示して修せしむ。幻化法門と言ふは、所修の因を出す。謂はく、道相は不實の故に、以て  
 名と爲す、天竺の本には佳幻三昧と名く。三に我此の下は、幻用を擧ぐ。四に當知の下は、

【八】以下、第八  
尊重行の善知識を  
明す文を釋す。  
【群品】群る品類  
即ち種種の對機を  
いふ。

【僧祇】阿僧祇  
(Asaṅkhyeva)  
の略無量又は無數と  
譯す。

實行を辨す。五に己が自分を解す。第五に仰推勝進の中に、初の一句は總じて推す。謂はく、後の第八の位は、無生忍に當るが故に此に之を推す。下の九句は別して、幻等の甚深を顯し、後の一句は己が分に非ざることを結す。第七の行竟んぬ。

第八に尊重行の善知識なり。法を擧げて修するを教ふる中に、城を善光と名くることは、謂はく、理に順じて物を益する業用を光と爲す。王を大光と名くるは、大慈定の光群品を照益し、攝化自在なるを以ての故なり。第二に教に依りて趣求する中に三有り。謂はく、敬ひて辭し前を念じ後に至り、念の中に就いて、前法を重修して、更に増勝ならしむ。謂はく、世間一切の法幻なりと例知して、同じく法界に入る。第三に善財作如是念の下は、見て敬ひ請を申る中に五有り。初に勝念を起し、必ず見の想を作す。二に勝れたる依報を見るに、十種の莊嚴有り。一に七重の池臺、二に七重の寶講、三に十徳の街巷、四に巷に僧祇の衆有り。五に僧祇の寶閣、六に純寶の帳、七に寶蓋覆ふ、八に幢幡を建つ、九に別閣に王住す。十は善財に染無し、謂はく、如幻を知るが故に。善友を注求して異念無きが故に。三に勝れたる正報を見るに、大人の相を具す。十種の喩を以て其徳を歎美す。二十八とは因位は未だ滿せざるを現する故に。四に彼王殿前の下は、主伴の攝生を見、先づ資具を施し、後に衆生を攝するが故に。下の十門は施の意を辨するに、一句を缺けり。五に敬を設け請を申ぶること知んぬべし。第四に己が法界を授くる中に五有り。初は己が法門を示す。謂はく、慈勝出して、離染圓滿に備るが故に、以て名と爲す。二に我於の下は、

得法の因縁を明す。謂はく、多佛の所に於て、此法を聞く。觀察とは思慧の故に。清淨とは己が明淨を思ふが故に。修習とは修慧の故に。莊嚴とは證得の故に。三に我住此の下は、法門の業用を顯す、中に於て四有り。初に法を以て生を攝す。謂はく、法を授けて慈心等の益を得しむ。二に我以如是の下は、財を以て物を益す。三に行に隨つて見を異にす。四に爲我宿世の下は、機器を簡定す。四に此機衆生の下は、慈定の功力を明す中に二有り。初に彼定用を説き、二に且待の下は、其用を對現す。中に於て先に定に入り、後用を顯す。情と罪情と威勝益を成す。五に己が自分を結す。第五に仰推勝進の中に、初の一句は總じて慈益の深廣を推す。二に七句は喩に約して徳を顯す。三に我當云何の下は、己が分に非ざることを結す。第八の行竟んぬ。

【九】以下、第九善法行の善知識を明す文を釋す。

第九に善法行の知識の中に、初に法を擧げて修を勸むる内に、城を安住と名くとは、實法に契合し、縁の爲に壞せられざるが故に、以て名と爲す。優婆夷を、不動と名くことは、初發心の時、二乗の煩惱の爲に動ぜられず、因りて以て名と爲す。第二に教に依りて趣求する中に六有り。一は敬を設けて辭退し、二は前の法門を念じて修習増長し、三は作是思惟の下は、思に因りて益を得。四は復作是念の下は、知識の功能を念じ、五は善財如是慈心の下は、念に因りて感證す。隨菩薩天とは、是れ己が業行の神なり、如來使天とは、佛力の推生の神なり。但菩薩の行を修する位著る。已去は皆二天有りて、常に其人に隨ふ。既に善財の深悲は、定に入るを見、定に於て身を現じ、讚を加へて安慰す。六に定を



出で漸く至る等知りぬべし。第二に推問の下は、見て敬ひ請を申る中に四有り。初に推問して處を知り、二に爾時善財歡喜の下は、依報を見て益を得。謂はく、光觸は定を得、是れ法門の宮殿なるを以ての故に、光身に觸るるに寄り、五百の三昧を得。三に前語の下は、正報を見る益の中に六有り。初に身の勝を見、二に宮殿の勝、三に香嚴の勝、四に眷屬の勝、五に離樂の勝に二句有り、先に伏し後に斷ず。六に見を際して總じて數す。頌の中に、上の半は略して三行を數じ、下の半は喻を擧げて總じて顯す。四に偈讀已下は請を申ぶ、知んぬべし。第四に爾時彼女の下は、己が法界を授く、中に於て五有り。初に答言の下は數美して授法の方便と爲し、二に我成就の下は、法門の體を授け、三に白言の下は、得法の因縁を辨じ、四に我入此の下は、法門の業用を顯し、五に我唯知の下は、己が、自分を結す。第二の法體を授くる中に就いて、無壞法門とは、所修の天行、緣の能く壞するに非ざるが故に、以て名と爲す、此は總じて標するなり。修學の下は四句は釋成す。一に行堅なるを以て是故に壞する無し。二に持の妙なるを以てなり。謂はく、總持稱性の故に。三に證玄なるを以てなり。謂はく證理無二の故に。四に定深きを以てなり。謂はく、諸有を遠離し、三昧を莊嚴するが故に、是故に名けて無壞法門と爲す。第三の因縁の中に就いて、先に問、二に略答して難を顯し、三に重請、四に爾時優婆夷の下は廣く答ふ。中に於て六有り。初に住の見佛を擧げて、發心の緣と爲す。謂はく、先に見佛し、後に求念を起す。二に時彼如來の下は、教へて十心を發し、便ち壞せざらしむ。三に我於爾時の下は、

法を聞いて發心し、以て佛果を求む。四に我發是心時の下は、心堅くして障を離るるを明す。五に若有衆生の下は、利他攝益を明す。六に我初發心來の下は、總じて自他の行位満足することを結す。第四の法門の業用の中に就いて四有り。先に法を擧げて總じて告げ、二に善財見んことを願ひ、三に定に入りて顯示す。謂はく、三昧力の故に六種に世界を振動す。八相の如來は法界に周し。四に定を出でて即述し、及び自分を結すること知んぬべし。第五に諸大菩薩の下は、仰推勝進の中に三有り。初の一句は總じて推す。二に我金翅の下は、喩に約して深きを歎す。三に我當の下は、己が分に非ざることを結す。第九の行竟んぬ。

【二〇】以下、第十眞實行位の善知識の文を釋す。

第十に眞實行の善知識の中に、初に法を擧げて修を勤むる内に、國を不可稱と名くるは、所謂玄妙なるが故に。域を知足と名くるは、般若は相を盡すが故に、出家の外道有り。隨順一切衆生と名くとは、巧智は機に順ふも、方便は道に反く。天竺の本に云はく、「外道を一切處常行と名く」と。第二に教に依りて趣求する中に位三有り。謂はく、爾と念と及び到となり。念の中に就いて十句有り。初の句は人を念じ、次の二句は法を念じ、次の二句は往の發心等を念じ、次の四句は彼堅行及び業用を示すを念す。後の念彼修習等は、其修定照理を念す。漸到の中、日没入城とは、行位の終極を表すが故なり。第三に周遍の下は、見て敬ひ請を申るを明す、中に於て四有り。初に推求、二に於中夜時の下は、其依報を見る。謂はく、所依の法光は、二邊の間を破することを表す故なり。三に爾時善財の

下は、其正報を見る。天明とは障盡き位顯るるが故に。登山とは位相應するを得るが故に。遙見外道とは、人の法界を證するが故に。一萬の梵等とは主伴具足するが故に。四に敬を設けて請を申ること知んぬべし。第四に答言の下は、己が法界を授く、中に於て四有り。初に發心を敷じ、二に戒已安住の下は、己が法門の體徳を示し、三に以平等の下は、法の業用を顯し、戒唯の下は己が自分を結す。初の中に至一切處とは、十行の滿を明す故に。第十の智度遍知の故に二義有り。一は定に依りて智を發し、普く法界を照す。二に定に依りて通を發し、遍く一切に至るなり。下の二句は此二義を釋す、次での如く應に知るべし。三に業用の中に亦二有り。初に普觀の智用を明し、二に無作の通用なり。前の中に三有り、初に平等の慧光を擧げ、二に觀察の下は機を照すの差別、三に以妙智の下は、説法して益を被らしむ。復次の下は、第二に無作の通用の中に二有り。一は機能く測ること莫し、二に類して十方を顯す。種種智は是れ意業、色像音聲は是れ身語なり。亦復如是とは、此に二義有り。一に彼無作の神足所現の色像を明すに、亦如の智用十方に遍きが故に、亦復如是と云ふ。二に知足城を以て閻浮に類し、閻浮を以て三千界に類し、三千界を以て十方界に類するが故に、亦復如是と云ふ。此れ即ち智通の、三業を具するを變結するなり。第五に諸大菩薩の下は、仰推勝進の中に十句有り。初の身等衆生數とは、至一切處の神足、已に過ぐるを顯すなり。次の一句は所依の定過ぐ、次の二句は所發の通過ぐ、餘の句は所發智過ぐ。我當の下は己が分に非ざるを結す。第十行竟んぬ。

【二】 自下第四の十廻向位の善知識を明す文を釋するに、初に救護衆生離衆生相廻行位の文。

自下大段第四に、十知識有りて、十廻向の位を明す。初に甘露味園等は、第一の救護衆生廻向を明す、中に於て五義は前に同じ。初に法を擧げて修を勸むる中に、甘露味とは生を救ふ善巧の勝味なり。長者は前に同じく、徳相淨勝なるを名けて青蓮と曰ひ、巧に諸香を知るが故に復香と名け、相及び智に従つて青蓮華香と名く。第二時善財の下は、教に依りて趣求する中に四有り。初に敬を設けて辭退す。二に爾時の下は勝れたる欲樂を起す、中に於て四有り。初に世に於て著せず。二に常樂の下は、専ら大行を修む。三に尋求此等の下は、共意樂を結す。四に漸遊等は、後位に至るを明す。第三に見て敬ひ請を申ぶる中に三有り。初に敬を設け、二に白言の下は意を申ぶるに十句有り。初の五は上果の徳を求め、後の五は四行を成ずるを修む。三に而未知の下は、所要を請問し、第四に答言の下は、己が法界を示すに、中に於て二有り。初に發心を歎じ、二に正しく法界を授くるに、先所知之法門を擧げて、後に名學を結す。前の中に三有り。初に所知の香體を列ぬるに、三十種の香有り。中に於て先に世間依正の香の熏習を知り、二に除滅煩惱の下は、出世間正行の香の熏習を知り、菩薩は此を以て衆生を饒益す。二に彼香生起の下は、香の法義を知ること明すに十種有り。一は所因の起を知り、二に香氣の至處を知り、三に至り已りて益を成ずることを知り、四に所作圓滿なり。五に能く喜悅して清淨ならしめ、六に惱を離れて安隱ならしめ、七に巧便をもて法に入り、八に所知の分齊、九に所依の作業、十に究竟の根本なり。三に善男子の下は、香の業由を知るに、略して十等を擧ぐ。初の内に十義



【三】以下、第二  
不壞廻向の善知識  
の文を釋す。

を以て之を知る。龍鬪生とは、生起を知る有り。光雲覆甘味國とは、所行を知るなり。降香水とは成就を知るなり。身に著くれば金色にて具足するを知るなり。聞香歡樂とは清淨を知るなり。滅一切平等は安穩を知るなり。專向行とは是れ方便なり。我知彼等とは是れ境界なり。爲說法とは是れ行業なり。令發心不退とは是れ根本なり。牛頭香等の九種は、皆各十義有り、文の中に略を存するが故に、或は二或は三等之に准すべし。先に陀婆は此には石と云ひ鹽の名なり。第五に仰推の中に、先に所推を擧ぐ。中に於て初に離障、二に智慧の下は出世の三學の位の香を成じ、後に我當の下は、己が分に非ざることを結す。初の廻向竟ぬ。

第二に不壞廻向知識の中に、初に法を擧げて修を勸むる内に、城を樓閣と名くとは、大悲、智に依りて勝出するの狀なり。海師自在とは、佛法の海及び生死の海に於て、能善く通達し、及び運度するが故に、以て名と爲す。問を教ふること知んぬべし。第二に教に依りて趣入する中に三有り。初に敬を設けて辭退し、二に路在りて勝念を起す。中に於て初に法の眞正を觀す、二に復作の下は、法を念じ人に由りて求心を起す。先に總して念じ、後に何以下の下は釋成し、三に作是念の下は、彼に至りて推求す。第三に見て敬い請を申ぶる中に三有り。先に所在を見る。謂はく海岸等とは、是れ說法所依の所なり。二に敬を設け、三に請を申ぶること、並に知んぬべし。第四に答言の下は、己が法界を示す、中に於て二有り。先に發心して能く問ふを數じ、二に我成就の下は、法を擧げて授與す。前の

中に三有り。初に行體を問ふを數じ、三に速得の下は行用を明し、三に薩婆若の下は、行の得果を明す。二に法を授くる中に亦三有り。初に名行の體を擧げ、二に在此の下は業用を明し、三に我唯の下は、己が分齊を結す。初の中に大悲備淨行とは、殊勝の大悲等を以て、生死海に於て衆生を拔出するを、名けて淨行と爲す。二に業用の中に二有り。初に此城中に在り、因りて苦行し度生す。二に我知海の下は、善く海相を知る、因りて海に入りて度生す。前の中に三有り。初に授法の方便、二に廣爲説の下は、正しく長法を明し、三に我住の下は結す。授法の中に就いて、其宿善を起し、菩提心を發さしむ。此は是れ眞にして下の三心は是れ別なり。「起信論」に云はく、「發菩提心とは三種の心を發す。一は直心、正しく眞心の法を念するが故に。二は深心。一切の諸の善行を棄捨するが故に。三は大悲心。一切の苦の衆生を救拔するが故に。除生死の下は、三心の業用を顯す。初は是れ眞心、苦を離れ、二に擲取の下は、悲心物を攝し、三に得一切の下は、深心、法を得。下は城中の益生を結す。二に知海益生の中に二有り。初に明智をもて海を知り、二に我已成就の下は、正しく益生を顯す。前の中に初の十句は寶を知り、次は龍宮等の難を知る。大身は應に是れ儂難なるべし、四位の修羅は俱に海下に在るを以ての故に。次に水色時風等を知る。二に正しく益生する中に、成就如是智とは、前の所解を顯す。遂に入海の導師と爲りて、即ち法海を説き、衆生を度するを以ての故に、爲益衆生故入海等と云ふ。悉令の下は別して益相を現するに、十法海有り。初の四は自利海、後の六は利他海なり。下は

【三】以下、第三等諸佛廻向位の知識の文を釋す。

結する中に二有り。先に益用虛からざるを結し、二に唯一法を結す。第五に諸大の下は、仰推の中に二有り。先に所推を擧ぐ、自行海を推し、二に以善方便の下は、利他海を推し、後に我當の下は、己が分に非ざることを結す。第二の廻向竟んぬ。

(二三)第三に等諸佛廻向知識の中に、初に法を擧げて修を勸むる内に、城を可樂と名くるは、己が境界は佛土に等しく、願樂すべきなり。長者無上勝とは、勝通を得て更に加過無きを以ての故に、以て名と爲す。第二に教に依りて趣入する中に三有り。初に敬を設けて罷退し、二に路に在りて法を念じ、三に後に至りて推求す。法を念ずる中に、初に自分を増廣し、二に修習の下は、勝進に修入し、第三に城東の下は、見て敬ひ謂を申ぶるを明す、中に三有り。初に依報の所在を明す。城東林等とは、城に於て攝化するは、攝託の便なり。彼に在りて法を説くは、正しく攝化の相を明す。二に爾時の下は、見已りて敬を設く。三に白言の下は請を申ぶる中に、前の五體良久とは身を以て心を表す。重ねて己が名を稱するは、語を以て心を表し、愆重の極を顯す。又己が是れ修行の器なるを顯して、其説法を怖ふなり。第四に己が法界を示す中に二有り。先に其發心を歎じ、授法の方便と爲し、二に戒成就の下は、正しく己が法を授く、中に於て三有り。初に名を標して總じて現じ、二に何等の下は、法の義用を釋し、三に我唯の下は、法を結して人に歸す。初の中に神力は遍く衆生の所に到るを、至一切趣と名く。中に於て法を説き生を益するを、淨行莊嚴と名く。此至一切趣は、功用に由らず、任運に遍至するが故に、無依無作と云ふ。他の力持

に非ざるが故に、無依と云ひ、自の加行に非ざるが故に、無作と云ふ。此は則ち法性に稱うて普遍するなり。釋の中に先に微問し、後に正しく釋す。正しく釋する中に、先に此三千界一切趣に至り、法を説いて生を益し、淨行嚴を成ず。種種の論とは、五明等なり。二に如此の下は、十方界一切趣に至りて、淨行嚴を成じ、我唯の下は、己が分齊を結す。第五に詔大の下は、仰推勝進の中に、初に身業の遍きを明す。謂はく、身は刹に等しくして神力を待たず、是故に前に過ぐ、是れ所推なり。二に逮得の下は語業を明し、三に分別の下は意業を明し、我當の下は、己が知るところに非ざることを結す。等諸佛廻向竟ん

以。

【四】以下、第四至一切處廻向の善知識の文を釋す。

第四に至一切處廻向の善知識の中に、初に法を擧げて修を勸むる中に、亦三有り。先に處を指し、二に人を示し、三に問を教ふ。國を難忍と名くることは、能く證し難きを證するを表す。迦陵迦とは、此には闍諍時と云ふなり。婆提とは正しくは婆耶と云ひ、此には林と云ふなり。謂はく、彼菩薩は此林中に在りて、法を説き障を破するが故に、闍諍と云ひ、闍諍は理を顯すを、亦難忍と名く、此丘尼とは、慈悲の淨慧を顯し、師子奮迅と名くることは、淨慧無畏決定して説法す。第二に教に依りて趣入する中に三有り。先に敬を説けて辭し去り、二に後に至りて推求し、三に所在を指示す。律の中に准するに、尼の投陀は皆至の園に在り。外護を藉りて、方に道を長ずるを得るを以てなり。第三に見て敬ひ請する中に亦三有り。一に見、二に敬、三に請なり。初の見の中に亦有り。初に依敬を見、



【如幻智】一切諸法の無實なるを了達する智。

二に正報を見、三に總じて奇特を結す。初の中に依報の淨土は、略して六義を顯す。一は大樹莊嚴を見る、略して八種を擧ぐ。二は復見彼園泉流の下は、寶地莊嚴なり。八功德水とは、一は輕、二は冷、三は濡、四は美、五は淨、六は臭からず、七は飲む時調適なり。八は飲已りて愚無し。三に一一樹下より下は、敷重莊嚴なり。四に無量莊嚴の下は、雜種莊嚴を明し、五に善財見の下は、其所因を出す。謂はく、皆是れ出世の善根及び如幻智の成就する所なり。六に三千の下は、果用自在無障無礙なるを明す。二に正報を見る中に二有り。初に遍く諸座に坐するを見るに、勝徳顯彰す。中に於て先に遍坐、後に十喻に約して徳を顯す。婆樓那とは、此には水と名け、應に是れ水天なるべし。佛見已りて益を成ずるが故なり。二に見處一座の下は、處を見るに過座廣く法要を説くを明す、中に於て五有り。初に八部衆の爲に法を説き、二に樂聲聞の下は、二乘の爲に法を説き、三に爲樂大乘者の下は、菩薩の爲に法を説き、四に見處如是の下は、總じて化益を結し、五に何以故の下は、其所由を釋す。初に淨居天に無量を説くとは、彼天は形中において量淨なるも、無常有盡なり、爲に出世の無盡の性を説く故に。梵の爲に普く妙聲を説くは、彼世中に於て自の好聲と謂ふ。爲に法界勝流の普妙音を説く。他化天の爲に、世の自在に酬するが故に菩薩の自在を説く。化樂天の爲に淨行の法の具徳莊嚴を説く。兜率天の爲に心樂復釋天の爲に説いて五欲を厭離せしむ。龍王の爲に方便護衆生を説くは、方便をもて剛を

【龍の苦】金翅鳥は龍を食とする故に其難を救ふなり。

【餘の三天】四方の守護神四天王の三、増上天(南廣目天(四)、多聞天(北))。

【金剛喻定】其體堅固其作用説利にて、一切の煩惱を斷盡し得るをいふ

【根縁相稱】機根と縁とが相應すること。

降し、衆生を濟ふが故に。又法を以て龍の金翅等の苦を救ひ、提頭等は餘の三天王を等取す。爲に無盡の行法を説き、摩睺等の爲に理智巧嚴を説き、迦樓等の爲に説法して、世海の中の大力を捨てしめ、生死海中に於て、悲智力を以て無畏ならしむ。緊那の爲に佛正行の智光を説き、喜樂を破せしむ。摩睺の爲に佛の喜を説くとは、蛇の性は瞋多きを以て、佛法を聞けば即ち喜ぶ。人の爲に出世の勝趣を説き、羅刹の爲に慈悲を説くは、命を奪はしめざる故なり。下は二乗の爲の中に、初に聲聞を樂ふ者の爲に、勝智光を説くは、小慧を捨てて大乘智光を樂はしむるなり。緣覺を樂ふ者の爲に説くは、劣を捨てて佛の殊勝の功德を樂はしむる故なり。下は大乘の人の爲なるを明す。初に地前の爲に、定慧の光を説き、次に地上の爲に、初地の發心十大願を説く、餘の九地は知んぬべし。金剛力士の爲に、智慧金剛を説くは、此は是れ十地の滿の後、金剛喻定智を説いて、微細の著等を破するなり。此比丘尼は既に、第十地の菩薩等の爲に法を説く、是れ人に非ざることを明す。位に寄するが爲の故に、廻向の位に當るなり。四に見如是の下は、總じて化益を結す。五に何以故の下は、所由を釋する中に、此尼は百萬を成ずるを以てなり。等の中には略して十門の般若を擧ぐ、即ち是れ前の所説の法門等有り。三に善財見の下は、總じて見聞奇特なり、知んぬべし。二に五體の下は、敬を設くるを明す。中に、根縁相稱するを以ての故に、自ら己身の、尼の所在に遍きを見る、同じく智右に遠るは、彼所入に等しきが故なり。又亦即ち是至一切處廻向は、心に隨ひて自在の故なり。二に白言の下は、請を申ぶること知んぬべし。

し。第四我成就の下は、正しく己が法界を示す、中に於て四有り。初に名を標し、二に體を顯し、三に用を辨じ、四に位を結す。初の中に菩薩一切智底とは三義有り。一は位菩薩に居し、百萬僧祇の般若の用を得、佛の一切智の原底を盡す。謂はく、上の文の如し。乃至等覺地の菩薩の爲に法を説くは、下地の能く爾らざるに非ざる故に法を得。二に智光顯に三際を照し、種智の境を窮むる故に、以て名と爲す。三に廣く供養を興して、佛の八相智の原底を盡すが故に、此名を得。二に大聖の下は法體を明す。中に於て先に問ひ、後に答ふるなり。智光等とは、般若の具徳を明すなり。於一念とは、頓に照すなり。普照三世とは、廣く照すなり。即ち廣智の具徳を以て、其體性と爲す。三に大聖の下は、業用を明す中に、亦先に問ひ、後に答ふるなり。答の中に先に業用の所依を辨す。謂はく、此法門は境用の前處に、此法林の三昧有り。今は此定に入り已りて、斯業用を現す。下は正しく業用を顯す中に三有り。先に上は八相の諸佛に供し、二に若有衆生の下は、下衆生を救ふを明し、三に我不起の下は、二想を遠離し、無思の業用を顯し、四に我唯は自分の位を結し、第五に諸大の下は、仰推勝進なり、中に於て十事五對有り。一に法を窮むるに苦する無し。二に身に約して外に廣く遍く、内に包容す。三に外に速に往き、内に力を含む。四に外に遍く擧げ、内に廣く容る。五に十念に廣く生を攝し、後に多劫攝す。即ち知んぬ、一一の念の中に、攝生すること無盡なり。我當の下は己が分に非ざることを結す。至一切處廻向竟んぬ。

【二五】以下、第五無盡功德藏廻向位の善知識の文を釋す。

〔二五〕以下、第五に無盡功德藏廻向知識の中に、初に法を擧げて修を勸むる内に亦三有り。謂はく、貪の相は道に違し、餘難の名を得、實行内に備るを、實莊嚴と名く。婆須密多是、此は世友と云ひ、亦天友と名く。巧に能く諸の世間を引攝する故に。第二に教に依りて進入する中に亦三有り。謂はく、敬ひ辭して法を念じ、及び後位に至る。法を念ずる中に就いて、初に前の尼の慧、其心を照すに因るが故に、佛智を長養せしめ。二に一心の下は、前の法を思念するに因りて、復更に悲智願行を増長す。後に至りて推求する中に就いて四有り。初に推問勝るる故に。二に淺智の爲に疑惟し、三に深智の爲に善を數じ、四に所在を指示す。問ふ、何が故に前に瞋及び邪見を示すに、善財自ら疑ひ、今貪相を現するに反つて他をして疑はしむるや。答ふ、前の二は親しく菩薩の道を障ふるを以ての故に、貪愛は悲に順せば、行を障ふること劣なるが故に。是故に決定毘尼經に、「菩薩は寧ろ百千の貪心を起すとも、一の瞋等を起さず」と。又釋すらく、善財は、前の瞋及び邪見に於て、已に調伏すること爲せり。是故に此に於て、更に敢て疑はず。指示の中に「深宮の内に在り」とは、『三法度經』に依らば、國は是れ智慧の境、城は是れ神通の境、宮殿は是れ說法の境なり。今此女人は正しく欲の如を證する故に、深宮に在り。往詣門とは、加行位の終り、正證三昧門に至るなり。第三に善財聞の下は、見て敬ひ請を申ぶるを明す中に三有り。謂はく、見て敬ひ請す。見の中に就いて二有り。先に依果を見、後に正報を見る。依報の中に、古の經に云はく、十重寶鬘とは是れ十地の位、十行樹とは是れ十度の行、十重璽とは是れ十



【悲願…照す】衆生救済の爲に故意に煩惱を留て五欲の境界に處すれども、全く五欲中の人とならず、常に大智を以て照觀すること。

【淨名】維摩居士

【定學】三學の一定は禪定にて雜念を掃ひ慮を靜めて心を清澄ならしむるをいふ。

地の中の戒行なり。八功德水とは、是れ八定の水盈滿す。敷以覺慧樓閣とは、後得の依正は、體重成するが故なり。二に正報を見る中に二有り。初に三業の勝相を見、二に大衆の下は、眷屬の殊勝を顯す。敬を設け請を申ぶること知んぬべし。第四に答言の下は、己が法界を示すに、中に於て四有り。一は名を標して體を顯し、二に若天見の下は、其業用を辨じ、三に自言の下は得法の因縁、四に我唯の下は、己が自分を結す。前の中に離欲實際清淨法門とは、二義有り。一は自行に約す。悲願をもて惑を留めて欲處を示現すと雖も、然も大智は欲を照す。即ち體性空なるを、實際淨と名くるなり。淨名の、欲に在りても、而も禪を行する等の如し。又『諸法無行經』に云はく、「貪欲は即ち是れ道、悲魔も亦復然なり」と。二に利生に約す。謂はく、惑を留めて欲に在ることを示現すと雖も、欲に處する衆生をして、要す當に欲を離れて、此實際清淨の法を得べからしむるなり。掩提遮女等の如し。二に業用を明す中に二有り。初に身は器に同じうして現じ、二に身有衆生の下は、法を以て生を益す、中に於て十種の三昧有り。皆是れ欲を以て、欲に處する衆生を化し、此の如きの甚深三昧を得しむ。阿梨直とは、此には抱捺摩觸と云ふ。是れ攝受の相なるが故に、彼三昧なり。阿梨毘とは、此には瞋口と云ふ、言教密藏の定を得。如是の下は總結す。並に是れ極位大菩薩の所作にして、下位の所知に非ず。『攝論』の定學の中に説くが如し。三に得の因縁を明す中に二有り。先に問、後に答なり。答の中に何の所に於て善を種うることを答へ、後に善男子の下は、何等の業を修するを答ふること、並に知んぬべし。

【二六】以下、第六  
輩顯平等善根廻向  
位の善知識の文を  
釋す。

四に我唯の下は、己が唯此一の方便を知るを結す。第五に諸大の下は、仰推勝進なり。諸大菩薩に、無量の廣大方便有り。我豈能く知らんや。無盡功德藏廻向竟んぬ。

第六に隨順平等善根廻向知識の中に、初に法を擧げて修を勸むる内に、首婆波羅とは、此に善妙到彼岸と云ふ。安住とは謂はく、佛の法身を得て、常住供養するが故に。又天竺

の本に准するに、應に攝持と名くべく、或は執持と名く。諸の善法を攝入し攝取するが故に。常に塔を供養するは、塔に於て常に法身を見るを以ての故に。第二に教に依りて趣入す

る中に、略して念法無し。第三に見て敬請する中に、略して見と敬と無きが故に、乃至と云ふなり。第四に答言の下は、己が法界を示す中に四有り。一に名を標し、二に體を辨

じ、三に業用、四に徳を結す。初に諸佛の常身を不滅度と名け、四位の照達するを、菩薩法門と名く。二に性此の下は體狀を顯す中に二有り。初に佛の功德身を常に見、化衆生を

除くとは、但、他心を變異して、出沒を見しむるも、其實は常身にして出無く滅無し。又佛月は常住なり。但衆生の心水の影に現滅有り。二に開塔戸の下は、佛の法身常に見る。

佛の體性は無盡無きを見るを以ての故に、以て塔戸を開くとは、其事相を開くなり。定を得ることは理性を見るなり。妙法を得ることは、理中の恆沙の功德法を得るなり。三に白

言の下は、業用を明す中に、先に問、後に答なり。答の中に二有り。初に此界の三世の諸佛を見、後に十方を顯結す。前の中に初に過去の佛の因果等の事を見る、二に未來現在を

顯す。四に我唯の下は、自分の位を結し、第五に諸大の下は仰推勝進の中に、長者は三世

【七】以下第七箇  
順等觀一切衆生廻  
向位の善知識の文  
を釋す。

【迦多羅山】 Pota  
Lata 補陀落迦とも  
いふ、印度の南海  
岸、觀音の住處山  
形八角、興福寺南  
圓堂の圓形はこれ  
に基く。

の佛の不滅を知ると雖も、然も未だ能知の一念と、所知の三際とを以て、平等無二なるこ  
と能はず。二に未だ能知の智位に即して、所知の佛位なること能はず。三に前後の一切劫  
を知るとも、劫の想無きこと能はず。四に佛の不滅を見ると雖も、此佛即ち彼佛と平等  
の義を知ること能はず、五に如来の下は、亦染淨能所を以て、平等無二なること能はず。  
謂はく、心と佛と及び衆生の是三は、差別無し。六に淨莊嚴の下は、三世を照すと雖も、  
智に即して徳を攝すること能はず。七に成就の下は、佛を知ると雖も、未だ佛の威儀に同  
ずること能はず。八に分別の下は、法に於て自在なる能はず。我當の下は、總じて、己が  
堅固なること能はざるを結す。善根廻向位竟んぬ。

第七に隨順等觀一切衆生廻向知識の中に、初に法を擧げて修を勸むる内に、光明山  
とは、彼山の樹華常光明有るは、大慧の光明、普門示現することを表す。此山は南印  
度の南邊に在り、天竺の木に迦多羅山と名く。此には正翻無し、義を以て之を譯して、小  
樹蔓莊嚴山と名く。又「十一面經」に此山在りて説く。觀世音とは、有は光世音と名け、有  
は觀自在と名く、梵に、迦盧羯底攝代羅と名く。迦盧羯底は、此には觀と云ひ、毘盧は此  
に光と云ふ、聲字相近きを以て、是を以て翻じて、光と爲す有り。攝代羅は、此に自在と  
云ひ、攝多是、此に音と云ふ。梵本の諸經の中を勘ふるに、攝多に作る有り、攝代羅なる  
有り、是を以て、翻譯不同なり。「觀音經」の中に「即時に其音聲を觀じて、皆解脱を  
得」と。解して云はく、等しく世間を觀じ、聲に隨ひて苦を救ふを、觀世音と名く。彼



【七災】水、火、羅刹、王、鬼、枷鎖、盜賊の難。

【本覺】眞如界即ち悟りの境界。

經の中に、具に三輪有り。初には語業名を稱するに、七災を除く。謂はく、水火等なり。二には身業。禮拜して二願を満す。謂はく、求男等なり。三に意業。念を存する、三毒を除く。謂はく、若は貪欲等なり。並に彼に説くが如し。若し偏に語業に就かば、觀世音と名く、業用多きを以ての故に。若し身語に就かば、光世音と名く、身光照し及ぼすを以ての故に。若し三輪を具し、物を攝するに無礙ならば、觀自在と名く。第二に教に依りて趣入する中に亦三有り。法を念する内に就いて十句有り。皆是れ前の教方に依りて、行を増修す。餘は並に知んぬべし。第三に見て敬ひ請を申ぶる中に亦三有り。初に見の中に二有り。先に善財は觀音を見、後に觀音は善財を數す。前の中に四有り。初に勝れたる依正を見る。住山西阿とは、謂はく、山阿に據り、東に面して住す。是れ向明の相なり。二に衆の爲に護法し、三に諦觀して歸がす。四に作如是念の下は、勝念心に重す。中に於て初の八句は別して顯し、後の二句は處して結す。二に時觀世音の下は、善財の徳を數する中に、十句有り。初に心勝を數す、謂はく三心を具す。二に向普賢の下は、行願の勝を數じ、三に欲聞の下は、持法の勝を數じ、四に增長の下は、善を増して厭ふこと無し。五に友の致命に願じ、六に従文殊の下は、所依最勝なり。彼に傾りて發心するを以ての故に、從彼智起と云ふ。又釋すらく、本覺より流するが故に、從彼智起と云ふ。七に成就の下は、善財を成するが故に、佛の加被力定を得るなり。八に離懈怠の下は、求法專誠を數す、九に見佛成行を數じ、十に智慧の下は智滿圓證を數す、爾時の下は、敬請すること知んぬ



【無縁の悲】 限りなき大悲心をいふ

【四攝】 一、布施攝（財を樂へば財を施す）等二、愛語攝（機に應じて善言慰諭する）三、利行攝（三業に善をなして衆生を益する）四、同事攝（對機に應じて、形を同じ事業を同じつづ教化する）

【二】 以下、第八如相廻向位の善知識の文を釋す。

べし。第四に答言の下は、己が法界を示す中に二有り。生に發心を數じて授法の方便を明し、二に我已の下は、正しく己が法を示す中に於て四有り。一に名を標し、二に徳を辨じ、三に用を顯し、四に位を結す。初の中に大悲とは、是れ同體の悲なり。又是れ無縁の悲なり。故に大悲と名く。又三悲を具するが故に、大悲と名く。光明の行とは、悲光をもて物を益するを以ての故に、以て行を成す。天竺の本に一切佛悲密智藏解脫と名く。解して云はく、巧悲を以て、密に衆生を攝するが故なり。二に教化の下は、其徳を辨す、中に於て二有り。初には佛所を離れずして、衆生の前に現じ、二に或次の下は、四攝等を以て、攝化の益を成じ、三に善男子の下は、其業用を明す、中に於て三有り。初に行法をもて誓を立て、二に怖畏を離れしむるに十八種有り。三に復次の下は、行をして不退ならしめ、四に我唯の下は、己が自分を結す。第五に諸大の下は、仰推の中に四有り。先に普賢の願行を推し、二に不斷の下は、行業流續し、三に善知一切の下は、攝生相續を明し、四に我當の下は、己が分に非ざることを結す。隨順等觀一切衆生の廻向竟んぬ。

第八に如相廻向善知識の中に、初に法を擧げて修を觀する内に三有り。初に正趣東より來る。二に觀音指示す。三に其に問を教ふ。初の中に東方來とは、如相を表す。證智自明の狀なり。正趣と名くことは、神力をもて、速に十方の諸趣に至り、正法を以て生を攝するが故に、以て名と爲す。天竺の本に云はく、「一菩薩有り、不行餘道と名く」と。解して云はく、唯佛道を行じて、餘の二乘等の道を行ぜず。即ち正趣に當る、謂はく、趣正な

【遮…表】表德遮情の意、肯定否定と言ふに同じ。

るが故なり。梵本には遮に約し、漢本は表に就く。金剛山頂に住すとは、即ち是れ此光明山なり。如相に住して、破壊すべからざるを表すが故なり。下は動地寶嚴を明すに、光を放ちて供を雨らす。觀音に來詣すとは、智は悲に就くを明す、亦隨つて有縁を化して善財を示導す。二に時觀音の下は、對して審に指示す。三に汝詣の下は問を教ふ、知んぬべし。第二に時善財の下は、教に依りて趣入する中に二有り。初に轉、二に法を念ず。後に至りて何が故に觀音の悲門を念せざる。悲は智を離れざるを以ての故に、悲をして深く智海に入らしむるを、方に究竟と爲す。第三に辭詰の下は、見て敬ひ請を申ぶ。前に已に見るが故に、但詣り敬ひて請を申ぶる有り。第四に我已成就の下は、己が法界を示す、中に於て三有り。初に名を標し、二に義を辨じ、三に位を結す。初の中に十方無際なるを、名けて普門と爲し、一念遍く至るを、號けて速行と曰ふ。二に自言の下は義を辨する中に、先に三問を興し、後に還つて三答す。一に得法の處を問ひ、二に來處の遠近を問ひ、三は來時の多少を問ふ。答の中に三有り。先に深を敷じて器を簡ぶ。唯精進等とは、即ち是れ善財、正しく其人に當り、根縁相稱ひ、爲に説かんと欲するが故に。二に唯願の下は重ねて請す。三に答言の下は、答の中に四有り。初に正しく所問を報す。妙藏刹とは、所從來の處を答ふ。佛所等は得法の處を答ふるなり。從彼發來の下は、來時の久如を答ふるなり。亦即ち是れ遠近なり。二に於一念の下は、爾許の劫の中の行の分齊を釋し、正しく速行の義を顯す。三に所運諸國の下は、速行修行を成するの義を辨す。謂はく、上諸佛に供し、

【一七】以下、無縛無著解脫廻向位の善知識の文を釋す  
【婆羅波提】 Dve  
Tavati.

【四無礙解】四無礙智又は四無礙辯といふ。法義辭、樂説の西無礙をいふ。

下衆生を救ふ。直に速行を廢せずして、而も如行を成ずるのみに非ず、亦乃即ち速行を以て此勝行を成ず。四に乃至の下は、十方を結通す。謂はく、東に従ふに既に爾なり、十方も亦然り。三に我唯の下は、己が自分を結す。第五に諸大の下は仰推の中に、初の一句は總じて推し、二に別して推す。所住の境界無量無壞にして、正趣の、唯此れ一の金剛山頂に住するに同じからず。三に別して速行を推す。謂はく、法身は本來法界に滿つを以て、速行を待たず。四に分別の下は、其所作を推す。謂はく、說法度生は皆三世に等しく、無著等なり。五に我當の下は、己が分に非ざるを結す。如相廻向竟んぬ。

第九に無縛無著解脫廻向の中に、初に法を擧げて修を勸むる内に、城を婆羅波提と名くとは、正しくは墮羅拔提と云ひ、此には有門城と云ふ。謂はく、城に端嚴の門有るが故に以て名くるなり。大天とは無縛の淨報勝出すること自在の故に、斯號を立つ。第二に教に依りて趣入する内に四有り。初に禮辭し、二に法を念ずる中に三有り。初に前法を思求し、二に出生の下は、思に囚りて法を得。三に得不思議の下は、所得の法を出す。三に漸漸の下は、後に至りて推問す。四に有人指示は、是れ件の善知識なり。第三に善財往詣の下は、見て敬ひ請を申ぶるを明し、第四に爾時大天の下は、己が法界を示す、中に於て二有り。初に授法の方便、後に正しく己が法を授く。前の中に亦二有り。初に身業、後に語業なり。身の中に四長臂を以てとは、四無礙解方便の用なり。四海の水を取るは、法界勝流の義と相應し、其面を洗ふとは、己が應機の面を淨む。古來皆謂へらく、「善財の面を

【六度の行】一六波羅蜜の行、即ち菩薩修行の法をいふ

【三三】以下、第十法界無量廻向位の善知識の文を釋す

洗ふ」と。今梵木を勘ふるに、四長臂を以て四方の處に於て、各一海の水を取り、自ら己が面を洗ふ。是れ則ち水洗して、己を淨むるは能對にして、華を善財に散ずるは、其所對に就く。二に作如是言の下は、語業をもて機を歎す。初の一句は總、奇特の法とは、世間に無き所なるが故に。二に別して歸と爲りて、攝するに正道を以てするを歎じ、三に別して師と爲りて、護するに正法を以てするを歎じ、四に別して將と爲りて、引いて智域に至るを歎じ、五に具足の下は、過を離れ機に應ずるを結す。二に我成就の下は、正しく己法を示す。中に三有り。初に名體を標し、二に業用を顯し、三に自位を結す。初の中に雲網とは、六度の行法に潤益の義、遍覆の義有るは、之を喻ふるに雲の如く、湧灑の義、隱映の義有るは、之に況するに潤を以てす。即ち六度の行を以て體と爲す。二に自言の下は、業用を明す中に、先に問、後に答なり。答の中に三有り。初に修行を行するを教ふ。中に於て初に積物、二に施を教へ、三に餘の衆生に類す。二に復次の下は、戒等を行するを教へ、三に如是等の下は、總じて行成を結す。三に我唯の下は、己が自分を結す。第五に仰推の中に、五喻に約して五行を顯す。初の二は自利、後の三は利他なり。我當の下は己が分に非ざることを結す。無縛無著廻向竟ぬ。

第十に法界無量廻向の知識の中に、初に法を擧げて修を勸むる内に、前の諸位は並に是れ南天竺、今は中天竺摩竭國を指す。道場神とは、二菩薩を表さんと欲す。一に因に約して、地上の證眞は、佛位に同じきことを表す。廻向の位終り是を以て此處に來向す。二に果に



約して、佛の、機に臨んで方便して身を現す、是れ善巧の相なるを表し、廻向位の滿に屬  
 す。是故に此に於て、成道の處を辨す。良に五位の終極は、各各成佛有るに由り、樹下の  
 現成は此位に屬すが故に。又神とは是れ智徳玄密の義を表すなり。然るに道場を守る神に  
 は、道場樹神有り、道場地神有り。今是地神、所依の心地を表し、心中に道を得るを以て、  
 道場地と爲す。安住と名くとは、諸の善根を攝して、菩提に廻向し、道場地處に安住し、  
 住持して失はず、要す果を成ぜしむるが故に以て名と爲す。第二に時善財の下は、教に依  
 りて趣入する中に二有り。初に敬を設けて辭し去り、二に後位の處に至り、第三に一萬地  
 天各作是言の下は、見て敬ひ請を申ぶるに四有り。初に地天は善財の徳を歎じ、二に時安  
 住の下は、土を嚴りて生を攝し、三に寶藏を告示し、四に敬を設けて意を申ぶ。第四に時  
 彼地神即以下の下は、己が法界を示す、中に於て五有り。初に體を示し、二に名を顯し、三  
 に業用、四に因縁、五に位を結す。初の中に、善財が宿世の善根を以て、悉く皆大菩提に  
 廻向するが故に、是故に、此道場菩提樹下に在り、藏中に安住するは、即ち是れ菩提心藏  
 なり。今地を證せんと欲するに、加して總現せしむ。則ち一切の善根は、皆此處に在り。  
 二に我已成等は、法の名を顯すなり、住持して失はず、成佛すること決定するを以て、不  
 壞藏と名く。三に我の下は、其業用を明す、中に於て十句有り。初の一句は總なり。謂  
 はく、常護とは彼所行を持するが故に。下の九は別して顯す内に、一に智深證、二に大願  
 を滿じ、三に淨妙行、四に勝通を出し、五に具徳力、六に堅法を成じ、七に佛説を聞く

に、守護の行増するを以て、是故に佛與記の法を聞く。八に下は法化を以てし、九に上佛力を受く。四に乃往の下は、得法の因縁を明す、中に於て三有り。初に往古の時處、二に修習の下は、得法増廣す。三に於其中の下は、更に諸佛に遇ひ、若道場成正覺の處に於て、恆に侍養等を作す。其主は此門に當るを以ての故なり。五に我唯の下は、己が自位を結す。第五に仰推の中に、一に常能隨侍とは、此地神は唯道場の處に佛を見て、常に隨ふ能はざるを以ての故に仰推するなり。二に悉聞の下は、廣聞を推し、三に深入の下は深聞を明し、四に於念念の下は、頓聞を明し、五に一切佛影の下は、因は果を出し不可壞なる等を明し、六に我我等の下は、己が分に非ざるを結す。上來十變向位竟ぬ。

【二】以下、十地に歡喜地位の眞知識の文を釋す。

自下婆娑婆院より置夷に至る、十善知識有りて、十地位の行を明す。第一に歡喜地の内に、亦五分と爲す。初に法を擧げて修を勸むる中に、正しくは迦毘羅婆娑堵と云ひ、此には黃物と云ふ。即ち往古の黃頭仙人、先に此處に在りて住し、後に此に於て城を作る故に、斯號を立つ、亦寂靜住處と名く。何が故に此處に在るとならば、初地已上は佛家に生ずるとを表すが故に、佛生の城に在るなり。婆娑婆院とは、正しく婆羅薩那と云ひ、此には依止不畏と名く。即ち下の文に、廣く怖畏の衆生の與に、而も依止と作るが故なり。天竺の本に、婆僧多とは、此には春と云ふなり。謂はく、能く萬行を生長すること、春時の如きを表すなり。夜天とは初會の中の主夜神等に同じ。謂はく、夜中に在りて、光を輝して物を救ふが故に、以て名と爲す。證智玄妙にして、衆相を離れ、闇障を破るを表すが

故なり。此九種の夜天は、梵本に依るに皆是れ女天なり。是れ慈悲の狀を表すなり。第二に爾時善財の下は、教に依りて趣求する中に、一は敬ひて辭し、二は法を怠するに十句有り。初の一は總、餘の九は別にして、皆是れ無壞法門の徳なり。又釋すらく、此九行を以て、彼法門に入ると。三に漸遊して彼に至るに、東門より入るとは、是れ開明の初なり。入證の始の故なり。中城住とは、邊を離るるを表すなり。第三に爾時善財日没の下は、見て敬ひ請を申ぶるを明す中に、先に見の内に三有り。一に推求にして、日没と言ふは、地の分別智を息めて、盡すことを表すなり。又是夜天は、晝日の所見に非ざるを以ての故に、闇夜に於て方に乃ち見ることを得。二に見彼の下は、正しく身を見ることを明す。古人云はく、城とは謂はく初地の教道なり。上空の中に住するとは、謂はく證道の身なり。金の如しとは實徳顯彰す。服朱衣とは、證智の光明を表すなり。三に於其身の下は、其業用を見るに、中に於て三有り。初に身に星光を現す等とは、闇夜に生を攝するなり。二に毛孔に法を現するは、以て衆生を益す。三に隨所經の下は、一毛孔の中に於て、菩薩の衆生を教化するを見聞す。二に善財見聞の下は敬を設く。三に白言の下は請を申ぶ。一切智道と言ふは、十地は是れ佛の正因の道なるを明すが故に。第四に夜天告の下は、己が法界を示す中に二有り。先に其發心して、知識に順するの益を敬じ、二に正しく己が法を現す、中に於て四有り。初に名體を標し、二に業用を現じ、三に因縁を得、四に自分を結す。初の中に光明普照諸法とは、正しく法界を證するなり。壞散等とは、異性の障を

【二愚】十地の菩薩所起の惑。一は我法に執著する愚。本來諸法は無自性なるに、有るが如く執ず。二は惡趣雜染の愚。種種の惡趣の爲に心を穢し自ら苦を生ずるをいふ。

【五陰】五蘊に同じ色、受、想、行、識即ち世間物心理象を五の都案に分ちたるもの。

破し、二愚を遣るなり。又釋すらく、普照諸法とは其大智を明し、壞散衆生愚とは、大悲の用を明すと。又釋すらく、前は自利、後は利他なりと。又釋すらく、普照等は是れ能化の智、壞散等は是れ對機の化益なりと。二に我於惡衆生の下は、業明を明す中に、先に長行、後に偈頌なり。前の中に二有り。初に救物の心を起すに九種有り、知んぬべし。二に我常の下は正しく縁に對するが故に攝す、中に於て十門有り。初の一は總じて攝じ、後の九は別して顯す。前の中に初に救時を明し、亦是れ夜天の義を釋す。世間の夜中に攝化するに主當するを以て、亦地上の變易の闇の中に、以て衆生を攝するを表す。次に城邑等は救處を明し、後に此衆生に於て、種種等を以て、救事を成す。若有遭海の下は、別して九門をもて顯に處する衆生を救ふを見るに、皆二の救有り。一には世間を以て救ひ、二には出世を以て救ふ。一に海難を救ふ中に、先に救難の狀を明し、後に能救の方便を顯す。世海を救ふと雖も、亦生死海中の衆生を救拔せんと徵す。此初段の中に此文を略す。二に陸地の衆生を救ひ、爲に光明等を作す、是れ世中の救なり。二に發如是心の下は、慧光を以て煩惱の闇を滅す、是れ出生の救なり。三に山に在る衆生を救ふに、菓樹等と作るは、是れ世間の救なり。衆生をして生死の山を越えしむるは、出世の救なり。四に曠野の衆生を救ひて、飢渴等を離れしむるは、是れ世中の救なり。二は復作是念の下は、智道を究竟せしむ、是れ出世の救なり。五に見樂著の下は、國土に著する衆生を救ひ、其樂著を滅せしむ、是れ世中の救なり。二に作如是念の下は、亦五陰の著を除き、佛の境界に住せしむ、



【四無量心】一、慈無量心（與樂の心）二、悲無量心（拔苦の心）三、喜無量心（他人の離苦得樂を見て悦ぶ心）四、捨無量心（怨親平等心）

是れ出世の救なり。六に見著聚落の下は、聚落に著する衆生を救ひ、説法して厭はしむ、是れ世間の救なり。二に復作是念の下は、六入の空聚を離れ、一切智の城に入らしむ、是れ出世間の救なり。七に復次の下は、迷惑の衆生を救ひ、其をして解脱せしむ、是れ世間の救なり。二に發如是心の下は、出世間の救を明し、癡闇を滅し、諸の惡逆を止めしむ、中に於て先に所救の衆生を顯し、後に如是の下は、救の徳を明す。八に我見貪苦の下は、老と病との衆生を救ふ、方便して救濟するは是れ世中の救なり。二に復作是念の下は、法身をして常住ならしむ、是れ出世間の救なり。九に我見諸惡衆生の下は、外道邪見の衆生を救ひ、正見に住せしむ、是れ世間の救なり。二に復作是念の下は、出世の佛果等を得しむ。此上の九門は、前の九種の衆生に於て、九種の心等を起す、應に此に准じて之を知るべし。

二に偈頌に、口に二十一頌有り四に分つ。初の一は法門の名體を頌し、二に四頌有りて、四無量心を明す。是れ能く救生の心なり。三に十頌有りて、六處の殊勝なるを明す。初の三は眼、次の二は耳、次の一は鼻、次の一は舌、次の一は身、次の二は意なり。四に末後の大頌は、業用の廣大なるを明す。初の一は神通廣く、次の三は智慧廣く、後の二は所見廣し。第三善財自言の下は、得法の因縁を明すに、先に二問を興し、後に還つて兩答す。答の中に先に發心の時節を答へ、二に復次善男子過此の下は、得法の久近を答ふ。前の中

出、四に本生の身を辨じ、五に善友は佛の興るを告げ讚じ、六に佛及び衆を供し、七に古今を結會し、八に善力處しからざるを顯す。二に得法の久近を答ふる中に五有り。初に總じて時處の佛興を明し、二に本生の身を顯し、三に後淨月の下は、善友勸導し、四に佛に詣りて法を聞き、五に三昧を得るを明す、中に於て四有り。初に方便三昧を得、二に得此の下は正しく法門を得るを明し、三に放光の下は、光照して佛を見、法門を増長するを明し、四に一身の下は、身廣くして初に遍く、佛を見て、法を増するを明す。此上の所説は、此一の法門根身深遠にして、迹は此に至るを明す。四に我唯の下は、自分の位を結す。第五に仰推の中に、初に其自行を推し、二に於念念中教化の下は生利他の行を推し、我當の下は己が分に非ざるを結す。初の歡喜地の知識竟ぬ。

【三】以下、第二離垢地位の知識の文を釋す。

第二に離垢地の知識の内に、初に法を擧げて修を勸むる中に、女夜天の名は、最勝法界を稱して甚深と云ひ、正智證入を名けて妙徳と爲し、戒に悞犯の垢無く、智に照俗の功有る故に、離垢光明と云ふなり。第二に教に依りて趣入する中に四有り。一に前を數じ、二に辭し去り、三に法を念じ、四は後に到る。初の中に十偈を以て徳を數するに、初の二は身智の甚深なるを數じ、次の二は身智の廣大なるを數じ、次の二は毛光の化用を數じ、次の二は本因莊士を數じ、次の二は見聞して益を獲、後の一は無盡を結數す。法を念する中に就いて、初に前を思ふに二有り。一に其初發心の時を思ひ、二に其得法圓滿の時を思ふ。下は思に由りて益を得ることを明す中に、十句有り、行相は知んぬべし。第三に、見て敬

【廻】 迥の字か。

ひ請を申ぶることを、並に知んぬべし。第四に答言の下は、己が法界を示す、中に於て五有り。初に法器を敷す。二に示法の方便、三に法の名體を顯し、四に法の業用を辨じ、五に己が自分を結す。初の中に發心して、能く依地の行、及び行所依の地を問ふを敷じ、二に示法の前方便の行なり、中に於て三有り。謂はく、標と辨と結となり。辨禪の中の十行の内、初の一是總なり。謂はく、定に依りて佛を見る。餘の九は別なり。一に佛の色身を見、次に佛の功德の身を知り、次に佛の光明身を知り、次に佛の毛光益物の身を見、次に佛の毛孔現光の身を見、次に佛の身業の化を見る。次の二は語業の化にして、一に廣、二に深、最後の一是總じて神力を結す。三に我已成の下は、現法名體の中に、寂滅定業は本智の内證なり。精進とは後智の策修なり。下に准するに四禪四勤を以て、其體性と爲す。四は悉見三世の下は、業用を明す中に三有り。初は寂滅の義を釋し、二は禪樂の義、三は精進の義なり。初に佛を見るに著する無く、寂滅の義を釋す。中に於て初の十句は、佛の依正主伴を見るに著無し。二に何以の下は徵責し釋成するに亦十句有り、中に於て初の三は、妙に三際を絶し、次の一は體は言表に超ゆ、次の二は性は虚實を離る。次の二は體に改變無し。後の二は一件と無性となり。此れ所見の色身等は、即ち此の如く平等なり、是故に著せざることを明すなり。二に我如是了知の下は、禪定を得るの業を明す。中に於て初に前を牒し後を起す。二に正受の下は、正しく得定の樂を顯す。正受禪とは定體を明し、滅意業とは所離を明す。意業の中の欲惡等を滅するなり。得寂智等は、是れ

所得の樂なり。二禪の中には生死の覺觀を滅して、攝生を廢せず。三禪の中には煩惱の苦を滅するが故に、眞樂を得るなり。第四禪に依りて、大菩提心を增長す。出生の下は餘行を増成す。三に我如是修得の下は、精進の義を釋す。一は菩薩は禪に依りて、衆生を化するが故に、精進と名く。又衆生を化して、放逸を離れしむるを、亦精進と名く。初に在家を化して、放逸を離れしむるに十二種の想行り。二は出家を化して放逸を離れしめ、三に又復の下は、善友に近くを歎じて二惡を勤斷し、二善を勤修せしむ。五に我唯の下は、己が自分を結す。第五に仰推の中に六有り。初に普賢の行願を推し、二に障を離れて善を具し、三に佛智の境を成じ、四に樂に處して樂無し、五に佛及び法を攝し、六に闇を滅して夜を照す。我當の下は、己が分に非ざるを結す。離垢地竟んぬ。

【三】以下、第三明地位の善知識の文を釋す。

第三に明地の知識の中に、初に法を擧げて修を勸むる内に二有り。初に後位を指示し、後に偈をもて前の文を頌す。初の中に三有り。先に雲を示すに、遠からずとは、二三鬘次の故に。如來の右面とは、證理は果に同じ、攝生の便の故に右に在るなり。喜目觀衆生とは、内に深理を證し、外に慈眼を現じて、衆生を視るを以ての故に、斯號を立つ。天竺の本に、喜目光明照觸衆生と名く。二に前法を頌する中に十三有り。初の十二は正しく前法を頌し、後の一頌は後位を指示す。前の中に初の二頌は、前の、定に依つて三世の佛を見ることを頌し、次の十頌は舍那佛を見ることを明す。中に於て初の三頌は、體圓備すること、明し、後の七は佛の妙用自在を頌す。中に於て初の三は、身業の自在、次の二は



【十度】 十波羅蜜をいふ。即ち施、戒忍、精進、持戒、般若、方便、喜、捨、力、智波羅蜜なり。

【智度】 智波羅蜜智慧を以て諸法の實相を證むる修行のこと。

善業自在、後の二は意業の自在なり。第二に教に依りて趣入する中に三有り。初に敬を設けて辭し去り、二に勝れたる欲樂を起し、三に往きて後位に至る。勝欲を起す中に就きて三有り。初の十句は自力思念して、知識の徳を讀じ、次の十句は喜目加持して、勝念を轉起す。三に即時了知の下は、前の勝念に因りて、法を増長するを得るを明す。第三段の中に、略して敬を致して請を申ぶること無し。見彼夜天の下は、即ち是れ第四に己が法界を示す、中に於て四有り。一に體狀、二に業用、三に因を出し、四に名を結す。初の中に身は寶座に安んじ、智は法門を處す。謂はく、法界の身に依りて、普光轉差別の人法を現し、以て衆生を益して、其をして喜悅せしめ、法門の狀と爲す。二に一切毛孔の下は、業用を明す、中に於て三有り。先に大業用を現じ、二に善財の觀見を明し、三に善財備讀す。初の中に三有り。初に毛孔より身雲を出し、十度を行じて以て衆生を化す。二に又於一切毛孔顯現より下は、毛孔に於て、夜天自在に、所修の本行を現前するを明す。任持して失はざるを以ての故に。三に又一切毛孔出無量身雲從り下は、諸趣の身雲を現じて、夜天の本行を説くことを明す。初の中に三有り。先に總、二に所謂の下は別して十度を釋じ、三に如顯現の下は、餘法を類通す。別の中に十度は、即ち十段と爲すこと知んぬべし。第二に夜天の本行を現する中に就きて、初に總、二に行種の下は、別して十度を顯す。前の六は知んぬべし。方便願力の中に各各五句有り。一に行體を標し、二に修行の身、三に所修の行、四に行は障を離れ、五に行本の因なり。智波羅蜜の中に、先に智度の分齊を擧げ、二に隨順の

下は、所知の法を顯す。第三の詔趣の身雲を現し、夜天の本行を説く中に就きて四有り、初に所出の身雲を明し、二に所説の本行を明し、三に種種の聲を以て説くを明し、四に説法の利益を明す。初の中に先に總じて擧げ、二に所謂の下は別して顯す。別の中に始、阿迦尼吒従り下は、金剛力士に六十種の衆有りて、法界に充滿すること、知んぬべし。二に爲一切衆生の下は、所説の功徳を顯すに三有り。初に積功の行を明し、二に得諸三昧の下は、斷得の通明を明し、三に得諸菩薩の下は、所得の行位を明す。三に如是等類の下は、聲を以て説くことを明す、中に三有り。初に總じて擧げ、二に所謂の下は、別して二十四種の音聲を辨じ、三に以知是の下は説を結し、四に彼一身雲の下は、説法の利益を明す中に、初に樂土の益、二に無量の下は利上の益にして、六位漸次の益有り、知んぬべし。第二に善財の見聞は法界に證入す、中に於て三有り。先に所見聞を辨じ、二に正念の下は、正しく法界を證し、三に何以の下は、證因を釋成するに十種の所由有り、知んぬべし。第三に善財の留置の中に、先に偈を説く所因を明し、後に正しく偈を以て讚す。十偈を五分つ。初の二は勝因に依りて用を現する益を歎じ、次の二は法身に依りて、化を現する益を歎じ、次の二は物を益して、著無きを歎じ、次の二は定に依りて、奇を現する益を歎じ、後の二は總じて現身說法の益を結す。第三に歎じ自言の下は、得法の因縁を明す、中に於て二有り。先に二問を興すに、一に發心の時を問ひ、二に得法の久近を問ふ。答にも亦二有り。初に偈頌、後に結會なり。前の中に八十九頌半有り、分ちて二と爲す。先に七

十八願有りて、發心の時節を答へ、二に功德幢佛從り下の十一願半は、得法の久近を答ふ。  
 前の中に十の復次有り。初に寂靜音劫の中に五有り。初の八願は夜天の本身を顯し、二  
 に日沒從り下の十一願は、最初の佛を見るを明し、三に我時從り下の三願は、往きて佛の  
 所に到ることを明し、四に時彼如來從り下の三願は、聞法して發心するを明す。未だ曾て  
 忘失せずとは、不退を明すなり。五に是後從り下の五願は、發心を明す。後に彼劫の中に  
 於て、所供の諸佛に、略して十佛を列ねて以て本數を顯す。未得慧眼とは、信位の中に在  
 りて、未だ十解の正慧眼を得ざるを明す故に。二に天勝妙劫の中に四願半有り。未離五欲  
 とは、未だ正解を得ずして、猶欲樂に著す。三に莊嚴梵音劫の中に、五願半有り。猶未了  
 眞實とは、未だ十行位の中に、如實に眞實行を行するに到らざるが故に。四に歡喜德劫  
 の中に、五願半有り。猶未得妙智等とは、未だ巧便十廻向の智は、法界等無量廻向に稱ふ  
 ことを得ず。五に寂靜慧劫の中に、五願半有り。猶未解眞法等とは、未だ地上の本智は、  
 眞如の法を證解することを得ず。亦未だ後得智の、利に遊びて佛に供する等を得ず。六に  
 香燈雲劫の中に五願有り。八正道を成ずとは、初知見道を得る故なり。七に明淨堅固劫  
 の中に六願有り。單淨最勝道とは、二三四五地の中の勝れたる道行成じ、未だ六地の縁  
 生深願忍を得ざるを明す。八は勝王劫の中に五願有り。於彼修正道とは、六地に在りて  
 緣生の中道觀を修す。九に千功德劫の中に、五願半有り。七地の位に在りて、未だ八地の  
 無生忍を得ざる故なり。十に無著莊嚴劫の中に五願有りて供佛を明す。二に功德幢如來の

【九地】菩薩の階位は、善慧地をいふ。此位にては力波羅蜜を得、修惑を斷盡して十力を具とし、對機可変不可変を知り能く說法するなり

【以下、第四】以下、第四の地を釋す。

下の十二處は、正しく此法門を得るを明す。初に陀羅尼念力等とは、九地を得、四無礙解と及び持成就を得て、如來所説の法雨を領受するを明し、二に我得明淨、即三昧陀羅尼とは、十地の法門を得るを明す。一、一念見佛とは、報果を攝し、中に佛を見るなり。心淨如空とは、微細の障も亦盡るを明すなり。得佛力とは、即ち十地の受位にして、佛に隨在するなり。觀察の下は、大悲をもて物を攝するの徳なり。法雲波羅蜜等は、位の名を結す。佛子の下の二處は、普賢の行位を結成し、一切を該通するなり。二に古今を結會する中に、初に法は人を會し、二に已發心の益を顯し、三に乃至の下は、得法益生を明し、第四に我唯の下は、已が自分を結す。第五大段に諸大の下は、仰推の中に二有り。先に別して十重を辨すること知るべし。後我當の下は、已が分に非ざることを結す。三地竟んぬ。

第四に智地の善句藏の中に亦五有り。初に法を擧げて修を勸むる中に、同じく證位に在るが故に、此佛果中と云ふ。吉祥の勝智を名けて妙徳と爲し、物を攝し行を觀すを、救護衆生と名く。第二に教に依りて趣するに三有り。初に拜辭し、二に思念の中に二有り。先に前の所現の法を思ふに五句有り。一は總じて法門を擧げ、二に分別とは、其門を都擧す。三に深入とは深入して原を盡す。四に開發とは、其顯るる所を探る。五に顯現とは、其體狀を盡す。二に顯現の下は、前の所指の人を念す。三に往きて後位に至る。第三に見て敬は請を申す。第四に已が法界を示す。此二を合して辨するに、中に於て四有り。初に法を見て加證し、二に用を見て禮讚し、三に得因縁を顯し、四に已が自分を結す。初の中に三



【因陀羅顯】  
帝釋天の因陀羅の  
珠互に映現する  
相をいふ。

【四生三界】  
胎、卵、濕、化と欲、色、  
無色の三界。

有り。先に己が法門の身を示し、二に日光加證し、三に善財は即ち法門を得。離垢とは眼  
膜盡るが故に。圓滿とは淨智具するが故に、能く法を見るなり。二に得此三昧の下は、用  
を見て禮讚するを明す、中に四有り。初に彼大用を見、一に善財は禮を設け、三に天は本形  
を現し、四に善財の偈讚なり。初の中に三有り。先に用所依の處を明し、二に正しく所現  
の用相、三に用の起る所因を出す。初に處の中に亦二有り。一に先に微塵の中に世界を見、  
因陀羅網重重の相を顯し、二に世界の中に、衆生の生死流轉を見、三に塵内の世界の形類  
不同を分別す。此中の世界に、趣淨とは、衆生染土の中に在りて、淨土の行を修するが  
故に。趣不淨とは、不善業を作し、惡道に向ふが故に。又釋すらく、趣淨とは是れ劫増し  
淨に向ふが故に。趣不淨とは劫減じて機に向ふが故に。淨不淨とは淨多く穢少く、不淨淨  
とは穢多く淨少し。又釋すらく、前は淨の中に穢有り、後は穢の中に淨有り。二に如是  
等の下は、所現の用相を明す、中に於て二有り。先に總じて顯し、二に爲地獄の下は別し  
て辨す。別して辨する中に二有り。一に苦を教はんが爲に。二に教化の爲に。前の中に三有  
り。初に惡道の衆生の苦を救ひ、二に欲界の天の苦を救ひ、三に人趣の中の苦を救ふに、二  
十一種の畏有り。非時受生畏とは是れ佛世に値はざる生なり。二に又復教化の下は、之に授  
くるに法を以てす。謂はく、四生三界は通じて一切を收むるなり。三に滿足大願故の下は、十  
七の句は、化の所由を釋成す。謂はく、何の因か菩薩は諸塵の内に遍く、五趣四生に於て、  
常に其前に現じ、拔苦與樂する。釋して云はく、大願を滿足せんが爲の故に。一一に皆是

【義を説く】  
 説くる意か。 禮を

れ一の所由有り、准釋して知んぬべし。二に爾時の下は、善財は喜んで歡ひ、禮を説くを明し、三に夜天即捨の下は、木形を現するを明す。謂はく、其實徳を隠して、夜天の形を現す。四に善財の偈讚の中に二十頌半有り。初の一は總じて頌す。餘は下別の中に、初の九頌半は、夜天の身光の利益を歎じ、二に喜日の下の十頌は、前の所見を述す。前の中に四有り。初の三頌半は、身光益物を歎じ、次の二は香寶光益を歎じ、次の二は口眼光の益を歎じ、次の二は身普く物を益するを歎す。二に喜日の下は前を述す中に四有り。初の二は、前の、後を指す光加して法を證するを述べ、次の一は所得の三昧を述し、次の三は前の、夜天、諸の摩訶に遍く、衆生を救攝するを述し、後の四頌は、前の夜天、摩訶刹に遍くして、如来を敬養するを述す。第三に得法の因縁を明す中に二有り。先に問、後に答なり。前の問の中に就きて、初に總じて深奇を歎じ、下は別して法門を問ふに三問有り。一は法門の名字を問ひ、二に得法の久近を問ひ、三に法門の因行を問ふ。二に善男子の下は、答の中に二有り。初に深くして説き難きを歎じ、二に諦聽の下は、力を承けて説くを許す。前の中に二有り。初に下位は分に非ず、二に何以の下は徴して上の境を顯す。又初は凡小は知らず。二は知らざる所以を責む。滿普賢の下は、知らざる所由を示す。唯是れ普賢の行を修して、已に圓滿する者の、大菩薩の所知の境なるを以ての故に、二乗等の知る所に非ず。文の中に略して八句を擧げて、難知を顯す。善財も亦此知を具して、器爲るを得べきを明す。謂はく、事廣きが故に。理深きが故に。時遠きを以ての故に。是れ此法門の根牙

深厚なる相なり。二に説を許す中に二有り。先に識を誡めて説を許す中に、諦聽とは總きて  
 謬らざれと誡むるが故に。承力とは説の所依を顯すが故に。二に佛子の下は正説の中に  
 先に長行、後に偈頌なり。前の中に三の大段有り。初に離垢圓滿劫の中に於て、佛を供し  
 て行を修し、二に其後百劫より下は、大光明劫の中に於て、佛を供して行を修し、三に  
 如是方より下は、總じて摩訶等劫の中に、佛を供して行を修するを結す。初段の中に就き  
 て、十有り。一に總じて本事を擧げ、二に本生の處を顯し、三に本生の父母、四に本生の  
 身、五に佛興の利益、六に普賢の引導、七に徳女供を興し、八に總を閉きて益を得、九に  
 宿因堅固、十に會の古今を結す。本生の處の中に就きて三有り。初に通じて世界を擧げ、  
 二に彼世界東際の下は、彼界の中に就きて、別して一四天下を顯す。三に彼閻浮の下は、  
 別して一王都を顯し、三に時彼城中の下は、其本生の父母を明し、四に彼有一女の下は、  
 本生の身を明す。下は時人の惡を起すは、是れ佛興の所因なることを明す。五に時彼城北  
 の下は、佛興の利益を明す、中に於て先に道場の處を明し、二に最初妙徳幢の下は、佛興  
 の推化を明す、中に於て四有り。一に放光して驚覺す。放光に十二重有り。漸次に各已  
 後に佛興するを、知ることを表さしむ。佛子彼佛の下は、總じて光益を結す。二に滿七日  
 の下は、地を動じて衆を集め、三に一切金剛の下は、讃頌して供を興し、四に時彼三世の  
 下は、會衆説法を明す。中に於て三有り。先に菩薩の衆會、二に佛の轉法輪、三に令無量の  
 下は、衆の得益を明すに二有り。先に衆を益するを明し、後に何以の下は、能益の所由を

【福慧二嚴】 福徳と智慧の二莊嚴の意。

釋す。前の中に、初に人天の益を得、二に二乘の益を得、三に立衆生於勇猛の下は、菩薩の益を明す、中に於て十六句有り。初の十は十信の位に住せしむ。發菩提心とは、十住に進入せしむ。彼初は是れ發心の位なるを以ての故に。菩薩道とは、是れ十行の位、淨波羅蜜とは、是れ十廻向の中に、前の十度の行をして淨ならしむるなり。次に令得初地乃至十地は知んぬべし。大願殊勝は是れ等覺位の中に行なり。普賢願行は、是れ一乘無障礙にして、普く五位に遍するの行願なり。何以の下は微釋なり、知んぬべし。六に爾時普賢の下は、普賢の引導を明す、中に於て四有り。一に身光映奪、二に佛興を預告し、三に時彼衆生の下は、大衆歸心、四に時彼聖王の下は、輪王已に詣るを明す、中に於て三有り。初に身を昇せて空に在りて普く告げ、二に偈をもて勸むるに、中に於て十偈有り。四に分つ。初の一是總じて往詣を勸め、次の五は佛の結徳の出世に値ひ難きを數じ、次の三は佛已に出でて大刹現前するを明し、後の一は供を辨じて佛に供せしむ。三に佛に往き供を設く。七に爾時妙徳眼女の下は、徳女の供を興すを明す、中に於て三有り。初に嚴具を解きて佛に奉じ、二に變じて寶蓋と成り、三に女は見て歡喜す。初に解具供佛とは、若し事に隨ひて言はば、佛を重んずるを以ての故に、身の重服を解きて以て佛に散ずるなり。若し行を表して言はば、己が所修の福慧二嚴を以てして、廻して佛果を求むるが故に佛に奉ずるなり。二に時莊嚴具の下は、佛納受し變じて寶蓋と成るを明す、中に於て初に蓋の莊嚴を顯す。如明淨樓閣とは、下の文の彌勒の樓觀を擧げて喩と爲し、二に於其蓋中の下は、



蓋内の所現を明すに、中に於て四有り。初に盧舍那佛及び菩薩衆等を現じ、二に又見一切諸劫の下は、餘刹餘佛を現するを明し、三に普賢の業用を見、四に重重帝網の世界に、種種の佛興り、異に法を説くを見る。三に時彼女兒の下は見聞歡喜して、以て善根を培し、法器と成ることを明す。八に爾時妙德幢佛の下は、聞經得益を明すに、中に於て初に佛の所説の主伴の經を擧げ、法輪は義に約し、妙音は教に約す。二に所得の益を明す、中に於て三有り。初に三昧の益を得、先に總、次に別、後に結なり。別の中に略して十二種を辨す。二に復得淨心の下は、得淨心の益を明すに、文に略して三十四心を列ぬ。三に如是等の下は、法門の益を明すに、初に如是等心出生とは、法門の所依を明すに總じて擧げ次に別して九種を顯し、後に如是等は總じて結す、知んぬべし。九に善男子の下は、宿因堅固を明す。復於是前とは、離垢圓滿劫の前は、曾て像を造り已りて、堅心を發す。十に古今を結會する中に三有り。初に正しく古今を會し、二に善男子我以の下は、所成の益を結し、三に恭敬供養の下は、轉じて勝行を修し、前の法門を淨むるを明す。第二大段に其後有劫の下は、大光明劫の中に佛を供し行を修するを明す、中に於て三有り。先に總じて擧げ、二に其最初の下は、別して九佛に各生を轉じて供養し、經を聞きて受持するを辨じ、三に佛子如是等の下は、最後の佛邊所得の法の益なり。第三大段に佛子如是等世界微塵の下は、總じて塵數劫の中に、佛を供して行を修するを結す、中に於て四有り。初に佛を供して法を聞き、二に於一一の下は法を得て行を攝し、三に於念念の下は、佛行

成ずるを見、四に何以の下は、行の所由を釋成す。所説の法多きを以ての故に、法に依りて行を成ずることも亦廣し。第二に重頌の中に、三十八願半有り。初の二頌は、所得の法門と、聽を誡めて説を許し、餘は正しく前を頌す、中に於て初の二頌は、離垢劫の中の總數なり。二に三十一願半は別して顯すに略して所供の一百一十佛を列ね、三に如是等の下の三頌は、得法を結し、勸めて速に具せしめ、四に我唯の下は、己が身分を結す、天竺の本に、現一切世間と名くるは、前の教化衆生は、法門を見るに對す。第五に仰推の中に十句有り。初は行廣し。二に悉從等は行深し。三に身心を正くし、四に根海を滿じ、五に願門を具し、六に廣定を具し、七に勝道を成じ、八に多智を修し、九に原に入證し、十に己が分に非ざるを結すること、知んぬべし。炎地竟る。

【二六】以下、第五離勝地位の善知識の文を釋す。

第五に離勝地の知識の中に、初に法を擧げて修を勸むる中に、佛に同じく如を證する故に道場に在り、亦前の地と同じく眞如を證するが故に、我を去ること遠からずと云ふ。五地は禪増するが故に、寂靜智と名く、虛寶等は列位主件を明す。第二に時善財の下は、教に依りて趣入し、第三に頭面の下は、禮敬して請を申べ、第四に爾時夜天告善財の下は、己が法界を示す。中に於て先に法器を敷じ、後に正しく法を授くるに、略して四門を作る。一に法の名體を顯し、二に法の業用を辨じ、三に法の根の深淺、四に名を結して己に歸す。宛めに名體を標する中に、無量歡喜莊嚴法門とは、一は莊嚴法を以て、無量の衆生を化し歡喜せしむるが故なり。二に佛の因果莊嚴の法を見て、無量の歡喜を生ずるが故なり。下の文

の中に、此二を具するが故に、二釋を作る。即ち悲智適悅するを以て性と爲す。天竺の本に起廣愛樂心刹那速疾莊嚴菩薩解脫と名く。二に業用を辨する中に、先に問、後に答なり。此中に通じて四門を問ふ。一は法門の所作正しく業用を現するを問ひ、二に法門の境界を問ひて其所觀を明し、三に法門の方便を問ひて、其善巧を顯し、性に法門の因行を問ひて、正しく所因を顯す。下は答の中に、上の四門を答ふるに即ち四段と爲す。初に所作の業用を答ふる中に三有り。初に能く衆生の心海を淨め、二に能く衆生の爲に、障を滅して徳を成じ、三に總じて所作を結す。初の中に十心に一を缺く。初の一は總なり、謂はく、授くるに教法を以てし、聞きて心海に重じて、妄念を息ましめ、淨心の體を現せしむる故なり。八心は別して辨すること知んぬべし。二に善男子我爲衆生の下は、障を滅して徳を成ずる中に二有り。初に總じて拔苦與樂を明し、二に若見衆生在家の下は別して障を滅して徳を成ずるを顯す、中に於て三十三種有りて五に分つ。初の十四門は十度に分つて、十四種の衆生を化す。初に施戒に五門有り。順慶に二門有り。謂はく、初は大果を求めざるの心、後は化衆生を捨つるの心なり。二に爲無色著の下の三門は、色を以て無色を樂ぶ衆生を化し、三は爲苦惱著の下の二門は、有苦の衆生を化し、四に爲國親著の下の七門は、處に著する衆生を化し、五に爲食欲多の下の七門は、惑障の衆生を化す。三に我以知足の下は、總じて前の法門の名を結成するなり。此れ則ち衆生を化して、莊嚴の徳成じ、歡喜を生ぜしむるが故なり。第三に復次善男子の下は、境界の問を答ふ。中に於て業有り。先に觀察

菩薩境界を辨じ、後に又善男子の下は、觀察如來境界を明す。前の中に初に所觀の境を  
 擧げて、莊嚴を釋顯し、後に我見の下は、無量の歡喜を辨す。前の中に二十四句の種種有  
 り。初に自分の徳の中の差別の徳なり。種種方便入如來より下は、勝進入果の差別の徳を  
 明すこと並に知んぬべし。觀佛境界に就いて二有り。先に十門の觀佛境相の用有り。  
 各先に佛果の莊嚴を見、後に無量の歡喜を生ず。初の三は身光の嚴、次の二は光雲の嚴、  
 次の二は行相の嚴、後の三は衆の嚴を出す。二に起者非起の下は、所見の身光相用等を明  
 す。起よ即ち非起にして、用にして常に寂なることを明すが故に、能喜所喜俱に平等無性  
 なり。中に於て先に標、二に何以故の下は、不起の所由を釋し、佛子の下は境界を結し、  
 第三に佛子此法門者の下は、法門の方便善巧の義を答ふ。中に於て三十二門有り。初の一  
 は是れ總じて方便を顯し、次の八は法に約して、方便を説き、後の二十三は喻に約して、  
 方便善巧を顯し後に結す。非喻を以て喻と爲すは、理實には此法は世喻の能く譬ふるとこ  
 ろに非ざれば、略して少分の喻を擧ぐるなり。第四に善財白の下は、法門の因行を問す、  
 前問を去ること遠きを以ての故に、是故に重ねて問うて發起す。答の中に三有り。初に總  
 じて數を標し、二に別して行相を列ぬ、十波羅蜜の行を修するを以ての故に、此法門を得。  
 三に佛子是爲の下は、行の得果を結し、第三に善財白言の下は、法の根の深淺を問すに、  
 先に問、後に答なり。答の中に二有り。先に長行、後に偈頌なり。前の中に四有り。一に  
 過去の普照幢劫の中の發心修行を知るを明し、二に於彼倚刹の下は、二佛世界廣敷劫の修



【忍土】 娑婆をいふ。

【十度の行】 十波羅蜜の行法。

行、三に最後命終の下は、此賢劫の中に於て、修行して法を得るを明し、四に善男子汝所問我の下は、結して所問に答ふ。初の中に三有り。一に最初の佛邊に於て、發心して定を得るを明し、二に彼道場の上の下は、生を轉じて更に餘佛に値ひて、法を得るを明すに略して十生を擧げ、十佛に値ひて十三昧を得、三に如是次第の下は、總じて十刹塵の佛及び受生得法を結す。上は一劫の中の所見の諸佛を明し、二に於彼佛刹の下は、二刹塵劫の中に各各佛を供する修行、及び所經の受生を明し、此法門の根無極深遠なるを顯すなり。三に最後命終の下は、此賢劫の中の供佛修行を明すに、中に於て三有り。初に拘樓孫等の三佛に値ひて定を得。此忍土は華藏の中に在り、本を擧げて末を統ふるを以ての故に、生此等と云ふなり。二に今復の下は、舍那佛を見て、正しく此法門の體を得るを明し、三に得法門已深入の下は、法門の用を得るに、中に於て十有り。初に總じて所得の善巧の海を擧げ、二に以此の下は、九門は、別して業用を顯す。一に塵中の諸佛を見、二に舍那の普遍を見、三に彼諸佛を見、一一毛孔の下は、化身の諸佛、法界に充滿するを見ることを明し、四に觀察三世の下は、佛に同じく入證するを明すが故に。觀佛の體は同じきが故に。出生等は證に依りて用を起す差別の故に。初に總持出生門なり。謂はく、平等に一切の方便を出すに依りて、此一切の中に各各一切を出す。是の如く重重に出生して、十一重の一に至る故なり。此は是れ無盡無盡の法門海なり。五に得圓滿智地の下は、過去の佛の十度の行海を照することを明し、六に普照如來過去無量の下は、過去の佛所得の地位を照すを

【賢劫の千佛】 世界の成立より滅無の時期までを成住の時期に區別し、其内住劫（存在期）に二十増減ありとし、過去の住劫を莊嚴劫、未來の住劫を星宿劫といふに對し、今は現在の住劫をいふ。これ千佛の出世れば賢劫といふ。

【三七】 以下第六現前地位の善知識の文を釋す。

明し、七に知無量佛の下は、過去の佛菩薩の時の三利の行海を知るを明し、八に普照如來一切智の下は持法の佛を明し、九に於念念の下は、總じて所知を結す。四に答を結する中に五有り。一に總じて答へた、二は如此世界の下の、四佛を以て賢劫の千佛に類し、三に如供養賢劫の下は、十方一切世界に類し、未來一切劫の諸佛は悉く皆供養し、四に彼離垢界猶在とは、是十世の中の過去の現在は、即ち現在の現在なるを以ての故に。又此淨土に災境無きが故に。五に汝當等は結勸して學せしむ。二に頌の中に十偈有りて五に分つ。初の一是聽を誡めて學を勧め、次の二は修因の曠遠を明し、次の二は供して恩田を報じ、次の四は衆生の苦難を救ひ、後の一は己が大願を顯す。四に我唯の下は己が自分を結す。第五に仰推の中に、先に所推を擧ぐ。謂はく、善く時處を知り、後に己が知るところに非ず。難勝地竟る。

【三七】 第六に現前地の知識の中に、初に法を擧げて修を勧むる中に、道場佛衆は並に前の釋に同じ。妙徳守護諸城とは、證智に依りて、總持智を起すを妙徳と名く、常に一切智城に人るが故に、守護と云ふ。又觀智を以て心城を守護し、妄念を離れしむるが故に名く。第二に教に依りて越入する中に四有り。初に偈讚の中に十頌有り。初の一は己に教を受けてより來、此希境を見るを彰し、二に虚妄は知らず、三に妙觀も厭ふこと無く、四に無著にして力を現じ、五に不動にして佛を見、六に慧光をもて機を照し、七に業を知りて身を現じ、八に世佛の平等を知り、九に相を離れて法を説き、十に廣大の行を修す。二に教を設けて

辭退し、三に前の法を思念す。初に智慧分別とは、其義を簡擇し、隨順等は趣證相應す。  
 後に修廣身證とは、正しく證して身に在り、現に相應するを露すなり。四に往詣等は、  
 後位に至るなり。第三に見彼の下は、見て敬ひ請を申ぶる中に三有り。先に勝れたる依正  
 を見る中に、一に依報の眷屬を見、二に正報の身雲を見るに十一種の身有り。二に善財の  
 下は、禮敬を設け、三に白言の下は請を申べ、第四に時彼夜天告の下は、己が法界を示す  
 に、中に於て二有り。先に法器を歎じ、二に我已成の下は、正しく己が法を顯すに、中に  
 於て四有り。一に法の名體を標し、二に法の義用を顯し、三に法の根の深淺を辨じ、四に  
 唯自分を結す。初の中に正しく法界を證するを名けて甚深と曰ひ、後智に辨を續むるを、  
 名けて妙徳と爲し、教を宣ぶるに機に隨ひて廣略無礙なるを、自在音聲と名く。二に是故  
 佛子の下は、義用を顯すに、中に於て二有り。先に總、後に別なり。初の中に六有り。一に  
 勝るる大師の化、二に調御師の化、三に明淨日の化、四に平等心の化、五に我常以法施の  
 下は、正しく法施の攝生を顯し、六に我以如是の下は、總じて智慧の益を結す。二に復次  
 佛子の下は、別して辨する中に四有り。初に甚深の義を釋し、二に妙徳の義を釋し、三に  
 自在音聲の義を釋し、四に總じて上の三義を結す。初の中に三有り。初に數を擧げて標し、  
 二に所謂の下は、名を列ね義を釋し、三に佛子我以の下は、總じて業用を結す。初に總の  
 中の觀察とは、智照すが故に。隨順とは趣向の故に。攝取とは正しく證するが故に。別の  
 中に法界を擧ぐる中に十種の義有りて、十種の行に約して之を顯す。行は必ず理に稱ひ、

## 【教】 刹の字か。

理は行に由りて顯るるを以ての故なり。二に佛子我如是思惟の下は、妙徳の義を釋す。初に總じて擧げ、二に所謂の下は別して十門を辨するに、總持の勝智、妙徳備さに具するが故に圓滿と名く。三に以如是の下は、總じて益生を結す。三に復次佛子我惑の下は、自在菩薩の義を釋する中、初に別して顯すに二十三句有り。初の三句は三慧に約して法を辨じ、後の二十句は、十法を以て廣略に約して法を辨す。二に佛子以如是の下は、總じて結すること知んぬべし。四に佛子我深の下は、總じて結することを知んぬべし。四に佛子我深の下は、都べて前法を結す。謂はく、入無壞法界とは、初の甚深の義を結するなり。悉竟如來正法とは、妙徳總持を結するなり。以無上法施等とは、自在菩薩を結するなり。佛子我已成の下は、自分の法體を結し、念念の下は業用を結す。三に爾時善財の下は、得法の文近を辨じて、法の根の深淺を明す。中に於て先に問ひ、後に答ふ。答の中に二有り。初に離垢光明劫の中の供佛修行を明し、二に復次佛子の下は、佛の教摩數劫の中に於て、佛を供し修行することを明す。前の中に三有り。先に最初の佛に於ける所得の法門、二に次有如來の下は、略して値ふ所の九十八佛を列ね、三に佛子於離垢の下は、總じて須彌山座等の佛を結す。初の中に六有り。一に往時を擧げ、二に時有世界の下の往處を顯し、三に於彼城外の下は、往の佛興を明し、四に時有轉輪王の下は、父王の修行を明すに、中に於て三有り。初に王は法を聞きて出家し、二に惡を見て法を解り、三に法を護りて興せしめ、五に時有比丘尼の下は、夜天の本身の、發心して法を得るを明し、六に佛子時轉輪王の



【總持】陀羅尼の譯。善法を持して散失せしめず、惡法を持しては起らしめざる故に總持といふ。

下は、古今を結會し、及び得法の利益なり。二に次有如來の下は、略して九十八佛を列ね、二に佛子於離垢の下は、須彌塵等の佛の、各の供佛修護法門を結す。二に復有佛刹塵等劫中供佛修行是故佛子の下は、夜天の名を顯すこと知んぬべし。四に我唯の下は、自分を結す。第五に仰推の中に十句有り。一に語を了し、二に心を知り、三に語音に入り、四に善く語を設け、五に法を分別し、六に總持を攝し、七に巧に法を出し、八に衆生を攝し、九に淨智に順じ、十に法を吼して施す。我當の下は己が分に非ざることを結す。現前地竟んぬ。

華嚴經探玄記卷第十九

# 華嚴經探玄記

## 卷第二十

法界品  
を盡す

魏國西寺沙門法藏述す

【二】此下、十地の中第七遠行地位の善知識の文を釋す。

(一) 遠行地の知識の内に、初に法を擧げて修を勸むる中に三有り。先に後の位次を指し、後に前の法を頌し、三に善財は利益を得るなり。初の中に聞敷樹華とは、若し位に約せば此地は是れ有行なり、無相住を開發すること有るが故に名く、事に約すれば此天は香樹樓閣の中に在り、故に此名を立つ。二に前の法を頌すとは、去るに臨みて慇懃に付して、修學せしむるが故に。中に於て十四頌有り。初の二は總じて境智の法を頌し、次の十頌半は離垢光劫の中に佛を供し行を修す。中に於て初の三は總じて擧げ、次の五は別して、初の佛の邊に於て、大心を發す等を頌し、次の二頌半は已後の須彌摩等の佛邊に修行して法を得るを明し、後の一頌半は轉刹摩劫の中に修行して、此法を淨治するを結す。三に爾時善財の下は、偈を聞いて益を得るを明す。中に於て二有り。先に長行法を得るに六句有り、一には總じて法體を擧げ、二には三昧、三には總持、四には通明、五には辨海、六には深法なり。後の五は是れ用なり。二に偈は夜天を讚す、中に於て十四頌有り、五に分つ。初の四頌は悲智の甚深、次の四頌は度生の廣大、次の二は障を離れて德を攝し、次の三は時衆の妄を除くを見、後の一は、用は佛果に同じ、第二に教に依りて趣入する中に、初に敬

して辭し、二に法を念じ、三に後位に住くこと知んぬべし。第三に見て撮ひ請する中に、初に依正主伴を見、二に撮を設け、三に請を申ぶること竝に知んぬべし。第四に答言の下は己が法界を示す中に於て五有り。一には法の義を顯し、二には法の名を立て、三には業用を明し、四には根深を辨じ、五には自分を結す。初の中に二有り、先に安樂業生行を明し、光は夜中の衆生を救ふ。謂はく、日沒等の夜中に光を放つは、是れ夜天の義なり、世の險路を免れ、一切智道を求めしむ。若し山等に於て難の中の衆生を救ふは、光明の義を釋す。二に又善男子の下は利益衆生行を明す。初に放逸の衆生を化して、知足行を修せしめ、次に十波羅蜜を授與して、十障を破せしめ、歡喜行を釋成すること知んぬべし。二に我已成の下は法の名を立つるに、上の三義に依りて遂に此名を立つ。天竺の本には生廣喜處知足光明菩薩解脫と名く。三に業用の中に、先に問、後に答なり。是れ業用の分齊を以ての故に境界と云ふ。答の中に二有り。初に佛果の力用益生を擧げ、己が所學を彰す。中に於て先に總、後は別なり、知んぬべし。二に我入此法門の下は、菩薩の因行の業用を知ること明し、己が同じく成ずることを顯す。中に於て二あり、先に總じて顯し、後に我知の下は別して辨す。別して辨ずる中に三有り、初に盧舍那佛、本發心するの時、益生行を修するを知り、二に菩薩の行を行する時、益生行を修するを知り、三に通じて一切所修の行を結す。初の中に五有り。先に大悲救物の行を明す。中に於て初に衆生の苦を見、二に悲を起して救攝し、三に慈悲を結成す。二に以知足法の下は、大智益

生の行を明し、三に成就菩薩の下は、神通利物の行を成じ、四に以無上淨法の下は嚴土説  
 法益生の行、五に分別一切未來の下は廣く時處を攝し、攝生の行を修す。二に佛子處舍那  
 の下は菩薩の行を行する時の、益生の行を明す中に二有り、先に衆生の苦因苦果を具する  
 を見る。謂はく、初に集因を顯し、常於生死等は是れ苦果なり。二に發起大悲等は救ひて  
 出離せしめ、樂の因果を授くることを明す。謂はく、初に教へて道因を修し、滅不善の下  
 は滅果を得しむ。三に佛子以如是の下は、結の中に二有り。初に前の初發心の時の益生を  
 結し、二に以如是の下は、修行菩薩行の益生を結すること、竝に知んぬべし。四に善財白  
 言の下は法の根の深淺厚薄の義を明す、中に於て先に問、後に答なり。答の中に二有り、  
 初に深うして辨じ難きを數じ、力を承けて説を許し、二に乃往古の下は正しく承力所説の  
 法を顯す。前の中に亦二有り。先に長行、後に偈頌なり。長行の中に三有り、初に境  
 の知り難きを數す。謂はく、但し久遠の故に知り難きのみならず、亦是れ當時發心するに、  
 即ち深法を得て、佛の境を滿するが故に、是故に知り難きを辨す。此中の難は問慧の能く  
 知るところに非ず。二に思慧の能く信ずるところに非ず、三に修慧に能く入るところに非  
 ず。上は心行處滅す。四に言語路絶し、五に二乘智の能く證得するに非ず。若し兩らば豈  
 善財も亦知ることを得べからざるべけんや。二に除佛神力の下は、因縁有らば亦知るを得  
 べきことを明す。初の一句は佛力の加持を緣と爲す、善知識に依る等は內行高勝なるを  
 其因と爲し、方に知るを得べきことを明す。善財は正しく是れ其人なるが故に能信等と云



【鐵輪王】四輪王の  
 一。鐵の輪寶を  
 感得し、南閻浮洲  
 の一を統御す。  
 【劫濁】命濁 五  
 【異熟果】善、惡

ひ、難と翻す。三に何に故の下は、何に因りてか要す佛力を須て方に能く知るやと責む。  
 釋すらく、是れ佛の境界なるを以てなり。若し爾らば夜叉は云何が説くことを得るや。釋  
 すらく、亦我佛力を承けて説く。頌の中、二十一頌半に五有り、初の二は境の甚深を擧げ  
 て前の難説等を頌す。二に四頌有り、知ること能はざる所の人を明し、前の、諸天等の能  
 く知るに非ざるを頌す。三に十四頌半有り、前の除佛神力等を頌す。中に於て初の二は、  
 前の佛の神力及び善知識に依りて善根を成ずるを頌し、次の二は前の淨正直心を頌し、  
 次の一は前の哀愍衆生等を頌し、次の六は六度の行を頌し、及び前の拔煩惱樹等を頌す。  
 次の二頌半は前の諸の染汗を滅して、普照を得る等を頌し、次の二は如來の樂を得て、  
 佛功德に入る等を頌す。四に一頌有り、善財に學を勸む。五に一頌有り、前の我當承力説  
 なり。二に正しく發心の久近を説く中に二有り、先に長行、後に偈頌なり。前の中に三  
 有り。初に過去の大王の起行を明す、即ち是れ本事なり。二に有童女の下は、夜叉の本生  
 に、同じく勝行を修するを明し、三に古今を結會す。初の中に五段有り。一に總じて時  
 處と摩數の佛の興るを擧げ、二に佛子彼世界中有世界性の下は別して本處を擧げ、輪王  
 の興化を明す。是れ鐵輪王なるを以ての故に、故に彼閻浮提と云ふ。三に彼大劫中の下は  
 惡劫起ること有るを明す、中に於て五濁熾然とは總じて擧ぐ、謂はく、劫濁、見濁、煩惱  
 濁、衆生濁、命濁なり、具には別章の如し、十惡等を行するは苦因を造るなり。死し  
 て惡道に入るは、異熟果を受くるを明し、命短等は等流果を受くるを明し、以諸貪著の下

業の因にて受くる樂若くは苦の果報【等流果】善因より善果、惡因より惡果を受くる等、果の性が因の性に等しきをいふ。【増上果】他の力の加はるに由て生ぜし果。雨、肥料の助力をかりて得たる米麥の如きをいふ。

【本生の身】過去世に於ける身をいふ。

は増上果を明し、四に彼時人民の下は、苦人、王に於て上訴して救を求め、大悲の境と爲すことを明す。五に時彼大王聞の下は、境に對して心を起し、大悲の行を成す。中に於て三有り、先に心に大悲の法を得。謂はく、百萬僧祇等なり。二に口より大悲の語を發す。謂はく、十種の悲語等なり、衆生の十種の苦を愍むが爲の故に。一には地獄の苦、二には煩惱の苦、三には老病死の苦、四には恐怖の苦、五には見疑の苦、六には愚癡の苦、七には懷嫉の苦、八には生死の苦、九には生盲の苦、十には障礙の苦なり、十種の對治は文の如く知んぬべし。三に時彼大王の下は、身に大悲の事を行するを明す、中に於て五有り。先に宣勅して普告し、二に時城東の下は大施會を設け、三に爾時閻浮の下は大衆普集し、四に時王見已の下は乞者の現前するを見、王大いに歡喜するを明す、是れ適悅の意樂なり、中に於て四有り。一には法說校量す、二には喻、三には合、四には何以故の下は大喜の所由を釋す、文は竝に知んぬべし。五に復次佛子時彼大王の下は、正しく勝想を起し、普く所須を施す。第二に時彼會中有童女の下は本生の身同じく勝行を修することを明す、中に於て六有り。初に女の德勝るるを數じ、二に作如是念の下は善知識に順じて物を捨すると同じと願す。莊嚴の具を脱すとは世間榮華の報に背くことを示す。王の前に置いて發願することは、出世の菩薩の同行に同ぜんことを希ふ。三に時彼大王告此の下、王の女に施與することは、菩薩の攝受同行を明す故なり。四に女人は偈を説いて王の德を讚するは、恩報を賀するが故に。五十二頌を二に分つ、初の二十五頌は總じて大王興世の利を顯し、

【二】以下、第八の不動地の善知識の文を釋す。

後の二十七頌は別して本生利益の相を明す。前の中に四有り、初の六頌は王の未だ興らざる時の損を明し、二に次の二偈は王の興る益を明す。三に十頌有り、王の世に興りて損を翻じて徳を成ずることを顯す。四に七頌有り、大王の聲教の利益を明す。二に王父名淨光従り下の二十七頌は、別して本生を顯す中に五有り。初の四頌は前の王世の末を明す。二に八頌有り、王の興る先相を明す。三に三頌有り、父王池に遊ぶ。四に五頌有り、童子出生の益を明す。五に最後の七頌は即ち利益を出す。五に爾時等は女、讀じ已りて禮を設くるを明す。六に王は女の徳を讀じ、衣を以て之に授けて、主伴同じく益す。第三に古今を結會する中に、略して結す。時に彼童女とは、今則ち我身是なりと云はざるなり。第二に重頌の中に十偈有り、初の二は天眼、次の一は天耳、次の一は他心、次の一は宿命、次の四は廣く諸佛因果等の事を知り、後の一は修學を結勸す。五に我唯の下は自分を結すること知んぬべし。第五に仰推勝進の中に五句有り。初に行の廣修を明し、二に大願滿じ、三に多位を攝し、四に行の無礙、五に法の自在、下は已が分に非ざることを結す。遠行地竟んぬ。

第八に不動地の知識の中に、法を擧げて修を勸む、内に願勇光明守護衆生とは、此地の中に願波羅蜜増上するを以ての故に勇と云ふなり。又梵本に准するに是れ精進勇猛の義にして、是れ勇出の狀に非ず、此願勇の光を以て衆生を饒益するが故に守護と云ふ。八地の淨佛刹等の行を問ふことを教ゆ。餘は前の釋に同じ。第二に、教に依りて趣入する中に

二有り。初に前を辭し、二に後に越く、略して念法無し。第三に見て敬ひ請を申ぶる中に  
 三有り。初に見、二に禮、三に觀なり。略して請を申ぶること無し。法を身に現するを以  
 て、見已りて請する無し、初の中に二有り、先に身の所在を見、下は身相を顯す、中に於  
 て二有り。初に光明、普照等は總じて身光の深廣なるを明す。謂はく、理法界に稱ふが故  
 に。事法界に遍するが故に。一切日月の下は、別して二十種の身大自在を辨す。中に於て  
 初の八は是れ應機攝化の身、二に諸佛所の下の八は、是れ應法成行の身、三に離熾燃  
 の下の四は是れ應理平等の身なり。二に善財見已の下は禮敬念觀し、三に於善知識の下  
 は、觀に因りて勝心を得。初に總、次に別、後に結なり。別の中に十心有り、皆先に所得  
 の心の名を擧げ、後に心の義を釋すること、竝に知んぬべし。第四に爾時善財一心の下は  
 現に法界を證することを明す、中に於て四有り。初に法體を證得し、二に法の名義を顯  
 し、三に法の根深を辨じ、四に法の本位を結す。初の中に三有り、先に共法を得、二に正  
 直心を得、三に偏をもて徳を讀す。初の中に三有り、先に此天を觀す。身得摩數等は是れ  
 總じて擧ぐ。若し自分に約せば、是れ極位の菩薩は、共に得る所なる故に名けて共法と爲  
 す。若し勝進に約せば、諸の如來に同じく、共に所得の法なる故に共法と云ふ、下に望め  
 ては皆是れ不共なり。衍法師の云はく、菩薩の共法通じて論するに四有り。一に人法無二  
 にして一切の法と共す。二に因果無二にして一切の諸佛と共す。三に自他無二にして一切  
 の菩薩と共す。四に染淨無二にして一切の衆生に共す。二に所謂の下は別して八十四種を



列ね、一一の中に皆初に名を標し、後に義を釋す、竝に文の如く知んぬべし。三に得如是の下は結す。二に爾時善財入如是の下は此共法に因りて、更に直心無邊なるを得ることを明す、知んぬべし。三に頌讚の中に十偈有り、二に分つ。初の三は前の法を頌し、餘の七は後の行を請す。前の中に初の一頌は所起の十心なり、初心を標して後を統ぶるなり。次の一頌は所得の共法、後の一頌は所得の正直心なり。二に唯願の下は後の行を請す。初の三は授法を請し、次の三は授行を請し、後の一は重恩を結す。第二に爾時善財說偈の下は、法の名義を顯すに、先に問ひ、後に答ふ。此中にも亦法根深厚の相を問ふに、通じて三問有り。一に名義を問ひ、二に發心の久近を問ひ、三に嚴の時成佛するやを問ふ。答の中に後の問を答へざるが故に唯二問に答ふ。初の名義を答ふる中に、先に名とは、身は應化に隨ひ、智は善く聞覺して、物をして善を増せしむるが故に長養と云ふ。二に我入此の下は、義用を顯す中に四有り。初に覺悟の義を釋す。謂はく、法の平等を了す、是れ正證の故に。二に解一切の下は證に依りて用を現するは、隨應化の義を釋す。中に於て三有り、先に無色に色を現す、是れ總句なり、謂はく、『現色』等に「土自在依止法界」と名くるは此地に當れり。二に所謂の下は別して「百種色有り、文を檢するに其二句を欠く。三に於念念中現如是等は總じて結す。是を以て「起信論」の中に、第八地を色自在地と名くるは此謂なり。三に或見或念の下は機に隨ひて不善の法を滅し、善法等を安立するは、長養の根の義を釋す。四に佛子我住の下は法門の業用の廣大なるを結す。第三に如汝所問の下は

【寂にして而も常に用】寂然として在りて、而も一面に衆生濟度の化用をなすをいふ。

法根の深厚を明す、中に於て二有り。一に深を敷じて説を許し、二に正しく所説を説く。前の中に三有り。初に問を牒して説を許し、二に菩薩圓滿の下は敷じて甚深を顯す。中に於て、五の譬喩に約して以て深の義を顯す。初の一は日性無闇の喩にして、菩薩、妄無きを知りて能く妄を破するに喩ふ。二には日光遍照の喩にして、菩薩寂にして而も常に用の義を喩ふ。三には虚船濟物の喩にして、菩薩の無住攝生の義に喩ふ。四には空性無礙の喩にして、菩薩の無功益物の義に喩ふ。五には化無形質の喩にして、菩薩の用に於て而も常に寂の義に喩ふ。三に佛子菩薩智慧の下は、力を承けて説を許すを結ぶことを明す。二に乃往の下は、正しく所説を説く中に二有り。先に長行、後に偈頌なり。前の中に三有り、先に善光劫の中に佛を供する修行を明し、二に日光劫の中に佛を供する修行を明し、三に摩數劫の中に佛を供する修行を結す。初の中に二有り、初に最初の佛の所に於て修行して法を得、二に生を轉じて餘佛に値ふことを明す。初の中に十四段有り。一に古佛の出世、二に昔人の造惡、三に佛正しく開導す、四に王力治罰す、五に太子の悲救、六に臣議して死せしめ、七に獄囚の命を代へんことを請ひ、八に王即ち怒りて誅せしむ、九に母請し、王審にす、十に太子確に救ふ、十一に獄に代りて囚を放ち、十二に王許して福を修し、十三に正しく施會を設け、十四に佛太子を救ふ。中に於て八有り、一に國人已に集り、二に佛衆雲のごとく赴き、三に佛の威光を見、四に敬禮して請を申べ、五に説法して衆を益し、六に太子法を得、七に古今を結會す。中に於て四人有り。一に太子、二に惡臣、三に

【三】以下、第九  
善慧地位の善知識  
の文を釋す。

獄囚、四に大王なり。八に出家して法を得。第二に我於爾時の下は、生を轉じて餘佛に値ふを明すに、略して八佛を擧げ、通じて一萬を結す。第二に次復有の下は、日光劫の中に、佛を供して修行するを明す。中に於て三有り。先に總じて數を擧げ、二に別して十佛を列ね、及び轉じて十生を受く。三に我諸趣身の下は、總じて六十億の佛、一一に法を得るを結す。第三に如一劫の下は、總じて摩數劫の中に、佛を供して行を修し、此法門を修するを結す。二に重頌の中に三十六億有り、九に分つ。初の一是力を承けて説を許すを頌し、次の六は古世の佛興、昔人の惡を造るを頌し、次の七は太子悲救して命に代るを頌し、次の五は初佛の説法の、利益得法を頌し、次の一頌は一萬佛を結し、次の一頌は摩數劫等を結し、次の四頌は得法を結會し、次の八頌は法門の業用、後の三頌は長時の益物なり。下は自分を結して勝進を推すること、疏に知んぬべし、不動地竟んぬ。

第九に善慧地の知識の内に、法を擧げて修を勸む。初に處を指す、此國は迦毘羅城の東二十餘里に在り、是れ摩耶の、太子を生ぜし處なり。流彌尼とは正翻無し、義翻じて華菓等勝妙事具足と云ふ。二に人を示す。妙徳圓滿林天と名くるは、謂はく、善妙の徳内に備はり、發願して此林を守護する故に、以て名と爲す。天竺の木に云はく、「留彌尼天女有り、妙圓光勝愛樂と名く」と、三に問を教ふる中に、是れ生佛の處なるを以ての故に、生佛家を問ふを教ふ。第二に教に依りて趣入する中に亦三有り。一に敬ひて辭し、二に法を念じ、三に林に至りて推覓す。第三に見坐の下は、見て敬ひ、請を申ぶるを明す中に、

初に見、二に敬ひ、三に請す、知んぬべし。第四に答言の下は己が法界を授く。中に於て  
 五門を作りて分別す。一には法の義を顯し、二には法の名を立て、三には業用を明し、四  
 には法の根を辨じ、五には自分を結す。初の中に二有り、長行と頌となる。長行の中に四  
 有り。初に總標して徳を歎じ、二に十名を列ね、三に十義を釋し、四に益を結歎す。初の  
 中に三有り。先に總じて能行を歎じ、如來の家に生じ、一に於念念の下は別して修法成  
 行を顯し、三に具足の下は行成じて果に趣くを明す。二に十名を列ぬるに、諸徳の釋有  
 り、將に十地に配せんとし、一一に別して釋す。今通に就いて釋す。一に供佛の願、二に  
 覺心枝とは菩提心に依りて、餘行を出生するを枝と名く。三に寂滅を觀じ、四に淨直の  
 心、五に智普く照し、六に佛家に生じ、七に佛光の力、八に佛智に達し、九に法界を嚴り、  
 十に勤めて佛に至り、此十行を行するに由りて、諸の菩薩をして佛家に生ずるを得しむ  
 るが故に。三に名を提して別して釋する中に、十種を即ち十段と爲す。一一に各三有り、  
 謂はく、標と釋と結となり。初は知んぬべし。二の中に十種の菩提心有り、皆標名釋義  
 有り。枝とは差別して十一種有るが故に。又是れ因の義、餘行の本と爲るが故に。三の中  
 に九種の心有り、前の十心と何んが別とならば、前は是れ行本の心、此は是れ隨行の心な  
 るが故に佛家に生ずるなり。四の中にも亦十句を以て直心を釋成す。謂はく、正直に法  
 に趣き、堅心にして動ぜざるが故に佛家に生ず。五の中にも亦十行を以て普照を釋成す、  
 初の六は知んぬべし。無礙眼とは是れ方便なり、深入等は是れ願力なり、智者等は是れ智



【物】衆生をいふ  
即ち衆生化益の爲  
に身を現す。

度なり、十行普照に由りて佛家を得。六の中に亦十句を以て生如来家を釋す。一に佛家に隨ひて生じて深法門を證し、二に佛の大願に同じ、三に行同じ、四に體同じ、五に背向同じ、六に善を長ずること同じ、七に法に住すること同じ、八に佛の定を得、九に衆生を攝し、十に持法を聞く。七の中に九句を以て、現佛光明力を釋す、謂はく、諸法如幻等を知るが故に、如化通明の力を成就し、佛光の力に同じく、遍十方に遊ぶが故なり。八の中に亦十句有りて、分別薩婆若を釋す。一に總じて觀じ、二に於無量劫の下は、別して分別果智、及び智所知の境等を顯し、竝に分別すること知んぬべし。九の中に亦十句有りて、莊嚴法界を釋す、謂はく、刹土を嚴る、化身の嚴、起行の嚴、攝生の嚴等竝に準じて知んぬべし。十の中に亦十句有り、勇猛精進至佛を釋す。一に總、二に一切世界の下の、別して三世の佛智の所知、及び示成正覺教化衆生を現するが故なり。四に住是法の下は利益を結成す。中に於て先に十種の利益行成ずるを現じ、後に以一切法の下は應に隨ひて成佛し、生を如来の家に結ぶ。二に重刹の中に十領有り、其次第の如く、各各一受生の法を顯す、文顯なり、知んぬべし。菩薩具此の下は結す、二に我成就の下は立名を明す。無量境界自在と言ふは、菩薩の物の爲に生を現するを明すが故に自在と云ひ、奇瑞一に非ざるを無量境と名く。天竺の本に云はく、「我菩薩の解脫を成就するを、無量劫執持一切菩薩受生自在顯現と名く」と。三に善財白言の下は法門の境界を明すに、先に問、後に答なり。答の中に三有り。初に下生に十瑞應有るを明し、二に生ずる時十光有るを明し、三に受生し

【八部】天乃至摩  
 羅伽をいふ。

て十自在有るを明す。初の中に三有り、先に天神は自ら本願をもて此に生ずることを願し、二に菩薩の下生の所に十瑞の相を現じ、三に此相現時の下は瑞を見て、菩薩の生を知る。二に佛子摩耶夫人出遊毘羅の下は、生ずる時に十の光明有ることを明す、數を擧げ名を列ね、總じて結すること有り、知んぬべし。三に摩耶於此畢利刃の下は受生を明す、中に於て四有り。一に總じて標し、二に別して顯す。畢利刃とは具には鉢刺刃と云ひ、義翻じて高顯樹と云ふ。有る處には阿輪迦樹と名け、此には無憂樹と云ふなり。又阿訶他樹は此には無羅樹と云ふ、謂はく、遮ること三匝せば能く罪障を滅す、此は是れ菩提樹なり、是れ生靈の樹に非ず。又畢鉢羅樹と名く、此には榕樹と云ひ、嶺南に在り、亦此に有るは類して知んぬべし。十自在とは一には八部雲集し、光照して苦を息む。二には腹に三千を受け、遍く百億に坐し、三には毛孔より佛の過去の行法を現じ、四には毛孔は佛の過去の本事を現じ、五には毛孔は佛の過去の形色を現じ、六に毛孔は佛の往昔の本施を現じ、七には身中に佛の本嚴土の事を出し、八には身より八部を出し、宮殿林に滿つ、九には身より菩薩を出して舍那を讚歎し、十には金剛地輪は大蓮華を生じ、以て菩薩を承く。三に摩耶生時の下は相狀を顯す、中に於て五有り、一に期挺特にして空中に日の現するが如し、二に威光赫奕として雷電の光の如し、三に機に應じて身を現じ、山の雲を起すが如し、四には無明を滅することを現じて、闇中の燈の如し。五に生ずると雖も不生、用は常に寂の故に。四に我於一念の下は、夜天自らの所知の受生の分齊を結するを明す。四に爾時善財の

【四】以下、第十法雲地位の善知識の文を釋す。

下は、法の根の深厚を明すに、先に問、後に答なり。答の中に二有り、先に長行、後に偈頌なり。前の中に十有り。一には古世の佛興り、二には往の佛母を出し、三には樹に攀ちて佛を生じ、四には乳母に授與し、五には乳母は定を得、六には此法門を得、七には古今を結會し、八には廣く受生を見、九には本の大願を知り、十には佛を供して法を持つ。二に頌の中に二十三頌半有り、四に分つ。初の一に聽を誡めて説を許す。二に八偈半有り、初佛の所に發心して法を得るを明す。三に我於億刹の下の十三偈は、更に多佛を供して淨修増廣なるを明し、四に末後の一偈は無盡を結歎す。下は自分を結し、及び勝進を推すること、跋に知んぬべし。善慧地竟ぬ。

第十に法雲地の知識の内に、初に法を擧げて修を勸むる中に、跋の名は前に釋するが如し。瞿夷とは古譯には明女と名く、又諸の梵本を勘ふるに、或は崎比と名け、此には覆障と云ふ。謂はく、家に在りて父母に護られ、人をして見せしめざる等なり。或は瞿婆と名け、此は守護大地と云ふ。佛、太子爲りし時に三夫人有り、瞿夷は第一、耶輸陀羅は第二、摩奴舍は第三なり。又瞿夷は是れ王の女實なり、今は因位の終極にして、慈悲の相顯著なるを表すが故に第一を取れり。又證法既に滿じて法喜適悅するを以て、是れ妻の義なり。第二に教に依りて趣入する中に、一に敬ひて辭し、二に法を念じ、三に後に至る。第三に、見て敬ひ請を申ぶる中に三有り。先に方便して推求し、二に其勝報を見、三に敬を致して請問す。初の中に四有り。先に天衆迎へ讚じ、二に善財迎へ達し、三に天衆供歎し、

四に堂に昇りて推覓す。初の中に二有り、先に迎へ、二に白言の下は讚す、此は是れ守護  
 法堂神の讚する中に四有り。初に行の究竟を讚じ、二に我觀の下は精進得果を讚じ、三に  
 我觀の下は精進得法を歎じ、四に何以の下は釋成すること知んぬべし。二に善財答言の  
 下は印述の中に二有り。初の一句は其所説を印し、二に欲令の下は自らの所作を述ぶ。中  
 に於て四有り。初に惡業生に於て大慈の行を起すに、法と喻と合と有り、知んぬべし。二  
 に修善の衆生に於て大喜行を起し、三に何以の下は所由を釋成し、四に若有菩薩の下は  
 行の利益を結す。中に於て十六句に、皆標釋有り、知んぬべし。天神の下は總じて結する  
 なり、知んぬべし。三に善財將昇の下は、天衆の供して數するを明す中に、先に供して其  
 身に散じ、二に其徳を頌數するに、十偈有りて四に分つ。初の三は利生の行を歎じ、次の  
 一は求友の行、次の三は無礙の行、後の三は勇猛の行なり。四に爾時の下は堂に昇りて推  
 覓すること、知んぬべし。二に即見の下は勝報を見ることを明す、中に於て三有り。一に  
 正報を見、二に眷屬を見、三に眷屬同行の徳を顯す。中に於て十句有り。一には本行同、  
 二には四攝同、三には大悲同、四には大慈同、五には大智同、六には不退同、七には行滿  
 同、八には離障同、九には普行同、十には成果同なり。三に敬を致して請問する中に、皆  
 悲智等を問ふ。逆順無礙行に九句有り。一には染に在れども汚れず、二には理を得て證  
 せず、三には果を得て因に住し、四には世に出ずれども恆に入り、五には理に處して事を  
 現じ、六には言無くして説を現じ、七には空を知りて攝化し、八には寂を知れども恆に供



じ、九には眞を知りて俗を行す。第四に爾時瞿夷の下は、己が法界を示す中に二有り。初に問を敷じて説を許し、二に正しく己が法を示すに、中に於て五門を作りて分別す。一には法の義、二には法の名、三には法の用、四には法の根、五には法の位なり。初の中に二あり。先に長行、後に偈頌なり。前の中に亦二あり。先に十法をもて因陀羅行を顯すに、總標、別辨、及び結有り、知んぬべし。二に慧に十法を修して善知識に値ふに、亦標と釋と結と有り、知んぬべし。二に頌の中に十三偈有り。初の二は前の善知識に依るを頌し、次の九は餘の九行を頌し、後の二は行の用を結歎す。二に我已の下は法の名を立つとは、謂はく、一切の菩薩の三昧深廣にして勝智を以て觀察し分別す、天竺の本に云はく、菩薩の解脱を成就するを、觀一切菩薩三昧海境界と名く一と。三に善財白言の下は法用を明す中に、先に問、後に答なり。答の中に三有り。初に此娑婆世界の中の境を知り、二に十方世界の中の境を知り、三に盧舍那の下は能知の所由を釋す。初の中に四あり。先に衆生の善惡邪正を知り、二に彼諸劫中の下は佛の因果を知り、三に二乘の眷屬を知り、四に知彼眷屬菩薩の下は、菩薩衆及び其行位を知るを明す、亦是れ菩薩の三昧海を知るに諸句有り、知んぬべし。二に如婆婆の下は十方世界を知る。各十世界とは是れ無盡の故なり。三に盧舍那の下は、能知の所以を明す中に標と徵と釋と有り、竝に知んぬべし。四に善財白言の下は法の根を顯す中に、先に問、後に答なり。答の中に四有り。一に初の佛に於て、修行して法を聞くを明し、二に更に六十百千億那由他の佛に値うて修行供養し、三に最後

【檀】 檀波羅蜜即  
ち布施の行。

の佛の所に於て此法門を得。四に後に塵數劫の中に於て此法を修治す。初段の中に長く分ちて十五段有り、一に古世の王都、二に太子の福報、三に寶女の福嚴、四に太子は媿せんことを求め、五に時彼國の下は佛興ると女の夢みるを明し、六に天勸めて佛に詣り、七に女は太子を求む。十偈有り二に分つ。初の三は自ら己の徳を述べ、行侶と爲るに堪へ、後の七偈は太子の徳を歎じて共納受を請す。八に太子女に問うて十一偈を説くを二に分つ。初の四は己が離過を彰し、後の七は勸めて勝行を成ぜしむ。九に女の母、偈をもて答へ「女に勝徳有り、願くは納受を爲せ」と。二十四偈有り、六に分つ。初の二は總じて女の縁を説き、次の六は女の生處を説き、次の五は勝れたる色聲を具し、次の四は智徳は人に過ぎ、次の二は世患を遠離し、後の五は出世の行を具す。十に太子、母に答へて「能く道を障へずんば、我當に納受すべし」と。中に於て、先に長行に九句有り。一に發心して徳を積み、二に度行を淨修し、三に佛を供して法を護り、四に刹土を嚴淨し、五に衆生を利樂し、六に修行して地を具し、七に檀を行じ、八に出家し、九に汝我を障ふること莫れと。二に偈の中に七偈半有り、初の二は初を行を頌し、次の二は起りて第六を頌し、次の二は第二を頌し、次の二は第四を頌し、次の二は第五を頌し、次の半は却て第三を頌し、次の一は第七を頌し、後の一は第八九を頌す、知んぬべし。十一に時女答言の下は、命に願じて志を同す、幸に唯納れ見れんことをと。十四偈有り、三に分つ。初の三は求慕の心堅く、次の六は勝行を同せんと希ひ、後の五は佛を説きて詣でんことを勸む。十二に太子、佛

興るを聞き、歡喜して寶を贈る。十三に女の母意を遂げ重ねて女の徳を歎す、十偈有りて四に分つ。初の三は徳の太子に同するを歎じ、次の三は身業の勝を歎じ、次の一は語業の勝、後の三は意業の勝なり。十四に時太子の下は相與に佛に詣づ、中に於て三有り。初に佛の勝相を見、二に數を致して供養し、三に經を聞いて益を得。十五に還りて父王に告ぐ、中に於て八あり。初に總して佛興を白し、二に所聞を問答し、三に王喜ひて書けて言ふ、四に位を捨てて佛に詣で、五に法を聞いて益を獲、六に出家して法を得、七に太子位を紹きて佛の聖法を弘め、八に古今を結會す。中に於て、一には太子に會ひ、二には父王に會ひ、三には女母に會ひ、四には眷屬に會ひ、五には女身に會ふ。第二に彼佛滅後の下は、更に六十万億那由他の佛に值ふ、文に略して四十六佛の名を列ね、悉く皆敬養す。第三に其最後佛の下は、末後の佛の所に於て法を得るの因縁を明す。第四に我得此法門の下は、更に已後の摩數劫の中に於て、佛に值ひて此法を修治す、中に於て四有り。初に多佛を供養し、行翁末だ滿ぜず、二に佛子の下は、多佛の法を聞いて未だ普賢に至らず。三に何以の下は、普賢に非ざる所以を釋し、四に何以故とは、重ねて責めて盡く未だ普賢の所行を知ることを能はずと云ふ。何を以てか情の境界に齊しと知ることを得る。釋すらく、彼毛孔の中に於て、念念に悉く見る等といふを以ての故に。此れ則ち已能く彼所現を見て、彼現事を作すことを能はざるを彰す。中に於て三あり。先に器世間及び智正覺世間を見、二に復次の下は衆生世間を見、三に我於菩薩一一の下は、總じて所見を結す。下は白

【五】以下、第二段に、會緣入實相の知識の文を釋す。

【蓮華藏】略して華藏世界といふ、諸佛報身の淨土のこと。即ち釋迦の淨土は華嚴經所説の如し。  
【雙林】沙羅雙樹  
【靈山】靈鷲山

分を結し、及び勝進を推すること、竝に知んぬべし。法雲地畢んぬ。上來總じて四十一人あり、大段第一の寄位修行の相を明し竟んぬ。

第二大段に摩耶夫人の下は、會緣入實相の知識を明す。謂はく、前の諸位差別の縁を會して、平等一實の法界に歸せしめ佛果を生ずること、摩耶の佛を生めるが如き故に次に明す。此中に十人行り、之を分ちて二と爲す。初の一は是れ總、餘の九は是れ別なり。初の摩耶は智法門を得、最後の童子童女も亦幻住法門を得るを以て、始終相會し、總別相融じて無二なるを以ての故なり。初の中に就いて亦五義あり、前に同じ。初に法を擧げて修を勸むる中に二あり、初に長行は後を指し、次に偈を説いて前を頌す。長行の中に就いて、摩耶とは此に幻生菩薩と云ひ、夫人とは梵に提婆多と名け、正しく翻じて應に天后と名くべし。古人は義に就いて名けて夫人と曰ふ。問ふ、「餘の經論の説は、摩耶佛を生じ、七日にして命終して初利天に生ずと。云何か此中に迦毘羅城を指すや。」答ふ、「化相は滅を示せども、實報は常に存す。『若し爾らば迦毘羅は、豈化處に非ずや。』釋すらく、「此れ亦深細なり、常人の見つべきに非ず、菩提樹下は即ち蓮華藏等の如し。又雙林に滅を示し、常に靈山に在る等の如し。又此摩耶等の諸の眷屬は、若し小乘の中には、是れ實にして化に非ず、若し始教大乘の中には、是れ化にして實に非ず、若し終教の中は、亦是れ實、亦是れ化なり、謂はく、實は是れ大菩薩の、示現にして化を爲すが故に。若し頓教の中には、實に非ず化に非ず、相に即して無相なるを以ての故に。若し圓教の中には、竝に是れ法界



の實徳なり、是人亦是れ法門なるが故に。又是れ舍那海印定の中に現する所なるが故に佛  
 の實徳の據に屬す、餘は故に之に準すべし。一に汝諸教問の下は問を教ふること、知んぬべ  
 し。二に偈は前の法を頌する中に三十三偈有り、三に分つ。初の一は總じて己が行を顯し、  
 次の十七偈は速く前劫の佛に事ふる因縁を説き、前の長行に無き所なり。次に於後所過劫  
 の下の十五偈は、正しく前の長行に説く所の因縁を頌す。中に於て先の十は、前の於諸佛  
 所所得法門を頌し、次に我於菩薩身の下の五は、前の於菩薩毛孔所見等の事を頌す。第二  
 に教に依りて趣入する中に六有り。初に前を辭し、二に後を念じ、三に引導し、四に佛を  
 見、五に教を致し、六に請を申ぶ。後を念する中に就いて三有り。初に總じて知識の徳を  
 念じ、二に具淨法身の下は、別して其身を念するに十九偈有り。三に如是等の下は難見を  
 結成して、四種の念を起す。一に云何が見ん、二に云何が近せん、三に云何が其相を知  
 らん、四に云何が法を聞いて受持せん。三に作是念已の下は、佛の善知識方便して引導す  
 るを明す、中に於て三有り。初に城大教へて心城を守らしめ、二に妙徳を、徳を讃じて加  
 持し、三に羅刹王教へて行を起さしむ。初の中に三有り。先に善財を供養し、二に教へて  
 心城を守らしむるに二十四種有り、一一に各各初に所作を勸め、後に作の所以を釋す。初  
 の中に應に心城を守護すべしとは、忍びて妄念を起さざるなり。難生死とは妄念無きに出  
 りて、惑を起して業を造らざるが故に離と云ふなり。又云はく、應に無壞心城を修すべし  
 とは、法を信じて壞せざるを以ての故に。又法を持して妄ならざるが故に。又云はく、應

に心城普照光明を放つべしとは、根欲性の力を以て、智光照して群機に達するが故に、餘は竝に準釋して知んぬべし。三に菩薩摩訶薩の下は利益を釋成す。中に於て先に總標、二に何以の下は所以を釋し、三に佛子の下は結す。第二に爾時有天の下は、妙徳天の讚徳加持を明す中に、一に摩耶を讚歎して、其をして欣樂ならしめ、二には光を放ちて加持し、三には善財は益を獲、中に於て十種の眼を得。一一に各各先に眼の名を標し、後に眼の義を顯すこと、竝に準釋して知んぬべし。第三に時有守護の下は、羅刹王教へて行を起さしむるを明す。中に於て三有り。初に十法を教へて知識に近づくことを得。初に總次に別、後に結す。別の中に、一に直心、二に悲心、三に智心、四に不退心、五に堅信心、六に深心性を觀するが故に。七に大心、普く覆ふが故に。八に廣心、法界を了するが故に。九に巧心、病に應じて藥を與ふるが故に。十に常心、行斷せざるが故に。二に復次の下は十の三昧を教ふ、善知識を見るは、三昧に入りて佛菩薩の平等法身を知るを以ての故に。又三昧に依りて諸佛菩薩を見るを得るが故に、又摩耶は是れ三昧の境なるを以ての故に。初に總、次に別、後に結なり、竝に知んぬべし。

三に爾時善財答の下は、教に依りて善知識を求むるを明す、先に善財は前を領して後を問ひ、二に答言の下は、正しく教へて處を求む。摩耶の所在は十方に遍きを以ての故に、十方を禮して求めしむるなり。第四に爾時善財隨順の下は、勝れたる依正を見るを明す。中に於て先に依報を見る中に、古徳の云はく、「大蓮華地從り出づるを見る」とは、是れ所詮

の法界を大蓮華と名く、如の、心に從ひて顯るるを地涌出と名く」と。又釋すらく、「前  
 の城天等の三位は善財を調練して、心をして至りて徹せしめ、慧眼開くことを得て、方に  
 摩耶の實報の境界を見るが故に地涌出等と云ふ」と。四有り。一には蓮華、二には樓觀を  
 攝取法界法藏と名くるは、十方を攝取して各各法界を盡し、其中に蘊在するが故に藏と云  
 ふなり。古徳の云はく、「五位は自分と勝進の故に十千柱と名く」と。三には師子座、四  
 に於金鈴中の下は、音聲等の九種の法門を出して流化す。二に善財見此の下は、正報の身  
 を見るを明すに二有り。初に身相を見、二に身の業用を見る。初の中に三有り。初に總じ  
 て擧げ、次に正しく法果身雲を見、後に勝を結す。正しく見る中に就いて五十七種の法界  
 身雲有り、三に分つ。初の二十種は直に身の名を列ね、二に不去色身従り下の三十種は、  
 皆先に身の名を出し、後に身の義を釋す。三に如是色非色の下の七句は、世間五蘊の所攝  
 に非ずと簡ぶ。三に善財見摩耶の下は、其所現の殊勝の身雲を結す。第二に善財見如是等  
 の下は、身業の用を明す。謂はく、此身雲は能く衆生の十波羅蜜の行を増長す。然るに次  
 第せず、初に其檀行を長じ、二に出生の下は精進行を明し、三に知一切の下は忍行を  
 明し、四に具足の下は禪行を明し、五に皆悉嚴淨の下は方便行を明し、六に以明淨の下は  
 般若行を明し、七に淨佛道の下は戒行を明し、八に得淨法身の下は願行を明し、九に一  
 念充の下は力行を明し、十に如來智の下は智行を明す。第五に善財見摩耶の下は、見已り  
 て敬を致すを明す中に四有り。初に前の所見を牒し、二に身を變じて彼に等しく、三に禮

し已りて定を得、四に起ち已りて遷住す。第六に白言の下は講を申ぶる中に二有り。先に其本情を申べ、二に願爲の下は其爲に説かんことを請ふ。此門は是れ前の諸位の法を都會するを以ての故に、是故に初に文殊の教を擧げ、乃至今に於て大聖の所に至りて、總じて始終を叙し、同會平等ならんと欲するが故なり。

【賢劫の千佛】世  
 界の成立より破壊  
 する迄を成、住、  
 壞、空の四劫とす  
 今は住劫に出世す  
 る佛。

第四大段に答言の下は己が法界を示す、中に於て四有り。一に名體を標し、二に業用を明し、三に根原を辨じ、四に自分を結す。初の中に大願とは宿願力なり、此に由りて生に常に佛母と爲ること、『悲華經』に説くが如し。大智とは即ち般若を母と爲す。女とは是れ願智の所作をもて、佛を生ずるの義なり。謂はく、己身に於て小を壞せずして、而も廣く佛身を容れ、實に無生にして而も生を現す。天竺の本に云はく、「我菩薩の解脫に住するを大願智と莊嚴と名く」と。二に得此法門の下は其業用を明す、中に於て二有り。初に舍那佛の母と爲り、二に總じて賢劫の千佛の母と爲る。前の中に、長分に十有り。一に法を得て佛を生じ、二に光我身に入り、三に因に八相を見、四に身に十方を容れ、五に衆同じく胎に入り、六に胎内にて遊行し、七に又念念の下は十方同じく入り、八に悉皆容の下は大小無礙なるを明し、九に於此世界の下の十方を結通す。亦身を分たすとは、此處の身は即ち是れ彼身なるを以ての故に、分つことを須ひず。十に何以故の下は所由を釋す。謂はく、用を攝して體に歸するなり。二に總じて賢劫の千佛の母と爲る中に二有り。先に略して二百七十九佛を列ね、佛子如是の下は總じて千佛を結す。二に亦於十方の下は此處



【六】以下、第二に幻智念力の知識の文を釋す。  
【覺賢】 佛陀跋陀羅 (Buddhahdra)

を明す、佛母と爲りて自身を廢せず、十方界に於て衆生を教化す。三に法の根原を得るを辨ずる中に、先に問、後に答なり。答の中に六有り、一に往時の輪王、二に成佛せんと欲するに臨みて、魔來りて惱亂す。三に輪王は魔を降し、菩薩成佛し、四に願ひて其母と爲り、復多佛を供し、五に古今を結會するに、常に其母と爲る、六に廣く過現に十方の佛母と爲るを顯す。四に我唯の下は自分を結し、第五に勝進を推すること、知んぬべし。會緣入實相の知識の中に總門竟んぬ。

第二に幻智念力知識を明すとは、自下の九位の知識は皆是れ舊翻の于闐の本に欠くる所、應に是れ西域覺賢の略する所なるべきのみ。餘は日照三藏と共に天竺の譯本及び崑崙の本、并に于闐の別行の本を勘ふるに、竝に皆同じく此文有り。是を以て大唐の永隆の年に於て、西京の西、太原寺の三藏法師地婆訶羅、唐には日照と言ふ、京の十大德道成律師等と共に勅を奉じて譯補す、沙門復禮、親しく筆受に從ふ。文の中に亦三有り。初に法を擧げて修を勸むる中に、初に處を示す内に、何が故に此中に三十三天に上るとならば、是れ摩耶は化所を捨てて後、行きて住するが故に、人間の諸位の會相盡るの故を顯す。二に人を示す内に正念天王とは、大智自在を現じ、理に入りて忘れざるが故に、童女とは慈悲離染の故に、天主光とは淨の義、光明の義は是れ天の義なり、最勝の義、自在の義は是れ主の義なり、破闇の義、照現の義は是れ光の義なるを顯す。即ち悲智の勝用を顯し、以て斯名を立つ。三に問を教ふること知んぬべし。第二に教に依りて趣入し、及び第三に見て敬ひ、

請を申ぶる、竝に知んぬべし。誘誨と言ふは、梵本に依らば「應に善く能く、諸の菩薩等に教誡し教授したまひ、願くは我が爲に説けと云ふべし。第四に天女答の下は己が法界を示す、中に於て四有り。初に法の名體を標し、二に法の根深を顯し、三に法の業用を明し、四に己が自分に結す。初に菩薩解脫を得とは、人を以て法を簡ぶ、佛の解脫に同じからず、解脫は即ち是れ法門なり。無礙念と名くるは、憶念する所に隨ひて現前せざることを無きを、名けて無礙と爲し、所念分明なるを名けて清淨と爲し、佛境の具徳を念ずるを莊嚴と名く。宿命念智を以て體と爲す。二に善男子我念過去の下は、法の根深固なるを明す、中に於て二有り。初に所供の諸佛を明すに三有り。初に青蓮華劫を憶する中に、先に總じて供佛を明し、二に又彼の下は別して八相を記するに、念力分明なり。二に又憶の下は、略して九劫の中に供する所の諸佛を列ね、三に善男子の下は、總じて恆沙劫の中に常に佛を離れざるを結す。二に従彼一切の下は所得の法門を明す、中に於て二有り。先に總じて所得を擧げ、二に受持の下は修治の明淨を明し、三に如是先劫の下は、業用を明す中に、謂はく、此念力を以て前の諸劫、及び佛法を憶し、明了に現前して闇障有ること無きが故に以て此名を立つ。四に我唯の下は己が自分を結す。第四に仰推は知んぬべし。念力知識竟んぬ。

【七】以下、第三に幻智師範知識の中に、初に法を擧げて修を勸むる内に、童子師とは教導師範を顯すが故なり。遍友と名くとは、謂はく、遍く一切學類の衆生に於て、悉く師訓爲るが故

【七】以下、第三に幻智師範知識の文を釋す。

【八】以下、第四に幻智轉藝門の知識の文を釋す。

に以て名と爲す。二に教に依りて趣入する中に、先には得法の利益、二には是を體して辭退し、三には見て敬ひ請を申ぶること知んぬべし。四に答言の下は、應に己が法界を示すべきに、童子と法門同じきが爲の故に、是故に彼童子を示して、往いて之を問はしむ。又釋すらく、此童子は即ち是れ法門、以て名く、無二の故に。人法無礙の故に。

(八) 第四に幻智轉藝門の知識の中に、初の三は知んぬべし。四に時彼童子告の下は己が法界を示す、中に於て三有り。一には名體を標し、二には業用を顯し、三には自分を結す。初に善轉衆藝と名くとは、衆藝とは是れ所知所解の世間の伎藝、即ち文字等なり。善轉とは是れ能知、善は謂はく、善巧轉なり、謂はく、轉變は善巧の智、世の衆藝を轉じ、出世の般若を成するを以ての故に以て名と爲し、善巧の量智を以て體と爲す。二に我恆の下は業用を明す、中に於て三有り。初に總じて根本を擧げ、二に唱阿字時の下は、別して四十二門を顯す。初に阿字を唱ふる時、般若門に入るを威徳と名く等とは、梵語に威徳を阿答摩と名く、是故に世の阿字を唱ふ時、便即ち轉じて般若威徳に入る、阿の聲同じきを以ての故に。即ち此に彼を得る、以て難と爲すが故に。餘門は竝に皆多くは、悉なり、是の如く準釋して知んぬべし。三に善男子の下は總じて多門を結す。根本字と言ふは二義有り、此等の字は竝に是れ世の字の中の根本の字なるを以ての故に、此に依りて以て般若の門に入るが故に首と爲すと云ふ。理實には無量なり。二に此等の字を以て所依の根本と爲す、之に依りて以て般若の法門を顯す。三に我唯の下は自分を結す。第五に如諸菩薩の下は、

仰推勝進の中に二有り。初に總じて世と及び出世の二位の章門に通達するを標し、二に別して二門を釋す。先に世法を明すに十門有り。一に文字を知るは、前は此方に約す、此は殊方に通ずるが故に是れ所推なり。二に醫療を知り、三に珍寶を別ち、四に住處を相し、五に天地を觀し、六に能く人を相し、七に畜の音を解し、八に雲霞を別ち、九に豐儉を知り、十に安危を識る。如是の下は總じて世法を結す、皆是れ此に於て般若を顯し、但文字のみの知に非ず、是れ推なり。上來の諸位、善財の所求は此世法に於て茲に皆捨棄し、此をして悉く般若の法門と成らしむること、甚だ難しと爲すが故に、是故に之を示す。二に又能の下は出世の法を釋す。初に總じて所知の法を與ふ、謂はく、釋名出體なり。隨順修行と言ふは說法の意を明す。二に智入の下は能知の深證を明す、故に過失無し。我當の下は總じて分に非ずと結す。

【九】以下、第五に幻智無依門の知識の文を釋す。

【轉依】菩提涅槃の二果。

第五に幻智無依門の知識の中に、初に法を擧げて修を勸むる内に、婆坦那とは此には圓と云ふ、謂はく、具徳圓備し出生無盡の故に以て名と爲す。又調柔至順なるを以て餘位に超過するが故に賢勝と名く、二三は知んぬべし。第四に答言の下は己が法界を示す、中に於て亦三有り。一には名體を標し、二には業用を顯し、三には自分を結す。初の中に法門は梵に依らば那阿頼耶曼荼羅と名く。那とは云はく無なり。不なり。阿頼耶とは云はく依處なり。依止なり。曼荼羅とは云はく道場なり、圓場なり。謂はく、阿頼耶の染分の依處無くして淨分の圓滿道場有りて、勝徳を出生して窮盡すべからず、即ち轉依究竟し、



【二〇】以下、第六に幻智無著門の知識の文を釋す。

【二一】以下、第七に幻智光明門の知識の文を釋す。

德を顯すこと無盡なり。二に業用の中に、初の一句は業用の意を標す、衆生を利するが爲の故に既自等と云ふ。二に得無盡三昧等とは總じて擧げ、三に以能の下は別して十種の無盡を顯す。初の六は六根、後の四は勝德なり。一に明、二に通、三に德、四に光なり。三は自分を結す。五は勝進を推すること、竝に知んぬべし。

第六に幻智無著門の知識の内に、初に法を擧げて修を勸むる中に、城を沃田と名くとは、是れ南天竺は水に近く、下濕にして田稼甚だ茂るが故に以て名と爲す、下の海潮國と同じ、亦堅陂城と名く。人、所得の解脫に於て堅固安住するが故に堅固解脫と云ひ。又一たび得ば永く脱する故に堅固と云ふ。又所得の菩薩、眞實に解脫して更に所求無きが故に以て名と爲す。四に己が法界を示す中に三有り。一には名を標す、正念して現前する、所知障を離るるが故に無著と云ひ、煩惱障を離るるが故に清淨と云ふ。謂はく、理に順するの念は、二障を離へざるが故に以て名く。二に我自の下は法の具德備足し、求むる無きを明す。既に是れ因人ならば、何んが乃ち爾るを得ん。釋すらく、設ひ更に求むる所に異ならず、但須らく修行すべきが故に。無復求の下は自を結して勝を推す、竝に知んぬべし。

第七に幻智光明門の知識の内に、初の中に妙月とは、悲德清涼の故に以て名と爲す。上の文に云はく、菩薩清涼の月、畢竟空に遊ぶ一とは、此れ之謂ひなり。宅に光明有るは是れ法門の用なり。四に己が法界を示す中に名を標す、内證は障を離るるを淨智と爲し、後智は物を攝するが故に光明と曰ふ。又光明とは無明を對治するが故に。淨とは

【二二】以下、第八に幻智無盡門の知識の文を釋す。

【二三】以下、第九に幻智誠語門の知識の文を釋す。

惑染を治するが故に。餘の文は知んぬべし。

第八に幻智無盡門の知識の内に、初の中に城を出生と名くとは、城中に人物を出生するが故に。長者無勝軍とは、行徳超過するを名けて無勝と爲し、當體に徳を具ふるを、

喻に従ひて軍の如しといふ。下は己が法界を示す中に三有り。初に名を標す。無盡相とは、

所成の徳相、盡窮する無きが故に。二に我以下の下は業用を明すこと、知んぬべし。三に自分

分を結し、及び勝進を推す、竝に知んぬべし。

第九に幻智誠語門の知識の内に、初の中に聚落を法と名くとは、此に在りて法を弘むる

が故に。此れ即ち法を表すが故に。尸毘最勝とは、梵本に具に言はば、達磨濕毘阿羯と名

く。達磨を法と云ひ、濕毘は空營と云ふ、謂はく、軍衆の去りて後の空營の所の如し。阿

羯は最上と云ふ、應に最上法空營と云ふべし、營は即ち是れ聚落の處なり。處に従ひて以

て人の名を立つ。下は己が法界を示す中に三有り。初に名を標す。誠願語とは此に二義

有り。一は初發心に從ひて弘誓の言を立て、後に必ず言の如くに行じて先言に乖かず、故

に名く。二は菩薩行する時、眼を施すの時、「悔るや不や」を問ふこと有り、答へて「悔

いず」と言ふが如き、此言誰か信ぜん、即ち誓を立てて言はく、「若し實にして虚ならずん

ば、眼をして平復せしめよ」と言の如く、即ち羞るが故に誠願語と云ふなり。二に過去

の下は業用を明す中に、上の二義を釋す。先に初の義を釋し、二に我以住於の下は後の義

を釋す。能く行を成滿するを以ての故に。下は自分を結して勝進を推す、知んぬべし。

【二四】以下、第十に幻智歸幻門の知識の文を釋す。

【自性…云ふ】諸法の自性は有と空の二邊を離れ、また中にも止らざるが故に不思議といふ。

【五】以下、第三大段に攝徳成因相の知識（彌勒位）の

第二十に幻智歸幻門の知識の内に、初の中に城を妙意華と名くとは、梵には蘇滿那と名く。彼城門の側に此華有るを以ての故に、立てて以て名と爲す。此れ亦南天竺に在り、童子童女は智慧相資け、智は則ち徳に依りて起り、悲は則ち徳を纏で以て成ずることを表す、舊本に妙徳と名くるは此徳生に當れり。妙徳慧は此有徳に當れり。本語は室利末と名け、此には有徳と云ふ、室利末底は此には徳慧と云ふを以て、聲字相近きを以ての故に、二譯不同なり。下は己が法界を示す中に三有り。初に名を標す。幻住に亦二義有り。一に所知の諸法は縁に依りて虚に名を立てて幻住と爲す。二に能知の智は幻境の中に住す。此れ則ち幻に住するが故に幻住と云ふ。二に以斯の下は、業用を明す中に二有り。初に略して十種の幻住を知る。一一に皆先に名を標し、後に釋す。初の六は世間の法の幻住を知るに、一には總じて知り、次の二は人法の幻住を知り、次の二は三界の生滅幻住を知り、次の一は國土の幻住を知り、後の三は三乗の幻住を知る。初の一は二乗、次の一は菩薩、後の一は菩薩の所作なり。下は幻境を結す。自性不思議とは即ち有即ち空にして無二の故に不思議なり。又自性は二邊を亡じ、亦中に住せざるを以ての故に不思議と云ふ。下は推を結すること、知んぬべし。下は善財を利益す、亦見つべし。上來の十人は總じて第二の大段、會緣入實相の知識を明し竟んぬ。

大段第三に彌勒の位、是れ攝徳成因相の知識とは、前に既に縁を會して實相に入り、定んで成佛するに堪ゆるが故に、一生補處成因の義を辨す。五分は前に同じ。法を擧げて修



文を釋す。初に法を擧げて修せんことを勸むるの文の下。

【迷帝隸】 (Mainir) (viri)

【鷺子】 舍利弗。

【三に汝詣云云】 本文「汝彼に詣りて問へ」等の下。

を勸むる中に亦三有り。初に處を指し、二に人を示し、三に問を教ふ。初に處を指す中に、此は是れ南天竺は海岸に近きが故に海澗國と名け、天竺の本に海岸門國と名く。園林は徳を具ふるを大莊嚴と名け、林中に樓觀有りて、顯耀するを明淨藏と名く。梵本には毘盧遮那莊嚴藏なり。次に菩薩往昔の下は樓觀の因を出し、二に彼園林の下は正報を示す。彌勒とは梵語に具へば迷帝隸と名け、此には慈と云ふ、是れ其姓なり。姓を以て名と爲して、名けて慈氏と曰ふ。然るに三緣有り。一には本願に由る。謂はく、過去に大慈佛に値ひ、因て即ち發願すらく、「願くは我成佛して亦斯名を得ん」と。一二に三昧の名に由る。下に一彌勒を見るに、初に慈心三昧を得」と云ふ、因りて以て名と爲す。三には相に就いて名を立つ。母の懐く時に慈心有り。相師占つて曰はく、「懐く所の子の慈に由りて、母をして慈ならしむ」と。母鷺子を懐きて能く論義する等の如し。又阿逸多と名け、此には無勝と云ふ。生れて相好を具し、更に過ぐる者無きを以ての故に無勝と云ふ。下に其所作を數する中に四句有り。初に親眷屬を化し、二に餘人を化し、三に善財の爲にし、四に通じて一切の爲にす。三に汝詣の下は往を勧め、問を教ふる中に三有り。初に教起の十問、二に何以の下は廣問の所以を釋す。中に於て二有り。初に所求の彌勒の徳廣きを明し、二に善男子の下は彼能求を勧め、亦廣心を起す。前の中に二有り。初に通じて彌勒の徳成じ位滿するを顯し、二に別して彌勒は是れ汝が眞友なるを辨す。設ひ若し徳滿すとも己が有縁に非ざれば、亦求むべからざるを以てなり。二に善財の廣心を勸むる中に、初に略して



【三に是故善男子云云】本文一是故に：應に一向に諸の善知識」等の下

十事を擧ぐる中に、應に足るの想すべからず。二に何以故の下は所以を釋す。既に一の善根に於て足ることを生ぜず、未だ知らず、幾許を作さんや。釋して云はく、無量等なり。文の中に總じて八十句の無量有り、七に分つ。初に二十句は救生斷障行を明し、二に修淨無量の下の十句は、已心志根欲行を成じ、三に發起無量大精進の下の九句は、力用自在行を明し、四に悉分別の下の十句は、攝法治惑行を明し、五に詣諸佛刹の下の十句は、供佛攝生行を明し、六に不惜壽命の下の十句は、求法攝生行を明し、七に攝持の下の十句は、攝成菩薩深願行なり。三に略説の下の九句は、一切の無盡を結顯す。

三に是故善男子の下は正しく善知識を求むることを勸む。中に於て七有り。初に總じて敬求を勸め、二に何以故の下は、行は善友に因ることを明し、三に何以故の下は、友は能く行を成ずることを釋し、四に復次の下は、善友は要す勝るを顯し、五に又善男子の下は勝心を起こすことを教へ、六に何以故の下は勝想の所由を釋し、七に善男子略説の下は順友成益を明す。初の中に前に廣心を起こすを勸むるに由りて、是故に善友を敬求することを勸む。第二に何以故とは、但廣心を起こす、何んが善友を敬求することを須ひん。釋すらく、善友に因りて廣行方に成ずるを以てなり。中に於て四十句の行有り。初の十句は願行堅心行を明し、二に一切菩薩總持の下の十句は、備に勝德行を具することを明し、三に出生一切の下の十句は、攝法益生行を用し、四に遠離惡道の下の十句は、殊勝超過行なり。第三に何以故とは、何を以て此行皆善友に因りて成ずるや。釋すらく、善知識は能く

行人をして障を除き、行を起すが故に。中に於て三有り。初に能く障礙を滅し、二に示導の下は能く行位を成じ、三に滅一切の下は能く果を得しむ。第四に復次の下は善友要ず勝るを顯す、中に於て十句は喩に約して徳を顯すに、皆標と釋と有り、知んぬべし。二に是故の下は結勸す。第五に又善男子の下は勝心を起すことを教ふ、中に於て三有り。初の二十二句は善友に於て此勝心を起すことを教ふるに皆標と釋と有り、心善友を見るに堪へずんば法器と爲るに堪へず。二に又善男子應於の下は、三處に於て順法の想を生ずるを明す。中に於て初に十句有り。一一に皆三想有り、知んぬべし。三に善男子詣善知の下は結勸す。第六に何以故の下は、勝想の所因を釋する中に先に徴す。但し善友を求め、即ち行を成ずるを得ば、何んが此心想を起すべき。釋すらく、此直心を淨むるに因りて、方に善知識を見るに堪ふ、教に順じて善を増すが故なり。中に於て十句有り、一一に皆法と喩とを雙べ擧ぐ。第七に善男子略説の下は順友成益を明す、中に於て三有り。初に十重十不可説の順行を得、二に略説の下九句は、一切は善友に因りて滿することを結し、三に如是等の下の八句は、善友に依りて行を起すの義を明すこと知んぬべし。

【第二に云云】本  
文一爾時、善財是  
の如き等の善知  
識」等の下。

第二に善財聞如是の下は、教に依りて趣入するを明す中に、略して敬辭問法無し、後に至りて知んぬべし。第三に以過去際の下は、見て敬ひ請を申ぶるを明す、中に於て三有り。先に見、二に禮し三に請す。初の見る中に二有り、先に依報を見、後に正報を見る。前の中に三有り。初に勝念を起し、二に禮し觀察し、三に遶りて念讀す。初の中に亦三有り、

【三に稽首云云】  
本文一稽首し禮し  
畢りて敬ひ一等の  
下。

先に勝願行を念じ、二に作是念の下は信智轉増するを明し、三に善財如是の下は勝境を結觀す。二に五體等は、身禮智觀を明す中に四有り。初に法界の樓觀に於て三寶福田の想を起し、二に作是念の下は等しく樓觀を觀じて、三無性法界を照すことを明す。初に圓成性を觀じ、次に等觀如來除安等は遍計性を觀するを明し、後に等觀如影等は依他性を觀するを明す。三に深信の下は觀成の得益を明す、中に於て二有り。先に總じて信解す、謂はく、無性平等の理を觀見して、而も緣起の業果を失はざるが故に信解と云ふ。此中に七句有り、皆空無性にして、此に因りて彼を起す。二に解了廻向の下は別して解の益を辨する中に五有り。初に廻向の法を解し、二に捨離の下は倒執を離るるを明す。初に従自在而生とは是れ外道の、梵天、自在天等より諸法を生ずと執す。本有の實性次第に生ずとは二釋有り。一に是れ外道冥諦の中の本有の其性は、後に次第して出づ。二に是れ小乘一切有部の未來藏の中に、先に體性有り、次第して緣を待ちて生ず。三に離我が我所の下は大乗の正緣起法を明し、四に見有爲の下は空有無礙の法を見るを明し、五に悉知の下は法を見て實に稱ふを明し、多喻をもて證成す。四に善財禮未起の下は益の分齊を結す。

三に稽首畢の下は身を遶りて念讀するを明す、中に於て三有り。初に身業の遶旋、二に意業の念觀、三に語業の偈讀なり。第二の念に就いて八十句有り。一一に皆能住の行者の徳を擧げ、所住の樓觀を歎す。初の二句に具に除を顯すを以て並に之を略す、中に於て十に分つ。初は境に約して勝を顯し、二に住甚深の下は徳に約して妙を顯し、三に以一却の

【二に正報云云】  
本文「爾時、善財  
樓觀の諸の善直」  
等の下。

【覺城】涅槃の悟  
りを城に譬ふ。

下は用に約して自在を顯し、四に普照の下は行に約して勝を顯し、五に可尊重の下は對治に約して勝を顯し、六に住四禪の下は定の自在に約し、七に一切煩惱の下は利他の行に約し、八に得九次第の下は護小乘行に約し、九に觀陰の下は染淨無二の行を明し、十に如是の下は徳の住處を結す。三に語業の偈讚の中に五十五偈有り、七に分つ。初の二偈は總じて彌勒の徳勝るるを顯す。二に八偈有り、自行の勝るるを數す、三に九偈有り、利他の勝るるを數す。四に八偈有り、功徳の勝るるを數す。五に九偈有り、方便の勝るるを數す。六に十一偈有り、三昧の勝るるを數す。七に後の八偈は願行の勝るるを數す。二に正報を見る中に三有り、初に見んと欲し、二に遙かに見、三に徳を數す。從外來と言ふは、攝化は機に就くが故に、還り來りて本に歸するが故に。威徳の下は徳を數する中に、初に挺特普照、二に世の塵染を超え、三に深入の下は、徳は因果に齊しく、四に住大智の下は受位灌頂を數す。二に敬を致し、三に請問すること竝に知んぬべし。

第四に爾時彌勒の下は己が法界を授く、中に於て二有り。初に善財の法器利益を數じ、二に正しく己が法界に入らしむ。前の中に六有り。初に己が眷屬の爲に善財の徳を數じ、人をして敬智せしめ、二に正しく善財の爲に徳を數じて喜ばしめ、三に文殊に歸するを勸めて彌勒攝受し、四に善財自ら慶び重ねて彌勒に請し、五に彌勒は偈を以て重ねて善財を數じ、六に共に無盡の大菩提心を數す。初段の中に就いて文に八有り。初に大衆に指示し、二に善財の精進の徳を數す。頻陀伽羅は是れ猶し覺城のごとし。百十とは古師に三釋有り。



【第二云云】本文  
「善財、汝今最大の  
利を得て」等の下

一に云はく、「上來此に至るに應に一百一十有るべし、但し文の中に脱漏するが故に具に列ねず」と。一に云はく、「上來列ぬる所は是れ正の善知識なり。若し通じて主伴方便導引等を取らば百一十有り。是故に上の文は未だ缺けず。満足王及び大光王等を見るは、前に皆漸く人衆聚落城邑曠野等を遷ると云ふ。故に知んぬ。通じて所遷の處を取らば百一十有るなり」と。一に云はく、「信等の五位を即ち五十と爲し、後の摩耶、彌勒、文殊、普賢、及び佛とを五十五と爲し、各自分と勝進と有るが故に百一十有り」と。此等は竝に舊經足らざるが爲に此諸釋有り。今既に文具す異釋するを勞せず、此は是れ前後の知識を總括するに、五十四位有り、徳生童子及び有徳の童女を分てば即ち五十五人と爲る、各自分と勝進と有るが故に百一十有り。三に如是童子の下は、善財の直に大乘を學する徳を歎す。文の中に十句有り、文は知んぬべし。四に如是之人の下は行勝れて希有の徳有るを歎す。中に於て二有り、先に標、二に何以の下は釋成す。釋成の中に三有り。初に總釋し、二に度無智海の下は別して釋し、中に於て二十一種の衆生を化す。三に救護は總じて結釋すること知んぬべし。五に諸善男子の下は善財の菩提心の希有の徳を歎じ、六に諸善男子若有菩薩の下は、善財の勝軌爲るに堪ふる徳を歎じ、七に此童子有入威儀の下は、善財の海の如き深廣の行を歎じ、八に顯現一切の下は一切處に遍く修行するを明す。

第二に善財汝今得の下は、正しく善財の爲に徳を歎じて喜ばしむ。中に於て四有り。初に善財の本文殊に見るの益を歎す、中に於て先に總、二に所謂の下は別して惡導等を遠離

し、十信に入るの益なり。童蒙地に過ぐとは十住に入るの益なり、功徳地に住すと十行十向に入るの益なり、智慧地を具すとは十地の益なり、下は勝進して佛智に入るの益を明す。二に若能如是の下は、善財の、功徳雲等已後の諸の善知識に見るの益を歎す。中に於て初に總じて勝入に見るの益を辨じ、二に隨彼の下は別して妙法を聞くの益を顯し、三に善財汝應發大の下は、善財の超劫速成の行を歎す。中に於て初に總じて、得果の速なるを擧げ、次に別して修因の速なるを顯す。謂はく、進行は群を超ゆ、餘の菩薩は隨位差別に約して説き、一生皆具とは普門該攝に約して説く。又此一生に亦多劫を攝す、上の仙人手を執るに多劫の行を成する等の如し。又此れ普賢の法は、圓融相攝して、一位は即ち一切なるが故に一生に皆得と雖も、然に亦要す直心に精進するに由りて方に速かに成ずることを得。直心とは心中に異念を雜へざるが故に。趣入猛威の故に。精進とは心に稱うて作すが故に。後に其有の下は利益を成するを歎す。四に善財當知の下は普行希逢の徳を歎するに亦二有り。初に行の希成を歎す、謂はく、過去の佛、往昔修行の時、一生の身に爾許の善知識に逢ふを得ること有ること無ければ、是故に汝今極めて希有なりと爲す。二に其有衆生の下は亦利益を歎す。

第三に爾時彌勒の下は文殊に歸することを勸む。彌勒の攝受に、中に於て五有り、初に文殊に往き、二に善財悲泣して以て深恩を念ずるが故に。三に文殊に璣珞を授け、四に善財奉散す、智を以て導きて、福行を成せしむるを明すが故に。五に彌勒の摩頂は加持攝受

【第三に云云】本  
文「爾時彌勒善  
財に告げて」等の  
下。

【第四に云云】本  
文「爾時、善財師  
躍一等の下。

【第五に彌勒云云】  
本文「爾時、彌勒  
……大衆に指示し  
て一等の下。

【第六に云云】本  
文「爾時彌勒：善  
財の諸の妙功德一  
等の下。

【五鈍使】貪、瞋、  
癡、慢、疑の五類  
滿。物象に對して  
起すものにて性鈍  
し、故に名く。

の義を明す。第四に爾時善財の下は、善財の自ら慶び、重ねて請することを明す中に、先に偈を説いて自ら慶び、後に敬を設けて重ねて請す、中に於て三有り。初に總じて敬請し、二に大聖の下は徳を敷じて請す。中に於て初に行位の成滿を敷じ、次に爲煩惱の下は攝生濟物の徳を敷じ、三に唯願の下は請を結す。第五に彌勒、偈を以て重ねて徳を敷する中に六十八頌有り、六に分つ。初の一は總じて専求を敷じ、次に十偈有りて別して善來を敷じ、次に八偈有り、其來意を敷じ、次に十偈有り、行位の成立を明し、次に二十二偈有り、利他兼ねて自行を敷す。下に十七偈有り、自他の行を雙に結す。第六に爾時彌勒の下は、廣く菩提心無盡の徳を敷する中に四有り。初に前を結して後を生じ、總じて發心を敷じ、二に汝得善利の下は十種の善利を得るを敷じ、三に何以故の下は廣く發心の功德を顯すに二百一十八句有り、初の一百一十五句は、菩提心の殊勝の功德、高く佛果に齊しきを明し、二に譬如有人得自在樂の下は一百三句有り、菩提心自在の功德、廣多無量なるを明す。前の中に光統師に依らば分ちて十二住に配し、科して十二段と爲す。今謂はく、此中の一一に各菩提心を顯す中に、一種の勝徳は皆始終に通ず、此れ亦別して諸位に配すべからず。一、一皆世論に約して徳を顯す、準釋して知んぬべし。天徳觀とは、中に於て案むる所、悉く皆得るが故に。如意珠の如し。恆婆とは此には鷓毛と云ふ、此を以て衣と爲せば、水に澆るとも著かず、菩提心の塵垢に染せられざるに喩ふ。七使とは貪等の五鈍使と復身邊の二見を取るが故に七と爲す。波羅提毘叉藥とは此には登照藥と云ふ、毘樓那風とは應に是



【身邊の二見】五  
見の中。二。身見  
とは假和合のもの  
を實有と思ふ見解  
邊見とは死後、此  
我は斷滅すとし、  
又は常住不變なり  
と執ずる見解

れ毘嵐風なるべし、此には旋猛風と云ふ。因陀羅火とは、次の佛子菩提心者如是の下、其  
功德等を結し、於因果の下は釋す。菩薩の諸位の功德、及び佛果の功德は、竝に皆此心中  
從り出し生ずる所なるを以ての故に。是故に此心は彼に等うして出る所なり。第二に善男  
子譬如有人得自在樂の下は、菩提心の功德、廣多無量なることを明す。中に於て一百三句  
有り、亦諸徳有りて十地に配して之を分つ。今亦通じて辨す。一一に各一徳を顯し、皆  
先に喻、後に合なり、準釋して知んぬべし。此れ説者と聽者、俱に是れ大人にして皆廣  
く見るを以ての故に、是故に所擧の譬喻、多くは人間の所有に非ず。頻伽陀樂とは具に毘  
嵐摩と云ひ、此には除去と云ふ。謂はく、能く毒患を除去する故に。刪陀那大藥王樹とは  
此には續斷藥と云ふ、謂はく、此藥樹は能く、所傷の骨肉等をして皆復續くことを得しむ  
るが故に云ふ。藥草を阿藍婆と名くとは、具には阿羅底藍婆と云ひ、此には得喜藥と云ふ。  
謂はく、身に塗れば、身の患心の惡をして、皆止めて悦びを生ぜしむるを得るが故に、以  
て名と爲す、憂陀伽婆羅旃檀とは具に地毘鳥羅伽婆羅と云ふ。地毘は此には妙と云ひ、鳥  
羅伽は此には腹行と云ふ、即ち龍蛇の類なり。婆羅は此には勝と云ひ、亦堅固と云ふ、謂  
はく、此旋檀堅固にして、勝出して龍宮に在るが故に以て名と爲す。波利質多樹は正し  
く波喇耶咄羅拘毘陀羅と云ひ、此には香遍樹と云ふ。謂はく、此樹の枝葉實、一切皆香る  
が故に此名を立つ。又此樹の香氣は切利天處に於て、一切普く熏するが故に香遍と名く。  
那利羅樹とは具には捺喇羅吉喇と云ひ、此には葦等有功樹と云ふ。捺喇は此に葦と云ふ。



羅は是れ多の聲、謂はく、葦等枝葉華果なり。吉喞は此には能作と云ふ、謂はく、此樹莖等悉く用有りて衆生を益するが故に。此樹は海中より出で、其形甚だ高く、多羅樹に似て、其葉甚だ美なり。中に汗有り、耶子樹に似たり。阿羅婆葉とは具に呵吒迦阿羅婆と云ひ、此には金光汁藥と云ふ。呵吒迦は金光明と云ひ、阿羅婆は汁藥と云ふ。山中の井の内より出で、諸龍守護す、若し飲むを得ること有らば皆仙人と成る。迦毘伽鳥とは具には迦羅頻伽と云ひ、此には美音言鳥と云ふ。謂はく、迦羅は美音と云ひ、頻伽は語言と云ふ。謂はく、雪山中の一切の鳥音は皆悉く及ばず。又卵中に在りて即ち能く聲を出す。阿夜健多鐵とは、具には阿夜塞建那と云ふ、請はく、阿夜は此には鐵と云ひ、塞建那は此には勝伏と云ふ。謂はく、此鐵は能く餘の鐵を伏碎するが故に、勝伏鐵と名く。摩伽羅魚とは此には極大の魚と云ふ、謂はく、是れ巨鱓魚なり。四に善男子の下は前の功德廣多無量なるを結す、初に通じて擧げ、後に別して結す。善財何が故に此に在りて廣く菩提心を歎ずとならば、是れ位の終極なるを以ての故に、功成り徳立つ、本の大心に由るが故に須らく歎すべし。

【第二大段に云ふ】  
以下、正しく己が  
法界を授くる文を  
釋す。本文「善男  
子」云何が菩薩一  
等の下。

第二大段に善男子汝先所問の下は、正しく己が法界を授く、中に於て四有り。一には法體を授け、二には法の名を顯し、三には來處を辨じ、四には本處を明す。初の中に五有り。先に攝入の方便なり、中に於て二句有り。初に問を釋して入るを勸め、其をして證に趣かしめ、二に其門を聞かんことを請うて求證の方便と爲す。二に彌勒彈指の下は加して入證

せしむ。謂はく、若し因力に就かば即ち是れ善財無間道を修し、妄想を斷除して、所證の理現するを、名けて門闢と曰ひ、解脫道の中に正しく法界を證するを、名けて即入と爲す。若し緣力に就かば、即ち是れ彌勒の加持なり、今は緣力に約して説く。證し已りて本來性満じて新に得るに非ざるを反顯するが故に、更に入處の門無きが故に還閉と云ふ。又一たび證して永く得て、退失有ること無きを以て、更に復出づること無きが故に還閉と云ふ。三に爾時善財觀察の下は、證所見の境を明す、中に於て五有り。一には依報を見、二には正報を見、三には諸佛を見、四には法音を聞き、五には出生を見る。初に依報の淨土を見るに、先に見、後に益なり。見る中に、此は是れ彌勒の實報所成の樓觀なり。次に内に於て百千の樓觀を具すとは、一土は即ち一切土にして主伴具足するを明す。二に爾時善財見の下は得益を明す、中に於て先に心喜障除るの益、後に身は樓觀に遍する益なり。二に又見無量の下は、正報の因果を見ることを明す、中に於て六有り。初に總じて本縁を擧ぐ。初に發心の時、二に或見初得慈心の下は、發心已後修行得記の時を見るを明し、三に或見爲輪王の下は、本生の隨類生身を見るに十三種有り。四に或爲四天王眷屬の下は、本生の說法益物を見るを明すに十種有り。五に或見滿足の下は、本行成滿の德を見るを明し、六に或見正受の下は、業用自在の德を見るを明す。中に於て先に毛孔より身雲を出し、後に復見の下は、毛孔より法門を出すことを明す。三に或於樓觀見諸如來の下は、諸佛攝化の德を見るを明す、中に於て三あり。先に總じて通じて見、後に爾時善財置樓觀中の下は、

別して八知成道して攝生するの相を見る。自在力無障礙なるを以ての故に一の中に見るなり。三に善財自見の下は、所見の利益を結す。四に又聞の下は法音を明す、中に於て二有り。先に五種の法音聲を聞くに、一に總じて所聞の行法音を辨ず。謂はく、金鈴の中の聲、及び餘の嚴具も亦此音を聞く。二に初發心の聲を聞き、三に成正覺の聲を聞き、四に財と法の二施の聲を聞き、五に成佛攝生の聲なり。二に聞如是等の下は聞聲の益を結し、十種の行間を得ること知んぬべし。五に見寶鏡中の下は出生を見るを明す、中に於て六有り。初に寶鏡の中の三世間を見るに、初に智正覺を見、次に淨世界の下の器世間、次に又見の下は衆生世間を見る。二に又寶柱の中の光網を放つを見、三に珠瓔珞瑠璃の、水及び光を出すを見、四に華中の人物を見、五に寶樹の中の凡聖を見、六に半月像中の行用を見る、中に於て十四種有り。一に放光、二に彌勒の本行の施行を見る、餘の十二種の現身化導は知んぬべし。又釋すらく、前に通じて總じて七種の法門有り。一には鈴に音聲を現する法門、二には鏡に形相を現する法門、三には柱に住持を現する法門、四には瓔珞に莊嚴を現する法門、五には華に開敷を現する法門、六には樹に建立を現する法門、七には半月に住位起行を現する法門なり。四に彌勒告の下は、問答して辨定する中に三有り。先に問、次に唯然答、三に譬如の下は其見を辨定す、中に十喻有りて顯示す。一は夢に山海を見るの喩は、善財の妄を超え、勝境を見るに喩へ、二に臨終業現の喩は、難思の境、冥に現するに喩へ、三に非人所持の喩は、加持して勝法を見るに喩へ、四に龍宮奄久の喩は、



【第二に云云】以下、法の名を顯す文を釋す。本文「爾時善財白して言さく」等の下。

【第三に大聖云云】以下、來處を明す文を釋す。本文「大聖何れの處」等の下。

長劫を須臾と謂ふに喩へ、五に寶藏廣現の喩は、一の中に多事を現するに喩へ、六に遍處の定境の喩は、勝境は心に隨ひて現するに喩へ、七に乾城無礙の喩は、所見の無礙の法に喩へ、八に昇天見人、喩は、所見の法に於て自在を得るに喩へ、九に海に三千を現するの喩は、所見明了に德に喩へ、十に幻現無礙の喩は、威力は奇を現するの德に喩ふ。五に爾時彌勒の下は威を攝して起たしむ、中に於て三有り。初に威を攝して警起し、二には先に所見を問ひ、三には實に稱うて答ふること竝に知んぬべし。法體を授け竟んぬ。

第二に法の名を顯す中に、先に問、後に答なり。前際を攝するを以ての故に入三世智と云ふ、此れ則ち九世の中の三現在なり。正念思惟とは、能見の智の明了無倒なるを顯し、莊嚴藏とは、所見の境の具徳含藏を明す。即ち樓觀の中に一切の劫、一切の刹を攝し、各各勝徳を具して皆出生有るが故に此名を立つ。又此人の位極まるを以て、我は唯此を知ると言はず、又是法行圓滿するが故に、是の如き等の不可説の法を得と云ふ。第三に大聖の下は來處を辨す、中に於て二有り。先に依報を明すに、初に問、後に答なり。問の意に云はく、此小樓觀の内に爾許の奇特の事か有る、是れ外從り入り來るとや爲ん、爾らずとや爲ん。答の中に二喩有り。先には神力出生無漏の喩を明し、二には智願所現無本の喩なり。二に善財自言の下は、正報を顯す、中に於て二有り。先に問、後に答なり。問の意は、前に彌勒外從り來るを見て、來處を知らざるが故に問ふなり。答の中に三有り。初には實に就かば趣無し、二には行に従ひて有と説く、三には事に隨ひて來を辨す。又釋す



【第四に生處云云】  
以下、生處を明す  
文を釋す。本文善  
財自して言さく、  
「生處と爲す」等  
の下。

らく、初は法身に約し、次は報身に就き、後は化身に約す。又初は體、次は徳、後は用なり。初の中に就いて十句の無趣有り。趣とは是れ處の義なり、謂はく、從來するに處無く、亦所至の處も無し。又趣は是れ向の義なり、亦來去發趣無きが故に。二に善男子の下は行に従ひて有を説く中に、法身は縁に隨ひ行に従ひて趣と同等とを説くを明す。淨名に云はく、「吾道場従り來り」と、相有るに似たり。七句有り、一に悲、二に戒、三に願、四に通、五に體、六に用、七に化なり、知んぬべし。三に汝所問の下は、事に隨ひて來を説く中に、海湖の樓觀は是れ修道の處、摩離國は是れ木生の處なるを以て、暫く生處に住す、化人の故に彼従り此に還る。摩離とは具には摩羅底數と云ふ。摩羅は此には鬘と云ひ、底數は此には中と云ふ。謂はく、鬘中國は此れ摩羅耶山に近きが故に名相同じ。瞿波羅は此には守護地と云ふ。

第四に生處を明す中に二有り。先に問、後に答なり。問の意は、前に既に前の生處より來ると云ふ、未だ知らず、何者が是れ菩薩の生處ぞ。答の中に二有り。初に法の家に依て行徳を生ずる處を明し、二に事の家に依りて化身を生ずる處なり。前の中に五有り。一には所生の處を顯し、二には生縁の眷屬、三には按量して勝るるを顯し、四には所知の自在、五には體用廣大なり。初の中に、十種俱に是れ行を生起する處なるが故に。一に行因、二に行縁、三に行相、四に顯扶、五に化他、六に理を觀じ、七に事に隨ひ、八に物を益し、九に無住、十に古に順ず。二に善男子の下は、生縁の眷屬を明す中に二十句有り。初の七

は生育を明し、次の四は長益と爲し、餘の九は成立と爲す、太子に同じて知んぬべし。三  
 に如是菩薩超凡の下は、校量して勝るるを顯すを明すに十句有り。初には凡を超えて性を  
 證す、是れ總なり。生如来家の下は別の九句なり、知んぬべし。四に摩訶薩生如是家の下  
 は所化自在を明す、中に於て七句有り。一に趣空を知りて受生を現じ、二に趣化を了し、  
 染に在りて著無し、三に無我に達して衆生を化し、四に生死を了して長時を能くし、五に  
 陰幻を知り、六に一切法を了し、七に法身離染を得。五に善男子我淨法身の下は業用の廣  
 大を明すに十句有り。初の一は法身は法界に充つ、餘の九德は身、法界に滿つ。二に若諸  
 同行の下は事家に依りて、化身を生ずる處を明す、中に於て三有り。初に人中に生ず。拘  
 提緊落とは其には拘吒迦羅と云ひ、此には樓觀と云ふ、即ち次前の文に樓觀緊落と名く。  
 三類の衆生と爲る、一には同行の爲にし、二には慢を滅せん爲に、三には父母等の爲に。  
 二に兜率に生じては四種の衆生と爲る。一には彼天を化せんが爲に、二には一生を集めて  
 法を説き、三には宿世の同行を化し、四には佛の所化を聞く。謂はく、釋迦の遺法の、所  
 化の衆生の根、未だ熟せざるが故に、華の未だ開かざるが如し。又利益未だ得ず。亦華の  
 合するが如く、彌勒佛を待ちて、其をして開發せしむるが故なり。三に下生成佛して汝及  
 び文殊俱に我を見んとは、釋するに三義有り、一に云はく、「我當來成佛の時、亦此華嚴を  
 説く、彼時にも亦文殊善財所説の法有るが故に云ふなり」と。二に云はく、「我成佛する時、  
 汝と文殊と俱に來りて我を助けて法化を宣揚す」と。三には法を表すと爲す。謂はく、善

【二六】以下、智照無二相の知識の文を釋す。

【普門】一門のなかに一切を攝するをいふ。

財何が故に上に佛會に於て俱に諸の善知識を求めて、而も佛を求めざるは、善財の此生は是れ修因の身にして、未だ果を成ぜざるを以ての故に佛の所に至らず、求めずと謂ふに非ず。但し果は因を隔つることを成するが故に當見佛と説く、是れ滿位なるを以ての故に仰推等無し。上來は攝徳成因相の知識竟んぬ。

第四に智照無二相の知識とは、前の因法は果を生じ、體は無分別にして境智等の諸の二相を絶するを顯すが故に。初に法を擧げて修を勤むる中に、初に住を勤めて問を教ふ、位極まれるを以ての故に問を教へて普賢の行を具足せしむ。二に彼當の下は徳を數じて往を勤む、中に於て二有り。初に通じて勝徳を顯すに、先に微責し後十句は釋成す。一には能く他行を滿じ、二には佛母と爲り、三には菩薩の師、四には勤めて生を化し、五には大名聞、六には大法師、七には佛の所遺、八には深智に住し、九には多劫修し、十には普行を滿す。二に善男子の下は別して其れ是善財の本縁を數す、中に於て三有り。初に善財所成の功徳は皆文殊の力なることを明し、二に是故の下は勸を結して住かしめ、三に何以故の下は所由を釋顯す、是故に上來の所見所成は皆是れ文殊なり。二に時善財の下は、教に依りて趣入することを明す、中に於て三有り。初には敬を設けて辭退し、二に爾時の下は諸に造りて其處に詣づ。今彌勒に從ひて却て文殊に向ひ、還りて百二十城に行く、故に知んぬ。初より彌勒に至るまで、定んで百十を還るが故なり。普門に至るとは別を攝して普に歸するが故に。謂はく、前の諸の差別の位を攝し、此文殊の普門に歸するが故

なり。三に觀察の下は念を起して推求す。此中漢本の經には十七行の文を欠く、今梵本を勘へて竝に翻袖し訖んぬ。三に作是念時の下は正しく證法界を明す、智照無二平等の義を表すを以ての故に、見敬申請等無し。中に於て、初に手を申べて頂を摩す。過一百一十由旬と言ふは、前の如く差別の位を徹過して、此平等普門所に至る。善財の頂を摩するは、普法を以て其頂に灌ぐを示す。二に而作是言の下は教悔を語示するを明す、中に於て二有り。先に所作の所闕くるを擧げ、後に理に入る能はざるを顯す。則ち善財に此失無きを顯すが故に能く斯法を得。前の中に十句有り。一には信根無き者は行の本なるを以ての故に。二には沒憂海とは行は必ず發さざるが故に。三には初行具せずとは加行を修せざるが故に。四には已に精進を起すも竝に退失するが故に。五には多行を期せざるが故に。六には一に於て住著するが故に。七には善く菩薩の行願を發起せずとは、此中の二句、一には發願せず、二には行を起さず。九には善友に護せられず、十には如來に念せられず。二に是等の下は、理に入る能はざるを明すに十三句有り。初の四は所知の理法を擧げ、二に若周遍の下は不能知の分齊を顯し、三に是文殊の下は所成の益を明す、中に於て二有り。初に讚慰して喜ばしめ、二に令得の下は得法を明す。中に於て初に廣多差別の法を得しむるに七句有り、知んぬべし。二に復令得入の下は、普賢廣大の法を得しむ。四に既置の下は、用を攝して本に歸するを明す、普賢の道場は是れ文殊の自所住の處なるを以て、還りて善財を安んじて此處に置き、己が所得に同じうす。所作既に畢んぬ、是を以て現せざる



【七】 此下、第五に顯因廣大相の知識の文を釋す。

【通行眞如】 十眞如の一。十地の中初地にて證する二空の眞理をいふ。

なり。五に於是善財の下は成徳究竟を明す、中に於て初に廣く勝女を見るに、皆能く教に顯す。其行緣を明すに行緣既に多し、成徳少に非ざることを明す。増長の下は所成の徳を顯すに十句有り。一には悲智の徳を成じ、二には寂用の徳、三には深廣の徳、四には正勤の徳、五には證教の徳、六には行願の徳、七には照境の徳、八には破障の徳、九には成位の徳、十には修普の徳なり。智照無二相の知識竟んぬ。若門に當り竟んぬ、白下は普賢の法界門に當るが故なり。云云。

第五に顯因廣大相の知識は、前の照理無二にして甚深を顯すを以て、方に成佛廣大の因たるに堪ゆるが故なり。中に於て三有り。初に法を擧げて修を勧め、二に教に依りて趣入し、三に正しく法界を證す。初の中に聞普賢名等とは、是れ何の處にか聞く。謂はく、前に文殊は言聲説の故に。又亦是れ前の、文殊の善財を普賢道場に置かしめらる。是故に彼に於て此名等を聞くなり。中に於て、初に總じて普賢の徳位を顯し、二に地具の下は別して普賢の地位を辨ずるに十句有り。一に地具とは助道法等なり。又釋すらく、信等の十行、地法を成すと爲す、二に地法とは諸地の所行の法なり、初地の十願、二地の戒法等の如し。三に地得とは諸地所得の果なり、謂はく、調柔等なり。四に地の次第とは、諸地連接する等なり。五に地修とは、諸地の中の不住の道、仰いて上地を修する等、又是れ一攝論の中の五修等なり。六に地住とは功德住處の故に。又證智相應の故に。七に地境界とは二諦を境と爲すが故に。又遍行眞如等を所證の境と爲すが故に。八に地持とは、所餘の

諸の功德を任持するが故に。又「瑜伽」の三持の中には是れ圓滿持の故に。九に地共とは三種の同相智なり、諸地同行の故に。十に地正道とは、根本と後得の二智を體と爲すが故に。

【二に爾時云云】  
以下、教に依りて  
趣入する文を釋す

二に爾時善財の下は、教に依りて趣入する中に四有り。初には勝心を起し、二には瑞應を見、三には光相を見、四には所見を結す。初の中に十種の心を起すとは、此十心の境は、竝に是れ普賢の境界なり、是故に起心還りて彼境に稱ひ、方に普賢を見ること得べきが故なり。二に十瑞應を見る中に、先に得見の所因を明すに、自他の二力有り。十瑞相とは、謂はく、普賢の依報を見るなり。中に於て攝して五對と爲す中に、先に土の淨を明し、後に住處衆生淨なり、竝に知んぬべし。三に十光相を見るとは、謂はく、普賢の正報の相を見る。又前は但し直に見、此中には重ねて見る。又前には靈相の見、此中には微細の見なり。又前には但其體を見、此中には業用を見る。中に於て十有り。初の二は但光明を放ち、次の四は放光靈供具、後の四は人物の利益なり、知んぬべし。四には前の所見を結し、普賢を見んと欲す。

【三に爾時云云】  
以下、法界を證す  
る文を釋す。

三に爾時善財の下は正しく法界を證するを明す、中に於て八有り。一には身を見て益を得、二には摩頂して益を得、三には因深くして果厚く、四には益を擧げて觀を勧め、五には觀見奇特の益、六には所得を校量し、七には佛果に齊しきを結し、八には偈頌因果なり。初の中に二あり。先に所見の法身を明し、後に見已りて益を得るを明す。前の中に四有り。

【初の中云云】以  
下、見身得益の文  
を釋す。

【風輪】三輪の一  
此世界の最下を風  
輪とし、其上に水  
輪ありて九山八海  
ありといふ。

一に總じて普賢を見、二に別して毛孔を觀じ、三に重ねて支節を觀じ、四には十方に遍き  
 を結す。初の中に前の十心の所念に依り、境に稱うて見るに、初は前の第一心に依り、道  
 場如來の前に在るを見るとは、普賢は佛果に齊きを表すが故に。因果の位同じきが故に。  
 二に心如虚空とは第二心に依りて見、三に無染著とは第三心に依りて見、四に障を除きて  
 刹を淨むとは、第四心に依りて見、五に無礙法を以てすとは前心に同じ、六に十方に充滿  
 するも亦同じ。七に一切智に住すとは、第七に薩婆若の境を得る心、八に諸法界に入ると  
 は是れ深く法海に入るの心、九に教化衆生とは、是れ衆生を教化し成脱するの廣き心、十  
 に一切劫の下は、前の最後に因果を具する心を明し、亦前の莊嚴道場心を攝す。二に毛  
 孔の業用を見るを明すとは、前は亦初に總じて淨土を見、後に聲中の業用を見る、亦先に  
 總じて正報を見、後に毛孔の作用を見る。中に於て二十種有り、五に分つ。初の一は光は  
 法界の衆生を救ひ、次の五は法界の供具を出して諸佛を供養し、次の四は法界の身雲を出  
 して衆生を利益し、次の三は法界の土を出して衆生を調伏し、後の七は法界の菩薩、諸佛  
 の雲を出す。三に重ねて支節等を觀する中に、初に一三千界を見、次に十方の下は通じて  
 十方世界の風輪等を現じ、皆悉く現顯す。四に如此娑婆の下は、十方を結通する中に四  
 重の普遍有り。初は舍那を擧げて賢首を結し、二には賢首を擧げて東方を結し、三には東  
 方を擧げて十方を結し、四には十方を擧げて微塵を結す。是故に當に知るべし、前は則ち  
 身中に法界を苞容し、廣くして無邊なるが故に、其普の義を顯す、今は則ち此法界を含む



の身、微塵に潛入して、調柔無礙なるを明して、其賢の義を明す。是れ則ち内外周遍し、限量斯に盡くるが故に名く。二に爾時の下は善財の得益を明す中に、初は總じて見に因りて得る所を擧げ、究竟位の中の智なるを以ての故に不可壞と云ふ。下は別して十智を顯す中に、初の四は身は見聞に遍く、後の六は智の内に充實す。初の五は是れ佛智、後の一は是れ普賢の智なり、竝に知んぬべし。

【第二に摩頂云云】  
第二に摩頂得定の文を釋す。

【第三に云云】  
以下、因深く果厚きを明す文を釋す。

【第四に云云】  
以下、益を擧げ觀を勸むる文を釋す。

第二に摩頂して定を得る中に二有り。初に此處一世界の中の摩頂の益を明すに、先に摩頂、次に得定の中に三有り。初に定數を擧げ、二に眷屬を攝し、三に定用成益を明すに、八句の所益有り、知んぬべし。二に如此の下は十方世界の佛果の摩頂の益を結通して之に同ず、善財は普賢に等きを以ての故に同じく十方に遍するなり。第三に爾時普賢の下は、因深くして果厚きを明す中に三有り。先に問答して見を審にし、二には因の深遠を明し、三には因は果を成するを結するを明す。因の中に就いて、初に所修の行に四句有り。初に總じて多劫修を明し、二には修菩提心を明し、三には家に在りて施を修するの行、四には出家修道の行なり。二に善男子の下は十句の行を結して、説の不可盡を明す、知んぬべし。三に善男子我得の下は、因は果を成するを結す、中に於て先に因は成果の功有るを結するが故に力と云ふ。十句有り、知んぬべし。二に得是力の下は所成の界徳なり、中に於て初は了因に由りて、法身の果を得、後は生因に由りて色身の果を得。第四に汝且觀我的下は、益を擧げて觀を勸むるを明す、中に於て二有り。初に總じて聞見の難きを明し、二に別し



【第五に云云】以下、奇特を觀見する文を釋す。  
【第六に云云】以下、所得を校量する文を釋す。

【第七に云云】以下、位滿じ佛と齊しきを明す文を釋す。

【第八に云云】以下、偈頌を釋す。

て不退の益を成ず。中に於て五句有り。一には聞名の益、二には見等の益、七種の相有ること知んぬべし。三には思念の益、先には時に約し、後には生に約す。四に以如是の下は總じて益用を結す。五に轉生の益を明すに二句有り。一には修因を聞いて淨土に生じ、二には見聞の身、法身を生ず。第五に汝復觀我の下は奇特を觀見するを明す、中に於て二有り。初に身分の内に三種の世間を見るに、竝に各各無邊なり。二に又見の下は、身從り出す所の佛果業用を見るを明す。第六に爾時善財還由の下は、所得を校量するを明す、中に於て二あり。初に正しく校量して多を顯し、二に何以故の下は多の義を釋す。中に於て六句あり。一に所入多し、二に所得多し、三に所知多し、四に所度多し、五に所修多し、六に此に沒せず等、平等普遍にして普賢の境に同するを明す。第七に爾時善財能自の下は位滿じて佛に齊しきを明す。中に於て十六句有り。初の一句は總じて因圓を顯し、二に不久の下は總じて等果を明し、三に一身充滿するは、普賢の身を得るを明す、下に十三種有りて諸佛に等し、此は是れ因位圓滿して更に所修無し、是故に但諸佛と等しと云ひ、更に知識を求めて修因するを辨ぜず、普賢の位竟んぬ。

第八に偈頌の中に九十九頌半有り。問ふ、『既に重頌と云ふ、未だ知らず、何れの處の文を顯するや。』答ふ、『有る人釋すらく、「此は是れ前の善財當得の十三種の所等の佛境を顯す」と。即ち此文を科して亦十三段と爲し、次第して配釋す。此釋は便ならず、前の善財の所得は是れ結集者の説にして、是れ普賢の説に非ず、何に因りてか乃ち重頌と爲ん。又

有が釋して云はく、「此れ前の普賢の、自の往因の事ふる所の諸佛等を説くを頌す」と。此れも亦用ひ難し。偈文の中に、總じて此意無きを以てなり。今釋すらく、前の長行の中には、唯因行を明して未だ果用を説かず、今は重頌は果を説いて因に非ざれども、文綺にして互に顯すことを明す故なり。又釋すらく、今の頌は果を擧げて因を顯す、是れ顯發釋の故なり。何が故に唯佛德を顯すとならば、善財の因行窮滿の爲に、因門を説くことを爲すべからず、是故に佛果の業用を説く。又普賢は佛前に對して坐し、力を承けて排化して、其用究竟するが爲に、功を推して佛に在り。偈の中に六に分つ。初に五偈有りて聽を誠して説を許し、略して佛德を數す。二に時諸菩薩の下の三偈は、衆は勸を領し説を數じて聽受することを明す。三に諸佛微妙の下の二十偈半は、通じて十方の報佛の勝德を數す。中に於て五あり。初の三は大智無著にして機を照すを明し、次の四は形言感に隨ふの隱顯の德を數じ、次の七は主伴嚴土自在の德を數じ、次の五半は、遍く轉法輪微細の德を數じ、後の一は總じて十方の諸佛の德を結す。

【四に或見云云】  
以下、釋迦化身の  
功徳を數する文を  
釋す。

四に或見釋迦の下は、別して釋迦の化身の功徳を數するに、中に於て四有り。初の二十半は佛の意業作用を數じ、二に安住の下の十九は、佛の語業作用を數じ、三に具足智功徳の下の十五は、佛の身業作用を數じ、四に譬如工玄師の下の八偈半は、無礙を喻攝す。初の意業作用の中に就いて五有り。初の五は六度の行の智用を明し、次の三は天身の八相の用、次の二は常在恆滅の用、次の四は巧化隨機の用、次の六半は身光壽利の用なり。第二

【三乘は：釋す】  
三乗教あれども、  
佛の一番説に過ぎ  
ずといふ。

【第五に云云】以  
下、法身の徳を歎  
ずる文を釋す。

の語業の中に四有り。初の五は三乗の法輪を轉ずることを明し、並に業用無生等は是れ大乘の法なり。次の五は六度覺品對治の法を明す、即ち前の、三乗は唯一圓音なるを釋す。次の五は五乗の總別、乃至多乘を明し、次の四は平等語業にして、而も一切に應ずるを明す。第三に具足の下の十五偈は、身業の作用を明す中に五あり。初の三は凡身を示し、次の二は聲聞身を現じ、次の三は外道身を現じ、次の三は大力身を現じ、後の四は諸天の身を現じ、及び結す。第四に譬如の下の八偈半は、三業を喻顯する中に三あり、初の五偈は身業に喻ふるを明す。一には幻師巧の喻、二には月現四徳の喻なり。一には體の圓淨、二には増減を示し、三には淨心に應じ、四には二乘に映す。三には海現二能の喻なり、一は寶を出し、二は影を現す。次の一は前の意業を喻ふ。謂はく、智日闇を除くの喻、後の二半は語業に喻ふ。謂はく、法雨無從の喻なり、化他身を數じ竟んぬ。

第五に如來淨法身の下の六偈は、法身の徳を歎す、中に於て四有り。初の二は法身の相を明すに、先に法説、後に喻況なり。前の中に「推論」には、法身に五種を具するが故に、此中は彼に同じ。謂はく、初の句は是れ白淨法身を相と爲す、是れ果圓滿して轉ずるを以ての故に。二に次の二句は是れ不思議の相なり、謂はく、世間於て物の比する無きが故に。三に非有無とは是れ無二爲の相なり、有爲無爲に非ざるを以ての故に。四に次の一句は是れ無依を相と爲す、謂はく、所依無きが故に。五に次の一句は是れ常住を相と爲す、來去無く常住なるを以ての故に。次の二句は夢見及び空畫を擧げて喻と爲す。二に一偈有

り、法身は相を離る、亦先に法説の三句有り、一は用に約し、二は徳に約し、三は體に約す、下の一句は空の如しと喩顯す。三に二偈有り、法身の用は積聚無きを明す。初の二は二喩を擧ぐ、謂はく、摩尼は寶を出すの喩、二に光明は體無きの喩なり。謂はく、諸天菩薩等は、皆衆生と名く、悉く光明有るが故に、衆生諸光明と云ふなり。此等の光を辨するに、各各停積の處無きこと、摩尼所出の寶に同じ、亦本の相に似する無し。下の二偈は法に合す、知んぬべし。四に大仙の下の一偈は、圓法身相に即して常に寂なり。中に於て大仙現とは、佛の出現を明し、於世虚空の下は七喩を擧げて以て顯す。一に空、二に如、三に自性、四に實際、五に涅槃、六に離欲、七に寂滅なり。謂はく、佛世に現する、即ち此七義に同じ、是故に寂に即して以て法身を顯すなり。第六に末後の二頌は、説を結して持を勸むるを明すに、先に四喩を擧ぐ、知んぬべし。佛徳の深廣なるを顯すを以てなり。一には心慮無限の喩、二には微塵難量の喩、三には海滴難知の喩、四には虚空無際の際の喩なり。此下の二に、益を擧げて信を勸む。謂はく、此普賢自在の法を信する者は究竟して要す當に終に佛果に齊ふして、善財と諸佛と等等なるが如くなるべし。上來は下本の十萬の華嚴の内に於て、前分の三萬六千偈を釋し竟んぬ。

【下本の十萬】華嚴經には上中下の三本ありて、龍宮にありといひ、龍樹は下本十萬頌三十八品を將來せりといふ。



昭和六年六月一日印刷  
昭和六年六月十日發行

新編 國譯大藏經 宗典部 第十六卷

本 書 目 録

編 者

東京市神田區 興 會社

發 行 者

東京市神田區 興 會社

印 刷 者

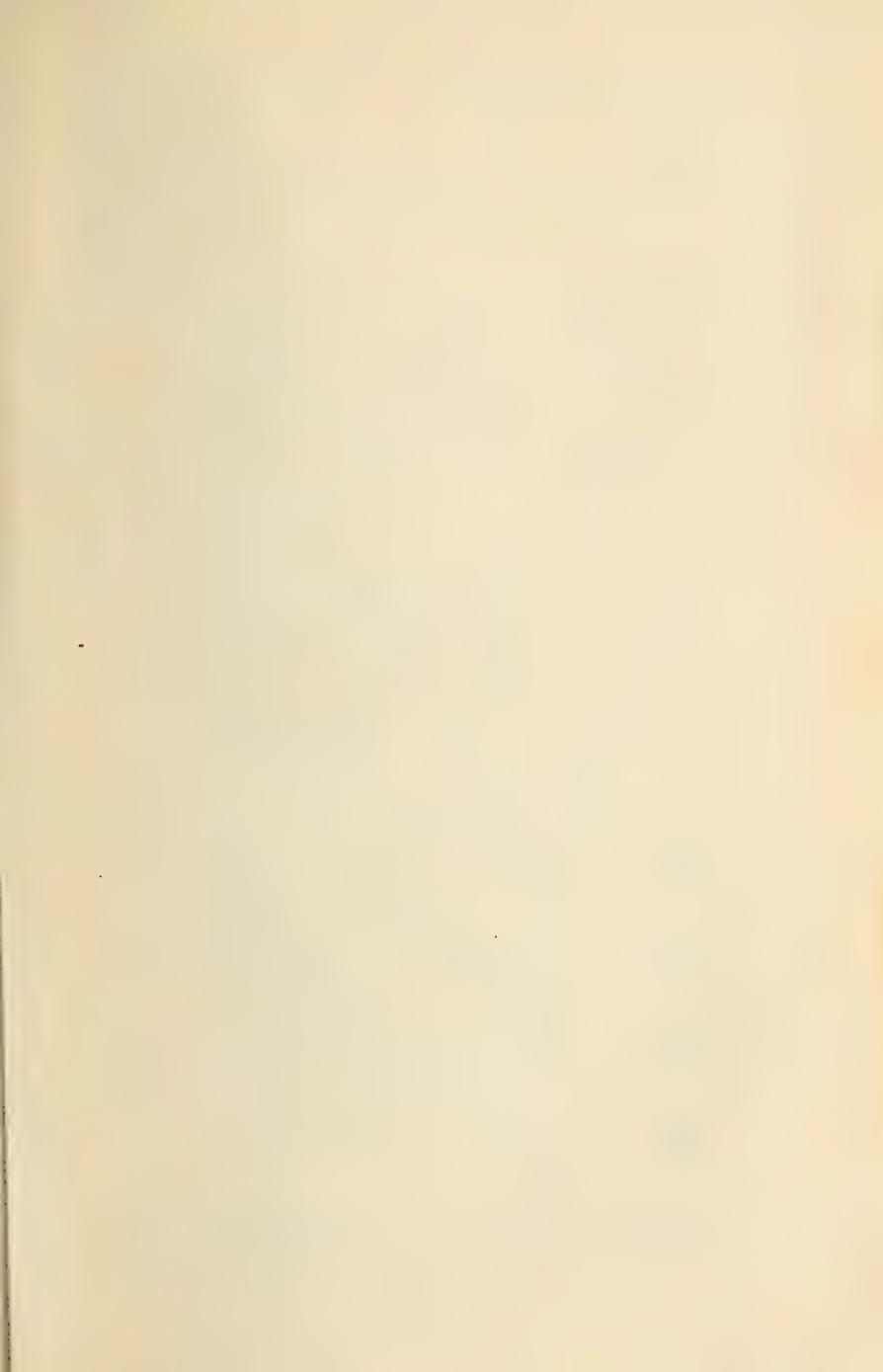
東京市神田區 興 會社

發 行 所

東京市神田區  
興 會社

株式會社 東方書院

東京市神田區  
興 會社  
電話九段二八四二  
郵轉東京六八六一



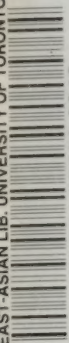








EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03023 3340